

康德六年版

滿洲文藝年鑑

文話會編

III

滿洲文話會發行

昭和十四年版

滿洲文藝年鑑

滿洲文話會編

昭和十四年度版 滿洲文藝年鑑目次

概観

評論論……………西村眞一郎 二  
 小説……………青木實 六  
 詩……………八木橋雄次郎 三  
 劇……………絳山貞家 七  
 短歌……………武田勝利 三〇  
 俳句……………金子麒麟草 六  
 児童文學……………柳生昌勝 五

評論

最近の滿洲文學……………大内隆雄 四  
 決算と展望……………林 邁 民 四  
 滿洲ものについて……………青木實 三  
 藝術と職業……………井上 麟 二  
 國策文學論……………上野凌 梓 五  
 滿洲文學雜考……………古川哲次郎 三  
 滿洲文學理論の整理……………西村眞一郎 七  
 詩論……………八木橋雄次郎 六

隨筆

肉體の惡魔……………三好弘光 七  
 日本古典主義文學における女性性描寫の覺え……………大谷健夫 五  
 とりかへばや物語について……………渡部 榮 二  
 火野素平論……………木崎 龍 二  
 室生犀星の圖……………宮井一郎 三  
 滿洲雜誌論……………加納三郎 四

詩

沿線八種……………秋原勝 三  
 日記とカレンダー……………紫藤貞一郎 五  
 水野さんの話……………三宅 豊 子 五  
 隨 想……………木原鐵之助 五  
 大海日……………大岩 峯 吉 六  
 歸郷雜記……………加納三郎 五  
 朝鮮見たま……………山崎元幹 六  
 義馬と子供……………鹿島 鳴 秋 七  
 暴風雨の前と後……………金 時 賢 五  
 哈爾濱の憂鬱……………桃北好 澄 六  
 廢驛・寛城子村の記……………加藤郁哉 六  
 雪だけは頭髮に肩に……………石森延男 六

日本鳥瞰圖	瀧口武十
建設工事	古川賢一郎
一輪車	八木橋雄次郎
棉畑	城小雄
鴉の齋	高木恭造
馬の詩	小杉茂樹
インテリの歌	三好弘光
解氷期抒情	西原茂
雪の胡	落合郁郎
やどかり	宮下秀雄
燭・既	太田正三
黒豚	小池亮夫
窮乏せるアポロ神の歌	故井地満
蝙蝠翔ぶ夕闇に佇みて	井上麟二
酸港	横澤宏
沙漠の植物	坂井艶司
權兵衛和讃	松畑優人
五月の風の中で	矢原禮一郎
航海船	藤原定五
冬雜詠	相川淳

短歌

身邊	安倍喬
白き太陽	新井重美
現寶	荒川石楠花
興亞	伊東千鶴子
土	小川結司
出發	香川末光
聖戰巖	故甲斐水楯
垂實	甲斐雅人
夏日抄	神山哲三
送別	木田晴夫
戦傷の友	澤田正東
明暗	島田のはぎ
戦況	鈴木清
哈爾濱	高橋房男
春雜	武田尊市
南京陥落	津田八重子
母逝く	寺本初音
事變下吟	富田充
楡の林	富永幸子
一首一題	中島新
金剛山そのほか	西田猪之輔
無題	橋本淺夫



夜の青葉の返奏……………平山 斌三七  
 忠靈塔大祭……………成平山登志夫三八  
 秋 冷……………三井實雄三九  
 髓……………宮島正美四〇  
 淺茅が原……………桃北好澄六一

俳句

伊太利親善使節を滿洲へ迎へて……………高山峻峯六四  
 雜 詠……………石原沙人六五  
 軍旅餘録……………栗生純夫六六  
 滿洲四季……………森脇襄治六七  
 四季……………志和斗史六八  
 雜詠三句……………三木朱城六九  
 雜 詠……………金子麒麟草七〇

小説

同行者……………今村榮治三五  
 蘇へる花束……………長谷川 浩三六  
 生地……………北村謙次郎三〇  
 土 醜……………鈴木啓佐吉三七  
 雪 空……………牛島春子三四  
 雪 子……………吉野治夫三五

き ち……………三宅豐子四二  
 馬家溝……………福家富士夫四三  
 窓 口……………日向伸夫四四  
 歸……………富田 壽四五  
 天使は欠伸する……………奥 一五六  
 空しき部落……………穴戸貫一郎五八  
 雪の日……………島崎恭爾五九  
 村 會……………上野凌嶒六〇  
 小さな石……………近東綺十郎六一  
 風……………横田文子六二  
 ギルマンアバート點描……………竹内正一六三  
 秋の頃……………青木 實六四  
 滿洲の胎動……………工 清 定六五  
 アリョーシヤ……………田 兵衛六六  
 人造絹糸……………小 松四七

雜 錄

在滿文化團體……………四五  
 在滿新聞雜誌一覽……………四六  
 行 事……………四七  
 滿洲文藝人名錄……………四八

概

觀



西村眞一郎

「昭和十三年度の滿洲文學界の一般的印象は、やうやく軌道にのりかけたことである。従つてそれは表面的な華々しさはなかつた。單に華々しい點を指摘するならば、前年度に於ける滿洲文學論を繞ぐる一連の人々の論争に求められるが、本年度はさやうな論争は行はれず、作家も評論家も一應の安定を見せたのである。このことは滿洲の文學が本格的な道へ一步を踏み入れたことを立證するもので、その意味で劃期的な年度であつたといつて差支へない。」と、私は當年度の滿洲文學界を回顧して述べたが、「新天地十八卷十二號」文藝評論に於ても、落着きを見せたことは事實であつた。この落着きは更に探求的な思索的な精神を喚起して、浮き上つた衝動的な論議から、より本質的なものへの道に近づいて行つた。

この傾向は、滿洲の文學界のために慶しいことであつて、日本の東洋に於ける現實の地位が東洋の再建にありとすれば、滿洲がそれ自體の文藝を持つべく地味な活動をなしつゝあること

は、アジアの運命を自ら分擔しつゝあるといひ得るのである。われわれの道は、現在、直ちにあるものゝ建設の實を喚かせるにあるのではなく、われわれの次の時代のためにのみ、われわれの拙なき活動が色彩つてゐることをわれわれは知つてゐる。従つて茲に昭和十五年度の滿洲文藝評論界の足どりを概観するに際しても、その成果を表出することは出来ない。單に、提出された生のまゝの姿を再出するに止まるを得ないのである。

滿洲の文學の論議

作家や評論家の一部の人々が、或ひはなが／＼しく考へてゐるかも知れない、滿洲文學論は、それらの人々が好むと好まざるとにかゝはりなく、この年も論議されたのであつた。主なものを通記すれば、青木實の「滿人ものについて」(新天地)佐藤四郎「近時滿洲文學批判」(大新京日報)上野凌嶺「國策文學論」(時時)「滿洲文學について」(大新京日報)西村眞一郎「滿洲文學理念の整理」(滿日)青木實「滿洲文學の所在」(哈爾濱日々)竹内正一「途上にある宿命の文學」(哈爾濱日々)等であつた。就中、青木實氏の「滿人ものについて」は、發表當時、注目を喚起した問題であつて、之れに對して秋原勝三氏の應酬があつたが、それ以上に進展を見なかつたのである。この進展を見なかつたといふところに、滿洲の文藝評論界の大きな缺點が

あり、あきたらなさを感ずるのである。或は特定の問題が提出される、誰れかと反駁する、提出者が之れに應ずる場合はしばしば見うけられるが、問題はこの兩者間に止つて、第三者は單に眺めてゐるといつた態度である。このことは大きな缺陷であつて、文學に於ける問題に對して孤獨主義の立場を守つてゐるやうに考へられるのである。一つの問題に對してより多くの人々が參加し論議することによつてはつきりしたものが擧み出されるのではあるまいか、滿洲文學論に於ても、一部の人々が提出し、一部の人々が反駁してゐるに止らずに、協力的に思案するならば、もつと落着いた作家活動が出来るやうに思はれるのである。その意味に於て、筆者は、十二年度に於て論議された滿洲文學の理念を一應整理してみたのである(前出表題の論文)勿論、之れに對しても批判されるべき多くの問題を含んでゐるのであるが、それ以上の進展を見せなかつた。

而して滿洲文學は依然として迷路にたゞずんでゐる。たゞ、はつきりさせられた點は、滿洲文學は國家的意識をもつものである従つて世界文學の一つとしてのそれであるといふことにある。誰れしもが、かく考へるやうになつた。

滿洲文學が考へられ始めたことは、それ自體に意義があるばかりでなく、文學人が自らの周囲を省みるといふ點に注意を拂ひ始めたことである。前年度に於ける「故郷喪失」はその一例であつて、本年度に於ては青木實の「職業作家と素人作家」(滿

日) 秋原勝二のエッセイ「沿線人種」等は代表的なものであつた。青木氏は滿洲の作家の地位を、秋原氏は、邦人の生活の土地に對する特異の感情をそれぞれ指摘したのである。秋原氏のこの指摘は、從來かつて述べられたことのない感情であつたが滿鐵沿線に居住する人々の持つてゐた意識であつた。それが秋原氏によつて一應のエッセイとなつて表現されたことは或る意味では歴史的な仕事であつたとも云ひ得よう。しかしこれが高く買はれることのあまりに少なかつたやうに思はれるのである。あの感情は、滿洲で育つたものでなければ切實に感ぜられないからであらう。

#### 文藝時評

文藝時評は當年度に於ても、滿日學藝欄を中心に毎月行はれたが、後半期に於ては、滿洲新聞が時評を取扱ふに至つたが、他の殊に雑誌にあつては、原稿があれば掲載するといつた調子で、必しも毎月掲載されるものではなかつた。

滿日學藝部は、内地作品評と地元作品評とに分けてそれぞれ掲載してゐたが、内地作品評は後半期にあつては、あまり活潑ではなかつた。

井上麟三、藤原定、大谷健夫、大住孝二、宮田詩、福富善兒、古川哲次郎、福家富士夫、江原鏡平、宮川靖、北村謙次郎の諸氏が執筆した。

之れに反して地元作品評は毎月行はれたのであつた。地元の作品への關心の深さを示すものといふべきであらう。

一月 西村眞一郎（満日）青木實（作文）二月 北村謙次郎（満日）三月 青木實（満日）四月 秋原勝二（満日）五月 町原幸二（満日）六月 西川清六（満日）七月 三好弘光（満日）八月 高橋樺（満日）九月 竹内正一（満日）十、十一月 西村眞一郎（満日）十二月 江原鐵平、その他に町原幸二（作文）野村一郎（満公）等の時評があつた。

毎月の時評の他に、當年度は作家論乃至作品評が取扱はれるやうになつた。従來、この方面に先鞭的活躍をして來たのは、大谷健夫氏で、唯一人の觀があつたが、當年度はこの方面も亦開拓され始めたのである。主なるものを挙げれば、青木實―中本たか子の南部鐵瓶工、古川哲次郎―奥一氏の特徴、古川賢一郎―火野葦平の詩、西村眞一郎―吉野治夫論 宮井一郎―大陸の琴は何故鳴らなかつたか、及び室生犀星の圖、加藤三郎―吉野治夫論抄、木崎龍―火野葦平論等があつた。就中、滿洲の作家が取りあげられるに至つたことは當年度の一つの記録といつてよからう。しかし滿洲の作家乃至作品評は、先例がないだけに内地の作家や作品を論じたものに比して見劣りするものであつた。

#### 文化、映畫に關するもの

この年度は文化に關する論議も相當に表はれた。佐藤四郎の「滿洲文化と滿洲精神」木崎龍の「文化時評」或ひは雑誌「滿洲」に於ける杉村甫、古川哲次郎、西村眞一郎等の「滿洲文化の役割と地位」等が主なるものであつた。他に鷲崎哲二の「滿洲國文化行政論」大内藤雄「文化理論の貧困」等があつた。

又映畫と文學との交渉が主として「滿映」誌上で發表されたこれに参加した人々は、青木實、八木橋雄次郎、木崎龍、北村謙次郎、吉野治夫等の諸氏があつた。又、絲山貞家は「滿洲の映畫と演劇」を論じ、加善照は民族映畫の獨創性を述べ竹内晋秋原勝二、日高英太郎その他の映畫時評も相當の活動をなした。

#### インテリゲンチヤの問題

文化に關する論議と共に、新に問題とされたものは、滿洲のインテリゲンチヤの問題であらう。この問題は既に前年度、支那事變の現象的な問題として、内地では行はれたのであつたが滿洲のインテリゲンチヤ問題の内容は、内地のそれとは非常に異なるものがあつて興味深いものがあつた。

藤原定の「インテリゲンチヤの態勢（満日）武和仁の「滿洲國に於けるインテリゲンチヤ」（滿洲行政）が先づ問題を指摘し次いで滿日學藝閣は「滿洲の知識階級に何を期待するか」と題して蠟山政道、清水幾太郎、本莊可宗、荒木鏡の諸氏がそれぞれ

意見を發表し、更に「滿洲の知識階級は何を意圖すべきか」と課題して大谷健夫、加納三郎、大住孝二、大杉直也、不動太文、伊勢達夫の諸氏が示唆に富んだ短文を寄せた。

これらと別個の立場から、滿洲のインテリゲンチヤを取扱つた人々は、蘇星「知識人の任務と東洋」吉野治夫「滿洲知識階級論」(作文)西村眞一郎「滿洲のインテリゲンチヤ」(滿蒙評論)等があつた。

インテリゲンチヤ問題が文學人によつて取扱はれたことは、そこに滿洲の文學のために意義深い示唆を發見させられるのである。

## その他の他

以上の外に、文學に關する乃至は關聯する評論、研究の主なものを列記して概観を終へることとする。

外國文學に關するもの、「大谷健夫「ダモンチオの追想」(滿日) 紫藤貞一郎「チエホフの思慕」(滿洲公論) 醫師と文學(滿蒙評論) 村岡勇「文學的に觀た英國人」

日本文學に關するもの、「渡部榮「古續卷について」(繪物藝術私観) 江戸時代初期に於ける堂上家の源氏物語研究」その他、大谷健夫「日本古典文學に於ける女性描寫覺え書」(作文)

批評に關するもの、「紫藤貞一郎「倫理性その他」(滿鮮) 北村謙次郎「批評について」(滿鮮)

その他自由に關するものとして木原鐵之助(滿日) 三好弘光の「自由の問題」西村眞一郎の「自由について」(滿新)等があり、又三好弘光氏は「懷疑とモダニズム」「詩の社會性」「詩論」等幾多の評論、エッセイを發表し、井上麟二は「藝術と職業」を論じて、滿洲の作家層を指摘して革新を促したのであつた。

この外にも、優れた論文や意見の提唱があつたかも知れぬが、悉くを讀破してゐないので、やむ得ず割愛することにす

(終)

# 小説概観

青木實

昭和十三年には、三つの小説集が出版された。一月に、奥一著「興太もんのマンシユエ」(新京高梁社刊)、八月に、冬木洋一著「青き夜の醫師」(新京モダン満洲社刊)、十二月に、竹内正一著「氷花」(大連作文發行所刊)。

「興太もんのマンシユエ」はナンセンス文學を目標とする作者の、第一小説集で「狐は死んだら何を残すか」以下八篇の讀物的小説を収載してゐる。作者に一層希望したいことは、單なる有閑的讀物として終らず、國都を中心とした都會生活の、風俗人情に、尙ほ鋭い眼を向けて、ピリツとしたものも採入れられて欲しいといふことである。

「青き夜の醫師」の作者は、幾多の大衆小説を發表した人で本書には、「或戦線の風景」以下八篇の小説が載つてゐる。所謂大衆小説として水準に達した作品であり、取材の上に滿洲的なものが多く取上げられてゐる點は注目すべきである。就中青き夜の醫師「樹下」は記憶さるべき作であつた。この二作には

他の作品に於けるやうな浮すべりした描寫が少く、對象が良く擬視され、適確な表現がなされてゐる。

「氷花」には「流離」外八篇の小説が收められてゐる。純粹な小説集として、哈爾濱といふ民族交流の濃い滿洲で最もエキゾチックな都市を舞臺に、邦人ルンペンの生活、白系露人の蹣跚の姿が、對象に融け込んだタツチで綿々と描かれてゐる。今後は取材の範圍の擴大が望ましい處であらう。

大新京日報紙が、前年末より引續いて、地元作家の二十回連載小説を掲載したのは、土地の文學を刺激し向上さす意味からいつて、良き試みであつた。

長篇小説は「明日」(作文所載)富田詩が完結し、この一月から連載し始めた「萬寮」(滿蒙評論所載)吉野治夫が數回で中絶してしまつたのは、遺憾なことであつた。

以下月別に作品一覽を作つてみた。それに附して、その月々に現はれた諸家の批評を部分的に披載した。これは本稿擔當者が怠けた譯ではなく、個人の主観の露出を避けるための一方法であつた。勝手な披載に就いては諸家に深く陳謝致します。

尙當然採上げらるべきである處の、以下の作品に對して、生憎批評を發見する事が出来なかつたのは残念であつた。

今村榮治「未完稿」宮川靖「草原日記」富田詩「明日」

月別發表小説一覽

一月

「秋」大谷健夫、「おはま」吉野治夫（新天地）

「西五馬路」富田壽（旅行満洲）

「狂ひ花」森田茂（満洲公論）

「蘇へる花束」長谷川清「群盲」〔一、二、十、十一月〕北村謙次

郎（満洲行政）

「葛寮」三、四、五、七、八、九月、吉野治夫「無名碑」福家富士

夫（満蒙評論）

「みじめな戀の話」大谷健夫、「ひとりゐる」井上郷、「寒菊」松

原一校（作文）

「父と娘」今村久米子、「流民」大脇一雄

「春祭り」酒井悦子（新京日々）

「一つの記録」下島甚三（凍土）

吉野治夫「葛寮（第二回）」發表された二節だけではわからな  
いが、茲にも作者の持分 緻密な人間觀察は生かされて居るが  
何よりも構成法に期待が持たれる。（西村眞一郎評）

下島甚三「一つの記録」保護院生活を克明に描いたもので、  
入院以來の見聞や心の動き、最初の同室の患者の様子などを自  
然主義的な筆致で五十枚に亘つて描出してゐる。

たゞこの種の小説の最も陥り易い隨筆的心境が、所々に飛び  
出して來てゐることゝ、正鵠を缺く嫌ひのある用語が無意識に  
使用されてゐることが尠ならずこの作を傷つけてゐる。」

（西村眞一郎）

大脇一雄「流民」懸賞の一等當選。鐵道敷設のため農村を追  
はれる滿人農民らが取材されてゐる。少しく平面的であり、農  
夫たちの個性が書き分けられてゐないこと、力を入れるべき處  
を取違へてゐること、冗な描寫がクド過ぎたり、大切なところが  
簡略な説明で終つてしまつたりしてゐるのが惜しい。

二月

「構成」島崎恭爾（新天地）

「解氷期」八木橋雄次郎（旅行満洲）

「風」島崎恭爾（水師營）

島崎恭爾「構成」「正直なところこの作品は、忠實な讀者に  
とつて尠からず難題である。これを貫くものは繪畫的エスプリ  
といつたものだ。畫家はこの精神を生かして奔放なデッサンを  
仕上げるかもしれないが、小説といふものはもつと俗っぽい仕事  
といふより、觀念を言葉といふ普遍妥當的な形象に置き變へな  
ければならない制約の下におかれた正直一圖の仕事だから、觀  
念連鎖が言葉の法則から逃げ出す限り讀者には一見恰好な具體  
性が何も見當らぬといふ不幸を招いてしまふ」（北村謙次郎）

島崎恭爾「風」家庭と文學と戀愛の間を彷徨する女の、悲し  
さいたましさを描き出して相當面白い作であり、書き出しの風  
の諷刺など仲々辛辣であつた。然し稍々描寫の浮はつてゐる  
點など眼につき、相當な年輩の詩人や作家とは受取りかねるも



のがあり氣になつた」(三宅豊子)

三月

「少女とプロ、リーグ」千早淑夫、「愚父の辯」富田諱(新天地)

「黒河にて」福家富士夫、「芽生」中山美之(旅行満洲)

「竹子」古城毒(満洲公論)

「波濤社」(五、七、八月)石森延男(満蒙評論)

「ギルマン・アパート點描」竹内正一、「或る旅の記」三宅豊子(作文)

「未完稿」今村榮治(大新京日報)

「天使は欠伸する」奥一、幸福の貌」下島甚三(楮土)

「早春日記」青木實(健康満洲)

奥一、「天使は欠伸する」さら／＼とたやすくかゝれた文章の

満人裏街の點描である。野鶏と飯館子と麻薬の密賣者達のなり

はひ、野鶏の光る眼、キイキイ聲、恰度さうしたどこかの暗い

露路にソツと佇んで、あるがまゝのその世界をのぞいてゐるや

うだ、つゞばねてサツサと片附けて行く筆さばきは快よい。た

ゞそれだけをとる。しかしこれは日本人の眼を大きく育てて

ゝ來た結果のものではない。むしろこちらの身をはじめから前

してしまつた、拍發的なものに因つてゐる。(秋原勝)

竹内正一「ギルマン・アパート點描」殊更めいた筋や性格を

追はうとせず、哈爾濱の或アパートの盛衰を叙しながら、運命

的な影をおとす諸人物を點綴して隙間のないリズムの糸を織り

出してみせてゐる。が、「極度に主觀の露出を嫌つたらしいこの一篇には妙に虚無的な後味が残り、讀後の印象は割切れ過ぎて何か素つ氣ない」(北村謙次郎)

富田諱「愚父の辯」長女E子に――としてある。あらゆるE子に讀ませたいと思ふ好い教訓であるけれど、私達大人の讀む小説としては少しく物足りない。その物足らなさは、この文章の内容があくまで正しきよき常識であつて、もう一步深い人生の妻に、ふれてゐない點にあらう。(三宅豊子)

四月

「仲間」竹内正一、「海圖」坂井艶司(新天地)

「土地の彫像」北村謙次郎(觀光東亞)

「雲空」牛島春子(満洲行政)

「夏の騎」竹内正一(満蒙評論)

「鶴」北村謙次郎(大新京日報)

「商標」北村謙次郎(健康満洲)

北村謙次郎「土地の彫像」的確な筆で、ドイツ人を父にした英、といふ小學生の孤獨な少し歪んだ眼を描いてゐる。満洲に

ゐて、しかも自分はアイノコで、海を越えて日本と遠いドイツ

とにこの子供の感情は二つにも三つにも分裂されてゐるのは哀

れた。孤獨である時始めて安心しきるといふ心。しかしこの

親子の眼を透した日本及び日本人は、もう現在のものではない

と判断したい。これからの日本人はもうむやみと自分の郷土を

ふりかざし、郷土を示せぬ人を哀しませる無意味さを重ねないだらう」〔秋原勝二〕

北村謙次郎「鶴」―「現實と幻想がかくも融然と一つになったものを私は知らない。そこには鶴の卵から生れた可憐な娘が居り、假に現世の中で貧しい然し心美しい處女生活を送つて、やがてその最も美しかるべき人生のモメントにおいて林の彼方へ鶴と化して飛び去る。とに角これは現世を語るメルヘンである。たゞ傑作と稱するにはあまりにはかない一篇の夢か霧と消えていくのは、物語の性質上當然であるかもしれないが、感にいへばこのまゝでもつと大きく深く發展していけば傑作であり得たらうにと思ふ。」〔吉野治夫〕

五月

「南京陥落」松原一枝「劍奪」(六月) 福家富士夫(新天地)

「凍原の話」秋原勝二(觀光東亞)

「色聴」日向仲夫「生きる」(七月) 西川清六(滿洲公論)

「小犬の如く」庄野ふみ(滿洲行政)

「ぬかるみの記」北尾陽三(滿蒙評論)

「新興國」高木恭造「寂滅」池淵鈴江(作文)

「草原日記」宮川靖(大新京日報)

「嘆」今村榮治(文藝集團)

「花は褪せたり」長谷川澄「酒勇傳」江草茂(モダン滿洲)

「移民の妻」今村久米子(滿洲旬報)

北尾陽三「ぬかるみの記」―「正に勞作の二字に盡きる。この物語は大體作者の自傳的要素をもつものらしい。港に軍喰ふ仲仕の生活をかなり克明にゑがいてゐる。がたびし／＼と揺れるやうにぎこちなく話が進むが、その底にはちやんと實感がにじんでゐて、要するにこの作品に對する作者の熱意、執着に私は打たれた。」(町原幸二)

松原一枝「南京陥落」―「牟といふボーイに關する話で、何よりいゝのは、作者の牟といふ異邦人に對するあたゝかい心情。このあたゝかさは作品いつばいにあふれてゐる。(中略) 滿人觀察も意外にこまかく鋭い。ちよつびりではあるが、日本人たちのエゲツなさの描寫もヒリリと讀後に殘る。」(町原幸二)

福家富士夫「劍奪」―「未完なので多く云へないが、既に着眼點からして厚みのある風貌をたゞへてゐる。この作者の小説を讀み、何時も思ふことは、このうまさで押して行くと通俗小説になる危険があるといふことだつた。だが今回はその憂ひなし。」(町原幸二)

西川清六「生きる」―「一つの苦悶といふものが深くきざまこまれてゐる。浮つ調子でなく、智光院食堂に集る人間どもを手堅くゑがいてゐる。多少の深刻癖といふ鬼面の嫌ひはあるが、ゑがかれた人間の感情にうそはない。」(町原幸二)

六月

「一行路」青木實(新天地)

「濡れ花」大谷健夫（觀光東亞）

「同行者」今村榮治、瀧衛（七月）島田清（滿洲行政）

「おしやべり」青木實、大陸の季節風」榛二平（滿蒙評論）

今村榮治「同行者」これは立派な滿洲で生れた一つの完成品である。こゝに現れた日本人もさること乍ら、中重欽といふ朝鮮人の、今まで心から日本人たらしめて來たため、生活は失ひ、兩者の何れでもない深い二つの溝にはさまれ苦悶してゐる心情は充分注目に價する。東洋に起つた國家的變動、民族的移動は、益々この種の人間達を生む可能性が多い時、この作品は騰きのかゝつた一つの提示を行つてゐる。「秋原勝」七月

「枝折れ」池淵鈴江、「土龍」鈴木啓佐吉（新天地）

「蛇島の精」坂井艶司（觀光東亞）

「廣場」宮川靖、「出發」今村久米子（滿洲行政）

「橋」加藤、郎（滿蒙評論）

「雪子」吉野治夫、「歸去來」日向仲夫、「彌兒」高木恭造、

「裸木」竹内正一（作文）

「吉林」青木實（大新京日報）

「不肖の子達」中山美之（醫科）

鈴木啓佐吉「土龍」俺は息の根の止る位、たたいてたたき倒したが」といふ表現がそれである。この散文は、こゝでいやといふ程讀者の空想をひきのばしてみせるのである。斯様にね

ばり強く取組まれてゐると、僕自身の中に起きてくる幻想までが間のびしてしまふ。さうした時間の中で作者が何を把へてゐるかについて、又何を把へねばならぬかについての意圖を僕は見失ふ」（三好弘光）

吉野治夫「雪子」短い一句一句がピシン、ピシンピシンと眼を射る。恰好などはどうでもいい。作者のむきだしの感傷がのたうち廻つてゐる。これがこの作の缺點であり、又變質のもてる點だつた。不敵な人生的諦念といふことを私はしばらく考へたりした。（町原幸）

日向仲夫「歸去來」作品から受けるひたむきな眞面目さに何より打たれたが、既に多くの先輩が完備のものとした手法を立派にマスターしてゐて、混亂や不安が波打つてないところにこの作品へのあきたらなさや、不満を私は持つた。混亂や不安がなくてはならぬといふのではなく、たゞこの作品の波動が、どうやら時代めいた夢のやうに遠いのを感じる。（町原幸）

高木恭造「彌兒」「都會から、急に荒寥とした奥地に移り棲むと、大抵の人間は饒舌家になるか、黙り屋になるか、そのいづれかであるといふ。さういふ人間たちを作者は蒸がいてゐる。ズケ／＼とあらつぽく、一應その風貌を蒸がいてゐるが、それがデッサンの程度であつても足りない。裸かになつてゐるやうで、矢張りどうしても裸になれない人間どもの姿、それがかすかながら覗ひみてふと、戰慄をおぼえる、異色ある作。」

(町原幸二)

八月

「内地から来た女」佐和山一郎「潔癖」宮原欣(新天地)

「物置のある島」吉野治夫(觀光東亞)

「その以前」宍戸貫一郎「郷愁」横田文子(滿洲行政)

「空しき部落」宍戸貫一郎「洋火工」大脇一雄(文藝集團)

石森延男「波瀾社」「リアリズム調の作品群が低俗の中でも

これでも文學だと胡坐をかいてゐる中で、この作家には何よりも激しいパッションがある。そのパッションの純粹さ、激しさに先づ打たれるのである。客観などといふ餘裕のあるものではない。ひたむきに生きとほさうとする青年の意志によつて世界が切り拓かれ彩られる。私がこの作家に求めるものは散文小説の領域についての認識の更改である。その世界は小さく閉ざれ、その故に内容の純粹さを保つやうなものだ。この純粹さを限りなく擧げてゆくことである。」(高橋 樾)

宍戸貫一郎「その以前」「ロシア革命勃發前の露滿國境の物語である。國境警備兵の滿人と、ロシア人の人妻との關係に取材して、ストーリーは餘りにも小説的である。興味をそよる割合に藝術的力感がない。即ち通俗作家に隨する危險が微に見える。」(高橋 樾)

九月

「やがて何處かへ又行くだらう」町原幸二

「賣工人」大庭武年(新天地)

「黒土」小日向和夫(觀光東亞)

「長船を吞める娘」豊澤松右衛門「買つた土地」河利致(滿洲行政)

一月

「雨」竹内正一(滿蒙評論)

「人種」秋原勝二「ハモニカ」池淵鈴江「明日」(五)(六)(十月)

一月(富田壽(作文))

河利致「買つた土地」「北滿の土地賣買をテーマにしたこの作品は讀んでゆくに從つて何かありさうに思はれたが、結局は失墜した。しかし、多分滿洲に渡つて二、三十年間に財を築き上げた成功者であらう、山口老人の性格はよく描いてゐた。」(佐々木勝造)

十月

「窓口」日向仲夫「秋の聲」島崎恭爾(新天地)

「車中にて」西村眞一郎(觀光東亞)

「風」横田文子(滿洲行政)

「赤猫飯店」長谷川潜(モダン滿洲)

「傳説」長谷川潜(滿洲浪漫)

横田文子「風」「美しき挽歌」といふ題ではるびつゝある賣城子を描かうとするいくつかの短篇の第一作といふ。二人の日本の子供と二人のロシアの子供の草原の窪地での経緯は興深いと共に草原の曠々とした大氣を感じる窟けたよさがある。」

(秋原勝二)

日向伸夫「窓口」―「描かれたものにしてがたい片鱗をみるが描く精神にもつと練つてほしいものを感じた。もつと大きなものになり得る惜しい題材と思ふ。」(秋原勝二)

十一月

「海濱物語」松原一枝「迷宮」北村謙次郎(新天地)

「天邪鬼」工清定(觀光東亞)

「大陸の男」河利致(滿洲行政)

「サトとその亭主」杉田健樹(滿蒙評論)

「寒暖」竹内正一(作文)

竹内正一「寒暖」―「デパート店員としての僅かな給料で、十二時間労働では自由な生活もなく、同じ店の佐々木の使喚で、外人の店に轉職するが、外交手腕のないため誠意、三四の店を轉々し、遂に佐々木にも見捨てられ、寒氣と窮乏と職探しに彷徨ふうちに故郷の母は病死する。それでも少しの金があれば、映畫や高級煙草さうして服裝を崩さずに生きぬかうとする。作者はグン／＼失職の惨めさの仲に引き込んでゆく。―外人の家を放り出されてホテルのロビーに寝込むまでの描寫は迫力があり、極めて印象的であつた。八十餘枚の堂々たる、短篇である。」(西村眞一郎)

十二月

「支那の唄」池淵鈴江、「齡」富田壽(新天地)

「烏拉特地帯」福家富士夫(觀光東亞)

「二十歳」鶴田和平(滿洲公論)

「新胎」今村榮治(滿洲行政)

「秋の唄」青木實(滿蒙評論)

「繪巻書の歌」町原幸二(健康滿洲)

「中央寺院」廣瀬文夫、「淺春譜」小日向和夫(醫科)

小日向和夫「淺春譜」―「この作品には昨日の滿洲の性格と、明日の滿洲の進路がかすかながらも規定されてゐるし、滿洲生の青年の思惟と生活を時代に結びつけて正しい結末に導いてゐる。後半に至つて餘りに常識的な筋の進展と、思惟の通俗性が所謂文學的な意味での純粹さを失つてゐるのが惜しい。」

(日向伸夫)

町原幸二「繪巻書の歌」―「例によつて淡々と書き流した小品隨筆的な美しさは弱々と柔かく讀む者の胸に沁みる。そしてそれだけである。」(日向伸夫)

次に滿支人作者の翻譯小説としては、次の如きものがあつた。

「老殘遊記」劉錫作、宮下秀雄譯(滿蒙評論連載)

「聊齋志異」蒲松齡作、柴田天馬譯(滿蒙連載)

「或る結婚の話」潘先生軍隊歸還頭末、「歸郷」齋雀海作、大谷正一譯(觀光東亞三、五、六、八、九月)

「傷兵收容所にて」孫席珍作、「饅餅」趙景深作、以上大内隆雄譯(新天地六、十月)

「アリョーシヤ」田兵作、大内隆雄譯(滿洲浪受十月)

## 詩壇の展望

八木橋雄次郎

龍口武士、安西冬衛、北川冬彦等によつて近代日本象徴詩の上に、一時代を劃したのはそんなに遠い過去のことではない。近代日本詩の上には忘れることの出来ない存在であつた滿洲詩壇を繼承する現在詩壇に對して其の凋落をかこち、或は其の萎縮を罵る人もないではない。

しかし、我々は必ずしも其の悲憤を正常なものとは受取るわけにいかない。なるほど、今日の滿洲詩壇は當時ほど輝かしいものを齎つてはゐない。日本の詩壇を擾亂し、震駭させるやうなオリジナリチーも案出してはゐない。だが、單にそれを以て凋落となし萎縮と見ることは當らないと思ふ。なぜなら、滿洲詩壇と言はず全日本詩壇が、今や反省時代に入つてゐるからである。詩人の思索が内向し始めてゐる時代だからである。のみならず、現代詩の緻密な思考の上では、お伽話のやうな一新時代を劃するやうな機會は望めなくなつてゐるのである。

と言つて、滿洲の詩人がさうした曖昧な見解の蔭に隠れて安逸を貪つてゐるわけでは決してない。滿洲詩壇は日本詩壇の上にもまだまだ重要な、そして光榮ある、坐席を有してゐるのである。恐らく滿洲中に於ける凡ゆる藝術界の中で、詩壇ほど所謂日本的な存在はないだらうと言つても決して過言ではない筈である。

村野四郎の言葉を借りるならば、「荒々しい棘のあるイメージ、暗黒で巨大なモンゴール風の、これら有力な詩人諸氏がたえず闇によつて中央に佈しき一筋の寒流を流してゐることは事實」（『文藝汎論三月號』）であつて、中央の詩壇に於ては決して滿洲の詩壇が俄かに凋落したとは信じてゐないのである。

昭和十三年に於ける滿洲詩壇を展望するに作品の傾向や詩人の動勢に就ては特別に記録すべきものもないやうであるが、この戦時下に前述せる意味に於て滿洲詩壇の位置を文へ續けて來た功績は見逃し難いところのものであらう。

滿洲詩壇の中心となり、指導的役割をなし、主として、作品の向上に努力して來た詩人は、「龍」による龍口武士、井上麟二、小池亮夫、松畑優人、西原茂、三好弘光、宮下秀雄、八木橋雄次郎、「作文」による小杉茂樹、坂井龍司、古屋重芳、高木恭造、落合徳郎、古川賢一郎、其の他棚木一良、太田正、高木喜久藏、菅川鶴生、藤原定、城小碓、島崎曙海、川島豊敏、母里山正夫、橋澤宏の諸氏であつたかと記憶する。



瀧口武士は、鷗に發表する外絶えず中央詩壇にも寄稿して其の健筆を見せた。雪、坑夫、春、揚子江をさかのぼる歌、日本鳥瞰圖等は一時極度に壓縮した抒情詩から一轉回を示して、雄健なものへ向ふ積極的な態度を見せた作品として記憶さるべきである。

井上麟二も盛な創作力を見せた。其の低流をなすものは社會や自己に加へる批判精神にあるやうである。贖罪の子の長詩を始め、一貫してきびしい批判と社會的苦悶に熱烈な氣魂を示したと見るべきであらう。

高木恭造は有名な黄河の作品を書いた頃から一轉して、日本詩のリズムの探究に向つたかに見える。佐藤一英の聯に投じて味のある作品を發表しつづけた。

小杉茂樹は作品の数は減つてゐるが、抒情精神の深奥に分け入り、雨、蛙、踏切橋等の作品を發表して健在であつた。

小池亮夫は現實に直面したまゝ、他に視覚をそらさぬ詩人として特異の位置を占めてきたのであるが、黒豚、興安嶺、喇叭隊等によつて現實解剖のメスは益々鋭利なものとなりつゝあるやうである。

松畑優人は滿洲の詩の歴史から一步脱け出して來た。皮肉とも諧謔とも又は自嘲ともつかぬユニークな風格を持つた詩、瀧兵衛和賛、南無彌權兵衛大明神、親父なんかは踏んづける、水よ女にひりかゝれ、結構な顔、一切轉倒無想、日々是好日等は

滿洲の詩壇には大して反響を呼ばなかつたが、中央の詩壇からは大に注目せられた。この苦笑は如何に發展するか興味のあるところ。

西原茂も前者と異つた意味でユニークな進境を示した。第二期超現實主義を提唱し、新しき呪文精神を開拓しようと努めた鷗十九號に於けるエッセイは最も注目すべき詩論であつて、日本詩壇に於ける最も尖銳的な詩人に大きな榮養分を與へた。凡ゆる形式に承知出来ないこの詩人は種々な形式上の案出を試み其のオリジナリティーは高く評價せらるべき位置を獲得した。いふしろん、解氷期抒情が其の代表的作品と見て差支えないであらう。

落合郁郎は相變らず健實な精神を感ひつづけた。このやうな詩人には技法はむしろ問題でなく、逞しい、健康な精神のみが問題となるのである。雪の朝、詩、海の破片等の作品は一見清楚、靜寂を感せしむるが、其の底には抒情と共にそれとは全く反對の人間意志がむせかへるやうに充滿してゐるのである。であるから表面にはさしたる變化を見せないが、實は微妙な點に或種の轉回が試みられてゐるやうに思はれる。滿洲に於ける最も生命の長い根強い詩人の一人として來年の活躍を期待したいと思ふ。

三好弘光は理智の透徹した仕事振を見せた。彼は目的地向ふまで歩かうなどは夢思はない詩人である。電車、汽車、自

動車、飛行機、時には砲弾にも跨るかも知れぬ自由多角な藝術に向つてゐる。エッセイ肉體の悪魔をはじめとして、ペスピニオ説といふ作品がそれを宣言してゐる。彼の詩作には偶然も必然も一つの手段に過ぎない。

宮下秀雄は謝冰心、陳蕪、珊瑚等支那の近代詩人の作品を翻譯紹介して注目された。時には自作も發表して翻譯詩人としての本格的な力量を見せた。支那近代詩の紹介といふ仕事は現時に於て最も重要な藝術部面の一つである。

坂井艶司は新人として最も活躍した一人であつた。作文毎號をはじめとして種々の新聞雑誌に作品を發表して、詩魂の豊かさを思はせた。作品の傾向としては如何にも滿洲詩人らしい野性から次第に純日本の感觸へと向ひつゝあるものゝ如く、その平假名の用ひ方に特異のものを築かうとしてゐるやうである。

古屋重芳は人生詩人としていゝ素質が認められ、古川賢一郎の意圖した精神がこの詩人によつて繼承されたかに見える。遺二篇、快愴期、冬の家等の作品がそれであつた。

古川賢一郎は舊套を脱して新しく歩き始めた觀がある。形式を散文詩に逆行せしめつゝ多彩な神經で直觀的に世界を判斷しよるとするところに大きな期待を持たせてゐる。

藤原定は滿洲の發表機關よりも中央の諸雑誌に多くの詩を發表した。取材を滿洲にとり根こそぎ滿洲の風物を歌はうとする積極的な氣力は滿洲の詩壇に或種の再考すべき材料を提供した

評論家として中央に聞えた人だけに鋭敏な把握力に敬意を表すべき作品が多かつたやうである。

八木橋雄次郎は人造石、青い服、體溫計、一輪車等近代的長詩の確立に努め、日本詩論等のエッセイを書いた。

猶、新京文藝集團の結成を見て、太田正、堀井正一、山本二、高木喜久藏、玉置昇平等が滿洲詩壇に登場した。

其の外橋澤宏が久し振りに滿蒙評論に詩を發表して其の才能を慕はれ、芹川軫生が病床の中から優雅な抒情詩を發表した。

この賑かな詩壇の中に於て甘地滿が自殺を遂げたことは愛惜に堪へない。裸跣詩社の若い詩人達が靜脈といふ遺稿詩集を出して彼の靈を弔ひ、滿洲詩壇に於ても彼の靈に鄭重な弔意が捧げられた。坂井艶司の哀悼、甘地滿君（作文三十號）が痛く記憶に残つてゐる。

以上は記憶の儘に書いたので或は大きな見落しがあつたり、見解に誤りがあつたかも知れぬが、それは短時日のために參考文獻の蒐集が出来なかつたことと筆者の愚見に屬するところのものである。しかし、大體に於ては滿洲に於ける有名詩人の動靜を略記したつもりである。

こゝに残念なことは一部有名詩人の沈黙であつた。眞面目な詩人は屢々内省的なものに達着して書けなくなるものである。さういふ時期は誰にでもあるらしい。それだけに次期に對する期待は大きいのである。安達義信、滅小雄等がこれにあてはま



るのではないかと考へられる。

其の外滿洲詩壇に於て記録して置くべきことは、文藝汎論が鶴同人作品集の特輯號を出したこと、J. V. K. が滿洲詩人の作品を朗讀放送をしたことなどであつた。

特に後者は、詩人の活動とは別に特記せらるべき文化開拓の一新紀元をこの土地に成したものと思はれる。第一回は割合に古い詩人の作品、第二回は新しい詩人の作品が朗讀放送されたその成果に對しては種々異見があつたやうであるが、概して好評であり其の將來性にも大きな期待が持たれた。西原茂が放送のための詩が別に書かるべきことを力説し自ら作品を発表して注寫せられたことも附加しておかねばならぬ。

朗讀には絲山貞家、千種光子、松本美恵が當り、堀口武士をはじめとして、三の詩人は自作を朗讀した。就中、絲山貞家の朗讀法が異彩を放ち定評ある位置を占めた。これらの事に關して坂井龍司、坂口穹太郎が満日に感想を發表し、絲山貞家が第二十一號に覺文書を記載してゐる。

本年度に於ける詩の定期刊行物は「鶴」の外に「作文」及び新京文藝集團裸跣詩社による冊誌其の他であつて、特筆すべき詩集の發行もなかつたやうである。

# 滿洲演劇の出發線

絲山貞家

昨年度の文學論が多く「滿洲文學論」に集注せられたのに遅れて、本年に入つて漸く滿洲の新劇界も「滿洲演劇とは何か」を問題として取り上げ始めた。各劇團は問題を發展させるために、分散的ではあるが、その素材としての自己を、構成員の性質や對照とする観客や目的等を明確にすることから規定つけやうとした。そして各劇團が先づ突き當つたことは、實踐活動の推進力を爲す「演劇理論の發困」であつた。

一般論は少しく語られたが、具體的には殆ど見るべき提案すらも無く、こゝでは未だ演劇藝術に對する熱情の育成が必要と見られる状態に置かれてゐる。加ふるに時局の重大化は、構成員の定住や數箇月に亘る企劃性の進行に確信が持てず、本年度の公演は確に

二月 大同劇團鮮語部（板垣守正作「國境の霧」趙鳳軍作「新子」ラン）

四月 大同劇團小公演（武藤富男作「發明家」藤川研一作「望

子）

五月 哈爾濱演劇研究會第一回公演（藤川研一作「望子」菊地寛作「父歸る驛案」）

七月 大同劇團濱江地方移動小公演

十月 大同劇團訪日記念新京公演（牛島春子原作藤川研一脚色「王屬官」長谷川濬原作藤川研一脚色「國境地區」）

十月 奉天第一劇團第二回上演（岸田國士作「命を弄ぶ男」人「ジュール・ロマン」作「醫師クノック」）

十月 十一月 大同劇團日本公演（名古屋・東京・横濱・大阪）  
（坂田王屬官「國境地區」）

十一月 奉天協和劇團（秋雨月夜）

等を擧げ得るにすぎない。公演を持ち得なかつた大連藝術座は、三月及七月に文話會推展による滿洲詩人の手に成る詩の朗讀の他科學童話・物語・朗讀・童話劇・ラヂオドラマ等放送藝術ジャンルの權衡化のための努力に止まつた。

本年度の活動表にも見る如く大同劇團の活動のみは一際眼をましいものがあり、殊に滿人觀客を目標に置くその「地方移動公演」は政治的にも文化的にも重大意義を持つものとして益々重視せられるのであらう。尙その訪日公演については、功績と共に幾何の疑義のあることも論ぜられた。

戯曲の創作活動は従つて甚だ盛ならず。

雜誌等に發表せられたものとしては

「共同耕作」二幕（觀光一月號）  
 「凍屋」一幕（凍十一月號）  
 「旋風」三幕（滿洲行政三月號）  
 「望子」（新京日日四月中連載）  
 「娘々祭（舞踊脚本）」（滿蒙五月）  
 「生活の前途」（滿蒙評論八月）  
 「笑劇風な一事件」（觀光十一月）  
 ラヂオドラマ（日滿女性十一月）  
 「彩票」（觀光十二月號）  
 「粉雪」二幕（日滿女性十二月）

等が挙げられるに止る。

ラヂオドラマとしては坂口鴛太郎作「アンテナ林立」宮川靖作「二百十一日」時代の花嫁」等があり、殊に「二百十一日」は「滿洲作品の夕」（滿洲文藝作品放送の夕）に大連藝術座によつて放送され好評を得た。他に滿洲電信電話株式會社の全滿聽取者十萬突破記念募集當選作ラヂオドラマが數篇數へられ、尙奉天、新京、哈爾濱の各中央放送局を中心として微力ながら文藝放送團體が斷續的活動を示してゐる。

**主なる劇團** 大連藝術座は大連在住のサラリーマンの自立劇團として昭和十年の冬創立、「滿洲作品の上演、放送藝術の探求により高き娯樂を創造して滿洲永住のための精神の糧たらんことを期し」てゐる。年二回公演の豫定。

奉天醫科大學の學生によつて組織されてゐる奉天第一劇團は

昭和十二年秋創立公演としてシヨーン・オケイシーの「ヂューノオと孔雀」三幕その他を以て活動を開始し、演劇に對する態度を次の如く述べてゐる。

皆さんの眼が ふと青空を仰いだ時  
 皆さんの耳が ふと昔の音楽を聞いた時  
 皆さんの顔が ふと鏡にうつつた時  
 皆さんは時折、これからの行手を、通つて來た道を、周圍の人を、そして自分自身の姿を、心を、もう一べん見なほすことがあるでせう。

劇は私共のこの姿、この心の友となり、道伴れとなつて眞實の世界を指さしてくれるものです。

昭和十二年夏新京に生れた大同劇團の目的とする所は「演劇により建國の理念、民族協和の理想、國策の大衆理解に努め、健全なる國民育成の文化に盡さんとするものである。同時に新滿洲劇の創造のため既成支那戲劇の改良にまで及ぼさん」としてゐる。日・滿・鮮人より成り、第一部日語劇、第二部滿語劇、第三部鮮語劇とし、第二部が文體となり、他部の應援による、共同公演の形が取られてゐる。協和會百輝本部と密接な關係に立つてゐる。

**明年度への展望** としては、各劇團の連絡強化、大同劇團の職業化、協和會の協力による全滿各地に滿人劇團の簇生奉天に

於ける日系劇團の創立、等が期待され、多くの問題が具體的に提出せられるであらう。内地の優秀新劇團の滿洲巡業や、戯曲作家演出家演技者との他専門技術家の長期滞在、又は移住が望ましい。

滿洲に於ける演劇にとつて最も重要なことは、どんな小規模不十分なものでよいから演劇雜誌を今こそ持たねばならぬといふことである。隔月でも年に四回でもよいのであるが、煩雜不便な現行出版方法がその發展を阻んでゐるかに見えること文學に於けると同様である。

演出、戯曲の解説、演技手引、簡便な舞臺装置の作り方、照明、効果、化粧法等を紹介した小人数の素人劇團用優秀戯曲集の廉價版刊行が、滿洲文化、演劇のために、今日ほど緊急切實に要求せられてゐる時はない。

日・滿素人劇團を全滿各地に氾濫させること、それが滿洲演劇文化向上のために唯一無二の方法であり、問題解決の鍵であらう。

# 歌壇概観

武田勝利

昭和十三年は、各結社的、全般的にも滿洲歌壇には相當よい意味で事多かつた様だ。そのうち特筆さるべきは「滿洲歌友協會」の創立である。

協會設立の發端は、滿洲に於ける各結社間の大同團結の氣運が醸成したもので、五月十一日に各結社の代表が第一回の會合を行ひ、順次大連以外の結社とも連絡をとり、設立準備委員も選出され、爾後數度の打合せを経て七月十七日、發會式を行つたのである。(會規省略)

發會式當日の詳細は、「滿洲歌友協會常任委員會」の名で各結社機關紙に發表されたが當日、「合朝」の荒川石楠花氏によつて、左の如く委員の紹介があつた。

「合朝」西田野之輔、荒川石楠花、安倍尚、中島新の四氏「滿洲短歌」富田光、徳田正東、香川光光、小川博三、大塚自穂の五氏「アカシャ」甲斐水樫、甲斐新入、宮島正美、楊部千歌、武田勝利の五氏「滿洲歌人」三井實輝、平山繁、橋北好澄、平山登志夫の五氏「北滿歌人」新井重美、高

山光、宮水幸子、相川淳の四氏「ますの」朝原信一郎、橋本淺夫の二氏「アラギ」加藤銀、石光ヨシの二氏計二十七名、そのうちより次の十名の常任委員が決定された(安倍、中島、相田、香川、甲斐(兼)、宮島、鈴木、平山(兼)朝原、橋本の諸氏)。

この協會の發會により、滿洲の歌壇の横の連繫は實に和かに整へられたる感がある。尙日淺いため、協會のより高い目的、全會員相互の一そう深い接觸等に關しては充分でないものがあるのは、無理のない事と思へる。

滿洲歌壇についての回顧的文章は、在滿三十年この道に精進した甲斐水樫氏の專著に屬するのは當然であらう。即ち、昭和十三年初、滿洲日日新聞の「昔を語る」の特輯に「一路はるけし」を連載し、その續論として「ノートを辿りつゝ」を「滿洲公論」本年三月號に發表した。「一路はるけし」は極めて全般、概観的であるが、「ノートを辿りつゝ」に於ては、特に大連での諸結社の初期中心人物を克明に活動させ結社の興亡を説いて最近に及んである。又「アカシャ」五月、七月、九月、十月、十二月に連載した「滿洲歌壇三十年史餘録」には氏に最も關係深かつた初期「合朝」より「アカシャ」の現在に到る動き、作家を中心として外傳風に詳細の記述を試みたものであつた。尙、一月號「アカシャ」には、昭和三年十一月、あかしや短歌會創立より十年間の動きを「烏東勿勿」の題で載せ、其間

の出版方面の事柄に觸れてゐる。この一年間、かく甲斐水植氏は専ら回顧文に力をそゝいだが、この仕事は將來の歌壇への貴い文献となるに相違ない。「一路はるけし」中詳述されなかつた新京（長春）の歌壇については、鈴木清氏が「滿洲歌人」五月號に「新京歌壇回顧録」の長文を載せてゐる。

五月十周年を迎へた「滿洲短歌」は、その特輯號に於て、「滿洲短歌回想記」——第一年を中心とする——宮田充氏、「先進を語る——第一年より第四年まで」香川末光氏、「追想」田中榮介氏、「滿洲短歌誕生記」内山若枝氏等の執筆を見た。みな多かれ少なかれ滿洲に於ける歌壇への連想を具備してゐる。

滿洲歌壇に對する全般的の論文は、主として「合朋」に取上げられた様である。主として歌友協會創立がその機縁をなしてゐることく見受けられる。「歌壇の嚮導」で稻垣輝安氏の（七月、八月、十月）は、該事項から出發して、「滿洲歌壇が内地歌壇を何時迄も慕つてゐるといふ事は滿洲歌壇の進歩を最も害する、滿洲には固有の新しい世紀の文化が樹立せられねばならぬ、その根原をなすものは、浪漫精神である」と説き、永原いね子氏は「滿洲歌壇當面の問題」で、「現在滿洲で發刊されてゐる歌誌及結社は協力して歌友協會の出現を要望す」と言ひ、井上一郎氏は同題（六月號）で、さきに（四月號）に發表された神山哲三氏の同題の論文中、「大連の『合朋』と『アカシア』そして新京の『滿洲歌人』この三誌は互ひに兄弟の如き存在だ

から、一丸となし、もつと強力な誌とし、西田猪之輔氏を以て主宰者としろ」といふ意味の文章に反撃した「滿洲歌人」の桃北好澄氏との間に割つて入つて、好澄氏の「僕をして言はしむれば滿洲歌壇には當面の問題なんか實際はないのだ」の一節哲三氏の「小黨分立もそれが藝術の進化のためなら勿論異論のあらう筈はないのであるが私は現在の状態が堂々たる理由で對立したものとほどうしても信じられない」の一齣をとりあげて力のこもつた論文を發表した。其他岡二郎氏のもが本誌に見えた。「滿洲歌人」に於ける滿洲歌壇への全般的なものとしては前述の「卑俗主義への反拒」で桃北好澄氏は所謂歌壇的常識に陥る態度に反省をもとめ、裏に歌友協會結成に懐疑的な意見を發表したものの外、他に二三の論文があつた。「滿洲短歌」では小川博三氏の論文にかゝる問題に觸れた文章が見られた。又「北滿歌人」相川啓氏は「滿洲歌壇の積弊性」の題で、主として社會的の見地から、全般を述べてゐた。尙同誌については後に各結社の部分で書くことにするが、本誌の一貫した所謂北滿調の主張は、既に抽象論を脱して實際、實作に堂々歩を進めてゐる。

次に、各結社に「幣を與へて行かうと思ふが、所詮、結社と言つても、機關紙を持つてゐるものに限られることとなる。それはその發表機關を、その記録を通してのみしか、これをこゝに載録し得ないからである。これは何れかの機會に、その萬全

を期して「アララギ支部」「ますの會」「滿洲藤浪會」等の活動をも傳へたいと思ふ。

「合朋」前述の通り本年は滿洲の歌壇の問題が熱心に取扱はれ、見るべき論文が數篇載せられた。其の他の研究として、末野桐氏の「小林一茶」(三月、四月)、永原いね子氏の「短歌の出發と鑑賞」、松山みそぎ氏の「短歌のもつ内容への反省」(八月、九月)、「短歌に對する反省」(十二等は纏つたものであつた。また中島新氏の「作歌態度初歩」(三、六、七月)等がある。全國歌誌の歌誌紹介は専ら井上一郎、萩屋宰一兩氏によつて綿密になされた。「在滿歌人の作品を巡りて」は、同人中の數人の互評であつて、本年は、三井實雄、甲斐水棹、富田充、相川澄、伊東千鶴子氏等の作品が問題にされた。其他田山一雄氏は「新萬葉集の在滿歌人の作」で各作品鑑賞をしてゐる。本誌は本年十一周年を迎へてゐる。

實作の方を見ると、西田猪之輔氏は十月號に「金剛山に拾ふ」六十七首を發表して、大いに氣を吐いた。

本年鑑に作品掲載の同人を除き(以下各結社同じ)主要な作品を擧げると次の如くである。

末野 桐

受話器あて應答聴くまもはりつめて眼はたえず敵機離たす

西島 貞子

この鉛水いづくに流れゆくならむいづくも高き峯と思ふに

永原いね子

廢物の蒐集にいづることもありてかりそめならぬ日秋にいる

中島葉杜子

むきむきの憶ひふれざれ夜の鋪道頼にながれよる霧ありてかそか

篠原いと

汝を生みし母われが手に育てがたく遂におくるか教育治療院に

安藤美子

空征きて還らぬ勇士ありと聞くをゆふべ棚引く雲の明るさ

松山みそぎ

曠原のすがれの色は白濱につづく蒼海の波にむかへる

田山一雄

沃野おほふ百合かきつばた日本の移民の着物干したるが見ゆ

松本比露美

彈痕のまざまざと残る機體見つつころさむけく佇ちてゐにけり

堺井三郎

いつ果つる戦ひか知らず真陽あつき營庭に赤く花さき盛る

稻垣輝安

電車の窓限りし風景に州廳の白壁の姿態は眼に上き距離を

成島ふみ

寂しき事ども心の隅に片寄せて子が物言へば肩あげて聞く



秀島いをり

曠音の絶え間なきキタイスカヤの家並より殘暑の雲は湧きあがりきぬ

尙、主要同人を擧ぐれば、西田猪之輔、荒川石楠花、中島新稻垣輝安、橋本淺夫、永原いね子、西島貞子、寺本初音、末野圃、安倍喬、堺井三郎、井上一郎、淺野高俊、松山みそぎ、田山一雄の諸氏である。

「アカシヤ」は一月より從來の隔月刊を月刊にした。甲斐水棹氏を中心に、甲斐雅人、伊東千鶴子、宮島正美、池田政治、角谷靜江、高橋房男、田中末男、北林祐道、鶴章夫、掃部千歌山本瑞泉、高橋雅子、橋口次夫、野田勝、藤山妙子、武田勝利後に熊谷鹿郎、大崎勝年の諸氏を迎へて、維持同人として確固たる地盤を築きあげた。水棹氏は本年初學講座を開講し、又別に「間人連老の作と稱せらるる歌」「短歌根本精神の再認識」「軍王見山歌」「防人歌」等、萬葉集に對する造詣を披露した講話欄を發表し、雅人氏は「言語への責任」「聲調と餘韻」、房男氏は「鑑賞の原理」「批評の場合」を世に問ふた。「研究室」は毎號、適切な問題を取りあげ、二人乃至三人の同人交互に良心的にその検討を試みてゐる。六月號、房男、雅人兩氏の「濃度について」は特に上乘の研究事項であつたと筆者は考へてゐる。正美氏の擔當してゐた「歌論一瞥」は六月號より勝利氏受持つたが、「短歌研究」「日本短歌」の二綜合誌に偶々現れ始

め歌壇の視聽を集めた、岡山氏、岡野氏の論争につき毎號批判的一瞥を試みた。「滿洲に於ける歌壇の展望」は本誌の一特徴記事であつて、月々、苟も短歌に關係を持つた記事掲載の雜誌パンフレット、新聞より克明に文、作品を摘出してゐる。其の間有力なる同人の一人池田政治氏を喪つてゐるが、陣營いささかの亂れもなく、十月には主宰水棹氏の在滿三十年記念歌會を開き、いよ／＼その結束を強固にして來た。

次に實作方面に一瞥を與へてみよう。

日本歌人協會會員として、J・O・Aにラヂオ歌壇、後、滿日歌壇選者の一人として全生命を之、歌に打ち込んでゐる主宰者甲斐水棹氏は常に所謂女性らしからぬ壯重な作品を發表しつゞけた。

故 池 田 政 治

ひたすらに生きたしと思ふ心制し難く夜明の床に苦しみにけり

大 崎 勝 年

怒濤なすわが民族の雄叫びも靜かに思へばわれのうちより

北 林 祐 道

日のおちし地平の暗き一線より嗚原の夜の擱かりきたる

角 谷 靜 枝

戎克の帆布黒きは手の血ときくを兩支十月の落日に見たり

橋 口 次 夫

ふかぶかと椅子にをりしが意識なく煙草をやけに捨てて驚く



服部 智子

幾日を働きし廣さか遠距離に働きてゐる満人ひとり

熊谷 鹿郎

喫茶室の姑娘みめよろしきに名を問へば漢文にかきて假名つけにけり

高橋 雅子

母性の辛羨した心子等を集めお伽話を長く話しぬ

山崎 信夫

酒席にて勤めの不平ふと言ひぬいよいよわれは愚になりつ

田中 末男

二十八の年齢差もちゐるとき如何なる時代の予となりをらむ

武田 勝利

一億年の石に化りたるもの見つひたひろこれるいくさ思ひぬ

野田 勝

記帳する藥品は皆騰貴しみてひたひたと嘆す時をおもへり

掃部 千歌

相寄りて消えむ命のいははてははかりのごとくあはれにもみゆ

「満洲短歌」富田充氏を中心に、櫻田正東、柳生昌勝、香川

末光、原真弓、小川博三、三ツ谷露秋、内山若枝、木田晴夫、

河本悦治、伊藤勝啓、濱村龜之進、志武路勝雄の諸氏の集ひで

ある。毎號、實作といふ點に重きを置いて専ら進んでゐる様に見受けられる。自然、目を惹く様な研究、評論は本年度には目

につかなかつた。小川博三氏、富田充氏の二三篇がある。

原 真弓

海關監督温世珍大人はにこやかにわれをかへり見る秋陽の中に

河瀬 松三

古き同人散りにし後を守り耐ゆと富田充が頬肉落ちにけむ

志武路 勝雄

つはものは今も戦ふ年越して裏窓の氷溶くる日もなき

伊藤 勝啓

ひろき應接室にたかふる心静めむと茶をつぎ飲みぬ時刻を待ち

つゝ（放送）

濱村 龜之進

寝つゝ見る網戸を白蟻の行く早しをどろに秋の立つ思ひあり

柳生 昌勝

たゝなはる雲の眞下にひろこれる大海原は白く光りつゝ

三ツ谷 露秋

おのがじゝ世に持つのぞみありなむにかへり見なくて應付ゆく

かも

雨宮 文吾

我病めばか弱き母の行く末に樂しきことの何やありなむ

河本 悦治

満人の親子い寄りて枯草焼ける東陵の街道たけにけり

向山 勳

雨降れば夕づく早き風呂を焚く火にあか／＼と妻の顔見ゆ

奈良田三治

新しき職業に就くを得たりとて位牌となりし父に額づく

那須縫子

荒樓の格子に残る紙片に春風寒く首たてにけり（承徳）

「北滿歌人」は如何にも家族的、和かな感じを全面に溢れさせてゐるが、前述の「北滿調」の主張については、語感と反對の熟風をさへ感ずる意氣がある。「全く何等特種な歌誌發行の目標をもたぬ雑多な地方歌誌は無益な消費を避ける意味からでも廢刊すべきである」（北滿の作歌用語に就いて―一月號）と述べ、同誌が創刊よりの「北滿調」への強い主張を説いてゐる然もこれは、その具體論である。その他、同氏の「北滿調で佳け」（四月）、「北滿調雑話」（八月）等があり、新井重美氏には「北滿の要語」（二月）、「北滿調具體化について」（六月）等の論文がある。

實作は勿論この主張の結果となつて表れてゐる。

西村ふじき

つらなりて朝の路ゆく馬の毛はあまわく白く凍りぬにけり

鈴木喜久子

聖浴の水普すれど人垣に見るすべもなく竹ちてゐたりけり

市島盛造

施我鬼燈高くかざして踊る群今し縣門にさしかりつゝ

「滿洲歌人」は、前年度の年鑑に甲斐氏の説ける如き事情より本年一月創刊を見たものである。從來一部「合朔」に籍をおいてゐた従来の「新京歌話會」の人達の集ひである。三井實雄、鈴木濟兩氏を中心に、桃北好澄、津田八重子、平山登志夫、石田幸、石川みなえの諸氏が活躍してゐる。桃北氏は創刊號に

「短歌受胎」で「内地歌壇の旧店に非ず、大連、哈爾濱のお附合的の出版ではない」と其の大きい抱負を示してゐる。其他同氏には「浪漫主義の新しき可能」（二月）、「作品評へ―考察―」（三月）、「春日閑語」（四月）、「卑俗主義への反抗」（七月）、等の論文、隨筆があり、「二、三の事」と題する「八月朔」（七月）の稻垣氏への反撃文がある。三井實雄氏は「雲鶴衝雜筆」後「南滿雜筆」を一年間連載した。鈴木濟氏は前述の「新京歌壇回顧」（五月）の他論文「主智と主情」を六月號に、「合朔」の中島氏に對する「秋風記」を九月號に發表した。

朝原信一郎

風の音木々にこだましこの山にわれ一人なりにはかに淋し

石川みなえ

向ふ山のふねにみすまふ白雲の秋はたしかにさびしきぞのいろ

三井重雄

總芒に月夜の風かみゆるぞと珍しからぬ景を見てをり

石田幸

宮廷府何時やも健たむひろなる御用地は春の陽光あまれし

山中千代子

土ゆるむ早春の陽さしにふみそめし子の三輪車輪がめぐるなり

最後に在滿新聞雜誌等にはあらはれた短歌關係を記すと大要次の如き情況であつた。

前連歌友協會の誕生を期とし、滿洲最高を誇る滿洲日々新聞が待望せられつゝあつた歌壇をもつ事となり選者の推薦を歌友協會に委嘱した。協會は甲斐水棹、富田充、西田猪之輔三氏を推薦、西田氏は公務多忙で辭退。前二氏により歌壇が開始され第一回發表は九月十五日付同紙上。兩氏の第一席は夫々次の如し

〔新聞〕 (甲斐氏選) 藤本隆志

前記事の一つを占めこわが女の朝の朝霞は春の日に

〔朝〕 (富田氏選) 四谷百合子

よきに來て、時を變りし時苦しさやつと變つければ例の鳥啼く

この他前年に引つづき短歌に紙面をさいた新聞に新京日日新聞・哈爾濱日日新聞・奉天商工新報・滿洲婦人新聞・大新京日報・國境毎日新聞・安東新報等がある。多く夫々の土地在住の短歌人の作品を掲載してゐるが、ここに記録する事を省略させて置く。

新聞にあらはれた歌論の類としては大體の所次の如し。

「滿洲日日新聞」一月甲斐水棹氏の歌壇回顧一路はるけし、

八月平山斌氏短歌朗誦寸懷、九月山下藤次郎氏歌語愚見、十二月西應一召氏歌壇に於ける革新の意義、「國境毎日新聞」四月橋口次夫氏吉松氏歌集をよむ、五月同氏和泉式部論、萬葉集に就て、森原四志氏在滿新萬葉歌人、十一月橋口次夫氏藝術存在の意義、橋本八五郎氏戦争と短歌、「新京日日新聞」四月甲斐雍人氏滿洲と短歌、「大新京日報」一月三井實雄氏歌作りの辯相川零氏北滿短歌の特異性、五月三井實雄氏武道と短歌、十月同氏短歌報告、「哈爾濱日日新聞」三月品川放笑氏吉野朝の和歌、五月禮屋長氏千人針の歌、「哈爾濱新聞」六月近東綺十郎氏北滿調へ一言、七月相川寒氏北滿調について(近東氏へ)「奉天毎日新聞」松山魏氏短歌は民族の詩(内地某歌誌より轉載)「奉天商工新報」は神山哲三氏による在滿歌誌評、甲斐水棹・雍人論などをみた。「滿洲婦人新聞」殊に前半期内山若枝氏による在滿歌誌批判などあつたが一體に短歌への關心濃厚。朝鮮に於ける歌論の轉載などが續けられたりした。

「歌壇誌」における短歌關心情況を、替ると左の如くである。歌壇の1つであるもの。

「滿洲公論」二月甲斐水棹氏フットをたどりつゝ、「朝鮮」四月甲斐水棹氏短歌の情、「萬葉集協會雜誌」七月菅野風生氏市岡子思の金柑發行、「モザ」滿洲」十月三井實雄氏和泉式部の歌、十一月宛橋北好澄氏歌友協會誌、十二月三井實雄氏歌壇本座回顧、この他滿洲、從軍協會社の機關誌たる「協和」「電業」「電々」「鐘魂」などに表はれたかもしぬ歌論については充分

な調査がゆきとどかなかつた。「日滿女性」は十一月號を以て皇軍慰問號とし、挿句、慰問文などをあつめたが短歌作品も多くあつめて題意をあつめた。

滿洲における歌人達に一般雑誌を通じて如何に純粋な短歌愛を一般社會人に訴へやうとする努力が不足してゐた事を感はしめられた。

作品のみ掲載した雑誌は「滿洲公論」「滿蒙評論」「月刊滿洲」「觀光東亞」等を右に誌名をあつたものに加へ得る。

この他「放送」としては八月まで月々JQA A K歌壇が甲斐水原氏でつづけられ、後評が放送されてゐたがJQA A Kはフレットの流刊と共にやみ、五月新井重美氏婦人と短歌、十月橋本八郎氏詩と短歌、十二月伊東千鶴子氏愛國歌人の非などがあつた。短歌問答も時々放送された。伊藤勝啓氏、鈴木清氏、長南瀧岩氏。

なほ新短歌(自由律)についてはふれなかつたが藤井千鶴子、白井尚子の二氏が時新「滿洲公論」等に作品を発表してゐた。なほ三月白井尚子氏新短歌についてを放送。

本年度には内地歌壇より知名歌人の東滿交流なく、六月渡瀧の吉原庄彦氏も滿洲の歌人の一人とも會ふ事なく去つた模様である。(この稿は滿洲歌友協會の依頼による)

# 滿洲俳壇展望

金子麒麟草

## 一 概 観

昭和十三年度に於ける滿洲俳壇を展望する前に私は先づ「滿洲俳句とは何ぞや」といふ事をきめてかかる義務があると思ふ。然し此の事は「滿洲文學とは何ぞや」といふ設問に對して、妥當性と普遍性との確を具備した回答が得られない限り頗る困難であるばかりでなく、もう一步遡つて俳句の本質が何であるかを闡明出来なければ、いくら論じても所詮は獨善的な言ひ分に終つてしまふのではあるまいか。

早い話が、昨年初期から滿洲文學が多角的に論究されてゐたが、いまだに其の決論に到達してゐないのを見ても亦日本俳壇が依然として各派各様の理念の下に對立してゐるのを見ても自から肯かれると思ふ。殊に俳壇に於ける定形律對非定形律、季感尊重對季感無用の如きは其の最たるものである。だから、今私が本年度に於ける滿洲俳壇を展望し、之を紹介するに當り私は私の平素抱懷してゐる滿洲俳句觀を率直に披瀝して、私の

觀照態度を明かにし、日つ各グループが互にどんな位置に、どんな姿勢をとつてをり、其の総力が如何なる方向に動きつゝあるかを考へたいと思ふ。こんな觀念から私は原則として左の點を滿洲俳句に提唱し、標指としたい。

(1) 形式として廣義の十七字音(定形律)を肯定する。

(2) 内容としての自然感(自然の諸相を徹して自己の感情を象徴する全體感即ち自然と自己、物と我とを一如の境地まで持つてゆき、對象を主媒材として自己の感激を表現せんとする觀照態度により産れ出づる感銘。しかもそれは内地の經驗とはよほどの距離のある振幅の廣い、奥行の深い、(重量味のある感情)を欲求する。

(3) 本質として宇宙自然の原理大道をさながらに實現してゐる日本帝國の精神に胚胎することを念願する。

(4) 特種性として前記三項を基調として滿洲の人情、風俗、土地、氣候の眞實を表現することを理念とする。

以上の私の理想からすれば、從來滿洲文學は日本文學と絶縁して独自の展開をなすべきであると云ふ一派の主張には同意が出来ないばかりでなく、詩を産む母胎は人間であり、詩は情的要素の一つの表現である限り、日本人の傳統的木然の精神を忘れて独自の滿洲精神の下に滿洲文學を創造せねばならぬといふ義務はなく、それは滿洲出生の第二世の時に於て完成して置けばいいと思つて居る。

滿洲建國精神、八紘一宇の大理想といふことも畢竟するに日本精神の根源を爲す「中心歸一、全體一體」の理念に外ならないと思ふ。嘗て木崎龍氏が「文學の理念は、時間的にも空間的にも普遍性と妥當性ははれて確定するものである」と云はれたことには共鳴できるが、此の言葉は、時間、空間が國民性、個性を本質的に變化し得るといふ意味ではなく、根本理念を基調として智能的に表現方法が推移してゆくといふのであらうと思ふ。それは氏が「何々等々イズムの氾濫は、それ自體が瑣末の派生にしか過ぎない」と喝破せられた事によつて考へられる。

王道樂土の實現、民族協和の大理想達成といふことも、滿洲の國土に居住する國民の人間性、民族性を破壊して新たな滿洲精神（もし創設せられたとしたら）の下に、一樣に同化植化するといふのではあるまい。即ち酸性をアルカリ性に變じ、また、酸とアルカリを合して中性にするといふことではないと思ふ。それは民族の個我を滿洲建國の大理想（是は智的要求ではならうか）に還元し、協同和合する大我に進展する謂でなければならぬと思ふ。

だから、何れの國に居住し、詩を作るにしても、其本質を爲すものは、作者の個性であつて、それは不識の内に培養された民族の人間性の發露であらねばならないと信ずる、此の私の考は木崎氏の云はるゝ「假面を脱して眞に自我を再發見し個を完成の高みに押し上げる事によつて全體は全き混融の中にその

見事な結實を享受し得る」の言葉に合致する。然し、それはあくまでも「中心歸一、全體一體」の理念に立脚してゐなければならぬ。即ち小乘的な我を捨てて大乘的な我を目標とすべきであると思ふ。然らば「歸一」の「一」は何であるかと質問せらるゝことになるが、それは私が云ふまでもなく、各自の胸裏に刻されてゐる筈だ。

先づ前書は此位にして、本年度に於ける滿洲俳壇を通過するとき、それがあまりにも混沌とし、小我の圈内にたてこもり、各分野を守ることに汲々とし、之を綜合し、之を大觀して、廣潤なる視野のもとに、我が足場を深く踏み立てるといふ態度に著しく缺けてゐるやうに思はれる。是は日本俳壇に於ても痛感されることではあるが、畢竟するに現下の滿洲俳壇に於ては各派の連絡なく、滿洲俳壇としての根柢が確立してゐない、云はば偉大なる指導者が不在であると思ふ。然し、是も觀方によつては、完成への過程に於ける混亂であり、進展への動搖であるとも云へる。

從來滿洲俳壇各分野の歸屬を何々派何々會と内地流派によつて區別しておられる向もあつたが、私は、それは現代學界に於ける學問的意識と同様に、頗るにがにがにと思ふ。だから私は以下列擧する會派の紹介に於ても内地流派の歸屬を述べないことにする。唯、概括して左の區分に分つことは必要であると思ふ。

(1) 意識的にも無意識的にも満洲俳句の特種性(満洲の自然により影響せらるゝ感情)を表現し、また表現せんと努力しつゝあるもの。

(2) 強て満洲俳句を特色づけんとして素材を満洲の風物に求め、之を寫生し描寫することに専念し、自己の感情を第二義的に取扱ひ、自然(物我を對照する狭義なるもの)の詠歎に終始するもの。

(3) 内地俳壇に依存し、その指導精神の下に所作し、満洲の感銘、郷土味に乏しきもの

然らば、どの派が以上のどれに屬するかを研究する事も、ある意味に於て必要であるかも知れないが、私は満洲俳壇人の一人としてそれを望まない。私は自己の觀照により、満洲の郷土に深き根柢を有すると認められた各派の作品を求め満洲俳壇の動向を知り、その進展性を闡明すれば足りると考へる。

尙ほ、作者の選擇に就ても現満洲俳壇的位置に於て、また作者の質に於て必ずしも同一でない事を私は知つてゐる。然し私の最初の計畫が満洲に於ける俳壇の分布、その分野に於ける俳句的位置を窺知せんとするにあつた爲め自然以下の如くなつたことを諒承して頂きたい。

2 作 品

昭和十三年度満洲俳誌に發表せられたる郷土色の豊かなるものの中より抜萃す

『平 原』より

馬車の馬鼻つきあはせ氷雨宿 奉天 汪川 三昧  
高粱に攻むる日近くなりけり 新京 三木 朱城  
あまたたび句にせし柳絮いつかみん 大連 三溝 沙美  
江舟の帆を赤く染めて野火暮るる 子チハル 久米 幸叢  
喇嘛塔は高く朽ちをり柳絮とふ 大連 森脇 襄治  
花芥子や慈河の山をまなかひに 北支 遠藤 蓮城  
娘々廟ふところにして秋の山 鞍山 奥本 默星  
たそがれの煤の降りくる霧氷かな 奉天 川村 凡平

寒鴉土墻の憂歩きをり 新京末石休山

掃つみのぼつ／＼をりて枯野かな 大連春木潮光

驢馬に降り百姓に降る檢落葉 大連寛 鳴鹿

バス待てる乙女彩香をスチームに 大連青山静丘

雪を行く大きなバスか止りゐる 撫順舟橋ひさ女

驢馬の荷を降ろし終りて日向はこ 熊岳城石井常念子

日のかける霧氷そのままとなり 旅順成田合甫

「瀟 洲」より

氷切れれば江水碧く日を吸へり 大連高山峻峰

天秤の神経に觸るる手の凍てて(樂局) 大連武田しをり

鈴音ひいて駱駝遅々たり雲の峯 北支碧又詩子

デスマスクのごと子の髭鬚稍妻す 大連木間汀路

火車騒る秋の日大き涯へ轟る 大連大塚逸洲

江底に流氷押てる音がする 大連笹原魚衣

ためしぎりふとおもふ凍氷る夜 新京野島島人

狂はしく峰うなりきぬ草枯るゝ 大連堀之口錦江

消防車夫婦の背を射て過ぎし 大連青山青瀛

鏡肌冷ややに秋の燈をとれる 大連宇都宮嵐翠

〔註〕 鏡肌は顔面の鏡の如く自然に若かたりのなり

地軸狂はん月冴え切つて怖ろしき 新京岡田竹葉子

氷車の列蒼く聲なき街を行く 哈爾濱野田まさる

砂川の水にはひ來る芽草かな 奉天嶋澤梨村



野分あと星座亂れず夜となりぬ 大連 垂永 撫石

『山懐子』より

雜草と臥して桔梗の芽ゆるをば 黒河 明野 ム弓

隋胡蘆ひかりあひ唾あたゝかく 奉天 志和 斗史

黃鐘大呂汗を鎖めて人醉へり 奉天 石原 沙人

しばらくは凍てもどる魚を手にす 大連 福田 窓花

大風康草一瞬も伸びやまず 奉天 海村 素人

また凍る川にとどかず町の燈は 張家口 池上 清水

罪を斬らむ怒り血と炎ゆ照葉あり 奉天 森 五味子

晋のして馬車とまる凍窓のあかり 奉天 成田 凡十

かげろふに怖ぢつも狐みごもりぬ 奉天 松尾 呂青

○ (孔子答)

嚴鼓三たび早春の日の扉を開く 新京 上森 里道

枯れ草も人の魂なむ踏むべからず 奉天 淺田 美佐彦

火放てば蘆枯れきらぬ晋のする 奉天 神谷 天心

きゝすます誰蘆草の實こぼれ次ぐ 新京 北野 揚人

暮れゆとる塔上夏燕むれけり 錦州 馬塔 菖子

落ちる月が荷を咬み外套を咬み 新京 宮川 青芥子

揚落葉燈ともりてよりしきりなり 奉天 山本 良鬼

砂丘の松の下影ほのと花すみれ 遼陽 日野 靜女

萌ゆる草蜘蛛のいのちのひそみみつ 大連 岩野 治女

煤竹斜碧天の固き凍てかな 新京 金子 鉄鱗草

『謎 韮』より

○

末枯の地にたくましき銚眼あり

哈爾濱 桃棹 蹊子

寒雀グット膨れて風に湛ふ

大連 加藤映一

月遅く流水の江を照しけり

哈爾濱 佐藤清水草

苦力頭の雲雀を苦力等離れ聴く

大連 安倍月哉

凍江の永遠の水音をこゝにきく

哈爾濱 片岡 溪子

遠くより電車鳴り来る霜夜かな

大連 滝口 武士

聖處女の雙乳凍つる水に入る

哈爾濱 上西 行乞

春曉の校書の門は午を開く

營口 古川 而作

野火燦幾山越えて雲となる

哈爾濱 竹崎 志水

初明り牧舎かゞやき鐘鳴らす

寺尾 一石

軒幽らく凍魚の蒼き瞳とあひぬ

哈爾濱 有賀 淡水

朝の月淡し埠頭の雪を踏む

杉山 劍風

リラの香の鐵壁なせる闇に待つ

哈爾濱 青木 郊水

北風まとも驛の倉庫に鐵の扉を

有賀 淡水

罷業玉霜の廣場にも言はざる

哈爾濱 久保 木秋骨

兵過ぎてまたひそまりぬ木の芽街

並木 いさを

皺皺の月きを撰び楯に来る

哈爾濱 桂 秀草

夏めける街整然と祭待つ

石川 日出男

滿洲通信俳句 一より

明け易きベルトの音にまじる聲

クレーンに夏雲今日の座を得たり

爲我 井普羅

青天の晝魂蒼き光芒を

大連 寺内 黙子

夜の茶房向日葵の額か燃えてゐる

川村 志麻

夏

み雪降る夜の静けさにわが呼吸

夏の雲かゞやき起重幾今廻る

高木 春蔭

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

小

鳥田 青峰 選

「滿洲新聞俳壇」より

金子麒麟草選

梅雨の晝妻産褥の蚊帳にあり  
 汗くさき我をさととりぬ花水  
 高梁の穂光り雲と呼び合へり  
 新涼や水面の澄みのあふれぬる  
 コスモスの荒び夕霞せまり來る  
 雑木落葉山溪の石にまた水に  
 初霜の玉菜に青き日向あり  
 夜の落葉きつゝ今日の日記閉づ  
 冬の空路掃く苦力に陽をこぼす

「敬賀友俳壇」より

金子麒麟草撰

土塀高く秋を離れて住むことが  
 斥候は草の實つけてるたりけり  
 城郭の聳え星河の凍てにけり  
 過ぎし思へば丘の起伏の凍てあり  
 雪に詠ぎつ戦火展け行くなり  
 燈一つ空の廣さにありにけり  
 月明り楡の露こぼれんとする

咳 吾子にあはれ廊下の日射なき  
 皺のトマトひさぐ店頭風冷や  
 眼鏡の影みだしぬ蕎麥の花  
 尚ほ高山峻峰氏選になる「觀光東亞」「ラヂオ新聞」「警察  
 協會雜誌」の俳壇あるも、本稿起草迄に材料を蒐集し得ざりし  
 爲め遺憾ながら割愛する。また「海江」「層雲」等所謂自由律  
 壇の存在を聞くも、之を詳にせざるを遺憾とす。

附記

本年度滿洲俳壇に活躍し、常に指導的立場に在りて斯界に貢  
 献するところ頗る大なりし三溝沙美、柴淺茅の兩氏は何れも内  
 地に轉任せられたり。

石森梢風  
 河合天外  
 石田靜泉  
 北野楊人  
 大川光興詩  
 大竹新生  
 相澤秀水  
 比露志  
 高松立浪

奥山白城  
 柴泉  
 森采明  
 岡本好民  
 中村素人  
 内田地歩  
 内海栗林

# 児童文學の足跡

柳 生 昌 勝

「新童話」から「童話作品」に進み、現在は「装」として結束をつめてゐる石森延男氏を中心とする一群の作家たちは、過去數十年に渡つて、滿洲に於ける児童文學を最も藝術的な匂ひを持たせようとし、より情探的な文學とし、何よりも從來の童話に巢食ふところの、感傷、目險、怪奇、滑稽、臭みのある道徳、と云ふやうな俗味を排斥して、あくまで、純眞無垢な子供たちの心性に、豊かな情懷を興へようとする、新しい児童文學の確立と云ふ事に目ざしつゝあつたのである。

この事に就ては十四年度に、この一群の作家によつて刊行された童話集「一つぶの豆」の序文に、小川未明氏が、次のやうに述べてゐる。

良心ある作家があつて、眞に子供を愛して同情の眼を、彼らに向けて彼らの友達となり、その生活を觀察する時に、自然と子供たちの持つ、童話の世界と云ふものを認識するのである。獨り、それらに對する愛情を、文字や文章に表はすだ

けが、詩人や作家であるとは限らない。歌はず書かずとも、童心をいつまでも失はずに、小さき者の友達たるものは、すべて、詩人たり得ることが出来る。かうした深い愛情から、子供たちの眞の味方となつて、子供たちの感情を守り、子供たちを世の中の汚濁から救はうとする作品や、お話こそ、ほんとうに、内心から子供たちを反省させることが出来るのである——云々

一つぶの豆はかうした良心ある人々の作品集であつた。そこには子供たちが、たゞ面白く思ひさへすれば、どんなフザけた手練手管を使つても構はないと云ふやうな、不健全な作品は一つもないのである。これは——新童話、童話作品——と長い試練を経て來たこの人々の輝やかしい記念塔とも云へるのである。

## 一つぶの豆 目次

子供と童話文學	小川未明
柳 粉雪	矢澤邦彦
白い蝶	久富榮次郎
野つ原の子供たち	小林正則
菜の花。絹糸	高橋周子
島の先生	政本勇
ひよんの木	松尾茂

お姉さんの屯

土

天橋

一つぶの豆

この人々の運動はこの外「装」の発行によつてつゞけられてゐるが、十四年度に於いて同誌上に發表せられた作品は次のやうなものである。

「装」第一號（昭和十三年四月）

坊やのアラビヤン・ナイト（一）

名號

蝶々誌

母の家

獨言

「装」第二號（昭和十四年五月）

坊やのアラビヤン・ナイト（二）

蝶々誌

新京、哈爾濱

ル、とシル

「装」第三號（昭和十三年六月）

れんげう

入來すなほ

平方久直

下津總子

石森延男

石森延男

小林正則

久富榮次郎

高橋周子

政本 勇

石森延男

久富榮次郎

柳生昌勝

高橋周子

柳生昌勝

ねずみ

女たち

蝶々誌

坊やのアラビヤン・ナイト（四）

「装」第四號（昭和十三年七月）

坊やのアラビヤン・ナイト（五）

上方芝居

ル、とシル

蝶々誌

路

「装」第五號（昭和十三年八月）

坊やのアラビヤン・ナイト（六）

眼鏡

お母さん

路

「装」第六號（昭和十三年九月）

坊やのアラビヤン・ナイト（七）

ル、とシル

盛夏

鬼と猫

高橋周子

政本 勇

久富榮次郎

石森延男

石森延男

柳生昌勝

高橋周子

久富榮次郎

政本 勇

石森延男

柳生昌勝

松尾 茂

政本 勇

石森延男

高橋周子

柳生昌勝

小林正則

蝶々誌  
久富榮次郎  
武井 政本 勇

「装」第七號（昭和十三年十一月）

水 柳生昌勝  
朝なりき 石森延男  
勝筆斷片 佐々木悌三  
おはぢき 高橋周子  
蝶々誌 久富榮次郎  
細君 政本 勇

かくして「装」同人は今尙、力強いスクラムを組んで、児童文學の向上を目ざして進みつゝある。そして現在「装」は毎月發行となつてゐる。

この外十四年度としてつけ加へて置きたい事は、山田健二氏が『少年義勇軍』と云ふ郷土色豊かな童話本を出版した事である。

山田氏の滿洲に於ける児童文學の上に殘してゐる足跡は相當大きく評價されてよいものであるが、更にこの一書を得たることは感賞に堪へない。作者はこの書の序文に

『納めた十篇は、どれも前著「高梁の花環」や「慰安車」と同じやうに、美しい滿洲、正義の滿洲、平和の滿洲を描いた實話風の童話や物語です』

と云つてゐるが、氏の持つ童話の風格は、實話的な興味を含むものであつて、確に異彩を放つてゐる。

空白页



評

論

# 最近の滿人文學

大内 隆 雄

從來滿洲の新しい文學は「東北文壇」或ひは「北國文藝」等と稱されて來たものである。文學作品の上に、その作者を取りまく自然の環境や社會的諸事情やまた民族性などが反映されるのは極めて當然なことであつて、滿人の文學もまた自ら滿洲のさういつた特殊性といふものを多分に現はして來た。これを「東北文壇」と言はれ或ひは「北國文藝」と言はれるに至つた理由なのであつた。現に滿洲から支那に乗り出して行つて文學の仕事をやり非常な評判を得てゐる蕭軍の如き、彼の作品にもこの滿洲らしき、滿人らしき、滿洲でなくては見られぬもの、さう言つたものが濃厚に現はれてゐる。蕭軍については後でも書く積りであるが、彼の如き、確かに最近の滿人文學を代表するものと言ふべきである。

簡単に滿人文學の歴史を回顧するに、滿人の新しい文學の最初のものは大體今から十四・五年前まで溯ることが出来るであらう。當時奉天を中心に各漢字新聞に新しい作品が載せられる

やうになつた。それから二、三年してやはり奉天に文學研究會啓明學會といふ二つの文學團體が出来た。文學研究會は學生が中心となり「奉天學生」といふ定期刊行物を出し、啓明學會は學校教員、各機關の下級職員等より成り「啓明學報」といふ定期刊行物を發行した。その後更に春潮社、東北文學研究會が出来て活動した。各地の新聞もそれぞれ文藝欄を設けて新鮮な詩や小説を掲載した。

當時の作品を概観すると、種々の傾向のものがあつたが、一體にロマンティズムの流れに添つたものが多かつたやうである。當時出た文學書の名前を見ても「夜船」「長虹」「關外」鮮血」「情歌等があるのであつて、それらの題名だけでもさうした傾向が窺ひ知られよう。さうして盛んに青年男女の戀愛とか日常生活の中にする種々の出来事に對する若者らしい感じとかを詩にうたひ、小説に書き現はしたものであつた。これはいはば滿洲新文學の第一期であつた。

その後日本では例のプロレタリア文學が勃興したのであるが、これは支那の文學にも大きな影響を與へた。そしてそれはやがて滿洲にも影響を及ぼして來た。滿洲でも從來とは相當趣きを異にした作品が現はれるやうになつた。

その主なるものをあげると、先づ丁煥文がある。彼は當時の滿洲農村の恐慌を題材として多くの小説を書いた。またその外にも、事變前の軍閥戰爭を題材とした作品が現はれた。都會の

労働者が題材に採られるに至つた。之のやうに滿洲の詩人作家達が漸く自分たちの周圍に眼を注ぎ現實といふものを強く把握しようとする方向に向つて来たこと、これは大いに注目すべきことであつたと思ふ。その後の滿人文學はまさにかうした方向を受けつき、その方向を發展させたものであることが、やがて理解されるのである。

やがて滿洲軍變となつた、滿洲各般の情勢には著しい變革がもたらされた。その變革のはげしさのために、文學などは一時は窒息せざるを得ないかに見えた。しかし文學は死んだのではなかつた。それは不死鳥の如くに新しい姿をもつて更生し來つた。その頃出來た一つの雑誌がこの傳説そのままに「鳳凰」と名付けられてゐたことも意味深いことであつたと思はれる。

「鳳凰」は奉天で出た新鮮味に富んだ文學文化雑誌であつたが、不幸經營がうまく行かなかつたためか、やがて廢刊となつた。その後やはり奉天で、協和會關係の若い人達によつて「新青年」といふのが發行されるやうになり、これは今日まで續いてゐる。その外、文學關係の雑誌として現在出てゐるものに、新京の「明明」(註、その後廢刊された)奉天の「興滿文化月報」等がある。滿人の作家詩人たちはこれらの諸雑誌とそれに各漢字新聞を舞臺としてその作品を發表して居り、また隨時單行本も發行されてゐる。

以下これらの作家の中から代表的な數人をあげて、その作品

について解説しよう。

第一に何體徵君について——彼は現在滿洲の田舎にゐて小學校の先生をしてゐる人であるが、その作品にはいかにも農村の地味な、着實な、又或る點愚昧な所さへある人物たちが面白く描かれてゐる。たとへば營々辛苦して二百か三百かの金を溜めやつとお嫁さんを貰つた、ところがやがて子供が生れる、その子供が病氣をする、まるで獨身時代以上の苦しみを嘗めねばならぬ、しかもそのうち年よつて自分は仕事が出来なくなつてしまふといふやうな物語である。いはゞ現在も農村に残つてゐる封建的なもの、それによつて人々がどんなに苦しめられてゐるかそのやうなテーマを彼は好んで描いてゐるのである。派手ではないけれども、滿洲農村生活の實相といふものが極めてリアルに活き活きと描き出されてゐるのである。そしてこゝにも、どつしりとした、滿人の民族性といつたものが適確に表現されてゐて甚だ興味深いと思はれるのである。

この何體徵君の描く作品を、更に大規模にしたのが、前にも一寸書いた蕭軍のである。その代表作は長篇小説「第三代」であるが、これには軍變前の北滿の一つの小さな村、その村に住む人々の生活が錢す限なく描き出されてゐるのである。大きな門を構へ、多數の使用人を使ひ村人に君臨してゐる大地主、貧乏なために苦しめられつひ匪賊の仲間に入り入れられてゆく男、貧しい家を切り廻して奮闘してゐる勝氣な寡婦、山林から

山林へと動いてゆく匪賊たちの生活、さういつた世界がまるで一幅の繪巻物でも見るやうに私達の前に展開するのである。しかもこの作品全體を貫いてゐるとつしりした重畳感、多くの人物が持つてゐるいかにも大陸的な悠揚迫らざる態度など、まさにこの作品が滿洲から生れたものであることを立證してゐるのである。彼蕭軍は事實滿洲に生れ滿洲に育つたので、それに多年滿洲に於いて文學的修業を重ねて來た人なのである。曾つて哈爾濱に「國際協報」といふ漢字新聞があつたが、蕭軍は長い間その作品をこの新聞に寄稿してゐた。その後上海へ行き、先年死んだ一代の文豪魯迅氏に見用されその推挽を得て支那文壇の新進として刮目される地歩を占めるに至つたのである。今次事變以來、その消息がまだ判明しないが、彼が健在であることを祈らずには居れない。「第三代」は最近小田豊夫による日本語譯が出版されてゐる。譯は必ずしも上々ではないやうだが、この大作の全貌を窺ふことは出来る。ひろく一讀を奨める次第である。

次に今明君について―彼には「風夜」と題した單行本があるが、吉林の人で新京にもゐたことのあるまだ若い作家である。何體微、蕭軍等が農村の作家であるとすれば、今明君は都會の作家であると言ふことが出来る。その作品には多く都會生活をしてゐる若い男女が描かれてゐるが、また都會の勞働者、浮浪人たちを描いた作品もある。これもまた滿人文學の一面を代表

する作家である。なほ同じやうな動向の作家に文泉君がある。彼は關東州の人で「賭徒」と題する大作がある。彼も何體微君と同じく師範學校出身の人である。滿洲の若い作家に小學校の先生が多いといふ事實も一應注目していゝ事であらう。それだけに純真さ、まじめに文學といふものに立ち向つてゐる彼等の氣持といふものが感得されるのである。

最近活動してゐる作家としては古丁、疑運、小松、石軍、磨青、田兵等の諸君がある。このうち古丁君は「鶯飛」疑運君は「花月集」小松君は「蝙蝠」と題する作品集を城島文庫から刊行してゐる。何れも滿洲の各方面に題材を持つた作品であり、リアリズムの軌道の上に立つた作品である。たとへば古丁君の「原野」と題する中篇であるが、これは日本の大學を卒業して滿洲に歸つて來た平凡な一人の人間が、どのやうにして官吏になり、どんな風に仕事をやつたか、また或る一人の女とどんな戀愛をやつたかといふやうな、人間一代の歴史を叙述したものである。その中には滿洲らしさといふものが羅如としてゐる。

田兵君の「阿丁式」といふのは、滿洲に來て悲惨な生活をしてゐる白系露人の一家を或る小さな飲食店を舞臺として描いたものである。

小松君の「洪流の陰影」といふのは或る會社の翻譯係に勤めてゐる一人の青年、彼の友人たちの生活、主人公と一人の女との交渉、その會社の社長、工場長とかいつた人物との間に起る

出来事、やがてその青年が相手の女を殺すに至るまでの事を描いたものである。こゝでは滿洲の都會に住む滿人たちの生活が扱られてゐる。

石軍君の「黄昏的江潮」は松花江の渡し舟の船頭たちの生活の描いたものである。苦しい生活の闘ひを續けてゐる船頭たちを姿かひどい風のために大きな波が立つてゐる松花江の流れを背景として巧みに描き出されてゐる。

夷馳君の「浪淘抄」には旅する若い男の氣持、その少年時代を思ひ出等が興味深く描かれてゐる。

陸林君の「郷村的後子」といふのを讀むと山村の子供たち彼等が無邪氣に歌をうたつて遊び戯れてゐる姿が描かれ、しかもその背後には農民たちの生活振りがまさ／＼と浮び上つてゐる。

以上主として小説について書いたが、小説の外に、詩も盛んに描かれてゐる。それには短い詩もあるが、相當長篇の詩が多いことが注意される。その題材もやはり滿洲的なものが大部分を占めてゐて、題目を見ても「野店」「流浪者之歌」「江邊行」等、大膽的な風貌を持つてゐることが察せられる。

この外、盛んなものに隨筆、雜文がある。文藝評論も近時盛んになつてゐる。その隨筆、雜文類のものを讀んで見ると、彼等が相當豊富なしつかりした教養を持つてゐることが知られる。文藝評論では些か小さな問題をとらへ相互に派別的な黨派的な

論争を繰り返すといつた傾向が一時見られたが近來はさういふ傾向も大分改まつて來て、文學の本質的な問題を探究するといふ方向に向つて來てゐるやうである。なほ外國の作家研究の對象としては最近ではゴーゴリ、プーシキン、ホイットマン等が熱心に研究されてゐる。これには日本の研究を通じて勉強してゐる者も多いことは支那に於けると同様である。今後日本語が普及するにつれてこの傾向は一層強くなるであらう。私達は宜しく大いに手を貸すべきである。

なほまた最近では戯曲も書かれるやうになつて來た。これはシナリオなどともなほ今後には發展を期待される分野である。粗雑ながら以上を以て最近の滿人文學の概観を終る。

# 決算と展望

林 適 民

——批評家・作家と讀者

——文化人の生活

——論戰の消極性

批評を論じ、創作を論ずる、これらの藝術の本質の研究は、一つの甚だ陳腐な問題である。どの時代に在つても、まだ始んどどの大藝術家に在つても、みなそれについて論究し自分の意見を發表してゐる。何處でも、どの雑誌でも、この問題の検討を放棄してはゐない。だから私達はつひそれについて厭惡を感じるのである。そしてそれに餘り注意しなくなる、まして、一方、藝術の本質の研究は又根本が一の抽象的な論題なのだからだが私達が新しくそれを検討するには、それに加はつた時代の(過渡期の)新性格を用ひて陳腐さと對抗せしめることを忘れてはならぬ、他方、民族と環境の特殊性を以て抽象的論題に具體的な豊富な内容と基礎とを與へることを忘れてはならぬ。批評家は事實上作家と讀者の中間に立つてゐるといふことを

私達ははつきりし云つてゐる、彼は作家と讀者間の楔、或ひは紹介者と呼ばれ得る。だから、作家が讀者を離れて存し得ないと同様、批評家も作家を離れては存し得ない。同時にまたまさに創作があるからこそ、批評存在の必要があるのである。このやうにして、私達は必然に作家と批評家との結合を要求するその意味は、批評家の仕事は作品の批評の上にある、それで作家と作品に對して深く理解し突込む要がある。そして讀者の上に出ねばならぬ。だから、一人の批評家が完全に一篇の作品を理解するためには、自分自身が原作者になる要がある。といふのは、完全に作者の境地に入り彼の心境と志向とを把握し、深く彼に同情し、彼を理解せねばならぬのである、これに反し若し此のやうに彼を深く理解せぬならば、作品を深く理解し得ぬのである。深く作品を理解せずしてどうして批評が出来よう。これは極めて明瞭な道理である。だから批評家は何も我々の文壇に於けるやうに顔を出し浪漫式天才主義や官僚式の最高權威を表現すべきではない。彼は條件つきで作家に屬してゐるのである、換言すれば、批評には作家の意向を付度し且つそれを解釋して大衆に紹介することが必要である。このやうな意味から時には批評家は作家の辯護人となり得る。

しかし批評家がたゞ作家に屬するだけのものと誤解してはならぬ。私達は更に一步を進め彼等の矛盾をあげ、批評家存在の獨立性を規定せねばならぬ、批評家が讀者により深く作家と

作品を理解せしめようとする、同時に、作家は自分の創作に反省し續けるやうにする、これは依屬に似た理解工作と辯護である。これは私達が注意して、事物の依存關係である。

斯うした依存關係から批評の方法に移ると我々の研究は比較的手が省ける。我々にはこれによつて多くの人を苦しめた問題を解決し得る。その問題とは、批評方法の全體が科學的であるべきか印象的であるべきかといふことである。第一に我々は當然科學的方法を尊重せざるを得ぬ、それは我々の批評に客觀的意義と基準を持たせ、浪漫的獨斷に陥らしめぬからである。だが我々は他方に於いて印象的鑑賞の意義を抹殺し得ない。それは創作といふものはやはり獨特性を持つ藝術であり、藝術的鑑賞には特に重要な要件があるからである。我々は鑑賞によつて全體のまとまつた印象を得るのみならず、またそれによつて「藝術の内面」を理解する。要するに、方法に於いて、我々は機械的な科學批評を承認し得ず、また主觀的な印象批評を誇ることゝ出來ぬ。我々はそれを辯證法的に統一し綜合することが必要である。こうした意味に於いて批評家も一種の藝術家である。

――すなはち藝術の分析と鑑賞に特殊の感受性を持ち、外部の自然に對しては正確な世界觀を持ち、特殊の方法によつて練磨された人であつてはじめて「批評家」と呼ばれ得るのである。

以上の條件に基いて、充分に我々の文壇の理論的基礎を眺望出來よう。我々の少數の批評家は正確な世界觀と批評方法を持

つてゐるのかどうか、これは甚だ疑問である、我々は批評家の具體的活動振りを見よう。だが今までの所、我々はまだ「本格的な」批評家を發見出來ない、それに系統的な文章もない、我々の記憶、記念に値ひするやうな功績がない。そこにあるのはただ鬱憤晴らしの小細工的な印象批評と批評的口吻の文字だけである。嚴正に歴史性を持つた批評の仕事をやつてゐる人はまだゐないのであらう、これは文壇の内面と環境の條件に制限されてゐるのに外ならぬ、我々には豊富な作品もなく、形を成した理論家もゐず、それに鐵面の如き環境は一層我々に養成の可能と機會とを與へない、これは事實である。

さうではあるが、文化工作に従つてゐる者は努力してやらねばならぬ、そして可能な範圍で問題打開の方法を探さねばならぬ、これは現在この土地に住む文化人の眞面目と苦心である。

作家の側では、我々は「新聞性」の作品を放棄し、歴史性あるものを要求する、具體的に言へば、我々は大體健康な寫實的作品を要求する、すなはち或る程度現實暴露の進歩したものである。たとへば詩の場合、我々は情感と敘事の連繋の背後に、自づと哲學性の暗示が示されることを求める。このやうな要求は困難ではあるが、そしてまだ全體的な普遍現象とはなつてゐないが、しかし、すでに多くの作家がこの路を進みはじめてゐるのである。そして今、我々は批評家を必要とするのである。

我々は批評家が尙も剩す所なく、深化擴大し、且つ作者の暗示



を解釋してそれをより容易に有効に讀者の意識に滲透せしめ現實に作用あらしめることを欲する。それ故、我々の批評家は單に「書評家」に止まつてはならぬ、彼は一個の理論家として自己の指導力を以て文化の全般を發展せしめねばならぬ。大家がいかなる社會狀態の展開にも對應し得、解決し得るやうな指標となる原理的なものを與へねばならぬ。新聞性の追隨と混亂にはつきりした揚棄をなし指示し頽廢を排撃し健康な傾向を助長し、無駄に爬ひ廻つてゐる腐屍式の「作家」の汎濫を打倒することである。他方では、自由論者の創見と態度を以て作家の生命としてゐる者に對處することが必要である。といふのは、彼等は藝術でも生活上でも自由の方式（能動的ではない）を探りひたすらに現象の皮相的な片面的理解を追究し、本質の深い認識といふものは、特に將來の展望といふものは缺乏の極にある一般に、かゝる文化人が比較的多數を占めてゐる。だから我々は彼等を誤らしめてはならぬ、「假象」の魔術の誘惑と混亂をひつくり返し、彼等の認識を深めしめねばならぬ。たとへば、第一號の「明明」に「貴下の最も崇拜する偉大な人物」として一人の作家はエヂソンを擧げ、一人はガンヂーを擧げてゐた、しかし彼等はただ現象の表面のみを見て深く本質には入つてゐなかつた。所謂全人類の眼を以てエヂソンと科學とを見ろといふのは、それは片面的な、エンゲルスの言つた「通俗的啓蒙思想」である、我々は更に一步を進め科學の背後の社會階級に入

つて行かねばならぬ、そのやうにしてのみはじめて正しく科學を認識しエヂソンを評價し得るのである。ガンヂーの場合は、やはり同じやうな要求か一步を進める。ガンヂーは他人のために自己を犠牲にはしたが、しかし結局誤まつて外界に悪い影響を與へた失敗した戰略家である。それ故、無形の中に、彼は却つて（その他の人に比較して）英政府に喜ばれ且つ利用されてゐる。以上二つの實例から我々は一般作家の意識の貧弱さを知り得るのである。これはみな批評家の仕事に残されてゐる。しかし、善意の指導に在つては、我々はさうした意識が正しさを缺いてはゐるでも現實に進歩的意義を持つ作家の「良識性」を疎略にし抹殺することは出来ぬ。斯うした「良識性」は「厚顔な」追隨式の「常識性」の文化人に對抗し戰勝する原因たるものだからである。同時に、他の者を指導する批評家は、決して指導を神聖化してはならぬ、それを固定した妄大な權威とし、多くの無意義な争ひを作り出してはならぬ。その結果は一として得る所無く、徒らに口舌を費すのみである。

（なほ、古丁君が「明明」で崇拜する人物と最も愛讀する書として説いてゐる所は、表面は甚だ抽象的なやうであるが、よく暗示をやつて居り、哲學性を有つた現實の意味がある、これには大きな評價を與ふべきである。）

更にも一つの誤謬は公式主義の機械批評である。これはよく見られる現象である、公式な抽象文句をいつも具體的な活きた

作品に當て嵌める、その結果は作品を誤解するか、作家を歪曲するかである。最も顯著なのは、社會情勢を顧みぬことである。又作家そのものを考察せず徒らに抽象的に過度の要求を叫びそして自分が「純藝術家」たることを示さうとする、このやうな現實環境の如何にお構ひなしに妄りに主觀的要求をやつてゐる公式主義の批評家たちは實に到る處にゐる。たとへば最近我々の組織してゐる雜誌社の規則について不満を持つた者があつたさうである、それは明かに（一般有閑者と同じに）我々に「商人臭」があると言ふのである、だが残念なことにこの「純潔な藝術の童子」は身自ら活ける汚れた場面に臨んでゐないのである、具體的な現實の仕事で勝手に公式の「小兒病」式きれい事を説いても成功せぬであらう。これは我々がより積極的な作品が書けぬからとて憤慨して「こゝには根本から藝術はない、問題にならん」と嘆ずると同様、同じく批評精神と原理的態度を缺いた公式主義者は我々が清算しなければならぬ傾向である。

宜しい「原理の規定」といふこの乾燥した捉へ難い活き物については、此處で一段落としよう。以下我々は多く現實生活を語らう、これは具體的で味のある題目であらう、そして年來私がかうと思つてゐて今日はじめて書き得るに到つた重要な問題である、それはたゞに文壇の圈内のみならず、一般知識分子特に青年生活の問題だと言へる。

第一に、私は私達がいかに魔術の慣用をし巧みにそれを使は

うと、假面具といふ名詞は結局假面具といふものを規定してゐると思ふ、假面具はつひに剥がれ魔術は破れる日があるのだ。これは説明を要せぬ所である。私が斯う言ふのは「生活と藝術の聯關」についてである。假面具のやうな藝術生活のヴェールを剥くと「奇怪な」現實生活が露出される。然らば、藝術生活に於いて虚偽の表情を装はうとも、それは一時の欺瞞でしかない。それに根本からそれは何も偉大な藝術に成り得ぬのである。眩しい飾りは早晚眼底に横はる汚れた生活そのものによつて否定されその馬脚を暴露する、試みに何れの時代の偉大な藝術家も偉大な生活を把握してゐたことを見るがいゝ。一種の高尙な非妥協的な、忠實な生活（道徳的な生活とも言へる、第一義的道徳は第二義的な既成道徳とは異なる、以下用ふる所もこれと同様）たとへば古くはベエトオヴエン、ハイネ、近くはゴオルキイ、魯迅の如き。彼等には歌ふべく泣くべき藝術作品があつたのみならず、また歌ふべく泣くべき生活と精神があつた。そのやうな人をして欽佩せしめる生活があつてこそ、あのやうな偉大な藝術が生れ得た。それ故我々の文壇に汎濫してゐる作家生活の荒廢無恥狗性、投機主義、物幣麻酔等は、人を悲憤させるのみである。このやうに自己の私生活を踏みにじつてゐる藝術家達には我々は何の期待をも持ち得ぬのみか、彼等を出來るだけ攻撃し清掃する要がある。更にはつきり言へば、私のこれまでの一貫した主張は（最近の座談會でも話し、同じ結論を得た）

道徳性無き、欺瞞的な、奸滑偽爛の人間は、藝術生活に在つては誇大し、きれいなこと或ひは狗性を説き「非藝術」的表現をする、現實生活に在つては「人に非ざる」態度を表現する、かゝる人間の最大の可能な希望は、虚偽の成功と偽幸福の幻惑を得ることだけであるといふのである。(こゝで、私が「人間性」といふものを誇大してゐると誤解して貰ひたくない、私は現實の階級生活の過程を認めてゐるだけである。)

以上のやうな人間に對して、批評家も萎縮する所なく清除せねばならぬ。

だが、我々の獨特な現實下に於いて、藝術家と一般知識分子青年たちはいかに彼等の生活を進めしむべきか。

我々は知つてゐる。沈痛な生活に在つて、我々の文壇は寂しい蕭條たる状態を呈してゐる。だが、時には寂しさの中に混亂が躍動する、この混亂は無形の中に數年の社會情勢を反映する、そして種々の「寂寞の混亂」の現象中に、又これに關係して存する知識分子間に現はれた意識の動向を洞見し、彼等の萎縮せざるを得なかつた能動精神を見得る、だが他方、我々には苦悶に満ちた「良識」ある文化人の(常識的でない)「良心」の不斷の努力をも見得る。昨年半ばの突變は、一切を弱らされた文化の瘦弱に更に強い衝動を與へたとはいへ、無恥な阿諛者はなほ瘦せ狂つて追隨式な瘦弱運動を叫んでゐるとはいへ、我々は、瘦弱運動の先鋒には一つの通稱がある。統制は比較的新し

い文化形態の一つではあるが、我々には舊知のものである。それは當然に藝術の眞實性に對して懷疑を表示し、その進歩的な自由な發展といふ歴史の改進性に對しては終始保守的既成秩序の力を以て阻碍を企圖する。かゝる現象は、歴史的になり、階級的總體の「決定的な」躍進は、地理上にもすでに流行となつてゐる。かゝる反動力は決して單獨に文學にのみ傳染するものではなく、全藝術に普遍する、全藝術のみならず、全意識形態に向ふ、全意識形態のみならず、全文化に向ふ。要するに、その發展の第一歩は第一に上部建築(政治、法律)に現はれ、漸進的形勢を取つて第二の上部建築(意識形態)に侵入する。我々がそれにいかに對抗すべきかといふことは、單に討論解決される問題ではない、何故ならその發生は現實の悲惨な運命から來てゐるからである。それ故、我々が對抗といふことを考へる場合には、「悲惨な運命」に對抗するといふ全體的な問題と關係せざるを得ない。私は、藝術家と文化人はこゝに思ひを致す要があると思ふ、何故なら、文化と藝術そのものは死守保守的、狗性的でなくて、永遠に社會の發展と相關聯して成長し反抗するものだからである。友よ、我々はもとよりでたらめに虚しい主觀論者となつてはならぬ、だが我々は環境の力を形而上學化し或ひは神聖化していゝであらうか、否、決して然らずである。我々は歴史は人間が造るものであることを知らねばならぬをし

て社會經濟の基礎に對する精神の反作用を忘れてはならぬ。正しい唯物論者は、人の主觀の力を馬鹿にはしない。我々は能動精神を失つてはならぬ。

我々は生活要求に二つの方式を持つ。一つは最高の現實闘争である。一つは最低の要求である。この多くは文化人、殊に藝術家を對象として言ふ。すなはち、可能な範圍で絶大な健康な文化運動をやり、進歩的な道徳性ある文學を書く、殊に私生活に於いて我々にはその他の環境にある者に信する「良心的生活」を要求する、かゝる生活あつてはじめて自己の精神を増強し、他人に絶大な好影響を與へ得る。だが私のこの議論を小兒病だとして笑ふ者もあらう、實際に役に立たぬとして。だが私は却つてその認識の淺薄なのを笑ふ。何故かと。それは「物理的現象」を認識するのみならず、同時に又「心理的影響」を認識するのみならず、同時に又「心理的影響」を認識する。こゝ眞の新唯物論者——正しい個人だからである。「良心的な生活」が一人の實際家を表現してゐる場合、それは人をして涙を流さす「轉變現象」である。これは指導者たる批評家(理論家)の疎略にしてはならぬ問題である、だが具體的に斯うした問題を説いたものを見ぬのは遺憾である。

時には、我々は數年來の暗い重さの下に、一の新しい現象を發見す。それは一般讀者たちが偽藝術に満足せず、苦悶して高尚な藝術の性格を要求してゐることである。これは必然的な

事である。藝術を把握し鑑賞する機會が拒絶された時、讀者大衆自身甚だ大きな苦痛を感ぜざるを得ない、彼等は決して偽の「代用品」を求めない、常に眞なるものを求める、好いものを求める、そして久しく壓服された鑑賞は愛情のやうに積極的な進歩的な作品と結びつく。これは衷心からの良心的な要求であり、我々は大きく評價しなければならぬ。我々はかゝる歴史的な要求を輕視したり或る種の關係で放棄しそれを助長することを忘れてはならぬ。我々は或る程度彼等の飢を満すものを供せねばならぬ。彼等の貪慾の苦悶を齎りて、彼等が自分の要求を積極化し現實化するやうに暗示しなければならぬ。このやうにしてのみ、本質に於いて、藝術は「藝術の社會性」を發揮し得る、かくしてのみ現實に、藝術家が眞に將來性を持つ藝術家となり得る。その偉大な生活を打ち立て、こそ、健康な良心的な存在となり、民衆の指導者となり得る。他方、批評家は更に努力して先きに立つて發掘工作をやらねばならぬ、すなはち動向の必然性を聴き取り内部の聲を覺醒させることである。これは批評家と作家とが同心協力して讀者大衆の進歩のためになすべき工作である。全面的に注意を喚起したいと思ふ。

最後に、も少し具體的な事を言こう。

聞けば、最近數箇月來、滿洲文壇は甚だ論戰が盛んださうである。だが論争の結末が良くなく、實際問題にまで悪影響を及

ぼしたといふ。これは憂鬱な現象である。何故なら我らのかかる特殊な貧弱な文化界は、貧弱さの根本が攻撃もされぬのである。どの文化人、どの文化事業、どの文化團體にも、我らの貧弱な文化界は出来るだけ最大の評價と援助を與へねばならぬ、蓋し文化といふ點でさうする價值があるのである。我々の文化を貧弱な狗性のものにさへしなければ我々の友である。我々の場合、る場合には、少数の「非人間的な」狗性のもの以外は、誰だつて文化のために努力するもの、一切を歓迎するであらう。

歴史上、我々は直ちにイリイッチがゴオルキイに與へた手紙を思ひ出すことが出来る。あの數十通の貴重な手紙で、彼は數回哲學の論争と仕事について説いてゐる。彼はゴオルキイに言つてゐる「私は何度言つたか知れない、私は哲學の論争と實際の仕事とを決して一緒にしてはいけないのだ。」

その意味は、理論闘争から我々の仕事を分裂させ全體の力を破壊してはならぬといふことである。この有名な金言は我々の現在の場合にも適用出来る、我々も同じやうに、口角の論争、意見の不和から實闘などを起してはならぬ、さうなると勢ひ集團の分裂を來す、集團の分裂は文化の前進に最も悪い影響を與へる。それ故結合勢力の分裂を圖る者は文化の罪人であり直ちに清算すべきである。曾つて日本の作家大會で、林房雄は主義の異なる文化人を清除し、前衛同盟を組織すべきことを主張し

た。だが、中野重治はその主張に反對し大なる集團を主張した結果は中野重治が勝つた。この有名な事實から我々は公式主義が社會の趨勢を窺みぬ愚容を窺知し得る。同時に、我々はこの點から統一戦線内に於ける民族性と階級性との問題等を讀解し得る。

聞けば今次論争の起點は古丁君の「原野」だつたさうである。「原野」は相當長いもので私はまだ讀んでゐない。だが「新青年」に出た某君の文によれば、論争はタンクに隠れて人を罵るやうな所があつたやうである。この點から推して、今次の論争が小さな醜い性質のものであつたことが判る。小さな文字ばかりをほじくり深く一人の作家とその偉大さを解せぬ獨眼龍式なのは決して批評家ではない、一人の作家とその偉大性を諒解してこそ其の弱點も發見出来る。形向上學式の攻撃やつまらぬ諷刺笑罵等は毫も理解する要はないそれは幼稚な表現や不健全さの表現である。タンクの中から人を罵るのは上述した「非人間」「非藝術的な狗群である、いくら狂吠しようとするものでもない、だが我々はしつかりと立ち、タンクが壊れてからの彼等の鬼面を見よう、疑ひもなく歴史は彼等狗性どもを絞殺するであらう。同時に我々は衷心から古丁君が一層健全な姿態で第二の原野に向ふことを希望する。

私は餘りに多くを書いた。年來多事、病氣のため、私は故郷

の文壇に多くを書き送れなかつた。だが、私の生活は文藝に結びつけられてゐる、それ故私は自分で不斷に書く外、やはり我々の文壇の動向に関心をもち凝視してゐる。一友から私の生活は故郷から餘りに離れてゐると言つて來た、だが私はそうは思はぬ。私は實踐を「純理論」から切り離したことはない、また學校生活を送つてゐるのではない、これは友人達に理解して貰ひたい、そして指導ありたいのである。

(大内 隆雄 譯)







滿洲郷土色研究會から「苦力素描」といふ考現學的研究が、パンフレットにして發行され、パンブタオ集團は努めて滿人下層民に取材した繪畫展を開催した。苦力を人間として見たところに「苦力素描」の意義はあり、滿人下層民が繪畫の對象となる點に、畫家たちの良き意圖を知つた。

今僕は、作家としての抱負を述べる代りに、秋原氏の一文を動機として、滿人を主題にした小説をなせ書くかといふ問題に就て愚考してみよう。

この問題に最も正確に答へ得るものは先づ作品である。それをかゝる感想の形式で述べなければならぬといふのは第一の敗北である。しかし良き作品を書きたい意欲を持つてゐても貧しい作品しかないからは、抱負には償しなないが斷片的な感想を書くより仕方がない。

我々が他人からバカと突然怒鳴りつけられてもそれに對して、靜かに詰問することも亦時には高飛車に反抗的にもなれやう。しかし被害者が我々の周囲の滿人諸君であるときはどうであらうか？ 假に彼に言ひ分あるとしても暗い沈黙を守つてしまふ場合が多い。内心はどうあらうと、表面的に反抗したり、理窟を主張することは少い。彼らが知識の分子であれば、一層その「暗い沈黙」は根深い禍因を形造つてゆく。

これらが、もつと様々な姿で、個人間、個人團體間、團體對團體の態様の上に複雑な姿になつて現はれてくる。滿人を小説

に書くといふにはそれらに於ける心理究明の興味も大きい、根はやはり正義感に出發してゐるやうである。

滿人を書くことは、單に異民族としての彼らをエキゾチックな興味から書くのではない。その意味からだけでは決して優れた作品は生れないであらう。彼らを物語るのではなく、彼らの内に自己を見出すことに依つて、その裏うちによつて魂の籠つた魂のある作品となる。

感情の相剋ばかりでなく、利害の衝突、これも亦民族的對立の上には避けられない。文學の徒が、理非曲直の正義派であるからは、人種を異にしようと正義に組み込まなければならない。

さて、今日まで滿人ものとして、どんな作品が書かれてゐたであらうか。

先づ佳作として鈴木啓佐吉氏の「正義順附近」(新天地所載)を挙げたい。義順所の一使用人の二日間ほどの生活描寫なのであるが、接觸する對日本人感情が辛辣で、正義順といふ雜貨店を中心にした描寫など面白く讀めた。しかし同氏の「沙・九號」(鷄舍番季の日記)などと共通に感じられる心配は、無稽な風俗小説に墮ちる危険性だ。前號の「泥家」は旦那は因業で淫蕩的であり、後家は男に騙され、といつた所謂型を踏みすきてゐるので感心出来なかつた。

北村謙次郎氏の「回想梵太郎山一景」(作品所載)は、果樹園の老馬丁とその美貌の娘が描かれ、園主に娘が犯され、老馬

丁は氣を狂はして山東に歸るといふ挿話を回想的な美しい文章で書いたのだが、伏字が多すぎたので効果半減であつた。同じ作者の「花葩」(新天地所載)は、主人公の滿人名を、その儘日本人名に置きかへても構はない、滿人であることの必然性を強く感じさせぬ作品で滿人ものとはいへぬだらう。

牛島春子氏の「苦力」(滿洲行政所載)は一名、苦力控筆法とでも言ひたいもので、かういふ易々とした温情的なものは讀むのがクセグツタイばかりであつた。

滿人を主題にした小説を書くことは、滿洲文學(英吉利文學)獨逸文學と同じ意味から滿洲文學とはいへないと云ふ議論が、「滿蒙評論」十二月號の座談會で言はれてゐるが、その萌芽期にあるものとして我々の文學を滿洲文學と呼んで構はぬと考へる)の上から言つて一層その特異性を發揮することゝいへよう。日本人自體のことも滿足に描きこなせない癖に、他民族に取材するなど心臓の強弱を問はれたりもするが日本人のこととなら幾らも書く人、書ける人はある。この土地に住むからには、我々よりも前から居住し、接觸する民族に於て關心を示し進んでその分野をも開拓したいといふ譯である。

秋原氏に依つて、僕の滿人もの、の弱さが指摘された。僕自身の弱さが滿人の社會的立場に於ける弱者に、何か他人でない共通するものを感じ、弱い立場の彼らを描いたのであつて、その中の一人、二人の強者については、いつか小説に書くときもあ

らうが、より切實に書きたいのが共通的な弱者としての立場にある彼らを書くことにあつた。秋原氏の言ふ處が僕の描寫力の弱さを意味するのであつたら、これはまた別個の問題である。

次に、滿人引いては支那人の民族的性格の特異性、その興味も僕らには魅力であつた。心理の我々とは異つた展開、觀念の相違、特異な性格その何れも僕は十分に促へ得たわけではなく、だがそれは彼らに生れ代らずともある程度まで外観的に追求出来得よう。

また誰でも初めて來滿したとき、一應興味を感じるがこちらの生活に慣れると、忘れてしまつたり、麻痺してしまふ、風俗や習慣の相違からくる民族的な面白さ、彼らの部落、その日々の生活様相に對する興味。一方これらは、いづれも我々を彼らの生活、人間性に近づけしめぬ障礙ともなつてゐるもので、この垣を越えたとき案外身近かに親愛な眼で彼らを眺めることが出来やう。言ふまでもなく、文學を功利的にのみ解釋しようとは思はぬが、その功利的な副作用は否定しまい。

それでは、體滿人の内の、如何なる階級に屬する人達を對象として再かうとするのか。平々凡々なる庶民の群である。戰爭があらうと、内亂があらうと、匪賊が横行しやうと、旱害水害、虫害に罹びやかされやうと、國家が變らうと、物價が奔騰しやうと、小さい蝸牛のやうな一家の生活を黙々と守り、いつの世も多く恵まれるといふことをしらないし、途絶へるといふ

こともない庶民の生活にこそ親愛なものを感じ、書きまくりたい無限の魅力もある。

彼らの口に出して言ひ得ざることを代辯し、(といふことは、良き意圖のもとに發するもののみに限ること勿論である)彼らの眞實の生活面を描寫し、若し爲政者をして何らか反省し、參考の資ともなれば、これも亦一面の利であらう。

いつの日か、彼ら自身筆をとるの日も來よう。現在の我々の努力は、その日のための捨石ともなればそれで本望である。現に朝鮮では、既に朝鮮人自身が雑誌に、新聞に小説を書き評論を書き、純文學、通俗物の双方に涉つて相當の業績が、單行本として刊行されてゐる。雑誌「文學案内」の今春の號に、朝鮮人作家の小説特輯が載つてゐたが、いづれも内容的にいづれも相當の水準に達してゐた。内地人に對する感情の表現などにも生々しい描寫があつたが、それを書く自由があり、また書く能力を有し、發表も出来る處に拘擲力の大きさを思ふことが出来るのだ。僕は嘗て次の如く書いた。

「滿洲文學の内、他民族に對する日本人側の指導といふのは、必ず指導であつて、建國精神に則した美談佳話の發生のみを望む如き善導的感嘆は避けたい。文教部の建國精神宣揚文學の懸賞募集もいゝが、國民の實生活を通じての文學をこそ一層希望する。その懸賞募集をする度量はないか。國民の階の善きものは採り、不正なるものは捨てたらいゝ。民意の條まさらむこ

とこそ願つてやまぬ。殊に今日、滿人の間に物いへば唇寒きの感を與へてゐないだらうか。物を書くことに自由であり、その十分なる機關も與へられてゐるであらうか」

主として新京邊りに發してゐる小説の「ジャンル」に、建國精神を明徴した五族協和、王道樂土の理想を具體化した作品、及びその主張がある。さうしたイデオロギイを眞ツ向から振りかざしたものに良い作品が生れるかどうか、また果して國民の血肉として讀まれるであらうか、甚だ疑問である。かゝる鼻につき易いものは一度手にとられることはあるかもしれないが、再びは讀まれまい。讀まなければ宣傳もクソもない。

僕らの第一に望む小説は、庶民の生活の上にしつかりと根を下したものを、踏みつけられても何ら音を發しないものに取材しその立場から、上の方も横の方も、おつくりと眺めてゆきたい。さて實際に滿人小説を書くとなると、困難は十の内の、一から十までである。滿人の商店に這入つたことがあつても、住居には一歩も足を踏み入れたことがない。彼らも亦煩なに家内の日常生活にまで這入されることを恐怖的に嫌ふ。

或る、點の滿人との接觸を中心にし、後は讀んだり、聞いたりの知識に、空想した處をつなぎ合せて一篇の小説を作つたとする。ある程度までの讀者の眼はゴマかすことは出来ても、具眼者には見抜かれてしまふし、第一自分で息きれをした感じがしてならない。ヒントを得た部分だけが生彩を帯びるが、その

外の部分が死んでしまつてゐる。

風物や自然の描寫にしろ、今日までに繪などでは瞥見してゐるが、例へば滿人部落の光景を生々としたスケッチで、眼前に髣髴たらしむる文章があつたらうか。

いつの日であつたか協和の學藝欄に、滿洲を書くなら、先づ支那語から始めよと云ふ小文が出てゐた。一つの眞實をもつた言葉であつたが、聞く人に依つては平凡な感じしか湧くまい。しかしこの提議を放つた人は凡らく自身その必要を痛切に感じたのであらうと考へる。僕にはその意味で忘れられない小文であつた。

支那風俗や、滿洲風俗に關する本をみると、結婚はこんな風にするとか、葬式はその死者、家の格式によつてこんな風に變化があるとか、赤ン坊は山野に捨て、野犬の喰ふに任せるとかそれは某々地方では十歳以下だとか書いてあるが、例へば、「王」なら「王」といふ人の結婚式が、誰某の娘との間に何日どういふ風に行はれたかといふ、或る一事實に對する忠實な記録といふものがない。僕はかういふ意味からいつても滿洲郷土色研究會の「苦力素描」といふ業績を高く評價するもので今後は冠婚葬祭の方にも視野を擴げて欲しいと思ふ。

最後にこれは作品の主題に基調する處多い譯だが、滿人小説には一箇所でもいゝ、刀の抜き身を眼の前に閃めかされたやうな、キラリトしたものが欲しい。枚数が足らず多く説明は再け

ぬが、これは理窟抜きに僕の信するものなので、或は人には通用しないかもしれない。僕の信條からいへば未だ些かなりとも満足し得る滿人小説は一つも現はれてゐない。

——十二月十九日夜——

# 藝術と職業

井上 麟 二

一

文學に限られた一部の人の達のものでないことは今更事新しく云ふまでもないことで、文筆を以て生活の資を得る文士も、別に生計の道を持ちその餘暇を割いて文筆に親む人も、もつと個體に見れば單にこれを鑑賞批判するのみの人も、寧ろ文學人と謂ひ得るのである。

それに間違ひはないのであるが、然しかう廣義に解釋して行くと、文學人と非文學人との限界が極めて不明瞭で殆ど區別し難い様なことになつてくる。腰折れ和歌一首を徒然に作る人や月並俳句に頭を捻る人達まで文學人と云ふのもおかしいし、しかもそれら低度の歌人、俳人も全然文學書を讀みもしなければ作りもしない人々から見れば文學をやつてゐることにならないでもないと云へもする。

文學の領域を單にさういつた表面的な見方で決めようとするのが間違ひなのだ、文學作品といふ以上須らく内容の純粋度に

依つて定むべきだ、といふ人がある。尤もな言分である。然し純粋性とは云ふまでもなく主觀的には作家個々の創作態度の謂である。もしさうした儼然とした觀點から批判するならば、日本内地のことはしばらく措き、最近頓に興隆したと傳へられる滿洲文學界に就て之れを見ても、不遜の言で洵に申譯ないがさうした純粋性ある作家は指を折つて數へるほどしかないと言言できる。否、私が馬鹿丁寧に斷言するまでもなく、自分は文學人であると（この文學人は所謂文壇人ではない）思ふ人自身が胸に手を當て、考へて見れば一番早判りすることであらう。

同頭から變に突つかゝるやうな云ひ方になつて相濟まないが、文學人或は文學作品といふものを、無暗に狹義に決定づけては、さうサラにみつかるものではない、と云ふことが言つて見たかつたのである。と同時に又それが、これから私の考へて見ようとする「アマチユアの文學」つまり文學に依つて日を測してゐない人々の文學に就て相當重要な事でもあるのである。

斷るまでもないことだが、さう云つたからとてアマチユア文學の中に腰折短歌や月並俳句をも加へようと云ふのでは勿論ない。趣味に遊ぶのは文學ではない、それは藝とも行づくべきだらうか。だからそんな作家が居たとして稀に佳吟をなしたところか、それは決して文學作品ではなく、職人の作つた工藝品たるに過ぎないのである。

文學の純粹性については常に耳に聒聒が出来るほど聞かされるが眞の意味における純粹さなど決して輕々に口にさせるべきものでなく、少し巧利的な言分であるが、そんなことをうつつかり口にするとは自縛自縛に陥つて了ふことを先づ私は自ら戒めねばならぬと思ふのである。

## (一)

滿洲で文學をやつてゐる人の殆どが、別に生活の資を得る仕事を持つ人であることは遍く知られてゐる通りである。そしてそれ等の人々や、それ等の人々の書いた作品を掲載するジャーナリスト達は「滿洲の文學は近來非常に興隆した、何日までも内地文壇の發達を厭めてゐる要はない、滿洲の文學は滿洲在住文學家の力であらう建つべきである。」と豪語されてゐる。その意氣や壯といふべく、又理想としてはかくあるべき筈である。

しかし現實が果してその當事者達の自讃と一致するだらうか。毎月數において二十篇以上、作家において十餘名に達する小説の一篇でも再讀三讀して内容を吟味批判する熱意の持たれる作品に私は不幸にして一度も出會はない。それは其のポリュームによるものではなく、精神的ポリュームの貧困によるものと言へる。

日本内地の文壇が徒らに職人的末梢技術に專念して聊かも人類的民族的思想の發展なきを嘆いたのは主として今日地方に散

在する文學人だつたのである。

その云ふところは正しかつた。彼等文壇の作家達の無氣力、無思想なのは不勉強の結果であるとも云つた。正にその通りであつた。かうした不満のアトモスフィアの中に生れた地方作家所謂職業作家ならざる作家は充分に前鞭を踏まないだけの覺悟と教養がなければならぬ筈である。地方文學はさうした教養と精神ある作家によつて初めて存在の意義があるのである。若しさうでなかつたら、明治の末葉から大正年代にかけての田舎文學青年グループと結果において何の異なるところもないといはなければならぬ。

文學の中央集權的空氣が破壊せられるのは地方における文學人の文學的内容の向上に俟つ外ないことは前述した通りで、それにはアマチュア文學人の勃興がなければならぬ。しかも現状から見ればそれは如何なる角度から觀察しても全然セツに等しい。勿論例外はある。例へば石坂洋次郎氏の出現の如きはそれである。しかもそれすら、三田文學と云ふ中央の發表機關を持つてゐたと云ふ特殊な利益をもつてゐた。何故だらうか。

理論はとも角やつぱり文學は専門にやらなければ駄目なのだらうか。

文學的教養は充分に持ちながらアマチュア文學人のこの無氣力には種々の原因もあるだらうが、その主なるものとして次の諸點を私は指摘する。



第一に取上げられるべきは文學理論乃至文學批判の不足であらう。同じく眷附であつた古典の研究は最近渡部榮氏の出現によつて次々と發表され稍殷盛に赴きつゝあるは欣ぶべき現象であるが、新文學の動向に視野を開くべき理論は殆ど爲されてゐない。

同人誌は素より綜合雜誌、又は新聞學藝欄などのうちには、舊しむところなく紙面を割いて斯る理論の發表を待つてゐる良心的なものもあるのだから、決して發表機關が無い譯ではない或綜合雜誌の編輯者などは勉勵にも、この隠れたる文學者を探し求めるのに全力をそゝいでゐるかの如くにさへ思へるほどである。

然るに日々の新聞學藝欄、月の雜誌に發表される作品批評なるものを讀んで見ても、その多くは有つても無くてもいいやうな義理一遍の紹介であつたり、前後左右に氣を兼ねて當らず障らずの總花的批評であつたりして、何のために貴重な紙面を費したのか評者の公正を疑ふ外ないものばかりである。(勿論、中には一篇二篇肯綮に値する物が無いとはいはない。)

かゝる批判らしきものが百萬篇あつたからとて、滿洲文學の發展の爲に何の役に立つものでないことは誰でも認めるだらう、提唱のないところに進歩はない。文學に對する一つの提唱があり、それを繞つて公正な是非の批判闘争があり、闘争が終れば驟然として、よき發展の爲めに手を携へて前進する——と

云ふのでなければ滿洲文學の眞の興隆は絶對にあり得ない。この私の願望は、木に縁つて魚をもとめる迂愚であらうか。

### (三)

前述の如く既に拙い文學理論でさへあるに、それに輪をかけていけないことは、稀に提唱される問題に對して、無關心なのか無定見なのか一つの批判さへ現れないことである。良かれ悪かれ意見を提唱することは、動もすれば沈滞に落ちようとする空氣に一脈の新鮮さを注入する効果はある。これに對して可否正誤を加へれば一段と活氣を増し、うっかりしてはゐられないぞと云ふ刺戟を興へる。くだらない主張であれば、一撃のもとに叩きのめされようし、卓説であれば、たとひ反響が響ひかゝつても齒が立つものではない。論理でさうした一騎打ちが演じられれば、ものを云はない顧客も、思はず身を入れてそれ／＼の頭に是非の判斷が生れて来る。たゞ、それだけでも討論の効果はあるのである。況んや提唱された理論が卓抜なる創見で、もあれば、それによつて啓發され、新たな力を得る効果は詭舌に盡せぬものがあるだらう。

同人誌「鵠」の第十九號に西原茂氏は「第一期超現實主義」と題し、詩精神として古典呪文精神を提唱した。詩作の上において甚だ舌咬に富む好エッセイであつたが、その反響は皆無であつた。好エッセイではあつたが、今滿洲において詩を發表してゐる人々の大多數にとつては、一言も二言もなかるべからざ



る、可成りに獨斷的な創見を押し立てゝゐるものであつた。

一例を擧げるならば「呪文を以て原始文學の一つのジャンルと認めるのだ」まではいゝとして、「所謂原始文學に於ける詩、歌はれたこと、乃至は韻律的であることを以つて銘うたれるところの詩（抒情詩・敘事詩）なるものは、實はむしろ散文學にしか過ぎない。呪文こそがその自然發生的ならざること否まされたる即ち超現實的なること」によつて、これのみが唯一の「眞の古代詩であり得た」と斷定し「詩は、沈黙による恍惚であつてもならぬし（中略）決然純粋詩に訣別を告げねばならぬ」と超現實主義以外の詩作品を否定してゐる（傍點并上）

この提唱に對しては多くの詩人群から當然反駁が加へられることゝ私に期待してゐた。滿洲には超現實主義を詩精神とする詩人は極めて僅少である。シュル・レアリズムを精神としなす詩人からして見れば西原氏のこの主張は一種の冒瀆とさへ見られないこともない強い主張で、當然排撃さるべき性質のものである。それがなされないのは勇氣の默殺主義か、不勉強か、いづれにしてもアマチュア文學人の弱さを暴露したものと見てもよいであらう（茲で私の指した滿洲詩人の中には勿論「鵠」の同人諸君も入つてゐる、私自身も入つてゐる）

これはたゞ一例に過ぎない、注意して拾ひ上げたらまだ外にも斯る例は一つや二つではないであらう。

この眞理に對する熱意のなさは常に不勉強ばかりではなく不眞面目でさへあると云へる。理論發表の目的も意志もなく偶々あつても何の反響もなく共鳴なく全くの自然發生的に文筆を弄んでゐるのでは職人的文筆業者にも劣るべく、知識層の讀者が従つて來よう筈がない。

（理論はいらぬ、いゝ作品を作ればいゝのだ）……そんな不合理な主張の通る時代は既に過ぎ去つてゐる。滿洲における眞の滿洲文學の興隆は、第一に在滿アマチュア文學人の理論闘争を俟たねばならないと思ふがどうだらう。

#### （四）

次に指摘されるのはアマチュア文學人の外的條件の不利である。これは滿洲に限つたことではないかも知れないが、特に滿洲では社會的に指導的立場にある人の文學的教養が低いやうに思はれる。幸にして私のこの不逞の憶測が當らないやうな教養高き人々が多いとすれば滿洲文學界にとつて甚だ喜ばしきことであつて、私は何時でも頭を下げて前言を撤回するを辭さないしかし私の狭い見聞の範圍及びアマチュア文學人である私の今日までの體験上、今はこの暴言を敢て吐かなければならぬことを嘆かしく思ふ。

少し以前のことであるが、私の文學上の知友で滿鐵に職を率じてゐた「君が泌々述懐してゐたこと」がある。

「文學をやつてゐることが幹部の耳に這入ると一生うだつが

上らない。白い眼で睨まれる間は兎も角、あけすけに非難され出したらいやでも物を書くことをやめさせられる」

幾分は常人の強氣弱氣でこれ等上司の嫌がらせに感電する差異はあるだらうが、I君は必ずしも弱氣と云ふ方でなく、通る主張なら相手が假令上司であつても御無理御尤で引下るやうな男ではなく、可成り向ふ意氣も強い方なのに、この述懐をするに云ふことは上司の、否會社自體の文學嫌ひは相當以上根強いものがあると思ねばならぬ。

この傾向は一滿鐵會社のみではない。稀に幹部の一、二が碧派の俳人であつたり、明星派の歌人であつたところが、その部下の若い役人や社員に對して多少の手心を加へる位のこととはあるとしても、決して表向き大いに俳句を作れ、短歌を勉強しろと云はぬであらう。況んや一般の幹部級は「君、佐藤春夫と云ふ詩人がゐるさうだが、土井晩翠とどつちが上なんだ」程度のだから文學に親しまうとする若い人達は、だまつて引退るより術はないだらう。

私はこんなことを書いて、決してそれ等社會上層部の人達を侮辱しようといふのではない。それが社會の實相なのだ。文學といふものは如何に努力して見ても社會大衆には直接（絶對に直接である）何の由縁もないものだといふことを書いたまでである。

私などのやうな、直接誰からも制肘を受けることのない、そ

の點極めてのん氣な立場にゐるものでさへ、猶且つ文學をやつてゐるといふばかりに、時に不快な思ひを、時に職業上不利を忍ばなければならぬのが今日の社會現象なのである。

この間のデリケートな問題に就て菅田順氏がまだ住友の大幹部であつた頃、一つの感想を東京朝日に書いてゐた。昔々から見る時は何も不思議はない當然のことを書いてゐたに過ぎないが、それでもあれだけの文學者で、あれだけの上層社會人が、一自分は文學的教養ある人間は立派な社會人であると信じてゐるから社員採用にも特にその考へを以て臨んで来た」と云つてたことは他の幹部連中にとり確かに頂門の一針だつたと云へる。

乍然、驟つて惟ふに一川田順が如何に文學人を推賞し、重用して呉れようと、それは九牛の一毛にも及ばない。川田氏が十人居ようと百人ゐようと決して社會が文學を受入れた證左にはならないのである。

社會は今日と雖も依然として文學には白い眼を向けてゐる。故に職業人であつて文學をやらうと思ふ人は、豫めそれだけの覺悟をしてかゝらねばならぬ。

#### (五)

かくの如く一般社會は本質的に文學を受入れない。彼奴は文學をやつてゐる、仕事を怠けると思つたら矢張りさうだつた「一どうも折合が悪くて困る、文學をやつてるせいだ」青い顔を

して本ばかり読んで何になるんだ、たまには氣よくつき合つたらどうだ」等、等、全く四面楚歌の聲を聞かされるのが職業をもつ文學人の社會上の立場である。安定の地位まで進んで行つた上ならとも角、これでは若い人は職業を捨てる覺悟をしない以上文學など止すより外に道はあるまい。

かうして文學のための折角の嫩葉は萌え出たばかりで摘み取られて了ふのである。

その男は果して文學をやつてゐるために仕事を怠けるのであるか、他と調子を合はして行かないのはどつちに罪があるのか、つまらない酒を飲み歩くのが社會生活の基本とでもいふのか。

その邊の正邪曲直をもつと公平に、もつと詳細に検討してやるのが上層部の人々の親切ではあるまいか。「よく生意氣な小理窟はいふし、いつも伊原面をしてゐて誰が好かん」といふに至つては沙汰の限りである。

ざつと拾つて見たゞけでもかういふ情勢なのである。しかもこの最悪の條件の中に立たされた若い文學人達の其に對應する態度はどうであらうか。たゞ無氣方で縮こまつてゐるだけならまだしも、正面から反駁する力の不足を掩ふのに意地悪い黙殺をもつて酬ひてゐる。「お前達に何が分るものか、お前達は下ばかり見て歩いてゐればいゝんだ」と云ふ態度で無言の侮辱を加える。先に引證した川田氏の感想の中にも「——俺はお前達

俗物とは譯が違ふ、俺は文學をやつてゐるんだ、といふことを鼻にかけてゐる青年が非常に多いがこれは最も唾棄すべき徒である」云々と云ふ意味があつたが、これは私も認めなければならぬ。自分の持つ才能智識を鼻にかける、かけぬとは一體どう云ふことなのだらう。或人が「彼奴は生意氣だ」と貶すかと思ふと、他の人は「才氣煥發な好青年だ」と激賞する例もないではないが、矢張り十目の見るところ十指の指すところも多くは誰の目にも大體誤りない評價があるやうである。

「二年も部下として机を並べて働かしてゐたが、ちつとも分らなかつた、何處となく謙虚で事務もテキパキと處理し、服装の好みなども時流に超然としたところがあつていゝ若者だなア、と思つてゐたら、それがアラ、ギ派の噴々たる若手敵人だつた」と私は友人から聞かされたことがあつた。

誌上では一步も假賣しない峻烈な理論を吐露する人間が、一步文學の範疇を出れば好個の一社會人となつてゐる。好きと思へば菊石面も囁と云ふから、この友人の論議をそのまま受入れられるわけにはゆくまいが、多少の割引をしたとしてもそんな青年こそアマチュア文學人として推稱さるべきではないか。

眞摯に且つ熱情をもつて勉強しなすれば、小説を書くにしても詩を作るにしても、社會への接觸面が緊密であるだけアマチュアの方が遙かに材料が豊富である筈である。

取上げた一つのテーマに對してその内容を觀察する力も、日

日身を持つて體驗してゐるだけ切實であり深刻である筈だ。この際の技術の未熟など問題にならぬ、要は精神なのだ、精神さへしつかりと確立して居れば、たとへコントの一齣でも人の心を打つ力をもつものである。

藝術は孤獨である、殊に文藝はその感が深い。この孤獨を強く生き抜くには、どうしても強い精神力がなくてはならぬ。認められようが認められまいが、そんなことは意に介せず、こつこつと勉強して行く——そんなことはチョツと、職業作家では企てられぬことである。他に職業を持つ、米鹽の資は本職で得ることの出来るアマチュア作家の強味は其處にある。

#### (六)

滿洲に於けるアマチュア文學が相當俊秀な選手がゐるにも拘らず朝鮮その他各地方のそれに比べて進歩しない理由は右に述べた二點の外にまだ種々あるけれど、與へられた紙数が盡きて了つたのでそれは又後日稿を新にして讀者の叱正を受けることとする。

トーマス・マンが常に備み抜き作品の主題にも多く取扱つてゐる「生活と藝術」「社會人と藝術家」の交錯相剋の思想的構みは我々アマチュア文學人には特に深い關心が持たれる。

社會大衆にとつて文學は如何なる役割を持つか。簡單に考へると所謂大衆作家の抱負(？)みたいなものになつて了ふが、そんなものであつていゝ筈はない。

マンはその傑作「トニオ・クレエゲル」の中で主人公である作家クレエゲルを

「彼は生きんがために働く人のやうには働かなかつた。生きてゐる人間としての自己には何等の價値を置かないで、たゞ創作者としてのみ顧慮せられることを願ふ故に、仕事をすれば以外には何も欲せず、そしてその他の點では、演すべき役のない限り無價値な、素顔に返つた俳優の如く、灰色にひつそりと歩き廻つてゐる人——さういふ人のやうに働いた。黙つて孤立して姿を見せずに働いたのである(中略)——何よりも、先づ、幸福に愛想よく、藝術的に、生きることを心掛ける連中、良き作品は只苦しい生活の壓迫のもとにのみ生れるといふことも、生きてゐる人が働いてゐる人でないといふことも、人は創作者になり切るためには死んで了つてゐなければならぬといふこともまるで知らずにゐる連中——さうした小人輩を心から輕蔑しながら。」(傍點・井上)

文學が高度に進展して行けば行く程社會からは離脱して行く——これは文學の本質だ。トルストイも小説の大衆化には甚を投げたし、ドストイェフスキーは最初から日安に置かなかつた。斯くの如く高度の作家達は大衆から離れて高い處を一人／＼で歩いて來た。しかも文學は、否すべての藝術は大衆に繋がりを持たなければ寸時も存在の價値なきものとなつて了ふ——こ

の矛盾、この撞着を處理して行くところに文學理論が起つて來る。吾々アマチュア文學人の力を致さなければならぬのは其點ではないだらうか。

取るに足らない文學的才能を頼りに、何等の理論的根據もなく、全くの自然發生的に小説を、詩を書いて得々としてゐるやうな人が若しありとすれば（枯木も山の賑ひと云ふ諺は俗世間には兎も角、藝術の世界には絶對受入れざる痴言である。）即刻ペンを捨つべきである。そして沈思黙考、あらゆる方法で教養を積み、然る後始めて再出發すべきである。

總莫、文學は直接社會大衆には何等の交渉を持たぬことを私は言つた。しかし、高度の文學が擇ばれた知識層に吸收され攝取されて行くことは、雖て知識層を培養素として擴大され間接に社會大衆に流れ込みその精神生活の糧となることも疑ひない。

この徑路を辿つて哲學は安心立命の宗教を改革した。

精神を必要としない人々を一人でも少くすることが文學の使命の一つたる社會浸潤の道であらう。そして其處にアマチュア文學人の大きな道が拓けてゐる。

(終)

# 國策文學論

上野 凌 嶠

## 一、今世紀の課題に答へて

日本評論(二月號)の思想統制並に文學と國民思想の課題に對し多くの人がこの時局だから止むを得なからう、といふ悲鳴的な答へをしてゐるのを見て甚だしい不滿に堪へなかつた。直接、日支事變の動員に動かされて、漸く惰眠から覺めようとする日本思想家の他力性に寧ろ燃然とさせられた我々である。事變は今に始まつたのではなくて一九三一年から既に繼續してゐるに過ぎないのであつて、現に滿洲や北支の大陸に渡つてゐる日本民族は、今日の雑誌新聞界の強力なる思想動員を幾年も前から望んでゐるのである。

何故なれば、直接今世紀の命題を負ひながら大陸に渡つて、五族民族の指導的存在としての宣撫工作は勿論のこと、政治經濟その他一般の文化工作に従事しながら、あまりにも漠然たる日本精神のみにては據り所がないからである。據り所とは、即ち思想の強力な體系化並に具體化の謂ひである。我々は日本精

神の黎明を感じながらも、尙はその理論的強化を熟望せずにはゐられないのだ。日本内地の勞働街や銀座街を歩しながら未だに歐米の思想や文學を氣にしモダンのあるものへの思慕や増末的なアトモスフヘアーに支配されて、大陸政策とは官僚や軍隊のみでやるものとしか考へてゐなからう多くの人も我々は告げてやりたいのである。

日本人である以上、大陸に移住する一農民の上にも大陸政策の具現性が、暗黙の中に背負されてゐることを考へて見よ。而も亦この命題的大陸移動が、ブラジルやカリフォルニアへの移民と根本的に相違してゐるものであつて、且つ一時的な非常時局性とは異なり、今後の日本民族に課せられた根本的命題であることを考へて見るならば――。

今假りに軍閥の苛政から解放された滿洲民族や、解放されつゝある支那民族の指導原理を、孔子の道に求めるとするも、年を積ねるに従つて此の新興諸民族を説服出来るや否やは甚だしい疑問とせざるを得ないであらう。いや假令説服出来るとしても、もと／＼それは彼等の祖先が生んだ思想である以上、その指導的地位は轉化するのやむなきに至るであらう。私は此の故に云ふ。日本人思想家のあいまいさを斷乎として捨て、以て日本民族根本思想の確立、體系化への欣然參加を要望してやまない。

近頃滿洲に住む文學をするものの中から滿洲精神の探求とい



ふ言葉さへ生れて來ようとしてゐる。

滿洲精神といふあいまいなものが、日本民族の頭に生れてよからうか。滿洲國は立派な獨立國には違ひない。が然し日滿議定書の中にもあるやうに、日滿不可分の關係における國家である。それは往年、英國の範圍から獨立した米國の如き關係では全然ないことを銘記しなければならぬのだ。即ち根本的なものに對する對立的なあいまいさは早急に排撃すると共に何處までも一本である共通で強力な日本精神を根柢に置いてこそ、東洋民族の統合發展への輝かしい將來があることを知らねばならない。

## 二、古代文學の熱情性

私は此の稿を進めるに當つて我が古代の文學を思はずにはゐられない。多くの人々の認めるやうに託紀、萬葉の文學が質實剛健であることは明白な事實であらう。源氏物語の優美さや其の後の文學の諷觀的美に比べて、古代文學の質實剛健的な素朴な熱情は、古代日本民族といつはりなき共同的目的の生活の表現であつたことを知るのである。

神代から神武天皇までに至るいやその後の漢の文物渡來に至るまでの純日本的な創造的世界觀は、萬葉人の歌の一つ／＼にも窺はれて如何に日本建設の明るい希望と勞働が渾然と描き出されてゐるかを直感する。八紘一宇の偉大なる創造意慾に燃え

て、神代から大化の新政の頃まで、日本民族の本據を經營するに營々たりし古代人の意氣と熱情は、記紀萬葉を繕く毎に大陸經營に従事する我々の胸に日輪のそのやうに輝くのである。

近世の國學者本居宣長にしても、武政封建の、しかも漢文を以つて官學となす徳川時代に住んでゐなかつたら、君臣一如の一大民族社會の顯現を感得し得ずに、*ものゝあはれ*の説を淺す程度に過ぎなかつたらうと、私は思ふ。それ程古代文學の熱情は全體的であり、高かつた。その後の日本文學に流れる個人趣味的性質に比較して。さうしてその後の日本文學は日本建設經營の一段落と共に、人々はより個人的に向つて行つた證左でもあつた。時に國難に應じた過去の全體的動員は、既に潜在性のもとなり來つたものゝ顯現であつて、それは文學となり得るには時間的に短いためあまりに深く遠かつたのだと私は思ふ。何故なれば過去の日本民族には、元寇の役後、明治維新を除けば日清、日露の二大戦役に際して民族の一大結成を見たのは事實であるが、それも僅かに二箇年の月日も要しなかつた程短い間であつたから、自ら日本人一人々々にまで民族的要求にもどづく思想や文學は生れて來なかつたのだ。幕末王政復古の叫ばれるや社會は倉然として聲の元に集まり、勤王志士の日常生活は民族的要求に基づく多くの文學を生み熱情性も燃なるものであつたが、明治新政の成ると共にあまりにも吸収に急がねばならなかつた日本は、自由主義的に且つ歐米追從的に進み、

さては日本古來なものを全然侮蔑輕視し、更にマルクス社會科學の輸入せられるに及んでは、國民教育の最高機關である官立大學の教授まで、これに心酔し、多くの大學生をマルクスの研究にまで走らせた。

所謂マルクス社會科學とは全く存立を異にしてゐる日本民族的立場は、根本的に崩壊を餘儀なくしはしないかと思はれる機運を造り、文學に於ては勞資階級闘争を主眼に、明朗な日本人性格に憎惡を植付け、都市文化の破壊は必然的に純美な農村にも地主に對する偏見並びに農民の軋轢を増加せしむるに至つた程、民族の分裂は現になされつゝあつたのだ。日本内地が既にゆらげば事變前の國策機關たる滿洲の生命線にも危機の迫つてゐたことを私は戰慄を以て思ひ浮べる。

ともあれ、事變はコミンテルンの手が延び盡される前に起つたことは何と云ふ幸であつたらう。

事變前には二十五年の開發を通じて僅かに二十萬を出でなかつた全滿の日本人が、事變後六年を経ずして今はその數十倍の増加になん／＼としてゐる。しかも一個人に背負はされてゐる使命は、日本創世の頃とは遙かに大きいと云はねばならない。即ち茲にこそ、今後他民族と永遠に接觸するその偉大な使命的生活の根據として、強力な思想を要求すると共に、記紀萬葉と同様、否、それよりも高き氣魄を有する大民族文學が生れなければならぬ理由が存するのである。蓋し、この要求文學は日

本民族向上の糧ともなり、他民族を指導する根本とならねばならぬが故に――。

### 三、現代生活の文學的國策性

ところで我々現代人の日常生活について考へるならば、非常時局の支配を少しも反映せず暮してゐるものは殆どないと云へよう。

殊に大陸に渡つてゐる者の生活の中では、寸時として國策といふ大きなものゝ力を逃れることは出来ないであらう。それは既に滿洲事變後六箇年を過ぎようとして益々痛感するところのものなのだ。最早それは我々の日常生活の重要な部分となりつゝあると云へる。

それは近時漸く覺醒的方向を取りつゝある政治――日滿一體の上に盛られつゝ重要國策と關聯して過去のマルクスの流行……支配階級に對する憎惡、破壊的批評の立場等々とは、全く相反する自力更生的な營みであつて、その中心への要求、民族共同體的な個人は、我々の生活を通じて生れつゝあるのだ。

此の民族共同體への覺醒は、祖國を離れれば離れる程、さうして民族が膨脹すればするほど強く表れて來て、熱情的な鞏固氣を造り更に強力な生命への飛躍を爲さうとするものであつてそれは原始日本民族の創造的意慾より数十倍いや、それ以上の困難を克服せなければならぬ現世紀の日本民族である。さう



してその故に、我々の生活の中に必然的に國策性を呼び起す所以であつて、國策とはとりもなをさず、我々日本民族の歴史的文化的に成長した理想の現實的顯現に外ならない。

それは八紘一宇の日本古代思想に示されて居る融合性、創造性、發展性を一步も變へるものでなく寧ろこの精神を根底に原理とし成長發達したものであつて、歴史的に外來思想は、同化咀嚼されるものはその枝葉となつて多くの効果を收め得たが、マルクス思想においては根本的に對立をよぎなくされたものと云へよう。蓋し、マルクス主義も世界主義とはいひながら、ユダヤ民族の他の民族國家に對する憎惡打倒的要求より生れたる思想である限りユダヤ民族主義の表れであることは、ヒットラーがあらゆる角度より證明して居る事實であつて、到底世界的にまで發展し行くべき包容性を絕對に所有し得ないことを斷言する。

従つて、かゝる意味においてもコミンテルンと對立的存在としての大體工作は、我々の周圍に切實な問題として生活に存在し、それが指摘高揚されん事を必然的に要望されてゐるのである。それは全く文學的と呼べるものであり而も文學のみが果し得るところのものであつて、茲にこそ日本精神に基いた國策文學の生れなければならぬ理由がある。さうして、この國策文學は、日本民族を更に新しく大きくする精神的基礎となり、ひいては滿洲建國を通じて、壓迫軍閥の手から解放されつゝあ

る滿洲諸民族や、現に解放への現實的段階にある支那民族が、新しく生れかへるべき創造文化の基礎となるものであつて、かゝるが故に日本民族は、此の國策文學の發展には絶大なる援助と育成を必要とするであらう。

#### 四、我が文學の非國策性

さて、現在の我が文學が、この民族的要求に應じ得るものなりや否やは、必ず検討して進むべきであらう。何故なら、歐米文學の影響によつて生れた明治以後の日本文學は、殆どが個人主義的色彩に塗りつぶされてゐるのを見る。ほんの僅か二三の作品を除いて——尾崎藤村氏の「夜明け前」や、長塚節の「土」や、農民文學最近の傾向に——然し、それはほんの條件付きとして承認されるが——。

それ程我々は、現在の文學が民族の意欲とは遙に隔たつて存在してゐることを悲しまざるを得ない。純文學の本據のやうに、個人的な私小説を金科玉條のやうにして來た近來の日本文學を分析すれば、多くが身邊雜記であり、而もエロチシズムにもとづくマスターベーション的存在と云はざるを得ない。唯讀むことそれ自身が倦怠を催させるか、それだけの故に引きつり込まれて行くのみであつて、讀後の淨化、餘蘊として魂への生計となり得るものが誰の文學の上に存在したらうか、階級社會的に無階級の爲であるといふプロレタリア文學は如何。そこに

は金銭的俗態的に人間を惡意の世界に引き込む以外に何の役目  
を果し得たといふのだ。最早そこには生産に對する歡喜、勞働  
に對する人間の必然的要求性等の靈肉の統合體たる人間を、肉  
の世界にのみ追ひやる反逆の外の何物でもなかつたのだ、通俗  
小説の世界においては更に甚だしい。儼奇の世紀末的興味への  
追求は、人間としての世界的發展性を體具せる日本民族的なも  
のを徹底的に破壊する役目を果すに過ぎなかつたではないか。

即ちこれ等の文學と稱するものは、總て個人主義的利己的な  
歐米文學の羸靡の下に存在し、何處迄も歐米化するのを唯一の  
理想とする潜在性に基因せるものであつて東洋民族中の指導的  
存在である我々日本民族の眞に人間的且つそれ故に國策性を持  
つ民族共同體への反逆、つまりこれを侮蔑せずには文學といふ  
ものになり得なかつたと思惟する誤れる士豪の上に存在してゐ  
たが爲であらう。これが今までの文學者と自稱する者であつ  
た。

それが故に現在程文學が、一般大衆から輕視されたことを私  
は知らない。それ故にこそ現在程速く文學と大衆が離れた時代  
はなかつたらう。大衆にとつて、殊に國策性の中に生きる男に  
とつては、汽車の走る時間の暇潰しに、講談やキングの通俗小  
説にほんのざつと筋を追ふに過ぎないのでつて、純文學などに  
は目を通したくもないのであらう。ところで、その讀んだこと  
によつて重要な國策性への倦怠を感じ、その生活意欲への低下

を來し、人間の墮落へと導くものであつたのだ。然らば、それ  
でもかゝる文學を續けてよからうか、決して否である。

我々は飽くまでも國策性の成長發展への翼賛者として、生活  
の文學的國策性を指摘高揚して、以て眞の民族動向への現實的  
道を示し明日への歡喜に湧く文學を生ますには居られやうか。  
茲に我々の據點があり、偉大なる日本民族的要求が存在する。

## 五、國策文學の本質

然らば國策文學の本質とは何ぞや、といふ根本的な解明であ  
るがその第一をなすものは、民族的世界觀の上に立脚してゐる  
といふことである。

我が民族世界觀の内容は八紘一宇の思想を根本とするもので  
あらう。創成發展の民族社會は唯心、又は唯物的の一方的、一  
元的に片密る所のものではなくて、形而上的なものと共に物質  
的なものを融合し兼備し以て常に創造を行ふもので、實にそこ  
には人間生活の完全なる理想への道があり、それ故に又普遍的  
な發展性を持つものである。従つて階級的黨派的な世界觀や、  
かゝる立場に立つ社會科學には絶対に對立する所のものであ  
り、民族的全體性に根ざした科學も當然參與して以て正道な發  
展を遂げなくてはならないであらう。

又民族的世界觀を動かして行くものは何か。それは没我的歡  
喜であり、没我的經營への勞働である。それ故に全體性を持ち、

創造性、建設性を持つのである。萬葉の柿本の人麿の詩に見る宮殿經營の民族的勞働への歡喜が、唯に原始的日本民族に見る傾向として黙殺し得られようか。現に我々は更に大いなる民族的要求に基づいて大陸經營のために一層強固なる民族共同體的歡喜の中に居るのだ。それは決して他民族を征服壓迫するのではなく、八紘一宇の理想社會に生き返らせて以て東洋民族社會の興隆創造の翼賛にあたるのだ。

國策文學は、かやうに民族世界觀の上に立脚してゐるのであつてその第二は民族世界觀に基いて現實を批判し、止揚して以て描かれねばならないであらう。何故ならば國策的要求に基いて生活してゐる日本民族は、現實生活の批判より生れるものが常に魂の淨化となり、生命の躍動となり、更に明日への進路となるものを常に要求してゐるが爲である。

従つて國策文學は文學的形式よりも、その主題に何が如何に取扱はれてゐるかと言ふ内容に最も高い評價を置くものである。例へば大陸移民は民族國策の上に生れた重要なものの一つであるが、是れは單なる政治工作として等閑に附して置かれようか。大陸の土に住み付かうとする永遠なる民族的要求は、土をかへることの悶え、氣候風土との闘争、他民族との接觸に對する調和への苦悶、さうして又、更に大陸の上により強度な日本精神の發展を期する等、既に民族共同體たる個人の肉體的苦悶でなければならぬであらう。そこに國策文學は重要な主題

を持つ。さうして又、かゝる見地に立つ國策文學は、實に多くの主體を到る所に發見するのであらう。

それは又、主體を取扱ふのに決して古く枯渴したもの復活であつては駄目であつて、眞に生成して行く生きた新しい取扱ひがなされねばならない。民族と歴史と自然の上に成長發達した日本精神を母體とし、最善、即眞理の民族的思索の萌で、永い間等閑に附された多くの主題が、今日程早急に且つ文學として解決されなければならない時代はまだまだかつてなかつた。

第三には國策文學は防共的理念の上になされなければならぬであらう。何故なら我が民族世界觀は根本的にコミンテルンと對立するがためである。コミンテルンは民族的文化を徹底的に破壊して、以て彼等の意圖する世界的と稱する所の——實はユダヤ民族の復讐思想の體系化でしかない所のものを強ひ、以て世界をユダヤ化せしめんとする外の何者でもなかつたことは、現實に世界が證明しつゝある。而も我々は、その國境を近くして東洋諸民族に接するとき、この重要な問題を單なる表面的な政治工作に委ねて置いてはならない。滿洲や北支や中南支が、我々の切實な生命線として存在する以上、無智盲目な農民や商民を、自然に委ねて置くことは絕對に不可である。

即ち彼等の防共態度を作るための組織化、教化は彼等の肉體的精神的にまで及ぼさねばならないであらう。これは實に文學のみが、而も國策文學のみが成し得る所のものである。茲にお

いても八紘一宇の我民族世界観は、歴史と共に彼等の思想を消化再生して更に彼等東洋民族を眞に生かしめる所のものを包容してゐるが故である。

最後に持つ本質は明朗性であらう。

文學が悲劇的虚無的でなければ價值がないやうに思はれて来たのは個人主義的利己的に文學を見て来た過去の所産であつたのだ。敗戦國においてのみ戦争文學の偉大さがあると思はれるのは萬だしい誤認といはねばならない。過去に持つ日本文學の戦争物語が世界的價值を引かなかつたのは文學者の態度の非藝術的、且つ非國策的であつたが爲である。

戦争であらうと何であらうと、それは永遠な國策遂行のためには明るい彼岸を見つめての進行であり生活である。如何なる苦難をも突き進んで行く熱情の所有者たる民族共同體に暗い絶望が存在してよからうか。そこに我々は文學としての明るさ、朗かさを要求せずにはゐられない。

以上述べた本質の箇條に對し、是れが果して文學に成り得るのかと懐疑的に見る人があるかも知れない。然し、それは把握である。何故ならば、我々の實際生活は忠實なる目を向けると最早現實的要求が我々の周圍を取り巻いて、一日も早く生活の伴侶としての國策文學が生れ出ることを持ち受けてゐるのに氣付かれるだらう。さうして過去の文學が女性的な存在價值を持

つてゐたのに對し、今日我々は男性の生活意欲となり得るものへ突入し創造しようとの欲望に燃えてゐることを感ずるであらう。

## 六、滿洲文話會の使命

私は昨年九月、本紙上に「滿洲文化の文學的基礎」を發表して茲に半歳、思案の蹟を諸氏の前に展開し得たことを光榮とする。蓋し日本人である以上同一の目的に向つて進みつゝあるとは時局の示してくれる所であるからである。

然しながら文學のみが舊態以前として前世紀の流れを歩む必要はさら／＼ない。動員將兵と同じ没我的、國家的に文學する我々も立ち上らなければならぬ。何故なら如何に戦争が終らうとも、今後の文學はどうしても、舊態を保つことは不可能だからである。戦争が終ると共に我々は更に一步進んで思想並びに文學の戦線を押し進めなければならないからである。

第一大陸に渡つてゐる若い日本人の生活を注視するならば、如何に彼等が生きる伴侶となるべき思想や國策性に訴ふる文學を欲してゐるかに思ひをいたされるであらう。即ち今や新日本の誕生と共に文學の一大革命期に直面してゐることに氣付くのである。

新日本の誕生とは一九三一年の滿洲事變に端を發して滿洲帝

國の建國を通じ東亞大陸に、日本の大理想たる苛酷なる軍閥並にコミンテルンドに置かれつゝありし東洋諸民族の解放且、それに伴ふ新秩序の第一頁に著手した時より初まる。その實踐としての指導民族の一人たる我々は、日本居留民としての位置にありてとかくにぶり勝た城壁でありし治外法權が撤廢され、日本臣民であると同時に滿洲國民たるの二重性の資格に於て、諸民族の只中に飛び込むことを得、茲に思ふ存分の實踐が我々の前に飛躍しつゝある。然し此の二重性の資格とは二重の負擔であり、日本と東亞大陸を連接し、且是れを生命共同體に迄高めしめる契であり、犠牲でありさうしてそれは大陸移住者の特殊性の最大なる所のものである。

最近我々の求めて來れる滿洲文學なる名稱も、一に、此の雄大な要求の中にある鬱悶氣の表現に外ならない。そうして此の表現こそは、二重性の犠牲に於て文學する者に依つてのみ遂行せらるべきものであり、滿洲文話會の重要なる使命も亦實に此の點に暗黙の據點を持つものであると憶ふ。ともあれ、大陸の現状は北支南支に迄發展せんとしつゝある際、滿洲の中に生れつゝある幾多の國策の前に今世紀に於て初めて、文學の本質たる即生活の沒我的全體的文學が我々の手に依つて先鞭を著け、更に深い熱情へと導くものへの創造へ努力せなければならぬ。重大なる責任の中にあることを知らねばならない。

# 滿洲文學雜考

古川哲次郎

## 滿洲文學論に就て

昨年、最も華かであつた「滿洲文學論」又は「植民地文學論」は今年に入つてから、忽然と消え去つたかのやうに姿を見せなくなつた。このテーマに就て滿洲文壇の人々は種々様々な意見と感想とを發表し且つ又それら個々の意見を綜合的にまとめた。然るにそれらは單なる待望論に終り、尻切れトンボのやうにまとまりもなく泡沫のやうに消えてしまつた。斯くて滿洲文學論は華かな論壇の寵兒として登場したけれども、美貌を帯つて映畫スターとなつた女優のやうに時の流によつて何もかも残さなく人々から忘れ去られやうとしてゐる。種々なる論者の中には立派な意見を吐いた人も二三には止まらなかつたが滿洲文學理論のピラミットは建設されなかつた。或はこの文學論活動は單なる泡沫ではなく、將來一つの捨石としての役割を果たすことがあるかも知れないが、少くとも、現在の私の意見では泡沫となつて消え去り滿洲における文學活動にはこれといつた

寄與をしなかつたと思ふ。

然らば何故に滿洲文學論は線香花火式に終つたのであらうか。滿洲文學論を體系的に理論的に樹立し得る理論家が居なかつたからであると説明しざるには餘りにも簡單に過ぎるであらう。文學理論は實際の文學活動があつてそれを後から理論づける場合もあるが、その時代の動向を鋭敏に明察して實際の文學活動を指導し、明日への文學へ進むべき道を開拓することもある。今日この土地で要望されてゐる滿洲文學理論としての後者の役割でなければならぬ文學作品こそ文學の主體であり社會的役割といふ立場から見れば理論も評論も個々の優秀なる作品を生み出す一つの土壌であらねばならない。

(私はここで今更作品と理論との相互關係を述べるつもりではない)

滿洲での文學理論なり評論なりは殆ど貧弱な状態にある。作品を育的にも、量的にも秀れたそうして豊富なものとなすといつた一定の目的に集中されなければならぬと思ふ。それには個々の作品を批評することも必要であり指導理論の確立を計るための理論的展開も必要である。また文學運動を活潑にしその運動を客觀的に批判することも等しく作品の質量における向上を計る目的の爲めに必要である。このことはなにも評論なり理論なりが作品に媚るといふ意味では斷じてない。

滿洲の文學理論は右の如き役割を持つて居るにも拘らずそれ



自體の貧弱さによつて、自分自身のことだけに捕はれてゐる。滿洲文學論（又は植民地文學論）が線香花火式に終つたといふ現象も滿洲文學理論の貧困を立證する以外になにもものもない。理論の貧困は滿洲の社會諸事情によるのではあるが私は主たる原因として一、文學評論家又は理論家の不勉強、二、文學に對する火のやうな情熱の缺如にあるとして、多くの人々に呼びかけたい。

#### 文學運動に就て

滿洲における文學運動といつても、私の指すのは在滿日本人間における文學運動といふ意味である。最近文學運動が非常に狂んになつたといふことは事實である。そしてそれが昔に比して異つてゐることは色々な具體的運動が堅實になつたといふことである。嘗て私が知つてゐる滿洲事變前の文學運動は主として大連を中心としてなされたものであつたが文學青年の火遊びといつた感があつた。そしてその運動は生活の中に根を置かず多分に浮動性を持つてゐた。だから表面的には非常に華やかであつた。三號の同人雜誌が盛んに出沒してゐた。幾多の類似した文學團體が生れては死んで行つた。

滿洲事變後當分の間文學運動は鳴を潜めてゐた。滿洲における日本人の生活が政治、經濟の激動にあつて文化運動どころではなかつたからである。滿洲國が立派に成長し治安が回復し人

民が安心して自己の仕事にいそむやうになつた昭和十年ごろからぼつ／＼文學の聲を聞くやうになり文學運動が抬頭し始めたやうであつた。それは抑壓されてゐた文學に對する人間の本能が必然に要求したからに外ならない。その後の文學運動は前記のやうに非常に活潑になり旺である。

最近の文學運動の特徴は堅實であるといふこと、滿洲事變前の運動の中心が大連であつたがそれが漸次新京へ移行し始めたといふことである。文學運動が堅實になつたといふ特徴の一つは、我々日本人の生活が滿洲に永久的に安住されるといつた政治、經濟的社會事情に據るものであらう、又一つは過去の文學運動に對する無自覺な自己批判から生れたものに相違ない。

文學運動が大連中心から漸次新京へ移行したといふことは、換言すれば文化が大連から新京に移りつゝあることである。大連イデオロギー、新京イデオロギーといふ言葉がこれを表現するかのやうに生れて來た。然しまた大連は新京より數において日本人が多く日本人の文化は優れてゐる。だからといつて大連の文學運動が優れてゐるといふのではない。嚴密にいへば、大連の文學運動は新京に移行したといふことは妥當ではない、新京に新しく文學運動が抬頭して來たと解釋しなければならぬ。人的に見て大連で文學活動をしてゐた優れた幾多の人々が新京へ居を移してはゐるが、その人達が大連の文學運動を新京に持つて行つたのではない。新京が國都となり新しい滿洲文化發祥

の地として堅く約束されたからである。大連の文化は日本文化の船に乗つて来た輸出品であつた。大連の文學運動にはメイトインジャパンの極印が捺されてあつた。そしてそれは東京を中心とする九州、東北等の地方的文學運動と何等異つてゐなかつた。現在でもそうである。然し乍ら新京はこれと同等の解釋を與へてはならないであらう。なせならば新京の文化は日本文化の輸入品であつてはならないし又そうはならないからである。現在新京では在留日本人だけの文化があり、文學があり文學運動が存在してゐる。けれどもそれは一時的現象に止まるであらう。新しい新京の文化は滿洲文化である。日本文化を母體として生れたとしてもメイトインジャパンではない。既に新京では幾多の滿洲文化の萌芽があらはれてゐる。新京の日本人間の文化は滿洲文化の中に發展的解消をせねばならぬ運命にある。文學活動にしても日本人間だけのものと考へてゐる人があるならばその人は文學運動からとり殘されるであらう。新京の文學運動が大連と異つてゐるのは右のやうな點にある。大連の文學活動はいつまでも日本の輸出品としてその殻を破り得ない。その點新京の文學運動は幸福である。

#### 文學の殻の中から

題して文學の殻の中からはあるが、私は別に文學の殻の中にある人間ではない。多少なりとも文學を學びつゝある人間と

してといふ意味である。

大連や新京といつた大都會に居住する日本人の大部分はインテリ階級に屬してゐるやうである。滿洲でも相當インテリ論が昨今論壇を賑はしてゐるが滿洲のインテリは文學に對して餘りにも無關心、冷淡のやうに見受けられる、慶大教授林博士は先般來滿され歸京後感想を發表したがそのうち「滿洲文化と優秀日本人の永住」と題し「殆ど滿洲に文化なきを思はせる」とか「文化に對する熱意の不足を意味する」といつた言葉で滿洲の文化を評してゐる。そのやうに在滿邦人インテリは文學といふよりも文化に對する熱意が不足してゐるやうである。物質的な生活條件に恵まれてゐる在滿邦人がそれでも日本の生活がよいといふのは、一つは生れ故郷に對する斷ち難いイスタルヂヤによるかまたは滿洲の貧困な文化の中の生活にたゞ難いことによると林博士は云つてゐるが、私は在滿十年近くの今日まで滿洲の文化生活に對して不満の聲を多く聞かないし尙更貧弱な文化生活にたゞ難くなつて離滿したといふ者を聞かない。この貧困な文化生活が堪らないといつて日本に歸することは文化に對する一種の敗北主義を意味し、積極的に文化生活のレヴヰルを向上させる爲に闘ふべきであるといへるならば、文化人として能動的生活を爲すべきであるが、斯様な人も亦不幸にしてか出會はないのである。更に林博士は滿洲で發行される改造、中央公論の如き雑誌は一冊もないのみならず、東京から來るこれら



の雑誌は一週間以上を要し、單行本にいたつては問題外である。文化雑誌なき滿洲に文化の發生することを望むの愚なることはもう日本にも滿洲にも思ひ到る人があつてもいゝではないかと結ばれてゐる。

滿洲で販賣される雑誌、單行本の定價問題は相當喧しく騒がれ社會問題となつてゐるに拘らず之ら雑誌の時間的距離の問題は未だ一度だつて問題とならない。況んやこれら綜合雑誌の滿洲版を同時に出すといふ計畫とか當地で別個な文化綜合雑誌を出すといった話は皆無である。

在滿邦人の文化に對する熱意の不足はその他色んなところに現れてゐる。文化一般に對する關心、熱意の足らない在滿邦人が文學といふ特定の限られたものに對する認識不足なり無關心は敢て驚くには當らぬであらう「藝術よ屎喰へ！」と呼んだ人もゐるといふ。その人が如何なる立場から斯様な言葉を吐いたかは知らないが、一般的に藝術をけなし悪口を言つたものだつたら、それこそ文化に對する大なる背叛者であり異端者であらう。(九、二二)

# 滿洲文學理論の整理

西村眞一郎

滿洲文學論に関する論議が諸氏によつて行はれ來つたが、その論旨は甚だ嵐々に分裂してゐて、未だハッキリした認識が與へられてゐない。而も地方には之れに對する反對派、懷疑派、同情的理解者が現れてそれらに意見を述べられ、全く混沌状態を展示しつゝ一應の沙汰が守られてゐる。然しながら滿洲文學理論の基礎付けは目下の急務であらう。私は私の手元にある諸家の滿洲文學論を整理しつゝ、よりはつきりした命題を歸納して見ることにする。

然しその前に、先づわが批判者並びに懷疑者に對して一應の批判を贈るのが、本文の性質上禮儀であらう。

加納三郎氏は「幻想の文學」(滿日・十月二十一日)と題して宋崎龍氏の「建設の文學」を批判して

氏によれば(宋崎氏)滿洲文學の地盤は現實の滿洲ではなくてそれが持つと稱せられる倫理的理想である。その對象は滿洲の社會的現實ではなくて「輝しい前途」である。従つてそ

の方法は、現實の藝術的概括ではなくて、空想の任意なる組み立てに外ならない、われ／＼は氏の文學理論の本質を主觀的觀念論と規定し、これに「幻想の文學理論」と名づけておるいだらうか

と述べてをられるが、茲で所謂宋崎氏の「輝しい前途」の内容といふのは「滿洲國が持つ王道樂土の實現と、民族協和の大理想達成といふ輝かしい前途」(建設の文學・滿日・九月二十一日)を指してゐるのであるが、王道樂土の實現と民族協和の大理想達成といふ目的意識の遂行は、確にわれ／＼にとつて輝かしい前途を約束するものでなければならぬ。それが何時の日完全なる姿を實現し得るか、或は加納氏が心私かに考へてをられるやうに、空想乃至幻想に終るものかどうか、少くとも現實にそれが在滿諸民族の共同の目的意識として登場し指導イデオロギヤとなつてゐる以上、文學者が之れを世界觀とする文學理論を述べたからとて、それが加納氏の云はれるやうな空想でもなければ幻想でもない。

或は加納氏にとつて幻想に見ざるものは、われ／＼にとつては實にミユトスであるかも知れない。宋崎氏も云つてゐる如く「ミユトスは客觀的事實をそのまま現すものでないが、人間の新しい歴史が始まる時、何等かのミユトスが先づ孕まれるのがつねであるやうに見える」(ネオヒューマニズムの問題と文學—人間の文學論)と。

このことに關して滿鐵福祉課長上村哲彌氏は

「大きく踏み切りを附けてさうして日本國民が全體的に青年としての夢を持つ前途を先づ開いたものが滿洲事變であり、滿洲國の建設であつた。これだけでも滿洲事變、滿洲國の建設といふものは實に大きなことだ。それを考へると自分達かその中であつて、個人としての考へや個人としての夢が實現出来たとか、出来なかつたとかいふことは本當に小さいことだと思ひます。マア取りとめがなくて甚だ散漫ですが、私は夢を孕んだ國民の張ち切る力の己むない現れとして、今度は現實に大きな夢を國民に持たせる機會を掴むことになつたといふことが、滿洲事變及び滿洲建國の最大の意義ではないかといふ風に感じてゐます」

と雑誌「自由」一月號の座談會で述べてをられる。一定の歴史や文化が創造されようとする溫度には、必ずや一定の夢を孕まれ、神話が一部の人々の心に集積ふは、上村哲彌氏の感想にも明かであるのみならず歴史の示してゐるところである。

## 二

ロシア革命の溫度にはプロレタリアートの社會實現の神話があつた。それは當時、確に或人々には空想に考へられたやうし、マルタスの思想は、幻想の社會學に見えたであらうことは想像に難くない。ヒットラーの政黨はドイツ復興の神話を持つた。何人が敗戦國ドイツが、戦勝國の權益を蹂躪し去ると考へた

であらうか。事實、戦勝國はドイツ復興を哄笑してゐた。ドイツは戦前の繁榮の夢を追うてゐるのだ、と彼等が哄笑してゐる間に、ヒットラーは武装ドイツを建設してしまつたは周知の事實である。

或人々に幻想に見えるものは、或人々にとつては神話である。神話は常に歴史を文化を、孕んでゐるのである。今、滿洲國は建國の理想に王道樂土、民族協和の精神を懷胎してゐる。それは神話だ。何時の日に實現せられ得るか。重工業の進軍は農民の一時的な犠牲なしには遂行し得ないだらうし、灌漑などを中心としての鮮澁と濶濶との運命的な反目は、左様に簡單には解消し得なからうし、或は又、國家構成民族間の個有性格や風俗、習慣、偏見などの檢討も行はれてゐない現在、これ等を綜合し融和せしめて民族と民族とが人間的に結びついて行くといふことは、一朝一夕の事業ではない。民族協和の實現にとつてその指導者たる日本人が、眞に滿洲構成民族をリードし得るの教育を受けて來てゐない現實に於て、日本人の滿洲に於ける教育を叩き直す要求に差し迫られてゐるのだから、民族協和、王道樂土の命題は非常な困苦の道を辿らねばならぬ。然しながら少なくとも建國派の人たちは、これが理想達成のため、勢力的に動いてゐるのは現實の事實である。

それが滿洲全體の共同の目的と規定せられ、延いてはアジア

全體の目的たらしめんと定められた以上、われ／＼はこの神話の具現のためには、民族協和を肩すものはこれを斥け、樂土建設の痛たらんとするものは、これを削つて行くべきである。

然るに、既往の觀念に憑かれてたゞ徒らに空想だ、幻想だ、と強ひて傍觀者の側に立たうとするのは、文化創造に對する甚だ消極的な態度である。

文學においても然りである。

加納氏にとつて幻想に映したところのものは、實はわれわれの創造の對象としての文學の意に外ならないのである。ミユトスである。

つまり獨立國滿洲の内包する文學であり、それはかつて私が指摘して置いたやうに、世界文學の一環としての文學である。

〔拙稿「在滿作家に當然起るべき問題」滿日二、四、一（參照）〕

序に共感者たゞ木崎氏の所論にふれておくが、木崎氏は

「最初にふれたやうに、滿洲文學は「滿洲文學」があつて然る後に存在するのではなく、滿洲があつて初めて存在するところのものである。この一見平凡な設定には幾多の本質的な問題が含まれてゐることを注意しなければならない。即ち「滿洲文學」なる理念設定に導かれて空疎な理論操作に陥る危険性に對文して、滿洲なる現實規定からして瑣末的な追隨主義に墮し終る危険性の如きがそれである。滿洲の文學は植民地

文學であるとする如きは、既にその一つの現れであるとするこ

とが出来る」(前掲論文)

と言つてをられるが、滿洲の存在の認定にはじめて文學が存在するといふ以上は、滿洲の歴史を肯定しなければならぬ。然る時、滿洲の植民地時代の事實を描いた文學は植民地文學であると共に、作者の世界觀によつては同時に滿洲文學と言ひ得るのである。植民地文學を理解せずして、新なる滿洲文學の創造は不可能である。なんとすれば滿洲の歴史の上の、み、滿洲文學は存在するからである。

### 三

茲に二つの粗朴な見解がある。その一は「イギリス文學、ドイツ文學、フランス文學」といふ意味での滿洲文學は、今後生れるでせうが今のところは存在しない。さういふ意味での文學は民族の相違に依つて區別されるのであつて、何を描いたかによつて分たれはしない。日本人が描けば何を描いても、やはり日本文學になります」(村岡勇氏「滿蒙評論」二月號座談會記事)

現在、滿洲文學が存在するか否かを語ることは愚しきことであつて、今後生れるであらうとの豫想が肯定されるならば、一體誰が何時創造すべきかを村岡氏は考へて見る必要がある。更に日本人が描けば何を描いてもやはり日本文學であるとする村岡氏は、凡そ滿洲における日本人の地位を認識せざる人の言葉であると共に、氏の文學理念に對してさへ疑はざるを得ない。

内包してはゐるが、日本の國法によつて生活してゐるのではない。治外法權の撤廢後は完全に滿洲國の法律下に在り日本人であると同時に滿洲國の構成の一分子でもある。(關東州に於ける邦人は之れに直接、有機的關聯を持つ)それ故に、例へば日系官吏は日本人であるから日本の官吏であるとの論理は成り立たない。

文學の場合でも同様である。日本人が滿洲國の精神を世界觀とする文學を創作した場合それは日本文學ではない。(その使用する文章乃至語學に就ては、例へば岡倉天心の著作が英語であつても英人の著作家でないと同様に左程の役割をなすものではない。

この村岡氏の素朴な見解と同一性を有するものは、同じ座談會で語られた奥藤多藏氏の見解である。

僕の考へでは滿洲文學はまだ出来んと思ひます。文學の發生といふ事は考へて見ますと歴史を餘程持たないと文學の發展といふ事はあり得ないと思ひます。中略。滿洲には日本の神代の如き崇敬な宗教もないが、然し饒土着の滿洲人には、滿洲的の宗教があるのであるから、滿洲獨特の文化生活が出来、さうして何時の間にか専門家が理想として居る文化になる。さうなりましたと、滿洲の文學などいふものは今論ずる必要もない様に思はれます。以下略。

私は奥藤氏が從來新聞雜誌に執筆された諸論を読み、氏の獨自な見解、哲學を感ずることが出来なかつた不滿を拘かされてゐたが、この座談會の記事を讀んで、やゝ驚かされるのみであつた。

滿洲人には滿洲的の宗教だとか専門家の理想とする文化だとか、凡そ意味のない言葉を吐かれてゐるのみならず「歴史を餘程持たないと文學の發展といふ事はあり得ない。」だから「滿洲の文學などいふものは今論ずる必要もない様に思はれる」と云ふ。

一體文學を語るために、どれだけの歴史を持つてゐなければならぬといふのであらうか、更に又、奥藤氏は滿洲が昨日か今日、忽然と湧いて出たとも考へてをられるのであらうか。我々が滿洲に歴史を要求するとき、それは滿洲の指導原理となるべき歴史を指してゐるのである。單純な考證的歴史は既に稻葉君山博士などによつて體系化されてゐる。

歴史がないのではない。指導的に描かれた歴史がないのである。それだからと云つて現在滿洲のために文學を建設する必要がないとは云へないのである。

滿洲はあらゆる分野に亘つて建設しつゝある。文學のみが沈黙を守らねばならぬ理由もない。若しも我々が沈黙を守るなら

ば、我々は消極的に反動行爲を犯してゐるのであつて、文化的反動主義者であることに氣づかねばならぬ。

要するにこの場合の奥藤氏の見解は氏の講壇哲學者としての性格による新なる歴史に逢着しての悲劇が然らしめたものである。

× × ×  
まだ數氏の材料があるが、興へれた紙數が心細くなつたから茲には省略する。

「滿洲文學とは、あくまで日本文學の流れであらねばならぬ。而も、その本流に咲いた現代日本文學の指導的イデオロギ―でなければならぬのである」(滿洲文化の文學的基礎 Ⅱ 満日九、二五)

と上野凌諭氏は云つてゐる。

「従つてこの文學は行詰れる現在日本文學打開の鍵であり、それ故にこそ日本文學の本流なる所以である」

と説明される。

この場合、日本文學の本流といふことに就て考へて見る必要がある。

岡倉天心は「東洋の理想」において

「日本民族の裡に流れる印度及び韃靼の血それ自身が、日本民族に二つの源泉より來るものを吸収して、アジア意識の總てを反映する能力を附與したのであつた。萬世一系の天皇を

戴くといふユニークな祝福、嘗て外國に征服されたる事なしといふ誇らかなる自倚、古代觀念と本能とを―擲けることは出來なかつたけれども―護つて來た島國的孤立、これらが日本を、アジア思想と文化との信託の倉庫となしたのである」と、日本がアジア指導の歴史的運命を擔うてゐることを指摘してゐるが、それは指導すべき鍵が保存されて居り、この鍵を持つてアジアの扉を打ち開くの意味であつて、日本の本流をそのままアジア全土に再上流せしめるの意味ではない。滿洲國にあつても日本はその歴史的宿命的な指導を實踐しつゝあるが、それは日本それ自體を表現してゐない。日本において成し得なかつたもの、失敗したものの、さういふものを批判的に攝取しつゝ、新なる方向に進みつゝある。だから教育にせよ、法制にせよ、部分的には日本よりも進歩的でさへある。

文學の道も亦、日本文學の流れをそのままに繼承し發展させるにあらずして、日本文學を批判的に消化しつゝ、滿洲それ自體の文學を建設して行くものであることを忘れてはならない。

#### 四

然らば我々の考へる滿洲文學は、日本文學を如何に批判するかといふことが我々の問題となる。

日本文學の批判は、日本文學史の末端たる現代日本文學の一般的な性格を對象とするが至當ではあるが、本稿では現代小説だけに限つて述べることにする。



× ×  
日本の現代小説は短篇にしろ、長篇にせよ、小説の本格的な規定から云へば、小説よりも隨筆に近いものである。それは短篇において殊に然りであつて、その限りにおいては非常に優れてゐる。この日本現代小説に於ける隨筆的特性は、作者の主観・心境に主眼點が置かれる結果である。このことに就て勝本清一郎氏は

「この問題は、人が文學に對して本格的な要求を持つか、隨筆的要求で終るかの差に由來するものである」（日本文學の世界的位置・一、二頁）

と云ひ、この要求の差異は

「西洋人たると、日本人、東洋人たるとの差から來るものではない。東洋でも唐時代の支那人や、天平時代の日本人は藝術に對して本格的な要求を持つてゐたことは明かな事だ。」（前掲書）

と説明してゐるが、隨筆性が濃度であるといふことは、日本の自然風土、社會環境も多分に原因してゐるが、やはり禪の倫理觀から出發せる茶室早と、短歌、俳句の持つ特性、さういつたものが混然として日本の作家を心境的たらしめてゐるやうに思はれる。心境的であるが故に、たゞ、その時々々の心境さへ換へればいくつでも同じ素材から小説を作りあげ得てゐるのである。これは短歌や俳句の場合と同じ氣分が小説に對しても働きの

かけてゐる結果である。

× × ×  
滿洲文學は、小説における隨筆性と永久に對立しなければならぬ。それは小説の本道ではないし國際的な規格からも外れてゐるからである。

× × ×  
次に、長篇小説の場合を更に探求してみるならば、現代日本小説には嚴格な意味での長篇小説はない。その多くが長い小説である。繪巻物の形式に終つてゐるのである。それは發表形式が新聞・雜誌に先づ發表され、その後單行本として發賣されることに大きな原因がある。即ち、それらの發表機關は一日乃至一回毎に何ものかを讀者に與へねばならぬから、作家も亦その氣持で丹いて行く。だから完結した後に讀み返してみると、繪巻物を見るやうなものになる。ドストエフスキヤトルストイなどに見るやうな、本格的な長篇小説は見られない。出版資本主義の惡が文學の發達を阻害してゐるのである。

滿洲文學は、出版商業主義や、デヤナーリズムに影響されな

い、眞の長篇小説創造の環境と時間とを持つ。  
この基本的な、従つて、それから派生的な技術・要素の批判を経て、初めて我々の滿洲文學は日本文學の精神から學び取る。（この項、勝本清一郎氏の日本文學の世界的位置に負ふ）

##### 五

次にテーマの問題がある、紫藤貞一郎博士は



「日本人が若しも満洲を描くといつても云ひ方が足らないかも知れませんが、さういふ場合にどういふことが文學のテーマとなり得るでせうか」(前掲座談會)と質問し

「満洲における文學のテーマとしなければならぬやうな特異なものがあるかないかといふことです。それを先づ検討すればよろし／＼満洲文學といふ特殊なものもあり得るやうに考へられますが……」  
と述べてをられる。

満洲文學はそれ自體の世界觀を持つて世界文學の一ツとして生れようとしてゐるのであつて、殊更に特殊なものではない。たゞ世界文學の一環であるがためには、前節で述べた如く批判的な姿で登場するのである。それが恰も特殊に見ゆるのは日本人が參加してゐるからである。然しながら我々満洲で生育して來た者にとつては、満洲は決して特異な姿には映じないのである。我々にとつて、豈ろ日本内地の風物・自然こそは特異なものとして映するのが常である、従つて文學の對象としてのテーマの問題も殊更に考慮されないのである。この土地の邦人生活様式、生活意識それ自體が我々自身のものである。それは日本内地における日本人とは異つてゐる。だからあちらの側の人々が見るときは、特異なものがあることになる。然し満洲文學自體としては別して特異なものではないのである。従つて我々は満

洲文學は満洲から生れるものであつて、満洲を描くのではないと理解する。

單に満洲を描くといふことは、一種のセンチメンタルなものであつて、例へば畫家が承德の離宮を描いたとしても、それは満洲藝術とはいひ得ないのである、主眼點はその畫家が對象に對する世界觀によつて決定されるのである。アメリカ人の世界觀、精神を以て満洲を描いても決して満洲文學とはならないのである。

×

×

序に滿人をテーマとする場合に就て考へてみたい。

かつて秋原勝三氏は「滿人ものをなぜ書くか」において、この問題を取り扱つてゐたが、その批判的な啓蒙的な、所説にもかゝらず、秋原氏は

「異人種を描く、たゞこれだけで既に充分困難さは感じ得る一つの全く異つた對象に突き入ることの困難さを輕視は出来ない。しかしそこで、新しい自然に異人種と共に生きて行く我々の感情はその温床を、端緒をつくり上げるか見出すか、是非しなければならぬのだ。この點への自覺と情熱とは、この仕事に要求されねばならぬ」

と述べてをられるが、それは何を意味するであらう。秋原氏をしてかく言はしめたところのものは作家が滿人を機會的に素材として取扱つてゐるためであると共に、満洲の農村とか、邊

歐地とかの生活を全然知らず、且つ人情、風俗を書物の上で乃至は日本人流に見た常識で築き上げてゐる結果である。我々の満洲文學は滿人を機會的に素材として取扱ふ必要はない。更に又ありのままの滿人の生活を描き出して見せる必要もない。單に滿人のみならず五族の民衆をして文化的に高い水準にまで昂揚する使命こそ彼等に與へればよいのである。

## 六

滿洲國構成民族がそれぞれの言語、文體を有してゐるといふ特殊性に立脚しての滿洲文學は、如何なる言語、文體に統制されるべき構成民族共通の感情乃至は目的と結び合ひつゝ進んで行けるかとの課題が問題になつて来るやうに考へられる。

勿論、一定の國家の一定の目的を遂行して行くには、一定の言語文章を必要とし、その統制された言語、文章を以てこそ眞に成就されるものではあるが、刻下の滿洲においては今直に理想とする一定の言語は存在し得ないのであるから、それぞれの民族はそれぞれの言語を以て文學する外には方法はない。さうしてそれはそれぞれの民族の言語に翻譯して、各民族に共感を與へるべきである。これ以外には方法は存し得ないから過渡的使法には甘んじなければならぬ。

それだからといつて、滿洲文學の理論的意義は嘗も遜色されるものではない。

×

×

私は前に、使用する言葉は左程に意義を有するものではないと言つた。それは文學本能の偉大性を強調するが故にであつて滿洲文學は日本語で綴られようが、滿洲語で描かれようが、その文學としての本質に差異がなければ決して苦痛とするものではないからである。

併しながら將來においては、直接感情を交感させるためには滿洲における言語を統一させる要は確にある。

それには何を以つてこれに當てるかといふことは、一朝にして決り兼ねるものがあらう。然し私個人の意見とすれば、滿洲において一日の長を有する日本人の使用する言葉を以て統制するのが至當である。それは日本が文化的に先進してゐるばかりではなく、歴史的にも日本にその使命があるからである。

私は前章において岡倉天心の東洋の理想のなかの言葉を引用して置いたが、今少し天心の言葉を引用して日本の滿洲指導の必然性を立證づけてみる。

— 典型的のアジア君主にして、その詔勅はアンチオク及びアレキサンドリアの諸王にまでも關係した阿育王の權勢も、バトハット及びブッタ・ガヤの崩潰せる石塊の中に忘れられてゐる。超日王の榮華の宮廷も、迦利陀沙の詩を以てしても喚び起すことの出来ない、傳くも消えた夢に過ぎない印度藝術の壯麗なる達成は、匈奴の手流い取扱ひ、ムツシユルマンの熱狂の偶像破壊、射利的ヨーロッパの無意識的な藝術破壊に殆ど

粒し去られて、たゞ僅かにアジヤンタの腐朽せる壁や、エロ  
ラの歪められた彫刻、オリツサの岩彫の無言の抗議及びいみ  
じき家庭生活の只中にあつて美が悲しくも宗教に頼つてゐる  
のを見出す今日の家具の中に、過ぎ去つた榮光の窺はしむる  
のみである」

「秘藏せる標本の中に、アジヤ文化の歴史的富を順次に研究  
し得るのは、獨り日本に於てのみである。帝室の御物、神社、發  
掘されたるドルメンは、漢時代の技術の精巧なる曲線を顯示し  
てゐる。奈良の寺には、わが古典時代に非常なる影響を興へた  
支那文化と當時榮光に輝いてゐた印度藝術との代表物を豊富に  
藏してゐて——この偉大なる時代の宗教的儀式哲學は勿論、そ  
れは哲學、發聲、祭式、衣裳等をそのまゝに保つてゐるところ  
國民の自然の相續物である」。

「大名の寶庫も亦、宋及びモンゴル王朝期の藝術と文獻と  
を豊富に藏してゐる。この事によつて——支那自身にあつて  
は、藝術はモンゴルの侵入によつて破壊され、文獻は明の  
反動時代に失はれてしまつてゐるために——今日の支那の學  
者の中には、鼓舞されて彼等自身の古代の知識の源泉を日本  
に求めるものもある位である。

## 七

以上によつて見るも、日本が滿洲、ひいてはアジヤを指導しな  
ければならぬ宿命性が窺はれる。それ故に日本の使命達成のた

めには、日本語を使用するが適切である。然しながら現在のま  
ゝの日本語を普及させることは、語系の上から言つて至當では  
ないやうに思はれる。容易に滿人、その他に修得させられるや  
うに日本語を改良しなければならぬ。

このことに關して勝本清一郎氏は

「日本の現代文が求めてゐるものは、やはり臆鈍たる優麗さ  
ではなく、インドゲルマン語族の場合と同じやうに、一語一  
語の輪廓のはつきりした、直線的に明確な、合理主義的な表  
現であらう。」

「日本語が膠着語たる特性を根本的には失はせられないまで  
も、この現代において次第にインドゲルマン語的觀念で處理  
されて行くに従つて、そこにかへつて今後の日本文の率直、  
明快な國際的合理主義的な道の基礎が築かれはしないかとい  
ふ問題——この點に關して、せむとも（日場文學の基礎問題）  
すべての人の考察を促したい」と言つてゐる。

日本語が英・佛・獨等のインドゲルマン語系の影響を漸次う  
けつゝあり、且つその系統が、殊に英語が世界的に普及されて  
ゐるに鑑みても、日本語普及のためには改良を要することであ  
る。

×

×

最後に滿洲文學と關東州との關係を述べる要があらう。

滿洲國の發生は、實に關東州にあつた。滿蒙研究會、青年聯盟等の直接的な運動はいふまでもなく、滿鐵の使命における工作は、今日の滿洲國生誕に大いに力があつた。これらは、いづれも大連において計畫されたのである。現在といへども、文化的には大連はその温床である。文化機關こそは新京に置かれてはゐるが、實質は大連にあることを忘れてはならない。

然しながら滿洲國、ひいては滿洲全體に關する觀念においては、新京を中心とするものと大連を中心とするものとは、其處に大いなる差異がある。

即ち前者は感情的であるに反して、後者は理智的である。

例へば南京陥落祝賀のやうな場合に見られた事實、眞夜中の二時頃に提燈行列をやつた人々に對して、公電云々の問題を起した大連、この兩者間の差異はよくこの事情を示してゐる。

前者は感情的であるが故に、行動においては發生的である。

後者は理智的なるが故に義務的である。

従つて前者は飛躍的であり、後者は固定的である。

この前者の特性は、建設期における意欲を代表してゐるものであつて、その時期においては當然な意識であるが、やがて建設が一段落を遂げ、文化の安定を得る時期に至るならば、自然後者の特性へと轉化する。

又、兩者の外的な差異としては、兩者がそれらに準據する法律の差異を擧げねばならぬ。

言ふまでもなく前者は滿洲國の法律に、後者は日本國法並びに關東州令に従つて生活してゐる。この外的な條件が兩者のそれら／＼の意識を決定してゐることも亦認められるのである。

滿洲文學は、この兩者の共同の事業として建設されなければならぬ。

前者は滿洲國生誕の發生としての歴史的温床であつたが故に、文學に對しても亦温床としての役割をなすべき使命があるからである。(四・二五・滿日)

# 詩論

八木橋雄次郎

一  
樋口武士氏の『春』

高鐵棒にとびついて

大きく振れてゐる中學生

東洋の倦意の黄昏を蹴つて

微妙な調整機能を振つてゐる中學生

見事に上るか

上れぬか

これは植民地の神苑の

梢を摩する一遊戯(弱第 十一號)

先づ鐵棒を睨んで身を屈し今にも飛びつかうとする姿勢をとつた中學生を想像し給へ。ルネッサンス實踐のポーズ、自己を

ふと振顧つたヤンガーゼネレーションの顔、前進のための一時的後退。見よ！どうにかかうにか彼は鐵棒に飛びついたのである。

鐵棒とはその名日本詩、中學生とはどうやら私達の事であり私達に同意する少數の諸君であるらしい。インテリゲンチアといへば紅毛心醉主義者と同意義に解しかねないこの東洋の倦意、フランス語が話せなければ詩を語ることの出来ない東洋の黄昏、北川冬齋氏から『人々はよく、テクニストによらずして、ポオドレエルの詩を、ランボオの詩をヴァレリーの詩を口にする。これほど大膽不敵な業はない、まるで安酒のやうな翻譯によつて、どうして詩人の心理に觸れ得よう。』(詩人の行方)と警告されて、それでもなほ安酒の酔から醒めることの出来ない限り深い東洋の黄昏を蹴つて微妙な調整機能を振つてゐる中學生なのである。見事に上るか上れぬか、貧弱な懸垂力が私達を元の地べたに落すか、それともどうか日本詩の鐵棒に燕のやうにとまれるか、いづれ小手先の力だけでは駄目なやうである。それを成すには全身の調整機能の發見が必要である。

これは植民地の神苑の梢を摩する一遊戯であり、神話への回歸であると共に新しい神話への誕生を意味する。かなり真面目な中學生の遊戯であるらしい、がんばれ、がんばれ中學生、鐵棒に君の腹を敲せよ、日本詩に君の胴體を跨らせよ。

二

ヴァレリイは「現代の考察」の中で

「歐羅巴の精神と極東亞細亞の精神との、且つその心までの、全く直接的な融和の企圖よりも、更に新しく一層偉大なる結果が期待し得られる何があるか？」（高橋廣江譯・支那人の書の序文）と自問し、感情や思想の交易に就て思索を進めた末に、西歐人の公正な意識がどうしてもそこに到達し得ないことを認め、

「傳統と進歩とが人類の二つの大きい敵であることは明かである。」と結論せざるを得なかつた。人類の敵に傳統の論ぜられるは直ちに肯定出来るとして、進歩さへもが人類の敵であらねばならないことは熟考に値する。そして、我々はヴァレリイの卓見に敬服すると共に、サーベルを日本刀に改めた軍人の腰の健康さを肯定する。

なぜなら、傳統と進歩とはとりもなほさず両面であり、同一義に外ならないことに氣づいたからである。自然發生、歴史、今日、そして明日への流動、なにもものよりもかの大群衆、民族行進の歩音が我等の胸を打つ。

しかし、爰に考へなければならぬことは價值を失つた歴史上の事實や言葉や理智や、或は偶然の一切がこの思考に參與してはならないことである。そのセンチメンタルを捨てる限りに於て、傳統と進歩は我等の肉體に宿り精神を燃し、人類の敵であり得ると共に民族の鋭利な刃となり得るのである。

このことは、たしかに T、S、エリオットの「祖先から傳へ遺すといふ傳統の唯一の形式が直ぐ前の世代の遺した成果を旨目的に或は俱る俱る固守し」、その仕来りに追従することにあるならば傳統は確かに萎縮するであらう。」（文藝評論・矢本貞幹譯）といふことの裏付を持つものである。即ち傳統を相續する時に傳統は消失し、それが進歩する限に於て傳統は現前するのである。むしろ傳統は相續出来ないものだと言ひ切つた方が正しい言ひ方かも知れない。

西洋の文化は外型であつて我々の肉體ではない。我々の精神の新しい創造は我々の傳統が内部から成長し、もり上つて來たものに外ならない。創造は既に今日以前に起因してゐるのである。私はこの強き繩に莞爾として縛され、秩序の道に鞭打たれて進むことを光榮としよう。この事は發電以前の水、蒸氣機關以前の燃料埋藏の神祕に到達すると共に無際限な進歩や發展を豫約する大道に立つことである。かくして傳統と進歩は我々の黄色な皮膚の中に健康な脈を打ち、それらは同様な響を以て永遠への秩序を構成するであらう。

このことは詩のみならず、凡ゆる藝術以前の問題であり、各國人、各時代、夫々の立場に於て通用される切符であらう。セシル、D、ルイスは實にうまいことを言つたものである。

「祖先は先頭に立つて暗黒の中に姿を消す。そして、それに従ふものは彼等が單なる地理學者であるのでなく、ある意味で彼



の詩の世界の創造者であることを發見する。『詩に對する希望』  
春山行夫譯・新領士第二卷十二號』と。

### 三

藝術の進歩に就て一言。これに關しても、T、S、エリオツトはいふ。

『詩人は藝術そのものが進歩するといふことはなく、藝術の素材が全く同一であるやうなことも決してないといふ明白な事實をよく知らねばならない。』(『文藝評論・岸波文庫』)

藝術そのものが進歩しないといふことは、遠い歴史の彼方に埃を浴びてゐる古代作品がそのまま現代人に適用されるといふことにはならない。萬葉集は萬葉時代に於てこそ生氣があつたのであり、現代詩は現代に於てのみ最高の機能と價值を保有し得てゐることは變りはない。

現代の新しい詩人が、その詩作法を方法と技術の上に發展させたことはこの意味に於て正しい。なせなら、若し藝術の進歩ありとするならば、それは方法と技術とかの上にのみ言はるべき事であるからである。藝術の本質、詩の本質は依然として本質に止つてゐるのである。本質は古くそして常に新しい。それは過去、現在、未來を貫流する唯一のものに外ならない。平林初之輔氏が『文學理論の諸問題』の中で文學の本質論に言及し、文學に於ける本質の追究は形而上學的文學論の破産であると宣告し、『新しい文學理論は、本質といふ先驗的な設定物を

取り拂つて、逆に、本質なるものは、多くの經驗的要素の複合であるといふ見地から出發すべきである。』と示唆に富んだ言葉を遺してゐる。しかし、これは文學を社會の進化に資するための目的論、機能論の立場から發した一警告に止る。

時代とか社會とか、或は思想とか、さうした外的要素を取拂つても文學の要素は存在する。この事は後述するとして、千古不滅の本質がある。唯過去と現在の相違は科學や政治や經濟の複雑化、換言すれば知性の發達に基いた結果に於て生ずる諸技術の複雑化に外ならない。

紀貫之が、古今集の序文に於て『やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける。』といひ、『力をも入れずして天地を動かし云々』と本義を論じ價值を賞揚したことは現代詩論にも流用される本質論であつて、古今集と現代詩論にも流用される本質論であつて古今集と現代詩の相違は知性のもたらした方法と技術の相違に外ならないことを物語るに好都合な標本である。

春山行夫氏の言葉を借りて言へば『詩を進ませるものゝみか詩人である(百田宗治)。詩人を進ませるもの、それは技術である。そして技術を進ませるもの、それは方法である。そして方法を進ませるもの、それは主知に外ならない。』(『詩の研究』)といふことに完全に一致するわけである。

しかし、唯單にそれだけならば私は最早これ以上ペンを進め



る要がない。私が詩論すべき目的は「巨大なトラツクも、その部分部分の機械の秩序によつて極めて軽快である。」(ジャコブ・春山氏譯)が、彼の疾驅すべき道路を明確且つ詳細に地圖の上に記入せんとするところに出發してゐるのである。機械の秩序だけでは輕快になり得ない。平坦たる道路に於てこそ愉快であり得る。而かも日本の巨大なトラツクは少しガムシヤラに走り過ぎたやうである。草原の中にめり込んで立往生してゐるはないか。孤高の面魂は愛すべく、それも時代の生んだ姿勢には相違あるまいが、社會機構を離脱し、故郷を喪失した運轉手のみが、獨り虚無的な笑を懶高くしてゐるだけでは、部分部分の精巧な機械を待つさせるだけの話である。

空轉を避けよ。道路を求めよ。傳統を想起せよ。再前進のため一時の後退を恐れるなと私は忠告する。それを拒絶して崇高且つ完全な藝術家の誕生並に作品の生産はない。日本の詩は日本民族との關係價值、日本の歴史との關係價值を忘却して世界の詩壇へ入場すべき座席券は獲得されない。

現代文明若しく文化の複雑性、多岐性が我々の頭や胸を通過して表現される時に、民衆はこれを難解とし、或は敬遠し、愚鈍な一群は輕蔑する。詩人はそれらに關ることなく更に美の可能性を極端に追究し、詩の領土を飽くことなく擴大せんとする積極的な活動を加へるが故に、當然な歸結として民衆とは遙かに懸絶する。そして懸絶の果に没落が待ち構へてゐる。しかも

もう一步突きつめて考へて見れば、それは懸絶する筈もなく、懸絶してはならない筈のものである。なぜなら、民衆とは傳統の中に巢窠ふおびただしい一群に外ならないからである。詩人が傳統を離れ、歴史上の詩人から獨立し、凡ゆる機構や要素との關係價值を離脱するところに、この悲しき懸絶がもたらされたとしたら、その無反省の前に潔く脱帽すべきである。

詩の本質は必ずしも日本の個有的なものではない。それは日本の傳統と化合して日本個有的の本質を生むのである、そこを離れて技術や方法の活動のみがあつたとしたらならばそれは進んだのではなくて、變化したに過ぎないのである。傳統を侮辱した詩人少くとも國民を顧みかけた詩人は、日本を蹴飛ばした非國民の類に屬する。この事は國民にも負ふべき罪は勿論ある。しかし、勝れた知性の所有者たる詩人よ、我が詩壇に對して今日まで微善笑を送つてきた國民の愚鈍なる寛大さに對して再び脱帽しようではないか。

#### 四

古來日本は詩の國であつた。祖先の多くは詩人であつた。戰場に於て、刑場に於て、又切腹直前にさへ歌ふことを忘れなかつた。しかし、新しい文化はこの光榮を其の泥足で踏みにじつた。理由は數へ切れぬ程ある。しかし、この名譽回復の役割から詩人は逃避してはならない。

#### 五

今日、日本への回歸、古典の復活日本主義理論の建設の聲が今更の如くに騒ぎ立てられてゐる。これは要するに、日本民族の文化の上の一つの秩序を樹立しようとする内部的な意志活動に相違なく、來るべき日が來ただけの事である。この事に就て淺野晃氏がアトリエの九月號で、『古典復興の精神は若返りの精神であつた。このことが先づはつきりと把握されてゐる必要がある。』とルネッサンスの意義の確立されることを希望し、文化的人間の生の約束として『民族とか國とかを離れて自己の生命を展開することは出來ない。』ことを力説してゐることに賛成する。

しかし、傳統へ歸つて行く、自己の根源へ歸つて行く、そして神話を再發見することが、單なる國民的興奮、非常時克服といふ熱情のみからの出發でないことを私は希望する。

飽くまで新しき秩序の樹立といふ知性の活動を没却してはいけない。野口米次郎氏のいふ私共は外國に於けるやうに理智の奴隸となりたくない。私共はどうして日本人本來の情調を維持するか。將來の大問題』（日本詩歌論）でなければならぬ詩人は、この際慌てゝ喜んではいけない。君等は先づ字引を片手に、片つ端から古典の耽讀に入つて見給へ、そして過去の純粹性又は動物性、若しくは普通に日本情調といはれる自然觀賞的感傷辭に溺れて見給へ、やがてその問題の意味の何たるかを知るであらう。しかし、その曉に於て君等が萬葉集や記紀歌謠や

その他を、確實に國文學者の手から奪還してゐなかつたら、君等はこの生きた社會からおきざりを喰ふばかりであらう。

單なる回歸は無價値である。チョンマゲの情調は無意味である。我々は理智の奴隸となり、進んで且つ甘んじて奴隸となり、技術と方法の發見に従事すべきである。

この意味に於て、日本復興の、神話の香漂ぶ高雅な作品を近來次々に發表されてゐる高村光太郎、瀧口武士氏等の作品は、根本に於て私のいふ日本詩とは、今のところ全く無關係である。

『すべて詩人は、その形式の發展と共に現はれて來る。一つの新しい形式の創造は同時に幾人かの才能ある詩人を生む。形式の發見されない時には、詩人もまた生れてゐない。詩人の生れるのは宿命である。』（萩原朔太郎氏純正詩論）

あゝ、私はこの宿命を呪ふ。

## 六

新しい日本詩は日本語に對する新しい秩序からはじまる。

## 肉體の惡魔

三好弘光

詩が僕に與へるものは、僕が詩に與へ得るものよりはるかに大きい。所謂詩人は詩のためにひきづられ、それによつて苦しみ、またそのために一つの幸福を握つてゐるとも言へる。

これはたしかに常識の世界ではない。  
しかし與へるより、こゝには、自分が與へ得ることを信じない限り正當たり得ない。この點に於てはいさゝか倫理的なコンモンセンスをもつてゐる。

詩精神といふものは、我々の肉體や精神以外の宇宙に嚴しい姿で存在してゐるものであらう。

我々が詩に與へることの出来るものは、我々の肉體と精神が現實世界からつくり出したもので、例へば具體的な歡喜や苦悶の数々は肉體と精神を通じて藝術的に抽象化される如くである。しかし詩はそれ自身の力をこの抽象化の作業に参加させてゐることは否めない。

我々は書くことによつてのみ詩に何ものかを與へ得るもので、そこから嚴しい詩精神にたち向ふ詩人としての資格が生れるのである。

さて、我々の精神は現實の詩的抽象作業を支配することは明らかであるが、肉體そのものは如何にして精神に協力を與へるかについて思考を進めやう。

肉體は精神の存在を決定してゐるものであるが、精神は、存在としての肉體を意識の中に置くだけである。

斯様なところから精神的な誤謬を強く反撥する肉體的な正常性が思惟されねばならない。

自然の中に身を置き、その一部を負つて生きてゐる人間性が、如何に人間精神の極端な振舞ひを耐へてゐたことか。

今日の文化は總て此の肉體的な忍従の歴史からつくられたものと言つて差支へない。そこに必然的な肉體的疲勞があり従つて極端な精神的飛躍と轉落の歧路が、現代の文化混亂となつて現れたのである。

肉體的な正常性が我々の詩に與へる現實性は、精神がつくる抽象的世界を空虚からすくつてゐることは事實である。そして詩作品の精神的修正を行ふものとして肉體の占めてゐる役割が評價されねばならない。

詩が我々に與へるものとは、斯様に肉體的な正常性を認識し

精神的に昂揚させることである。

我々は藝術感覺の不思議な流れを知つてゐる。そしてそれは不思議なといふことを知つてゐるに過ぎない。

この流れは精神と肉體とのいづれの側にあるかといふ問題が生じてくる。がしかし、これは兩者の間を流れてゐるとしか言へない。

そのどちらかに決定することは、藝術感覺の正しい價值を見失ふ。何故なれば、これは恰も河の流れの如く絶へずその位置を變へてゐるからである。

この河はたしかに生きてゐてそれ自身のオルガニズムをもつてゐると思ふ、この盡きない水脈は詩のみでなく總ての藝術を潤すものである。

藝術感覺が不幸にして肉體の側にのみ据つた場合は、感覺の洪水となつて肉體的正常性をおし流し終にデカタンスに墮ちる。もしも精神の側にのみ入り込んだ場合は肉體以上の不幸を惹起するであらう。

藝術感覺の重要性は、肉體と精神にまたがつたものであるところに生じてくる。

藝術感覺の滲透性ともいふべきものは現實に對して作用することは勿論であつて、それがもつてゐる惡魔的な腐蝕性こそは最も鋭くその本質を衝くものである。

我々は惡魔的腐蝕性を理性によつて弱めることは出来ない。理性はそれによつて得られた新しい創造性を否定するだけである。そして、新しい發見に對する不安から身を護らうとするために、無用な固執を以て混亂を導きそこからスランプに入るのである。それは肉體の正常性を裏切る行爲であり、精神の極限以外のなものでもない。

必要以上の自己防衛は、それ自身の惡魔的腐蝕性に侵されてしまふ結果になるであらう。

現實世界にあつては、總ての人間性は自己防衛をとるものであるが、それと同時に惡魔的腐蝕性の觸手を延してゐることを忘れてはならない。

單なる物體にしても、自己の占めた位置や、その運動に於ける慣性を失ふためには、それと等量以上のエネルギーを必要とする。

人間性が物體等の如く慣性のうちに放棄されてしまふものは思へない。

藝術感覺の惡魔的腐蝕性が、新しい動きのためにどれだけ重要であるかといふことは、藝術の創造性に就て考へただけでも理解されると思ふ。

詩を無意識の中に創り出すことは不可能以上のものであるが、それを精神意識の活動にのみ期待することも危険であると

思ふ。

我々の肉體の中に詩精神と、もに把握される藝術感覺の惡魔的腐蝕性は、精神意識にとつて容易ならぬ強敵である。

惡魔性は、肉體的な精神活動の冷酷なものであつて、はかり知ることの出来ない詩精神の大きさに双向ふ武器となり得るものである。がしかし、この双物は人間性を殺戮するにも全く好適なものであるところに非常な危険性を帯びてゐる。

我々は藝術感覺の惡魔性を自覺するためには、現實裁斷による以外の方法はない。

昔、試し斬りといふことが行はれたが、惡魔性の眞の冷酷さや、腐蝕性の鋭さを得るためには、さうした肉體的危険性をくぐるだけの強い生活意識を持たねばならない。

×

×

肉體が精神を支へてゐるといふことは、單に生理學的な意味からでなく、眞の肉體意識によつて精神力をより以上に強く現實的に價値つけてゐるといふことである。そして、それは現實に對する詩的抽象作業の上に如何に重要であることか。

(四月二十四日)

# 日本古典文學に於ける 女性描寫覺え書

——こゝでは主として江戸

初期までの資料を用ひた——

大谷健夫

今迄出た、伊藤銀月の「日本女性史」百柳秀湖の「日本女性史話」等の日本女性の歴史を書いたものは、大概、古事記、榮華物語等の歴史に類する書や、竹取物語、源氏物語、その他の物語を資料に使つて書かれたものが多かつた。しかし、女性を如何に描いて来たか、描寫の歴史を書いたものは見當らない。私がかれから着手しやうとするのは、女性そのものゝ歴史ではなく、女性描寫の歴史である。

描寫の歴史は、描寫の對象の變化の歴史だけではなく、その對象に對する「人間の在り方」の歴史でもある。社會描寫の歴史は、描く人間の變化が描かれる社會の變化である。社會の變化

が人間の「在り方」の變化だからである。風景描寫の變化は、人間の存在の仕方が規定する自然觀の變化が決定する。女性の描寫も、女性の「在り方」の變化と、人間の「在り方」が女性觀を規定する故に、これも人間の「在り方」が根本の問題である。

女性描寫は人間の描寫でもある。がそれは「女」を描く事であるから人間を描く事ではなく特に「女」を描く事である。一番「女」をよく描く方法は、それを「男」でなく「女」として描く方法である。「男」でもなり得る「政治家」や「思想家」や「文學者」である「女」を描く事も勿論「女」を描く事ではある。しかし、それよりも「母」であり「娘」であり「妻」である「女」を描く事がより「女」を描く事である。

最單純な「女」の意味は「男」でない事である。何が彼女を「男」でないものにするのか。それは肉體が男でなく「女」である事である。だから素朴に云へば「女」を描く事の第一條件は「女」の肉體を描く事である。「女」の肉體を描く事だけが女性描寫の全體ではない。「女」の精神を描く事も「女」を描く事ではある。でも存在が意識を決定する鐵則に従つて「女性の精神」は「女性の肉體」の上で發生する。「女」が「男」と肉體を異にするに云つても、たゞそれだけで「女」と「男」を全然別箇の世界に切り離す譯ではない。「女」と「男」は、共に「人間」である事によつて結びつけられる。が私が此處で問題にするのは「人間」としての「女」ではなく、「女」としての「女」である。

女が裸體であつた時代に「女性描寫」の文學があつたとして、必らず「女」の裸體描寫、天真無垢の描寫があつたであらう。又考へれば、總ての女が皆裸體であつたために裸體が今のやうに魅力を持たなかつた。だから「裸體」の描寫はあり得なかつたとも云へる。その何れにもせよ、今傳はつてゐる文學は、人間が裸の始原代から進化して着衣時代にはひつてからである。埃及の古代文明時代に、人間が裸體を恥じた事は、裸體時代のアンチテーゼとして理解され、繪畫に於いても「裸體畫」が存在しなかつたことは、フリーチエの言葉の如くである。その時代には「女」の肉體を描く事は「着衣」を通して描く事であつた。

日本の文學でも、古代は、「女」の肉體を描く事は「美しい女の肉體」を描く事ではあつたが、正しく云へば「着衣を通して美しい健康に輝く肉體の女」を描く事であつた。衣通姫は白い衣を通して輝く肉體の女性として描かれ、光明皇后も亦その名の示すやうに輝く肉體の女性として理解せられる。「竹取物語」の妹夜姫も「光る」と云ふ言葉でその美しさを表現してゐる。

平安時代にはひつて、土地の生産力が都市を経済的にある程度まで豊かにし、唐宋文明の移入と工藝美術の急速な進歩を見ると、「輝く美しい肉體の女」を描く事は、「美しい着衣の女」を描く事に變つて來た。「女」の肉體の美しさを、着物の美しさが

壓倒したのである。此處では、「女」の肉體の美しさの一條件である「髪の長さ」「着物の美しさ」に描寫の重點が置かれてゐる。

精神的に豊富な内容を持ち始めた此の時代は、女性にも「素朴な健康美」のかほりに「らうたけ」の内容美を要求し、「光り輝く」美しさは「白く清かな美しさ」となり、希臘的端正に、王朝的の「なまめく」要素がはひつて來た。「胸別のひろき未通女」(萬葉集)は「子めいたる」小さい弱々しげな「女」に變化する。

鎌倉、室町時代が一般的に美しい女性の姿態描寫を輕視した事は、剛健な武家社會のイデオロギーとして當然である。しかし此の時代でも、貴族層は武家社會の影響を受け乍ら依然として平安朝時代の貴族文化の流を保つてゐた。「保元」「平治」「平家」「源平盛衰記」「太平記」とは異つた色彩の、「石清水」「風につれなき」「山路の露」をこの時代が持つてゐたのも分る。

江戸時代になると、上代の「美しい健康な肉體の女」中古の「髪の長い着物の美しいなやかな女」を描くかほりに「美しい女の肉體」を描き始めてゐる。それは、政治的権力もなく、企業貿易等を禁じられた江戸時代町人社會の、富の刷け口である享樂の對象としての「女」の肉體である。中古に於いて「物語」が「大和畫を同伴したやうに、此處では「浮世草紙」「人情本」が「浮世繪を同伴してゐる。

平安時代の女の着衣が女の美しさを代表した譯は、女の美し



さか、かゝる着物を所有し得る富の觀念と結びついたからでもある。これはブレハノフが「藝術論」でセネガンビーの土人の女に就いて指摘してゐる。しかし此の時代の女の着衣の美しさは富の觀念が美の觀念の中に溶けこんで表面に現はれてゐない。

文學でも美術でも、簡単な描寫から複雑な描寫に展開して行くのが普通である。上代の描寫が簡單なのは言葉の豊富で無かつたのと、従つて後世のやうに異つた言葉で異つた意味を表現するのでなく、多くの意味を一つの言葉で表現したからである。女性描寫も亦、簡単な全體的描寫から複雑な細部描寫に向つてゐる。後世と云へども勿論全體的描寫はある。しかしその場合には、中に細部描寫を含んでゐる。全體的描寫で細部を表現すると云ふ技術は小説、殊に短篇小説の要素だからである。

「古事記」は、黒姫の美を「其の容姿端正」と書き「風土記」は、海上の安是の嬢子を「貌容端正しく光透やけり」と書いてゐる。此處では着物でなく肉體の美しさが書かれてゐる。「かほ」はその字の示すやうに「容姿」「貌容」で、「顔」ではなく「姿」である。肉體の「かたち」である。その「形」の美しさは「端正」である。端正は姿の整つてゐる事を意味しそれは「きら／＼」と曰く輝く健康美である。しかし、肉體の姿と容（形）を意味する「かほ」が「顔」になつたのは「人々」を「面々」と呼ぶやうに、「顔」が「人」全體を、「姿」を表現するやうになつたからである。「人手」の「手」

が人間の勞働力を表現するやうに、「顔」を人間の精神の「場所」と考へてさう云ふやうになつたのであらうか、しかし「胸に聞け」の言葉が示す如く「良心」「まごころ」は「胸」にあると昔の人は考へてゐた。「顔」は、着衣した場合、最も完全に露してゐる肉體の部分であり、他の部分に比べて相似性が少く、最もその人を表現するに特色的だから「顔」即ち「人」で「容姿」が「かほ」になつたと考へられる。だから「容姿」と云ふ文字が出来た時には、それは「人全體」を表現し、着衣が四肢を隠すやうになつてから「顔」に變化したのだと考へられる。「形姿」「容姿（紀記）」が「面々」「萬葉」「面容」「面姿（日本靈異記）」になり、次いで「顔」（竹取物語）になつたのである。「かほ」を表現するものが「顔」なれば「形姿」は人間の姿全體のみを表現するものになつた。これは言葉の細分化である。

「顔」は、眼、鼻、口、耳を含む「顔」、般である。「日本靈異記」の「面姿うるはしく」「大和物語」の「顔容貌いと清らなり」と無論「顔」の事であり、たゞ單に「清け」「大和、宇津保その他）」「白う美しげ（落窪）」と表現したのも「顔」であらう。「顔」の描寫も亦細分化する。

「眼」の美しさを描いたものゝ上代に少いのは意外である。竹取「伊勢」以前に出来た「浦島子傳」「續浦島子傳」にも、眉の描寫はあるが眼はない。恐らく紫式部が「源氏物語」で軒端の萩を

「まみ口つき愛敬つき」と描いたのが始めではないだらうか。それも、眼少し腫れたる心地である。「大鏡」にも「御目のしりの下り給へる」宣耀院の女御を帝が「いとらうたく」思召すとあり、「堤中納言物語」にも「尻目もらう／＼しく愛敬つき」と書いてあるからきつと眠さうな目尻の下つた可愛い、細い眼であつたらう。それが「楊貴妃が花の眼、李夫人が蓮の睫」（源平盛衰記）「芙蓉の眸」（太平記）になつたのは支那文學の影響である。そして江戸時代になると、西鶴の「目のはりつよく」（好色一代男）「目のはりんとして」（好色五人女）「目にはつ顯れ」（好色五人女）た「女」が出現した。

「眼」が精神の窓なら「口」（唇）はもつと感覺的なものを持つてゐる。「口」の描寫が早くも「落窪物語」に「口つき愛敬つき」と現はれたのも尤もである。「濱松中納言物語」は「唇は丹といふもの深りたるやうにて」と書いてゐるが「丹花の唇」（太平記）と云ふ形容は支那文學からの移入であらう。西鶴はあつさりといふ口もいさく（好色一代女）と片づけてゐる。かく「口」の描寫が發展しないのは「笑ひ」の描寫の中に口の美しさを含ませてゐるからであるかも知れない。齒の描寫も少ない。中では「堤中納言物語」のはぐろめ更にうるさく白ら／＼かに笑みつゝ、「口つき愛敬つき、清けなれど齒黒つけばいとよづかず」が有名である。江戸初期には「白き齒は雪にもたとふべし」（伽婢子）「齒並ぬら／＼として白く」（好色一代女）と、白い齒を賞めてゐる。「鼻」

では「源氏物語」の末摘花の描い鼻が最も有名である。鼻はそれだけ取り立てて美しいものでもないから、その描寫も「鼻すぢも指通つて」（好色一代男）位のところが關の山である。その頃は「クレオパトラの鼻がも少し低かつたら……」と云ふ言葉はなかつた。

「耳」は顔の正面から離れてゐるだけに最も少なく、私の記憶では、室町時代までには見當らない。西鶴が「好色五人女」で「女も同じ片里の者にはすぐれて耳の根白く」又「耳の付やうしほらしく」（同上）又「耳長みあつて縁あさく、身をけなれて根まで見へすき」（好色一代女）と書いたのは、流石に細い所に注意してゐる。

「眉」は平安時代上期の「浦島子傳」が「蛾眉山より出づる初月」中期の「本朝文粹」が「翠黛」と書いた。此の支那式の言葉がすつと使はれてゐる。「柳眉＝雙蛾」も多い。「源氏物語」も「眉のけざやかなりたるも美しう清らなり」と書いてゐるが「堤中納言物語」の「眉いと碧く花々とあざやかに涼しげに見えたり」が峠で、江戸時代初期になると「眉は」かねて眉なく貌は丸くして「（好色五人女）と頗る無視されてゐる。しかし「うす化粧して、唇こく」（好色一代男）引くのが江戸一般の風だつた事は確かである。要するに眉は裝飾であつて肉體の魅力そのものではない。

× × ×

同じく裝飾であつても「髪」の持つ地位は重要である、殊に平安時代の「女」の描寫が先づ「黒髪（黒髪）の長さ」に筆を向けてゐるのは、官能的な江戸時代と異り、此の時代が裝飾美を重んじたからである。上代でも「紀記」にある髪長姫の名が物語る如く既に髪の長い事が美人の要素となつてゐるが、「髪」を始めて書いたのは、着物を始めて書いた「大和物語」であらうか。その髪も「清らなるくろ紫のきぬをやうせること生ひたるかぎりすままでいたらぬ筋なし」（宇津保物語）「髪はうるはしくて、たけに一尺ばかりあまりて」（草物語）長く一様に揃つてゐなければならぬ。

〔宇津保物語の成立年代は四五の説があつて定つてゐないが、傳説及び藤岡博士や次田氏の説のごとき「落窪物語」以前ではなく、「源氏」以後であると思へる。松下大三郎氏は現存本は鎌倉初期と云つてゐる。「草物語」は一名草日記とも呼ぶが、傳説の小野篁の作である事の偽りであるのは書中の和歌に就いての考證をまたなくても明らかである。「大和物語」以前では絶対になく寧ろ平安末期と推定される。以上は、此の二つの「物語」の女性描寫を見ればすぐ分る。描寫の歴史は段階をふんで發展するもので、ある描寫をし得るやうな段階に達しないうち、描寫だけが先行する事はあり得ない。〕  
髪は長く揃つて、その上「背中こぼるるまであり、さらに一寸ちりたるもなし」（宇津保物語）に房々として櫛目かきちん

と正しくなければいけない。中には「髪はいとふきやかにて長くはあらわど」そのかはりに「下り端肩の程いと清けに」（源氏物語）見えるのもあるが、概して身の丈二三寸から三尺に餘る髪が欲せられた。だから盛にならば容貌も限なくよく髪もいみじく長くなりなむ（更級日記）と云ふ少女の願望も起つて来る。その望みが叶へば、「御車にたてまつり給ひければ、わが身はのり給ひけれど、御ぐしのすそは母屋の柱のもとにぞおはしける。ひとすぢをみものくに紙におきたるに、いかにも、すきまみえ給はずとぞ申しつたへためる」（大鏡）やうになる。

平安時代の「女」の描寫が「着物と髪（髪）の美しさ」に集中された事は前にも書いたが今、この時代の最高峯である「源氏物語」が「若葉の巻」で、如何に「女」の宮中の艶姿を描いてゐるかを見よう。「紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎ／＼に數多重なりたる差別花やかに、草子の端のやうに見えて、櫻の織物の細長なるべし。御髪のすそまでけざやかに見ゆるは絲を縫りかけたるやうに靡きて、すその總やかに削がれたる、いと美しげにて、七八寸ばかりを餘り給へる。御衣の裾がちに、いと細く小やかにて、姿つき髪のかゝり給へる側目、言ひ知らずあてにらうたげなり。」

支那文學では、髪（髪）の長さよりも「嬋娟たる兩鬢」を愛した。日本の中世でも、支那文學の影響の多いものに「髪（髪）の長さ」の描寫はない。髪は平安時代に比べると重視されなくなつた。でも「佛

御前は髪姿より始めて、見めかたち世にすぐれ」（平家物語）と髪を首位に置いてゐるが、「長さ」はやや閉却された。「太平記」は「顔うち傾けたれば、こぼれ懸りたる鬢のはづれより、にほやかに幽かなる容貌」と書いてゐる。しかし、同じ中世でも貴族文學の傳統を保つてゐるものには「御くしいとこちたく、五重の扇とかやを廣げたらむさまして、少し色なるかたにぞ見え給へど筋こまやかに、顔より裾までまがふすぢなくうつくし」（増鏡）の如き描寫がある。その長い髪も室町時代には「たけなる髪を高らかに結びなして」（義經記）になり、江戸時代初期には「髪はなげ嶋田に手鬘かけて對のさし櫛（好色五代女）をさすか、髪くるくく巻て」（好色一代男）もう長い髪は裾を引かない。

x x  
上代の日本の女が豊頬を美人の條件としたであらう事は、薬師寺の「吉祥天女像」及び正倉院御蔵の「樹下美人圖」を見ても分るが、これは支那の「西王母」あたりを典型としたものであらう。だから「貌容端正」「面容端正」「顔はなやかに」は勿論「豊頬」をも意味してゐる。「肥えて」「豊らかに」の言葉を用ひ始めたのは、その時「豊頬」のみが美人の不可缺條件では無くなつたと見てよい。清少納言の「いとよく肥えていみじう色白う」（枕草子）が、恐らく「肥えて」と書いた始めであらう。紫式部も「白ら美しげにつぶくと肥えたるが」（紫式部日記）と書いてゐるが、

此れは身軀だけでなく頬の豊かなことも意味してると思はれるしかし、「いと豊らけさすぎて肥えたる人の、色いと白くはひて顔ぞいと細かによく侍る」（紫式部日記）とあるのは「豊頬」を意味するものではないが必ずしも「瘦頬」のみを言つたものではなく「顔」の小さい事を云つたものであらう。「顔」の細く尖つた希臘式の端正な顔は、豊頬に反するものとして輕蔑された。「枕草子」は、「おとがひほそく、愛敬おくれたらむ人は、あいなうかたきにして」とはつきり書いてゐる。平安後期には「御顔のやうだい、ほそくもあらず、ふくらにもあらずよき程なるが」（清松中納言物語）と中庸を「よし」としてゐる。が「豊頬」の美は未だ失はれた譯ではない。「今昔物語」は、「ふくらかなる御顔をいふかたなくうつくしげに書いてゐる。

「頬」は、「目」「鼻」「口」と違つて、「場所」を持つてゐてもその境界ははつきりしてゐない。上代のやうに「頬」だけが豊かに膨れ上つてゐる「唐式美人」は、次第に「お多福」に轉落して行く。頬の豊かさは顔全體の豊かさの描寫の中に溶けこんでしまつたのである。江戸初期の「好色一代女」は「當世顔はすこし丸く、色は薄花櫻にして」と書いてゐる。江戸末期から明治にかけて、所謂「丸顔」が面長の顔にその席を譲つた事は、「瓜實に二丸顔」の俗諺がよく事實を反映してゐる。

「首」の美しさは、「精神的美」を持つ「顔」と、より「肉體的の美」を持つ「胸」「腹」をつなぐ橋としての美しさである。外に現

はれたる肉體である「顔」の延長としての「首」が更に内に陰されたる他の肉體への延長を想見させるところの美しさである。だから上代の女の首は美しくない。「唐代明器女人像」「吉祥天女像」(薬師寺や淨瑠璃寺の)鎌倉の「辨財天」の首は猪首であり、平安時代の女の首は「頸より髪をかいこし給へりしかば」(枕草子)黒髪や十二単衣に覆はれて見えず前述の「首の美」は消されてゐる。しかし後世、垂髪を「すべらかし」を結び上げるやうになると「首筋立のびてをくれなしの後髪」(好色一代女)で「首すぢの白き事」(好色一代男)が美人の條件となり「年の程三十四五と見えて、首筋立のび目のはりりんとして額のはへぎは自然とうるはしく」(好色五人女)の如く、首の美が重要な地位を占めるやうになる。江戸時代も後になつて「花魁鬢」が出現すると、首は所謂「襟あし」となつて、前述の「首」の持つ美しさを完全に現はすやうになつた。

手は白く細い事が美しさの條件である。「細い」ことは「富の觀念」と結びついてゐるさうである。「細い手」は「労働をしない手」である。「労働をしないでも良い手」は「富める者の手である」故に富める者の手は美しい」と云ふ論理が成立する。しかも男より女に労働しない者が多い。故に労働する女は更に卑しい。「労働をする手は太くて堅い。即ち卑しい女の手は太くて堅い」だから其のアンチテーゼとして「細くて柔くて」しかも

白い手が美しい事になる。漢文では「纖手」と言ふ文字で表現してゐる。紫式部は「空蟬」の手を「手つき瘦々にて」(源氏物語)と書いてゐる。後世「白魚のやうな手」と云ふ言葉で手の美しさを表現した。「爪」の美も「指の美」も亦「手の美」の一部である。西鶴は「手の指はたよはく長みあつて爪薄く」(好色一代女)と書いた。

女の「胸」の美しさは「乳」の美しさである。「古事記」では「沫雪の弱る胸」が歌はれたが、平安時代では「胸露にするのは、ばらぞくなるもてなし」(源氏物語)であつた。しかし着物を着てゐても「藍の御衣に透かせ給へる御胸の程」は「御乳のあたりなどわざと作りたらん物めきてかしげに、らうたく」(榮華物語)見えたに違ひない。が「乳」の描寫は非常に少ない。古人とても乳の美は認めてゐる。「乳はいと美しくしげにおはしますか、いたう硬るまで張らせ給へれば、白う圓く、おかしげに」(榮華物語)思つた事は事實である。それにも關らずその描寫は少ない。

「背」「腹」の描寫も稀少である。あまり美しくないからそれも一つの理由であるが、着物を着た場合この二つの場所が外部に現はれないからでもある。それに女の腹は妊娠のために美しさを失ふ。妊娠の女は醜い、それは腹の罪である。「醜い女」と「腹」の結びつきが、益々「腹」の美しさをなくする。「榮華物語」は「御腹いと膨らかにて」と書いてゐるが、これは尙侍の殿妊娠七箇



月の描寫である。唯、背中はその上部を「肩」として現はしてゐる。背筋の美しさは王朝時代、室町時代に認められなかつた事は事實で、江戸時代になつても「なよなよした女」は多く猫背である。「なよなよした美しさ」は曲線美であるが背筋の通つた美しさは寧ろその反對の直線美に近いから、この二つは兩立しない譯である。所謂「背線美」が云々されたしたのは洋式の服裝が移入されて背中が露出するやうになつてからである。江戸時代では、背中の上部だけが首と結びついて「襟足」と呼ばれ、その美しさが強調されてゐる。

「皮膚」の白い事も亦美人の要素である。そしてその「白さ」は「肌」の白さである。西歐の文學も「白皙」の美を稱するけれどそれには「顔」の白さも含んでゐる。しかし日本及び支那では「顔」は白くなくても良い。支那文學の影響してゐる「和漢朗詠集」には「翠黛紅顔」とあり、「太平記」では「桃顔」となつてゐる。西歐では顔の白さを「白大理石」に例へてゐる。支那及びその影響を受けた日本では「牡丹」に、「太液の芙蓉」に、「桃李」に、例へてゐる。牡丹も芙蓉も桃李も皆紅い花である。しかし人種の黄色い皮膚をしてゐるので、その顔の「紅さ」は出すには化粧を必要とする。「粉顔」(本朝文粹)「六宮の粉黛」と云ふ言葉がそこに生れてくる。

「紅顔」の重んぜられたのは「支那文學」移入後で、それ以前の「紀記」の「光る」輝く「清らかなる」からは、紅顔は連想され得

ない。しかし上代の埴輪で見る女子は、頬紅を非常に濃く塗つて居る。その後、平安時代にしばしば使はれてゐる「清げ」も、その連想は紅ではない。この時代の化粧法が「白」が主であつた事は、「中外抄」に「白物のみを付けてべにのうすきはわるきなり」とあるから確である。此れで見ると「顔」の化粧は白と紅を反復してゐるものゝ如くであるが、文學に現はれた描寫には「桃顔」「櫻色」が多く使はれてゐる事は前述の通りである。

しかし「肌」には、時代を通じて「白さ」が要求せられてゐる。「古事記」では早くも「沫雪の弱る胸」「袴綱の白き腕」を歌つてゐる。

「肌」は、正確な解釋では皮膚の總稱である。「寒風肌を刺す」「鮫肌」は皮膚一般を意味する。が「肌」は皮膚だけではない。「肌を脱ぐ」の肌は肩から胸に限定せられてゐる。又「肌を許す」と云ふやうな用法もある。けれども單に「肌」と言ふ場合には、手、足、顔、腹等一部分の皮膚ではなく、肩から胸に掛けての部分と呼ぶやうに思はれる。それは着物を着てゐる人間の隠れた部分の中で一番露はれ易い場所だからである。黄色人種の着衣の外に出てゐる所は、陽光のために色素が變化して「白さ」を保ち難い。しかし陰れてゐる部分は陽に當らないから白い。裸體でない女の白さを描く場合一番描き易い部分は何處たらうか。「白い」ためには普段着物で陰れてゐなければならぬ事が一つの條件である。しかもその「白さ」を描くためには屢々着衣

外に露はれなければならぬ事がもう一つの條件である。「雪の肌」「雪恥しく」等は大抵肩か胸の白さを言つてゐる。衣通姫等の場合は白い衣を通して輝く肌である。その輝く「白さ」は身體全體である。十二單衣の色衣は肌を見せない。又裾も長く引いて足も見せない。髪は黒、衣は紫、赤の色の間からちらついでこそ、その肌は雪恥しく際立つて白いのである。しかし「源氏物語」の「透き給へる肌つきもいと美し」とあるは「羅の單衣を着給ひて臥し給へる様」とあるから身體全體の事であらう。楊貴妃の「白く妙なる御はだへ」（太平記）は「御衣をぬき給へる貌」であるから身體全體である事は確かである。

「腰」の美しさは、支那では「細腰」「柳腰」で表現し、「太平記」でも「垂柳の風を含める御形」と書き、「伽婢子」は「腰は絲を束ねたるが如く」と書いてゐる。「なよやかに」とか「たをたをと」の形容は皆細腰である。腰の美しさは、顔の精神的なのに比べて最も肉體的のそれである。平安時代の貴族文化が翹然して享樂的に墮ちた反映である「狭衣」とりかへばや物語（「けざやかにすぎたる腰つき、色の白さなど雪をまろがしたらんやうに白うに、官能的である腰」の描寫の現はれたのは源氏にも少し見えるが）當然の事であり、元祿の町人（武士に比べてより享樂的な文化の反映である西鶴に、それがもつと變つた形で現はれたのも自然である。しかも「狭衣」の描いた腰か「たをたをとあ

てになまめかしう「御くしのひまひまより見えたる」のは、當時の貴族人の美的趣味を語るものと云ふべく、西鶴が「腰しまりて肉置たくましからず尻付たやかに」（好色一代女）描いたのは、これ又町人の趣味の反映であつて、より享樂の本質に近づいたと云へる。

「足」の美しさは、それ自體の美しさを描いたものは非常に少い。それは「歩みに結びつき、それを通して「腰」とも關連してゐる。支那文學にある「運歩」は細腰で細い足の女の歩き方である。「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」は、そのなよよとした美しさを現はしてゐる。

平安時代の「女」は、ある意味で靜物の如く描かれてゐる。金屏、脇息、繪扇、十二單衣、黒髪、そして女の肉體はその一部である。「髪」と「顔」が最も多く描かれる。繪巻物の女のやうに「顔を除いてじつとしてゐる。動いても動作は緩慢である。「あでになまめかしう「顔はぶらぶらか」でも身體全體の曲線の美しさは出てゐない。「大和繪」のやうに靜的である。西鶴の女の描寫はそれに比べると生々してゐる。そこには十二單衣や黒髪に従屬してゐる人形のやうな女はゐない。一朝妻は、立のびて腰つきに人のおもひつく所も有、脇鞆つくしく、鼻すぢも指通つて」（好色一代男）と、髪よりも腰を重要視し、一ぬき足中びねりのありき姿（好色五人女）を書いてゐる。それは浮世繪のやうに動的である。浮世繪の女は、皆靜止してゐる者は少なく、



多くはある動作の過程を示して居り、その結末を豫想させる。しかし「大和書」はあくまで靜的であつて、だからその動作を示すにはどうしても「繪巻物」の形式を取らざるを得ないであらう。古代の「女」の描寫は身體全體だつた。大和繪に於ける平安時代の「女」の描寫は、「黒髪」と「顔」であつて着物から出てゐる部分は皆身體の上部である。室町時代の「お伽草子」は、佛教の影響もあるが「三十二相」の具足を條件としてゐる。江戸時代の「女」の描寫は、今までにあまりなかつた「腰」や「足」をも含んでゐる。「居腰蹴山の道中」紅の脚絆蹴返しに見せて「世間娘容義」歩く事は運歩では出來ない。それを最も極端に表現してゐるのは浮世繪である。春信や豊信の描く女は、颯々、風に吹かれ、小猫に引かれ、はだかつた裾から白い足を露はしてゐる。

女の描寫は、殊に美しい女の描寫は時代と共に變つて行く。女の美の標準がかはり、その美しさを表現する言葉がかはるのである。女の美の標準のかはる事はその國の社會狀態の變化をも意味してゐる。その國自體だけがはるのではなく外國とも關連を持つてゐる。その變化は自國より高い文化を持つ國からも、又低い國からも受ける。奈良朝時代の豐額美人が「唐美人」と同型であつた事は既に説いた。その後日本独自の「眼が張つて口をすぼめた」日本型美人が「明治時代まで生き永らへたが、今の日本の美人の要素には多分に西洋の美人型の模倣がある。

それも端正なギリシヤ型よりアメリカ型混血種のそれである。日本的な美しい「いき」な女は最も古い傳統にしばられてゐる藝者に多い。

女の美しさを形容する言葉も時代と共に移る。前にも述べた「容貌端正」其の容姿甚麗（容姿）かりき（古事記）は、平安時代で「いとなまめいたる」（伊勢）いと清け（大和）になる。着物と髪の描寫は「大和物語」が恐らく最初で、「落窪」三津保で著しくそれが精細になり、「源氏物語」で最高峯に到達する。髪や顔、着物の描寫も著しく寫實的で平安式描寫の精髓と云へる。「狭衣」濱松中納言物語」とりかへばや「榮華物語」は源氏物語の延長にすぎない。時代を反映して官能的な要素がはひる。「堤中納言物語」は平安から鎌倉へうつる過渡期の女性美、前時代の繊細が刷れて、新時代の生氣ある清新さに移動する美を捉へた點で、その中の一章「蟲めづる姫君」は一つの高峯である。

支那式な描寫は早くからはひつたが、有名な「浦島子傳」の龜姫の「玉釧海上に映し花鏡船中に耀く」から始まる百字にあまる精細な描寫、それにも優る「續浦島子傳」の描寫も、和文の日記や物語には少しも影響してゐない。僅かに「源氏物語」に白樂大の影響がある位である。漢詩、漢文と、和文の間には遠い隔りがあり、此の二つは並行してゐる。漢文は支那式に形容詞が多く空疎であるが、和文は寫實的でしかもなよなよとした粘りのある文章がよく「女」の姿態を表現してゐた。鎌倉期にはひ

ると、和文も「物語」と「戦記物」の二つに分流し、「物語」は「松浦宮」「宇治拾遺」「住吉」「風につれなき」「岩清水」と貴族文化の型を保つてゐるが、「戦記物」は漢文調をとり入れて来た。従つて形容詞が多くなる。形容詞は、描寫の對象を寫實的に描く方法を止めて、その對象とは別な他の物を持つて來て讀者にそれを連想させる方法である。女の泣いてゐるのを「春の花の雨にぬれたらむよりも」「松浦宮」と描く方法である。樂な手法ではあるがそれを繰返せば固定した一つの概念になり、實體を描き出すことが出来なくなる。「松浦宮」は物語ではあるが漢文脈もあり佛敎的色彩もはひり、歴史物語にも影響し、後のお伽草子の先驅だとも考へられる。

「平家物語」は建禮門院の美しさを「桃梨の御粧猶濃かに、芙蓉の御形もいまだ衰へさせ給はねども」と書き、源平盛衰記は「翠黛紅顔の桃花よりも猶かうばしく玉の輝照る月の姿あたりも輝くばかりなり」「嫵媚たる兩鬢は秋の蟬の翼、宛轉たる雙蛾は遠山の色」「太平記」は「天桃の春を傷むる粧垂柳の風を含める御形」「芙蓉の眸、丹花の唇」と形容してゐる。平安時代の女の描寫に比べれば一つの墮落である。お伽草子になると更に佛敎の影響を受け「三十二相八十種好と飽き満ちて金色の如來のごとし」(「物見太郎」となる。

平安時代の寫實的方法、支那式の形容詞で寫實に替へる方法その方法の他に、「女」の美しさを描くのに他の有名な美人を持

つて來て「唐の楊貴妃、漢の李夫人もこれにはすぎしものを(「平治物語」と書く方法がある。これは一番簡單な方法である。それが御伽草子では「物に譬へば楊貴妃、漢の李夫人、我朝の衣通姫、小野小町、染殿の后、女御更衣と申すともいかでかこれに勝るべき」(三人法師)となつてくる。これではその時代の標準での有名な美人を列記して自分の描く女の美しさを強調したわけである。小野小町に似てゐると云ふだけなら未だ良いが、こんなに種々と異つた特色の美人を列記したら、描く「女」の實體は一向はつきりしない。「絶世の美人」と云ふ意味にしかならぬ。江戸初期の「假名草子」になるとまた酷い。假名草子は文學史的に云つて「どん底時代」だから無理もないけれども「うらみのすけ」では唐の楊貴妃から始つて五十餘人を列記した末「これにはいかでまさるべき」と結んでゐる。「薄雪物語」にも「十餘人列べてゐる。我々がこれで得る所は、その當時どんな女を美人と見てゐたかと云ふ事である。支那の女では、「平治物語」は楊貴妃、李夫人を、「太平記」は西施、楊貴妃、「曾我物語」は西施をかついでゐる。しかし全部を通過すると「楊貴妃、李夫人」が雙壁である。日本では、衣通姫、小野小町、染殿の后が一番多い。「源氏物語」中の女性はいくつかの人に引用されてゐるが、平安時代の菅原孝標の女は、「光る源氏の「夕顔」、宇治の大將の「浮舟」の女君のやうにこそあらめ」「更級日記」と書いてゐる。それは孝標の女の淋しい性格が薄命の此の二人を憧憬の女として選

んだのであらう。が江戸初期の「薄雪物語」では「女三の宮」と「朧月夜の内侍」を擧げてゐる。「夕顔」「浮舟」は源氏の中でも一番餘情のあるなよなよとした女である。それこそ「露と答へて消なまし」の例へに似合はしい女である。紫式部は「軒端の萩」「末摘花」のやうなあまり好意を持たない女をよりよく寫實的に書いてゐるので、きつと夕顔、浮舟に最も好意を持つてゐたのかも知れない。「更級日記」は當時のセンチな少女の着ひを語つて呉れてゐる。「女三の宮」「朧月の内侍」ほもつと現實的な女である。女三の宮は姦通の罪を犯して苦悶する女であり、朧月夜の内侍は、入内のすぐ前に他の男と道ならぬ契を結ぶ女である。「更級日記」の著者の時代と江戸初期の相違がそこに見られると解して良くはないだらうか。

平安時代の「物語」「日記」に見られる和文脈は、鎌倉室町時代に於いて漢文脈と握手して歴史物語の文體を生んだ。そして貴族文學の流を引くものも絶えず漢文脈の影響を受けて來てゐる。江戸時代になつても此の對立はつゞく。西鶴の文は和文體の濃いものであり、下つて曲亭馬琴は漢文脈が濃い。しかしそれも平安時代に於けるやうに水と油のやうに際立つたものではなく、兩者の間に絶えざる交流を見せてゐる。明治時代の紅葉と露伴は、その對立を示す最後の星であつた。明治も二十年代になると歐文體がはひる。それは主として翻譯者を媒介としてなされる。坪内逍遙は江戸時代的(歌舞伎的)要素が濃くてそれ

を拒んでゐたが、長谷川二葉亭はそれを自家のものとし、彼のツルゲーネフ「獵人日記」の譯の中の「あひびき」等は、歐文體を和文の中にとり入れてゐる點では劃期的なものであつた。漢文脈の概念的な形容詞の多い文章から、寫實的な細部描寫に富んだ歐文脈に移れば、その描寫の對象である「女」の描き方にも變化を見ることは勿論である。

x

x

私は、文學の時代的發展及び變化の根本が、對象の「見方」「描き方」にあると思ひ、その「見方」を變化させる土壌となる社會構造の變化の「基本的性格」を分析し、又「描き方」の變化では、外からの文學から受ける影響、それとの交流を見ようと考へる私の「日本文學に於ける女性描寫のノート」は「描き方」の變化を見るための材料として集めた。

此れは單なる覺え書にすぎない。根本の問題はまだ多く残つてゐる。ここでは女性の「身體」の描寫の抜き書にとどめた。一つの問題を論ずるために集めた資料に、逆にひきずられた形である。近々十日間で纏めた關係上、獨斷や誤謬は相當あると思ふが、それは許さるべき理由にはならない。他日纏つたものを書くつもりである。

#### 附 本文引用書目

平治物語

(大和時代)

和漢朗詠集(藤原公任撰)

古事記(平安高僧撰)

本朝文粹(藤原明衡撰)

源平盛衰記

- 風土記
- 萬葉集
- 平安時代(上)
- 日本書紀(景成傳)
- 浦島子傳
- 竹取物語
- 伊勢物語
- 大和物語
- 落窪物語
- 平安時代(中)
- 源氏物語(紫式部)
- 紫式部日記(紫式部)
- 枕草子(清少納言)
- 平安時代(下)
- 狭衣物語
- 酒松中納言物語
- (傳菅原季稔の女)
- 更級日記(菅原季稔の女)
- とりかへばや物語
- 榮華物語
- 大鏡
- 今昔物語
- 百鬼物語(年代?)
- 堤中納言物語
- 鎌倉時代
- 松浦宮物語
- 室町時代
- 太平記(小島法師)
- 増鏡
- 義經記
- お伽草子
- 江戸時代(初期)
- うらみのよけ
- 落窪物語
- 伽婢子(淺井了意)
- 好色一代男(井原西鶴)
- 好色一代女(井原西鶴)
- 好色五人女(井原西鶴)
- 世間娘存義(江島其雄)

# 「とりかへばや物語」 について

渡 部 榮

(一)

日本文学史における物語小説の最初の形を「竹取物語」におく事は現在の處一つの常識になつて居る。勿論、物語形態の發生的なものを探求して行くならば我々はもつとく、上代に遡行する事も出来るし、「説話文學」の分野に入つて行けば、時代的に見て「竹取物語」等は問題にならぬ程後代のものになつて来る。

併し、少くとも後世において種々問題視され、又それ故に實に多大の影響を後繼文學様式に與へつゝ、今以て鮮かしく存在する物語小説の始祖的集團の頂點に「竹取物語」を据ゑるといふ事は不法ではない。

「光りかどやく美しき赫映姫」を中心とする夢の世界の物語は、古代の白鳥傳説、羽衣傳説、神仙譚を消化して、高度のロ

マンテイツクな家園氣を如何に美しく表現して居る事か。

文體の生硬さ、叙情的用語の一律性といふ缺點を我々は充分に感じながらも、「竹取物語」の中から中古人の古い夢の一片や、祖先の人々の素朴な童心を感得する事が出来る。かくて「説話的素材を包む叙情詩」の出現を我々は此處に躊躇ける事が出来るのである。而もこれが當時漸く發達の途上にあつた假名文字によつて定著せられたといふ事が、そのころとしては非常に大きな事柄であつたに違ひない。

× × ×

その後幾多の群小作品が並流的に出現したであらうが、我々はそれ等の多くを現在見る事は出来ない、惟かに「宇津保物語」の傳奇性「落窪物語」の勸善懲惡（纏子虐め文學の始祖に推されて居る）を當代の代表的なものとして見得るにすぎない（散佚した物語名等は、かなりの數まで知ることの出来る方法はあるが、今これについての詳細は省略する）

これ等の二物語は「竹取物語」に比して確に數段の進歩を遂げて居る。例へば「宇津保物語」における場面の雄大性、描寫における用語の豊富さ、作品の多量性、又「落窪物語」における現實性、會話の巧妙さ等は長所として取り上げられて良い。

併し又一方、その後に出現した名作「源氏物語」に比する時、尙ほ幾多の未熟さを露呈することは否めない。

「宇津保物語」が隨所に陥つて居る荒唐無稽な構想、修飾用

語の極限性（特に誇張的筆致の多量に存すること等）——つまり「竹取物語」以来の傳奇趣味を遂に離脱し得なかつた安易さは指摘されねばならぬ缺點である。

又一「落窪物語」において自然描寫が全然用ひられて居らず、従つて叙述そのものが、かなり事務的に運ばれ、情感的に迫る「美」が無いこと等は長所とは言ひ難い。

かゝる歴史的な流動の面が「源氏物語」に至つて大成され、最も典型的な一つの姿態が出現したことは凡そ日本文學に關心を有する者の一様に認めるところである。

× × ×

「源氏物語」においてはその構想は決して傳奇的要素を狙つてはゐない。平安人士の眼にし耳にする眞實の生活が構想の基底に積たはつて來てゐる。自然描寫は實に單なる一片の背景畫ではなく、性格描寫、心理描寫と密接に連繫して、渾然と、表現の重心の一部と化し來るのである。用語、語彙の豊富さ、多様な性は又作者自身の精神生活の深さを湛へて、的確に情緒的默圍氣を構成して行く。

「源氏物語」が大成したものは單に前代の物語小説界における懸案だけではない。

永い傳統を以て日本文學の底を貫き流れる「大和歌」の精神、律調が描寫筆致の中に油然と浮び出してさへゐるのだ。「源氏物語」を稱して或人は退屈な文章である變化のない構想である

と譏る。併し我々は一應その言を認めようとしながら、尙ほ與し得ない淺膚さを感じないわけにはゆかない。

## 〔二〕

一口に言はせて貰ふならば「源氏物語」は、最も音樂的な作品である、場面の目まぐるしい轉換は絶無であるが、律動し揺動するリズムの中に作品の生命を託したものである。換言すれば和歌的精神を双手に關んで五十四帖の大篇の上に具現して行つたものと言つても良い。これに對して「枕草子」は何處までも俳句的特性を持つてあらう、生動しつゝある物を、その生動の姿態において捕捉して行く——而もその捕捉の方法が最も象徴的であり端的である。それは又「瞬間」を非常に重視するが故に最も繪畫的である。

日本における抒情文學の特性は和歌的精神を根基とする音樂的律動にあると理解し得るならば、「源氏物語」が抒情作品群の上位に在るといふことは極めて當然なことではなければならぬ。

× × ×

かくの如く前代文學諸形態の粹を輯めて巨篇「源氏物語」が完成されるや、その後に出現する群影の作品は、この巨大な紫式部の鋭感な觸手より、一步も踏み出すことが出来なくなつた。

構想といひ描寫といひ筆致といひ、總て殘滓の面影を宿すに過ぎない。例へば「狭衣物語」の如きは「宇津保物語」にかなり



の材料を仰ぎ、他は大部分「源氏物語」に依つてゐることが判然としてゐる。尤も「瀨松中納言物語」の如く舞臺の一部を支那に置いたといふエキゾチックな新奇を狙つたものも現はれて來て居るが、併し描寫の筆致においては「源氏物語」の影響を非常に多く受けて居るのである。又構想の一部さへも模倣して居る事がはつきりと指摘し得る。

斯くの如き「亞流時代」は相當長い間續いた——「戰記物語」出現に至る迄の物語作品は、殆ど全部その時代に包攝されて居ると言つて良い。尤も「戰記物語」出現後といへども平安時代風の物語作品が跡を絶つたわけではないから、實際においては随分後代迄連續として居たのであつた。而も「亞流時代」の悪質な特質たる換骨奪胎、剽竊等が平氣で行はれても居た。この様な環境において、素材的に全く特異とすべき「とりかへばや物語」が平安末期に存在したといふことは現代の我々にとつて非常に興味あることではなければならぬ。

現在我々が活字本として見る事の出来る「とりかへばや物語」は所謂「今とりかへばや物語」と稱せられるもので、これ以前に「とりかへばや物語」と名づけられた作品が存在して居つたといふことは「無名草子」といふ本や「風葉集」「拾遺百番歌合」「和歌色葉集」等の書に依つて明らかである。殊に「無名草子」には「とりかへばや」と「今とりかへばや」との兩書について批評が記してある。併し現存するものは凡て「今とりかへばや」で

あつて、それ以前に製作されて、存在して居つたと記されて居る「とりかへばや」は、今日までに一冊も發見されてゐなかつた。併し現存する「今とりかへばや」は「とりかへばや」の改作であるといふ事が研究の結果大體明らかになり、大凡如何なる構想のものであつたかといふ臆測を爲す處まで漚きつける事は出來たのであつた。

× × ×  
實は私も昭和十一年に「とりかへばや物語考」として、新舊兩「とりかへばや」の關係をかなり詳細に「國文研究」といふ雜誌に發表した事もある。けれども「とりかへばや」の寫本が發見されない限りは結局標然と解明するわけにはゆかない。最後は水掛け論になるといふ誠にはかない研究對象であつた。

従つて舊い「とりかへばや」の出現を望む事、實に切なるものがあつたのである。昭和九年の初夏であつたが當時文理科大學生會中であつた私は、四、五人の同志を語らつて、各人の研究題目の外に「とりかへばや物語」を共通の研究對象として一、二年頑張つて見る事に定めた。最初の間は面白味もあつて大分熱をあげたものであつたが、學力のバランスがとれなかつたり生活上の細かな事情等が介在したりして結局所期の結果を見ずに中止してしまつた。

### (三)

私はその後一人仕事を續けて地方の色々な文庫、圖書館に



旅行をしては異本の校合や書込みの筆寫等に出来るだけの時を費した。尤も、私の主要研究題目が「源氏物語」であつたから「とりかへばや」にばかり力を注いでゐたわけではないが、先づ現存する「今とりかへばや物語」の寫本は大體において見盡すことが出来た。校合、校勘といふ仕事は並大抵なものではない。一字々々讀み較べてその異同を確め、該本の傳流、系統をその仕事の間に究めなければならぬ。誠に根氣と精密さと精力とを要する作業である。

五十一部（中四部は私藏本）百九十四冊を調査し終つたけれどもそれ等の寫本は總て近世の新寫本で「無名草子」に所謂とりかへばやの本文に接することは出来なかつた。その間二度私は「古とりかへばや物語」以下總て叙述の便宜上「今とりかへばや」に對して舊い方を「古とりかへばや」と稱して行くの存在してゐる事を傳へ聞き一度は飛彈の山近くへ、二度目は四國の農家を訪れたが、二度共全くの誤傳であつた。學界が一様に「古とりかへばや」探求に對して絶望したと同様に、私も亦諦め始めて居た。併し私は「源氏物語」の研究において、從來やはり暫伏したと信せられて居た「從一位麗子本」を發見して居る經驗も有つたので、さう安易に斷念してしまふわけにはゆかなかつた。

× × ×

今度幸ひにして「古とりかへばや」を發見し得たのは勿論偶然と言はなければならぬ。私は東京在住中、その家の文庫の整理を主として依頼されて居つた某家が、家の都合で什物の一部を賣却するといふ事が起つた。その時に研究に必要なものだけを選定して一部は譲り受け、大部分は購入して私藏本としたのであつた。その中主要なものは「私家集」六十二部、百四十八冊であつたが、外に物語記辭類がかなり混じつて居る。全部の調査は未だ完成して居ないが私家集群の中には既に全く新しい系統の「定額集」を發見する事も出来た。『國語』昭和十三年一月號「新に發見されたる定額集について」

× × ×

「新なるものを見出す」といふ事は大抵の場合に「偶然」と言ひ切つてしまへるかも知れない。併しその「偶然」をして一つの形として捕捉する事は人間それ自身でなければならぬ。對象に吸ひ附いて離さない吸盤は生きて居るのでなければならぬ。本當に或對象を求めて生きつゝ待機する心構へが必要である。大きな、粘り強い網を張つて鋭感に充ちて待ち構へて居る蜘蛛の根強さがなければならぬ。これは國文學のみの事ではない。一本の草の新種を見出す博物學者にも、生きる大本を折學しつ

つある哲人にも共通の態度であり、又世上生活を孜孜として求め一般の人々にも相通する事である。対象を生かすのは主體たる自己以外の何物でもない。私は信じて居る。

最近の國文學專攻の大學生等の大部分は、研究そのものに廣さがないやうに感じられるのは淋しい。いきなり専門の對象に喰ひ付いて奥へ急がうとする。作品をあまり讀まない——讀まないで居て批評をし論作をしようと企てる。これは眞の意味での研究の名に値しない事は自明の理であらう。そのやうな態度の中に難やかしい根據のある業績を期待することは出来ない。

國文學の研究は、先づ作品を讀みこなすことより外にない。出来るだけ多く、出来るだけ精密に、出来るだけ早く讀んでおかなければならない。批評や校勘や分析や論作はそれからの仕事なのである。

#### 〔四〕

さて一とりかへばや物語の大體について叙述するにあたり、便宜上、今とりかへばや一の梗概を記し、後に一古とりかへばや一との異點を指示する事に依る方法をとりたいと思ふ。

何時の頃であつたか權大納言で大將を兼ねて居る人があつた。奥方が二人居る。一人は源宰相の娘で、この人の腹に男の子が一人生れ、他の一人は藤中納言の娘で、この腹に女の子が一人生れた。二人の子は實に良く似て居て可愛らしく美しいが、

奇妙にも男の子は女の様な性質で、女の子は反對に男のやうな性質であつた。父の大納言はこの様子を見て何時も「あゝ、性質をとりかへたいものだ」とかへばや」と思つて居られるが如何ともしがたく其の儘性を違へて育て上げて行く。其の中に女の子は男になりすまして待従になる。父大納言の兄君右大臣の子に娘が四人居るのであるが、上の姉君は女御に、中の姫君は春宮の女御になつて居り、四の君は容貌美はしくて噂に高い。その爲、この四の君を待従に娶はせようと兄君は心に定めて居る。(待従が實は女である事を知らないから)

處か此處に帝の御叔父式部卿宮の一人子で宰相中將といふ色好みの美男子が居る。待従と親く交はつて自他共に許した親友である。彼は心の中にもし結婚するならば待従の妹(實は男であるが男とは知らないのである)か或は四の君でなければ駄だと密かに考へて居る。その頃帝は御讓位になつて朱雀院に居られ、今は亡き後の御腹に唯一人御生れになつて居た一の宮女を春宮に立てさせられた。(即ち女身の春宮である)待従は出世して三位中將になる。やがて四の君と結婚し、權大納言、左衛門督に進む。中納言は十六、四の君は十九の似合鸞鷲であつた。中納言は實は女であるから、二人の結婚生活といつても名ばかりで、實の契があるわけではない。その中に一月毎に四五日ぞ、怪しく所狭き病の、人に見えかゝづらふべきにあらぬを、もの

けの起るをりくゝの侍ればとて、御乳母の里にはひ隠れ給ふ一  
（別に中納言、女は妻の四の君を疎んずるといふやうなことはなかつたが、唯毎月きまつて四、五日だけは一時々ものけが起るもんだから）當時は病氣の原因は死靈、生靈の呪ひの仕業であると考へて居た）といつて乳母の里に身をかくして居られる。四の君の親達は、一體どんな事情なのかと不審に思つて居られる――實は女の身であるために月水の來潮があつたわけなのである）といふことになつて、我が身の尋常人にあらざる生活に氣付くが今更如何ともしがたい。妹（實は男）は春宮（女）の御後見役として宣耀殿に入り尙侍となり、中納言とともに自分等の境遇を聊ち合つてゐる。

その中に例の宰相中將が、箏の琴を弾いてゐる四の君に魅せられて遂にその夜契を結び、後四の君は妊娠する。夫たる中納言はこのことを感付き、我が身のうたてさ、妻のあさましさに世をはかなみ吉野の山に遁げ入る。其處には先帝の第三の皇子が唐より歸つて、唐の女との間に出來た二人の姫をかへて住んでをられる。中納言はこの宮に會ひ、頼もしさを感じつゝ、一旦歸京する。

四の君はその後女の子を生む、暑い一日中納言はうつかり衣を脱いで寛いで居る處に宰相中將が來て、ゆくりなくも中納言が實は女である事を看破し、あながちに契を結ぶ。身の秘密をすつかり見現されてもはや氣力もなくこの事は貴男だけの胸に

止めて、世間には沈黙を守つて下さるやうにと依頼する。その中に妊娠して居る事に氣付く。翌年の春、中納言は右大臣に進み、宰相中將は中納言に墮る。右大將（女）は再び吉野の宮を訪れて、七月のころにもう一度來たいといふ旨を言ひおいて御産の爲に宇治の中將の別荘に身を隠す。都では大變な騒ぎになり四の君は又不義の件が知れて勘當になる。其處で尙侍は我が家でひそかに本來の男姿に立ちかへり、右大將（女）の跡をたづねて吉野に入る。

### 【五】

或夜父の夢枕に一人の僧が現れて

「……昔の世より、さるべきたがひめのありし報に天狗の男は女となし、女をば男のやうになし御心に絶えず歎かせつるなり。その天狗も助つきて、佛道にこゝらの年を経て、多くの御いのりどもの験に、皆事なほりて、男は男に、女は女に皆なり給ひて、思ひのごと榮え給はんとするに、かくおぼし惑ふに、いさゝかの物の報なり」

と言つて消える。其の翌朝、尙侍（男）より嬉しい便りが送られて來る。一方吉野に於いては兄妹は態々此れを機會に身を替へて、男は男とし、女は女として世間に再出發しようとして、お互に今迄の生活を上手に糊塗して行く爲め練習に餘念が無い。やがて身を替へて京に歸つて來る。右大將は吉野の宮の姉姫を妻とし、不義の妻四の君の面倒も見てやる事にする。吉野の宮

の妹姫は中納言（元の宰相中將）の妻になる。尙侍（元は男裝して居た女）は御子を生んで後女卿、中宮になれる。中納言は今度の右大將は確に男であるのを見て不思議で仕様がなすが、宇治の自分の別荘で子を生んでから後行方不明になつてしまつた女（元の女右大將）の事を何時も心に思ひ浮べて居る。（昔の右大將は今の尙侍であるといふ事を氣付かないのである。）

宇治で生れた中納言の子（女右大將と中納言との間に出来た子）は殿上して幼い可憐さを發揮して居る。此を中宮（元の女右大將）は御覽になつて「あゝ吾が子だわい」と思はれるけれども、親子の名乗りをする事が出来ない。悲しい氣持を抱きつつ他所ながら愛せられる。さうかうして居る中に皆次第々々に官位が降り、平和の日が流れて行く。

宰相中將といふ人物が存在する處から筋が複雑化して發展して行く粗み立てになつて居る。

性の倒錯症状が天狗の祟りであるとして居る處は素朴幼稚な時代性を反映したものであらう。この「今とりかへばや物語」は種々の點において前代物語作品の影響を多分に受けて居る。

例へば「吉野の宮」は「源氏物語」宇治十帖における「八の宮」及び「瀨松中納言物語」の吉野の尼君を基にして構成されたものであらうと思はれるし、「宰相中將」は又「瀨松中納言物語」の「式

部卿の宮」に取材して居ることが感得される。その他筆致において殊に「瀨松中納言物語」の影響を受けたことは甚だしいのである。

今その一、二の例を見ると

○心深けにうちながめたまへる御さまは、只今極樂の迎ありて、雲の上に乗るとも立ちかへり見すぐしがたき御けしきなり（瀨松）

△光を放ち、はなんゝとめでたく只今極樂のむかへありて、雲の興よせたりとも、猶とどまりて見まほしき御ありさまなり（今とりかへばや）

○蓬萊洞の月と、いと若やかになつかしきこゑを合せて誦じさくらひしこそ（瀨松）

△蓬萊洞の月と、こゑは似るものなくすみのぼりたるを（今とりかへばや）

又「狭衣物語」夜半の寢覺の影響も歴然として居る。然らば「古とりかへばや」は如何なる點が異なるのか。今此處に詳細をあげる事は紙面の都合上出来ないが主要點については簡明に記さう。

先づ第一に氣付く事は四の君が「今とりかへばや」では不貞な妻として登場するが、舊作においては宰相中將と通じることが如き事は無い。誠に淑やかなかしづきの妻として描かれて居る。

従つて又宰相中將は「今とりかへばや」の如く漁色家として

現れて来ない。一途な、寧ろ純情家のタイプとして登場する。舊作における宰相中將は多分に「源氏物語」の光源氏に取材してゐることを指摘することが出来るのである。

〔六〕

次に「今とりかへばや」では活躍しない人物がかなり多く動いてゐる。例へば吉野の宮の處で一才顔を出す老年の僧は數首の歌を作り相當に廣い活動圏を持ち、今本では全く影をひそめてゐると言つても良い四の君の母が生き／＼と活用されて居たり「源氏物語」帚木卷を模倣して雨夜の品定め式に物語作品の批評をし合ふ場合の話者の添加等がそれである。この品定めは確に模倣が露骨すぎて底の見え透く程度のものであるが、其處に語られる物語りの品は非常な研究的興味をあたへてくれる。

其處では凡そ十一篇の物語りが談じられてゐるのである。

次に驚く事は描寫の怪異である。男、女たがひに本來の姿に返る部分の筆致は「古本」の方が遙かに怪異の念を深めしめる。描寫が、この部分から後半漸くは極めて繪畫的に、生動性のピツチを加へてもせられてゐる。

殊に我が身の運命を豫知するために鏡を覗き込めば、ピカピカと光り輝く鏡面は一時にギラ／＼と凄味を帯び、やがて光が底に吸はれるやうに靜まると髪ふり亂した女の顔がかすかに浮んで来る。何處からともなく經文の文句が漂つて来て、やがて鏡面の影は消える。すると唐造りの髪飾りを髪に飾りつ

けた美はしい女性の姿が浮んで来る。その背景には何萬とも數知れぬ侍女風の女が居並び、音楽がゆるやかに天上樂を奏してゐる。

この邊の描寫は實に良い「鏡」を運命判斷に使つたり、又「鏡」に夢のやうな浮影が出ると言ふことは「更級日記」(この作者は孝徳の女で、「濱松中納言物語」の作者に擬せられて居る人である)及び「松浦宮物語」に見出すことが出来る。この三者の製作年代の先後を見究める上にこのことは極めて興味ある素材であると考へて居る。

× × ×

一體古本は最も多く「源氏物語」の後を慕つて居る事が判るのであるが、又「濱松中納言物語」を模したと思はれる部分も考へられる。従つて「古とりかへばや」は「濱松中納言物語」以後の製作たる事は疑ひない。

「今とりかへばや」は種々の研究の結果、先づ一七八〇年(保安元年)前後と私は推定して居る。もし「濱松中納言物語」を遊説の如くに藤原孝徳の女の作とすれば、一體一七二〇年(承永五年)前後となる。従つて「古とりかへばや」の製作年代は一七二〇—一七八〇年の間とならう。

然らば此の新舊兩作品の何れが優れて居るかといふ事になれば、私は何等の躊躇なしに「古とりかへばや」と言ひたい。

性の倒錯症といふ空前の素材を捉へて来て、其れを生かすに

怪異な描寫を以てした手腕の如きは今本に比して遙かに傑出したものである。又涙を誘はれる様な、ほのかな情感のたゆたひも隨所にある。

× × ×  
若し私の印象にして果して正當なりとすれば何故に「古とるかへばや」は「今とるかへばや」の姿にまで改作されねばならなかつたかの問題が残されるであらう。

其處で私は次のやうに答へたい。

當時の讀者層は新しい素材に對して好奇の眼を動かし始めては居たが、未だ「源氏物語」的なるものにより多くの愛着を感じて居たに相違ない。

殊に宮中にまで盜賊が押し入り、女をさらつて逃げて行くといふ時代であつた。又捨てられた人間の體が、加茂川邊で、翌朝は野良犬に喰ひ盡されて居た時代であつた。死靈を信じ生靈におびえ、薄暗い家居の中で青白い生活を送つてゐた時代であつた。當時の人々は、如何に「怪異」に對して敏感に恐れおのゝいたかは現在の想像以上のものがあつたらう。

〔七〕

河原の院で「夕顔」が怨靈に取り殺される場面や、「六條御息所」の生靈に取りつかれる「葵の上」のすさまじさはひしひしと讀者の胸奥に響いたに違ひない。

この様な環境にあつた人々にとつて怪奇に満ちた作品は、あ

まり歡迎され得るものではない。作品の怪奇性が直に讀者の生活感情を脅迫して行くが如き刺激は喜ばしいものでは無いであらう。

淡い感傷的な美感に酔ふ雰囲気 それを讀者は求めて居たにちがひない。

現代の小説感覺より見るならば遙かにすぐれたものでもあつても時代風潮の壓力は、結局、より「源氏物語」的なるもの、抒情的なるものへと移行せしめるべく加はつたにちがひない。

「無名草子」にも「今とるかへばや」を、舊本に比してまさつて居る、改作するならばこの標にしてこそ改作の價値ありと賞めちぎつて居るが、これも亦抒情的なるものを追慕する精神の熾烈なる爲、この物語の持つ獨自性が顧みられなかつたのである。

× × ×  
擬反後にかゝる素材は如何にして思ひついたか即ちモデル問題が残されるのであるが、私は案外素直に考へて居る。つまり、この様な素材は、作家的素質を持つた人に依つて、容易に物語的扮飾を施し得るやうな事實として當時もあつたものと考へる。

「男裝の隠人」、「女裝の男等」といふのは現代においても有り得るのであるから、これをモデルの一部に仰いで脚色して行けば相當に異色ある構想が出来ないわけではない。



事實、平安時代の説話文等を見れば、巷間から拾ふ話材としてかなり面白い奇習、奇行が澤山ある。又平安末期の短篇物として堤中納言物語中の蟲めづる姫君の如き變態性の素材も現にある。

要之、素材は、遠く支那にこれを求めたものでもなく、又全然假定のものでもない。世間にある事や事象を基底にして作家が想像をめぐらし、怪異的、探偵趣味的作品が出来上つたと考へられる。

少く共現代の小説観より見るならば、従来「とりかへばや物語」にあたへられてゐた評價以上のものをあたへなければならぬのである。

殊に「古とりかへばや」は一層「現代的」なる相貌を呈してゐる點、作家の有數なる特異性を認めなければならぬと信ずる。



# 火野葦平論

—小説論として—

木 崎 龍

「糞尿譚」の主人公彦太郎は、燦然ときらめく夕陽のなかに頭から糞尿をあげ、昂然とたちあがるのである。初めて知つた自分の力に對する信頼によつて、彼は「一匹の黄金の鬼」と化するのである。夕陽の光をふりそゞくさまはまことに凄絶な風景であつた。彦太郎は以前に巷に糞尿があふれ、彼をさげすみ彼を辱げた市民たちが、その黄金の波に浮沈する夢をみてゐる。そのときも太陽は燦然と照りかゞやき、その世界を莊嚴なものとした。

彦太郎は、事あるごとに「今に見てをれ」と呷き、あるひは呷鳴ることで生きていける男である。棚から徳酒に一升徳利を下ろし、壽限無壽限無といふ「長久命の長助」の長たらしい名前を早口で言つてみて自分の馬鹿でないことに安心し、さて酒をのみ、飯をくふ男である。かうした男は、とりたてて、いふ程特異の存在ではない。また、幾多の小説家たちが、かうした存在を類型化するまでにとりどりに描いてきたタイプなのであ

る。だが、そこでは、どんなにそれぞれの類型が、くつきりとおのがじじの枠にはめこまれ、つゝましく自己の世界をまもらされてゐたことであらうか。

火野葦平は、彦太郎をそんな窮屈な檻のなかにとちこめておけなかつた。彼は「彦太郎」と親しくし「彦太郎」を愛したからである。「土と兵隊」の卯平と吉藏との話だつてさうである。火野葦平は、やがてそこに親和力をみ、そこへ彼の文學の場を築いたのである。

私は「糞尿譚」以前の彼の作品をしらないけれど、しかしこの小説だけでも彼を理解できると思つてゐる。彦太郎は、こゝでは茫漠とした世界を自分の周圍にひろげ、あまりにも人間臭い赤團氣をひきづつて歩いてゐる。「黄金の鬼」はたしかに刺戟が強すぎる。當時批評家たちがこの點を責めてゐたことを私はおぼえてゐる。だが、それが何であらう。彦太郎と黄金の波と燦然と輝く太陽とは、まことに似つかはしくびつたりした光景ではないか。さうして、正しくそれは作者火野葦平の姿なのであらう。

それは恐ろしいまでに壯大な世界である。太陽が莊嚴であればあるほど、それは悲しい。涙にくもる眼には、壯大さの輪郭さへぼやけて定かでない、宿命の驕さへ濃いではないか。線が太さうでゐてほんのわづかのつまづきにも胸をいたため、いたましさになわなわと唇をふるはせもする。それをかくさうとしてわざと、大胡坐をかいてみる。だが、すぐに彼はたつて歩きだ

す。歩かずにはゐられないのだ。

火野葦平とは「文學の鬼」である。既にみたやうに、彼は「彦太郎」への親和力において文學する場をきつてゐる。彼は小説へと驅りたてられる。かつて「山上軍艦」に遊んだ彼は、その遊びさへもが彼の文學となる。彼は逆しい生活人として文學を生き、やがて文學の鬼となる。

「文學の鬼」の何と有り難いことか。梶井基次郎がありその前に芥川龍之介、さうして北村透谷があつた。鬼は常に文學の最高峯にゐるとは限らない。しかも、鬼は常に悲劇的存在であつた。悲劇を壮大な世界に高め自己を貫かうとして、彼らは倒れた。だが、火野葦平は別の途にかうとする。彼は戀愛を秘論とする人生にも、ニル・アドミラリに自己を浸潤させることにも、樺燦の爆發にもう一人の自己を呼ぶことにも、その何れにも宿命を負はなかつた。彼はたゞ眞直ぐに「彦太郎」の中にはいつていき、白日の下の人間の愛しさに憑かれる。そのハレーシオンはだはまだ定かではないのだ。

彦太郎は大道寺信輔と背中合せに立つてゐる。信輔は彦太郎を嫌ひ彦太郎も信輔を折合はぬかも知れないが、しかもお互にそれとは氣づかず、背中合せに云つてゐる。人びとはそれを見ず、また見ようとはしない。事實、文學の職人どもには、そんなことはどうでもいいことなのだ。だが大事なことは彼等が背中合せに立つてゐるといふこと、そのことなのだ。ことによつ

たら、彦太郎は信輔をひよいと背負ひ眞直ぐに自分の道を歩きだすかもしれないのだ。

「經濟滿洲」に「麥と兵隊」のことをかいた時、私はまた「糞尿譚」その他をよんでゐないで、しかも「麥と兵隊」のある今作者が私であるなら「糞尿譚」やその他の作品は葬りさつてもいいと考へた。「糞尿譚」をよんだ今、やはり私はさう考へてゐる。なせならばそこでは彦太郎は歩きだしてはゐないからだ。黄金の鬼を赤々と夕陽の照らす壮大な世界も、夕陽が沈めば壮大さもくづれ、彦太郎は歩かうとする意欲さへ喪ふのであらう。それはむしろ悲歌の場所である。「糞尿譚」のよしあしの問題ではないのだ。火野葦平の文學の座標が問題なのだ。文學の鬼となるかにみえた横光利一も、たゞびとになりをはつたが、火野葦平とて歴史的な存在ではないのである。しかし、皇軍は彼を召し、彼は聖戦の勇士となつた。火野葦平は大きな轉機に直面したはずである。彼は今年の初めごろの手紙に、かうかいてゐる。

戦争から歸れば戦争小説が書けると思つてゐたが、戦場の中に来て今は生きて歸つては戦争については何も書けんだらうと思つてゐる。(中略) 世界大戦の後十年経つて「西部戦線異状なし」はか「一九〇二年級」などの傑れた戦争文學が生れたことの意味が初めて分る氣がする。

(「文藝春秋」三月號)

倉皇の手紙であらう故に、彼がレンの「戦争」をいはず、「一九〇二年級」をあげてゐることが、私の興味をひく。「糞尿譚」を擧ること「糞尿譚」にむすびついた火野葦平とは、決して矛盾するものではない。「西部戦線」や「一九〇二年級」の「意味」は、壯大な鬼の世界を解く鍵ともならう「生きて歸つては戦争については何も書けんたらう」とする言葉に私は火野葦平の大きな飛躍を讀まうとするのである。すでに彼は「土と兵隊をかき」「麥と兵隊」をかいたではないか。文學的表現を拒むほどの戦争は大きく深く烈しく、それは人間を心底からゆすり毀へすぐれた個性はその蕩揺のさなかにまことの灼くがごとき意欲で眞實へ手をさしのはず。さうして「文學の鬼」はそれを掴み自らを早示したのである。

それが手紙であり、日記であつて小説ではないといふことはあくまで事實であつて、それがすぐれたものである故に、小説との境界をばかすやうなことがあつてはならない。また、その故に、「小説」をいやしめてはならないのである。むしろ、私はその故に、こゝに「小説」の勝利をみるのである。火野葦平が「現在」戦争の中に置かれてゐる一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも亦何か役に立つことがあるのではないかと考へて、取りあへず、ありのままを書き留めて置かうとしたとき、その同じ一人の兵隊は文學の鬼であつたのである。このことが大事なことなのである。戦場で毎日書かれた日記、船

中で、また戦場であつた手紙は、燃える如き文學精神の昇華だつたのである。私はいまさらのやうに、文學の全人格的なものであることを言はずにはおれない。個の充實と、個の全體への融合、さうして響える個の高さ―私はそこに文學の光榮を言ひたいのである。小説を輕蔑し、從らにルポタージュに期待しさらに「戦争」が何ものかを生むであらうとする依賴的な安易さ―そんな追隨的な心情からは何物も生れはしないのである。サンビエールの「ポオルとヴィルデニイ」は十八世紀人を驚かし十九世紀の子に散文の魅力を知らせたのであらう。だが今われわれは「土と兵隊」と「麥と兵隊」とに接して、改めて小説の本質に思ひをひそめねはならないのである。それは火野葦平だけの問題ではない。實に文學そのものゝ問題なのである。

私は過日ラヂオの放送で、金子鯨鱗草氏の「時局と俳句」といふ趣味講演をきいた。その戦場で作られた多くの將士の俳句に涙にじみ胸迫る思ひできゝ入つた。それは單なる記録や報告の魅力では斷じてない。生命の燃え上り流動する、昂揚する人間人情のぎりぎりにつきつめられた偉大な昇華が、俳句（詩）の眞髓をゆすぶつたのである。そこに人は、かうした限られた詩形式のうち、藝術家（特定の職人ではない）の鋭い眼と限りない誠實とが、人間と現實とのまぢり氣ない眞實を把握してゐることをみるであらう。こゝに私は文學の勝利をみるとともに求心的集約的な詩の世界から出て、やはり知的思惟を現實の感

情的思惟へと結びつける藝術的形象に思ひをはせねばならない。散文——小説の世界である。

詩の最も純粹な高翔の場面でみた藝術家の鋭い眼と限りない誠實とは、單に詩形式のためにばかりあるものでなく、それが藝術を形成する基本的なものであることはいふまでもないことである。私が先に、今更のやうに藝術の全人格的なものであることを言はずにをれなかつたのもそれである。私はさらに以前の文章で、滿洲に文學を建設するその根柢に自我の確立を強調したのも、それを言ひたかつたに他ならない。いま、火野葦平の二つの記録がひしひしと私たちをうち、汚れない感動の深さで私たちを法悦の境におくことも、たやすく理解し得ることなのであらう。

だがそれだけで小説は完全しないのである。小説は二つのモメント——具體的な一定の社會と時代との外部的特徴と、形象概括された表層下の社會的な力、本質、現實的歴史的内容などにより深い暗示、それを缺くことができない、このモメントの上に小説はなりたち、その故に小説はむづかしいのである。その方法を、私たちはリアリズムと呼びうるのである。それは、あらゆる藝術に正しい進路を見出すけれども小説において私達は、その名のもとに、現實の感性的生活的な具體性の獲得へ努力するのである。

形象の歴史的内容に、私達は國策を理解し、「聖戰の意義」を

理解する。さうして理解は私たちの現實への感性的把握と結びつき、ただの文學の上ではなく、私たちの生活に血肉となる——そこに小説があり、小説の本質があるのである。いふまでもなく私は外面的なりアリズムについて言つてゐるのではない。それは、たとへば蕪リアリズムなどの言葉で斥けられてゐるし、自然主義文學をみじめにしたものとして、私たちはすでに文學史の領域でそれを知つてゐるはずである。しかもそれに代るものとして、私たちは甚だ貧しい文學史しか持たなかつたのである。泡沫のごときロマंचイズムなどを、何で私たちが信用しようか。と同時に、私たちは私たち自身のもので、リアリズムを持たうとしたであらうか。リアリズムとは「白明の理」なのではない。

支那事變は、私たちの生活のあらゆる部分に反省と檢討とを要求した。「知性の改造」さへも叫ばれ、東亞協同體に私たちの場所が蕪播する。それは、私たちの狼狽の隙ではなくして、私たちの前進の序説でなくてはならない。さうして「土と兵隊」が文學の序説の語り手とならうとする。

十一月三日聲明は、正に東洋を歴史的にも地理的にも訓さうとする意義深いものであつた。それは日滿支に互助連環の關係を設置し新文化の創造を豫想してゐる。新文化の創造とは、如何にして果されるのであらうか。私たちは、今こそ新しい合理的の精神を持たねばなるまい。私たちはあまりにも知性と合理性

との不當に評價され歪曲されてきたのを見た。そこには激み朽ちて排撃に値するものゝ多くはあつたが、ともに徒らに自由主義、個人主義としてその腐れ縁のなかに知性の誠實はおほはれたのである。

私たちはいま、東亞協同體に新しい文化の母胎をみようとする。しかも、そこに世界的意義を興へ得るものは何であるか。それこそ、歴史の理性に答へるに足る知性であり、建設へ立ちむかふ新しい合理精神でなければならぬ。西歐を物質的であるとし、東洋を精神的であるとして能事をはれりとするがごときは、自らを低俗におき、自らを主張する力を喪ひ、東亞協同體を昏迷に墮せしむるに過ぎぬ。流動してやまぬ私たちの理念はこゝに生々發展する形式のなかに、新しい知性の呼び聲をきかねばならぬ。神話は、それが創造の名において齎され、現實を反映する讃歌として、世界秩序の確立につなるがるとき、世紀の眞實となる。徒らなる「神話」への怒號に、人は期待し得る何もも持たぬ。かくて私たちは、あるべき文學の場所をみるのである。

あるべきとは、しかし、現實に立ち、過去に負ふところのものである。過去との絶縁に氣負ひたつとしても、大言壯語から引きたされるものは、砂上の樓閣に外ならぬ。揚棄とは、まことに微妙な言葉であるが、私たちはその合理性を思はねばならぬ。

火野葦平は、彼の途を往く。「糞尿譚」から「土と兵隊」まで「兵隊」へ流れるものは、彼のゆるぎない文學の場である。しかしその流れは同じではない。彼は大きく激動し、そこに作家の變貌の場所があるけれども、それはまた人間の變貌のそれでもある。むしろ問題はこゝにあるのであつて一人の兵士が文學の鬼であるところに、小説を語り得る大きさと喜びとがあるのである。二つの記録が小説ではないといふことに、文學的表現を拒まうとする巨大な現實の前に謙虚に、だが貪婪に眞實と人間とを觸まうとする作家の姿勢に、人はより多くを見なければならぬ。

その姿勢を「糞尿譚」でみられ得なかつたのではない。しかし今は「葦太郎」を歩かせるために火野葦平は、さづ自分が歩くのである。彼は大きく悲劇をのりこえるのであらう。この點で二つの記録が、變貌の過程をはつきりしめしてゐるのである。彼が「葦太郎」のなかにはいつていき、人間の愛しさに憑かれたときに白日の光は強すぎ、彼は過去の文學の鬼に宿命を負はなかつたとはいへ、自らその絆を絶つことはしなかつた。定かならぬ壮大さの輪郭のうち不安を逞しさの外観で蔽つた火野葦平は、だが戰場にあつてむきたしの太陽の灼熱するのみをみた。

小説の困難さを私はみた。火野葦平から、それをひきだした私はさらにそれを火野葦平にむすびつけよう。二つの記録は、

散文精神の勝利であるけれども、小説の問題はその先にあることを知らねばならぬ。それは未來を現實に讀むところの、本質的なりアリズムの再建でなければならぬ。歪められた卑俗體験主義と目的主義は、斷じて粉碎されなければならぬ。それは文學を審する以外のものではない。記録文學への無軌道な呼びかけからは、何ものも生れはしないのである。

與へられた紙數をすでに超えてゐるので、私はもう止めねばならぬ。遂に「火野葦平論」ではなかつたし、小説論さへ不十分であつたが、かうした取上げ方も許して頂けると思ふ。



## 室生犀星の圖

宮井一郎

つまり批評と云ふものは或る隙さを持つてゐる作家の首すぢをつかんで投げ出すか、そいつの臟腑のやうなものをつかみ出すかしてやはり立派さを見つけてやるのが本統であらう。

—室生犀星—

九三四年から一九三五年の春にかけて室生犀星は、「洞庭記」「あにいもと」「神々のへど」「醫王山」「神かをんなか」「チンドン世界」「悪い魂」「會社の圖」「女の圖」「野人の圖」「并野圖」「獵人」「弄獅子」並びに「女の圖」の續篇及續々篇たる「姫」等を矢継ぎ早に發表して、毀譽褒貶殆ど相半ばする轟々たる世評を捲き起した。

世評の一は正宗白鳥、川端康成、新居格等の小説家批評家によつてなされた可成に思ひ切つた讃辭である。

「神々のへど」——たゞ讚美の情を發表しておくことでいゝとおもふが同氏の複雑さといふことはまことに魔物であるといつ

加へよう。色々な糸を巧みに伏在させてあやつるのである。その心魂がどこにあるかさへ、われ／＼未熟者にはわからないのである。

しかしこの心魂の所在がわからないといふことは勿論われわれの至らぬ爲ではあらうが、同時に、遂に室生氏に呈すべき疑問にもなり得るのである。時としては露骨にはつきり見せてもらはないと、われ／＼は感歎しつつもこれは何所へ行く道路だらうかと懷疑につままれる。(川端康成「傍點宮井以下同類」)

その二は矢崎弾、板垣直子、立野信之等、氣鋭の評論家による頭からの拒否嘲罵である。

「出來犀星は初期の官能のすがれた時すでに散文の追求精神からみはなされてゐた。あるひは心裡の扮飾に疲れを慰しつゝあるひは個物の丹念な鑑賞に逃れて、發展のない自我意識をねむらせることばかり考へてゐるやうである。(中略)自我の行方をさかし忘れ、情感の生身を出し惜んだりアリズムのあはれな彷徨のすがたである。」(矢崎弾)

世評の第三は片岡良一、三枝博音、芹澤光治良等による、現在の犀星の藝術を其は其として或る程度の存在價値を認めつつも、殆ど其發展性を否定せるか、或ひは其に大きな疑問を投げかけたものである。室生犀星の作品など第一の遣り方の例として挙げられる。第一の型とはなるべくその對象以外のものに類



はされないで、觀照の力をこれに集中し靜かにこれに迫つて行く。さう云ふ把握の仕方である。第一の型からは、エンゲルスの見たバルザックの様な作家が成長しないことは確實である。バルザック及其以上は、第二の型に屬すること云ふまでもない。

(第二の型とは煩雜なほど色々な對象や世界にあたらうとする。寧ろ眞反對のもの、對立し合つてゐるものに同時に眼をつけそれとの關係を辿る。そして對立せるもの闘ひ合つてゐるもの、眞中の動的なものがいつか把握されてゐるといつた、造り方である。)(三枝博音)生れながらにして持つ北國人の野性味と畸型さとを財産として現れた宍生氏といふやうな人々の特質を、その「化け物」言葉で簡單に象徴したのだ。そこに奔放さと力強さと出鱈目さと畸型さとを、半ば嘆稱半ば外道的に見て、(中略)隼星と云ふ人も昔からさうであるやうに、何んなに思ひ切つてその野性味に沈湎しやうとも、不思議に素朴な倫理的調和の破れない作家で、それが例へば「神々のへど」などのやうな作品にも判然と認められるのであるけれど、その無反省な態度から萬が一にも、新しいものが生み出されて來やうとは思はれない。(片岡良一)

長々と諸家の言葉を引いて來たのは、これ等の言葉が一見いかにも急所を衝いたものゝやうであり乍ら、實際はいかに的確な言説かを見て貰ひ度いからである。そして亦この的確な言説が、色々な意味で文壇の隼星論を代表してゐるからである。

ある。この的確な言説でもつて、隼星を「化け物」た「魔物だ」と騒いだのが文壇である。老大家から新進まで總がかりで撫で廻してもまだ隼星の首すぢをつかみ得なかつたのだ。その臆腑をつかみ出して「化け物」の正體を見届けることが出来なかつたのだ。折から文藝春秋の時評を受け持つてゐた佐藤春夫の悪文評などは、この「化け物」退治の手敷を賦つた、もしくは回避したおすゝさがたま／＼馬脚を現したのに過ぎないのだ。

## 二

上記隼星の諸作を概括して大略「一つの流れを見る」ことが出来る。その「一」は「あにいと」「神々のへど」「弄獅子」「鬻王山」野人の圖「等一聯の自傳的要素の色濃き佳作である。純然たる自傳的小説「弄獅子」を除いた他の諸作を、自傳的要素の色濃きなものと云へば人々はけ／＼な眼をみはるのであらう。しかし描かれた世界こそ色々であり、深さと複雑さを増して來たけれども、それは、實に彼の少年の日の夢であり、青春の想ひ出である。「幼年時代」蒼白き巢窟」或る少女の死まで」等初期の諸作に於て描き得なかつた、或ひは全然見落して來た素材を、彼は逞ましい壯年の手腕で再びとり上げたのだ。彼の複雑な生ひ立ち、彼の養母、彼の登記所の小役人時代を知る人々にはこれは異論の無いことであつて、さうでなくとも「幼年時代」一巻を丹念に讀んで見るとこれ等の諸作の素材や人物らしいものは隨所に拾ふことが出来るのである。さうして同じくこの一年ばか

りの間に發表せられた犀星の小説の中でも、後段に擧げる諸作と、これら自傳的な諸作とは、その肌ざはりに格段の相違があつて、あだかも同じ豆腐屋の手で出來た絹こしと油揚げ程のきめや質や油つこさの相違があるのだ。

これ等の諸作は「野人の圃」が少しきめが荒く、しかも「女の圃」などに見るやうな沈痛な過まじさが力強く出てゐない爲めにどつちつかずのものとなり些か見劣りするのを除いて、他の諸作は完全に把握された内容と、犀星が身につけたあらん限りの力を盡した技巧とが、その頂點に於て微妙な含致を示してきめの細かい、粒の揃つた佳作と云ふにふさはしい出來榮えとなつてゐる。人間の醜惡と冷酷とを描き乍ら、ほのかに漂ふてゐる抒情はしみじみとした感情を讀者の胸に傳へずにはおかないのだ。こゝではどんな悲惨な境遇と性格の中にも何所かに安住せんとする、或ひは安住してゐる人間の魂が、無数の小さな愛すべき破片となつてちりばめられてゐる。作中の人物は狂亂し、怒號し、絶望しても、其を見詰めてゐる作者の温かい息吹きは全篇に行き渡つてゐて、讀者に小説の世界に對する親愛の情を喚び起させずにはおかないのだ。

しかし川端康成の云ふやうに、作者の心魂の到在が判らない等といふ事は斷じて無いのである。犀星は屢々露骨に近くその心魂を小説の面上に打ちあけてゐるのであつて、其が判らないと云ふのは康成自身が自分の持つてゐる技に引つかつて獨り

角力をとつてゐるのだ。康成の持つ複雑さが逆に犀星に光被して魔物だと見せてゐるのである。勿論犀星にも素晴らしい複雑さがあつて、そこからにじみ出る熱っぽい妖氣といふやうなもの、或ひは「魔物」をもつて呼ぶべきであるかも知れないけれども、その心魂の所在が判らない程犀星の小説の面が複雑を極めたものとは思はれないのである。

「神々のへど」にしても作者の心魂は明らかに「馬込林泉記」に書いてゐる以下の數語に盡きるのである。

「僕は僕の女房以外の女の人が假令どういふ惡徳家であつても、社會的に批判しやうとは思はない。假令耳目を覆ふやうな社會現象にでもそれはさうなるのが人間生活の興味のあるところだから、それについて僕は鹿爪らしい批評をする氣にならなないのである。」

「生きてゐる間にさへ嘸つてゐるやうな男女間に死んでしまつたあとに、眞實など残らう筈がないのである。眞實があるといふのは嘘つきである。人間なものは朝の眞實を夕に忘れてしまふから益々複雑になるものであつて、何時までも眞實づくしで行つたら、お互ひに堪つたものではない。」

「人間は明日はどうなるか判らないから、その判らないまゝで生きてゆくより外に方法とてもないのだ。」

これが「神々のへど」である。あの小説の世界を「神々のへど」と觀じた作者の心魂である。一見すると何か東洋的な悟性

か諦念のやうであり、實際さう云ふ面もあるにはあるけれ共、字面の間に沁み出てゐる不思議な積極的な力感にも察せられるやうに、これは、犀星にあつては絶望でもなければ、亦諦観のみでもないのである。不羈奔放な感奮を以つて彼を生活へ驅り立てる一種積極的な粘りのある人間的自覺である。かう云ふ作者の顔貌はあの小説にべた一面に出てゐるのであつて、只それらがそのまゝの素顔を現はさないで後述する雑多な要素と絡み合つて微妙な面貌で現はれて來るのであるが、康成程の人に其が判らない筈は無く、判らないと觀じたのは逆に康成自身の複雑さの底深いことを示してゐるのだ。

かういふ作者の心魂は、後に説くやうに在來の彼からは一轉期を劃して深化した作中人物の心理と、其を圍繞する現實の把握と描寫で彫り上げられ、そしてほのかな抒情に包まれてあの愛すべき佳作を創り上げたのであつて、作者の側に立つて云へば小林秀雄が巧妙にも云つてのけたやうに、抒情は觀察の極限に姿を現して、いはゞ鋭敏な觀察を手段として、己の抒情性の陶醉に浸つてゐるかの觀があるのだ。けれ共これは決して究極の犀星の姿ではない。彼の生命力はそこに陶醉し盡して居るのには餘りに遅ましく、野心があり過ぎた。

「チンドン世界」悪い魂「會社の圖」女の圖「舞臺圖」續女の圖「怨」と進むにつれて事情は全く一變して來る。こゝにはも早ほのかな抒情の陶醉は無い。行き詰つた資本主義社會の惡

い血の鬱積した、たゞれた皮膚の一局部に、だら／＼と汚なく流れ出てゐる膿血を彼は鋭く凝視してゐる。詩情と俳味と慈光の代りに、倦くことを知らぬ物慾とむせ返るやうなむき出しの肉の姿がある。何かしら恐ろしい鞭の先で引き掻き廻されてゐるやうな市井の蛆蟲——そも／＼その鞭は何であるかと作者は鋭く其を睨み付けてゐる。犀星自身の言葉を以つてすれば「復讐の文學」であり「また私同様の味方のために加勢しなければならぬ」と考へるのである。茫然とたい小説を書いてゐた、太平の夢はとくに消え失せ、どうやら私にも作品の中に重い主流を見なくなつたのである。亦「我々のあさる人生にも休まずに精悍な武器をとり、假借なく最つとあばくものをあばき最後の一人をも残さずに、そのの人生を裁かねばならない」ところの精神である。

一體あの詩人であり俳人であり「庭を造る人」であつた犀星は何時いかにしてかゝる變貌を遂げたのであるか。現文壇で代表的な風流人であると信せられてゐた犀星のどこに斯くの如き精鋭い魂が潜んでゐたのであるか。流石に鋭い眼の持ち主である川端康成は、一九三四年の六月既にこの點に觸れて「なせか人目にそれを無視されながらも強さのまゝ少しづつ變貌を重ねてゐるのは、室生犀星氏である。人々はなせもつと、この點を敬はないか。」と云つてゐるが、勿論この言葉のやうに、少しづつ變貌を重ねて來た犀星ではあつたけれ共、實は彼は或る時期

にもつと急角度に變貌を遂げてゐたのであつて、謂ひ得べくんばその時彼のルネッサンス——小説復興が彼の心意の裡に十全な燃焼を遂げてゐたのである。前記自傳的な諸作はこの轉身から後の脱皮の道程であり、在來の彼と、轉身の身ぶるひに新鮮な生き／＼した昂奮を感じてゐる彼との極點に咲いた愛すべき花々である。この間の消息を詳かにするものにその前年五月發表された彼の身邊と心境を端的に記録した小説「洞庭記」がある。この示唆に富んだ身邊小説はまるで彼のそれから後に發表した小説の序文のやうなものであり、詩よ君とお訣れすると云ふ彼の悲痛な告白の裏からの手記でもあり、前期の彼と後期の彼を截然と區別する道標のやうな役目を果してゐるのだ。

一夜半の雨戸を隔て、松籟を聴くことは勿論、竹の林には竹の倚々たるかけを見ることも夢見てゐたのである。人間くさい仕事をさう云ふ田舎ですることの何と間拔けな考へであつたらう。小説は人くさく女くさく都會くさくなければならぬとは思ひ乍ら、エセ風流の蟲の良いことを考へてゐるあひだに、何時の間にかそんな考へを捨てなければならぬやうになつてゐた。始めて庭を造つた時から時勢が變り僕もそんな庭なんぞに關つて居られなかつたのだ。文學の仕事が田舎で出来るかと考へてゐた男はやはり痴者のあこがれに過ぎなかつた。

それは「一枚幾ら半枚幾らといふ原稿の垢にまみれて一出来た金を一少し植木屋の拂ひをすくなくしていただけませんか、

毎月のものよりか多くては家といふ舟の動かしやうもございませぬ。」といふ妻君の泣言を聞き乍ら「あととき四五千圓もつかつて一永住の積りで故郷に造つた、苔の色も漸く落ち付きかけたところの庭である。それをしも二束三文に賣り拂つて愛すべき我が人生の半分をかけて来た詩も俳句も遠ざけて、新しいスタートに立つた隼星である。生半可な決心や觀念だけの能動精神では無いのである。その後の彼の華々しい活躍は決して偶然のものでは無く「批評の一つも捏ねようといふなら小説なんぞ手玉にとるよりも作者が人生の何所をうろついてゐるかを見るべきであらう」と矢崎彈に對して息き巻く自負も、強ちに思ひ上りとのみ見ることは出来ないのである。

由來、隼星は北陸人特有のはにかみ性から正面切つて演説したり説明したりするやうなポーズをとることの出来ない性であつて、得てしてそんな場合怒罵を飛ばして仕舞ふのである。この言葉なども多分にさういふ性情の弊であると思られる。洞庭記「一篇も實はその内容からすれば、こじんまりと安穩な風流人の生活の殻の中に閉じ籠つてゐた彼が、激しい生活革命の熱意に燃えて、古い殻をたゞき破り、すばりと新しい生活へ抜け出て行く飛躍を、目立たぬ様に、しかも烈々たる潜熱を湛えて再いたものであつて、その前年問題になつた舟橋聖一の「ダイヴィング」等に比して、素より作者の素質によつて理知の鍛錬倫理の追求の直接的表現に於ては甚だしく缺けてゐるものが

あるとは云へ、何者よりある意味に於て能動的精神の氣魄のこもつたものであるが、犀星一流の正面を切ることをしない態度が、人目にそれを無視される一結果を招來してゐるのである。

しかし、さうと云つてかう云ふ態度から直ぐ歸納されるころの、彼犀星が全く打算を知らない犀利を缺いた人物ではないかといふと、斷じてそんなことは無いのである。實は彼位打算にたけた文壇人は少ないのだ。

「洞庭記」に「算術」と題した一章がある。犀星自身であるところの作中の「私」は、全く打算を知らない白痴馬鹿者として二つの保險會社の事務員からも、最後には妻君からも遣を投げられてゐる。しかし前記「半夜の雨……」以下の彼の決心を知つて見ると、どうして！彼は算術を知らない馬鹿どころか全く偉大な算數家だといふ事が判るのだ。烈々火のやうな、新しい小説への無数の計畫と無限の計畫とが胸に渦巻いてゐる時、その實現に大きな障礙となる煩はしい家族の病氣や、家庭の不快さから睨れるため、一切合財投げ出して元も子も無いすつからかんの背水の陣を布かうとしてゐる彼、きれいさつぱりと古いものを叩き出して、内も外もま新らしい寢生犀星を創り出さうとしてゐる彼に、生命保險の解約と借出しとによる千圓内外の差損金なぞ何するものぞ。そんなものは胸に燃える火の燃料として寧ろ安きに過ぎる位のものではないか。この明瞭な二三が五の高等算術が組み立てられてゐる彼に、判り切つた二三が四

の「自明の算術」をしちくどく繰り返されては拵玉が破裂するのが尤もだと思ふのだ。こんな高邁なうまい算術を黙々と心の底に細く立てゝゐるのが彼犀星である。一つの凡常な俗物性を突き抜けたも一つ先の俗物性である。高貴な熱情が即ち直ちに一種の動かすべからざる價値の創造である、この打算家である。

犀星自身も自からのこの打算家たる俗物性を十分に感知してゐるのであつて、それ故にこそ、この文學上の根本的な轉身がもたらされたのであるが「洞庭のひよどり」の中では可憐な小鳥の言葉借りて美しい自嘲を投げつけてゐる。

「おちさんにそんな元氣はないだらうがもう、誦お庭を毀して作り變へてこらんなさい。そしたらひよつべえが下りてゆくやうな人間くさくないところが出來るかも知れないのだ。さうでなかつたらおちさんよ、例の悪いことを考へて、いらつしやい。その方がおちさんらしくていいぢやないか、おちさんは人くさい人間だからお庭なんか作つて、そのなかに這入りこんでゐるよりも、悪いことを考へてゐた方がよく似合ふの。いつか云つた掬摸が掬ることよりはかは考へないやうに、おちさんはおちさんらしく、あゝなりやかうなるといふやうに企んで夜の街へでも出掛けて行つた方がいゝぢやないの。」

想ふにこゝまで來る犀星の心裡には永い間この獨自の俗物性と詩人との相尅が繰り返されてゐたのであるが、あらゆる夢を



かなく捨てあきらめる假面を剝奪せずにはおかない壯年四十臺の現實性は、無碍奔放な打算の下にこの獨自な俗物性と強く手を握つて、詩に關する超尅を完ふしたのである。こゝに到る血みどろな隼星の心魂は「醫王山」の小役人の魂となりその妻の決心の糧となり、「あにいも」と「神々のへど」に於けるおもんの強さとなり弱さとなつて、血を分ち肉を分つて上述したこれ等の諸作のもつ抒情性と混淆してユニークな藝術を創り上げてゐるのである。従つてこの轉身前の佳作、たとへば「鶴千代」などの持つてゐるよさうまさ——秋聲に従へば犬の氣質感覺心理などの内面的なものと外面の生活と、詰り一匹の犬かまことに完全に精彩をもつて彫り上げられてゐて、讀んでゐるうちに讀者のなかに潜んでゐる強烈な野性が跳躍して來るやうな愉快さを感じる。作者が犬になり切つてゐる。愛着とか理解とか云ふ程度のものではない。といふ風な點に於ては轉身後の諸作も同じものであつたにしても、作品そのものが持つ人間生活に對する精神氣魄に至つては格段の相違がある。そこにこれ等諸作の精りつこい複雑微妙な魅力があるのだ。

これ等の點に殆んど盲目であるかの如く想を致さず「室生氏」は庭を丹念に造つてそこに作りだされる氣分を楽しんでゐるのと同じ流儀で丹念な室生氏らしい小説を作るのである。しかし我々から見れば、藝術はよく作られた庭の如きものであつてはならないのだ。それは流動する生命を持つてゐないからである

より深い、より高い目標に向つて流れてゐたならばと思ふ。」なぞとその抒情性の一面をのみ見て、一知半解な言葉をして平氣でゐられる板垣直子の批判は、丹念な小説がそれ故に流動する生命を持たない等と云ふ言葉だけでもそのまゝでは肯ひ兼ねるのであるけれ共、それはそれとして彼女はも一度「洞庭記」と「醫王山」を併せ讀むべきであつて、この二作を貫ぬいて流動する生命の潜熱を身を以つて感すべきであり、作者が「醫王山」の主人公小役人にかにより高きより深き生活への意慾を生かさうとしたか、いかに生かし切つたか、そこに律動する生命の響きを心して味ふてみるべきである。隼星といふ人物の人間の自覺を作品の統一原理として掴まずにその小説を論評することは無意味である。矢崎彈が隼星のこの境地には眼を覆ふて、徒らに「隼星」と云ふ名前そのものが持つ文壇的イリュージョンと小説外面的な手觸りだけで、行動慾を持たぬ心理の戯れだとしてたり、發展の無い自我意慾を眠らせることばかり考へてゐるやうだ等と指摘してゐるのは、持つて生れた兩者の素質の懸隔から來る無理解さとは云へ、批評家としては怠慢の講りは免れ得ないところである。

### 三

一九三三——四年の我が文壇を回顧して最も眼につくのは、バルザックに還れといふ言葉と、ドストエフスキの再檢討といふことである。概説して文學の盟さのためには前者を、深さ

のためには後者を、それ／＼要請せられたのであるが、それは青野季吉の云ふが如く、**社會學的、外面的に、自己の伸長を封鎖された文學が、心理學的、生理學的に即ち内面的に自己を生かさうとする自己保存の相様である**と云ふよりも、寧ろそれまでの數年間をプロレタリア文學の**不當なる跳躍にまかせて、極度に内面性を押しひしがれ外面性を歪曲されてゐた文學がそれへの復讐の企ての支柱としてこの兩巨人を選んだのだと**見ることが正當であつて、それ故にこそ内面的深化の指標としてのドストエフスキーに、外面的伸長をより廣汎ならしむべくバルザックが加はつてゐるのである。これは單に外面的壓迫に對する抵抗とか、プロレタリア陣營と藝術派陣營の争ひ等と觀念的に解釋すべきもので無く、正當なる文學性の正當なる地位への極く内面的な復興の企てであり、かつて二十年前には一生活のための藝術「藝術のための藝術」として闘はれ各の面に於て相當の進歩と深化を齎し、徐々に變貌を遂げつゝあるところの、殆んど週期的な文學的潮流の一つである。さうして、この澎湃たる潮流に身を挺して、打つかつて行つたのが、實に我が筆生犀星である。かくて我が高邁なる俗物、犀利なる打算家犀星は、二十年の文壇的經驗と、自からの素質と、逞ましい四十稔の生活意欲とを、つゞぎに評價し商量して、巧みにこの波を御し、「過去の骨抜きの好いお料理のやうな小説」や「エセ風流」や「詩」をかなぐり捨て、それらのものゝ底で二十年來無氣味にぶす

ぶすと焼つてゐたドストエフスキーの心魂に、バルザックの逞ましい衣を纏つて、颯爽たる風貌を現はして來たのである。

由來、犀星は一九二〇年代に於て我が國の文壇の一部に流行したドストエフスキーに、それこれ文字通り憑かれた人間であつて、彼の處女作以來「蒼白き巢窟」或る少女の死まで「なぞ初期の諸作には何れにも素朴なその影響が歴々として指摘されるのであるが、それは以後徐々に深化して來て、今日に於ては犀星に於けるドストエフスキーの影響は實にその骨髓に徹して犀星らしく同化し再生し得る極限にまで達してゐるものと云はなければならぬ。もと／＼二十年の歲月の間には犀星に於けるドストエフスキーも色々な起伏があるのであつて、或る時代は全くその影を認め得ないと一見して思へる時代もあつたけれども、しかしそんな時でもあのドストエフスキーの大地的、人間主義——素朴清醇の極點である「貧しき人々」や「カラマゾフ兄弟」の中のアリョーシャに見るそれと、苛辛深奥の極致たる「フォードルやイヴァンに體現されたそれとの廣い人間主義の振幅は、絶えず彼犀星の魂の底に響いてゐたのであつて、轉身後の初期を劃する自傳的諸作に於ても「人間は往々安寧や秩序よりも却つて苦惱を愛する。混沌や破壊は秩序や建設よりも彼の氣に入る。この觀念と別れたことはドストエフスキーには嘗つてなかつた。」とシエストフが解したドストエフスキーの面貌が至るところに覗いてゐるのであつて、これが東洋的な犀星の心



魂と絡み合つて、いはゞ既に彼の奇怪な複雑な體具そのものをなしてゐるのだ。康成が魔物と見た一半の理由は實はこゝにあるのである。

この點はしかし前述の自傳的作品に就てはまだ、影が薄いのであるが、「悪い魂」會社の圖、「舞舞圖」女の圖、「續女の圖」と進むにつれてそれはいよ／＼色濃く小説の表面へ現はれて來るのである。

「既にアリストテレスが告知してゐる。何人をも必要としなない人間は一切を自らの内に有する神であるか、然らずんば野獸である。と——そして地下室の男の個人的經驗も同様のものである。彼自身の白狀を讀んで見るがいゝ。殆んどどの頁でも、彼は自分について、野獸でさへも白狀することを羞するだらうと思ふやうな全く信ぜられぬ物事を語つてゐる。」

シエストフの「自明の超尅」の中のこの一節は、そのまゝで既に「女の圖」の連作を解剖したものと云つても一向に差し支へ無い程びつたりしてゐるではないか。

「世界が減びるか、俺が茶を飲めないか。いゝか、世界は減びるがいゝさ。俺はいつでもちやんと茶を飲み度いもんだね。」  
「俺はあらゆる蛆蟲の中で一番厭らしい、滑稽な、小つばけな、やきもちやきの馬鹿な奴だ。」

こんなシエストフが抜き書きしてゐるドストエフスキの言葉々、そつくりそのまゝ「續女の圖」の中へ持つて行つて來め

込んで見るがいゝ。決して少しも活字の尻の坐りが悪からうとは思はれないのだ。實際妻ハナの死を頂點としての伴宗八、貰ひ子きく枝の描寫には、人間の魂の底の底をかちりと掘り當てた凄き冷たさが凄しい光を投げてゐる。

「伴のやつれた額と鼻がしら及び脚の下あらゆる身體ちうの曲りめや陰つたところから冷汗とあぶらが、しばらく経つと冷えびえと感じられた。遂に二十分が過ぎた。恐ろしい位永い二十分であつた。そして其瞬間伴は突然起きあがると先刻ハナが投げ出した儘になつてゐる財布を手もとにたぐり寄せ、中身を開いて見るのであつた。汚れたくちなし色の紙幣が一枚、大きい銀貨が八枚、小粒が七八個しまはれてあつた。伴はしかしそれらをその儘自分の床の下に入れてしまふと、縁側の物置にふたたび熱心に眞面目腐つた顔付で聞き入つた。遂に三十分が経つてしまつた。最早何等の物音も、うめき聲すらも起つて來なかつた。伴の頭ははつきりと死とともに彷徨するところの——實際、烈しい後頭部の打撃に依つてそのまゝ、卒倒しながら、當然冷切つて行くらしい一個のものとはいへ二十何年かを一諸に暮した妻ハナの死體を思ひ描いたのであつた。遂に水い一時間が人生の向ふ側で経過して了つた。柱時計はそれらの斷末魔的な光景の間をかちりかちりと碁石を撥くやうな恐るべき大きい音響を立てゝ行つた。伴はほとんど柱時計を睨んだまゝ、肩と眉の間、つまり鼻頭にくらぐらする眩惑のために何度か自分で自

分の氣を取り直すやうに氣を附けた。「多分、おそらくあのまゝ  
往生したかも知れない。自分で自分のかたを付けて呉れたかも  
分らないのだ。だが萬一……」伴は慄乎として財布を自分の床  
から引き出して、元のハナの枕の下に捻ぢ込みながら考へ込ん  
だ。

—その時、伴の横に寝てゐた小さい頭がむつくりと動いて、  
先刻から眼をさましてゐたらしい貰ひ子のきく枝が、眼をしぼ  
たゞいて伴の後ろ姿を見おくりながら、悪戯者らしくそつと頭  
を捻けて縁側の物置に聞き入つてゐた。先刻伴がきく枝の寢息  
を窺つてゐたときに、慥かに子供めいてすや／＼と寝てゐた筈  
だつたのに、この年に似合はないきく枝は伴が財布を調べたと  
きから、づつと眼をさましてゐたのであつた。

こゝでは作者の額の油きつた汗と、喰ひしげつた白い齒が、  
じり／＼と讀者の心を嘔ますには居ないので。そこには「眼を  
睨ふやうな社會現象にも、人間生活の興味のあるところ」とし  
て、たじろがずに觀照し、把握し、描寫しやうといふ犀星の激  
しい心魂が彷徨してゐるそんな裏の裏、底の底、白々しい虚無  
の虚無からもなほ人間性を擡まうとする、すさまじい、執拗な  
大地的なヒュウマニズム——ドストエフスキーがソヨードルに  
スメルチヤコフに、イヴァンに對した冷酷と、執拗と、しかも  
不思議な作者との親近性がそのまゝこゝでは犀星の心魂となつ  
てゐるのだ。

しかしこゝに見る作者の冷酷さは決して自然主義作家の冷酷  
さでは無い。田山花袋などの唱へた「博大な心」や「冷たいハー  
ト」と呼ばれたものでは斷じて無い。あらゆる眞實の底の底を  
突かないでは措か無いリアリズムの精神を武器として、確乎た  
る新しい生活の面を切り拓かうとする激しい生活意欲が動い  
てゐる。そして一面には美しい精神、新鮮な感情、高邁な意欲、  
それ等の集結の上に打ち立てやうとする浪漫的な文學を、砂上  
の樓閣であるとなし、一度動かすことの出来ない人間の醜惡  
な面に相對した時は、脆くもそれは動搖し、崩壊し去るであら  
うことを痛感して搖ぎ無い人間性の最後のなから人間生活  
の眞實の面を築いて行かうとする逞ましい精神がある。それ故  
にこそ「女の圖」を主筆とする一連の「悪い魂」の記録にも、讀者  
は至るところ積極的な心打たれる何ものかに逢着するのであ  
る。それがあつたり、ある場合は「悪い魂」の中に見出される輝くばかりの  
美しい人間性であつたり、ある場合は「悪い魂」を「悪い魂」なら  
しめた、その「悪い魂」の主人公と共に憎惡せずには居られない  
彼自身の素質と境遇であつたりするので。

こゝが犀星に於けるドストエフスキーの限界である。ドスト  
エフスキーを假に小林秀雄や横光利一に系統を引く一線と他の  
一線とに分つて見るならば、即ちこの後者の一線こそ紛れも無  
く犀星に繋がつてゐるのである。同じく人間の虚無にしても前  
者の理解するそれは理知の過剰や鬱屈から来るそれであり、後

者のそれは人間そのものゝ持つ血肉に絡むそれである。頭腦の虚無と心臓の虚無である。ドストエフスキーはこの二つのものの超越にその全作品を試みた。横光利一は前者と取り組んで、紋章を書いた。室生犀星は必死となつて後者に立ち向つた。さうしてそこに全然新しい何もものかを引き出して來た。犀星のドストエフスキー的なものからバルザック的なものへの羽ばたきがこゝれに生て來たのだ。

犀星の「悪い魂」の中に見出される美しい人間性が心理的なものであつて、より多くドストエフスキーの影響を受けてゐるのに對し、憎惡すべき主人公自身の素質と境遇の觀照と描寫には、生理的社會的とも云ひ得べき、より多くのバルザック的なものを感ずるのである。

#### 四

一千九百三十四年の禁令と同時に、街々に道ふたチキンカツのやうな積せた少女達が、隅から隅に亘つて掃蕩されて行つた。これは隨かに時期を得た禁令であり街の哀れが一枚剝けて行つたのである。我が愛すべき少女はつねも六週間近く遊びほうけ、股の脚も滑こく捲つて行つた。併し伴の女房ハナはこの六週間の間に伴を説き伏せる爲に凡ゆる策略を用ゐる通り側の側にある母屋へ通してゐる階段の踊場までのぼりきつたとき、何者とも知れないその女は振り向くでもなく振り向かぬでもなく、チャリ通用門の方へ流石をくれて、そこに、彼女を自分のものにし

たい、どんな素性の女か知りたいたいと無暗にあせりながら、感嘆のあまり棒立ちに突つ立つたまゝ動かない男爵を見た。かういふ男の様子はつまり、パリのどんな女ともが往來を通りすがりに

實際こゝに取り出した一節等は偶然にも逆に犀星のものがよりバルザックらしいと云ふ逆説すら吐き度くなるほどのものであつて、彼の觀照や描寫がいかにバルザックの影響を享けたことの強大であるかを適確に知り得るのである。「洞庭記」で小説は人くさく、女くさく、都會くさくなければならぬと云つた犀星の心事も、都會くさくが即ち黄金くさくの同義語であることを考慮すれば、其等が即ちバルザックの小説の世界であることと照合して、意識的にせよ無意識的にせよ彼の轉身がいかにバルザックに負ふところ大なるかを、語を代へて云へばいかにバルザックによつて轉身の指標を與へられてゐたかを想察し得るのである。『あたいたいのおちさん馬鹿』。自分で濟まないからゐるくせに、厭みたらしいおちさん馬鹿。自分で貰つたつてさうするのだといふの。あたいたいなんかにあやまつて貰つたつてそんな事知るもんか、あたいたいの知つたことぢやないわ。『わたしの骨にまでお白粉を塗らして隊がせたのは一體誰の仕事なんだ。今だつて雨の季節々々にはからだぢうがずき／＼と疼き出すのも皆お前の懐工合で、お前の舌一枚に騙されたわたしが貰つたおみやげぢやないか。何千人だか數へ切れない色紙

鬼どもの荒い呼吸の下で我慢し通して来たのも、お前の口車にまんまと乗せられて来たわたしの處女馬鹿がさうさせたのだ。」少女はつ枝と妻ハナの伴宗八に對する悪態である。この活字の行間に覗いてゐるバルザック的眼光は勿論犀星の血と肉とをくぐつて再生されては居るけれど、強く讀者の胸を打つて、二人の女の育つた生理的なもの、社會的なもの、影を想はずには居ないのだ。誤解して貰つては困る。決して伴宗八が搾取者としての姿を以つて描かれてゐるなぞと云ふのでは無い。これはバルザックの小説でも直ぐに感ずることであつて、一種宿命的な情熱に憑かれた人間と人間との凄惨な格闘が、讀者の心を喚びさまして、これは——この宿命的な情熱は一體何であらうかと考へざるを得ないのだ。このバルザックと犀星との根原的な近似性は、即ち兩者の觀照、把握、描寫が、例へば大小廣狭の差はあれ、共通せる一つの點に立つてゐることを語つてゐるのだ。小説中のあらゆる人物を駆倒し混亂し困惑させて大きな力で動いて居る社會の力——謂ひ得べくんば社會そのもの、悪徳とでも云ふやうなものゝ姿が覗いてゐるのだ。

バルザックが小説中の一人物を、たとへばグランデを或る時は「グランデ氏」と云ひ、或る時は「グランデ爺さん」と云ひ、或ひは「けん坊」「元の樽屋さん」「老葡萄作り」等々とその情景々々によつて、それに素適も無くふさはしい稱呼を以て書いて行つて、素晴らしい効果を擧げてゐるのは、西歐文脈の煩瑣で單

調な主格の苦澁から脱れるためか、ゴーヤリ、トルストイ、ドストエフスキーを始めあらゆる西歐作家が多かれ少なかれ驅使してゐるところであるが、犀星も實に巧みにこれを學んでゐる。たとへば「女の圖」の伴宗八は、或ところでは「伴の宗八」と書かれ、或ひは「もとの淫賣屋」「惡漢世人」もとの市井の渡世「惡黨人」等々と、一頁を費して彼の骨格を描き面貌を寫したのよりも寧ろ優れた効果を擧げてゐる場合が多い。これの巧妙な使ひ方は讀者を非常に親密な情感で主人公と面接させて呉れる。これは直接端的にその情景に於けるその人物の姿と心理を髮膚させて作者から直ぐに讀者の胸へ傳へるのであつて、「ほら例のあのさ」——といふ風な極く身近かな噺き話でも聞くやうな感情の親近性で、作者と讀者とが多愛無く結ばれるのである。「會社の圖」を讀むと最初の方から突然一例の倉知特有の「や／＼」と云ふ言葉が出来るが、これも讀者の今まで何も知らない倉知の「や／＼」を例のといふ一語ですつかり馴染みあるものにして倉知の面貌を確知として浮き彫りにしてゐるのだ。犀星の小説の不思議な處である。これは些細なことのやうで實は小説の急所々々の關節をなしてゐることに微妙な働きをしてゐるのである。犀星がいかに綿密にバルザックの面貌と精神とを擷んだか、この側面からも十分に推察され得るのであつて、この間の消息は「僕は流行を逆流することよりも、それを素直に受け入れ、攝るべきものは自分らしいものに取つてゆくこと

の至當さを感じる。といふ犀星自身の告白が或る程度まで説明してゐるところである。しかし、さうかといつて決して犀星が單純に流行かぶれしてバルザツクの逞ましさを學んで打つて出たのだと云ふのでは無い。犀星は前にも書いたやうにそれほど凡庸淺膚な目先きだけの打算家では無い。寧ろ彼の裡にあつて今日迄迄いてゐた、風流や詩とは全然別な心魂が、バルザツクによつて始めてそのはげ口を見つけたのである。詩と訣れたが故にバルザツクに近づいたか、バルザツクに知己を感じたが故に詩と訣れたか、それは犀星の心の祕密であるがおそらく何れが先何れが後とも無く四十臺のひたむきな眞つ裸な彼の魂は、完全に青春の夢を洗ひ落して、或ひは洗ひ落すべくバルザツクの逞ましい胸に飛び込んで行つたのであらう。

一殊に僕の年齢はルナルに哀愁を呼び起されるごとく、バルザツクのなかに翼をひろげて悲歎の逞しい繰り返しをする。僕はバルザツクに知己を感じ、僕自身が不身持であるべきことが、すら／＼諒解してもらへさうに思はれるのである。バルザツクの悲歎は皮に喰ひ込んでさうにもならない重さを持つてゐるからである。

隨筆集「芙蓉の酒」の中に既にかゝ書いて居る犀星とバルザツクとの精神の——心魂の血縁は、決して流行によつて離合するていものではないことは明らかである。

## 五

バルザツクの作品が終生混亂しつゞけてゐたと云ふことは、既に世界的に定説づけられてゐるところであるが、殊に殆ど全作品を通じて特色のある必然のまゝに動いてゐるリアルな精彩に富んだ描寫と、一方に付け加への論理をもつて一種のスタイルを作らうとした抽象的な説明とは、それ等が各々堅い殻を被つて各自の生地の儘で陣取つてゐて完全にコンデンスされた統一ある一篇をなしてゐないと云ふ失敗を繰り返し、彼の作品の混亂の重大な原因となつてゐる。スタンダールも指摘したやうに、これは付け加への論理そのものがバルザツクの藝術の大きな支障となつてゐるのであることは明らかである。餘り長い引例はどうかと思ふので稍不完全ではあるが短かい一節を抽出して見る。

一他人を餘儀なくすることは即ち力を認めさせること、あまりに弱々しくてこの世に於ては蹂躪されるがままになつてゐる人々を、不斷に侮辱する權利を持つことではないか。

おゝ！あらゆる地上の犠牲者の現在と未來と、尙讚美せられた苦痛と、温良との、もつとも人間の心を動かす標章、神の足下に、平和に横はつてゐる彼の小羊の意義を、果してよく理解した人があるであらうか？

その小羊を貪慾家はふとらせ、圍ひ込み、殺し、料理し、食ふ、しかも輕蔑するのだ。貪慾家等の飼料は、金錢と侮蔑とかなつてゐる。その夜の間に、親爺の考へは、それとは違ふ道



を返つてゐた。さてこそ彼は寛仁な態度に出たのだ。即ち彼は巴里の奴等を譏弄し彼等をねぢ伏せ、丸め込み、こなしつけ、往かしたり来さしたり、汗を流さしたり、望まししたり、青くしたりしよう、ある計畫をめぐらしてゐたのだ。」

一見して判るやうに前段のいかにも鹿爪らしいぎこち無さに比して後段の活潑さ自由さは同一章の文章とは思へない程截然と區別されるのだ。この文章の相異からも直ぐ感取出来るやうに、犀星も自分の學ぶべきもの、はじめをこゝに見た。さうしてバルザックから攝取すべきものは實に彼らしく完膚無きまでに自分のものとしてそこから新しい出發をして來たのだ。しかもこの犀星が學びとつたバルザックの一面こそ、實にかのエンゲルスが見たバルザック的なものである。『フランスの社會の最も素晴らしいリアリスチックな歴史』を描いたバルザックなのである。マルクスが資本論の或る箇所で、その當時の讀書階級に親しみ深かつたバルザックの作中から、人物や文章を引用したのも實にこのやうな描寫の面に於けるバルザックの一過去現在のあらゆるゾラよりも遙かに偉大なリアリスト藝術家——を尊重したが故である。三枝博音が僅かに「神かをんかか——篇のしかもそれが犀星作品中のどんな地位にあるものかさへも識別せずに、ひたすら觀念的な追求でもつて、宰牛犀星のごとき作家の遣り方からエンゲルスの見たバルザックのやうな作家の出ないことは確實だと云ひ切つたのは些か早計であつて、生

成流動する作家の生命と、その複雑な面貌とを深く洞察するの明を缺いたものだ」と云はなければならぬ。

しかしエンゲルスが云つたやうに、文學に於けるリアリズムといふものが、典型的な性格の正確な表現であるといふ意味に於て、犀星が其に近づいてゐるのだ、などといふのでは勿論無い。云ひ得ることはバルザックが生きた時代は資本主義の上昇期であり、すべての社會潮流が——人間生活の諸相がすべてこれを主體として流れてゐたのだから、その典型的な性格の把握も實は割合に容易であるが、明らかに大過渡期と云ふべき現代に於てはこれに代つて一世を指標する典型的な情勢は何であるかの把握すら不可能に近いのであつて、混沌と低迷と不安との交錯した時代に、資本主義の爛毒に害され傷けられた性格を、市井から捨ひ上げて來、執拗な追求の手を休めない犀星の意気は決してこれから逸れて反對の方向へ行くものではないと信ずるのだ。まことに微かにではあるけれども彼らしい仕方に於いてその方向を指してゐることを指摘したのである。彼が現在の姿勢を崩さない限り、再びかの文人に、詩人に、庭造る人に歸らない限り、僅か一年餘の内に數多くの社會の面に意想不到的な逞ましい力で追つて行つたやうに、更に／＼深く掘り下けて行く限り、嫌でもそこへ出て行かなければならぬことを信ずるのである。とは云へ新居格の如く「野人の圖」の中に出て來る職工とも書生ともつかない若者達の言動を以つて、犀星に



於けるプロレタリア意識の片鱗である等と早計なお先づ走りをする譯けではない。あの若者達を動かしてゐるのは封建主義の残滓であるところの小所有者的な本能と、封建的な狭い郷土主義の現れの外の何者でもないものであつて、あの小説の舞臺である北陸に今日も残つてゐる一種のローカルカラーとして見るべきものである。既にプロレタリア文學全盛の時代に於て、その派の諍々たる闘士、中野重治や窪川鶴次郎等を極く親しい詩友として持ちながら、しかもあのやうな流行に對する柔軟な感受性浸透力を持つてゐて、際立つた影響を受けなかつたかのやうな彼が、自からの藝術を深く掘り下げて行つて、この困難な情勢の裡に、いかなる性格を表現して來るか、そこには多分に犀星らしさと、日本らしさと、さうして一九三〇年代らしい體具を持つて、既にプロレタリアもバルザックも無い何者かを創造するであらうことを信ずるものである。彼の藝術への偏執は必ずやそこまで透徹するであらうと信ずるのだ。「女の圖」「續女の圖」と見來ると、それが強ちに望遠でないことを感ずるのだ。

こゝまで考察をすゝめて來ると「藝術性に徹判することが、體て傾向性を最も強く發揮することだと云ふ理論は既に常識になつてゐる」といふ片岡良一の言葉を思ひ出すのは不思議では無いであらう。こんなにも概念としての文學を確實に把持し得る批評家が一度それを生きた作家論に適用するとなると、不思議な程にその觀照の眼光は鈍り「神々のへど」に於ける犀星を

視るにも常識化され觀念化された、野性味とか畸型さとか、無反省な態度とか、在來の——かの轉身と脱皮とを經ない犀星に用ひられた通念を其まゝ觀念して、あの作にも微かにではあるけれ共見ることの出來るところの犀星が、自からの「藝術に徹判して」體て傾向性を發揮すべき土壤と芽生えのあることを全然觀取することが出來ないとは。も早再び説くまでもないことだけ共、正面切つて反省や苦悶を並べ立てることをしない作家犀星の小説が、本文冒頭に引用した片岡自身の言葉のやうに「何んなに思ひ切つてその野性味に沈湎しやうとも、不思議に素朴な倫理的調和の破れない」のは何故であるか。片岡良一は自からかく觀取したその面を多少でも考察し分析して見たのであらうか。片岡自身の言葉を其儘こゝに逆用するならば「無反省な態度からは萬が一にもそんな、不思議に素朴な倫理的調和は生み出されない」のであつて、こゝに即ち犀星の秘密な機微な倫理的な面があり、若し犀星に發展性があり將來性があるものならば、此一點にこそ、反省や苦悶を表面に押し出さないけれ共、常に坵じ、常に怖れ、常に省みて止まない彼の藝術へ徹到せんとする熱意にこそ希望をかけ得るのである。

## 六

描き來つた室生犀星の圖も、近景と中景に筆を用ひ過ぎて餘りに遠景をなほざりにしたやうである。しかし實はその遠景はすでに人々の熟知し過ぎる程熟知してゐるところで、個體生活

的な執拗な肉感と、東洋的な特に北陸的に生活の血肉となつてゐる佛教思想との微妙な交流の頂點にすはつた極端にまで過剰な感性である。或る時は畸型と見え、ある時は野性味と呼ばれ、或る時は詩となり俳諧となり亦官能描寫と云ひ、抒情性と云ひ、いづれも皆究極するところこの遠景から流れ出て居る諸相であつて、中景も近景も屎星圖の畫面全體は先づこの原色を染めてこの上に描かるべきものであることは素より言を待たないのだ。しかしかく解析して見て何と室生屎星そのものゝがらんどどうしてゐることよ！その貧困さはどうだ！いはんやドストエフスキーもバルザックも彼等から晒り得るものは屎星の素質と、彼等が既に何としても昨日の人物であるといふ點からして限界は明らかであるに於て一殘つてゐるものは奇麗な張りと何一つもない！君の小説なんぞ全くこゝろ蒙りたい！あちこちからそんな聲さへ聞え出した。頭の中には何時だつて一行も浮んでゐない。何も無い。態を見やがれ！」

この屎星の文學的自傳的結語は流行作家の變に横を向いて他人に當てつけた嫌やがらせだなぞと皮肉な見方をするよりも、彼の反省の正直な心だと聞く方が本當ではないか。屎星の未來への道は今はいつより無い。聴ろ氣乍ら私はそれを描いて來たつもりである。

# 滿洲雜誌論

— 現地主義の確立のために —

加納 三郎

- (1) 滿洲の雑誌は何故賣れぬか
- (2) 普遍的な課題に對する怠惰
- (3) 特殊な課題に對する認識不足
- (4) 二つの註文

(1) 滿洲のジャーナリズムは文化的不感症だ。昨年の末、一ヶ年の文化問題を回顧して、こんな結論を書いたことがあつた。最近、或る必要から、滿洲の諸雑誌を通讀する機会を持つて、私は再び同じ感想を繰返さねばならなかつた。滿洲の雑誌が、どうしても、滿洲の問題、思想、生活、感情を正しく反映してゐるやうには思へなかつたからである。

かう云ふ問ひを出してみやう。さうすれば滿洲の雑誌の地位が浮き彫りされるかも知れない。

在滿邦人インテリゲンチヤは滿洲の雑誌を買ふだらうか？

大抵の知識人は、何か一冊中央の綜合雑誌を買ふのが常識である。しかし、滿洲の雑誌を「金を出して」まで讀まうとする人は尠ないのではないだらうか。經營の實際に全く無知である筆者は、本屋の店頭で積まれた滿洲雑誌の数が餘りにも少ないといふ、たつた一つのことからこんな穿つた想像を逞しうするにすぎないのだが、店頭での「賣れる」「賣れない」こそ、雑誌が一般知識人に對して持つ魅力のパロメーターではないだらうか。そこでは純粹に需要供給の關係のみが支配するのだからである。

内地の新聞をとつてゐる者も、きつと滿洲の新聞は讀むに違ひない。單に早く讀めると云ふばかりではなく、滿洲の新聞は内地の新聞から得ることの出来ないものを與へてくれるからである。その與へ方においても、滿洲の新聞記事は、一應滿洲的なニュースセンスによつて選擇されてゐるので、讀者は、事象の滿洲的意義を理解し、在滿邦人としての日常的な生活指針を得ることが出来るのだ。これを要するに、讀者は、滿洲新聞の現地に於て吸引されるのだといふことが出来るだらう。現實の滿洲の新聞が完全にそうだといふのではない。

勿論、性能を異にしてゐると新聞雑誌とを、全然同一に論ずることは誤謬であるにしても、日滿兩新聞の關係について言ひ得たことの何割かは、矢張り雑誌についても妥當するのではないだらうか。新聞は「ニュース」を與へ、雑誌はその「理論

・感情」を與へる」。假にこんな素朴な分け方を許すとすれば、滿洲に對する反省が深まり、滿洲的視角によつて捉へられた理論・感情が必要になつてくればくる程、滿洲の雜誌的使命はその重要性を増すわけである。「中央公論」「改造」を讀む滿洲知識層に、何にか一冊の滿洲雜誌を買はせることこそ、滿洲ジャーナリズムの當面の目標であらねばならない。

ところで在滿知識層からの雜誌のかゝる浮き上りは何處から來るのであらうか。その理由はいろいろあげられるだらう。第一に執筆者の問題がある。職業的文筆人を持たない滿洲では、勢ひ、文化はサラリーマンの「片手間」に委ねられざるを得ない。然し、このことゝても、文化不振の一應の原因とはなり得ても致命的なものではないやうに思はれる。素人は凡ゆる點で玄人に劣つてゐるとは考へられぬからである。

例へば滿洲の新聞の學藝欄の持つ文化的エネルギーは、そんなに低いものなだらうか。そこでは、執筆者が、銀行員であり、圖書館員であり、特産商であることから生ずる、謂はゞ生活的とでもいふべき特色さへ見出すことが出来るではないか。執筆者が一般讀者であり、一般讀者が執筆者である關係からくるこの特色は或場合には素人的な水準の低さを充分補つてくれる。與へるものは不味くともそれは血になるのだ！われわれはそう誇つていゝ。従つて、素人執筆家の問題は、これを動員するプランさへ確立してゐるならば、決して致命的な條件にはな

らないであらう（滿洲文話會の現在會員數は百六十名を越すと謂ふ。）

われわれは、滿洲ジャーナリズムと在滿知識層との遊離の一つの原因を、その編輯方針に求める。そして今、これについて門外漢的な感想をのべることにしたい。結論を先に掲げるならば、滿洲雜誌の急務は、現地主義を確立せねばならぬといふことである。門外漢なるが故に「盲目の垣のぞき」に墮する多分の危険性を持つと同時に、同じ理由によつて、一般讀者の眞實の要求を代表することが出来るかも知れぬと考へてゐる。

さて、ここで問題にするのは、滿洲の綜合雜誌である。従つて、政治・經濟・文學等特殊な目的を有する雜誌は當然視野の外に置かれる。机の上にあるのは、最近數ヶ月の「新天地」「滿蒙評論」「滿洲行政」「滿洲公論」「滿蒙」「滿鮮」「大連公論」である。

(2)

日本のジャーナリズムが、目下就つて問題としてゐるテーマは、「知識階級」「日本文化」「東洋文化」「日本主義」「民族主義」「革新イデオロギー」等々である。

嘗て幾度か取上げられ、既に論じ盡されたかに見えた問題が再び論壇に登場して來たのは何故だらうか。それは、戰果の無限の擴大に伴つて、これに追隨する能力を喪つたジャーナリズムの一時の立ちどまりを意味すると共に、より根本的には、日

本が「日本の知識階級が、一つの反省時代に入ったこと」の象徴である。

ところで、満洲のジャーナリズムは、このやうな意味を持つ反省を如何にして爲しとげたらうか。完全な不感症を以てである。

最近何ヶ月の満洲の雑誌の目次を見てみよう。その何處にもこれ等の課題を、課題の提出された意義に従つて論じた一つの文章をさへ讀むことが出来ないではないか。

では満洲ではかゝるテーマは問題たるの資格を缺くのだからか。否、絶対に否である。「日滿一心」と云ふやうな説明方法を用ひることは止めやう。満洲と日本との現實的な關係を考へるだけで充分である。兩國の宿命的關係は、日本の問題は即ち満洲の、満洲の問題は遂に日本の問題たらざるを得なくさせてゐるのである。

更に、これらの諸課題が、單に日本のみでなく世界的な現象である革新的な風潮の派生物として、世紀の日程に上せられてゐる普遍的なものであることを思ひ浮べらば、事態は一層明瞭であらう。

若しかくの如く、日滿兩國が課題を共通にするものであるならば、その解答はどうだらうか。一つであらねばならぬのだからか。否、再び否である。兩國の持つ特殊性が、解答に夫々の法方、態度、色彩、結論を與へるからである。こゝに満洲が課

題に對して積極的に發言せねばならぬ義務が生ずるのだ。

例へば「知識階級」の問題を取上げてみよう。この問題はインテリゲンチヤの本質を究明し、これに積極性を與へて、事變に結びつける役目を持つ。だが、満洲では事情が異なるやうである。そこには知識階級の積極性といふ事態は存在しない。日本のインテリゲンチヤの別名である「蒼白」混迷「無氣力」は、こゝでは通用しないかの如くに見える。彼等は潑刺と情熱を以て政治に參與してゐる。何故かゝる差異が生ずるのだからか。それは單なる表面的な現象にしか過ぎないのだからか。それとも満洲のインテリゲンチヤは眞實のインテリゲンチヤではないのだからか。

何れにしても満洲は「知識階級論」に一つの積極的な解答を附け加へる義務がありさうである。

一日本文化＝東洋文化＝日本主義　日本民族の問題が現在再批判されてゐるのも、嘗てはそうあつたように、日本文化、日本民族の特殊性を強調することによつて、支那文化、支那民族と訣別對立する爲ではなくて、寧ろそれと結合し、或はそれを包摂せんが爲めなのである。この課題に對しても、満洲は有力な發言權を持つてゐる筈である。祖國を離れて始めて祖國の眞實の姿を知り得るといふ立場からばかりでなく、在滿知識邦人は、政治の實踐に於て滿支人、滿支文化と交渉し、それとの「協和的發展」を使命としてきた經驗を持つからである。日本

の特殊性の名の下に、今どんな議論が行はれるか。滿洲こそ偏狭な理論が、民族の大抗衝に當つて極めて慘めな役割をしか果し得ないことをよく知つてゐるのではないか。

「革新イデオロギー」の問題についても同様である。日本のジャーナリズムは、多くナチスのそれを語つてゐる。だが、日本が長期抗戦の壓力の前に、國內體制を整備しようとして生んだこの課題を、ナチスの理論を借りることによつてしか解き得ないのだからか。革新國滿洲にはそれ自身の經驗によつて得た解答がある筈であらう。

普通の課題を、滿洲の特殊性に於いて捉へること——これが現地主義の第一になさねばならぬことである。それによつてのみ滿洲の雜誌は滿洲の知識層と結びつく可能性を持つ。

(3)

普通の課題に對して怠惰を示した滿洲の雜誌は、特殊な課題に對してはどうだろうか。雜誌は、勿論滿洲の特殊性を捉へることに努力を拂つてゐないわけではない。然し、特殊性をよく捉へてゐるかどうかに就いては、頗る疑問がある。

滿洲と謂ふとき、人は先づ茫漠たる曠野を想ひ浮べる。曠野には土小屋が建ち羊が群れ、赤土が夕陽に映えてゐる。これは確に一つの滿洲である。だが、もつと違つた滿洲もある。壯大な建物が空に聳え自動車が行き、ネオンが明滅する、建國イデオロギーとその横腹に風孔をあけたといはれる重工業會社と

モーニングと國防服と、大學と映畫會社と法院と。米と高粱と、五族協和の旗印と。そしてそれらのものゝ蔭にひそんでゐる膨大な無智、窮迫、軋轢墮落。滿洲はまだある。國境で何が起らうとしてゐるのか。血が沫き、銃劍が光り、黒い雲がたれこめてゐる。僻地にモンペをはいた若い女の姿が見え、赤ん坊の泣き聲が聞える。移民と人は呼んでゐる。

滿洲の特色を羅列することは到底不可能である。だが、言ふまでもなく滿洲はそのやうな要素が無關係に散在してゐる所ではない。バラバラに見える要素は結びつけられて一つの有機的な社會をなしてゐるのである。それは縱の關係に於いては、「現段階」にまで發展した王道主義國家滿洲であり、横の關係に於いては、世界經濟・政治・文化の一環としての滿洲國である。

このことは滿洲の文化を批判するための正しい觀點を與へずにはおかないだらう。即ち、滿洲の基本的な文化は、二重のブリズムを通つたものでなければならぬといふことである。第一は、滿洲國の現發展段階のブリズム、第二は、世界文化のブリズムである。

ところで、われ／＼が稀に、雜誌で讀み得る滿洲の思想、感情はどうだろうか。それは依然として、「赤い夕陽の滿洲」「苦力・阿片の滿洲」であり、最も新しくとも「重工業會社出現以前の滿洲」である。それは、多分に好事家的、古典的であり、獨斷的、偏狭的であり、決して、現段階の滿洲國の思想、世界文



化の一環としての滿洲國の文化ではない。尤も人は答へるだらう。滿洲には、明確な建國の國是が存在するので、それに制約せられて、自由に「在るべき文化」を語る餘地はないのである。確かに、滿洲國の文化の基本的な動向は、國是の中に示されてゐて、それに對する紛更は許されない。しかし、それは、謂はゞ「文化總論」にすぎないのであつて、「文化各論」は未だ空白のまま残されてゐるのである。例へば、滿洲文學も一般指導原理と同様に、王道主義に則らねばならぬといつたとしてもそれだけでは、具體的にみれば、殆んど何事をも意味しはしないのだ。文學方法の確立とその實踐によつて始めて上述の「スロガン」は生かされる。「總論」が具體化するためには、必ず「各論」の形をとらねばならない。「各論」のない「總論」は、未だ潜在的なものでしかないのである。

われ／＼の前には、かゝる偉大なる文化的空白が置かれてゐる。この空白を、幾にのべた三重のブリズムを通過した文化によつて、埋めることこそ、在滿知識邦人の義務ではないだらうか。そして、同時にまた、かくの如き方向への知識の動員こそ滿洲の雜誌の重要な義務なのではないだらうか。

滿洲國の特殊な課題を、普遍性に於いて捉へること。これが現地主義の第二に爲さねばならぬことである。

(4) われ／＼は以上に於いて、滿洲文化の發展のために、滿洲の

雜誌が、果さねばならぬ使命、の若干について語ることが出来た。それは幾分、抽象的でありすぎた嫌ひがあるやうにも思はれるので、具體的に、二つの註文を提出して、われ／＼の主張を明かにしよう。

第一、雜誌は滿洲國の生産的な生活場面をもつと實く深く捉へねばならない。

滿洲の雜誌は、都市の消費的な生活場面に力を入れすぎてる。人口の八〇％以上を占める農民の生活、われ／＼の最大の關心の的である移民の生活、邊境の生活、國家の生成と云ふ歴史の未だ知らない大規模な生産行程に現れる生活の相剋、矛盾等々が極めて僅か而も外面的にしか捉へられてゐない。一つの例にしかすぎないのだが、「新天地」(六月)では、折角の移民と云ふ現地的テーマを、滿鐵幹部の視察座談會といふ方法で捉へてゐる。

しかし、讀者が現地雜誌に求めるのは、滿鐵總裁の演説を敷衍する報告ではない。移民自身の喜びと歎きとの直接の聲なのである。それは、彼等の耕してゐる、同じ土地續きに生きてわれわれをの當然の要求であり、海を距てゐる、内地人の現地雜誌に求めるところでもあらう。大陸の颯角として八方に張りめぐらされた滿鐵の社員網を動員する可能性を持つ「新天地」は、もつと大陸の隅々の生活を内面的に捉へる努力をなすべきものやうに考へる。それでこそ、支那事變によつて、準現地誌と

しての新たな使命を負はされた満洲雑誌の意義を全ふするものであらう。

第二、雑誌は文化部門をもつと重要視すべきである。

満洲において、經濟、政治の問題が第一であることは否めない。満洲は先づ生存せねばならぬからである。だが、このことは満洲が文化を無視してよいといふ結論を生みはしない。文化も生存の一つの面である。否、満洲國のやうに、建國自體が或る精神的意義を持つ國家にあつては、文化こそ、第一義的なものだともいへるのである。

恐らく、満洲程「道義」の説かれる國は少ないであらう。演壇で、ラヂオで、パンフレットで、われ／＼は、王道精神をきかない日はない。それでゐて、實際に、われ／＼の見、聴き、知る満洲の私生活程、王道精神から距たつてゐることも亦少ないであらう。

「看板と實生活」との間に横はるかくの如き巨大なる乖離を克服するのは何んであらうか、それは先づ、國政の一般的合理化であるといへるかも知れない。だが、一方、文化の滲透による克服も看過されてならぬことはいふまでもないであらう。誰でもが指摘する満洲生活の「出稼ぎ性」は、満洲文化の私生活への滲透、壓力によつてのみ拂拭される。

われ／＼は、満洲の凡ゆる私生活に、文化的照射を行はねばならない。雑誌はそのための武器となることによつて一つの意

義を獲得するのである。近頃、各雑誌が、創作欄にスペースを削き始めたこともうれしいことである。それは何人かの作家を生み、何篇かの優れた作品を得るためではなくて、満洲の生活を大地に結びつけるための一つの營みとして必要なことなのである。

満洲の雑誌の文化無視は、人口の大部分を占めてゐる満人自身の文化的な發言權を一切とり上げてゐないことの中にも現はれてゐる。満人には一人の作家、批評家もゐないのだらうか。若し埋もれてゐるならば發掘し、ゐないならば創り上げる義務があるのではないだらうか。満洲ジャーナリズムは、十四歳の少女の才能を「綴方教室」にまで昂めた熱意を、満人作家、批評家に示さねばならない。文化の交渉なくして、五族協和は有り得ないからである。大内隆雄氏は満人に優秀な作家、批評家のあることを語つてゐる。満洲文藝年鑑(十二年版)この意味で「満人もの」の創作は餘すべきだし、「満洲人の少女」(月刊滿洲)のよき意圖は買はれねばならぬ。永年にわたる「聊齋志異」の翻譯によつて一つの特徴を示してゐる「滿蒙」も、中途半端な時事問題に脱線するより、その本来の特徴を強化して、古今の満洲文學、支那文學の紹介に力を注ぐことをのぞまずにはゐられない。

これも亦一例にすぎないのだが、満洲文學の理論の問題に對する雑誌の無關心も文化無視の一つの現れである。満洲自身か

ら燃え上つたこのやうな文化的烽火こそ、これをとり上げ、發  
展させ、體て文化一般に押し及ぼす契機とすべきではないのだ  
らうか。況んやそれは、單に文學理論の問題ではなく、文化建  
設に關する二つの基本的な態度の對立、論争をさへ含んでゐる  
場合において尙更である。

◇

傳統、基礎、新鋭な執筆家グループにおいて斷然他を壓して  
ゐる「新天地」、最近彈力性のある編輯法と特色ある寄稿家によ  
つて一つの飛躍を示した「滿蒙評論」この二つの雑誌を對照し  
ながら、個々の内容にまで立入る豫定であつたが都合によつて  
中止した。他日を期せざるを得ない。従つて、物足りなさは第  
一に筆者自身の感想であることを附け加へておこう。

附記、これは滿日紙に發表した文章に極めて僅か手を加へたも  
のである。内容は既に「舊く」なつてゐる（その間雑誌の組  
織替、改題等も行はれてゐる）のであるが、この一文が草さ  
れて後、筆者の所謂、現地主義が、新聞、雑誌によつて著々  
實踐せられ始まつたといふよろこばしい記憶を、單に、偶然  
とのみは考へたくなかつたので、その記念のために、敢へて  
「年鑑」に収録することにしたのである。

隨  
筆

## 沿線人種

秋原勝二

奥とか沿線といふ言葉は今でもよく使はれるが、ついこの間までは、随分限定された言葉だつた。たか／＼新京附近に行けば、もう奥であつたし、沿線は舊鐵道附屬地を指してゐたにすぎない。かういふ言葉は昔の日本人の住んでゐた地帯の或る響きをさへ傳へてゐるやうに思へる。今でこそ奥とは廣い廣い北滿地帯を指し、國線を含めた鐵道沿線全部が沿線だと考へ直してしまへば不便はないが、舊附屬地方を旅行して來るのにやはりうっかり、一寸沿線になど、口がすべつては、言ひ直さなくてはいけないやうな妙にそくはないものを感じる。こんな古い言葉にすつかり慣れきつて暮して來た人間も澤山ゐるものだ。

昨年、地方行政權が滿鐵を離れ、舊附屬地はもうなくなつていよ／＼昔の沿線といふものは影がうすくなつた。嘗て、一本の鐵道を中にその従事員とそれを目あてに集る商人とで形成されてゐた附屬地が、その特殊の垣根もたうとう取り拂はれた譯

であつた。

内地の人は容易に滿洲に來たがらなかつた。大連の人が、容易に沿線に移るのを好まなかつた。奉天、安東にゐたものは、小さな中間の驛になほ／＼行きたがらなかつた。新しく滿洲の事態が變つたとき、南滿にゐた人は、北滿に移つて行くのに、なか／＼思ひきりが悪かつた。昨年、地方行政權移譲により、滿鐵から滿洲國官吏になつて行つた人達も總じて決して思ひきりよかつたとはいへない。新しく内地から來る人は、今でこそ大量に北滿僻地にも這入つて行くから、かういふ心理は一層姑息の譲りは免れないが、かういふ人達は古い意味の沿線とか、奥といふ言葉に慣れきつて生きて來た典型的な人達といへるだらう。

今となつても、かういふ心理をすてきれない情なきを指摘するのは容易であるが、この心理の生れた淵源を理解することは、肝要であらう。それは過去を知ることだ。年數でこそ、三十年そこそことはいふが、はや古だ、過去のものとなり果てた言葉と町に、生きてゐた心情について處しく考へることである。

附屬地を、歩出れば張一族の壓迫きひしい支那であつた。足が、歩、地域を越すそれだけが日本人の心の置き方を途方もなく變へさせる。日本の政府は、大陸經營には決して熱心ではなかつたし勢ひ政府の力の及ぶ附屬地に膠着する日本人ばかりが

出来上つた。やがて彼らは鐵道經營に依存し、その中でのみ生活する習慣を會得したのであらう。かういつては何のこともあるまいが、そこから生れた心理の奥底に拾つてみるならこの人達ほど日本政府の強力な庇護をぢかに感じたがつてゐた日本人もゐなかつたらうともいへる。野放しでは育たない、生活の弱さもさることながら、かういふ心理の生れた哀れな理由を僕らはそこにみつけ出す。

附屬地はさういふ人々の住んだ世界である。附屬地はもうない。だが、かういふ心理が、條約の改廢のやうにパツパツと消えたり、生れたりする由もない。この點、今、日本政府の強力無比な庇護ばかりか、各種特殊機關の努力にまもられて内地から來る日本人が、どし／＼北滿にでも這入つて行くといふことは、時勢の變化に喜びこそすれ、必ずしも彼らの勇敢さなど、感心したりはしない。

八月の暑い盛りに、今はそれ／＼、ガイ(街)なり市なりになつてゐる南滿の町々を僕は廻つたが、なるほど、様子は變りかけてゐた。そこには官吏と人民とをあきらかに發見するのである。たゞ或る市にあつてはそれが急速に官吏と人民で充たされてしまつたか、平民であつた人が、急に官服着せられて、ぎこちなさ／＼にしてゐる程度かの違ひであつた。ぎこちなさ／＼自分の町の新官吏をみて、その町の日本人達は自分らの變化しつゝあることをハッキリ意識したかどうか。それともたゞ安堵の

胸をなで下ろしたゞけか。何もかも町の位置、將來性によつていろ／＼と度合ひに差があるやうだ。

内地で官吏をしてゐた人や、滿洲國官吏を経て來た人が多くはいつて居れば居るほど、そこに色彩は激しい變化を來たす、さういふことは特別市や市に多くそれほどでもないのがガイ(街)のやうだ。だが、どこの町も打ちみたところ、人は歩き、馬車は動き、樹々は茂り、暑さは暑しで、急には變つたとも思はれない。外見の有難さといふのだらうが、しかし、その人の胸にぢかに耳をあてゝきいてみるとなかく／＼さうでもない。

殊に、町自體何の將來もなくたゞ、自分達が住んでゐたにすぎなかつたガイ(街)の人の話など(かういふ所は割と、從來の人が多く残つてゐて、自分が官吏なんだとは、どうしても考へられないといふやうな表情の人達が多いのだが)きいてみると、やはり町の事情の變化といふものはもう見逃せないものとなつてゐる。——市ならいゝのですよ、ガイぢや、財源の檢出法がたとひ考へられたにしろ、どん／＼それをやつて行けない。々々遠い省政府の指令に俟たねばならないんですからね、何も出来ませんよ——まるで面白い顔をしていつてゐた人がゐた。さういふ町の道路は、思ひなしに荒れてゐる、破れたまゝの路面が補修されもせず陽に晒されてゐる。附屬地時代のやうに仕事をしようと思つても、思ふやうに豫算をもらへなかつたら、なるほど仕事の張りは失せて行くだらう。面白いことに



は、滿鐵が附屬地を經營してゐたころは、滿鐵の仕事がどうかうだと悪口ばかりいつてゐた町側の人々が、最近は滿鐵のありがたさがよく分つたらしいといふある町での話。

とにかく、附屬地時代は一般に或る程度潤澤であつたものが、一部に血が乏しくしか行かなくなつたといふ感じだ。その代りその潤澤さが、いよ／＼潑刺とした光さへ帯びて來た町も一方にはある。

變化した町の事情に困惑した表情の人達が多いのは、沿線とか奥とかいふ言葉になれきつてゐた人達が今や大きな浪にとけこんで行く顯著な姿であらう。かういふことはもつと多く、もつと決定的にいろ／＼な場合これからもみるであらうが、様々なとけ方をしながらも、結局は新しい大きな力の中に入りこんでしまふことは見えすいたことだ。そしてそれは至極とるに足りぬあたり前なことなのだ。

だが、かういふことがたえられないで、滿鐵に歸る日を指折り數へて待つてゐる人も意外に多い。そのいふことがいふ。——わたしら滿洲國に轉出したものが、全部舞ひ戻つたとしても、たかゞ千人かそこらぢやないか。みんな一緒にまた歸つて行きませう。そしてまた、自分の知人が滿鐵から一人でも減らないことを希んでゐるさうである。理由は自分が滿鐵に歸るとき、口を利いてもらはねばならぬといふ。——僕は諸君の犠牲になつて滿鐵を出たのではないか、今度は僕らの犠牲となつ

て、たとひ諸君が滿鐵をやめたくともやめずにゐてもらはねばならぬ——。これは冗談ごかしの話で、腹を分れば、もつと眞剣に滿洲國官吏としての自分を考へてゐるのであらうが、蓋し昔懐しい滿洲にとつて古い心情が吐かせる言葉の一部であらう。

滿洲國官吏になつたことにかへつて喜びをみつけてゐる人も澤山ある。しかし一抹の何かを拂拭し去るには、もう少し時間を要することだらう。こんな氣持は早くなくなつた方がよいこと論をまたない。

子供の頃、キリギリスに胸をどらしたことがある奉天の附屬地にあつた草深い原っぱは、ビルディングやアパートに埋められて、まるで跡もないし、遠足に出ては飯盛山になぞらへて棒を揮つた砂山はもうほんの町のそばにある。葡萄酒の匂ひのする草のあるなつかしい遼陽は、砲のやうな豪雨の中に埋れ、洋車で町にあふれた水をよぎり、僕が訪れた市公署の人達は、遼陽城の壕の水深とにらめっこである。——太子河はまだ／＼大丈夫です。水は、雨の降つてゐる中は恐くありません、やんだあとですれ——。いよ／＼水高が増すと對岸の農民が堤防をきりに來るといふ話をきいた。そんな話をしてゐるその人の顔には滿洲國の官吏になつてから、どうだかうだといふ附甲斐ない様子は微塵もろかへなかつた。僕のかよつたことのある小學校は、雨の中に平べつた伏し、大通りには以前はなかつた

店がいくつもあつた。クロバトキン將軍の司令部だつた黒煉瓦の家は、どうなつたか知らないが僕の住んでゐた貨物ホームに面したロース建は今でも人が入つてゐる。

各地を馳け足で、或ひは一二泊しながら廻り、遼河畔の營口の思ひの外の股賑さや、張一族の策動に敢なく育ちをとめられた開原の明い眺望、はじめて行つた新京の拓かれ行く大きな力など、殊更記憶に鮮かであつたが、今となつては何の理由でこゝまで育てられて来たかと疑ひたくなる空洞のやうな、いくつかの町にぶつつかつては、昔の心情を捨てきれないで取り残されて行く人々にも似た運命を感じ、附屬地といふものゝ宿命について今更振り返り考へた。

# 日記とカレンダー

紫藤貞一郎

## 一、一日記

歳晩から正月にかけて書肆の店頭で埋高く積まれた日記の山、幾種類あるのか解らない程の意匠、形態の様々だ。ペン書きのこの日記が何時の頃から流行し始めたのか穿鑿の限りでないが、何しろ大したものと思ふ。今ではこれも町の立派な年末、年始風景になつて仕舞つて「日記買ふ」とか、「日記出づ」とか、俳句の季題にまで取り上げられて居る程だ。新しい行事が俳句の季題に取り入れられる様になれば、その行事は日本精神化したものと見ていゝと思ふ。クリスマス、ストロブ、ポーン、マスク、ショール、コスモスなどの外来語などが立派に季題化して居るが、それは既に日本民族の血肉になつて居るとの證據を示すものである。

實朝の歌ちらと見ゆ日記買ふ

(青 郵)

店頭であれやこれやの日記の選擇に迷つて居る時、バラ／＼

とめくつた一つの日記の頁の欄外に實朝の歌がちらと見えた、この日記に決めようといふところである。

私は今年に社員會から寄贈された「社員日記」といふのを用ふることにした。まる九年も滿鐵に居ながら自分の會社の社員日記を使ふのが初めてとは誠に相濟まない限りである。處で、たゞで頂いたから褒めるのではないが、こんな立派な日記は初めてである。編輯といひ、圖案裝幀といひ、紙質といひ全く日記界の豪華版だ。燦然たる滿鐵文化の一面を象徴するものといつてよい。餘りに立派すぎて、その中に詔録する自分の生活の貧弱さや、文章の拙劣さが恥しくなる位である。尤も他人に見せる日記でないから安心だけれど、それだけにまた自愧の程度が深いといふものだ。

毎年いろ／＼の日記を買つて見て居る。常用日記、軍用日記、文藝日記、修養日記、自由日記など／＼、或は横書きの日記を試みたこともある。横書きの日記は家人に讀まれても譯の解らない横文字を書くのに都合がよいと考へたのであるが、結局それ程の秘事も無い無風流な自分の生活だし、それに日本文字、殊に平假名を書くのに不便なので、一遍で止して仕舞つた。

さて、斯くして毎年日記をつけ初めては見るものゝ、年末まで几帳面につけ終せた、めしがないのだから吾ながら呆れる次第である。毎日克明に日記をつけてゐる人達を見てみるとその根氣よさと眞面目さとに心を打たれるのであるが自分のやうな

無分屋にはそれがどうしても出来ない。歳末になつて日記をバラ／＼と繰つて見ると半分以上はブランク頁なのに自分ながら驚く。しかもそれが最も重要な記録のあつて然る可き日が却て空白のまゝに残されてゐるのだから凡そ日記の用をなさないと云ふものだ。例へば子供の死んだ日とか、未知の土地に旅行したとか云ふやうな時の記録が抜けて居て、平凡な日の記事が言葉丈け美しく描かれてゐるのを見ると自分乍ら氣恥しくなる。感銘の餘りに大きい時、感情の餘りに亢進した時など矢張り凡人の悲しさには自分を抑制し、客観することが出来ないのである。優れた歌人達が親や子の死を歌ふあの強い抑制と沈思の強剛なる精神に今更頭を下げずには居られない。

日記をつけることの功徳や目的についてはいろいろと教へられてゐる。認識と表現の文學的修業のためとか、沈思反省、自己批評の道徳的修業のためとか、自己の人生記録のためとか、色々の目的があるであらう。他人に見せるための記録でないことは勿論であるが強ひて言はゞ神への懺悔や祈りや願ひの文學的表現であるといへるかも知れない。私には一つの意見がある。日記は前述のやうな目的で自分のために書くのではあるがそれは唯自分だけに残すのではなく自分の生命の連続であるべき自分の子供達に遺して置きたいと私は思つてゐる。それは彼等の生命の源泉としての父の生活記録でありいはゞ彼等の生命の歴史だからである。成れるところのものはその成りし歴史を知る

ことなしには正しく理解し得ないものとすれば彼等が彼等自身を知るためにも父の生活記録は役に立つものであるに相違ない。

またさういふ深い意味を離れて考へても、親たるものゝ日記は同時に子供達の生長の日記でもあるに相違ない。勿論、自分は親であると同時に子供と獨立した一個の人間としての存在でもあるが、具體的な生活においては意識的であれ無意識的であれ、如何なる場合にも親としての自覺や確信が自己を動かしてゐることは事實である。

先日觀た映畫「風の中の子供」の中で子供の父が無實の罪で拘引された留守にその父の日記を讀んでゐる場面があつたが、私は「子供達に遺すために日記を書く」と云ふ自分のかねての氣持が裏書きされたやうで微笑せざるを得ない。子供に見せるためならば（勿論、自分で死んでから後の事である）どんなことでも忌憚なく書ける自分の恥も罪も書きつけて置ける。子供達は父の生活を自分達の生活の前の續きとして見るだらう。どんな恥をも寛大な心で見ても呉れるであらう。又若し父が世に容れられなかつた不遇をかこつ言葉などあらば、せめて子供達だけは父に同情の涙を流して呉れるであらう。現在容れられない父の精神も子供の時代には容られるかも知れない。そんな氣持で、云はゞ遺言の氣持で日記を記すこともあり得る。

× × × × ×

私は、毎年子供達へのクリスマスプレゼントとして日記を買つて與へることにしてゐる。尋常一年生の時から書かせて居るのであるが、時々盗み見して見ると仲々面白い。子供の日記を見て居ると今度は親が却て自分の過去を幼い時代の自分の日記を見せられて居るやうな錯覚さへおこつて自ら微笑を禁じ得なくなる。だが、一昨年十歳で死んだ長女の、三冊の日記は親にとつては讀むに耐へない可憐な日記であつた。それは逆に子から親に遺された日記であつた。

## 二、「カレンダー」

カレンダーといつても曆といつても同じ概念ではあるが、實際に吾々の觀念においては確に違つた姿を以つて映ずる。カレンダーといへば柱曆や壁懸け曆のやうな西洋風のものと思ひ浮ぶし、曆といへば冊綴になつたあの古風な伊勢曆が描かれるそこに時代の様相や、言葉の感覺の變遷が感ぜられて來る。

君が代や寺へも配る伊勢曆

(一) 茶

玉櫃にもたれて立ちけり曆寶

(たけし)

使丁に箱を擔がせて家をめぐつて曆を賣り歩く神官の姿や、街頭に立つて新年の曆を賣つて居る歳末風景がこれ等の句から

思ひ出されるのであるが、こんな風景も段々と廢れつゝある。いや、今でも毎年神主さんから伊勢曆をお受けするのであるが、それは神棚に供へたまゝで平素開いても見ない中に一年を過ごして仕舞ふのが普通である。

曆と云へば地球と日月星辰の時間的關係を表にしたものであるが、かうした天文的事象を神事と結びつけて神聖なる行事とした昔の人々の心のゆかしさを私は有難いと思ふ。衣冠束帯の神主から三寶にのせてお受けするお曆であつた。代々の偉大なる天文學者達の科學上の業績をいと聖く尊い神事として拜受する氣持は決して卒爾なものではない筈であつた。

處が今のカレンダーは書店から藥屋から、消費組合から、感謝と廣告と半々の意味を以て郵送せられ、又は自轉車に乗つた小僧さんによつて配達せられ、玄關の土間に放り込まれる。與へる方にも受ける方にも何等の敬肅な心の動きは見えないのである。

さはれ、總てが一つの過程である。曆はその過程を一寸鏡であらう。自然や人事の時間的變化の過程を示し乍ら、自らも亦その過程の中に身を任せねばならない。神事が日常茶飯事に變ること一面から見れば神聖の行儀であるが、一面から見れば人間そのもの、發展かも知れない。

X X X X X

とまれ、今日に於てもカレンダーは各家庭に於ける一つの年

末年始風景であることに變りはない。

暮になると方々から色々の形のカレンダーが寄贈される。日めくりカレンダー、日曜表のついた月めくりのカレンダー、卓上メモ用のカレンダー等々、今日では最早カレンダーと云ふものは商品ではなく全く一つの商家や會社の各家庭への贈物としての存在になつて仕舞つた。それ程廣告價值も大きいのかとも思はれる。

新しいカレンダーが來ると、未だあと數日残つて居る古いカレンダーの採けた姿が一層みじめに寒々と見えて來る。平素からカレンダーを二、三日も先きの日の分まで剥きたがる子供達は斯うなるともう我慢出來なくなつて、大人達があと數日の残日を惜しむ氣持など察しやう筈もなく、早く古い方を片づけたがる。仕方なしに古いのを外して何處か隅の方の壁の古釘に移して新しいのを懸け替へさせてやるのである。來月號の雜誌を前月の中ごろにはもうよみましたへて終ふやうに大日本雄辯會講談社その他の教育法に慣らされてゐる我が愛する日本の子供は、季節の調和などといふ感覺は麻痺させられてゐるから世話がな

い。  
だが、さういふ大人と雖も新しいカレンダーのアレッシユな感覺は悪くない。それは子供達の來年に期待する喜びといつたものとは違つて一日も早く年末の慌しい押し迫つたやうな鬱鬱や、回顧の苛責から免れて新年の清々しい空氣を呼吸したいと

いふ消極的な願ひからではあるが、それでも矢張り何かしら漠然と新しい年のカレンダーに期待する潜在意識があるからに違ひない。潜在的にもせよこの期待があるから人間は明日を生きようとしてゐるのであらう。

× × × × ×

子供達が新しいカレンダーを左右から一緒になつてめくり乍ら今年の日曜日と旗日との續き工合を調べてゐる。「あつ、日曜と祭日と續いて居るぞ、萬歳！」と快哉を叫んだり一あゝ残念なるかなこゝでは日蝕と來た」などゝがつかりしてゐると勤め人であるこの父親も一緒になつて悲喜交々だ。

休み日といふものはどんなに嬉しいものかと思ふ。生活と仕事といふものゝ分離して居る現代人にとつては或は休み日だけが眞實の人間の生活を享樂し得るのではないかとも思はれる。

然し、休み日になつて見れば案外つまらない休み日を過ごしただと後悔することの方が多い。所詮人間は期待だけが楽しいのであつて現實といふものには後悔を伴はない快樂などといふものはないのかも知れない。幸福と云ふものは觀念の世界に求む可きものであらう。

カレンダーは一日々々と吾々の生命を刻んで死への接近や、自然界の人間に對する運命的な規定を示す縮命表であつて、三百六十五日と云ふ時間的埒外に一秒の逸脱をも生理的人間には



許さないのであるが、心理的人間にとつては無限の観念的時間と云ふものがある、それはカレンダーの時間を科學的時間と呼ぶならば宗教的時間と稱すべきものであらう。

カレンダーでないあの古い曆にはこの宗教的時間が誌されて居た筈である。

# 水野さんの話

## 三宅 照子

も突きぬけて何メートルか先迄も行つてしまつたのだといふ。味方の入達ははつとした然し撃つ手を止めるわけには行かぬ。眼の前には敵が群がらつてゐるのだ。一刻もためらつてはゐられぬ。機關銃は矢つぎばやに撃ち出された。

そして、馬上の人は、遂に友軍の弾に當つて悲壯な戦死をとげたといふ。

馬上の人がきらりと軍刀を抜き放つ、途端に「高津」の眸には、あの自分が傷ついた、在りし日の戦場の有様が髣髴と浮び上るのであらうか。「突撃い——」とひびく聲、「高津」は思ひ出す。

「高津」はもう凝つとしてはゐられなくなる、夢中になつて走り出す。「高津」の眼は血走つてもう何もかも映らない。ヒュウ、ヒュウ、といふ弾のうなりが聞えるだけ。

一話をきいてゐる中に、そんな風に想像されて、私は何か「高津」の心情が無性に可憐に思はれてきてならなかつた。

話し手の水野さんは去年の春、××の騎兵隊を除隊になつた伍長さん、志をたて、今滿洲で働いてゐる人。大きなこつ手でお茶碗をささげ「はつ頂きます」濟んでしまふと「頂きます」と軍隊式に挨拶をする。

「頂きましたなんて可笑しいなあ、御馳走様つていふのがほんとは小父さん」

「違ふさ、軍隊ぢやあ頂きました、つて云ふの」  
「ほんとう、ふうんさうかなあ、何だかへんだなあ」

古賀聯隊長の乗馬だつた「高津」は、或時、戦場で脚部に貫通銃創を負つた。それ以来彼「高津」は、演習の時であらうと何であらうと、馬上の人が一旦きらりと軍刀を抜き放つたが最後、タツタツタツと突進を始め、誰れがどんなに制止しようともきかばこそ、絶対に止まらない。一氣に駆けつて駆けつてくたくたに疲れてぶつたはれる迄。

その爲に、三人の兵士が無惨な犠牲になつたと云ふ。その一例はかうだ。

### 匪賊討伐の時

騎兵隊の人達は敵を追撃するのに先づ或地點まで騎馬で追ふ、或距離まで近づくと馬を降りて一せいに機關銃を發射する。さういふ或時のこと「高津」もその中に加はつてゐた。逃げ

る敵を追ふ騎馬隊。無論馬上の人は光る軍刀を抜き放つてゐた。ところが馬を降りる地點に来て、「高津」だけは止まらない。そのままタツタツタツと群がる敵の中に突進し、尙其處を

兵隊さんといふものの現實にぶつかつたのは水野さんが生れて始めての私の二人の男の子達は、片時も傍を離れない。知らぬ間にもういろんな「兵隊さんのお話」をきき出してしまつてゐる。

「小父さん匪賊討伐にも行つた？」

「うん、行つたとも」

話の上手な人ではないけれども、美しい水野さんが馬上で軍刀を抜くポーズをしたり、演習の時落馬して凍つた地上を何メートルか引きづられて氣絶をした、といふやうな話をすると、何だか映畫でも見てゐるやうな氣がして、子供達は眼を見開いて聞いてゐる。

「そいでどうしたの？」

「何かさ」

「その『高津』つて馬、それつきり何處かへ行つちやつたの？」  
「いや、ぐるつと廻つて戻つてきたよ、それから又敵の中を突き抜けて、そんな風に三回ほどぐるつと廻つて到頭へとへとになつてたほれちやつたの」

「ふうん」

水野さんはそれからいろいろな馬の話をした。「宮月」といふ水野さんの馬、馬とお菓子を分け合つて喰べる話、馬がお菓子をねだる話、賢い馬に愚かな馬、ずるい馬。

「僕、馬のことだけはいつか一度書きたいと思つてます」

と水野さんは云つた。

水野さんは自分のことを「僕は蒙古兵」「蒙古」と云つてゐるけれど、なか／＼詩人でもあるし、器用に繪なども描く。山海關に行つた時には、ドレスの飾ボタンのやうな白い光つた綺麗な貝殻に「噫々渤海我泣」と書いて送つてくれたし、いつか手紙の中に描かれてあつた圖案のやうな滿洲里の繪は、空に三臺の飛行機が飛び、木群の中に教會堂の塔が聳え、何だか今にも鐘の音が響いて來さうな氣がした。

文章も上手だし、それはお書きになるといふ、是非お書きなさいなと勧めると、水野さんは急にはにかんで

「いや僕は駄目です、僕は書けない、お話しますから三宅さんが代りに書いて下さい」  
と謙遜してしまつた。

水野さんは近々に召集されるかも知れないと云ふ。もうすっかり準備もして待つてゐると云ふ。だから今度來る時は白い箱に入つて來るかもしれせんよ、と云つた。白い箱になんか入らないで、青龍刀でもお土産にかついで凱旋してゐらつしやいと私は云つてあげた。

## 隨 想

木原鏡之助

### 政 治 家

北支、中支を視察し途中敗殘兵の襲撃に遭つた日本のある政治家が、「天津に近い陳漢屯で敗殘兵の襲撃をうけてね、いゝ體驗をした、彈丸がパン／＼あたるので皆が椅子の中にかくれるといふんだが、死んでから彼は椅子の下でやられてゐたなんていはれるのは癪だし、どうせ彈丸があたるときにはあたるんだから煙草を喫つてゐたよ、自分では悠々としてゐたつもりだがね」と得意になつて語つた。落ちついて悠々煙草をふかしてゐた態度は立派である。がしかしその態度の裏に潜在する椅子の下でやられてゐたなんて言はれるのは癪だといふ意識の中には多少の濁りと、日障りがありはしないか。これが商人や會社員の言葉ならば無難で通用するのであらうが、毀譽褒貶を度外視して天下國家を論ずる政治家の言であるがためであらう。何だか餘計な雑音があるやうに感ずる。もつと淡淡たる氣持ちで煙草をふかしてゐなかつたものかと思ふ。日本に於ける政黨不振

の原因は政黨人の大臣病にあると云はれてゐる。己を虚しくすべきものが、己の名譽と意地に執著したものと失敗である。政黨人は過去の失敗を反省し、心自在を得たる境地に於て政治を考へるべきだ。そうでなければ支那を治めることは出来ない。

### 子 供 心

北京へ轉任した友人の話。

赴任當時は子供が可愛想であつた。晝間遊ぶ友達がないので狭い室でひとりくすぶつてゐる。友達のない子供のみじめさをしみじみ味つた。ところがしばらくするうちに近所の支那人の子供と遊ぶやうになつた。こちらから遊びに出かけたものか、先方が誘つたものか何れかわからないが、或ひはどちらといふでもなく何か自然な機みがあつたのであらう。今ではなければならぬ友達となり、その親しみは色濃くなつてゐる。尙ほ先方は日本語を覚え、こちらは支那語を自然に話すやうになつて、言葉の上にも不自由はなさそうだと。

子供はどこへ行つても友達を見出すことが出来る。子供同志の間に、血の隔てはない。言葉は通せずとも心が通じる。吾々大人が六箇敷く考へる日本と支那との融和も子供から見れば無雜作としか思はれぬであらう。日支の融和を口にする吾々大人は、砂遊びに餘念のない子供の心を一應考へる可きだ。

## 落 書

北京郊外萬壽山に遊ぶ。

萬壽山に於ては自然と人工が最も美しく調和されてゐる。人間の營みのすべては山と水に融かされて渾然不離の一體をなしてゐる。萬壽山に遊ぶものは誰しもこの調和と融合が持つ一種不可思議な音樂的魅力を感じるであらう、ところが建物の壁に落書がある。何といふ淺間しさだと侮蔑の念が湧く。それは、どつしりと落ちついた代赭色の壁と貧弱な落書とが比べられて、自ら生ずる感情である。落書と云つても嘲笑や諷刺に類する文句はない。總て自己の名を書きつらねたもので、中には原籍又は住所をつけ加へたものもある全部日本人。西洋人や支那人の名はないかと探してみたが半島人の名を少し發見したのみで無駄に終る。そこで日本人はどうして落書をするのであるかと考へる。どこそこの太郎兵衛、次郎兵衛と曲がりくねつた金釘流の文字で自己を到る處に刻み込めたいのが日本人なのであらうか。日本人は眞實な昆明湖の水を見、廣い廣い青空を見上げる前に、先づ自己を主張したがる。内に充實したものは外に對して謙虚である。徒らに自己を主張することは空威張に過ぎない。壁に書かれた雜然たる落書こそ、大陸に於ける、ゆとりのない、こせり合ひをする吾々日本人の生活そのものを表現してゐるのであるまいか。重厚なる壁と落書とを對比して冷汗三斗の思ひ

がする。大陸へ來た日本人は衣食住に於ても自己を主張する。疊の上に坐り、ヒラ／＼した衣服を纏ひ、刺身と漬物を食ひ、二千年來の因襲そのままで大陸生活を續けようとする。そこに不似合と不調和、否環境に順應せざることによつて生ずる破綻がありはしないか。吾々の主張する現在の自己が、無智、蒙昧の名で呼ばれるくらゐのものにならなければ、大陸に於ける吾々の生活は新しいスタートを切ることは出来ない。——今日本人は自己を反省すべき秋である。壁に名を刻むことだけは止したいものだ。

# 大晦日

大岩 峯 吉

「おとろとやんは、まだ歸らないの」

「あゝまだ歸らないのだよ。ど……うしたのだらう」

「遅いわね……」

もう時刻は、とつくに午前零時を過ぎてゐる。帝都の冬は武蔵野の空風が吹き荒んで寒い。けれども、流石に歳末だ。まだ通りには、人の往來がとまらない。

亭主は、此の月あふれが多かつたが、それでも幾日か働いた賃銀を、親方の處へ貰ひに出掛けたさき、未だに歸らないのだ。女房は女房で、早く歸つて呉れよばいと、氣が氣でない、だが、亭主の歸る氣色は、更になかつた。今は當日頃のことからそれからそれへと、厭な想像が女房の身中を、走馬燈のやうにグル／＼廻る。別けても亦どこか途中の居酒屋で、コップ酒でもひつかけてゐるのではないかと、それは心を痛めてゐる。子供は又子供で、一夜明くれば元日だ。一年中滅多に着たこと

ない、そして名ばかりではあるが、正月の晴着を着せて貰ふを楽しみに、遅くなつても思ひ出したやうに、時折目を覺しては、母親にせびつてゐるのであつた。

そこへ亭主が、醉顔朦朧として歸つて来る。なにがしかの賃銀を、女房に與へる。母と子の喜び一方なく、早速女房は、質屋へ飛んで、先づ子供の晴着を受出してから、寒い空風の中をアチラコチラと夜店の幾軒かに足を棒にして、それ門松だ、それ餅だと、形ばかりではあるが求めて来る。そして之も人の子一家は、斯くて元日の食卓を圍む。

大晦日の都の質屋は、夜びて店を閉いて、暖簾を仕舞はないものであつた。

子供の質物がない家では、母親は深夜反物を求め徹宵を仕立て、更にも角にも元日には、子供にだけは新しいものを着せるのだ。此の時に貧なる家の、眞なる母性愛が靡然として輝きもし、遺憾なく躍動もする。

今ではどうか知らないが、その昔都の大通りには、道の兩側に門松や注連飾、さては椒斗餅、或は神棚の諸道具など苟くも正月用のものは、一切賣る店が並んでゐたものだ。次第に夜も更けて、空風の寒さは又一人身に沁みて寒い。なのに人通りは中々に絶えない。世の浮沈のよく判らない者には、なんのこと



日経てば、又新たな年を迎へる。それは今も昔も變らない。

一年の計は元日に在りと云ふが、必ずしも元日に十二箇月に亘る先のこと迄敢て計畫を樹てないでも、せめて十一月も終り十二月の聲でも聞いた時、既に歳末の計を樹て、大晦日の而も夜の更けてから周章ふためかずになど、人の心も知らずに考へたりしたことであつた。

× ×

人間が貨幣生活を營んでゐる内に、何時迄経つても、人に貧富の懸隔がなくならないものなんだらう。そうだとしたら金の要る十二月になつたからとて、俄に金の殖える道理もないのだから、そうく計畫も樹てられず、又早めに諸般の準備工作を進めることも出来ないではないかと云はれもしよう。それはその通りだ。現實の世相は、嚴然として有力に、今も昔も之を證明してゐる。尤も多少金があつて、早くすれば敢て出来ないこともないものでも、門松や注連飾は、時のものだ。大晦日を一夜持ち越せば、もう駄目だ。商品價値は、からなくなつてしまふ。

そこで大晦日も可成遅くなつてから、靡かなにかで高く人の軒下に假小屋をしつらへて、空風の寒さを僅かに股火で暖を取つてゐる。かみさんや老爺を相手に、値切るだけ値切つて買へば又素晴らしい安くも買へるもので、それを待つてゐる者もあ

る。歳末師走の風景は、こんなところにも見える。

× ×

慶斗餅などは、門松や注連飾とは違つて、一夜明けたとて、そんなに値の變るものとも思はず、何時でも商品價値があるものだと素人には考へられるが、それでも大晦日に遅くなつてから買へば、安くも買へるのが、都の夜店の當だ。或は、餅の商品價値は變らないのだが、餅を賣る人の金融關係から、左様な商取引が行はれるのかも知れない。

× ×

單に月の終りからいへば、一月でも二月でも、さては十二月の盡日でも、月の終りには何の變りがないものとすべきだ。それが十二月の終りとなると、すつかり變るのも不思議なことだ。一年の終りだと云ふことが、重大な關係と作用とを持つからなんだらう。又十二月が一年の終りだといふことは、人生行路の上はさることながら、一年の決濟が此の月の終りに於て一切行はれることに其の特異性がある。六月も亦一年中に於ける決濟月ではあるが、十二月はそれよりか金融的に更に重い立場に在るのが、一世の通り相場なのだ。

泣いても笑つても、斯くして十二月が過去つて行く。山寺の除夜の鐘を遠くに聞いて、明くれば元日だ。人は、新たに歳を加へ、歴史は新たな一頁も繰り展げる。人類の進歩も、社會の發達も、斯くして促進せられて行く。

## 歸郷雜記

加納 三郎

(一)墓 (二)家 (三)人

(一)

驛から七、八分走つて、私たちの車は、草葺の小さなお堂の前に停つた。子供たちが珍らしさうに集つてきた。瘦せた櫻の木が一本まばらに花をつけてゐた。堂守がゐらなかつたので、妹が近所から線香を買つてきた。

「あんたがお嬢さんですかい。」

妹は店のおかみさんに目をみはられたさうである、私たちは何年ぶりかでの墓を訪ふたのであつた。

妻が古井戸から水を汲んだ。各々々線香がわけられた。

「こゝにおはあちやんがゐるんだよ」

母が孫の方をふり向いてさうつぶやきながら盛り土に水をかけた。比較的大きな二基を中に挟んで二列に並んだ十數個の石――これが私たちの家の墓なのだ。

私はおふくろの墓石を始めて見た。幅二尺、高さ五尺位の高

野石だつた。父にたのまれて作つた戒名が――父を中に現在の母を右に、死んだおふくろを左に、三行に刻まれてあつた。父と現在の母との名に入れられた朱は、もう大分くろずんでゐた。祖父の墓はその隣にあつた。死にたくない、死にたくないといひ暮してゐた祖父の墓に、私は先づ何杯もの開伽をそゝいだ。

おばあちやんのお墓――五つになつた女の子だけが一人しきりにはしやいでゐた。妻は囁々に線香をあげて行つた。彼女はこの土の下に埋められてゐる誰一人をも知らぬのだつた。弟はおふくろの墓に――手に持つてゐた全部の線香をあげてしまふと黙つてその前にうづくまつてゐた。額が薄くなつたな――私はふとそんな感慨に襲はれた。おふくろが亡くなつたとき、弟は決して佛壇に詣らうとはしなかつた。父に責められても、ポツンと、そんな氣になれないんですと答へたきりだつた。それから十年たつ。弟は妻を迎へ既に一人の子の父になつてゐた。當時、筒ツギ姿のいたいけな少女だつた妹は、もう立派な一人前の娘になつてゐた。

寫眞を撮るために、皆でおふくろの墓をとりまいた。私はピントを合はせながら、おふくろの顔を想ひ出してゐた。おふくろは三十年間、薄暗い墓所の隅で澤庵を刻んでゐた。小姑たちが片つき、子供が生長して、やうやく明るい部屋に坐ることが出来たと思つたとき、突然、胃から血を吐いた。小さい顔がトマトのやうに蒼くうんだ。おふくろは寝たまゝ、こま／＼と、

一家の年中行事を書きのこした。大根の種を蒔く時が、おはぎの作り方が、お寺への届け物が、書きこまれた。亡くなる朝、おふくろは私に二つの言葉を遺した。一つは父に逆らはぬこと一つは息をひきとると同時に入歯をはずすことだつた。私は泣きながらうなづいた。然し私は遂に、不幸なおふくろの最後の願ひをきくことが出来なかつた。おふくろが眼を閉ぢた夕、私は裏山の鯛の鑿をきながら、入歯をはずすことを忘れてしまつたのだ。私は當時そのことが氣になつて仕方なかつた。父に對しても、私はその後良い子になつたとは、いはれなかつた。

—兄ちゃん、何にしてんのさ。  
妹に呼ばれて、私は狼狽してシャツタゝをきつた。

—あんまりすましてつからさ！

私は笑はうとした。生垣の隙間から、野良仕事の村人たちがのぞいてゐるのが見えた。二三寸にのびた麥の緑がくつきりと眼に映つた。私は何故か急に一切が疎ましいものに思へてきた洋服を着、自動車にのり、妻子を連れ、寫眞機をもつた自分の姿が、たまらなくわびしくなつた。熱いものがグツと咽喉にこみ上つて來るのを感じた。

## (11)

自動車を返し、人通りの少ない道を拾つて私たちは家に辿りついた。門前の茶畑は苗のまゝだつた。唯、桐の木の大きくなつたのが目立つた。季の花が咲き亂れてゐた。

—大きくなつたのね。

妹がなつかしさうに花に顔をあてた。この樹は、おふくろの遺した何枚かの銀貨で買つたのだつた。弟が自轉車で近所の町から持つてきたとき、手の指位の太さだつた苗木は十年の間に子供がよぢ登れる程大きくなつてゐた。

潜り戸をあけて門を入つた。私たちが生れ育つた家は屋根が傾き、庭は掘り起されてゐた。女たちが戸を開き、表に面した部室の疊の塵を掃いた。みんなが縁側に腰かけて、隣のMさんが持つてきてくれた茶をすゝつた。

父は新しい母を迎へると聞もなく、この家を捨てる決心を始めた。何にや彼や、田舎が煩はしくなつたのだつた。親戚は舉つてその計畫を非難した。嫁にそゝのかされて家を賣ると藤口をきくものもあつた。然し子供たちは、父とは別な氣持ではあつたが、父の計畫を支持した。子供たちは既に、田舎の小地主の家の運命を社會的に考へることが出来るやうに生長してゐたからだつた。

父の決心は、遂に祖父の死によつて實現された。東京の郊外に建てられた小さな家に細々した家財道具が運ばれ、父と新しい母は妹をつれてそこに移つた。植木や庭石も、少しづつ掘りとられた。十幾つの間敷のある菅葺の大きな家は、二百年目に始めて戸が閉ぢられたのだつた。煙をあげ、藏に鍵をかけた時、父の氣持はとんだつたかと思ふ。

私は勤めの關係で引越の手傳ひをすることが出来なかつた。手傳ひたくない氣持が、勤めを口實にさせたのかも知れなかつた。それからもう六年経つ。

子供が庭の蔭の岩に咲いてゐる姫櫻を見つけ出した。白い小さな花が妙に人々の心をひいた。

私は家の周圍を一まはりしてみた。木の葉のうづ高く積つてゐる裏庭には、劍道を始めた頃よく木刀で毆つた柿の木が、昔のままの姿で立つてゐた。中庭の松は枯れ、石燈籠は倒れ、青木の赤い實を小鳥がついばんでゐた。私は祖父の隠居所の戸をあけた。薄暗い光の中から見覚えのある額がみえた。

#### 〔夜堂自知〕

これは晩年の氣穴を敷くなつた祖父を慰めるために、私が入師に乞ふて書いてもらつたものだつた。師によれば、自知とは人間の本来の姿を知ることだつた。私は祖父が段々我執を離れてゆくことを願つた。けれ共、祖父は死期が近づくに従つて益々偏し、執着ることが甚しくなつた。電報で呼ばれた私の顔を見ると、祖父はいきなり、今日はどうも具合が悪いと言つて一本の薄黒い瓶を示した。毎日の尿の分量を計つてゐるのだといふことだつた。尿の分量が少くなると死ぬ。俺は死ぬのはいやだと、祖父は皺だらけの手に瓶を振つてみせた。

或朝、祖父は側に見た私に、額を見るのだから起してくれとせがんだ。どうしてもきかないので、私は蒲團ごと靜かに背を

起こしかけた。すると、祖父は突然一つ大きな吃逆をしてそのままとぎれたのだつた。

弟や妹は二階の上つて簞笥から舊い寫眞を探して出して來た。

妻はこんなものがあつたと私の幼いときの日記を示した。私は母と一緒に、縁側でMさんの話をきいてゐた。裏のKの家では主人が亡くなり、息子が出征して、おばあさんが一人残つてゐる。Sの家ではお父つさん氣が變になつた。Tは肺病で寝てゐる。Oは工場で足を一本なくした。

「わしも滿洲の移民にでもなりたいたのですが、何しろ小さいのが大勢で。」

時々洋服を着ることのある米穀検査委員のMさんは、さう言つて無理に顔をほころばせやうとした。

#### (III)

東京に行つてみやうかう思つたとき、私は楽しかつた。然し、切符を買つたときには、樂しさは既に消えてゐた。汽車が東京に近づくにつれて、私の心は重くさへあつた。

東京の附近に生れた私は、勤め人としても數年間そこに過した。東京の文化と人間とが激しく私を捉へた。五年前、私はいろ／＼の理由のために海を渡らねばならなかつた。海の方で私は東京の臭ひを戀してゐた。その後、東京の文化は幾度も容貌を變へた。自分を育て、くれた文化が變貌してゆくのを遠くから眺めるのは、何よりも苦しいことだつた。東京の人間はど

うしてゐるだらう。私は風に向つて苦澁の面をさらしてゐる人々を想像した。ぬるま湯を浴びながら、海鼠の様に生きてゐる自分を考へると、なにかしらうしろめたいものを感じた。風のない處に住む人間が、風の吹く地方の人と、風について語ることは六ヶ敷いことだ。共感を以て語ることは不可能でさへある強いて共感しようとする虚偽になる。私は東京の友人に逢ふことに臆病になつた。心の重さはこんなところからきてゐるらしかつた。

□

東京は異常な空気に包まれてゐるやうに思はれた。花が咲いてゐるのに、人々は故意に眼をそらさうとしてゐるかの如くだつた。花の下を瓢を下げて蹠蹠と歩む人の影を私は見ることが出来なかつた。然し、人は街を押し流してゐた。喪はれたものは、何處かに取り戻されねばならぬのであらう、私は、一つの映画を観るために館のまはりを通りまきしてゐる、男女の群を見た。興行はあふれ、デパートは埋つてゐた。

私は銀座で落合つた、矢張り満洲から出張してきた友人にきいてみた。

「どうだい。東京の人間は、その友人の答へは、かうだつた。

「敷はおそろしいが、一人一人はナンセンスだ。

私も全く同感せざるを得なかつた。以前東京に始めて勤めた

ときには、若い男女の顔の一つ一つが目についた。それは田舎者の知らない何かを持つてゐるやうな氣がしておそろしかつた。事實、當時の彼等には、假令、それが流行であつたにしても一つの眞理を擱んでゐる者のみの持つ窺知と傲岸さがあつた。それなのに、今、東京人は、その數をのみ誇らねばならなくなつてしまつたのだらうか。若い男たちは、カメラを手に下げて何にも考へないやうに見えた。若い女たち「殆ど例外なし」と言つてもよい位同じ恰好の髪をした彼女たちは、何んの氣もなささうに歩いてゐた。多くの友人たちも、生活については一言も語らなかつた。酒を注ぎ、子供の話をし、女の顔を見て別れるきりだつた。學校を出て十年の間にかち得た地位と經驗とが、生活について眼を閉ぢることの賢明さを訓へたのであらう。

東京人は燈を喪くした。私がこんな感想を洩らしたとき、或る友人は、良貨は隠れたのだ、と答へた。私は無理にそれを信じまいとした。

二二

「俺は給料とりになることにきめたよ。

永い間不自由な生活を續け、所謂手記を書いて出てきた人が言つた。ひどく髪が薄くなつたのが目に立つた。言葉の裏にかくされたさし迫つたものが私の胸を衝いた。

「もう、どん底迄来たよ。

譯で生活を立てゝゐたBが高い聲で笑つた。すき透るやうに蒼白い皮膚を見てゐると、今迄身賣りもせずに頭張り通した彼の粘り強さが何處から出て來るのか不思議に思はれた。

「じたばたしてはいけない、かうなつたら長期抵抗だ。」

さう言つて亂暴に髪をかき上げたCは、學生時代の紺緋を着てゐた。家の構へから見ても彼の法律事務所の窮迫が偲ばれた。どつちかと言ふと、理論家の方だつたCに腹が出來たことが何よりうれしかつた。

Aに、Bに、Cに、私は黙つて肯いた。何にも言ふ必要はなかつた。時代の激しい波が、私たちの距離と時間の垣を打ち破つてしまつてゐたのだ。私たちは始めから一つの所に住み、一つのものを見てゐるかのやうだつた。しかし私は、彼等に遇つたことを感謝した。私は誰にも遇はずに東京を引き揚げやうとしてゐたのだつた。若しそうだつたら、私は永久に、東京を、燈の消えた街と思ひ込んでしまつたかも知れない。

満洲に歸る汽車の中で、私は往くときに感じた心の重さが何時の間にか跡かたもなくなつてゐることを知つた。私の眼の前には再び、満洲の生活が繰りひろげられてゐた。



# 朝鮮見たまゝ

山崎 元幹

先日所用で京城に行つた。例に依つてBと云ふ宿に泊つた。先づ誰でもがする様に、當てがはれた室から見える限りの町を眺め入つた。フト東側の丘の上に異様の旗が見える、一昨年同じ方向に見たものとは違つて居る。そこで私はそれを女中に確かめてはつと思つた。それこそ曾つて相當長い間見慣れた支那の五色旗であつたのである。曾て張學良華かなりし頃日本との間にこれを下して青天白日旗を掲げるかどうかに就き問題を起したものである。而して此處こそ曾て新聞で報せられた北京の中華民国臨時政府に忠誠を誓つた支那總領事某氏の居るところであつたのである。

京城から北行の途上宣川と云ふ驛を通つた。こゝにも私は例の五色旗を手にした一團の人々が私達の列車に乗る人を見送るのを見た。此の時は私は既にこの旗に慣れてゐた。而して同車の人々は宣川が曾て大正八年あの有名な萬歲騒ぎのあつたときの中心地であつたと教へて呉れた。

それから以後何か知らぬ暖い朗かな氣持で私は窓外の景觀に見入つた。外は一面の眞白の雪野原であるがその間に起伏する山や丘はまた眞黒である。から松は葉が落ちてその眞直ぐな幹を寒空に戦かせてゐるが、黒松は葉の色益々濃く、根元には纏てその根を肥やし枝を伸ばすべき雪を堆高く積らせて居る。

私は朝鮮が羨しいと思つた。滿洲ももう三十年その建國が早かつたらと思つた。大正の末、私は朝鮮を旅行してその到るところに道が拓け、水田が擴がつて居るのを見て朝鮮が愈々富める哉と思つた。當時金剛山を内から外へ觀、内に擲がる萬頃の水田を思ひ出しては海金剛から元山迄の舟航中駄匂つた鴨綠江

金剛山一萬二千の峰より峰へ

渡る雲霧陽を浴びて

潭を湛え瀬を走り

鷄林八道稻稔る

自分では日本文化の光被を謳歌した積りである。朝鮮併合當時の朝鮮の富は僅に一福岡縣のそれと匹敵するのみと聞いた事があるが、その時既に朝鮮の富は急テンポを以て増殖して居るに違ひ無いと思つた。その當時の朝鮮の産米高が千五百萬石、それが今は二千五百萬石に殖えたと聞いた。而してその中約三百萬石が内地に移出されて内地の食糧政策に貢獻して居ると云ふ。その上米價一定の價格を保障されて居る。即ち鮮人の生活

は向上したと見るべく、又彼等が米を多産しこれを内地に移出して粟を食べたらそれ丈け生活に確實な餘裕が生ずる譯である。

曾て遊んだ時の平壤大同江の水は濁つてゐた。それでも牡丹臺上の眞晝の眺めや、楚々として裳を引く妓生に彩られる大同江畔の夕暮は今に忘れられぬ情景である。それが今日では畫舫で賑ふ大同江の水が澄んで來たと聞いては今一度の清遊もがなと思つたが、それは平壤訪問の目的が京城で達せられたので割愛せざるを得なかつたのは返す返すも遺憾である。全く朝鮮の植林は見事なものである、年毎にその色を増す、朝鮮では到るところに、火田を禁する旨の制札が立つて居る。火田は出來なくとも水利や开拓の事業が普及されて田や畑は人口の増加率よりも多く開かれるであらう。樹は下枝や間伐によつて燃料とするには不足しないだらう。私はそう思ひながら丸い藥登屋根の民家から白い澄んだ煙が風の無い冬空に靜に立登るのを見て京城での經驗、溫突の暖みを今一度心の中で味つて見た。

朝鮮は北鮮地方に於て豊富低廉な電力の供給に依り、産業が勃興し動もすれば陰氣であつた地方が急に明朗色を増して來た。而して今や此の趨勢は西鮮地方に及ばんとして居る。平壤新義州既にその徴候がある。而して今やより豊富低廉な電力の供給を待つばかりである。西北鮮地方は滿洲の東邊道地方と地質を同じうすると聞く。然らば何時この西北鮮が我東邊道に發

展を挑んで來ぬとも限らぬ。

朝鮮最近の人口増殖率は多いと聞く。これこそ朝鮮が安居樂業の土地となつた何よりの證左であらう。而もこれ等の人口はこれを鮮内に於て消化するに何等苦慮しなくなるだらう。植民政策から云つたら日韓合併は日本から云つて大して成功とは云へまい。内地人の朝鮮に在るもの五十萬。而してこれより稍々少數の四十何萬の鮮人が日本に居ると聞いては、人口移動の點から云へば相互にプラスマイナス零となる。鮮人は出で、日本に於ては生活の安定を保障せられ、滿洲に於ては五族協和の旗幟の下に庇護せられて居る。その幸慶誰かこれを疑ふものあらんやだ。

私は關東州の事を思ひ出す。我日本は關東州より外臺灣に於て既に漢民族の統治を引受けた。然も臺灣のことは暫く措いて言はず、とにかく我日本の漢民族を主たる住民とする關東州政治は理想的にうまく行つたと思ふ。人は誰でも州内居住民の仕事や齋物が奥地のそれに比し小廉張して居るといふ。外國人も異日同音にそう云ふ、居住者そのものが州政を謳歌して居るは固よりである。但た法令が煩鎖だとか、徵稅が複雑など、云ふ不満を耳にするがそれは望外の欲と云ふべきだ。法の簡潔、徵稅の簡單は望ましいことに違ひ無い、然し世態が複雑となるにつれ法令亦之に伴つて複雑となるのは已むを得ないだらう。課稅もこれを公平化するには之亦多様となることは免れないで

あらう。曾て滿洲國が成立した後間もなく私は或るアメリカの雑誌記者から單刀直入の質問を受けた。曰く「滿洲事變と滿洲國成立後の相異如何」と、私は暫し返答に困つたが、フト思ひついて「それは滿洲國が法治國となつたことである」と答へた件の人人は私の返事に満足したのかどうか、私の張政權時代の出來心政治に關する説明を聴きもしないであつたと私のところを辭し去つた。

我々大和民族は今や朝鮮、關東州に於ける施政の經驗を以て新興滿洲國及新生中華民國同胞のために資益せんとして居る。而して恰もよし、新に我等の盟友としてその民族的發展を遂げんとする漢滿蒙の各民族は朝鮮に於て、又關東州に於て我等の行跡を知つた。唯要するものは彼等法治國民としての訓練あるのみである。言ひ換ふれば沒法子として法に従ふのでなく進んで法の適用を受け以て法を擁護することである。一日出耕日入息、帝徳於吾等」では法治國としての理想的發展は望まれぬ。

(二三六、二、五)

# 競馬と子供

鹿島 鳴 秋

金州の競馬場だつたとおもふ。三、四人のお婆さんたちが一團となつて、スタンドに座を占め、二十銭、三十銭と細かい金を出しあつて一圓の馬券を買つてゐた。私もそのそばに腰かけてゐたので、知らず知らず彼女たちの上に、私の注意が向けられてゐた。それは内地の公認競馬などには見られない、なかなか風景だつたのだ。彼女たちはよくこゝの馬のことを知つてゐた。レースの初めに、出てくる馬をひとわたり眺めると、彼女たちの鑑別の言葉が、口々に發せられる。

「三番がよか馬ぢや」

「そぢやな、騎手もよか」

丸出しの九州辯で相談が一決すると、一人が小錢をあつめて一枚一圓の馬券を、あたふたと買ひに出かけるといふ風だつた。そして彼女たちは競馬をみることを子供のやうに楽しみ、時におもはぬ配當にありつくつと、凱歌をあげて歡びにひたつた。服装や物腰から判断して、まづ普通の生活をしてゐる家庭のお

婆さんたちちがひない。こゝの競馬がはじまると、老の身のつれなく遊びに来るのであらう。馬の名や騎手の巧拙なんか彼女たちがひと通り知つてゐるのには、むしろ私は驚いたほどである。

×

かつて、私は菊池寛氏の「競馬讀本」を讀んだ。それには氏が多年にわたつて體驗した競馬の種々相が、興味深く語られてゐるばかりでなく、他面競馬を楽しむ正道が諄々と説かれてゐる。

菊池氏は自分で馬を持つてゐるし、馬券も相當に買つた経験の持主で、押しも押されぬ文壇の競馬通である。三、四年前、勇退を惜しまれた名馬「トキノハナ」は、アラブの抽籤馬だつたにもかゝらず、呼馬に近い勝時計を誇つた。當時、一東にトキノハナ、西にカンロあり一などと、常にフアンの話題にのぼつたが、この「トキノハナ」も菊池氏の持馬だつた。

氏は、その著作のなかに、競馬をたゞ單に賭け事の目的にすることを深く戒めてゐる。それとゞもにスポーツとして、萬人の享樂することを強調してゐるが、馬券を買ふ場合も、自分の身分相應な小遣錢の程度をこえてはならないと教へてゐる。九州競馬のお婆さんたちが、この訓戒に、身をもつて聽を垂れてゐることを、菊池氏が知つたならば、氏は立ちどころに、彼女たちを何とか賞の候補に推すことであらう。

競馬場に入入りする人たちが、みんなさうした殊勝な心がけの持主になつてしまつたら、馬券の賣上げは激減するにちがひない。しかし、同時に新聞の社會面にははれる幾多の罪惡的な記事も、次第に影をひそめるであらう。競馬に失敗して、一家離散の運命をたどる人生の悲劇もおこらぬであらうし、主家の大金に手をつけて、綱目の恥を見たりするやうな不心得者も跡を絶つであらう。

表面華やかな競馬場の雰圍氣のなかに、さうした惡の芽生えが培はれてゐることは、誰も認める不幸な事實だ。しかし、競馬を楽しむ道は、おのづから別にあることを私は知つてゐる。

×

イギリスの子供に、

「大きくなつて、何になりたい？」と問ふと、

「ダービーの勝馬の持主になりたい」と、答へる子供がおほいといふ話を、何かの雑誌で讀んだ記憶がある。

「ダービー」とは、クラシック・レースの一つに挙げられる代表的なレースの名稱である。往年、ダービー卿が主唱して、明け四歳の名駿の若駒ばかりを集めて催した大レースに、卿の名が冠せられたのが、この名稱の由来だと聞いてゐる。

日本にも七年まへから、「日本ダービー」といふ名の下に、この優勝大競走が制定され、春の東京競馬の隨一の呼物となつてゐる。今年も五月二十九日に、府中競馬場で、その第七次の

レースが舉行されたが、この時の第一着賞が一萬圓、登録附加賞五千七百二十圓、外に金杯と、騎手の賞金が千圓といふ豪華なものだ。「日本ダービー」でさへ、かうした莫大な賞金のかかつた大レースである。本家本元のイギリスでは、おそらくこの何十倍の賞金がかげられてゐることが想像できる。

おもふだけでも、豪華を極めるその大レースに出走して幾萬といふ觀衆の熱狂裡に、果然榮冠をかちえた優勝の持主であることは、彼地の人々の味ふ榮耀榮華の極致であらう。イギリスの子供の夢の王國が、そこに美しい帷を垂れてゐるのだ。だからといつて、私はあへてイギリスの子供を褒めてゐるのではない。たゞ日本人のもつてゐる競馬に對する觀念と、イギリスのそれとは、こゝにあげた子供の例話だけで考へても、相當開きのあることを指摘するのである。

日本では、競馬をほとんど賭け事と同様に考へてゐる人が少くない。競馬に行くことは、とりもなほさず金銭上の勝負を張るのと、かはりないのやうに考へられてゐるのだ。それだからもし、日本の子供が、「ダービー・レースの勝馬の持主になりたい」などと答へたら、小學校の校長先生は、立ちどころに彼の通學をさしとめてしまふであらう。

×

この地へ來て、私が競馬を見はじめたのは、春の大連競馬からだった。

こゝで私は、内地の競馬場でみる風景と著るしく異つたものをいくつか経験したけれども、そのうちでも驚かされたのは、子供づれの實におほいことである。こゝの競馬場はさながら「家族デー」だつた。内地の公認競馬ともがつて、入場料をとらないせみでもあらうが、父親か母親につれられて、遊びに来てゐる子供たちの眼だつておほいのに、私はかなり面喰つた。前のイギリスの子供の話なんか、私は忘れてゐたのだが、かうした思ひもよらぬ異風景が、私の記憶を呼びましたのかも知れない。

#### 競馬と子供――

眼をいくどもこすつて、見直さなければならぬやうな問題が、私の答案の紙にのせられてゐる。いふまでもなく、競馬を子供に見せるべきか、否かの問題である。

x

八月三日附の「満日」の社説は、めづらしくも競馬の問題をとりあげて、微細に論究してゐた。あたかも關東州新競馬會が施行されて、最初の秋季競馬が開催されやうとするときだつた。

その社説には、競馬會は馬匹の改良、産馬の獎勵、馬事思想の普及といふやうな、重要な國策のために、特に許可されたものであるから、國民はこぞつてこれを觀賞すべきであると述べられてゐる。それにもかゝはらず、「從來は士君子の近寄るべ

かざるものゝ如くに取扱はれてゐる」と説き、その原因が、會場の貧弱と不快適にもあらうが、その最も大なるものは、「出入者が多くは賭博的心理をもつて集まる故であらう」と斷じ、「役員、騎手の中にも不良者を出したりすることが、益々良家士女の接近を憚らしむることになるのであらう」と競馬會の魁弊を指摘して、理事者の反省をうながしてゐる。

論者のいふやうに、「國策的事業でありながら、良心あるものがそこに出入するのを恥づるといふ現象は、矛盾の甚だしきものゝ一にちがひない。子供も、大人と競馬を見ていゝのである。

だが、現在の競馬會が親身になつて、こんなことを聞いてくれるるか、どうかは、私は請合へない。私が白紙でおく答案には、純真な子供の魂が、いつか私に代つて解答を書いてくれるであらう。



## 暴風雨の前と後

金 崎 賢

黒石礁で電車から降りて歩いてみると、きりぎりすを三つ草の枝につけて持つて行く男がある。縛りつけてあるのだらうか。まだきりぎりすを聞かないが、もう秋になつたのかと思ふ。清風寮の前を通る頃、どこかでこほろぎらしいものが鳴いてゐる。秋の末になると、こほろぎがもつと清んだ聲になるのだが今聞くのは濁つた聲でこほろぎらしいと思ふだけだ。それにしても秋になつたには相違ない。

但し、とほろもない暑さだから秋とは思はれない。七月が二度あるのだとか。舊暦では閏年である。

毎年感することだが、大連では秋が甚だ秋らしくない。始めは暑く後は寒い。秋らしい秋がない。最も、春らしい春もなく夏らしい夏もない。春になつたかとも思ふひまなくして初夏のやうになる。初夏かと思ふ中に大變な暑さになるが、暑いだけでは夏らしくもない。多くの方は海水浴に行くので夏だと思ふだらうが、自分など星ヶ浦に住み、朝夕海を眺めながらも海岸

には幾年も行くひまを持たない人間だから、夏を夏らしく思はないのかも知れない。春の櫻も電車で見えて通るだけで花下に立つたことは数年來たえてない。

緑蔭に蟬を聞くのは最も夏らしいのだが、大連には蟬が少ない。殊に今年は何もないやうだ。草蟬のジュー／＼いふのを一、二度聞いただけだ。山蟬を一度聞いて、電柱にとまつてゐるのを一度見たことがある。

子供の時、日本に居た頃は、田舎に住んでゐたから、初夏からして耳を聳するばかりの蟬の聲に埋まつてゐた。蟬しぐれといふ言葉がシツクリはまる。いかにも夏らしい思ひ出である。初めは草蟬、それから油蟬、この二種は鈍感でもあり、羽色も發見し易いから、蜘蛛の網や紙袋を竿の端につけたので容易に捕へ得る。それから山蟬となる。山蟬は羽が透明で敏感でもあるので、子供の時に捕り難かつた。漸く秋に近づくと蟬が鳴き立てる。ツク／＼ボウシ／＼。この聲を聞くと如何にも秋らしい。山奥か、里では夕暮時に聞く。

里で蟬を聞く頃は、夜になると馬追ひ、きりぎりす、こほろぎ、さてはみみず（實はおけらださうなが）これらの蟲どもがかしましく鳴き立てた。

大連にもおけらは多い。こほろぎも多く、まだ出ないが、出る時には家の中にも入り來り、冬まで残つてストロブの下で鳴いてゐる。

かじかは子供の時の田舎でも、自分のうちでは聞いたこともなく、山の溪川に行つて始めて聞いた。東京で籠に入れたのを聞いたが溪川で聞くほどによくない。ラヂオで聞くカジカやほととぎすなどは無風流極まる。

秋の特色は、露と霧とだが、露も霧も大連には少ない。内地では露は夏の露の方が自分は好きだ。日の出前、草露を踏み、稲葉の露を分けて鮎釣りに行つた心地、忘れられない。

秋の最も好いのは紅葉である。二月の花よりも紅なりといふ句を、中學一年の時に漢文の先生から書取りにさせられた。謠にもあつて印象深い文句である。併し花と紅葉とは、紅とは云ひながらまるで趣が異ふ。どうしてこれを比較したものか不審でたまらぬ。最も支那では、殊に二月に花満開といふ或地方ではこんな比較も適するのかも知らない。それにしても花と云へば櫻を聯想する日本では不適當な比較としか受取れない。

日本の紅葉は日本の特色である。これを滿洲で見ようと思ふのは替澤極まる話だからそんなことを考へたこともないが、黄葉なら滿洲でも見られる。日本の雑木の黄葉もよい。日本の銀杏の黄葉は格別である。こちらでも凌水寺あたりの秋の山の色なら誇つてよい。今年にはひまもみないが見に行きたい。

草もみぢもよい。今の住居の小さな庭に、所々野草を繁らせて、夏はその緑を愛す。花を咲かせる爲めに費す暇がないので野草を繁らせておくのだ。それも水なんか、やつてもやらなくて

もよいものを植えておく。雨が多ければ緑益々濃く、雨がなくても枯れもせず、目に赤土や洞んだ花を見なくてすむ。秋になると漸次黄色に染まる。氣候の具合によつては葉も莖も一部分は紅くなる。これを見て日本の秋を想ひ、山野ハイキングの邊を持たぬ自分には山や野原に出た氣分を味ひ得る。

『自分の秋』を取りとめもなく書く積りで、ここまで書きかけてひまがなくな、うちやつておいたまに暴風雨が来た。いつも来る二十日前後の暴風が今年は大へん早く来た。今年も雨季が早く来て長くつき、酷暑は遅く来て例年よりきびしい。滿洲では雨季だけしか雨が降らず、それは大雨ではあるが降雨時間が短かく、雨傘不要といはれてゐたのに四、五年前からそれが裏切られ、今年などは早くからだら／＼雨で日本の梅雨の如く、特別な雨季はなく、雨傘大に必要だつた。又六、七年來扇子の必要を感じなかつたのに、今年はその必要を感じた。雨季に却つて雨の少なかつたせゐか、雨と云ひ、暑氣と云ひ、暴風と云ひ、今年の氣候はどうも變調だ。

暴風雨で、自分が誇いた玉蜀黍は稔らぬ前に倒れてしまつた。或る青年が維新政府の教育部に赴くとてお別れに来た時、持つて来て植えてくれた薔薇も花のまへでメチャクチャになつた。江川の中の洲から抜いて来て育てた大水引は廣い葉が揉みくちやになつた。北京に住んでゐた時、よく行つた齒科醫の庭に、毎年大水引が繁つてそれがトホウもなく大きく、高さ一丈五尺

はあつたであらう。それが想ひ出されて育てたのであつた。植ゑるのが遅かつたから、そんなに大きくなる見込はなく、惜しいことはないが、葉が枯れん／＼になつては花が咲いてもヘンテツもないだらう。大水引を想ふと、子供の時、田舎の野路で踏みつけた小さな水引を想ひ出す。大水引の花が淡紅色であるのに比してこれは濃い紅である。自分は植物學の知識がないので間違つてゐるかも知れないが、『みちのくの忍ぶ文字摺誰故に亂れんと思ふわれならなくに』といふ文字摺はこれだと聞いたことがある。この紅はよく染まる。眞偽をしらべる邊もなく、只此の植物を見るとこの歌を想ひ出すのである。無邪氣なゆきな遊戯的な歌で、有閑婦人の面目を見せてゐるが、悪い歌ではない。

虎の尾といふ草花がある。もとより雑草だがいかにも虎の尾らしき風情がある。名が面白いと思つてゐたので、『虎の尾を踏みつゝ、足に蒲團かな』の俳句を讀んだ時にすぐ草の虎の尾を連想した。句と草とは勿論何のつながりもない。こんな連想は作者は勿論知らぬことで自分だけのものである。句は技巧的でさして名吟とは思はれないが、『もじずり』の歌と同じく、作者の才氣迸しつてゐる點が愉快だ。この虎の尾も路ばたから抜いて来て庭に植ゑおいたら大に繁殖した。花は咲いてしまつたから風害にはかゝらなかつた。

萩も道端から抜いて来て植ゑておいたのが大きくなつた。花

はまだ咲かず。幸に葉もいたまなかつた。幹は倒れたが、起しておけば差支はない。

草紅葉を見ようと思つて植ゑておいた薔草は充分に繁らせておいたから、弱い莖ながら互に持ち合つて倒れず。莖も葉もしなやかだからいたみもしない。淡紅色の花が咲く野生の野菊。これは去年の記憶を辿り路傍から採つて来て植ゑたもの。薔草の蔭にあつたので風害を受けなかつた。花がたのしめる。

茄子、胡瓜、トマトは勿論だめだが、これは子供等に、植物の成長、野菜の畑から口への順序を見せる爲めに作るもの、どうせ良い物を作るだけのひまは持たないのだから、どうなつても惜しくはない。

この邊りの農家の畑を見ると、一面の玉蜀黍、高粱はメチャ／＼だ。随分の損害だらう。自分たちのやうなものなことは考へてゐられないだらう。この十日ばかりも毎日々々近くの天后宮で雨乞ひの祭りをドンチャン／＼やつてゐた。降るまでやればいつかは験があるわけだと自分たちは笑つてゐたのだが、いよ／＼験があつて雨が降つたかと思つたら、風まで伴つてそれが大風だ、藪をつゝいて蛇を出した形、農家もやりきれまい神様も意地悪だ。さぞ怨んでゐることだらう。併し案外に没法子とあきらめてゐるかも知れない。

暴風雨のあつた翌日、夜に入つて家に歸る。一昨日の三十一二度かもう二十一、二度になつてゐる。前の通りの服装だから

聊か冷々する。こんなにも急に變るものかと思ふ。

月は山の端から二、三間上つたばかりで、折れたアカシヤの梢にかゝる月の近くに、宵の明星が光る。聊か雲はあるが空は割合に晴れ、あちらこちらに星がきらめく、赤く光るもの、青く光るもの。

洗はれたやうな星の瞬き、さすがに秋だ。昨日までは餘りきかれなかつたきりりす、こほろぎ、みよずの聲が四方に起る蟲の聲まで急に變つた。さすがに秋だ。二箇月ばかり前にはこゝで蛙の聲がガア／＼きこえたものだ。それも内地の蛙の聲がほゞづきを鳴らすやうなのと違つて、濁つた重くるしい聲だつたがと思つて立ちとまる。

折から行人絶えて、見渡す限りの道路には前後に自分一人。波の音も聞えて来る。晝は波の音など聞えないのだが。

再び空を見る。闇の秋空ならば、無数の星が金銀珠玉の雨となつてそゞぎかゝるのであるが（子供の時屋根に上つて棟瓦の所に仰向になつて、涼みながら斯様な感じを満喫した）今は月の邊りに薄雲があつて、星の光と共に空がほのかに明るく、列樹の蔭に竹む自分は、何かこの世に住んでゐないやうな氣持になつた。死んでから行く自分の世界に、もう來てゐるやうな氣持になつた。

いつぞやの夢に、床から起きて窓から脱け出し、ワ／＼と空を翔つて、ちやうどこの様な國に行つて亡き父と物語つたこ

とがある。

向ふの山の端に、金色に耀く星に向つて、夢ならば軽く足か地を離れて行くのであるが、現實の悲しさ、ドツコイさうは行きかぬ。

郷里では昔、子供が漸く口がきけるやうになつた時、お前はどこから來たときく。自分のはおばアさんに聞かれて「ほうきぼんちやん」と答へたさうである。伯爵の國の法師の意味か、箒星の意味か、父母も祖母も判断しかねたさうであるが、自分にもどちらの意味であつたか覺えがない。

所謂長州征伐に祖父が従軍したといふので、その途中になる伯爵出雲のはなしはよく聞かされてゐた。但しその頃、大きな彗星が出たので、まだ迷信のあつた田舎のことではあり、饑饉戰亂などに結びつけられた箒星の話はおとなたちの不安げな口吻によりて印象深くしてゐた。緋の衣を着た大きな法師が拂子を揮つて空中を飛行する夢を屢々見たのである。今でも眼底にマザ／＼焼きつけられてゐる。夢といふよりも肢體に近い。星と法師とこんがらがつたのであらうか、箒星に彗がないとはいはれない。

自分が今以て、屢々空中飛行の夢を見るのも、幼年時代の左様な幻覺に出來るのであらうと思ふ。

空中飛行で、いつも聯想するのは諸曲天の羽衣。學生時代に讀んだ同じ傳説を資料とした井上哲次郎博士の新體詩。北京の

扶桑館の廣間で話會を開いた時はいつも天人の三保の松原の軸がかけてあつた。阪西中將の老大人や奥様などと語つてゐる記念寫眞の背景に寫つてゐるのを今も時々見てはなつかしむ。大連に来てからは淡月の宴會で、額になつてゐるのを時々眺める日本のお寺の天井、欄間で屢々仰ぐ天人の飛行。大同雲崗の石窟の彫刻天女。竹取物語。さては梅蘭芳の天女散華。

先代の大倉喜八郎男が晩年に近くなつて北京に見えたことがある。蒙古旅行の途中だつた。座談の中に、羊に乗つて蒙古の月下を逍遙すると腋の下にチラ／＼と羽が生えて、フワリ／＼と羽化登仙したいものだといふがあつた。歸途北京の有志で歡迎會を開いた時、羽化登仙はどうでしたと聞くと、まだ早かつたらしいといふことだつた。とかくの世評はあつた人だけれども、あの年になつては頗る無邪氣な好々爺に見えた。併しその時だつて、羽化登仙どころではなかつたのだ。愛妾をつれての大名旅行である。鍋釜食器食料は勿論、飲料水までも携帶されたのであつた。北京では梅蘭芳の劇をやらせて日支官民を多數招待するといふ豪奢ぶりだつた。凡そ支那の大官連は護生祝などには劇をやつて客を招く習慣があつた。一座に拂ふ費用は莫大なもの、まして梅蘭芳では一夜に何千圓といふことだつただらう。當時大倉男は八十幾歳だつた筈だが尙矍鑠たるものだつた。隨行者の間に賭があつた。それは今年は子供が生まれるだらうかどうかの問題であつた。何でもそれまでに、四年毎に

子供が出来てゐる。今年は丁度四年目に當るとのことだつた。その勝負どうだつたか結果をきいてゐないが、こんな話しを聞いてゐたので、羽化登仙どころかと心ひそかにほゝゑんでみたのであつた。なるほど尙早だつたに相違ない。

空中飛行がとんだところまで行つたが、何しろ自分は、迷信か幻想かは知らないけれども、星から来たやうに思つてゐる。生身のまゝの羽化登仙は思ひもよらぬが、死んだら星の世界に歸るやうな氣持がしてゐる。妻にも時々、おれの行く星の世界に来る氣はないか、来るなら連れて行つてやらうと云つてゐる。

妻でも子供でも、自分で來たくないものをつれて行かうとは思はない。この世では不幸にして好きなことをさせてやることも出来ない。嗚かしまらぬ夫、つまらぬ父を持つたと思つてゐるであらう。星の世界にでも行けば好きなことをさせてやる併し星の世界も此の世と餘り違つたところでもないやうにも思ふのだが、それよりも、自分がこの世で教育の出来なかつたことをしてやりたいとも考へる。勿論自分も修行して。

人が死ぬ時には、一瞬の間に過去一代の出來事が、サツと腦裡にひらめくといふ。自分は此時、僅に三十秒か一分の間だらうか、星を仰いで佇んだ時に、こんなことを想つたのである。書いて見ると長たらしくつて面白くもない。これこそほんとの空想。

現實は夢のやうに身が軽くない。空想から覺めれば足は土を離れず。コツ／＼歩き出した時には、空想の間には聞えなかつた龜の聲、波の音。それに電車の響までが聞えて來た。



# 哈爾濱の憂鬱

桃北好澄

ハルビンに移り住んで四ヶ月になるが、私には未だに此の都市のよさが納得できない。ハルビンと言へば、紫のヴェールに包れた神祕とエロチシズムの街みたい考へてゐる人が、滿洲にも澤山ゐるらしいことである。此の都市は、過去に物語作者の素材となり易い性格を持つてゐたのは本當であらう。そこで、私などにも何かハルビンの面白い話を書いてくれとつた注文が来る。而し、實際は最早そんな話はひとつもないのだ。これは嚴しい現實である。私が反享樂主義者になつた譯でもなく眼を閉ぢて歩いてゐるのではない。

横道に外れるが、此處を描いた文學にしても、大變大衆的で詰らぬのは何故であらう。横光利一の「純粹文學論」と逆行すること夥しい。それは、ハルビンを描く人々が一般の（讀者）ハルビンの興味に頼り過ぎて、文學上の虚構を疎かにした所爲もあらう。又はハルビンの面白さが、彼の作家情熱を燃え立

たせたから書いたのだ、といふ理由にも因るであらう。然し、そのやうな、どんより曇つた好奇の眼では、ハルビンをずたずたに切刻んで見せる事は望めない。ハルビンの現實がそんな文學をつねに背負投げにして來た。

所謂「ハルビンらしき」と言ふものが今日なほ存在するであらうか？人々の期待に反して、ハルビンは冷めたく傷ましい。試みにキタイスカヤを歩いてみるが、われ／＼は紅毛人の娘に見惚れる前に、舗道を削ひ廻つて執拗に錢をねだるゝ食の群に群易しなければならぬ。

午前二時ごろ、街角の見窄しい食料品店が、自動車運轉手や浮浪者の群でこつた返してゐるのを、私は見たことがある。コップ一杯五錢のミルクを三分の二分量だけ賣つてくれと囁鳴つてゐる男、チャリと銅貨を投出して黒パンとソーセージを買つた婆さん。私は恰度紙幣で煙草を買つてゐただけれども、此の夥しい群衆は、私の紙幣などには如何にも無頓着で、冷靜な顔付であつた。彼等とも早午後十一時前後の半食ではない、食料品店の立派な客であると思つたい風を受取れた。

私がこゝで、この貴族趣味(?)に就いて臆測を逞しくする希望を持つてゐるとしても思へば無益なことである。例へば、街の隅々に至るまで、如何にも岩盤、巧緻に敷きつめられたベロブメントが、ツアリーの精兵の頭武を顯彰してゐると言つてもそれは既に類縁の中のエピソードである。

戀とカクテルと、舞踊と野望のハルピンは、物語作者の繪空事として残つてゐるに過ぎない。ハルピンは死んだ。新しいハルピンが生れなければならぬ。

## 二

私は所謂ハルピンの存在を否定した。それは好むと好まざるとに拘はらず今日の生産面から總退却を餘儀なくされてゐるからだ。「殘骸」は既に「存在」であり得ない。ときめく魂もたぬ形象の羅列——この事を承知の上でハルピンのなものはと訊くならば、私は中央寺院と電車なり、と答へようと思ふ。白系といふ言葉が存在する限り彼等が茲に永住の希望を捨てぬ限り、サポールの伽藍と五錢均一の電車は、燦然として、ハルピンのなものであらう。

私は次に、今は昔の名物を紹介しよう。これはエコノミカと稱して専ら經濟的契約によつて露人娘と日本の獨身男子が同棲するのである。何のことはない、新京あたりで流行してゐる月極め女房である。此の頃は世の中が世智辛くなつて、エコノミカは下火らしい、ハルピンでは露人の娘がみんな飢えてゐるよと僕の友人が前に書いて寄越したのを思出したが、金に飢えてゐるのか、男に飢えてゐるのか沙汰の限りではなからう。

キャバレーも同類、日本趣味の侵蝕によつて衰頹甚だしいふ。そういへば茲の日本人經營のキャフエではダンスを許され

てゐるので、必然的にキャバレーの存在價值が低下しつゝあると思はれる。

キャフエのバンドに「三味線隊」と稱する企調があつて、藝妓のイミテーションが愛國行進歌などを弾くのは愛嬌である。いや率直に申すならば、興味索然たる風景である。私はビュロー邊りのスポーツスマンではないから、ハルピンのローカルを保存することが、ハルピンの繁榮を取戻すことだとは信じ兼ねる。——日本趣味の侵入を閉出す對策について——何の智慧も持合せてゐない、寧ろ低調なハルピン文化を破碎するために、輾しき日本主義の昂揚を切實に感じるのだが、公平にいつて現在のハルピンに於ける日本主義は甚だ下らない。この都市ではおでん屋にゆく連中を蔑視し、又それには一逆りの理由があるやうに思はれるのは面白いことである。

## 三

ハルピンは日本化したとよく言はれる。然しどうだ、ロシヤ的社交文明と日本的消費文明の代替が器用になされたわけではないか。キャバレーのソシヤルダンスがほろび、キャフエで女給が客に纏りつくやうにして踊るやうになつたのである。——然し乍ら——。

然し乍ら、如何なる形にもせよ、ハルピンのなものの變貌といふより、その崩壊が急速に行はれてゐることに間違ひはない

只、昨日のハルピンは潰え今日のハルピンはくらげの如く、暗中漂つてゐる現狀である。

これに輝しい方向を與へ、血肉を持たせる事が、此の都市の地理的文化的認識の上に於て果されねばならぬと思ふ。さうでない以上、ハルピンの邊境は何時まででも續くであらうし、遂には廢墟的公園と化し去るであらう。岩石を敷きつめ並木を植ゑ、廣庭と雪倉の住宅を設計して、大文化都市を構築、南進の永久的據點としたロシア帝國主義の雄圖は、いろ／＼の意味に於てわれ／＼の參考となるであらう。

ソヴェエトの暗躍妄動を粉碎するためには、一層逞しい精神の鐵筋コンクリートが蓄積されねばならぬ。ロマン主義の澎湃たる數聲の中に新しきハルピンの再建が行はれねばならぬ。冷たい形象に輸血し魂を吹込むために、文學は今や政治と同列に着くべきである。私はハルピンに来て痛切にさう感じてゐる。

ハルピンの文化は詰らないと私は最初の印象記に書いたことがある。こゝには劇熱の後の忘却のやうに明るく靜かなものは異種であるところの、意思と方向を持たぬ虚脱が流れてゐる。白系の、虚無を越えた悲しい肯定（虚無も役立たぬ諷刺）や、ボードレールの「美しくあれ、悲しくあれ」の挽歌が、老體ハルピンのこゝろよき伴奏となつてはゐまいか。

今日、ハルピンの文化を誇負できる日本人が一人もある筈がないのは遺憾である。「文話會」や「演劇研究會」は開店挨拶

をしたきりで責疑をしてゐる圖書館の蔵書も、必ずや北鐵當時の埃を浴びた儘ではなからうかと失禮なことを考へるのだ。

旅行者のお節介みないなことを言つて甚だ濟まないが、烈々と燃える精神の壯大さがハルピンの文化を開花させる日が待たれる。

喜ばしいことには文話會も演研も改組して、新規時直して十一月から出發を始めることになつた。他の文化機關もこれに呼應して、一齊に立上る様子である。もう休憩してはならぬ。ハルピンから本統の文學や演劇が生れ、又それらの優秀なフアンが生れるために豊かな生殖を果すことが、今日何よりも、若いわれ／＼の責任であると思ふ。

# 廢驛・寛城子村の記

加藤 郁 哉

當時といつても、もうかれこれ十五、六年前、長春時代の寛城子街道は、起伏のある豁達な地貌に、皮帯のやうにかけられた一本の軍用道路であつた。そこには、長春よりに軍の立番所があつて、軍馬通行の禁止は勿論、庶民の往來もなんとなく憚られるやうな肅然たるもので、道路の行きつくさきには、こんもりとした眞黒な杜が長くよこたはり、その裡にさゝやかな寛城子の村が包まれて休んでゐるのであつた。それは、ほんたうに長春といふ都會の動きのほかにあつて、靜かに休養してゐるといつた感じの部落であつた。

けふ、この街道に自動車を乗り入れると、むかし三不管といつて、日支露の不干渉地帯と謂はれた「悪の巢」が、いまでも同じく三不管となへられつゝ、大きな街衢をかたちづくり、道路に溢れる滿人の熱鬧が、雑多な招牌の下にとよめきあひ、その商賈の脈はしきは、昔日の寂然たる面影を知る私には、ただただ驚きの眼をみはらせるばかりで、とりもたはずこれ帝

都新京の大きな發展と承知する。

ほとんど街つゞきとなつた道を、寛城子村のとつかゝりまで來ると、右側に昔ながらの三棟の兵舎が、滿洲事變の見事な記念碑のかけに、むなしくさびれた姿を白日のもとに曝してゐた。現に市の觀光バスは、この記念碑の前にもしばし行をとどめ、涙なくしては聞き得ない激戦の壯烈な物語を、可憐なバス・ガールの口から述べさせてゐるのではあるが、同じ場所でおこつたその昔の寛城子事件は、情勢も今とは違ひ、その悲壯さと絶望的な感じに於ては今次事變とくらぶべくもないのであるが、すべてはこの新しい記念碑の蔭にかくされてゐると思へば、ひとしほ感慨も深く、その間に十數年といふ歲月の隔りがあつても、凡そ戰場といふものは變りなく同じ場所に凄慘な碧血を重ねて野草をちぬるものらしく、それもやがては史話として、あくせくした生活の圏外に置きさられてしまふのだ。道を更に奥深く、バスの終點らしいあたりを過ぎると、そこには昔ながらの小學校が大きな白楊に圍まれて、相變らずこぢんまりとたつてゐる。今は、教師も教へ子もロシア人から滿人に變つてゐるのも感慨深い。

私が、かつてこの村の驛に勤務してゐたころの、この小學校のあたりは、隣接するギリシア正教の教會堂とともに、まことに住きロシアの田園情調をかもし出す寛城子の一角であつた。故田山花袋先生とこゝに遊んだとき、偶々満足にやつて來てゐ

た長春の日本人小學生とロシア人小學生とが交歡の唱歌をうたひあふのに行きあつたが、ロシアの子供たちが、先生のオルガンにあはせて校庭で唄つたのは、プーシキンの詩章であつた。露人の若い先生の話では、つね／＼子供たちに唄はせてゐるのは、殆んどロシアの古文豪の詩や民謡であつたので、この點、日本の小學生が誰とも作者のわからぬ稚拙な歌を唄はせられてゐると較べて、いかばかりこのロシアの子供たちが幸福であるかといふことなどを、しみ／＼と語りあつたことであつた。

一體そのころの寛城子村は、こぢんまりと驛前に集る鐵道従業員たちの宿舎にもたれて、ロシア人や支那人の日用雜貨をひさく商店が、すこしばかり軒をならべて町をかたちづくつてゐるに過ぎなかつた。従つて日本人といへば、通信關係のものと取りのこされて氣息奄々たる料理店の娼婦たちが、十數名の滿鐵社員のはかに住んでゐた位のもので、街路上に日本人の姿を見かけることは稀であつた。比較的人通りのある道路は、泥濘を中央にして兩側に軒したを厚板が敷かれて居り、そこに小さなレストランなども晝間は扉をかたつむりのやうに閉ぢてゐた。私たちは、ロシア人の貨物方との積みかへの間をぬすんでは、よくその喫茶店でお茶を飲んだものだ。店の質素なロシア婆さんなどは、ひとなつこく奥から出て来て、私らを相手として、自分も井の紅茶をひちや／＼飲みながら、いろ／＼と若いものに訓へるやうに話しあふのであつた。この老婆には、常

に優等人種であるロシア人が日本や支那の愛すべき青年たちにものをしへるのだといふ風の、寧ろほ／＼と羨ましい優越感で、みぢめな姿はしてゐてもブライドは失ふまいとするのであつた。ある時は、話が弾んだ揚句、婦人の著衣の著つけを教へるといつて、わざ／＼娘のシミーズ姿に衣裳をかきねさせたりした。村のはづれにある桃色壁の一軒家には、年ごろの娘が二人ゐて、ロシア刺繍を内職にしてさ／＼やかな生計をたてゝゐたがルバシカをたのみにゆくと、部屋の壁を覆つてありあまるやうな見事なベルシア絨毯が天井から壁に沿つて垂れさがり、その色調が私の氣持に調ひかゝるので、立ちすくんで娘から不審がられたほどだつた。その娘の頭髪を包むロシア更紗は牧歌風で私の一ロシア人に對する憧憬のやうによこぎる鶏の群があり、街路上に出れば、そこを輻隊のやうによこぎる鶏の群があり、黒い豚が彷徨もする。さうした情景のなかのある切株にはロシア麗さんが手風琴を夢中になつて日課のやうにかなで續けるなど、すべてが入なつこいなこやかさで、平和だけがこの村にはあるかのやうに思はれるのであつた。

東支鐵道従業員たちの宿舎は、各戸に廣大な敷地をもち、その中に花園や畑などを自由にこしらへ、蜜蜂やその他家畜を飼ひ、牛小舎には風呂敷をかぶつた細君たちの乳を搾る姿が見られるなど、彼らは日常生活を愉しみつゝゆつたりと暮してゐた。一日上、下一往復の旅客列車が到着する驛の一點鐘がなると





木のまちに入る。家並はそのまゝに當時の面影をしのばせてゐるが、主は殆んど變つてしまつてゐるのだらう。食堂に新しく「多門館」といふのがまづ眼にとまり、「小磯」といふ料亭から右に曲れとをそはつて來たが、千代木といふのがそれらしい。小磯といひ多門といふのも事變後の寛城子のもつた役割を問はずがなりに物語つてゐると見れば、それも興深かつた。見當をつけた家は、千代木から右に曲つて二つめの四つかどにあるバラックで、私のかすかな記憶をたどるなら「松の家」は、板扉に圍まれた家屋で、當時の本屋らしいのが今は道路に面を出、その上幾つかにしきられて長屋となり、なるほど事變後にロシア人といれかはつたといふ鮮人が住み、角は満人の雜貨屋で、中には労働者らしい露人がブザーかなにかを飲んでゐるといふ變り方である。店について左に曲ると、物置の羽目板が一際古びて建ち、それに續いてやゝ新しい亂雑な板扉が日まはりをのぞかせてゐた。中庭らしい空地の楡は相當に大きく、この一劃の家の古いものであることを知る。更にトタン屋根の下に古びた煉瓦の壁を見上げると、そこに薄桃色にベンキの塗られた跡があつて、如何にも娯家らしい面影をのこしてゐた。再び物置の羽目板を仔細に見ると、「マンジュニールスカヤ街」と露文で書かれた町名札が忘れられたやうにロシア時代の面影を残し、その板には蟲喰ひの跡のやうな穴が、ぼつ／＼と風雨にさらされて高くなつた年輪の間に見出だされる。紛れもない寛

城子事件の時、集中射撃をうけた弾痕である。當時はこの「松の家」を圍む板扉の殆んど全部がこの弾痕で、實にいたましい限りであつた。確かこの家屋には、今でも地下室がある筈で、大正八年の初夏の後朝、この家を出た前夜來の邦人遊客船津某が、折から附近に集結してゐた吉林軍のため、襲はれたのに端を發したいはゆる寛城子事件の最中、彈雨の中にあつてこの家の娯婦たちは皆地下室に閉ぢこもつて、恐怖の數時間を疊もたぐすごしたといふ話を、私たちは晝食の茶漬をたべに來ては、幾度か妓たちから聞いたものだ。新京にある古老なども、今はこの「松の家」などいふものは關心のほかにあるのであらうし、かうして辛うじて片隅に人知れず残されてゐる貴重な板扉の一部分も、何かのはずみに取りのけられれば、それきりにこの世から抹殺されてしまふのだ。好箇の歴史的記念物や、そのほか世の中には、はずみでそのまま泡沫と消えさるものが多いろ／＼少くないであらう。人生亦そのとほりであらうと感慨を久しうしつゝ、眞白な雲の峯に聞まれた杜の寛城子を、私は靜かに去るのであつた。



# 雪だけは頭髮に肩に

石 森 延 男

お茶が飲みたくなつてお茶をついで茶碗を持ち上げると陶器はつめたくお茶は生ビールのやうに海入草の匂ひがして咽喉を散歩する五年生の枕の草紙はむづかしくて細塗骨など骨はかかれどたど赤き紙をおなじなみにうちつかひ持ち給へるはなでしこのいみじう咲きたるにぞいとよく似たる十八か十九の少女たちにもそれもおかつばと横分けの昭和娘に古めかしいことを話したとてわかるまいぞわかつた顔してゐるが間違ひで試験があるから字をかきこんで覚えこまうとしてゐる師は師で清少納言の衣裳に庭園に情人に牛車に想をよせて一人よがりになりこゝにどうしてしつくりとした教室ができよう海入草のみほしてでもさあでかけなくちや紀元節がすんだといふのに雪が降つてくる降るなら降つてくれ雪はこひ人よりもなつかしく雪を見ても教科書もうつちやらかし乙女たちもうつちやらかし奉給も出席簿も白黒も採點も心から信濃の雪に降られけり小林一茶ではないが降られてみたい大きな支那人が巡警に手をくゝられて教員

室にのつそりとはいつてくる柳生さんの机の抽斗を僕のところから盗んだかうして盗んだと白状してゐたといふ書きつゞけてゐるもんくうふおんが滑かに進むかと思ふとはたと足踏みしてしまふ麻子さんが結婚の前夜に夢みるところがあつて二つのものが一つになる化学實驗が現はれドクターヂキールアンドミスターハイドの二重人格になり映畫夢みる唇になり啓二これは麻子の夫たるべき男となりして眠られない眠れないのは麻子さんばかりではない僕もこのごろは眠るといふことが難かしくてならないどうしたら眠れるか考へるほど眠りからはなれていく眠るにはいゝ技巧はないものか左脇を下にした方が一ばんよく眠れるがすぐ目がさめる頃は痛いほど疲れてゐる癖に腦が冴えて明月の空だ星が出て雲がでて雪が降つて花火もあがつてゐてポトワインを三杯四杯とあふつてやると癖になつて五體がぶづと膨れたりすつと瘦せたりする明日はお母さんたちにお話してあげねばならぬ日だつたよく眠つておかなくちや鳩時計がかつこかつこかつこ三時を鳴いてゐるやつぱりアダリンのお世話にならうかつめたいスツリバだなあ死んだやうに妻は深く眠つてゐる輸血の管を妻の腦にさしこんでその端を僕の腦にさしこんで夢を睡眠を少しづつ絞つてやらうかあんまりよく眠つてゐる姿をみると憎らしく羨しく三粒のんでやるこんなちつぽけな小さなもので麻痺させられるなんて嘘みたいだ毛布よ掛布圍よシーツよ枕よしばらくお別れだよどつこいしよ兩足をのぼして

手はおとなしく下腹に組んで鳩時計は無雑作に四つ鳴いてゐる  
一二年の生活に唐王殿縁起の唱歌劇をさせるんだつた歌詞をつ  
くらねばならない龍になりたい鱈どもが夜を徹して城を築いて  
ゐるもうでき上りさうだそこで夜明けになつたと欺いて鶏を鳴  
かす場面がある夜明けだ夜明けだ鱈どもはおどろいてあと少し  
で完成する城を見すてゝ逃げていく哀れな愚かな滑稽な恰好が  
遠く眺められるもう二つ飲んでおかう他人の頭をのつけて起き  
上りシユウベルトのピアノアンブロンプチュをかけてやる澄ん  
だ清浄なひびきを左の耳から右の耳から頬から毛穴から聴いて  
ゐると僕は嬉しくなつて二つの臉から涙がでてきた随喜てふ言  
葉があればこんな時に使つてよからうかお父さんお父さん起き  
なさいのみちが顔を冷たい手でおさへる八時半よ私が起きな  
つたらそれつきりだつたでせうだから私お父さんの生命の恩人  
よありがとありがとお蔭で助かつたよ夜はいやだ暗いとこはい  
やだ雪がまだちら／＼してゐるいつまでもさうしてゐてくれも  
し夏のさ中に雪を降らせることのできる神さまがあつたら  
花もいらぬ虹もいらぬ久富さんはオーバーから小さな桐の  
箱をとりだして卓子の上においたレコードは皇帝協奏曲がひび  
きすぎてゐたが牛乳の味はよかつたこれあげませう箱をひら  
くと白い蝶が二羽ならんで入つてゐたこちらが雄でこちらが雌  
であゝそれだけの言葉の烟草の煙といつしよに吐きだされたの  
であるがなんといふ美しさであらう蝶はおとなしく胴體に針を  
さされて羽を左右にはつて静止してゐたが二羽の間には短波長

波かしらないが通つてゐて楽しげぢやないか生きたものがくつ  
ついてゐる場合よりも死物が離れながらにとりかはす情炎が烈  
しい久富さんもかはいゝ教へ子と別れるんだらあたたかいおべ  
んたう幸福に思ふ子に同情してたつけあいてゐる机に白き紙一  
枚はさびしく病氣の友を待ちけりの子にも別れるだらう假分數  
のらつきよう喰べたいなさんともさよならんことぢやない僕も  
おわかれになるかもしれない友だちとお別れしなければなら  
ない友だちをほんたうに思へば僕は飛びたゝねばならぬ一と足さ  
きにとどこかへとんでいかねばならぬあゝアンテナよ起重機よ水  
雷よロケットよそしてこの愛すべき二羽の白い蝶よ政本さんは  
長い顔を斜めにしたかと思つたら兩きりをすばつと吸つてんん  
んといゝ返事をする朝早く起きて歩いて青年を教へにいくとい  
ふ話はいたいたいしいあの人には野つばらに放しておけばいゝ人だ  
そしたらどんなものをつかんできて人生の隅に植ゑつけてくれ  
るかもしれないさぼてんらん熟帯魚そんなものを弄ぶやからには  
わかるまいが大きくて廣くていぢればいぢるほど温い海綿みた  
いな花卉だでも離れることのできない生活絆であつてみれば老  
眼鏡を手放すことはできまいこんな時にはかくれみのもほしい  
が反魂丹もほしい王侯が乞食學生になつたり牢獄看守が副官に  
なつたり早く僕の眼が直らねば何も見えない黒い燻し眼鏡をか  
けてゐるやうでは好きな人とも逢へない逢へないどころかみん  
なそばからはなれていつてしまふぢやないか露だけは靜かに頭  
髪に肩に

# 詩

# 日本鳥瞰圖

瀧  
口  
武  
士

南から北へ大きな擴がりをもつた日本列島は

地球の深淵から浮び上つた龍の如く鬱々と

出入多い海岸線で海流を翹はせ乍ら

香はしい花園を繰擴げこゐる

神話の霧から生れた大八洲は

愛と精靈の美しい海鳥の如く羽搏き

古き帝國の神々に護られ乍ら

緑濃く濡れ輝いてゐる

水から生れた火の鳥々は

若々しい鯨の戀に息づいてゐる

胸底深く様々に地層を變へ乍ら

颯風の中に守り續けて來た火をダイヤモンドと象限し

今、嵐の中に大きく弓弦張つた日本の地形は

苔蒸す巖根を海中深く下し乍ら

愛國的祈禱の霧に濡れ

黄金の黎明に目ざめやうとしてゐる

# 建設工事

古川賢一郎

地下十尺まで凍土の層だ。地下は零下三十六度の冷寒だ。興安路が重い冬空の下で、白樺の骨を尖らしてゐる。

来た。すべつてあえいで、生活の汽關車が来た。氷の鎧を着て、鋭い汽笛を鳴らしてやつて来た。——来い。来い。やい出て来い。

雪を着たアンペラ小屋から、這ひすり出た俺達は、雪原の反射の中につつ立ち、じん！とした頭の中で、漸く歡喜の言葉を發見する。——メリケン粉と酒と、酒とメリケン粉だ。



おうい。あの小屋からも、あつちの小屋からも、毛皮に着ぶくれ、齒を喰ひしめ、あゝ骨を鳴らして、重い防寒靴をひきずり、雪原の鬼どもが、ぞろ／＼とアンペラ小屋から出て来る。

やい出て来い。雉と兎ばかりをくらつた、雪原の鬼ども、顔の氷柱つとをはたき落して出て来いあゝ、出て来い。腹の底から、意氣地ないが俺の涙も出て来い。

# 輪車

八木橋雄次郎

牽いてはゐない

押してゐるのだ

均衡はそこに保たれ

自負は前に蹲まり

私の腕を試してゐる

へへん 勝手に笑ひ給へ

明るい因習は若駒のやうに

血液の中に榮え

地平の果を望みながら

牽いてはゐない

押してゐるのだ

一本橋はそこに保たれ

風と雲のある地圖の中を

部厚い私の胸は進む

へへん 勝手に嘲り給へ

相撲に負けた瘦蛙と

手垢のついた愛情を乗せて

時間をキョキョ帆らせながら

牽いてはゐない

押してゐるのだ

力學はそこに保たれ

企劃を縫ふて神は現はれ消え

僥倖の歸結が私を導く

へへん 勝手に罵り給へ

蝶は傳家の紋章をかざして

草叢に肉感の夢を織れば

私も亦息をはづませながら

牽いてはゐない

押してゐるのだ

生活はそこに保たれ

立ち向つて行く選手のやうに

私のペンは偶然をねらつてゐる

へへん 勝手に嘆き給へ

曠野は無量の道に等しく

それは蓋をせるピアノに似て

私は神秘の秩序を追ひながら

牽いてはゐない

押してゐるのだ

脈搏はそこに保たれ

砲聲はその引金に身構え

東洋の朝やけに溶ける

へへん 勝手に泣き給へ

五族の旗は衣服のやうに

體臭で新しい童話を綴れば

時には煙草も吸ひながら

牽いてはゐない

押してゐるのだ

希望はそこに保たれ

政策のインクは用ひなくとも

従順な野花に陽はふりそそぐ

へへん 勝手に怒り給へ

植物の体温と錆びた銀貨は

現実に興奮することもなく

孤獨な影をひきながら

牽いてはゐない

押してゐるのだ

沈黙はそこに保たれ

斷乎たる抗議を秘めて

白紙のメッセージが渡される

へへん 勝手に去り給へ

青春の篝火をかきたてゝ  
單純な重心の傾くまゝに  
荒野にキコキコ軋らせながら  
牽いてはゐない  
押してゐるのだ



# 棉 畑

城  
小  
碓

雨は降り続いてゐる。充分に水氣をふくんだ棉の實から葉先から、靜かに水玉が落ちてゐる。私は濡れながら棉畑に立つて、いつやむとも知れない雨を待つてゐる。眼のとどく限り、棉の實を持った棉の木、棉畑である。

腫をつむると城壁の様な紡績工場が泛んでくる。その中に働いてゐる女達、ああ文明の機械に追はれながら次第に瘠せ細つて行く、錘の杵に絲の様にむすばれ行く。

雨は止みさうにもない。廣々とした此の棉畑に私はいつまでも立つてゐる。棉の實から、葉先から靜かに水玉が落ちてゐる。眼のとどく限り棉の實をもつた棉の木、棉畑である。

雨に濡れながらその中を女達は歸つてくる。

瘡せ衰へて、胸に白い棉の花をつけて。

雨はまだ降り続いてゐる。私は棉畑の中に立つてゐる。女達は窓際で悲しさうにそれを眺めてゐる。胸に棉の木を育てつつ、やがて灰色の全身を、冷たき上床に横たへるであらう我が身を思ひながら。

# 鴉の裔

高木恭造

くらい風に光るものよ

苦しみは水のしほぶき

梢にもらす告のことば

雲の影伺ひよるけはひ

枯葉さわぐ夜の庭に

かたちなき言葉群がる

くひ散らす鴉の裔うらよ

かしましく凶まがごと叫ぶ

刻むべき言葉もあらず

かすかなる光も消えて

きしむ胸 もだえは歌に

神はあらずわれは臥しぬ

ことは散りてわが心よ

風はしらく梢にふるふ

涸れた泉 朽つる木の葉

影はほそり歌は死せり

# 馬の詩

小杉茂樹

われは馬を愛す

慧しく澄んだ瞳に

たゞならぬあの耀きは何んであらう

一撃を喰つても

麻袋のやうな體軀からはせいせい塵埃が揚るだけだ

不敵な面

さわがず

四ツの脚をピンと張つてゐる

かけ聲かけても動かない

天地が裂けても動かない

風に逆らつて鬣が火のごとく燃えてもやはり固く動かない

われは馬を愛す

澄むだ彼の瞳には騒然とした雲影が映つてゐる。

# インテリの歌

## 第一章

ジカンの

アル

ジカンは

ミの

オキドコロ

なく

タイダに

三好弘光



よりそふ

つまらない

カカクを

おしひろめた

チエの

アサセには

つまるところ

テもアソも

ない

あかるい

インシヨウを

アレンヂして

ふたたび

リュウが

バクハツする

ミドリの

ハをつけて

ナツのツユを

ひそめてゐる

シソウの

ためには

ムリな

ハガキを

サイソク

しないがいい

フメイリヨウな

リカイを

のみこんで

ヨツバラひ

ヘイボンな

クダをまくには

いかめしい

ブンガクの

メンセキを

ヒツヨウと

しない

メイセイの

ある

フウケイに

カラスが

カゼをさけて

まつてゐる

## 第二章

キリに

ぬれた

リンリも

トバクに

ひとしく

ジダイを

カンセツに

アワだたせる

はげしい

ヨロコビを

かきたて

ココロを

ささへる

つかれた

サオがある

モノモノしい

ヤウスで

カホを

つきだせば

ソラは

ジュラルミンの

ジグアイ

たたかへば

アシのツメも

たふとい

シジンの

たはこには

メイワクな

ケムリがある

そして

ゲイジユツの

ゲンシユクな

ゲンジツは

カルタよりも

はかない

トクベツな

ハナシもなく



いつも

つまらない

フコウな

ゼラチンたちよ

それをショウメイする

テキニンシヤも

なく

トカイのなかに

ハツイクのわるい

アナがある

ただ

イロイロな

ミヤクを

はかり

フシギな

アナについて

オンナは

とぼけてゐる

すべての

ケンシヨウの

ウラを

たたけば

ホコリがある

### 第三章

ミゴトに

しばられた

ジカンのナカに

ムゲンダイの

アシアトがある

アサは

ニンゲンの

おきないうち

ヨルは

ニンゲンが

ねしづまつてまで

すべてを

セイカツに

はばまれ

オモい

アタマをさげた

まづしい

チエしぼり

そのため

キをもむ

「チエしぼり」

サツリクに

おひたてられて

やせをとろへた

コイヌには

テキトウな

ムチはない

いづれ

チュウイぶかい

アクマたちは

ふとした

デキゴコロに

ピリオドをうち

あたらしい

センスを

のりきるであらう

ソラは

ハレ

ヒは

タカク

ウラミも

かれくちで

あまい

リンウの

イヅミに

ヘイシは

その

ブキをひたす

やがて

シンジツだけは

ながれを

わたつて

ガイセンするのだ

(こざかしいアクマのために)



# 解氷期抒情

西原茂

セツカク買つた氷臺所で溶かすより貴方のアタマで溶かしなさいと妻が言ふいろは氷山の間  
よしさらば有る程の氷持て参れ・セツカク持て参れ・八月十一日最

を掻きわけ印度洋が行くやうである  
十九度四分・ほへとに  
煙草のけむりも私の見てゐるところでは直ぐ  
私の顔には部隊長の鬚がのびて居るからであ

寢臺の下へ潜り込んでしまふやうになりました  
ぬる氷原遙か征旗立ててああ我れひとり病軀  
る彈痕のやうな氷塊をコメカミに・八月十二日最高體温四十度

ただ戦意あり手折る黄菊の冷徹なるを愛す僅か溶けた氷を酒盃に我が熱腸洗ひませうか  
をち  
八月十三日最高體温三十九度・八月十四日最高體温三十九度四分・八月

り 金魚が三尾とも今日はシツポの方へしか進まないそれ程この丘の建物は清浄であるわが

わが親愛なる叔父はよき醫師である君の發熱イノチにかかわるやうなことないこの熱狼狽て  
•••十五日最高體溫三十九度一分•••八月十六日最高體溫三十九度五分•••八月十七日最

下げてはいかんねその言葉でよたれぞ スツカリ私この熱を愛するやうになりました潮  
高體溫三十九度五分•••ます愛惜しますあこの惠與に秘密なる悅樂覺

愛しなら 表秋の女性らのこの冷き閨房こそ我が想ひイテツクやうな秘戯は私の半身を硬直さ  
えた•••八月十八日最高體溫三十九度一分•••八月十九日最

せてしまふか知れないヒヤコイ音して内分泌さかんにするのがシホラシイむつねお前は若い  
高體溫三十八度五分•••八月二十日最高體溫三十八度五分•••お前は新しい

若いガラスだそして風の味を知つてゐるね おくやま これら北方的裸像抱く爲めに私は口紅  
い新しい皮膚だそして肉を知つてゐないね

と頬紅と化粧化粧品はよいもの私は満身けふほてらせてルビーばかり嘯みつづけるうみの

叔父は發汗劑に祕密な藥品混ぜたこえて私は眠つてはならぬあ睡魔眠ることは私に今危険

である若しか眠りますと氷塊ら忽ち私を凍結させますでなくとも私の誇なる戰略は破ら

れ体温は忽ち三十七度の赤線をズリ落ちてしまふ思うてもたまらぬ不名譽私にもつと發ゆ

熱を祈ります蚊のナクより細い手を合せてタノみますき發熱四十度の錯重くおろさねばなら

んさでないといと北海の美女らの溶けるやうな透明な陸言聴けません掘りあてた冷いピストルの

やうな心臓を握り締めてあうつつなし彼女か  
あ  
私かどちらか交る交る深淵に落ちて行く  
づ

ドIを冷して食べるこの悪習に染めば  
あうつつなし  
あ  
私か  
一生涯ヒト様に愛されます嬉しい名  
づ

譽で  
ご  
さ  
い  
ま  
す

雪の朝

落合郁郎

このあした

清き流れ おともなく

わが骨を洗ひて

佗しくも

香りたかき調となりぬ

今は はや

悲しみも 智慧も

はた愛も

はるかなる風となり

現身のかけ

空の鏡にうつろひぬ

幸せとは

木癒はかへす

しあはせとは……

枯草 こゝに伏し倒れ

白きしとねに

冷く 深く眠りけり

# やどかり

宮下 秀雄

雲は

初冬の空をゆるやかに流れて行く

やどかりは肢を引込め

眼を閉ぢちこまつて

冷え切つた肢を自分の体温で温めてゐる

海のこと考へまい



陸のことも思ふまい、と

眼を閉ぢてちゞこまつてゐる

弱い冬日の暖さはそれでも殻を透して

快くからだに傳つて来る

やどかりは眼を閉ぢたまゝ動かない

海もない

陸もない

殻もない

明るく晴れた初冬の空を

雲はゆるやかに流れて行く

## 燭

つつましい耀きは思念であらう

自らの意志に亡びてゆく

蠟涙よ

暗黒に背くものの風情であつた

## 塵

うちうなだれてあれやこれや……

嘶きは涸れ盡はおもひに沈む

太  
田  
正

己れの穢の己れの臭ひ

明日の虚空にまた鞭が鳴らう

# 黒豚

小池亮夫

「でたらめゴビの沙漠と出ようか、それとも、いきなり五千年と出すか  
とてつもないお前の意情

然し何物かを深くぬかせこみ、凡ては先づ兩の鼻の穴を以ての狙ひに始める  
土塵を天に逆捲いて性慾に迫る、生きんとする

微塵も躊躇せず、はつきり下界といふものを生き抜かんとする  
神秘を破り、科學を寄せつけず、凍て極まれば意志を焼く

太陽一杯の眞つ裸體で、歌ふは開闢の平凡である

曾て一片の肉を欲したことがあるか

曾て一條の戒律を育てたことがあるか

楮土にくるまり、楮土を喰ひ、楮土を肥り、楮土に築く王國

渺渺と涯てなく、その霽れ渡る王國

寸土も譲るまい、國境の不連続線を警戒せよ、一毛をも損せまいぞ

黒豚は我と我が胸を刺し、我を示す

いや何を誇らう、その儘づう體を一九三八年に横たへ

豫言をか、アジアの闇をか、べろりと一併め、あとは底ぬけの眠である。

## 窮乏せるアポロ神の歌

故 甘 地 満

何物の仕業ぞ、堅琴の虹色なる絃の切れ、雲間はるけくはろろ、はろろとかき鳴らさん普なく、焦燥せるアポロは微塵に琴壞した。誰れにも知られざる下界への階段を聲なき怪鳥の如くアポロは加速度に落つこちた。

見えざる石壁を呑負ひ、日輪を御したる古へごとの夢、虚しく、魔王の笑ひに身を屈し、生爪はがして石壁の曲譜穿つ、火焙りのアポロ喉渴き、琴失へる窮乏の手に、黒き血滲めり。

— 甘地満追悼輯・静脈・より —

## 蝙蝠翔ぶ夕闇に佇みて

井 上 麟 二

たそがれの空へ重くかぶさる屋根なみを見てみると、遠い子供の思出が蝙蝠の翼に乗つて戻つてくる。

めづらしく蝙蝠の多い夕暮れである。蝙蝠は馬繋場の馬の合中をすれすれに翔んでは闇の中へ醜り消える。

蝙蝠の妖しい羽音から街の子供達が馳け出してくる。日焼けと汗と土埃とにまみれた子供達。

子供達は蝙蝠に似てみんな骨が細い。みじめなほど細い。今は細くなくても臆て細くなるやうな骨組みに運命づけられた子供達。いくら腹くちく食つても蝙蝠の貪食は骨組みを太らせな

い。富めるものも、貧しきものも、皆一樣に細い髯、腕、肋骨、首——首の上には黒く小さい蝙蝠の頭が乗つてゐる。

蝙蝠は馬の脊中をすれすれに翔んでは闇の中に融り消える。

重なる屋根の下に電燈がとぼされる。電燈の下には、それぞれ人生の隠れ場がしつらへてある。波紋織の豪華なソファに間接照明を投げかけてゐるシャンデリアもある。アツパツパの下からおこしの裾をはみ出してゐる紳さんが、啼き叫ぶ赤ん坊のオシメを取替へるのを所在なげに照す *Light* もある。その中間のが無数にある。さて、電燈はかくの如く家々によつて一つ一つ違つてゐるが、違つてゐないのはその電燈の下に繰りひろげられた隠れ場である。富めるものも、貧しきものも一樣にもつ隠れ場である。

この隠れ場を構成する自然的要素は——濁つた空氣、大氣でない空氣、塵埃に染つた空氣、煤煙に穢された空氣、バクテリアを養ふ空氣、凡ての悪を育てる空氣、等。これらの空氣の中



にはつねに必要な以上の水蒸気が立ち罩めてゐる。いろいろな個體や氣體を溶解し混入してゐる溜り水から發生するこの水蒸気は、都會の家々が持つ隠れ場にとつて屈強の培養基となる。

此處には晴天の日でも紫外光線は通らない。鋭敏な光線は噴煙の如く舞上る、ゴミに吸収されて了ふからだ。

蝙蝠は繋がれた馬の脊中をすれすれに翔んで暗の中に融り消える

今はたそがれ時だ。隠れ場にそれぞれの棲息者が歸つてくる。一日の終り、休息の時間が来たのだ。しかし、悲しむべき現實は、既に自然から餘りにも遠くへ逃げ去つた都會人に心からの休息がないことだ。一切のモヤモヤした現象は終日陰惨なツカミアヒからぐつたり疲れて歸つて來た都會人達を、いやが上にもいら立たせ、疲れさせ、性魂を奪ひ抜く。彼等は重い心を引摺つて隠れ場に遁入する。隠れ場はこの精神病患者をどう迎へ入れただらう。憎み合ひである。みんな隣人をうかがひながら、疲れた白眼を妖しく炎やして憎み合ふ。偽瞞、猜疑、お追従、へらす口、妄語、不逞、獨斷、不遜——それらが隠れ場の中で醗酵し、溶解し、膨脹し、

收縮しながら、男、女、子供、犬、猫までをそれぞれの牙城に立て籠らせ、悪意の尖光を發散させる。健康と見える不健康、融和と見える離反、信頼と見せかける裏切り、ラヂオは成層圏へまで届けと聲を囁らしてゐるが滅多に眞實を叫ばない。新聞は灼熱した輪轉機に高度の種を  
偸め二頁大の超超超活字を考案する。

編輯は馬の脊中をすれすれに翔んで闇の中へ瀰り消える。

裏の空地にこぼれ育つた向日葵は、闇の中に北を向いてうなだれてゐる。細い幹の上にとま  
ましい花を咲かせはしたが、年から年中太陽のあたらないこの露路裏では、東も、西も、南も  
知らう山なく、終日かうして北ばかり向いてうなだれてゐる。

これはお前達のいのちに何處か似通つてゐるよ。ねエ、都會の子供達。

お前達には一人として土を知つてゐるものがない。母の懐を知つてゐる者がゐない。都會には  
お前達を孕み育てる土がないのだ。青青と芽を萌えたたせる土、滾々と湧く泉をまもる土――

それがほんとうのお前達のお母アさんなのだ。土に育てられた叡智、土に温められた情操、地熱と太陽に醸された詩魂——これこそお前達一生の何よりも大切な、何よりも幸福な、何よりも尊い精神を打ち立てて呉れる要素なのだ。お前達の成長には、その外のものは何一ついらない。

文化の外貌や科學の殘滓に感はされるな。上のない都會はお前達を日々刻々蝕んで行く。怖ろしい。感しい。

お。都會に巢食ふ蝙蝠に似た子供達よ。さあおいで。飲はお前達にほんとうのお母アさんを見せて上げやう。

お前達はすでに都會の息づまる嘔氣に啖く惡の華を知つてゐる。見て見ぬ振りをするすべも心得てゐる。

お前達の目は、都會の大人の世界がどんなものであつたかちやんと見届けてゐるだらう。知つてゐてだまつてゐるのだらう。お前達は學校でおそはる修身と、日日身に迫つて啖く誘惑とを巧みにひとつ心で攝取し排除し使ひ分けする。

その知識は、聽てお前達を、あのムセ返る隠れ場へいざなつて行くだらう、そこでお前達を待つものは、呪ふべき病患より外にない。おお、お前達。

子供達よ

一切の知識をはら捨ひてよ。

今までの生活に赤い二本の斜線をひけ。

華やかな絨毯を蹴とばして来い。

はじめする露路に別れて来い。

私はお前達を伴れて行く。お前達がほんとうの人間になれるところへ。お前達のほんとうのお母アさんの懐へ。

私は人生のつまらぬ敗殘者だ。しかし、正しく生きることに歸依を求める順禮者でもある。私はお前達を決して間違つた道へは連れ込まぬであらう。

敗殘のこの身にのこされた、たゞ一つの可能はお前達を正しい道に導くことだ。何故かつて？何故でもない——私は私の永い一生を、あの惡の華咲き誇る都會の眞中にさらけ出し、苦し

み悶へながらも生きつゞけて來てゐるからだ。

蝙蝠は馬繁場の馬の脊中をすれすれに翔んで彼方の闇に消えて了つた。

# 廢 港

横 澤 宏

この港は、一筋の河が押流してくる泥の下に次第に沈んでゆく。熟睡した沈没船の寢息もしない。ひそかに歴史の夏をくると、海藻にからんだ見設が錆ついた勳章のやうに現はれよう。

今夜は稀しく艸に沿ふて寡黙な駆逐艇が碇泊してゐる。船底には珊瑚がすがりついてノロノロと永い時刻を測つてゐる。

果して何日になつたなら、あの黎明がやつてくるだらう。

樹の枝に置き忘れられたあの巢にも、もう鶉さへも歸らうとはしない。

たつた丘裾の停車場に、終列車が古風な鐘を叩きながら入り込んで……。

ひそかな、ひそかな港の彼方、刻々として鉛色の潮が押寄せてゐる。何處かに月が隠れてゐるのだらう。私は、あわてゝ月のありかを探ぐる。

しかし、遂に見あたらない。

こんな惨酷な風景だから――

そつと受話機を耳にあてゝ、私は誰かの叫ぶ聲を待たう。

——一九三九・一——

# 沙漠の植物

坂井艶司

大和の秋にくらべ 沙漠の果は 天日くらく

昨日も今日も 鞍は冷え 風は流れ

わがこゝろは むなしく にごつてゐる

季節の隅に枯れ残る 蔓草の

まがりくねつた その姿にも似て

わがこゝろは 非情にうつろである

乾燥アジアの一地帯に はや秋風すさび



生くるに難き いのち捨てよと

わがこゝろは あはれにも はやつてゐる

浪々とつとく 時の流沙に 馬乗り捨てゝ

沙を掘り 己が瘦骨うづめ 植物の如く

首のみ出せば 眼と云はず 耳 鼻 口と

顔いつばいに黄沙を浴び まみれ

いまだ なほ かつと眼ひらき 息づいてゐる

やがて 夜ともなれば この植物は

星にうるほひ げへ げへ げへと

喉ひ聲まじり ま涙まじりのせきをする

乾燥アジア大陸に 秋風韻々とせきをする

# 権兵衛和讃

松  
畑  
優  
人

ヅンペラ ヅンペラ

せめてあなたの爪の垢を煎じ

この世を明るく

ゴンくさま

あなたの潑刺とした種時姿 ウフツ

いや 笑つたのではありません

いや 笑ひました いや失禮

いや 安堵

生きてゐるのはあなたです

三度に一度は追はずばなるまい

鳥共がたかつて 頭のとつべんに  
種入瓢箪ほどの穴をほがきました

ゴンペがゴンペ

ゴンペが動かぬ

ゴンベよゴンベ

僧い鳥がゴンベを殺した

ゴンベが安堵か

安堵がゴンベか

ツンベラ ツンベラ

## 五月の風の中で

——松本光庸氏に——

約束のように

私が毎朝喰べる麩麩と野菜

今朝もそれをすました

小さな鏡に私の今日の顔色が映つてゐる

誰に話しかけるともない

——私は何時もこのように健康だ

矢原禮三郎

海を持たぬ人々には青空のよろこび

今朝もそつと窓を開ける

風は私の体温を知つてるように

それ以下のつめたさで

室房を流れ流れて

午前の仕事

私の知識がよごして行つたもの

大きなノートは

風にひらひらめくれた

露臺はもう日がかげつたであらうか

あれから犬もほえなくなつた

と友が訪れたような氣配

私はうれしさで

考へるように首をかしげて……………

# 航海船

藤原定

海洋は完全な円盤で

円盤の中心がこの俺だ。

俺がすすむにつれて

円盤はさざめきつつ新たになり

太陽は讃歎の火の束をぶちまけ……

迎へる波々のよろこびの歌

見送る波々の悲しみの歌は



ひとつの時間の中で纏れあひ。

水尾はさかまいて静けさもとめ

ふかき青の中に融けゆき……

海洋は完全な円盤で

円盤の中心がこの俺だ

限界あるこの円盤に

底知れぬ不安を感じようとも

波々の歌は穹窿に循しつづけ……

短

歌

冬 雑 詠

相 川 澄

重爆機滑走しきて飛びたてばあほりおもおもしろく硝子戸を打つ

黄塵の地を捲くなかに竹ちをりて季の移りをぬくとくおぼゆ

雪消えし裸野原はしんかんとおし垂るる空の下にひろごる

石敷きの廊下を燈かかけくるカラウリを氷る原に寄りて待つ

足枷の歩幅のままにゆける匪のふりかへりみし眼冷たし

身 邊

安 倍 喬

ともの遺骨いたはるごとく抱きもち降りたつ面みな寂かなる

これしきのことになんぞと堪ゆるころ生れ貧しきわれをよるこぶ

母まさすおとななりしさぶしさは酔へば歎かゆ夜ふけ詩音

落つる陽を眩しがりつつ聲あげて子は砂濱を駆け寄りて来る

そこばくの仕事にかまけ應召のところがまへは忘れてゐつつ

# 白き太陽

新井重美

目貼りせし日より次より次に葉の落ちつぐゴムの在りて日を過ぐ

街そととなりてこの家限りなくなにもなき野に對きて窓ある

乾ききりし土駈しらざけてただびろき往還に在る白き太陽

いくめぐり三寒四温めぐりては大地の固く凍ててゆるがね

ペーチカの煙出しいくつも雪降りの昏きにありてけむり出すなき

# 現 實

荒 川 石 楠 花

とどろける雷雲に反りうちてしかも厳しき街の家根並

暴れ狂ふ風雨押し切り立ち直る速度をもちて電車曲れり

酒のみて眼を細めぬし兵をさへ遂に死なしめときの移れる

ひたすらに醫師を恃める儂なさを悔い思ふとき死期ちかづきぬ

安らげき子の死相にて觸れがたき永久の命をわれに示せり

## 興 亞

伊東千鶴子

またたきぬしモールス信號をさまりてあとは静けき星月夜なり

故國を擧げこの時を期しうたひぬむ愛國行進曲吾もひたうたふ

滿人の兒童も小旗うちふりて共にうたへり愛國行進歌

病院の窓したゆけば傷兵の談笑のこゑ涙ぐまじも

わだかまる心もちあぐみあゆみゆく目にしみて蒼く空の澄みたる

# 土

小  
川  
皓  
司

北支那の漢沽かんこと謂へる邑の土われはかり居り坪びんにのせて

乾きたる土塊つちかた一つ掌てのひらに載せて漢沽と云ふを描く眼に

水濁る蔚河ういがに潮寄せくれば蘇蘇そそとして水漬みづく地ちとぞ

乏しくも棲める幾戸のいさなとりときに匪ひとなる邦荒廢あきれたれば

衡程の指針のゆらぎ視つめつつ昨日も今日も土まみれなる



出 發

香 川 末 光

つらければ歸り來たれと言ひ給ふ老いしみ母は言葉少なく

北 京

座のひくき俵にゆられ楊柳のゆたけき街に吾は入り來ぬ

かかるたぐひも大陸進出と言ふべきか胡同かどに竝ぶカフエーおでん屋

北海公園

崇禎帝が果てにし哀れさを人は言へど眺望する景山に感傷もなし

瓜子くわいづ兒ごを嘯みつつ吾ら歩を止めぬ乾隆帝の碁ごのたつもとに

## 聖戦二歳

故甲斐水棹

くさぐさの流言のひまにわが友ら召されてぞいづ昨日も今日も

いでたつと月光に輝く兵列の聲なき時し沁むものあり

日の入りて逆光にうく巖山の悠久の相もさびしわが身に

うつし身の考に入るとき精神のみきほふじれをいくとせ保つ

昭和十三年十月九日、親愛なる友の相圖り、水棹在滿二十年記念並びに、慰勞短歌大會をひらきよまはる。遠隔の地よりくる友もあり、一日感極まる。

幾山河過ぎし友も聲まじりうつつを夢とわれはまむかふ

# 垂 實

中 斐 雍 人

合歡の木の垂實はわかく葉は老いて或る日ゆふ陽に涙ぐましも

たとふれば鉛の板をまぐるにも似しあらそひに幾日か経たる

さわやかに肩のシャボンをながすときあはれわがイエスの輪にちか

防毒マスクつけみし顔の重たさが忘れ難かりき四日間ほど

ストップの赤き光にたつときに春の夜の風とおもふ吹きをり

# 夏 日 抄

神 山 哲 三

桃源台山莊

雨しぶく窓べにひとり光澤ふかき林盤は据ゑて三昧さんまいに入る

たたかひは今しわが踏む地の上にあると思ひつつ薔薇の蟲とる

靜ヶ浦海水浴

眼の前に妻の裸形が立ちてありぬおどろき聲あぐ子らが相寄り

泳ぎしらぬ子らが手を取り泳がした波はいささか荒くしあれど

深海の中に吾れさへや躍り込みぬ神経痛持つは忘れぬにけり

## 送 別

木 田 晴 夫

いとま無かりし店をやめたる兄と共に碁を圍みしも短くて過ぐ

蓄への無くて日に日に事多く清しと言はむも言ひ難かりき

業を廢してあせらぬ兄を非難する人の言葉は吾が聞きにけり

北支那に出で行く兄を見送るに病む母ひとり家に残り

思ひなく行けよ吾が見ひたすらに家居守りて吾はあるべし

## 戦傷の友

櫻田正東

柳樹屯に汽船近づきぬ胡藤のしげれる丘に病棟の見ゆ

思ひがけず見舞へる吾に傷つきし友起きあがり聲あげにけり

傷癒えし友は戦線に歸り度しと云ふより外に多く語らず

分列式に吾も加はりぬ後備役の點呼を終へて幾年ぶりか

戦死者の御靈なぐさむと額づけば山吹きおろす秋風の音

明  
暗

島  
川  
の  
は  
ぎ

陽ざし強き青草のゆれカーテンを網戸をすきて流るゝ如し

隣室の花の香流す吹きぬけの風にさわだつ葉音も聞ゆ

骨立ちし身を貫けるわが意慾青葉の中に息つききほふ

むきむきに疲れてかありしくれぐをふり灯ともすと立たざりにけり

雨後の月のさやけきに雲走り居り仰ぎつつわが思念は遠し

# 戦況

鈴 來 濟

火を吐きつつ須叟にして消えし敵の機影とちし眼裏にしばし愉しむ

越境の敵機墜ちゆく青草の張鼓峰のかけに線となりつつ

ニユース寫眞に見ればしまれる張鼓峰もただにしづけき夏草の山

記事に見る被害のほどは輕微なれど敵機編隊の數ただならず

みいくさは勝ちゆくとしれど灼熱の山西の野に草枯るるちふ



# 哈爾濱

高橋房男

松花江濁り濃くしてみ空ゆく雲のすがたをその儘映さず

砂あかるき晝の中洲に鴉みて時をり飛べど遠く離れず

シベリヤの空ゆ流るるくらき雲太雨を降らし五月寒かり

窓ちかくサンソフイヤの寺院見えてさびしきときはまなこ向けらる

楸かつぐ六人の苦力ひたひたと足速やに過ぎたり夕ぐれむとす

春  
雑

武  
田  
尊  
市

沖べより月照り渡り漲らふ河口しろし見返りて來ぬ

雪柳芽吹くかたへの霜置ける土堀り今朝は山茶花を植う

青山の水滴れし谷になだれたる岩いちちるく夕ぐれに見ゆ

しきりに鉦ひびき経のこゑぞする日暮の原にのぼり來にけり

わが庭の青葉打つ雨の小降りとなり蟲らは跳べりその下草に

## 南京陥落

津田八重子

照るとなきうすぐもり日はアドバルーンの書きながし字もひそみゆれつつ

照るとなき日照りさむさむし明るみにすずめが立つるほこりのしろさ

朝凍みの空の青さやアドバルーンのへこみするどく目にさむさむし

南京の陥落に興するうらそこや興じ得ぬ事にふれてなげくも

ともかくも南京陥落のサイレンなり心きわまりて叫びたりけり

# 母 逝 く

寺 本 初 首

枕邊に我あることも知らぬ母の絶體安靜の御手さすりたり

醫師が言は神の聲かも母を看取る心はまさに御心のままに

保たじと言はれし夜半の時過ぎぬ祖母の忌日の今日は三十日ぞ

機場の山の空よく晴れぬ仕合せに母は逝きしをかくは泣かるる

偏頗なくいつくしませし母思ふ心は四人ひとしなみなる

# 事變下吟

富田充

國遠く出で來し兵は疲れたらむ枕につけば早も眠りぬ

かたはらに眠れる兵のかく野夜半にめざめてしばし聽きをり

すめらぎの國のまもりと發つ兵に朝盛る飯を清けく思ふ

みいくさに召されし兵を一夜泊めけふぞ出で發つ秋風のなか

紙片にふるさとの家の地圖書きてけふはればれと兵發ちにけり

## 楡の林

富永幸子

寺のまるき塔をかこみてほくけ立つ楡の林に月のあかるし

自働車くわがくるましけくゆきかよふなかを支那馬車の積みし氷は高く陽に透く

今朝の雪残れるはある楡の林幹一せいに陽を照りかへす

まつただなかになりしスリガリー赤濁る波うねりては船を揺りあぐ

野の果へ夏雲遠く光る窓へ重爆撃機うなりては来る

一首一題

中島新

青春のいのちそのままの生活に戒律の如し我に妻來る

水張田みづはりのもろもろのかけ馳はるなり動かぬものかな天あまの白雲はくうん

工場節水の滴たに等しきを民家に強要きやうようのぞて都市は整ととのしき

たくましき集團生活の兵等去いにし校庭がうていの朝は季きに敏としき冷ひやえ

手榴彈交てりゅうだんへしなかばにしてかはる實寫じつしやうに即ち死ぬる兵なし

## 金剛山そのほか

西田猪之輔

火田民住むあばら家は金剛の山に對へり霧雨の底

馬蘭咲き牡丹匂へば美し夕の庭の山寺の僧

溪深き金剛山の岩に寢て物を思はず水の音聞く

山津浪神戸の町に置き捨てし砂丘に暑き秋風の吹く

水引きて泥の出でたる六道湖の岸の枯葉青き芽を吹く



# 無題

橋本浅夫

赤きポストと青きポストと並びをれど愉しくはなき父への便り

玻璃窓を透すテニスのスピードに音聞えねばこころもとなし

大空に雲はなけれど丘に立てば風あり君の据ひるがへす

つらなれる軍馬の列はうちつかれ巻を截るに弱き歩の音

冷えきりし大氣の中にわがめの眼鏡の玉の凍るすべなさ

## 夜の青葉の演奏

平  
山  
斌

青葉の中央公園に吹奏樂團合同野外演奏會催さる

野外演奏聴くべく人等灯を遠く青葉の闇の草にベンチに

金屬の樂器いくつも灯の中に大きく浮び曲はなやかに移る

遠き稻妻をりをり走り秋めくと思はるる夜の樹木かぐろし

水槽に漂ふ春の浮草の水に張る根は白かりにけり

雨の中にびしよびしよに濡れ何もかも春を待つあの公園の樹木

# 忠靈塔大祭

故平山登志夫

わが住める地球の影を缺きながら鋭く月の地にふれむとす

遠ざかる山をめぐる雲海は墨繪のごとく窓にうかべり

初夏の空紺碧に澄む今日を國內くわにをあげて英靈祭ひょうりょうさいりす

俗人の奏する雅樂整ひて音色はすみて四方にひびかふ

皇帝陛下のみ砂ふみます音かすか近づきくればかしまりをり

# 秋 冷

三  
井  
實  
雄

廣き庭に榆葉ときどき落つればか世の中にひとりわがあるごとし

榆の葉のよべは降るがに散りたらむけさは向ふの家の窓も見ゆ

榆並木の風ををさめてある中に紅葉せる葉の散るは音に出でず

落葉してすきたる枝に飛びうつる百舌鳥見てをれど鳴かざりにけり

家のめぐりに落葉の音のしげくしてわが起き臥しのしづけかりける

## 颯

宮 島 正 美

全体の坑道なれど排氣機のピストンのみが動く晝なり

低き丘越えし颯は大野良をくぎる並木に入りて崩れぬ

水囊を首にはさみて動かせぬ顔ものいふは更にさびしき (達人院二首)

部屋ごとの燈のしめり踏み来て餘りの飯をあためむとす

病院の抽匣の中ゆ妻が呉れし紙幣をもちて今日は來りぬ (千氏歡遊宴に)

# 浅茅が原

桃  
北  
好  
澄

貧しさをよしと言へりし日記よめば世に生でて即ちわれ躓きぬ

此のごろのとりとめもなき念には戦さにゆきて死にたしわれは

かげろふの春の光をみなきらふ浅茅が原にけふも来てあそぶ

心も靡ぬに人をおもへば枯色の浅茅がうへに涙落ちけり

わが哀れ憂ひたまひて垂乳根の賜びし手紙をよめば歎かゆ



# 俳句



伊太利親善使節を滿洲へ迎へて

高山峻峰

國使迎へて滿土暗れ溢む殘花かな  
予のものを買へば妻足る春の風  
日白く予午線にある霞かな  
山風にかたまり合へり濃き草  
草萌や牧民胡笳に遊ぶのみ

雜  
詠

石  
原  
沙  
人

寒がすみ鼓樓うかべて城踏し

城壁の黝然と歳祀る夜は

楡錢地に敷くとき青し驛の灯は

道士いとまあり睡蓮の咲く晝を(太清宮)

電話連絡夜の殘炎にせぐゝまり(張鼓峰事件)

## 軍旅餘詠

栗生純夫

冬籠る匪の數地圖に書き入るる  
雪の夜の幻想少年兵を刺す  
雪ちらちら手を合せゐる飢饉の民  
砲台は死せり銀河をかたむけつ  
驅逐艦遡江し枯野制壓す

## 満洲四季

森脇襄治

戦跡の丘つきく／＼に初明り

いづくよりともなく來り耕せる

戦跡をめぐりてこゝに夕櫻

突兀と城堡おこれる枯野かな

國境へ短日のバス乗り継ぎて

# 四季

志和斗史

春

リラの香のひそかにうせてつちふる日

夏

(兄死去歸郷)

主なき冬の帽子を蠅なめて

秋

手負雉子秋草に似てしのびけり

冬

凍てちりちりと月のレールの眞直ぐなる  
採氷の底の小魚が目をのみに

雜詠三句

三  
木  
朱  
城

段切や北大營はすぐにそこ

高粱に攻むる日近かくなりにけり

わが支那語通じがたなし耳袋

雑

詠

金子麒麟草

植樹節人出の丘の日に喘ぐ

孤獨なる耕人といふや曠野にて

御絮しらしら廟階朝の冷えもてり

曠野焼く焰折々日に翹す

重爆機の音の雪光らんとす

小  
說



# 同行者

今村 榮治

「——この短編に出てくる主人公……申重欽の生活は、すでにひどくゆきづまつてゐる。少くとも彼自身、さう思ひこんでゐる。それはいづれこの小説を讀んでいくうちに、理解できれば幸ひであり、またよしんば、どうもわからない、と苦情がでたところで、とにかく主人公自身がさう堅く思ひこんでゐるからには、彼自身にとつては、たしかにゆきづまつてゐるのであつて、作者自身も、こゝに身勝手な説明はできない立場にあるのだ。」

「いつそ、はやくおつばじまつてくれりゃいんだ」

朝鮮宿屋のあんべらの上に、両手を後頭部に組んでひつくりかへりながら、日本産物の申重欽は、いら／＼する氣もちを抑へかねてさう呟いた。

滿洲事變直前の、新聞記事どほりにいへば、日支の風雲いよいよ急なる、八月末であつた。中村事件、萬寶山事件とあいつ

いで起こり、長春の附屬地では、日本軍の威嚇演習が日夜の分別なく、街々で行はれてゐる。

眞夜なかなど、突然の銃聲に眼をさまされると、始まつた！など、早合點して避難準備にとりかゝる人もあつたりして、二人寄れば、話題は日支問題、街を歩く人々の顔には期待と不安の色が、落ちつきなく閃めいてゐる。

ちやうどその日は、天氣さへ朝からうつろしくして、ひと雨降らずには晴れるまい、かといつて、なか／＼降つてもこないむし暑さで、人々の胸に重たくのしかゝつてゐた。

申重欽は、むつくとはね起きて窓外をながめ、またひつくりかへつて、

「はやくおつばじまつてくれりゃいんだ」  
と、くりかへして呟き、やけに頭をかく。

しかし、申重欽のこついら／＼しさは、日支問題になんらの關心があつてからのことではなくて、いはゞ彼自身の、個人生活のゆきづまりからであつた。

彼のいらだつ氣もちが、日支問題のせいでない證據には、彼はまだ、度も、日支問題について深く考へてみたことはない。

中村大尉が支那官憲のために殺害されやうが、萬寶山の鮮農たちが、支那民衆のためにどれほどの被害をうけやうが、また平壤で支那人がいく人殺されやうが、その他、日々絶えない不隠な事件があらうがなからうが、申重欽は一向平氣であつたし、

また少しも、興味もわかかなかった。彼の日支問題に對する不感  
性なほどの無關心さは、彼自身の個人生活の逼迫状態が、そんな  
な餘裕をもたせなかつたせみもあるのかもしれない。

だからいら／＼して、はやくおつばじまつてくれりゃいゝん  
だ、などゝ呟くのも、例へばひどく氣もちがむしやくやすると  
き、または退窟でしやうもないとき、近くで大火事でも起こら  
んかなア、くらゐの呟きであつた。

申重欽のいら／＼しさに拍車をかけるやうに、この宿屋のお  
やぢが、長い煙管と木製の大きな灰落しをさけて、全身を尊大  
にゆすぶりながら入つてきた、だぶ／＼のバズが垢でびか／＼  
光つてゐる。

申重欽は、このおぢさんの姿をみるたびに、なせかわけのわ  
からない嫌惡の情を覺えるのだつた。蟲すが走るのである。で  
彼はおぢさんが仰山にのけぞつて入つてきてもその顔をちらツ  
とみただけで、ひつくりかへつたまゝ黙つてゐた。

すると、おやぢは彼をぢろりとみて、その不さまな行儀をた  
しなめるやうに、半分白い長袴をなでおろしながら、ごほんと  
わざとらしい咳をした。そして朝鮮の年寄り特有のあくらのか  
きかたで、どかりと坐ると、灰落しに煙管の頭をこつんと叩い  
て言ひだした。

「申さん、同行者が一人、みつかりましたのぢや」

「なんですか、同行者つてのは」

「へ？すると、せんあゝ言つたのは、あれはこの年寄りに冗談  
を言つたんですかな？」

申重欽は、やつと思ひだして、

「いや、まるつきり冗談のつもりでもなかつたんですがね。そ  
れで、そこへゆく同行者がみつかつたといふのですか？」「さや  
う、ちようどあなたのゆかれるところで、日本人がかなり大き  
く農場を經營するといふのぢやが、そこへ一人で歸る日本人  
がある。その人もなせか、朝鮮人の同行者を探しとつたらしい  
がな」

しばらく言葉を切つてから、

「あなたは朝鮮人のくせ、大いに日本人ぶつとるから、ちよう  
どよい都合ぢやらうて」

さう言つて、おやぢはいく人分もの蔑視を一人でするやうな  
眼つきで、申重欽をみると、またごほんごほんといへる申重欽の

申重欽は、おやぢのあとの言葉を、針尖のやうな感じできい  
た。いはゞそのために生活がゆきづまつたともいへる申重欽の  
胸にはそのやうな言葉は、チクリと痛さをもつてひびき、また  
ひびき、いま／＼しくもあるのだ。

けれども彼は、うむ！と唸つて瞬間に心がきまつた。彼は眼  
がさめたやうに上體を起こして、堅いあんべらの上にあんと坐  
つた。

こゝから荷馬車に便乗して二日かゝるといふ××縣に、申重

欽の長兄が、妻子をひきつれて移民してきてから、十五年になる。二年に一度ぐらゐる便りはあるけれども、まだ一度も返事もだしたことはない。その長兄のところへ、申重欽はゆかうか、ゆくまいか、と、このいく日のあひだ心をきめかねてゐた。

荷馬車によらなくては交通の便もないやうな、満洲のへんびなところへいつて、長兄たちといつしよに百姓をするには申重欽は都會の文化生活に慣れすぎてゐる。それに、故郷を蹴つて大連へきてから、十年のあひだ、彼は言葉すら朝鮮語は用ひなかつた。友人たちにも、同郷の人はひとりもゐなくて、日本人と働き、日本人と遊び、日本人と暮してきた。申重欽は、個人的には、あらゆる點で、完全な日本人になつてゐる。

生活が経済的にもゆきづまつて、この二箇月ばかり家に歸つてゐたり、今また長春へきて、朝鮮宿屋に泊つたりして、言葉もいくらか元へもどつたとはいへ、やはり朝鮮語は日本語のやうにすらくと言へない。朝鮮語を手ぎらひはしなかつたけれども、なせか他國語を話すやうな不自然さであり、身につかない氣もちである。

風習は明らかにさうらひであつた。

申重欽は、遠い田舎での百姓の生活を想像して、心苦しくなつた。言葉はもちろん、そこでは日本人の影さへもみることほできないだらう。

住む家も、この宿屋のうすぎたなさま、あんべらさへいま

いましてならないのに、きつとそこでは、あんべらも敷けなくて、藪くづかなんかのうへに寝るのかもしれない。窓はたゞ、土壁にちひさく穴を開けてゐるくらゐだらう。

ゆけば申重欽も、そんなところに住みながら、今まで握つてもみない犁鋤を把つて、百姓せねばならぬ。體は丈夫である故百姓仕事はできるとしても、考へてみるとそんな原始的な、野藩な生活には、辛抱できる自信がなかつた。

彼は、現在の精神的にも實際生活的にも、逼迫状態から足ぬきがならず、苦しまぎれに、いつそそんなところへでもとびこんで、しばらく眼をつぶつてゐるうちに、なにかほかによい途が展げてくるかもしれぬ、と、そんなことを漠然と思ひながら、同行者はゐないだらうかと、宿屋のおやちと言つたものゝ、まだ具體的にきめてゐたわけではなかつた。

が、日本人の同行者ときいて、心がきまると申重欽は、今までのいらだゝしさは消えて、むしろ悲愴な氣もちになつた。

あすの荷馬車の便で出發するにきめて、その夜のうちに用意萬端とゝのへた。へんびな田舎で、さしあたり要りさうな身まはりのもの、十五年ぶりに遇ふ長兄への、さゝやかな土産そんな品しなを最少限度に買ひそろへてしまふとひとりて街をうろつきまはり、都會生活にしばらくおさらばのコップをほした。

宿屋に歸つてから、洋服、着物、その他田舎では要らないだらうと思はれるものも、全部ポーターにくれてやり、小盗兒市場で買つてきた、支那人のふる着を着かへた。

「似あひます、よく似あひますよ。支那人そつくりでさア。申さんは日本着物なんかより、そのほうがよつほど似あひます。顔と手が、少しきれいすぎるけれども、出發するときにはちと汚すんですな」

ポーターはそんなことをいひ、もらつた日本着物や、洋服やを、うれしそうにいぢくつてゐる。

申重欽は惱つて、

「よけいな口を叩かんでもいゝ」

彼はいま／＼しくて、支那服をぬぎすてると床に入つた。けれども、荷馬車による二日間の旅のことや、田舎での生活の真相をしらない、未経験からくる不安が、刻一刻と重たくのしかゝつてくる。とりわけつき／＼に襲つてくる、豫感の脅迫には堪へられなかつた。

つひに一睡もできず、やがて夜がしら／＼と明けはじめた。

まだ豆腐賣りさへ出てこない早朝の街を、申重欽は、宿屋のポーターを案内にたゞせて、鐵道北にある荷馬車屋へ、歩いていつた。

たうとう雨は降らず、そのまゝ晴れかけて、ところどころの

わづかな晴れまから、物色の空が、はや初秋の氣配を感じさせる。

ひと晩ちう、そうぞうしく市街をゆすぶつてゐた演習の銃聲もけさのひと／＼きはやんで、日支問題などわすれたやうに市街全體はひや／＼かに落ちついてゐる。

街はづれに出て、申重欽は、この最後の都會をふりかへつてみた。

彼はきのふの悲愴な氣もちは不思議にも消えてなくなつてゐた。はなれゆく市街さへ、軽い執着はあるけれども、さほど深い感慨はわかないのである。ひと晩の性悶から得た一種のあきらめかもしれない。

だが、申重欽は歩きながら、頸をかゞめて自分の身なりをみ下したときなんともいへない忌々しさにとらはれた。

あちこちつぎめさへある汚れかゝつた支那服、他からみればたゞ、煉瓦はこびか、でなかつたら道路掃除人夫よりは、少しばかり上等であるにすぎない（苦力）姿の自分は、今どこへゆかうとしてゐるのか！

朝鮮人として生れてゐながら、朝鮮の風俗や習慣を毛ぎらひし、言葉さへ忘れかけて、日本人にならうとしてきた。そして今になつて結局どちらにも容れられずに、兩方から絶縁されて原始的な、文化度のひくい滿洲のへんびなところへ追ひやられていく自分。

申重欽はそのやうな自分の姿が、なにかこつけない道化役者のやうでもあり、また世紀の過程に生じた、ひとつの悲劇役者のやうにも感じた。

「間くらゐまへに立つていく宿屋のポーターの、屈托もたさそうにひどく威張つたやうな歩きぶりさへ、なにかになりそくなつて、しかも元の巢にもをさまりかねてしまつた自分の姿を嗤つてゐるごとくみえる。

「おい」

申重欽はなにをいふつもりもなく、たゞひどく寂しいのと行状しがたい腹立たしさをこらえかねてさう呼んだ。

するとポーターは歩みをとめて、ふりむき、

「なんですか」

しかし申重欽はなにもいはずに、黙々として歩いていく。宿屋のポーターは、この大へん上品ぶり日本人ぶつてゐた申重欽が、支那人の労働者服に身を包んで、荷馬車で田舎へ百姓しにいくことを小氣味よく思つてゐるらしく、自分の立場を誇るふうに、詰襟の肩をいからかして靴をふみならした。

申重欽はいよ／＼抑へかねて、

「おい」

と、また呼んだ。

「なんですか、いひなさいよ」

「もういゝ。歸つてくれたまへ」

「へ？おや、あんたひとりでゆきますか」

「うむ、ひとりでゆく」

申重欽は愠つた調子でいひ、ポーターがもつてゐる風呂敷包みを、ひつたくるやうにうけとつた。

するとポーターも愠つて、

「さう—ですか」

彼はろろりと侮蔑の眼を申重欽になげて、すたすたと歸りはじめ。

「おい、ちよつと待ちたまへ。馬車屋ほどのへんかね」

「もう一町ばかり行つて左にまがりや、めくらでなくたつて荷馬車にとんとぶつつかりませう」

ふりむきもせず、さう嗚鳴つて歸つていくポーターの後姿へ、申重欽はべつと唾を吐いて歩きだした。

鞭を五、六袋づゝ積みこんだ荷馬車が三臺、道路のわきにならんで、もう出發するばかりにして待つてゐる。車一臺に四頭または、五頭づゝ馬をつけてゐた。馬はみなひどく瘦せてゐたり、眼がつぶれてゐたり、背なかのあつちこちにできものができてゐたりしてゐた。こんな馬車に乗つて、二日の旅をするのかと思ふと、申重欽は原始への逆行をあへてするやうな感じであり、また自分の身なりと照らしあはせて、さぞ似あふだらうと思つた。

同行の日本人はきてゐるであらうかと、あたりをみまはすけ

れども、それらしい姿はみえなくて、たゞまんなかの馬車の荷物の上へに蓆をして、朝鮮着物のぢいさんが乗つてゐる。その人は濃い黒髯が、鼻の下や顎や頬いつたいに生えてゐて、それが朝鮮着物には大へん不調和であつた。一文字の濃い眉毛や敏活に動く眼にも精悍さがあつて、ひどく朝鮮人はなれしてゐる。が申重欽は別に疑はなかつた。

日本人の他に朝鮮人の同行者もゐたのかと、申重欽はなぜか不平になる氣もちを抱いて、そこらをうろうろしてゐるとそのぢいさんはいきなり、

「ニーデかね」

言葉をつゞけたけれども、あとは支那語だつたので、申重欽はわからない。けれども、それが日本人であることは明らかにわかつた。

しかし彼の言葉のひゞきのせいもあるのだが、申重欽はすぐむつとなつて、

「なんですか、ニーデかねとは」

洋服や日本着物は危険であらう。が、同じ變裝するにしてもこの道中は支那人にこそ變裝すべきであるのに、なんだつて朝鮮着物など着ていくのか。

(なぜか朝鮮人の同行者を探してゐた)といつた宿屋のおやぢの言葉を照しあはせてもわけがわからず、たゞその服裝からうける朝鮮人特有の頹廢的な感じのみがいまじしくて、申

重欽はほとんどにらみつけるやうにした。

するとやがて相手は、却つてゝれくさそうにひよこんと頭をさげながら、

「やア、これは失禮」

といつて笑顔をみせた。彼はこの朝鮮からきて遠い田舎へ百姓しにいくといふ朝鮮人が、少しもにごりのない明瞭な日本語をつかふことに驚異を感じたばかりでなく、また或不安も感じたのである。

申重欽はむつと惱つたやうな顔をつゞけながら、宿屋でをしへられた賃銀を馬車屋の主人に拂つて、黙つていづしよに乗つた。

まもなく駟者が出てきて、ひとしきりなにやらわめき立てたのち、それぞれの馬の背なかに鞭をひとつづゝ音させてふると、  
三臺の荷馬車は、鈍重な車輪のひゞきをたてながら動きだした。

× × ×  
人家をすつかり抜けしてまふと、馬車はいつそ激しくゆれ、車輪のひゞきは一種の哀韻をともなつた。

田舎から市街へ賣りにいくのだらう、天秤棒の兩端に野菜かごをかけた百姓たちが、その重さと歩調を、たわくゝと器用に肩で調節しながら、幾人もとほつていく。

やがてそれらにも出遇はなくなると、ひろびろとした野原に出た。でこぼこ道の兩わきには雜草が存分に生ひしげり、あた



り一帯は大豆畑で、枯れるにはまだまのある青葉のほひが、朝の大氣に飽和してゐる。

いつのまにか太陽は昇つてゐて、はつきりとうす桃いろに際どつた白雲が、動くともなく浮んで、澄んだ青空のあちこちに悠々たむろしてゐる。

ふり向いて來しかたをながめると、もう遙かに遠くなつた長春市街の上には、朝餉のけむりが重々しくたち昇り、そのなかに水道タンクがちひさく浮いてみえた。ゆく方は、視界のかぎり小山ひとつみえなくて、はてしなく廣漠としてゐるのだ！

長いあひだ來しかた、ゆく方を、ぼんやりながめてゐた申重欽は、ふとわれにかへつた。

「いつたい俺は、どこへゆくのだ！」

いかに生活がゆきつまたとはいへ、とんでもないところへ、今自分がゆきつゝあるやうな氣がする、申重欽はもう一度、遠くなつた長春市街をふりかつて、名狀しがたい孤獨感と、寂寥に襲はれた。

悪魔の眼や狼の牙をも怯えずに、冷靜にみつめて暮らすだけの膽魄と無神経さをもたなければ、所詮生きてはゆけないほどの時勢に當面してゐながら、これつくりの遊離をかなしんで悲痛咏嘆するほどの感傷はもちたくないのだと、申重欽はにじみ出てくる涙をしひておさへて、力んでみるけれども、時勢にまけて寄りつくべきすべてのものから絶縁されあらぬ方向へ突

きおとされていく自分の姿は、やはり惨めであり、とりわけゆくさきの未知さから生ずる、かすかすの厭はしい豫感には堪へられなくて、胸が苦しくなるのであつた。

× ×

また演習がはじまつたのであらう、長春市街方面から、げらげらげら、ばん、ばんと機關銃や小銃の音がかすかにひびいてきはじめた。すると今まで申重欽の憎つたやうな横顔をときどき盗みみるだけで黙つてゐた同行の日本人が、

「また演習がはじまりましたな」

と、ひとり言のやうに口を切つた。

彼は出發してからいく時間のあひだ、同行の鮮人かなにか懼つてふくれ面で沈黙をまもつてゐるので、適當な話の糸目が見つからず、氣まづい思ひをつゞけてゐた。それに、途中の危険をおもんばかつて、日本人である自分の身をカムフラージュするため、わざわざ朝鮮人の同行者をもとめはしたものの、その同行者がたゞの百姓ではなくて、少しは教養もあるらしいのや、なぜか自分に對して懼つてゐるらしいことに或る危懼を感じないではゐられなかつた。

こんなことなら支那人の同行者か、でなかつたら自分一人の方が却つてよくはなかつたかと、申重欽の素性を知らないだけに、ひとく後悔さへした。だが、かうして出かけてしまつたかには、なんとかして同行者の歡心を買つておかねはならぬ。

彼はできるだけいゝ機嫌をみせながら言葉をつとけた。

「へんびなところで百姓をしてゐるので、ちつともわからなかつたですが、長春へ出てみてびっくりしましたよ。日支問題がだいぶんこんがらがつてきましたな。いづれ近いうちに戦争がおつばじまりさうですて」

しかし申重欽はそつぽを向いたまゝ、「ああ」と言つた。申重欽は日支問題などより、彼の朝鮮着物にこだはつてゐる。眼ざわりになるので、申重欽は、その不平をつひに口にして言つた。

「平壤なんかでは、朝鮮人のためにたくさん支那人が殺されたといつてゐますが、あんたはなんだつて朝鮮着物なんか着るんですか。時節がら、こんなところでは却つて危険ぢやありませんか」

「それがね、支那服にしようかとも思つたけれど、あんたが朝鮮着物を着てゐるだらうと思つたので――」

言ひながらしかし、彼は今までの或る不安が消えていくのを感じた。この人はやはり温つてはゐるけれども、肚にはなにももつてゐないことをその言葉から讀みとつて、はじめてほつとするのである。

彼は自分の不安は杞憂であつたことを知ると安心して、けれどもいひにくさうに言葉をかへていひだした。

「實はねえ、あんたも知つてゐるでせうけれど田舎へゆけばゆ

くほど不逞鮮人がたくさん集かつてゐましてね。田舎の支那人なんかは日支の關係など知りもしないし、またなんかのつていきいたにしても、戦争といふものは兵隊と兵隊とが喧嘩するのであつて、自分たちにはなんらかゝはりもないことだと思つてから、案外危険は少ないんです。その點彼らは實に善良ですよ。もつとも匪賊は別ですがね。だからわしたちにとつて物騒なのは、支那人よりも不逞鮮人です。つい最近もわしたちの農場の人が一人、長春にいつて歸りにやられましたか――」

しかし申重欽には、そんなことは初耳だつた。

大正の中期ごろまでは朝鮮のあつちこちに民衆が蜂起して夜なかなど山の上に火を燃やして賊の聲をあげ、警官の手をやいた。その後もしばらくのあひだは、いはゆる不逞團なるものが横行して、近所の誰れかれは捕へられて私刑になつたとか、ならないとか、申重欽は幼いころきいたことを臆けに記憶してゐる。そして今もなほ上海とか、奉天とか、京城とか、大連とか、の大都市でときたま一人二人捕へるといふことは、新聞など讀んで知つてゐるけれども、いはば知つてゐるのけその程度であつて、田舎へゆけばゆくほどたくさん集かつてゐるなど、申重欽は夢にさへ想像したこともない。

申重欽ははじめてきいて、滿洲の田舎で彼らほどのやうな愚にもつかないことをたくらんでゐるのか、また日本人がところもあらうに彼らのために生命を怯やかされたながら、そのやうな



ところで農場など經營してゐるのか、それへの興味もわかないではないけれども、そんなことよりもさき立つて申重欽がハタと思ひつくのは、こゝでもまたその種の不穩の朝鮮人と、日本人とのあひだに立つ自分の、甚だ宙ぶらりんな立場を痛感しなければならなかつた。

彼はなんともいはず、極くなつてうな垂れた。

朝鮮人だといふ、民族的には死んでも拭ひ得べくもない血の烙印をつけてゐながら、國民としては思想的にも性格的にも全き日本人に變形した申重欽は、しかしこの兩者のあひだに立つては、どちらを向いても赤面せずにはゐられないのだ。

「わしが朝鮮着物を着てきたことは——」  
と、やゝしばらく、申重欽の顔いろをうかがつてから彼は言つた。

「それでわかるでせう？農場までゆきつけば、われわれの手で充分警備してゐるので安全ですが、途中が危険です。それでねえ、あなたにお願ひするんですが、途中もし彼らに出遇つたらひとつなんとかしてうまく誤魔化して貰へませんか。命かけてお願ひします」

彼はさういふとびよこんと、頭をさげた。そして朝鮮人の百姓をまねて腰にさげた布製のきんちやくをさぐり、そのなかからいくらかの紙幣をとりだして、申重欽の膝のうへにおきながら、

「もし出遇つたときは、わしはものをいはずに手まねばかりするからあなたが自分の可哀そうな啞の兄さんだとか、叔父さんだとか、さういつてうまく誤魔化してください」

申重欽は決心して、うむ、と、うなづいたが、膝のうへの紙幣に氣がつくと驚いて、

「なんですか、この金は」

「ほんのわづかですがね、命を庇つて貰ふのですから——」  
申重欽はむしろ氣にさわつた。潔癖な彼はひどい侮辱を感じた。で、彼は怒つて紙幣を突きかへしながら嘔鳴つた。

「お金などいりません。命を庇つてやるから、それで、誰れがお金がほしいといひましたか。人間を東にして考へちやいけませんよ」

と、彼をにらみつけるやうにして叫んだ。

彼は怒られて黙りこんでしまひ、申重欽はお金のことや、民族のことや、不逞鮮人のことなどについて、ひどく拘泥はりつづけた。

太陽が中天をすつとすぎるまで、二人は黙々として荷馬車にゆられてゐた。

× ×

ちよつとした丘にさしかゝり、駭者たちがめいめい大きな聲でわめきたてながら、馬の脊なかにむちを厳しくふり鳴らすと馬どもは全身を汗で濡らして、くるしい息を吐き吐きけんめい

にひつばつて登つた。その丘を越えて少し行つたところに、いく十本かの楊柳の林がある。ちようどその丘を登りきつてこんどは樂々と降りはじめたときであつた。

「あんたは、まさか？」

と、傍の同行者が、申重欽の膝を不意にこづきながら言つた。

うつむいて考へごとをつとけてゐた申重欽は、びつくりして顔をあげると、彼の顔はなにごとかに緊張してをり、猜疑ぶかい眼で、ちつと申重欽の顔色をうかどつてゐる。申重欽はわけがわからず、

「え？僕がまさか、どうしたといふんですか？」

すると相手は、前方の林の方をにらみながら、疑ひをもたない調子で、

「はれ、あれだ！あいつらは確かに不逞鮮人だ！」

と、叫んだ。申重欽はドキンとして前方をみた。樹々の幹にかくれてゐるたのであらう、白や、黒や、灰色の長衫を着た青年たちが四五人、林のなかの道路のまんなかに、いつのまにか立ちはだかつてゐた。なほ一人二人わきからでゝくる。全部で八人になつた。

申重欽は、支那人ではないかと疑つてみたが、長衫の青年たちは明らかに朝鮮語で、口になにか嘯鳴りたてながら荷馬車のくるのをちつと待つてゐる。さすがに胸がさわぎはじめたけれど、

ども、しひて聲を落ちつけて言つた。

「大じようぶ。こんなときに顔色をかへたり、まごついたりしてはいけませんよ。黙つてうつむいてさへるれば、わかりつこないんだ」

あれが眞實、さうであるなら、まるで追ひはぎかなんかみたいなやりかたではないか。それならそれで、案外やすやすと誤魔化し得る。不逞鮮人といふのは、支那服を着た朝鮮人の追ひはぎだつたのかと、申重欽はポケットにある金額を計算しながら、落ちついてゐることができた。

だが、傍の同行者は安心しなかつたばかりでなく、彼はますます緊張しながら、聲をふるはせて叫んだ。

「だめだ。ありや普通のやりかたではない。あんなに大勢道に立ちはだかつて待つてゐる筈がないんだ。あいつらは、わしのくすることをちやんとわかつとるに違ひない」

それをきいて、申重欽はガクンと愕いて、眼をみはつた。突嗟に、出頭まへの朝鮮宿屋が浮かぶ。いく目のあひだ、ひとの部屋に寝起きしながら、用事でもないかぎりは減多にものを言はず、しじふ敵意をこめた眼つきで、申重欽をじろじろみてるた若い男のことが、まつさきに思ひだされた。彼は日本語を流暢に話せるにもかゝはらず、申重欽が日本語で話しかけても、かならず皮肉に言葉じりをひつばつて朝鮮語で返事した。その宿屋のおやぢの顔が浮び、彼の言葉がかへつてくる。——あんな

たは朝鮮人のくせに、大いに日本人ぶつとるから、日本人の同行はちようどよい都合ぢやらうて——。彼らは申重欽が田舎へゆくことを知つても、不逞鮮人のことについては、一言もふれなかつた。彼らは不逞鮮人の手びきか、でなかつたら、自身不逞鮮人なのかも知れぬ。

申重欽はしかしそれよりも、同行者が最初不意に言つた言葉が氣になつたので、今あわてゝきゝかへした。

「それで僕が、僕がまさか、どうしたといふんですか？」

すると相手はいきなり、申重欽の咽元をつかんで、

「きさま、くさいぞ！」

そしていつのまにかかくしもつてゐた短銃を突きつけて嘔鳴つた。

「きさまもやつぱり、あいつらとぐるだ！。出發まへからちやんと、連絡をつけてるんだ！」

彼の唇は裏切られた憤りのために、長い髭ごとびくびくふるへ、眼は殺氣だつてゐる。

申重欽は愕きのために、顔色がまつ赤になり、まつ蒼になつた。ぐらぐらと眼まひがして、視界が黄いろくなり、紫になつた。

しかし申重欽はつぎの瞬間、激しい勢ひで彼の手をふり解き短銃をもつた彼の手くびを、両手でしかと掴んで叫んだ。

「なんだつて、僕を僕を疑ふんです？。あんたはなぜ僕を信用

しないんです？」

そして申重欽は、もう不逞鮮人のことや、身の危険をわすれて、ただ、こゝでもどうにもならない民族的な間隙をこつびどく思ひしらされて、絶望のために眼をつぶつた。

けれども彼はこの瞬間も、いはゆる不逞鮮人と、日本人とのあひだに立つて、その種の鮮人と敵對しながら、しかも一方からは彼らと同一視される自分の心と身の構へをふりかへらなければならなかつた。

ずつと昔、申重欽がやつとも心ついたころ、彼の父親はときどき、末つ子の彼を膝のうへに乗せて、かう言ひ論じた。

「もうわれわれはみんな日本人ぢや。日本人のわるくちを言ふもんどぢやない。朝鮮は日本の國といつしよになつたから、われわれも日本人になつたのぢや。するともう大人になりかけた申重欽の兄が「お父さんは嘘をいふんだよ。ねえ重欽、いつしよになつたのぢやなくて、日本の國はつよい國だから、一所にしつちまつたんだよ。今に、もとのとほりにしなければならんのだよ」父親の顔は怖いものにせりあがつた「馬鹿め、誰れからそんなことを教はるのか！あつちへゆけ！」

そして、時勢ぢや、時勢ぢや、と、ひとり言を呟き、幼い申重欽には「おまへは生れるまへからもう、日本の國の天子さまの御稜威の下にできた子ぢや。立派な日本人にならねばならんのだよ。これから言葉も習ふがい！」父親はひまさへあれば、

日本語を教へてくれた。大きくなつて學校へゆきはじめてからは、祝祭日などに日本人の校長先生が奉讀する教育勅語を、誰れよりも申重欽は嚴肅な顔でできき、修身や、日本の歴史を熱心に習つた。そのやうに、彼は日本國民だと自負しながら成長した。

もつとも申重欽が、青年になつて社會へ出たとき、民族的な溝につきあたつた。——そしてうしろをふりかへつてみるといつのまにかうしろにも溝ができてゐる。それは三千年の韓國の傳統と、亡國的な、しらじらしい溝であつた。申重欽はこの溝をも越えてもどることはできないまでに性格が變つてしまつてゐたし、また越えようとも思はなかつた。彼はこの二つの溝と溝とのあひだで、孤獨と貧乏と猜疑の眼光のなかに埋まつて生きねばならないことを悟つたとき、彼の妙ちきりんな立場は、半ば宿命となつた。

申重欽はしかし、これまでたびたび民族的に尋常でない立場にのぞむときは、しひて超然とした氣もちで事にあたり、ぶつつかつたひびきによつて、そのたんびに超然としてはゐられない、己れの立場をこつびどく思ひしらされてきてゐる。彼はぬけ得べくもない半宿命的なその立場を、自分のものとして悟るやうになつてをり、しかもその立場には落ちつけなくて、くるしみ、且つ喘いできたのであつた。

けれども今は、この兩者のあひだに立つて、たゞくるしんだ

り喘いだりするばかりでは濟まされなくなつてゐる。せめてこの一瞬なりとも、自分の宙ぶらりんな立場を、はつきりと地につけねばならないのだ！

申重欽は彼の手くびを掴んだまゝ、激しくゆすぶりながらくりかへして叫んだ。

「なんだつて僕を疑ふんです？」

が、すぐまた言葉をかへて言つた。

「ふーむ、疑ふのも無理もない。だがこれは僕に貸せ。そしてぢつとしてゐろ！」

申重欽はだんだんわけのわからない憤怒がこみあがつてきて全身の力で同行者を組みふせると、やつと彼のもつてゐる短銃をもぎとつた。そして必死に抵抗する彼を抑へつけながら、

「ちつとしてゐろ、でないよ、きさまから先にうつぞ！」と、呷鳴つた。

もう前方の八人の男たちの顔かたちが、明らかにみわけられるぐらゐに、馬車は近づいてゐる。

申重欽はにじみでる汗を拳で横なでに拭つて、短銃をしかと把つて構へ、近寄りつゝある八人の男たちをにらんだ。

# 蘇へる花束

長谷川 濬

狗刺子はいつもより早く目が覺めた。

室内には未だ朝の光は入つて來ないが、朝やけの金色の雲が色々な形で浮いてゐるのが硝子越しに見えた。薄暗い土間に薄明が漂ふて一切のものが輝やかしい希望の光を持つやうに靜に呼吸してゐた。狗刺子はすが／＼しい朝の空氣の中に一日楽しい遊戯等を少年らしい空想のまに／＼暇に盡いて温い寢床にもう一回頭を埋めた。

今日は父さんが奥地の金鑛へ行く日だ。

不圖思ひ出した狗刺子はむつくり起き上つて土間に下りた。

父と母は隣室の居間で朝餉を取つてゐた。

大きな碗で粟粥をすすつてゐる父の顔色はいつもより若々しく、そして元氣に溢れてゐた。白い湯氣が赤黒い顔を覆ふて深い眼に溶け込んで行くやうに見えた。

「父さん、金鑛へ行くの？」

「あ！行くよ、お金をうんと儲けて來るんだ」

母もいそ／＼と熱い湯を父にすすめ乍ら付け加へた。

「狗刺子！早く御飯をお食べ、そしてお父さんを添らなくちや……」

狗刺子は顔も洗はず、食卓についた。

「いゝ天氣だ、今日は河蒸氣が上るはずだな、多分吉拉林行だらう……」

父は大きく身體をのげして起ち上つた。

國境の朝である。

太陽はもう高く上つた。桓のやうに幹を並べてゐる白樺の林に夏の陽はさん／＼と照り、丈高く伸びた夏草の間には黒百合やその他の野生の花が點々と綴られて美はしい花園を作つてゐる。赭土を露出した崖の頂には緑色のテール掛をかけたやうに青草が密生し、鮮やかなコバルト色の蒼穹にくつきりした線を畫き、時々千切れ雲が浮いたり消えたりした。かうした繁茂した自然の中をアルゲン河は悠々と流れてゐる。其は沈黙した動きであり、靜かな流である。夜も晝も岸を洗ひ、砂土を流し小さい渦を作つて動く水は夏の陽を一杯に受けて滿々と流れてゐる。

さゝやかな茂みと白樺川柳の疎林を持つた中洲になべ鶴のがひが下りて長い脚を持てあますやうに動かし乍ら時々嘴を淺瀬に突込んでゐる。

この河をはさんで二つの國が對立してゐる。

川向ふはソヴェートで、こんもりした茂みの中に新しい兵舎が築造され赤旗が高くひらめいてゐる。シャツに長靴の兵士が馬を五、六頭追つて水邊に現はれたり、乗馬した武裝兵が、三人ばかり林の中を縫ふて警備道路を行く姿がはつきり滿洲側から見られた。

狗刺子は小高い丘の上に坐つて河を眺めてゐた。

むん／＼鼻を衝く草の匂と花の香氣の中に少年狗刺子は伸びて行く肉體を据ゑてじつと河を眺めてゐた。先刻父が出立する時に注意深い目付で河を指差して河には恐ろしい魔物が居る。兄さんは魔物に祟かれて死んで了つたのだ、河へ行つちやいけないと云つたその言葉を思ひ出し乍ら静かな流を見守つてゐた（河に恐ろしい魔物がゐる）と狗刺子も信じてゐる。いたましい兄の死顔がまざ／＼と眼前に現はれるのであつた。狗刺子は當時の光景をはつきり記憶してゐる。

國境には冷酷な嚴寒が天地を凍り付けてゐた。地も空も神々の息に震へ、河面は白銀の盤と不動の氷原となつて陸に續いてゐた。無人と荒涼が凍結した自然の中に氷雪の衣を着て彷徨してゐた。河岸の人々はせつせと薪を集め床下を暖めては長い夜を送り、短い日中には山や谷に野獸を求めた。夜になると狗刺子はよく狼の遠吠に耳を敏たてた。その度に飼犬の黒字が無氣味なうなり聲を立て、土間をぐる／＼巡り出す、細いランプの

灯がゆらく傍で父は銃の手入をして明方を待つてゐた。

からした冬の生活が河の結氷と共に始められてゐた。彼等の人生の中にも大河が季節の様相をもつて滔々と流れてゐるのだ。

或る一日。

久し振で太陽が白銀の世界へ光を投げてゐた。暖い日差しに子供は啼々として外へ飛び出した。狗刺子と兄の黒小子も、じゃれつく黒字を相手に廣々とした河面へ出掛けた。白ざらめのやうな荒い水の粉と雪がキラ／＼と輝いて風は切るやうに子供等の頬に吹きつけたが快い愛撫であつた。

「黒字！ 走らう、黒字早いぞ、走れ／＼」

黒小子は小躍りし乍ら重い帽子の老毛を波立たせて河面を走り出した。黒犬はうれし相に鼻をならし冗談めいた唸り聲を喉の奥で轉がせて黒小子の足もとにまとわり付き乍ら前脚を躍らせ、尾を振つてしなやかに飛び廻つた。眼敏い犬は何かを前方に発見した様子で、突然低くうなつて立止つたがその瞬間、一散に走り出した。

黒小子も犬につどいた。

「おい、黒字、何處へ行くんだ、向ふはロシヤだ、おい！」

黒小子は大聲で叫んで愛犬の跡を追つた。

狗刺子は本能的の危険を感じて、立止つた。

そして大聲を上げて黒小子を呼び止めた。



「兄さん、危い、兵隊が居るぞ、兄さん」

しかし黒小子は黒犬をつかまへやうとするらしくどん／＼走つてゐる。

向ひ岸にバラ／＼と人影が動いた。長い外套を着たロシア兵だ。狗刺子はびつくりして「兄さん！危い！」と叫んだ時だった。パンパンと銃聲が白煙と共に靜寂を破つた。狗刺子は本能的に腹這ひになつた。「あつ！」と叫んで前方を見ると黒小子はバツタリと倒れた。犬はもうロシアの岸に躍り上つてゐた。

狗刺子は狂氣の様に家へ駆け出した。「父さん！兄さんが！兄さんが！」とわめいて轉け走つた。その小さい身體はが／＼と母に抱きしめられた。防寒具も着けてない母親の、涙一滴も流さないで凝視する忿怒の眼光が、狗刺子の頭を貫いた。狗刺子は母の胸にしがみ付いて泣いた。廣漠たる大地の氷原に横る黒い一點は黒小子の亡き骸であつた。その黒點を母はじつと見つめてゐた。

死骸は間もなくゲベウによつてロシアへ運ばれた。黙々として狗刺子を伴つて家へ入つた母は冷え切つた頬を狗刺子の泣きじやくる顔に押し當て、始めて碎けるやうに泣いた。

「黒小子、どうしてお前は殺された、お前は悪魔につかれた。

黒小子、お前は運の悪い子だ」

その日、父は獵に出て不在だつた。その夜母と狗刺子は一夜床に入らず、黒小子の通夜をした。夜中に黒字が歸つて來たら

しく戸口でク／＼鳴き出した。「あの犬が悪魔につかれたのだ魔が乗り移つてゐる。家へ入れちやいけないよ」と眞暗な窓を見て母はつぶやいた。

犬は灯をしたつて窓に飛びついた。硝子を引掻く爪の音が無氣味に聞えた。時々犬の鼻先と前脚が窓硝子に現はれるのを狗刺子は悪魔のおとづれのやうに思はれておびえた。

翌日、父親が山小屋から下りて來て息子の死を聞いた。父は黙つて母と狗刺子の話を聞いて居たが大きく溜息をついた。

「あいつは不運な子だつた」

一言を残して外へ出た父はじやれつく黒字に銃口を向けた。「悪魔を追ひ拂つてやる」と叫び乍ら一發で犬を撃ち殺して了つた。翌日、分駐所の警官立會ひで河の中央線で死體引取が行はれた。

血のりが凍りついている兄の髪や頬はいたましい死の影で覆はれてゐた。冷たく凍つた手足を抱いた母は「黒小子、冷いだらうね、お湯に入れてやらう」と云ひ乍ら、大きな盥に湯を満たして身體を洗つてやつた。彈丸は心臟を見事に貫いてゐた。

棺へ納めた夜。

狗刺子は夜つびで母の悲しい嗚咽を聞いて獨りで泣いた。その聲が時々「黒字」の鳴聲になる。窓にあの鼻先が現はれたり尾で戸口の扉をたたく音が聞えたりして、狗刺子は寢床の隅に固くなつて震へてゐた。狼の聲が物凄く聞えて來た。凍土を一

日費して辛く掘り下げ貧しい土葬が終ると狗刺子は急に寂しくなつた。河を見るのが怖かつた。そして早く春が訪れて河が動くやうにと念じた。兄の死場所を見るのが恐ろしかつたのだ。

やがて春が訪れ氷が流れ始めた。夏がやつて来た。大地は再び緑の装に色どられた。そして氷がぬるむ夏の河が雲を浮べ、星を乗せて流れる。狗刺子は黒百合の花をつみ乍ら河岸へ下りて行つた。

ロシヤ側の岸では子供が水浴びをしてゐた。白い裸が飛沫を上げてはね廻つてゐるのが手に取るやうに見えた。陸には赤や青の筒物を着た女の子が走つてゐた。

長靴をはいた兵隊が銃を肩にして林の中から出たり入つたりしてゐた。濃緑色の軍帽を眞深に冠つた兵士が雙眼鏡で滿洲側を偵察してゐる。間もなく狗刺子は鈍いエンヂンの音を聞いた。河下の方から五色旗を風にはためかせた水色の汽船がゆつくり上つて来るのを見た。平たい船の兩舷には大きな輪が廻轉して美しいレース模様を織るやうに白い重吹を兩舷に掃き散らし、五彩の小さい霓を架け乍ら流に逆らつて船はゆつくりと進んで来た。

「船だ、母さん！船だよ！」

狗刺子は花束を高く掲げて河岸傳ひに走つた。欄干を巡らしたバンガローのやうな二階層の甲板は船客で一杯だ。人々は手

を振つたり、ハンカチを振つたりして陸の人々に挨拶をしてゐた。

狗刺子も花束を振り／＼船について歩いた。

船は時々汽笛を鳴らし乍ら靜に河の部落を過ぎて行つた。

狗刺子の一生の願はあの船に乗つて噂に聞く黒河の町へ行つて見たい事である。あの汽笛を聞き船首に碎ける白い波を見る毎に狗刺子の空想は大きく翼を擴げて河水に溶け込んで行く。ゴットンゴットンとエンヂンの音と共に火の粉を吹いて上つて来る夜間航行の船が怪物のやうに通る夜、狗刺子は母の懷に抱かれて、町の話や、海の話聞いた。

汽船が大きな島の蔭にかくれてひよろ長い煙筒丈が見えてゐたが其れも間もなく重なり合つた山の蔭になつて、煙が細く立ち昇つてゐた。昂奮から覺めた狗刺子は河岸にたたずんで黒河の町や父のよく話す金山鎮の町を空想した。この流が黒河へ行くのだ。筏に乗つて黒河へ行つた大人の話を聞いた事もある。早く大人になつて船に乗りたいと狗刺子は流を見て色々な景色を想像した。

ロシヤの岸から子供のはしやぐ濤が水を越えて聞えて来た。

おり／＼熱い眞晝の河岸には虹の群が羽音をピン／＼鳴らして狗刺子の周圍に飛び廻つてゐた。

水浴びしやうか。狗刺子は浴物を脱がうとしたが父の言葉を思ひ出して中止した。ロシヤの子供達の濤がほがらかに狗刺子



の耳をくすぐる。不圖、狗刺子は廢屋の下に小舟が一隻つな  
がれてゐる事を思ひ出した。その舟は久しい間、水あかを入れた  
ままつなかれてゐたのだ。狗刺子は小舟のもとに坐つて汽船や  
航行の夢を獨りで樂しまうと企てた。あれに乗つて水夫の眞似  
をする丈なら大丈夫だらう、獨り言葉をしてそつと小舟に乗り  
込んだ。舟は小さい水夫を乗せて左右にゆれた。花をともし置  
いて先づ水を手で掬つては捨て始めた。

舟は古く可成りいたんで居た。狗刺子は水を掬ひ乍ら兄がゐ  
たらどんなに愉快だらうかと想像した。

小さい努力で水は大部分捨てられた。喜んでともへ行こうと  
足に力を入れた時、どうしたはずみか、古い綱が切れた。驚い  
て舳に駆け寄つた力で小舟はぐいと、大きくゆれて岸をはなれ  
た。早い流れである。水量を増した雨後の河水は忽ち小舟をぐ  
ん／＼流し始めた。見る／＼裡に舟は流の真中へまき込まれて  
行つた。

「お母さん、怖い、お母さん！」

狗刺子は舷にしがみついて叫んだ。恐ろしい悪魔におそはれ  
たのだ。舟はふつ／＼と底から湧き出る小さい渦にもてあそば  
れ乍らぐん／＼流され始めた。狗刺子の周囲は濁つた水に取り  
圍まれた。

狗刺子の目には曾つて見た事もない絶壁がせまつてゐた。鶴  
の白い翼がチラと映つた。静かな流は恐ろしい力をもつて狗刺

子を河下へ運んでゐる。

「お父さん、助けて、お父さん」

必死の叫聲も、もはや無駄であつた。

狗刺子は舷にしつかりしがみついてゐる裡に水が濁つて來た  
のに氣がついた。腐れかけた舟底の板のすき間から水はどし  
どし流れ込み膝まで水につかつた。

「お父さん、お母さん、兄さん」

狗刺子は次第に濡れて行く小さい身體を硬直させて河岸にあ  
らゆる生命の力を求めた。

さん／＼と降る日光の下にアルグンの流は冷酷な運命を少年  
の身に投げかけてゐた。白晝の静寂と平和な自然の中に幼い生命が  
もてあそばれてゐた。其は美はしい河、緑なす白樺の林を花も  
て飾られた風景の中に何人をも知らない運命の流の中に取り入  
れられた悲劇であつた。

「兄さん！」

舟はがつくりと解體し始めた、水壓と人間の重さで朽ち果て  
た木材が分裂したのだ。「兄さん！」その聲はもうどす黒い水に  
呑まれた。

小さい手があり丈の力で板の端にとりすがつて、生命の花の  
様に白く水中に見えた瞬間、舟はともを高く上げて流れ始めた。  
狗刺子は黒い世界から緑の山をかすかにのぞいた。彼の聲は只  
水底の悪魔を呼ぶ丈だ、そして無音の暗い巨大な口の中へ狗刺

子は吞まれて行つた。

赤い花東が一つ、無邪氣な子供の瞳と空想を乗せてアルグンの中洲に漂着した時、狗刺子は河岸の探金労働者のテントに横はつてゐた。手厚いそして熟練した看護によつて小さい胸は靜に呼吸し始めた。

漠としたうす暗い水の世界に色々な悪魔が飛び廻つてゐるのを狗刺子はぼんやりと眺めてゐた。赤い百合の花東が目の前にフワ／＼浮いたり沈んだりしてゐた。

耳上で色々な聲が遠方に聞えたり近づいたりした。身體丈が遠くへ飛んで魂が残つた。その魂は水の中で母の手を求めてゐた。身體が大きく圓を畫いて、廻るかと思ふと急に奈落へ下りた。光と闇が開閉するすき間から洩れて來たり、パツと明るい白日にさらされるやうな感じがした。

「おい、助かつたぞ、あぶねえ處だつた」

荒々しい男の聲にハツとして目を開けた時、涙の一杯たまつた母の腫が大きな神様の目のやうに狗刺子を見守つてゐた。

その周圍には色々な目が黒く生々と輝いて大きくゆれ動いてゐた。生命の彼だ。

「お母さん！」

狗刺子と母の聲が天と地に満ち溢れた。涙の流の中に幼い生命は母の手にしつかりと抱かれてゐたのだ。

夏の陽は晴々とアルグンの河に照り注いでゐた。平和な靜かな流れだ。

河沿の道に沿ふてコト／＼走る馬車の上に狗刺子は母と共に家へ急いでゐた。

狗刺子は馬車の上に兩足を投げ出して口笛を吹いたり、歌をうたつた。汗ばんだ小さい掌には色とり／＼の野花が無心に握られてゐた。

「母さん！あれ鶴が」

ゆつくりした流の上をすれ／＼に鶴が二羽なめらかに滑つてゐる。

母は無言のまま溢れる笑を堪へて小さい息子の肩を抱いてゐた。

花粉の白が周圍に充ちて、虹がブン／＼飛び廻る午下りであつた。

# 生地

北村謙次郎

習字の時間の次は體操の時間であつた。英一は視を洗ふのを忘れ、筆だけ洗つて硯の横におき、休みの時間を迎へた。

外は砂のやうな粉雪が降つてゐた。

「雪合戦をやるかもしれないな。」

と英一は思ひ、それを友にも語つた。

「うん。きつと。」

友も答へ、ズボンのポケットに両手を入れたまゝ、靴さきでぼつと地面の雪を蹴つた。泥のまぢつた雪の塊が英一の頬にとび、英一は相手を睨むと、素速く腰をかゞめて足もとの雪をすくひ、相手に投げた。雪の塊は相手に届く前に粉となつて四散し、逃げ腰になつた相手は赤い舌を出して見せながら

「やい。あいのこ。」

と嘯鳴つて直ぐ校舎の方へ駈け出して行つた。英一は濡れた両手を強くズボンでこすり、しばらくぼんやり赤煉瓦の校舎をみつめてゐるが、やがて一ト所に立つたまゝ駈けるやうに早い足

踏み始めた。彼の眼に、雪の降る空は殆ど黒い色に見えた。彼は足踏みを止め、不思議さうに雪の降るさまを眺めたが、すぐまた腰を屈めて一握りの雪をすくひ取ると、指さきに力をこめ崩れないやうな固い雪丸を作つて力一杯遠くへ投げた。雪丸は黒い虚空に弧を畫いて飛んだ。

體操の教師は、雪が現在降りつゝあるといふ理由で生徒たちを外へ出したがらなかつた。彼らは屋内體操場で、板敷の床に騒がしい足音を響かせながら、いつもと變りのない徒手體操や分列行進をやらされた。然し彼らは、最後の十分間まで、彼らの「夢」を捨てなかつた。おしまひの御褒美を待つたのだ。大時計の長針は休の時間まで十五分、十三分、十分、八分と進んで行つた。

「これから外へ。」

彼らが首を長くして待つたその號令は、たうとう教師の口から叫ばれずじまひに終つた。たゞいつもより五分ほど早めに、彼らの體操の一時間はあつけなく「分れ」となつた。

「ちよつと。」

彼らは露はに舌打ちをしながら、思ひ／＼に隊伍を離れて行つた。振返つても見ずに廊下へ出ようとする教師の背後近くまで忍びより、拳固を作つてにゆつと突き出してみせる奴もあつた。英一はふと、自分の背後に人のけはひを感じて振返つてみた。さつきの友が目隠しをしようといふ容子で、両手を攔げた

まゝ立つてゐた。英一は右手で強く相手を突き、脇腹をかゝへて大けさに痛がる相手を尻目に、一さんに廊下の方へ駆け出して行つた。

珍らしい寒さであつた。教室へ戻つてみると硯の墨汁は凍り筆の穂も固くなつて、試みに指さきでつまんでみると、しやり／＼といふ音が聞えて来さうであつた。彼は墨の先端で、硯の四隅にこびりついてゐる墨汁の氷を、靜かにかき集めた。墨汁の氷は、白いやうな黒いやうな妙な色合ひをしてゐた。

「やあ、こいつの硯、凍つてやがら」

いつの間にかまた彼の傍に寄つたさつき友は、頓驚な叫び聲をあげた。近所の者が四五人、その聲を聞くと忽ち彼らの周りに垣を作つた。英一は墨汁の氷屑を、細かく、細かく押しつぶした。

「窓ガラスも凍つてる」

一人が云ふと、今度はみんな窓べに集まり、硝子の上の奇妙な氷花を眺めた。一人英一の傍らに残つたさつき友は、ぐいと片腕を英一の肩に押しつけ

「恨みつこなし」

小聲で云つて窓ぎはの方へ立ち去つた。英一にはよく分つてゐた。なるほど彼も相手の脇腹に拳固を食はせるといふ、小さな腹癩せをやつてゐる。然しあいつは、たゞ大けさに痛がつてみせただけなのだ。そして學校の歸りには、また何とか云つて

人をからかふ奴なのだ。英一には常に、歸途が苦痛であつた。長つたらしい大山通り。北風に吹き送られながらロシア町から大廣場まで歩く。あいつとはなるべく一緒にならないやうに氣をつけてゐるのだが、嗅覺の鋭敏な獵犬のやうに、あいつは何處からともなく現はれて前に立ちほだかる。或る時は鼻をびこつかせながら、英一向つて

「しらつこ」

と云つた。そのとき英一は本氣に腹をたて、重たい鞆を肩から外すと、紐を持つてぶん／＼振りまはしながら相手に追つて行つた。翌日、彼は眞青な顔で教師にそのことを訴へた。教師はすぐ相手を教壇に呼び

「しらつこは何のことだ」

と尋ねた。相手は黙つてゐたが、促がされて澁々と

「英一君は鞆を持って振りまはしたんです」

逆に英一を訴へるやうな口調で答へた。

「それがしらつこか！」

教師は大聲に嗚りつけた。相手は閉口し、永いこと向ふから英一を避けるやうにしてゐた。そして今は久しぶりであいつの聲を聞いたのだ。

午後になつて雪は止み、強い風が出た。さら／＼した粉雪は風に煽られて空に飛び、そのために未だ空から新しい雪が降つてゐるやうに見えた。道路の或る箇所は、風にさらはれてつる

／＼の鋪道が顔を覗かせてゐるのに、堀きはなどは二尺も高い雪の山を築いてゐたりした。

子供たちは校内を出ると、マントや外套の頭巾をすつぽりと深くし、強い風に乗つて散り／＼に駈け出して行つた。

「仰山振りよる」

英一も頭巾をすつぽり冠つて校門を出るとみんななわきめもふらず駈け出して行く中に、たつた一人ゆつくり歩きながら、ふと傍の雪の山を眺めて獨りごとを云つた。その上彼は片足を擧げ、すぼりと眞白で軽く、美しい山の胸に突きさしてみさへした。孤獨であることに、彼はすつかり安心しきることができたのである。

英一の父は、勤勉で几帳面な獨逸人であつた。

「私はめつたに怒らない」

彼はよく英一に向つて云つた。

「その代り、おまへが不正直である時、私はひどく叱るだらう」

然し彼は、何かにつけて英一を叱つた。

「今日もお母さんは、私が會社から歸つたら、おまへについてかう云つた。全くやりきれない。おまへのいたづらは毎日ではないか」

かう前おきして、彼は一時間ぐらゐの長い説教をすることがしばしばあつた。彼の説教には、はつきりした特徴があつた。螺旋的論法とでも云ひたいやうなもので、それが終りに近

づくとき、英一は唾をのみこみながら、胸の中のタイム・ウォッチを何度か假定した終止點で押へてみるのだが、すると父親の議論は不思議にまた勢ひをもち返して、同じ圓周を二度も三度も低徊し出すのだ。

家へ歸りつゝいた英一は、すぐ妹の貞子と二人の勉強室になつてゐる玄關わきの三疊へ入り、ごろりと横になつて、ペエヂのくりぬきに小さな鈴が隠されてゐる菊版のアラビアン・ナイトを擲てみたり、貞子の描く繪の手助けをしてやつたりしてゐたが、やがて書棚の一隅に赤い懐中鏡が置かれたまゝになつてゐるのをみとめると、氣づかれないやうにそつと取つて懐に入れ、妹が發成しないのを承知の上で

「貞ちゃん。外へ出て遊ばない」

と云つたまゝ、一人部屋を出て行つた。病身な妹は九歳になるのにまだ學校へも行けず、青い顔をして一日部屋へ籠つたまゝ、人形遊びなどで日を送つてゐた。従つて英一は、虚弱な妹に友愛らしいものを何も感じなかつた。妹と一緒に遊ぶといふことが考へられなかつた。然し何と貞子が、兄のさうした無關心に耐へたことか。兄妹とはさうしたものだと思つた。最初から決めたまゝつたやうに、或ひはよその家の兄妹はもつと違つたものであると知つても、自分たちだけは特別なのだと一人きりでもしたかのやうに。彼女の大きな眼は、誰に向つても、従順な家畜のやうにたゞ憐みを乞ひ、あきらめを示すより以外の表情を示さな

かつた。そのくせ彼女は人から

「大きくなつたら何になる」

と問はれると、眼を輝かして答へた。

「王女様」

明けるから暮れるまで、夜の夢の中でまで、彼女の頭の中にはメルヘンが廻り燈籠のやうにくるく舞つてゐたのだ。彼女は食物に好き嫌ひを云はずに何でも食べ、もちろん着衣の選り好みをすることもなく、怒りを知らず、復讐を知らず、特に愛されたといふほどの愛の記憶を持たず、單純に王女になる望みを抱いて、ひそかな幼女期を過してゐた。英一はこの妹に「らふそく」といふあだ名をつけてゐた。瘦せて色が白く、何かあるとほろ／＼涙を流す貞子に。そして貞子は、さらにそこらにころがつてゐる一本の「らふそく」以外のものではあり得なかつたのだ。これに反して英一は野蠻人のやうに、何ことに對しても復讐を誓つた。そのやうな彼にも、たつた一人この世で愛する人があつた。父親は嫌悪以外のものでもなく、母親の愛はしつこ過ぎて彼には重荷であつた。彼の愛はお隣の若い「おばさん」に向けられてゐた。そのおばさんさへ時として彼の強情やひねこびれた性質に眉をひそめて「厭な子」と呟くことがあるのを、彼は知つてゐたらうか。ともあれ「おばさん」は、この界限で彼を「可哀さうに」と云つてくれる唯一の人であつた。彼女は都合よく英一をマスコットに仕立てゝくれてゐた。

妹の赤い懐中鏡を懐ろにして廊下へ出た英一は考へた。

「これをおばさんに上げよう」

彼はふと、鏡が見當らなくて泣きべそをかく妹の顔を思ひ浮べた。同時に、事件が母親から父親に傳はり、彼が嫌疑者として訊問される場面を。然しそれらは一尙彼にショックを與へぬばかりか、反つて妙な快感を感じさせた。

彼は雪の積つた庭に下り、すぐお隣の裏口へ廻つて、こんこんと軽く扉を叩いてみた。扉は直ぐ開き、冷たい空氣の中に、煮物の匂ひとゞもになつかしい「お隣り」の匂が微かに流れた。おばさんはエブロンで手を拭きながら先に上へ上り

「まあ、この寒いのに」

と呟くやうに、それから

「お上りなさいな。あとよく締めてね」

扉の方へ横顔を向けてみせて云つた。雪明りの中にかつきり白く浮んだ頬の上に、瞬と肩の、濡れたやうな黒さであつた。

おばさんは英一と一緒に茶の間へ入ると、両手で肩を押へて坐らせ、膝をすれ／＼に自分も坐つて、英一の顔へ顔を寄せた。彼女は睨むやうに眼と眉を怒らせて云ふのだ。

「英ちゃん。私たちがもうお別れよ」

英一の物問ひたげな眸に答へて

「あさつての朝の××××丸で、内地へ歸るの。知つてるでせう？ おちさんの體の工合が悪いこと。おちさんはもうお勤め



が出来なくなつたので、私たち内地へ歸つて、おぢさんの健康を取戻さなくちやいけないの」

「また来る？」

「いゝえ」

と若いおばさんは漸く顔を離して、眉を曇らせた。

「私たち、もうこつちへは來られさうもないわ。それには譯があるんだけど。でも、つまんないわね。そんなお話。それよりも」

おばさんは立ち上つて次の間へ行つたが、すぐ引返して來ると、手にした小さな紙片を見せながら云つた。

「これお母さんにかけて。お芝居の切符。私たち忙がしくて、とても行けさうもありませんからつて」

英一はきよとんした顔で、おばさんを見つめた。

このおばさんは内地へ行つてしまふ——内地へ。

英一も妹の貞子も大連の生れで、しかも彼らには父の國獨逸といふ名が別に存在し、それらは何れも實體は掴み難く、たゞ海の向ふの山や河といふほどの意味で、お伽噺の師土のやうな感銘が頭の片隅に影を落してあるに過ぎない。

彼は渡された二枚の赤い紙片に意味のない視線をおとし、それから不思議な魔土へ行く人としてのおばさんを改めて見直した。おばさんの顔には、さつきの憂愁の色がすっかり影をひそめ、代りに眼のさめるやうな歡喜の表情が浮んでゐた。

「とつてもいゝわよう。内地」

とおばさんは口を迂らせたが、ふと英一の顔に解せぬらしい色を讀みとると

「あゝ、可哀さうに。あなたには解らない」

おばさんは芝居の切符を持つ英一の手を、柔い掌で包んで

「ぢや、これお母さんにかけてね。英ちゃん。またあとで遊びにいらつしやい」

おばさんが立ち上るのをしほに英一も立つて、また臺所から裏口を通り、雪道を吾が家へ引き返した。

英一の母はお隣りの家が内地へ引き上げることをちやんと知つてゐたとみえ、英一が大報告のつもりで話すのに別に驚いた顔もせず、芝居の切符を受けとつても「さう」と答へただけで、張り合ひないきもちを掴きながら、英一は夕を迎へた。彼はすつかり、晝間妹の書棚から掠めて來た、懐中鏡のことを忘れてゐた。忘れたまゝで風呂に入り、出て見ると脱ぎ棄てた衣類の傍に父親が恐ろしい顔をして立つてゐた。猿又一つの英一は、物おぢした顔を脱ぎ棄てられた自分の衣類と、その傍に在る赤い鏡に眼をおとした。

「おまへ、これを何處から持つて來た」

父親の詰問に、咄嗟に嘘を思ひついて英一は答へた。

「友だちに貰つた」

「どこの友達だ」

「學校の」

「學校は分つてゐるが、何處に住んでるかと問ふのだ。え、」

「あつち」

英一は指さしをしたが、父親は頭を振つた。

「あつちや分らない。——おまへ嘘を吐いてるのではあるまいね。いつも云ふとほり、嘘をつくと父さんは許さんよ」

英一は飽くまで強情を張らうとした。「いつはり」の武器は敵を倒す前に、反つて彼をかんぢがらめにしようとしてゐることに氣つきながら、絶對絶命の立場——夢魔に似た恐ろしい瞬間の中に、彼は茫然としてゐるのだつた。

「着物を着なさい」

最後に父親が云つた。英一は少しでも破局を延ばさうとするやうに出来るだけゆっくり着物を着終ると、おつ／＼した眼で父親を見上げた。

「すぐ外出の仕度をなさい。そしてその友達の家といふのへ、行つてみよう。おまへはこの鏡を友だちに貰つたといふが、私にはどうも腑におかないのだ。さあ早く仕度をなさい」

仕方がなかつた。英一は外套を着て、何處ともしれぬ友の家へ父親を案内しなければならぬ羽目に陥つたのだ。耳朶の刺されるやうな、そして往來の雪はすでに寒氣のため急速に氷化しようとする戸外に、彼らは連れだつて出て行つた。誰も彼らを引きとめるものはない。人の世の畏である。何といふ心細い瞬

間が、幼い時から人に襲ひかゝることだらう。これを切り抜けるために人がどんな誓約を設け、そのあけくどんな嘘の花が咲くか。雪明りの道は、英一に複雑な感傷を強ひた。彼は漠然と現在から將來につゞく不幸を豫感した。

けれども、彼の小さな兩脚は、雪が凍りついてつるつる滑る地を踏み、彼の軽い體軀を何か盲目的な力で押し進めた。そしておしまひに、たうとう彼は或る一本の電柱にしがみつき、執拗に兩脚を地にぶんぼり、これ以上動くのは厭だといふ意志をはつきりと示しながら、眼を遠い市街の彼方に向けた。夜空の中に點々と家々の燈火が光り、その彼方に、灣口の燈明臺が彼の視線に答へることくうるんで見えた。

「おい、歩かないか」

父親は英一の肩に大きな掌を載せ、強く揺ぶつた。冷たい英一の頬に、涙かあとを引いて流れた。

「船へ乗つてかなくちや。柳樹電に住んでるんだ」

彼は最後の大嘘を、せいいつばいの力で叫んだ。叫び終ると片腕を眼に當て、こみ上げる、歎歎の聲をじつと耐へようとした。肩を震はせる息子の姿を見下しながら、父親は暫時、傍につつ立つてゐた。彼は息子を叱ることや、虚言の増むべきことを忘れたやうに見えた。事實彼はそれらのことゝは別なことを——つかぬことを考へこんでゐた。

「お隣の若夫婦は日本へ引上げる。そして吾々はこゝに住んで



みる——何といふ奇妙なことだ」

彼は曾つて住んだことのある精濱の町の風景を、ちらと思ひ浮べた。その幻像がすぐ消えると、次にはまた別な意想が、タイトルのやうに彼の頭に浮び出た。

「お隣りからよこした招待券で、妻は果して芝居を見に行くだらうか」

磯口の燈明臺は、次第に彼の瞳にもうるんで見とこ。

# 土 龍

鈴木啓佐吉

女房が歌馬河の泥砂のなかゝら、腐つた河豚の腹みたいになら、口ドロと白く黒くふくれあがり、まるでドロ泥からひきあげた

古い出来事のやうに思はれてならないが、よく数へてみるとまだヤツト二年しか経つてゐない。その二年前に死んだ女房のことを十年も前にあつた出来事のやうに考へられるのは、やつぱりあの畜生と俺と云ふ人間の間に、とてもとても仲よく暮してゆける人間同志でなかつた事を語るものがあるのではあるまいか。俺は化物よりひどいお面相のあの時の死顔を見た氣持と、二年後の現在の氣持に少しも變つたところがない。

あの畜生がこの世の中から、イヤこの俺の傍から消えて無くなつた事について俺は天に向つてお禮を云ひたい位である。

河で死んだと云つても水に墜ちたのではなく、自分より進んで飛込んだ女である。俺にはさうとしかうけとれんのだ。その當時は、いや俺達か一つの家に住むやうになつたその日から、

このろくでなしのくそ女は早く死んで了へばいいのだ！と毎日のやうに考へ續けてゐたものである。この畜生の生きてゐるうちには、俺の延び延びした暮しなどでも出来るものではないと思はれたし、俺もなれば諦めてゐたのであつた。どこの世界に女房からコキ使はれ、悪態を浴びせられて、おまけに得體の知れぬ借金を毎月毎月拂はねばならぬ亭主があらうか。イヤサ、何處の世界に自分に對し自分が女房の代理をつとめる野郎があるだらうか。俺は女房の死ぬる事ばかりを考へてゐたと云つて決して無理ではなかつた筈だ。

當時俺は煉瓦製りであつた。

眞夏の一番陽の永い日であつても、朝は深い霞のなかから、夜は蚊の群が俺の身體の隅隅を取り巻くまで、せいせい五百枚の土を木型に詰められなかつた。十枚壹錢の工賃である。丸太ン拵みたいになつて五體が疲れはてても今日は五十錢働けたかと思ふと、體の疲れなどは少しも苦にならず、むしろ明日こそは六十錢ガタ働いて見せるぞ！と何か知ら底の方からムクムクと力が湧き出てくるのであるが、家に歸つてみると、家と云つても俺の家は普通の家ではない、街と部落の境界になる河の、その河にある木橋の下に人間がもぐり込めさうな土崩れを發見して俺は俺の家ときめてゐたのであつた。その土崩れの家に歸つてみると、また何處かで手に入れてきたのであらう阿片に喰ひ酔つた女房の畜生が石のやうに硬くさつてけつかるのである。

製瓦所からの歸り路に考へて來た明日の六十錢は、この畜生の姿のためたちまちひつくり返り、この乞食め出ていきやがれ！と傍にある石ころや砂をかき集めてたゞきつけ、蹴飛ばしてもみるのだが、そんな事位では一向利き目もなく、首根ツこをぶち刺つたところで利目のない死人同様に眠りこけてゐる女であつた。

腹を立てたあととは二日以上も食へなかつたやうに空腹を覺え俺はキセルを咬へるとものを食べに橋の向ふ側まで出て行かねばならなかつた。

街の廣場のバス停留所の陽當りのいゝ處でたくさんの奴等と仕事を待つてゐた俺に、お前も来るんだ！と嘯鳴られながら從いてゆくと、まだ一度も俺が足を踏み入れたことのない街外れの部落に仕事があつたのだ。ごたごたした家並をとり崩して新しい道路を作るのが俺達の仕事であつた。道路は足の人れ場もない位に混雜してゐたが、取り除かれた部分はずつと向ふの果てまで續いてゐるのである。俺は毎日々々この大きな仕事場に通つた。遠い街から遠い部落まで毎朝毎晩通ふのはどうも大變だし、何處かこの身體一つ位を休ませるだけの場所位はありさうなものだと考へ、或日仕事が終わると、街へは歸らずなるべく人目のつかない人家のうしろか、堤のくぼみ等を物色して歩いたが、俺の思ふどほりの場所などは更に無く、何處かありさうなものだと尙も探してゐる時、いま俺の入つてゐる家を見つ

けたのである。イヤ正直に云へば死んだ女房が入つてゐた處を俺が発見してそのまゝそこが俺達の家になつた譯である。

その道路工事は一日二十七錢しか貰へなかつたが、仕事が終れば現金でくれたし、仕事の割合に安い賃金だとは思つたが、現金であつたから誰も不平を云はなかつた。誰れもかれも馬のやうに働いたのである。俺のふところにはいつのまにか三圓いくらかの金が貯つてゐた。その三圓いくらかの金を正直に、女房の家を探し當てた晩女房にそつくりそのまゝ渡したものである。俺としては今後の資本金であり、飯代であり、女房への納でもあつたのだ。その時ばかりは俺は無闇に嬉しくてならなかつた。女房が大變おとなしく女房になつてくれた所爲もあつたが、ともかく家と名のつく處に住ひ、女房と云ふ女まで傍にゐてくれたので俺は一生懸命働く考へになつたのだ。

空がまだ白み始めなかつたが、女房を寢せたまゝ俺は仕事場に出かけた。誰も來てゐない現場に來てキセルを吸ふと、まるで世の中が變つて了つたやうに何を見ても聞いても妙に嬉しく、今日一日中のつらい上運びなどを考へてもラクなものであつた。だが夕方近くになつて俺はやたらに早く歸りたくなつてゐる自身を抑へかれた。早く暗くなり、賃金を渡してくれ、ばい、とそればかりを考へた。同じ重量の土ではあるが、だんだん重くなつて賃金を渡される頃は息もろくにつけないまでにつかれてゐた俺であつた。

俺は貰つた賃金のうちから女房のために煙草と肉切れを買つて歸つた。かうまで心を配つた俺の親切に振り向きもせず、よけいなものを買つて來やがる！なんだつて現金で持つて來ないのだ！こんな煙草は吸はんから現金と取換へて來い！と、せまい土間に身體を一つばい廣げ、青い顔を今夜は妙にヒツ、ラして俺を嘔鳴るのである。昨夜の女房とは別人であつた。俺は云はれたまゝ、投げ返された煙草を拾ひ、夜のもも食へずに仕事場の煙草屋まで出かけ金に代へて貰つたが、女房の無愛想が怖しくなつてどうにも足がその方に進まなかつた事を覺えてゐる。

寝たまゝの女房から半分程の油炸果を渡され夕食にしたが俺の腹はともそんなものではをさまらず、おそろ／＼もう少し食はしてくれろと言つたが、大の男のお前が一日働いて、十七錢とは何事だ、それで夕食を食はしてくれなど、よくも云はれたもんだ、明日から土運びは止めにして瓦裂りになつたらいいだらう、瓦裂りならいまの倍は働けるぞ！と云ふ意味の事を云ふのである。いま／＼の女房の無愛想や不貞腐れな言葉はきれいに忘れ、お前がそんなに働き口を知つてゐるのなら俺は明日からでもその瓦裂りでもなんでもやるから、サアその働き口はどこにあるのだ、と勢込むで女房に聞くと、この木橋から眞東にあたる處はみんな製瓦所である、明日からそこへ行つて働いて來いと云ふ譯から、俺は女房と一緒に二日めに仕

事を代へ、煉瓦製りになつたのである。

その晩からどうもこの女は口やかましくてうるさく、そしてこの俺を食かなんぞのやうに見てゐるのだと俺は思ひ始めた。また俺の女房はキツト何かの病氣持ちだなと解つたのもその時であつた。

製瓦所は人手が足らなくて、人手なら女の子の手でも欲しがつてゐた。最も四月中旬から九月中旬までしか仕事のやれない製瓦所だけに、鍛土、型込め、甕焚き、運搬と仕事が一度に生れ一度に終るやうな繁忙さで、夜も晝もなく、人手のある限り力の續く限り、製つて焼いて運ぶのである。加へて俺が前に行つてゐた道路工事が何處にもかしこにもあつて、少し位賃金は高くとも、仕事のきれない仕事をやりたがつてゐる奴等は、なか／＼製瓦所まで來て働く氣にはなれなかつたのだらう。

俺は最初三日ばかり鍛土をさせられた。土を手がけてゐた俺には赤土に水をぶつかけては土の山を廻返し、新しい土を掘つては水をぶちかけ翌日の型込めまで、餅みたいになべ／＼した上にして置けばいいのである。然し二千枚分の鍛土は、俺であるからこそ出來たものゝ外の奴等には出來ない力業だと自分ながら思つた。

云ひ忘れたが俺の働く賃金は毎日女房の手に厳しく握られるのはいゝとしても、その金で阿片を買ひ馬鹿みたいに眠りこけてゐるさまは、とてもとても我慢の出來ない事である。俺は息

の根の止まる位、たたいてたたいてたたき倒したが、阿片を喰ひ酔つた畜生は生きてゐるものをたたいてゐるものやら、死んだものをぶつてゐるものやら、かへつて俺の方があきれ果て、とてもこんなけだものと一緒に暮してゐたのでは、俺がいくら働いても追いつかず、果ては俺自身の無謀だつた事を自分で後悔し初めたのである。俺はどんな風にしてこの女を追ひ出さうかと考へた。どんな事をやればこの女は俺の傍から離れるだらうかと種々考へてもみたが、俺の留守にたんまりと何處から手に入れるのか、自分の好きなものを手に入れ、俺の歸ん頃は、殺されても尙眠り續けてゐるであらう位に眠りどほしたのであるから、俺は追ひ出す方法を全然考へられもせず、またその方法がうまく考へついたらしても、それを實行に移すには困難な位に、眠りこけ、わめきたて、嘔鳴りちらすのであつたからもうこの畜生早く死んで了へと思ふより外はないのである。

製瓦所は製瓦所で、俺のこの苦勞などにはお構ひなく一段と活氣を呈し、甞焚き連中は三日も四日も徹夜を續けてゐるのである。俺は女鬼のゐる木橋のがらくた小舎へは歸らない事にした。女房の傍になど歸らんでも結構のびくと寝る場所を見つけたのである。俺は小躍りして自分のこの考へにうまいぞうまいぞと手をたたき、その晩からそれを實行したのである。ほかでもない、製瓦所の甞屋の中の粉炭の上に裸で寝るのである。甞屋の粉炭の上は俺の家よりも廣く、あの畜生のぶざまな姿を

見ないですむだけでもたすかるし、そして俺はゆつくりつかれをやすめる事が出来たのである。俺は道路工事の倍の賃金で、おまけに手足を長々と延ばして寝られる場所まで見つけたのであるから、あの畜生が生きやうと死のうと俺の知つた事ではないと、他人事のやうに女房を考へ始めたのであるが、或日、型込めに脂汗を流してゐる俺の前に現はれた商人風の男が、代金を支拂つてくれと何か書いた紙切れをヒラヒラさせながら押込むやうに俺の手に握らした。仕方ないので、製瓦所の帳場に讀んで貰ふと、お前の女房が先々月から買つてゐる街の雜貨屋である。お前の借りになつてゐる金であると云ふ譯だつた。

俺は驚いて了つた。一體それは誰が食つて誰が買つたのだ。そして誰の借金になるのだと激しく商人風の男に詰寄つたが、商人風の男はお前の女房ならお前が支拂ふのが當然なんだ、何を血迷つてゐると、何がなんだか解らなくなる位、俺の頭はこんがらかつて了つたのである。金額はだて俺の考へも及ばない金額である。とにかくその日から製瓦所の帳場へ話して、帳場から毎日直接商人へ十五匁宛支拂ふ事にして貰つた。俺は大變な女を女房にしたものであると俺の馬鹿さ加減を詫言ふ思つたのである。

眞夜中から雨になつたらしく、甞屋の中はしぶきをうけてとても寝心地の良い潮だつた。俺は曉方の明りを透して見ると、煉瓦乾場は雨のため今日一日はとても使へさうにもないので、

久し振りに骨休みが出来ると思ひ、もう一度粉炭の寢床に横になつた時、フトあの女房の畜生どんなぎまで暮してゐるか一つ行つて見てやれと云ふ考へが湧き起つた。序に街の借金の事もよく聞いてみる必要もあつたのだ。俺は煉瓦運びの馬車屋野郎が忘れていつた三角笠を雨除けに冠むり、俺の元ゐた家の木橋まで来て見ると、俺のゐた時よりは入口のあたりを大きい石でもつてたたみあげ、見なれない布を張つて入口を塞いでゐるのである。ホホーと思ひながら指先でその布をかきあげやうとしたら、いきなり布のかけから腹の真中を突かれ、アアア——ツと下腹を押へて前かがみにかがんだ俺の傍を雀のやうに駆け抜けて行つた人間があつた。俺は痛さの中で、この場所はどうあつた女房の家ではなく誰か外の奴の家になつてゐるのだな——と思つた。他人の家の入口を無闇やたらに開けやうとしたので、この家の者がこの俺をひどいめに會はしたのだと考へたのである。それもこの身體が半分に縮んで了ふのではないかと思はれる位の痛さのなかでさう考へたのであるから、俺も相當の禮儀だけはわきまへてゐる心算だ。が、をかしい事にはその後その入口の内側から人のゐるやうな氣配もしないのである。片手で腹を押へたまゝ、片手で入口の布をめくつて見ると、異様な臭氣の中に驚いた事に俺の女房が裸のまま、轉がつたやうに眠りこけてゐるのである。ではやつぱり此處は俺の家であつたのだ。俺の家に違ひはなかつたのだ。俺は毎日この女房のために十五錢

と云ふ金を支拂つてゐるのだし、俺はこの家の主人であり、この女の亭主であるのだと云ふ事が猛然俺の胸に頭をもたげて來た。ではいま此の家から飛び出した野郎は一體誰なんだ、然もこの家の亭主の俺を突飛ばして逃げて行つたのは誰だつたのだ。俺は野郎の逃げた方をにらんだが朝もやのため三間向ふは全然見えなかつたのである。俺は激怒を覺えた。入口の布を力一つばいひつばると拍子抜けしたやうに取れて了ひ、朝の冷たい空氣を素肌に感じたのか、女房の身體は少し動いたが、相變らずぐつすり眠つてゐるのである。

俺は阿片に酔つて蒼黄色い、肉のない女房の姿を見つめたが、このくたばり損ない奴と、足で蹴飛ばしたくなつたが、女房の枕元にある見たこともない煙草の吸殻や、何か包んで來たのであらう漢字新聞紙などを見ると、また別な怒りが込みあげて來て、俺のゐない間に一體どんな眞假をしてけつかつたかと考へると、いま出て行つた野郎が妙に憎たらし、また女房のこの姿がムツがゆくなる程腹がたたくなり、終ひに俺は亭主の權利を荒々しく女房に振舞つたのであつた。

その日は終日女房の傍で暮した俺であつたが、毎日十五錢の支拂と、今日一日休んだ事を考へると、デットして腐つたやうな女房の傍にゐる氣がしなくなり、俺は脱ぎ捨てるやうに木橋の小舎から飛出し製瓦所の窟屋に歸つてみると、窟屋の連中はまたしばらく晴天が続くだらうと話し合つてゐるところだつ



た。

その日から三日めの夕方である。魂の抜けきつた人間みたいにして俺の女房が製瓦所へやつて来たのである。苦しくてたまらんから十銭くれと云ふのである。その十銭あれば苦しきまんでもいと、何か他人から無理押に押しつけられて苦しんでるやうな口振りであつたから、俺ははり倒すやうな勢で奴鳴つたが、まるで聞えないやうに俺の顔を見つめてゐるのだ。鍛土や運搬、鼈屋の連中の手前もあるので俺は思切つて十銭銀貨を與へたが、嬉れしい顔なんだらうか、俺には怖しい顔を見せて歸つて了つた。

俺は化物にとりつかれてゐるやうな俺が怖ろしくなつて来たのである。製瓦所の帳場は俺の精勤振りに舌をまいて驚いた。俺は驚かれるやうな事はしなかつたのだ、ただ九月に入れば仕事が無くなる事と、十枚壹銭の工賃であるから、造つただけは俺の収入になるのだから、俺は俺として力一つばい働いたのであつて、帳場は勝手にをかした處に目をつけ俺の働き具合を窺いてゐるのである。俺は一日千三百枚は樂に型込め出来るやうになつてゐた。

月末の勘定の晩であつた。

どうも俺の賃金が少し足りないので帳場に聞くと、街の商人に拂ふ十五銭の外に、實はお前にだまつてゐたが、お前の女房にこれこれの日にいくらの金を渡してやつたのである、その證

據にお前の女房の印があるぞ、と云ひながら手筆で書いた金額の下に猫の足みたいな印がたくさんベタベタ押してあつた。女房の親指の跡だとも云ふ。これではいくら働いても何にもならんがな——と怒つてやつたら、お前の女房はアレを吸はないと生きてゐられないのだし、仕方ないぢやないか、俺もお前にだまつてやりたくはないのだが、やらなければどうしても歸らんし、こちらが根負けして了ふのだと、帳場はすまなさうに言譯をしてくれたが、女房どころか化物にも劣る女へ今後ピター文やるもんかと俺は帳場に喰つてかかつた。帳場は何も云はなかつた。

暑さも朝夕はいくらか涼しくなり、鼈屋から立のぼる煙も青い空にはつきり黒く流れてゆくと、製瓦所は極度にその能力を發揮してもうこれ以上の働きは無理だと思はれる位に多忙を極めてゐた頃である。

サーベルをならしながら黒い眼鏡をかけた滿洲國の警官が俺にチョット来いと云ふのである。俺は裸の上に白い上衣をかけた泥手のまゝ製瓦所の東にある警官派出所に行つて見ると、その警官はいきなり女房の事を聞くのである。俺はかくす處なく女房と一緒にゐた時から現在までを詳しく語り、最近は一歩も女房の處に行きませんから——と云ふと、それに間違ひはないかと問はれ、間違ひありませんと答へると、ではこれにお前の指で印をつけると何か書いたものを目の前に差出され、赤い色

をつけた俺の指を紙に押しつけると、何時か帳場が俺に見せてくれた女房の受取りみたいに、猫の足が其處に残つたのである。

警官はその書類を藏つてから俺にかう云ふのである。

實は、今日午前、飲馬河で釣をしてゐた日本人がお前の女房の死骸を發見したのであるが、醫師の見るところによると水に溺れて死んだのではなく、マッチの赤い硫黄を多量に飲み下し、またほかに石油か何かを飲んだやうにも思はれる點があるのだ。一體お前の女房は常に煙草吸つたのか——と云ふ譯であつた。俺は警官のこの話を半ば聞きながら嬉れしいものが腹の底からこみあげて、兩方の肩が俄に軽くなり、ひとりりで笑ひが顔に現はれて来るやうでもあつたが、俺はそれを押しかくすのにどの位骨折つたか、あの女が死んで俺は全く重罪から放された時のやうな心安さを覺えたのであつた。女房の死んだ事なんて他人が道傍に轉んだ位にしか俺には感じなかつた。俺は助かつたと大いに喜んだのである。

こちらへ来て見ろ、と云ふので派出所の横手の原ツばに出て見ると、笠を冠つた女房の上にゴマのやうに蠅が降りかかり、警官は鼻を押へてその笠を開けて見せてくれたが、俺はなんでもなく、雨にうたれた古ボロ布のやうな恰好にしか思はれなかつた。俺はビクともしなかつたし可哀想などと思ひもしなかつたのである。

これをお前に渡すから始末せい——と最後に云はれたので、俺は仕方なく製瓦所の煙瓦運搬人と一緒に車に積み、製瓦所の北にある廣い畑の中に深く埋めて了つたのだつた。

何故俺の女房であると言ふ事が解つたかと帳場も不思議がつたが、警官の話では、あの畜生が飲馬河まで物を買ひに出て行き、俺の亭主は極道野郎で自分ばかりがうまいものを食べ、俺には一粒の米も食はせんから、俺はかうして乞食をしなくてはならないのだ、俺の亭主は東站の瓦屋で土龍みたいに土を食つて生きてゐる野郎だ！とさう云ひながら町中をふれ歩いたからだと言ふのだ。そのあげくがあの始末だらうと思ふのである。

道路工事から煉瓦製りになり、そして九月終頃はまたも道路工事を納く、俺はたしかに土龍に違ひないのである。



# 雪 空

牛 島 春 子

その朝、未だ九時をすこし廻つた時刻だと云ふのに、警務局にはもうすつかり人が出揃ひ、物々しい緊張した面持で聲高に話し合ひ、拳銃をガチャ／＼と云はせ、ドアはしつかりなしにはたんばたと開閉されて、せか／＼した入り混れた靴音が幾つも出入りしてゐた。ストーブには石炭が眞赤に燃えてをり、煙草の煙はもう／＼と室内に燃つてゐた。

その最中に、秋田指導官はひよつこりと二十日ぶりに山の工作から歸へつて来たのであつた。ドアを開けて入つて来ると、入口の所でやあ／＼と云ふやうに防寒帽の縁に手をかけ、すばしこく動く小さな目で室内を見廻したが、瞬間、ピンと室内に滯つてゐる只ならぬ空気を職業的に感じると、防寒帽を片手にぶら下げたまゝ、黙つてすか／＼と机の前にかがみ込んでゐる首席指導官の方に歩いて行つた。

「只今歸へりました。出たんですね、どの方向です？」首席はびくりして顔をあげ、目の前にすばしこく動く秋田指導官の

目を見ると

「や」と云つて何かほつとしたやうな表情をした。

「お歸へり、御苦労でした。實はね、今趣向志願下の約百名、××に向つて進行中と情報が入つたのだ。直ぐに出かけねばならんがね」と云つて首席は、思案するやうに、指導官の、のび放題にのびた髭の先に、キラ／＼光つてゐる氷の粒々を目を細めて眺めてゐたが

「秋田君、君今歸つたばかりでつらいだらうが先發隊はやはり君にお願ひしよう。いゝだらうね」それを聞くと秋田指導官はふつと頬をふくらませて黙つてゐた。

「行つて呉れるね」

「僕は首席、今山から歸へつて来たばかりだ。今日は他の人にお願ひしたいですれ」指導官はとりつくしまもないように素つ氣ない調子で云つた。

「何だつて？」首席は自分の目と耳を疑ふやうに驚き、聲をあげ、それから閉聲で、氣がついたやうに聲を落した。

「そ、それは困る。君が疲れてゐるのは知つてゐるが最適任者として君を選ぶのだ。命令に服従して呉れ給へ」

「いや今日はどうしても行き度くない」

「ピ、どうしてだ、君が僕に向つてそう云ふ態度に出ると、もう警務局の統制がとれんじやないか。行き給へ」

「今日はお断りします」指導官は語尾をつよめ、もういくら

云つても同じだぞと云ふ様な強硬さを肩のあたりに見せてそつぽを向いた。

「うん」首席は、今までに出會つた事のない指導官のその不遜な態度に面喰ひ、怒りをうまく現はせないで赤くなくなつた。

「どうしても行かないのか君は？」室内の者がはつとして鳴りをひそめるやうな聲だつた。

「お断りします」指導官の答は挑戦するやうに殺氣だつてゐた。

「よし行くな」首席は堪りかねたやうに、ドンと拳固をつき出して机をたゞいた。

「そのかはり俺は責任上職をひく」そして、がたがたと荒々しく靴を鳴らして、裏續きになつてゐる私宅の方に出て行つてしまつた。

菅野勇を始め、室内にゐた人々は、只呆然とその争ひを見守つてゐるばかりであつた。何も彼もが、菅野達の意表に出た想像出来ぬ事ばかりであつた。第一、秋田指導官の討伐好きは「めしよりも」と云ふ形容詞つきであまねく縣公署に知られてゐた。指導官は何時も討伐だと云ふと、眞先に自分からその役を買つて出、たまに彼が警務局の事務機の前に、詰らなそうな顔をして「よこなん」と腰かけてゐる姿を見ると、菅野達は珍らしがり、内心氣の毒な氣にさへなる位なのである。それから、首席と指導官は同郷で、二十年越しの親友である事も菅野達は知

つてゐる。一度だつて、公務上の事でも私的な事でも、二人が口汚く争つた事があるだらうか。菅野達にはその記憶すらない。それ丈に今度ばかりはみんなは他からはどこも術を知らなかつたのだ。

首席が出て行くと、この氣まずい空氣の責任の一半は自分達にあるとでも云ふやうに、菅野達は間の悪さうにひつそりとして、ストーブの前に腰を下して考へ込んでゐる指導官を氣の毒さうに眺めてゐた。

「こう云つちや首席に何だけど、今日はまあ秋田さんは留守居役でせうな」警務局の人間でない菅野は指導官の立場を同情するやうに誰れにともなくさう云ふと、指導官は、「いや」と云つてはにかむやうな、先刻どうつて變つた弱々しい表情を憎だらけの頬に浮べたが、

「僕はやつぱり行く事としますよ。だが、未だ朝めしを喰つてないんでね、それ丈でも一つ済ませて貰つて——」と獨り言のやうに云ふと立ちあがり、その事を首席に報告するために、ゆつくりとドアの方に歩いて行つた。その精悍な後姿には、何時になく淋しい影がつきまといつてゐるやうに菅野には感じられた。

三十分ばかりの後、秋田指導官と、軍からさしまはされた一人と、二人を乗せた三頭立ての馬は、隊伍を整へた戦闘部隊の先頭に立つて縣公署を出發した。轎に乗り込んだ時秋田指導官

は菅野の方を向いて、

「たうとう朝めしが喰へませんでしたよ」としがめるやうに笑つて見せた。その顔にはもうあの弱々しい影は消え、すつかり何時もの元氣一杯な指導官にかへてゐた。橋が縣公署の門を出る時、指導官は何を思つたかひよいと菅野達と、それから子供をつれて見送りに出てゐた細君の方をふり向いた。それから又向ふを向いた。馬橋が元氣に走り出した後を、整然と、賑やかに戦闘部隊の列が續いた。

× × ×

「秋田指導官戦死、戦闘部隊危機ニ瀕ス」と情報が傳へられたのはそれから四時間餘りも過ぎたその日のひるさがりであつた。縣公署は騒然となり、人々は有り得ぬ事のやうに驚き、色を失ひ、やがて激しい憤怒が電波のやうに人々の上に蔽ひ牆がつつた。あわたとしく應援隊が編成され、二臺のトラツクに分乗して出發した中に、菅野勇もその一員として加はつてゐた。

三月半ばと云ふのに、降り積つた雪が、トラツクの車輪を隠してしまふ程に深かつた。空には未だ、重苦しい鉛色の雪雲がみじろぎもせず垂れ込め、天の一角に、太陽のかゝつてゐるあたり丈が、うす白いふやけたやうな輪を作つてゐた。

木も川も島も人家も、一切を只白一色に變へてゐる雪の世界は、何か冷酷なもの、肌のやうにこまやかな陰影を曇み込んで

果もなく牆がつてゐた。

菅野達をのせた二臺のトラツクは、雪に埋れた道をさぐりながら、まどろっこく尻をはねあげはねあげ走つた。トラツクの上に前のめりに詰め込まれてゐる菅野達は、ビュツ／＼とトラツクが切つて通る風に、鼻も目もなぐりぬかれるやうな痛さ丈を感じてゐた。日のまはりは一様に白霧を生やしたやうになつてゐた。

暫く何もない雪原が續くと、遙かな地平線に續いてゐた山脈が、左右からすこしづゝ肩を下して近づいて來、トラツクは突然、ぐくぐつと崩れるやうにせまつた山間の、すり鉢の底のやうな道路に入つた。其處を通りぬけると、又濁々とした雪原が拓けてゐた。トラツクは雪原と山底の道をかほるばんこに抜けて走つた。と、何處目かの山底の道にかゝらうとした時、先に走つてゐたトラツクが、きゅつ／＼と何かこすり合せるやうなきめの細かい音をたて、止つてしまつた。深山雪のため、車輪が動かなくなつてしまつたのだ。

「おーい、どうした、どうしたあつ」と後の車に乗つてゐた菅野達は前の車に一せいに、口汚く叫んだ。前のトラツクに乗つてゐた一行は、そろ／＼と車から降り始めてゐた。車がエンコしたあ、これから先は駄目だあ」その中の誰れか叫び答したかうなると、菅野達もトラツクを降りて行動を共にするより他仕方がなかつた。一行はトラツクを乗り捨て、列を作り、雪の

中を行進し始めた。

山底の道は菅野達にとつて一番厭やな地形であつた。何故なら、山の樹々の間から匪賊の銃口が、今にも下を通る菅野達の頭上に弾をあびせかけようとして待構へてゐるやうな、そう云ふ厭やな壓迫感を感じないではをれないからだ。事實左右にせまつた山は榎や楊柳の木が繁り、その間々には名も知らない身の丈ほどの灌木が、枝と枝とをぎつしり組み合せて密生してゐる。奥深い闇なのだ。さうした山道にはそれでなくても一種異様な無氣味さがあるのだ。一行はそのいやな壓迫感に備へて夫々銃を構へ、四圍に目を配りながら進んだ。菅野勇も腰にぶらさげたモーゼル一號をサツクからはづし、安全瓣を開け、しつかりと引金に手をかけてゐた。だが、やうやくその無氣味さにも馴れて来ると、菅野達は前後の連れとほそ／＼言葉交へ始め、しめやかに笑ひ聲さへたてるのであつた。それは本當に意味もない、へらず口をさも大事さうに一言一言注意して口から出し、さうしながら彼等は只一事今自分達がかうして進んでゐる目的に關聯する事については無意識の内に用心深く避け合つてゐるのだ。

一步一步深い雪の中につゝ込んが足には、只の歩行の時の何倍もの労力があるのであつた。菅野の足の先からも、目に見えて氣だるいやうな疲労感が、體に這ひのぼつて來るのが感じられた。と同時に不自然な努力がだん／＼體内を熱くしじい／＼と

肩中やひたいぎはに汗が滲み出て來るのであつた。菅野達はさうして温度の調節をとるために、歩きながら一枚々々と上から順々に皮を剥ぐやうに身につけてゐるものをぬいで行つた。疲労が甚だしくなつて來ると、菅野達はいきなりその場にべたりと坐禪を組んだやうに坐り込んだ。さうして傍の雪を手掴みにして、片つばしからお八つでも喰べるやうに口の中に放り込んだ。冷たい雪は、アイスクリームのやうに甘く香くはしく、乾き切つた口の中に嚙がり、しゅつ／＼と音をたて、熟した體が貪慾にそれを吸ひ込んだやうであつた。大の男が、あつちにもこつちにも雪の中に坐り込んで、傍らの雪をむしや／＼と頬張つてゐる様子はユーモラスでさへあつた。けれど突然足が止ると、疲れた體が急に軽くなり、そのまゝ氣が遠くなりさうであつた。菅野勇は暫時坐つたまゝ目を閉ぢてゐた。體が硬と一緒溶解してしまひさうな物倦い感覺の中に、突然何の關りもなく丁度麻痺した體が、何處かで痛み出した傷を遠く意識するやうに、菅野達はさつき受けた大きなショックをつきつきと心の何處かで感じ始めるのであつた。

一本當たらうか、いや本當に秋田さんは死んだのだと判断にまよひながら次第に背さめ、軽い目まひと惡感の内にやがてそれが激しい憤怒に變つて行つた瞬間。だが彼の思念は、だからかうして今復讐のために俺達は向つてゐるではないか、と云ふ風に順序よくは續かない。菅野勇はそこではつと目が覺めたや

うに氣が付き、周章で身を起して又機械的に雪の中を行進し始めるのであつた。人々はもうシャツ一枚になり、流れ落ちる汗を拭き拭き、外套や上着を片手にひきずりながら行進してゐた。

菅野達はかりして、何時間雪の中を歩いたであらうか。ターシターシと雪空に鈍くこだまして小銃の音が二つばかり前方に聞えたやうな氣がした。だがそれなりで弾の音はやんでしまひ、あとは又無氣味な静寂であつた。

× × ×

未だ三時すぎの時刻と云ふのに、あたりは夕暮のやうに暗くなり始めてゐた。菅野達應援隊が到着した時は、既に交戦は終つて、敵は後の山に後退し、寒々と鬨つて來た雪原には、十あまりの味方の死體がごろごろとねそべつたやうな姿勢でころがつてゐた。味方は銃を收めて散兵線を解いてゐたが、戦闘部員のほとんど苦痛を押し殺す様に顔を歪めてともすれば動作がのろのろとなりそうであつた。それは、激しい疲労が彼等を支配してゐるやうに見えた。けれど實は全く思ひもかけなかつた恐ろしい事が彼等の上に取りつきあがつてゐたのだ。緊張がほぐれると、彼等の手や足が一せいにづきづきともげ落ちそうに激しく疼き始めたのであつた。この圓ひになれない、若い味方の戦闘部隊は、行進中に熱さに堪へきれなくなつてぬいだ防寒具を、菅野達のやうに手に持たないで、次々と未練もなく雪の中に打ち捨

て、行つたのだ。手足をむき出しにして、永い間雪の中に腹這つて交戦してゐる内に、寒さが徐々に彼等の手や足を犯し始めてゐた事に彼等はすこしも氣がつかないでゐたのであつた。けれど、彼等はあくまで戦闘部隊であつた。味方は直に二つに別れた。一つは戦死體を片づけるために居残り、他の部隊は菅野達と一緒に、再び散兵線を敷いて匪賊の退いた山の方に向つて進んだ。

山の中は雪は浅かつたが、無數にへし折られた樹木のために歩きにくかつた。木の蔭のあちこちに、草色の軍服を着た匪賊の死體がちらばつてゐた。もうすつかり凍りついた夫等の死體を菅野達は今はもう憎しみの感情も起らず、哀れむやうな氣持で見すごして進んだ。とある小さな窪地には、幾つかの死體を木の枝の上に積み重ねて、あわてゝ火を放つたあとがあつた。死體は半焼のまま、濕つた薪のやうにぶすぶすと燻つてゐた。匪賊は匪賊なりに戦死體に對して禮をつくす道を知つてゐたのだ。さうして二十米も進んだ頃、菅野達は遂に秋田指導官の遭難の場所を發見したのである。

其處は丁度あの左右から山に挟まれた道路の上であつた。その地形は、まさまざと指導官の遭難の當時を菅野達の目に浮べさせた。人々は息を呑み、言葉もなくその死體を圍んで立つてゐた。雪の中に、指導官の死體は露股一つのまる裸にされて、顔を右よりにねぢりうつ伏せになつてゐた。殺されても死に切

れなかつたものゝやうに半眼を開き、髯だらけの頬に恐らく匪賊の手で衣服を剥ぎ取られて行くのを、奈落に陥ち込んで行く意識が、最後に感じもがいたに違ひないかすかな苦悶のあとが條をひいてゐるのをまざまざと見た時、立ちすくんだ人々の目からはとめどもない様に涙が溢れ出て来た。

しつかりと目を閉ぢ、兩方の頬にきらきら光つて流れる幾筋もの涙をぬぐはうともしないで、「濟みません、濟みません」と人々はてんでに聞き取れない位の聲で囁言のやうに云つては泣いてゐた。菅野は堪りかねてその場にかくみ込み「うい、うい」と咽喉の奥から押しあがつて来る慟哭をこらへた。子供が晝寢から覺めて、からんとした母のゐない家の中に氣づいた時に、思ひもよらぬ時に、いきなり手に持つたお八つを横合ひからひつたくられた時、――あゝ云ふ時にも似た理窟ぬきの幼ない悲しき丈が、あとからあとからと胸に溢れあがつて来るのであつた。純粹な悲しさと云ふものは多分かう云つたものではないだらうか。子供なら母の懐へかへれば濟むだらう。けれど大人の菅野達にはこの悲しさを何處に持つて行けばいいだらう。だが彼等には事務が待つてゐるのだ。事務は冷靜に進められねばならない。少時の後、菅野達は指導官の死體を拘き起し、傷口を調べた。胸と下腹に一箇所づゝ背中にぬけてゐない弾のあとがあつた。誰れかゝ自分のオーバをきせかけると、菅野達はその死體を擔いで、再びもと来た方へひきかへし始めたのであつ

た。

正直の話、菅野勇はこの北滿の奥地に、命を投げだしても悔いない信念をもつてやつて来たものではなかつた。誰れでもが先づ最初につきあたらねばならない一番月並な、素朴な理由で、つまり喰ふために、云はゞ流れ流れて来たのだ。そして彼も困難な時代に立ち向ふ時、多くのインテリの持つあの疑り深さ、そのくせ對象に眞向うから組みつく事をしないで成べくていよく體をかはしてすり抜けようとする狡猾さ、それらを持つてゐる事を自身感じてゐた。彼はその前で立止り、頭をひねつてためらうのだ。そして見榮もハリもなく命は惜しいと思ふ。危険を犯して無事に歸へりついた時、彼の體はよく、一人で震へ出し、始めて今自分が脱して来た危険に對して激しい恐怖を感じ出すのであつた。匪賊が後をみせて退き始めると、彼の心の何處かで何かほつと安堵するものが決してないとは云へないのだ。

けれど危険の只中にゐる時、菅野勇は決して卑怯でも、臆病でもなかつた。そこでは又異つた、獨特の心理が本能的に彼を支配した。彼は自分の地位に對する責任をどつしりと兩肩に感じ、冷靜に、それは彼のやうな人間が緊張や昂奮の極點にある時暫々現はす表情の一つであつた。事態を見極め、一步も退かないばかりか、ぐんぐんねばり強く部下の先頭に立つて危険に向つて攻撃して行つた。さうした瞬間は、彼の今までの一切の



教養とか知識とか、體驗とかの集積が、云ひかへると彼のすつ裸の人間性が残らずさらけ出されるやうな、充實した命の燃焼があるのだ。

彼は、彼の精神が現實に味はう種々練々な體驗を、同僚の殉死に對する激しい憤怒、幼い純粹な悲しみすらも「貴重な物に思ひ、其處にはもう「喰ふために働く」立場を遙かに乗り越えてゐると思ふ。彼は學生時代にマルキストでもあつたし、インテリらしい弱さでそれに敗北してからは、生命の實驗を促へようと坐禪を組んで見た事もあつた。けれどそれらは單なる遊戲でしかなく、かうした命をかけた現實の嚴肅さの前には、どんな美しい高い觀念も浮きあがつた空々しいものにすぎまいではないか。彼はそんな風に感ずるのである。

× × ×

菅野勇の一行は、十一箇の戦死體を食料品を運んで来た馬積に材木のやうに積込んで、縣城に向つてひきかへして行つた。乗り捨て、おいたトラツクの所まで來ると死體をトラツクに積み換へて、菅野達數人はその僅かな隙間に一緒に乗り込んだ。トラツクはエンヂンの音をたて、出發した。あたりはもう暗く、地上丈不自然に闇の中にほの白かつた。トラツクはそのほの白い地上をまさぐりながら、つまづきつまづき縣城に向つて走つた。誰れも言葉を交はさなかつた。菅野達もトラツクの隅に、オーバの杓を立て、黙々とうづくまつてゐた。指導官のむごた

らしい殉死が執拗に彼の心にもつはりついてゐたが、もうあの幼ない悲しさは消え、只めり込むやうな憂鬱ばかりが色濃く蔽ひ被さつて行つた。時々はつと掻き立てられたやうに憤怒に似たものが、熱い塊のやうに腹から押しあがつて來るのであつたが、それは永くたゞない内に曇層の中に溶け込んでしまつた。

そのかたはら、トラツクの動揺につれてよろける度に、足元の席を掛けた死體を踏まへそうになり、靴の底がその死體を感じ取ると彼のひどく腹の空いた肉體はむかむかと嘔吐を催すのであつた。

數時間の後、自動車は縣城に入つた。城内の所には縣長始め衣服を改めた縣公署の人々が、整列して戦死體を迎へてゐた。縣公署に到着すると、警務局には明々と燈がともり、きれいに片付けられた床に席を敷いて、その上に死體は一列に並べられた。一同はその周圍に集まり、靜かに讀經の始まるのを待つた。やがて中年の、かつぶくの好い僧侶が二人晋もたてず席についた。讀經が始まつた。

菅野達は人々に交つて靜かに頭を垂れてゐたが、時々目はたぬ位に顔をあげて何故ともなくその場の様子を眺めた。かうした場面に馴れてゐる菅野は半ば放心状態になり、別に深刻な感情も湧いてないのであつたばかりでなく、びんと手足をのばしてしやちこぼつた死體が明るい電燈の下に整列してゐる有様は、何か玩具の兵隊が並んでゐるやうにむしろ勇ましく、死體

としての實感がなかつた。新らしく齋物を着せて横たへられた秋田指導官の死體でも、此處ではまるきり精巧に指導官に似せて造つた人形のやうに見える。中には生きてゐるやうに目を開けて、口元に笑みを浮べてゐるのさへあるのだ。交戦場でこの死體が壁に積み込まれてゐるのを見た時菅野は「おや生きてゐるのを……」と驚いた位であつた。けれどこの若い味方の戦鬪部員は、恐らく自分でも知らない内に死んでしまつたものに違ひない。この死體を運んだ一人の話では、この戦死者は、雪の中に腹這つて引金に手をかけ、大きく目を見はつて敵の方を注視し、ねらひの姿勢のまゝでゐたさうである。それほど彼が知らない間に徐々に、彼の全精神が敵に向けて集中されてゐる時、寒さは彼の肉體に手をのばし、内臓を凍らして行つたのだ。

自分の死なうとする瞬間を意識しないで終ると云ふことは我慢のならないことだ。非常に不幸なことではないか。いや、しかし——彼は再び目をあけた。そして十一個の死體の顔を隈とつてゐるくろくろとした翳を見た。それは社會の、人間の、様々なものが落した複雑な翳だ。

寂とした中に、嚴そかにしめやかに續く讀經の聲をうつらうつらと他所に聞きながら、菅野勇は別の方向に發展し出した思念を整理しようと目を閉ぢ、頭を垂れて行つたのであつた。

(龍江省拜泉縣にて)



# 雪子

吉野 治夫

短刀を二つ持つてゐる。右の肺は持つてゐるが左の肺は半分しかない。心臓はほとんど曖昧になつてしまつた。二つの眼はある。右腕は麻痺してゐる。左手が少しづつ生活法を覚え始めた。消化器官は單に歡喜の少い通り道に過ぎない。彼は顔色を持つてゐない。

彼は出て行く。彼は電車の中で見てゐる。電車の中に坐つてゐる彼の位置と、他の人々の位置とを。人達はみな素直な人間らしい生活を感じたままに暮してゐる。子供を背負つて。鞆を持つて。その人達はみな彼を見る。彼は異様な人間に見えるにちがひないのだ。こんな踏みはづした人間がどうしてその顔色に現れないでゐられようか。

彼は眼を車外にそらして山の變らないこと人は年老ひることなどを考へる。自分もまたかくて年老ひてやはり電車の中の人であるであらう。彼はもう自分の生命を續くものを欲しがつてゐるのだ。彼は車中に女性を目で探す。然し其處にはゐない。

女性達は皆もつと體重のある精力を蓄へたものを探してゐる。彼はあきらめて目を閉ぢる。

山はまだ頂に雪の斑を残して南へ南へ車窓の間を走る。すると眼を開いた彼は雪子のことを思ひ出した。

いつの頃からか彼は掌を開いて五本の指をばらんに攤げ、見入る習慣を持つてゐた。彼は車窓から床へ視線を落し、それから左手を眼の前に出して攤げた。肉の無い掌は指を攤げると強く窪んで裏の甲の皮に密着するやうである。指に續いた五つの骨と筋が觸れられるやうであつた。指は中の節が著しく太い。他の部分がそれだけ瘦せ細つてゐる。それでも彼はその薄い掌でまだ何かを掴めるやうに剛む恰好をした。力は残つてゐる。少くとも自分の掌を握りつぶすくらゐには。

彼は、電車を降りると、嘔を吐いた。彼は病院に入つていつた。病院では彼より先に臥してしまつた妹がゐる。彼の妹はどのやうにして自分の一生をあきらめようかと、そのことばかり修業してゐるやうに見えた。

雪子は肌の白い女であつた。酒を盆に載せて襖をあけて入つて来た。島田の裏で彼女は薄ら笑ひをしてゐた。彼は女の顔顔を見た。女は揺いで卓子の上を拭いた。彼の顔を見もしないで彼女は彼に唇のやうな唇の半分を見せ續けた。「綺麗だ」と彼

はいつた。すると彼女は顔を伏せて肩をすぼめ、はつきり笑窪をつくつた。

何の本で讀んだか忘れたが、「現世は水に映つた影だ。美しいものは美しいが位置が轉倒してゐる。搦めば壞れる」といふ言葉を彼はふと思ひ出した。更に裏表は變らないが上下左右は逆だといふやうなことが。彼の氣持は突然複雑になると同時に醉が血と一緒に逆流してきた。

彼は彼女の手をとつて引き寄せた。すると女は膝を崩し、向ふを向いて彼の方へにがり寄つた。それが聲の上を横に這ふ尺取り蟲のやうであつた。「あゝ」と彼は咽喉の奥でいつて女の細い肩を抱いた。肩胛骨が薄い脂肉の下にあつた。女の鼻はすつきり筋が通つて短かつた。頬の化粧を通して肌も血色も散らしたやうに見え、小鼻の細いところは腺病質らしい。櫻色の耳朶が一番程がよく美しく聲の蔭を覗いてゐた。

彼は黙つて左手で女の左腕をその胸に抑へてゐた。そこに何か帯のやうな弾力があつた。

彼はもつと彼女をひき寄せたい衝動に驅られた。だが腕の位置を胸へ廻しただけで、そのまゝ女の顔を覗き込んだ。女は顔を伏せて左手で崩れた右膝を抑へ息を潜め、疊の日を見凝めてゐた。

「幾つ？」

「二十よ」

「名前はい？」

「ゆきよ」

「さいはい？」

「降る、雪よ」

思つたよりはきはきした短い答へが彼の身體へリズムのやうに這つてきた。彼は何もいふことがなかつた。

恐しく黙つた女だ。彼が云はなければ何もいはない。彼が盃を手にするると右腕を彼の胸に縛られてゐるので、空いた左手で器用に盃を充した。一度も彼の顔を見ようとしない。そのうちに呼吸が彼の腕へ微かに傳はるやうになつてきた。彼は光のない花園にゐるやうな香を感じた。見れば睫毛が長い。その蔭で彼女は陰翳のこもつた瞳を何處か遠い國を思ふやうにちらとも動かさずにゐる。離さずゐるとやがて彼の視線を避けるやうにして、「いやー」といつた。さうして彼女の眼は光を帯びて彼をふり仰いだ。彼女は今にも彼の方へ倒れさうにして唇を嚙んだ。帯の間に赤い紙人のやうなもの、端が見えた。彼は呼吸が苦しくなつてきた。

妹は彼の顔を見ると喜びも驚きもない、幾らか怒りを含んだやうな眼で彼をじつと見た。病んで白くなつた顔の中でその眼は赤兒の時のやうに大きく淵になつてゐた。彼は病人からこの視線を受けることに慣れてゐた。それは永い病人に通有のもの

かそれとも彼に向つただけどの病人でも發する視線なのか分らない。怨みを持つてゐる視線に似てゐる。彼の心はいつでも病人のところへ持つていくには餘りに冷酷な死相を漂へてゐる。彼はその顔で一人の友を見殺しにしたことがある。友は幾度か妹と同じやうな視線を彼に寄せた。病人は自嘲するやうでもあつたし彼を責めるやうでもあつた。二人はとにかく親友であつたのだ。さうして病人の方が死ぬまで遙かに彼よりも生きた氣持を持つてゐた。彼は友の臨終には間に合はなかつた。

「どう、少しはいいかい？」

「……………、下痢をするのよ」

「ふむ」

「……………」

「熱は？」

「熱は大したことはないの」

妹は壁の方を向いた。彼は窓縁の金魚を見た。

「けふは、外は風かひどいんだよ」

窓からひらひらと煤煙の降るのが見えた。

病院の内庭だけはエアボケツトのやうに静まつてひっそりしてゐる。彼は黙つて雑誌を讀んだ。

「それぢや歸るよ」と彼はいつた。

「ありがたう」

さうして彼は地球の中へ出てくるより仕方なかつた。

十日を経た時、彼は雪子に逢ひに行つた。鈴蘭燈のアーチを潜つて、路次を少し入つた間だ所にある廣い部屋であつた。雪子を呼んだが、なかなか來なかつた。彼は名前も教へてはなかつたし、名を告げて催促してみるといふ方法もなかつた。小一時間もして彼女は來た。鬨で指を捕へてお辭儀をし、三歩入つたとき「あら」といつた。

「何時からいらしてたの？」

「いくら呼んでも來ないんぢやないか」

「私ちつとも知らなかつたわ」

彼女は銚子を取上げて卓子の上を見た。

「部屋が廣過ぎるんだ」

「そを？變りませうか」

彼は、うむといつて立上りながら自分は變なことをしてゐると思つた。彼は自分の意識の中で倒れて、起きた。彼は生れて始めて夢を見てゐるのだ。

部屋が變ると肉附のいゝ中年増の女が入つてきた。「あら、まあ」といつた。づけつけと寄つてきて「貴方病氣してらしたんですつてね」「病氣？」「この子がとつても心配してましたわ貴方が來てから夜も寝ないのよ。花をもつて病院まで御見舞にいきたいつて」

「ばかな」

「いや、前のは嘘ですけどね、後のほんとは」と

「病氣だなんて誰がいつたんだい？」

「こないだのお連さまが云つたわ、あれからまたいらしたのよ」

「ふうん」

彼は雪子を見た。雪子は下を向いてゐた。

襟筋が白く細い。

「君は二十だつて？」

「さうよ」

「何の年？」

「巳よ」

年増の女は「まあー」といつて「あたし遠慮しますわ」といつた。出て行つた。

雪子、雪子、彼は何かを思ひ出さねばならぬやうに、床の軸を眺め、盃をとり、さうして彼女の襟の後れ毛を見た。何か匂ふやうに白い。やはり彼は何もいはない。彼女は臺ぶきんをとつてむやみに卓子の上を拭ひ始めた。癖のやうに下唇を噛んでゐる。彼は小學校のローンテニス場で審判臺の上から見たラケットを懸命にふる忘れた少女の姿を思ひ浮べた。暗れた夜なのに、外には小雪が落ちてゐるやうなまぢがつかつた氣配がある。

「にいさん……何にもいはないの？」

と女はいつた。まだ子供のやうな甘い聲だ。

「うん。君はキネマは好きかい？」

「え？」

「映畫さ」

「かつどう？……あたし好きよ」

彼はがっかりしながら

「日本ものか？」

と尋ねた。

「ええ、こないだね、大連神社のお祭りの歸りにねえさんと一緒に رفتつたのよ、堤眞佐子が良かつたわ」

「こないだ？」

「去年の秋よ」

上眼使ひに彼を見てゐる女の眼を見て彼は溜息のやうなものを吐いた。

「君はくには何處？」

「福岡よ」

「こゝの人はみな福岡らしいね」

「え、お母さんが福岡でせう。だからみんな呼ぶのよ、みんなよ」

「ふん」

彼は女のあまりにもひつかりのない素直さに驚いて、ふうと襟の後れ毛を吹いてみた。聲なく笑つて彼女は俯いて膝の邊を指でまさぐつた。彼は女の顔を此方に向けて唇を額から頬へ持つていつた。女はさうした愛撫の順序を知つてゐた。彼女の

眼は前を見たまま次第に黄金色になり、やがて蛇のやうな冷熱を潜めた光を帯びると、突然彼の方へ顔を向けてぶつかつてきた。彼女の齒は眞砂のやうに白かつた。

盃をほして彼は横になつた。雪子は彼の頭を膝の上に載せて無意味に彼の髪に櫛を入れた。

「ねえ、あたしの家は小學校の傍だつたのよ……福岡知つてゐる？」

「いや知らないよ」

「そを」

「君はいつ滿洲へ來たのだい？」

「去年の夏よ」

「君は嘘をいつたね」

「どうして？」

と彼女は驚いて恐れるやうな甘へた表情を添つてきた。は、と彼は笑つた。

「いつたぢやないか」

彼女は黙つた。

彼はぼんのボケツトの中で小鏡をぢやらぢやら鳴らせ、頭を彼女の瘦せた膝の上で動かした。

「君は綺麗だなあ。ぼんやりするくらゐだよ」

「いやよ」

嘘でもないはにかみ方をして彼女はまた唇を噛んだ。瓜實の

輪廓が髪の中から浮上つてくるやうに見える。

「僕はね」

「ええ」

「きみはキチョウメンだね」

また彼女は身を捻つて何か幸福な貌をした。黙つてゐた。兩人とも何もいふことはないかに見えた。然し彼女は息をつめては何かを言ひたさうにした。さうしてその息を無駄に吐いた。彼はだんだんほかのことを考へ始めた。裏に花園があつて、花がみんな白い着物をきて立上つてそろ／＼此方へやつてくるやうであつた。

「ねえ」

彼が黙つてゐると、彼女は思ひつめたやうに強い聲を出した。

「あたしが何時嘘を言つて？」

「え？、あゝ。だつて君はじの年だつていつたらう。じの年なら二十一ぢやないか」

彼女はくすりと鼻を鳴らすと「だつてそれはあたしが言つたんぢやないわ」といつた。

彼は首をもたげたがまた女の膝の上へ落した。ずり落ちさうなので腕をとつてそれを支へにしながら皮膚の白さを仔細に點檢した。それを見ていると彼の眼の前には妹のベッドの中の白い肉體が髒然として現れた。「さつきね、鼠がゐたよ鼠が、あの廣い部屋で、僕が入つていくと此方の端から向ふのガス管の

まで、どたどたどと走つていつたぜ」「そを。此處にはゐるのよ」「うん、穴の傍まで行つたら安心したんか振返つて僕の顔を見たぜ」「そを」

彼はブランコに乗り過ぎた時のやうな胸の吐感を催し始めた。彼はなるべく静かに降りようと思つた。そのまゝ眼を閉ぢた。するといきなり彼女は彼の顔へ蔽ふてきた。それは麗らかな日に屋根に黙つて積つた雪が雪子の頭へ落ちてくるやうな思ひがけなさであつた。彼は彼女の首に手をかけて笑つた。彼女も笑ひ出した。

黙つてゐると盃の中で酒が呼吸をしてゐるやうに感せられた。

彼女は故郷の家の話を始めた。家の話は長かつた。彼はそれをとんでもない所でさへきつた。

「君には戀人があつたね。その戀人は今どうしてゐる」  
胸をそり返るやうにした雪子は一言も口をきかなくなると、彼の頭を膝から下して立つた。彼女は出て行つた。

彼は夢を見た。妻子と母と妹を連れてゐる。何處へいくのか分らない。とにかく彼は絶えず買めたてられる家を棄ててきた。すると夜であつた。三間先きも眞暗で宿屋の玄關の燈だけが煌々と明るかつた。彼等はその燈の中に入つて行つた。番頭が彼等の姿を見るので氣附くとみんな襦袢の下つた着物を着て

ゐた。「部屋は空いてみません」と番頭がいつた。彼は同感だといふやうに笑ひ出した。「どこでもいいのさ。宿は一軒。外は暗いし向ふは河さ……」すると番頭はあゝこれかといふ顔をして「ご案内、あぶりきちい」と叫んだ。女中が出てきた。彼が先に立つて上ると血族郎黨がぞろぞろ後に従つた。女中は坐蒲團を一抱へにしてゐた。曲り曲つて一番奥の庭の見える廊下まで来た。

鍵に曲つたその廊下が彼等の場所であつた。蒲團を敷きつめた。板は美しく磨いてあつた。赤ん坊を抱へてゐる妻は誰かよく分らなかつた。彼はただこれが自分の妻だといふことだけ知つてゐた。赤ん坊は全然泣かなかつた。石か何かのやうであつた。廊下の戸袋の所まで蒲團を敷いて彼はその邊を屈んで歩いた。廊下の内側の部屋は明るい燈で眞晝のやうであつた。眞中一つ立派な紫檀の卓が据えてあつて若夫婦と老母が一人ゐた。衣箱に美しい衣袋がさがつてゐた。若夫婦の女の方は雪子のやうであつた。障子の腰硝子から彼等の廊下へ光が斜に温いものやうに落ちてきた。そこから見える、外の庭は暗いが灌木の繁みは感じられた。

暇が出来て彼は病院を訪れた。

「どう」

といつて彼は妹の胸の傍に腰を掛けた。

「あたし昨日手術室の隣りに行つたわ」

彼女はけふは血色がよく、上機嫌の様子で横に夢見るやうな笑みを湛へてゐる。

「あそこはね、手術してとつたものを澤山置いてあるのよ。向ふの六號室にゐたお婆さんね、おなかに腫物ができた人があつたでせう。とつても大きいのよ、わたし見たわ、こんなよ……」と彼女は両手を白い包布の下から出して大きさをこしらへた一硝子瓶がたくさん並んでゐるわ、ずらつとならんでね、やつぱり一番多いのは虫様突起よ、虫様突起、虫様突起虫様突起つていくらでも書いてあるのよ。取つた日とね、名前と書いて」さうして彼女はふふと笑つた。

「お婆さんのは大きいのよ。あんなものがおなかに入つてたのか知ら。お婆さんが、あゝとつても楽になりました。お蔭さまで有難うございました、身が軽くなつたやうでございます、なんなんだぶつ、つていつたつてよ」

「ふむ」

「それから山内さんとこのお姑さんの胃癒ね去年とつたといつてたでせうが、あれも見えたわ、このくらゐあつたわ。變なものねえ。あんなものみんなとつてあるのねえ」

「ふむ」

彼は妹の妙に縁の涯へた眼を見下し、病氣によつて結婚過ぎた女のやうな影を見せ始めたと思つた。

「痛むかい」

「でも、大分よくなつたわ、便所にいく時困るのよ。……あの子はね」

と彼女は二つ向ふのベッドに泣いてゐる五つ位の子供を指さし

「首が動かないのよ、動くんだけど動かしたらいけないの、だけど動かすから昨日からあんなもの嵌められたのよ」

子供はひつきりなしに聲を擧げて泣いてゐた。「痛いよう、掻いよう、おばさん、おばさん来てエ」十分も泣いてゐると、お婆さんが廊下を走つて來た。「掻いてえ、掻いてえ」とその子はいつた。

「掻いてえ、としかいふことがないのであゝいふのよ」妹は何か憎々しげにさういつた。

お婆さんは子供のギブスと首の間を掻きながら

「ほんとに世話のやける子でございますよ……金づくでもこんな子の附添は厭でございますねえ」と隣の四十歳の婦人患者に訴へはじめた。「歌つてえ、歌つてえ」と子供は言葉を変へたお婆さんは歌ひ始めた。彼にはその歌は分らなかつた。「ううん、いや僕が歌ふ」「ええ、歌つてちようだい。お婆さんはもう口がだるくなつた」

妹は天井を見たまゝ急にきゆつといつた。彼女は胸を抑へた笑つてゐるのらしい。だが彼女のはたゞ身體の激動を防がうと



するやうな動作にしかならなかつた。「あの子の首はどうしたのだい？」「斜首つていふのよ、なゝめの首つて書いてあるわ」彼は病院からさまよひ出た。彼は咳を吐いて、電車に乗らうと思つて、線路を見ると、線路には電車を腹で支へ得るやうな表情が全然ないのに氣が附いた。

映畫を見てみると、それは學校の教室で授業中の場面。女學校二年生くらゐの子がしきりに机の上に何か書いてゐる。彼女は先生から呼ばれてゐるのだけど氣がつかない。先生が教壇からづかづか降りて來た。生徒がみな視線を集める。机の横へ先生が執達吏のやうに立つと、彼女は悪魔に襲はれた瞬間のやうに驚愕と恐怖の眼をあげ、もはや撲られるのを防ぐやうに向ふへ體を捻らせた。取上げられた紙片には算術がしてある。英語の時間。横に算用數字で  $5 \times 100 = 500$ 、 $3 \times 100 = 300$ 、 $4 \times 100 = 400$  と加算があり、別にその和を  $500 + 300 + 400$  から減算してある。コレハンデス。彼女は答へない。觀衆はハンケチを取出して泣き始めた。その子の母は子達を置いたまゝ、出稼ぎに行つてゐる父のところへ去つてしまひ、その後へ老母だけが残つて子供等の世話をしてゐる。だが、最早老母で子供が老母の世話をしているのか老母が子供の世話をしているのか分らない。出稼ぎ先からは金を送つてくる筈のだが、送つて來はしない。出先で父は水商賣をし妾を飼つてゐる。母は女給上りでその妾の噂をき

くと押し掛けて行つたのだ。思ひ出したやうに二十圓、十五圓三十圓と送金がある。金を取りに郵便局へ行くのも、家賃を拂ふのも女學校二年の彼女。月謝がたまつてゐる。これは昨日口附きで送つて來た金を基礎にした彼女の家計簿。

子供がお菓子をとらうとしてよちよち走り出してばたり倒れると大人達は笑ふ。その子が長く置き去りにされた母の顔を見てわつと泣き出すと大人も泣く。どこにそんな反對な意味があるのだらう。彼は映畫館の中で帽子をくるくる廻し足を組んで天井と觀衆の頭を眺め廻した。

雪子は丁寧にお辭儀をした。彼女は最早他人のやうな顔をしてゐた。彼は獨りで酒を注いでは飲んだ。彼は孤獨だ。彼は自分か人を求めないのが何故か分らない。人も彼を求めない。彼は雪子が彼の前に坐つてゐるのを疑つた。雪子は溜息をついた。彼女の唇は濡れて時々震へた。やはり美しい。彼女の着物は青い地にあやめの花が咲きこぼれ春雨が降りそゞいでゐるやうな立竊で細かすぎるくらいであつた。黙り續けてゐた雪子は「貴方はどこの人？」といつた。「どこつて？」「お勤め先よ」「あゝ、どこに見える？」「どこにも見えないわ」「探してごらん？」「ガスでせう」「はあ、ガスね」

彼は壺を含んだ。女の顔を見て考へこんだ。意地の悪い表情を女の中に探すのだが、女は彼とは争はない顔をしてゐる。彼



女は彼の前に坐らされてゐる自分にあきらめてゐるのだ。彼もさうであると思へなかつた。もう彼は来ないにきまつてゐた。雪子は彼の中で消化してしまつた。雪子はただ前に坐つてゐた。

妹が高熱を發したといふ知らせが来た。彼女の胸にはぐんぐん水がたまつてきた。肺を押しつけ、皮膚を押しあげて耕地に溢れていく水のやうに彼女の胸を二枚に割りつつあつた。

彼は病院にくと苦しむ妹の姿を見ながら、唐突にもこれはいかんと思つた。妹は雪子と同じ人間なのだ。彼は發狂か水のやうにすうーつと足から上つてくるのを感じた。

いかん、こりやいかん。

彼は叫ぶと椅子を大きな音響を立て、背後へ倒したまゝ、頭を両手で抱へ病院の廊下へ走り出した。天井が低く垂れて廊下と交ると、くるくると舞ひ始めた。彼は勤め先へ電話をかけねばならぬと思つた。彼は發狂の速度を自覺した。然しこんなものは横を向いてしまへば捺るといふことも分つてゐた。だが、横を向くと横に雪子が立つてゐた。向ふから三人の看護婦が来た。三人づれの雪子であつた。白い看護婦の服を着て注射器をさげたり何か大袈裟な道具を提げて走つてきた。

「何處へ行くんだ」

と彼は言つた。

「どうして？」と右にゐた雪子がいつた。「知らないわ」と真中の雪子が石のやうに冷淡な顔をした。

彼は問答は、問答は無用だと思つて電話室の方へかけて行つた。

# き ち

## 三宅 豊子

「きち」といふ名で思ひ出される女性がある。

そそけた赤い頭髮、汗と埃にまみれた黒い顔、物を云ふ度に白眼をむき出す癖、黒つばいよれよれの銘仙の單衣に、鼻緒がゆるみ、指の跡の黒く染みついたちびた草履。

さういふ服装で或夏の日の午後、彼女は私の家の玄関口に立つたのであつた。

「まあ随分探しましてん、やつとみちあちらの御宅で教へて頂いてまゐりましたんですワ」

彼女は十年の知己のやうな親しきで、ニコニコし乍ら玄関に出て行つた私に向つてさう云ひかけた。

「まあ、さうでございませうか」

とは云つたものの、私には全然心おぼえも無い女性だつた。

「あの、失禮でございませうけど誰方であらうしやいますか？」

「あれ」

私の問ひに彼女はさも驚いたやうな顔をしてみせた。

「お解りになりませんか」

「まあ、と首をかしげる私に、

「三篠の者ですが、」

彼女は云つた。

三篠、それは吾が家の原籍地、夫が少年時代を育つてきた町の名である。してみるとこの女性は遠い親戚でもあるのか、それとも單なる知人であらうか、いづれにしても三篠ときいてうかつな私は安心した氣になり、それに、あちらの御宅できてきたといふ、あちらの御宅とは、多分兄の家のことであらうと思つたので、それ以上名前もきかずに彼女を座敷に招じ入れた。

「まあ、綺麗に飾つてございますこと」

彼女は部屋の中をじろじろ眺め廻した。

「お嬢さんがお飾りになりましたの？」

私は返事に窮した。讃めて貰ふにしては餘りにも粗末な部屋の中であつたし、それにお嬢さんとは何事ぞ、多少は若くみえるにしても、私は既に三十二歳である。

「あの誰方でしたか知ら」

氣になつて私は再び尋ねてみた。

「お父様とは古いおなじみですが」

「お父様とは舅のことであらうか。」

「あの舅を御存知であらうしやいますの」

「はあ、三條の城崎と云へばよう御存知ですワ、子供の頃はあなた、しよつ中御一緒に遊びましてん」

彼女の年頃は打ち見たところ四十前後である。舅は既に八十歳であるから、子供の時遊んだと云へば夫の方であらう。きいた覚えもないやうだが、夫の幼友達でもあるのだからか。私は一度だけ行つたことのある夫の故郷の町、小學校があり、神社の廣い境内があり、小さな川に埃つばい木の橋のかゝつてゐた、長閑な田舎の町を眸に浮べた。

「お父様はお留守ですか」

「あの主人ですか知ら？ 主人でしたら五時頃には歸りますけど」

私の言葉に彼女は少しはつとしたやうだったが、すぐ何氣ない風に誤りを訂正した。

「はあ、お父様はよう知つてお出でなさいますが、奥様は廣島の市の方でゐらつしやいましたかねえ」

「いいえ、私は東京ですよ」

「あれ、どうりで」

彼女は其處でひどく感嘆した風に、はたと膝をたたいた。

「とつてもお綺麗ですワ、東京のお人はやつぱり違ひますなあ」

「そんなことないでせう」

「インえ、第一あなた肌が」

彼女はさう云ふと、自分の焦茶色の頬つべたを撫で廻した。

「肌がきれいですワ、とつても若う見えますぜ、お嬢さんのやうですワ」

「さうですか」

私は仕方なく苦笑した。私は次第に深い疑念に包まれてゐた。見え透いたお世辭を並べ立てる裏には、何かの目的があるに違ひない。

一體彼女は何者で、何の用事で訪ねてきたのだらう。服装はみすばらしい。そして都會に住む人の感しでなく、昨日今日、田舎から出てきた人のやうにも見える。田舎の人といふのは素朴な一面にはへんに圖々しい處もあるものだから、ひよつとしたら、一寸した知合ひといふだけの事で、家へ泊り込むつもりでは無いか知ら。以前にも夫の友人の紹介状を持つて静岡から就職にやつてきた理髪職人に、長いこと泊り込まれて迷惑した記憶もある。私がそんな風に觀察してゐるとも知らず、彼女は壁にかかつてゐる半身大の舅の肖像を見上げ乍らかう云ふであつた。

「お祖父様は亡くなられてもう何年になりますかなあ。ほんいいお方でしたなあ」

舅は八十歳になるけれど、若い者をしのぐ元氣さで、まだ矍鑠としてゐる。

「あら、舅はまだ元氣ですよ」

「おや、さうでしたか、妾やまあ飛んだ考え違ひをして」

慌てゝゐる彼女に

「あの、何か御用でございますの？」

「はあ」

と彼女は白眼をむきし唇をなめた

「實は少し御無心があつて上りましたんですが」

「どんなことなんでせう」

彼女の夫の就職の依頼？ とつぎに私の考へたのはそれだつたが、彼女が故郷の家がどんなに昔は立派であつたか、又これ迄彼等夫婦がどんなにせいたくに幸福に暮してきたか、それが夫が病みついて失職してからどんなに彼女が一人で苦勞をしてきたか等々と、相當よけいなことも交へて語つた後でやつと切り出した用件といふのは金の無心であつた。

彼女の語る所に依ると、彼女の夫は或會社に勤め月給も相當に貰ひ彼女達は人も羨む程幸福であつたのだが、夫が病みついて失職してからは収入の道も絶え、それに入院費だの藥代のと費用は莫大に要り、今は持ち物を賣り拂つてやつと生活を支えてゐる有様だといふ。

「こんな服装をしてみますがあなた、妾や着物なんかもそりや上等なのを澤山持つてましてん、ほんに惜しうてなりませんせ」

と彼女は云つた、然し幸ひに彼女の夫の病氣は次第によくなりつつあつて、後三月もすれば働くやうになれると思ふ、然し彼女には商業を來年卒業する息子があつて、成績も優秀なのだ

が、今月で丁度三箇月分月謝がとどこほつてゐる爲、今直ぐ納めなければ退學處分を受ける。故郷に云つてやつた處、金は送ると云つてきたけれど、色々な事情で一箇月後でないといふ手に入らぬ。成績はいいし、もう一寸といふ處で退學させられるのは何としても残念だ、一箇月後には故郷から金が届くから、それ迄拜借願ひたいといふのだつた。

「ほんに妾とて、こんな恥さらしをしたくはないんですが、他にお願ひする處もなし、お宅なら昔なじみぢやしお願ひしてみいと主人もあなた云ふものですから」

彼女はそれ等を語る間にも、何遍となく白眼をむき出す氣味の悪い癖を見せ、それは何か彼女の心の後暗さをもの語るものやうな氣が私にはした。

然し、お金の無心と知つて安心した。お金の無心なら心残りなく断はれる、貸したくとも家にはそんな餘裕等全く無いのだから。

「この通りあなた、彼女はふところから一束の書類のやうなものを取り出したが、相手にならないつもりは私には取り上げてみず、無心の金高をきいてみることもしなかつた。

「ほんとお氣の毒ですわ、私の處も主人が弱いので御苦勞なかつたことよく解りますの、でも家でも主人が長いこと入院したり、この間も半年も内地へ行つてゐたり、その間私子供と三人であちらの、御存知でせう？ 兄の家に厄介になつてゐて、

やつと一と月程前に此處に落ち付いたばかりですの、だが借金こそあつても御用立出来るお金なんて全然ないんですのよ、ありさへすれば御用立てするんですけど」

そしてそれは全くその通りなのだもの。

「お千様の學校の方も、今迄はずつと間違ひなく納めてゐられたのなら、全然當てがないのではなく一箇月すればお郷から届くことが解つてゐるのですから、よく事情をお話しになれば、成績もよろしいんだし待つて下さると思ひますわ。もう一度よく校長さんにでもお話しになつてごらん下さいませ」

彼女はまた何か云つてゐたけれど、私はかまはずにさう云つて斷つた。とりつく島もなく思つたのか、それともその時丁度時計が四時を打つた爲であらうか

「おや、もう旦那様お歸りになる頃ですね、どれ私も——」

と彼女は急にそゝくさと歸るけはひを見せて座蒲團から腰を浮かした。

「あら、御ゆつくりして、主人にお逢ひになつてゐらつしやいません？」

私はわざと引き止めたが、彼女は何やら云ひ譯を云ふと挨拶をして玄關の方へ立つて行つた。土間にぬき捨て、ある、鼻緒のゆるんだ指の跡の黒く染みついたちびた草履、彼女はそれをはき乍ら

「まあ妾や捨ててこんな汚ない履物はいてきて、もつといゝの

があるんですのに」

云ひ譯のやうな彼女の言葉をきき乍ら、私は彼女のさうした淺はかな見榮を、嗤ふよりは憐んだ。彼女は足袋もはいてはゐなかつた。

暑い陽が囁つと照り、埃風の舞ひ立つ道へ、彼女はちびた草履をひきづつて出て行つた。

得體の知れぬ變な女。夫は無論彼女を知らず、心當りさへも無いと云つた。彼女は一體何者なのだらう。同縣人を種にかたり歩く商賣のあることを、この頃の新聞は時々報じてゐた。殊に依ると、彼女もさういふ種類の商賣をしてゐる女なのかも知れない。私がふつとさう思ひついたのは、それから四五日過ぎたことであつた。さうとすれば彼女はこの間はヘマをやつたわけだ。チエツ、私は彼女のさうしたいまいました。舌うちを、耳のはたにきくやうな氣持がした。

商賣、それにしては彼女がさういふ商賣を始めるやうな女になる迄のコースには、いろいろな辛酸があつたことであらう。さう思ふと私の心はふつと暗かつた。そしてそれが商賣であるとしても、若し彼女に病む夫や子供があるといふことだけは事實だとしたら、さう思ふと私は更に重いものを心に感じた。

私はどうかしたはずみにふつと彼女を思ひ出すことがある。夏の陽が囁つと照りつけてゐる暑い道を、そそけた赤い髪、

汗と埃にまみれた顔で彼女は歩いてゐる。道端には埃をかむつた雑草が萎へてゐて、黄いろい風が吹きまくつてゐる。

よれよれの銘仙の裾がはたはたとはためき、彼女のよこれた素足の脛にまっはりつく。

これは私の感傷かも知れないのだけれど、私の脳裡に浮ぶ彼女の姿はきまつてかうなのだ。

彼女の名は きち と云ふのでは無い。ほんとのところ私は彼女の名を知らないのだ。きちといふのは私が勝手につけた名前だ。私はさう云ふ者で、彼女をモデルに一篇の小説を書きたいと、長い間思つてゐたのだ。

——五月一日記——

# 馬家溝

福家富士夫

私が過ごした夏のうちで、一番心よい思ひ出となつてゐるのは哈爾濱で送つた一夏であつた。

其の年が特にそうであつたのかも知れないが、七月中は殆んど毎日の様に雨が石畳みの道を洗つて行つた。窓の小さい壁の厚いロシヤ風な建物の内が急に暗くなつたと思ふと、早くもバタ／＼と雨が窓ガラスを叩いた。慌てゝ窓を閉める間もない位である。だが、ものゝ冊分もすると人知れず雨脚は途斷へて軒を滴る雨が幾つかの線となつてガラスを爬つてゐる。窓を開けるともう南崗の方では、くつきりと澄み切つて高い蒼空が見えてゐる。雨の爲めに街の活動は一時途切れてしまつたように静謐な空間が流れてゐて、人にも街にも一瞬の新鮮さと涼しさを與ふるように見えるのだつた。

其の様な時間が來ると、私は嫌かれたようにして街に出た。モストワヤの街角でバスを捨てると、聖ソフィヤ寺院の立派な圓屋根を左手に見ながらキタイスカヤに向つて歩いた。キタイ

スカヤに向つて突き當つた建物に *Apotheca* と書いた藥屋の看板を見ると、私は何時も何故かしら安心に似たものを感じた。そんな時のキタイスカヤは大變に美しかつた。敷石の鋪道は雨に打たれて濡れ空氣は雨を吸つて薄紫色に色づいてゐるようにも見えるのであつた。

私は大でい、先づモデルンに寄つた。其處で日課の様に、美味なレモナーデを飲むと、眞直ぐに、松花江まで歩いた。電車の終點を過ぎると間もなく道は急傾斜の坂道になる。それを登りつめると、バツと眼前に松花江が一條の銀河の様に展開する。此の思ひがけもなく、開けてくる景色が私は大變好きだつた。右手に松花江の鐵橋を眺め、河一つ隔てた彼岸に、明るい色彩の家が点在する風景は、全く夏の美しさの象徴である。

夜になると矢張り同じ様な道順で私は散歩に出掛けた。然し夜の世界は遙かに俗態であつた。キタイスカヤの橋路地におでん屋の提灯を眺め、泥酔した日本人の女給が客にしたがれかゝつて行く風景は、私に夜の涼しさを忘れさせる。

松花江寄りにドラゴンと云ふビールスタンドがあつた。落花生をホリ／＼囃りながら、安い生ビールを飲んでゐると、其の脇で、ヴァイオリンにギター、それにアコーディオンの奇妙なトリオが奏されるのであつた。十錢位のチップをはずむと、彼等は續け様に二三曲奏した。そして其の合間々々には彼等も亦落花生を囃りながらビールを飲んでゐた。拙い音楽ではあるが



それらを聞きながら、氣樂に過ごす時間が私には愉しい日課となつてゐた、私は酒に弱いので、一杯の生ビールで最早陶然となり、ほてつてくる頬を松花江から流れてくる涼風に冷しながら、膈とキタイスカヤを歩いて歸つた。

私のゐた病院にワニーヤさんと呼ばれてゐる、附添婦兼通譯の老婦人がゐた。訊ねてみた譯ではないが年は五十に達してゐるような婦人で、其の鼻下に薄黒い毛を蓄へてゐるのが私には物珍しかった。

或る日のこと、靴を生したワニーヤさんが病院の片隅でおん／＼と泣きながら喚き立てゝゐるのであつた。何うしたことかと馳けつけてみると、小使の満人と些細なことで口論した果であつた。それを調停したことが機縁となつて、ワニーヤさんは私に大變好意を寄せるようになり、是非家に遊びに来てくれと云ひ出すのであつた。

ワニーヤさんの住居は馬家溝にあつた。電車から降りて暫く歩むと伸びるに委せて生ひ繁つた榆の樹に圍まれた平家建の家があつた。ワニーヤさんの家は其の内の一軒であつた。ワニーヤさんには一人の娘がゐたが其の娘はチューリンに勤めてゐたので割に生活は樂な様に見えた。

私達は玄關脇の小さな庭先きに椅子を持ち出してお茶を飲んだ。其處には白ベンキで塗つた簡単な棚が造られてあつて、それには蕙が爬つてゐた。それは全く狭い庭先きではあつたが、

實に細かく手が入れられ、爽々しい綠草を充分に生かしてゐるのが見られた。

ワニーヤさんは哈爾濱に来るまで長い間奉天にゐたのであつたが、主人が亡なつてから此の地に歸つて來たのであつた。娘のイルゼさんは其の爲めに初等教育を奉天の日本人小學校で受けた人であつたから日本語は巧なものであつた。私達の話は自然と奉天のことに歸つてゐた。其の昔イルゼさんが赤いリボンを頭に結んで蟲を取りに行つたと云ふフランス領事館の邊りは航空會社の敷地になつてしまつたし、日曜毎に活動を見に行くのが樂しみだつたと云ふホテル、レンジミニユラーは今ではダンスホールになつてゐるのであつた。

そんな話は、イルゼさんを大變に愕かしてしまつた。其の時ワニーヤさんが云つた。——日本人は大變に偉い人達です。私達も日本語を良く知つてゐたお蔭で、今日でも樂に暮して行けるのです——。

晴ればれと云ふワニーヤさんの話には私は何故か暗い氣持ちになつた。

涼しい風が青葉を縫つて流れて來た。此の風は此處から南嶺に流れ中央寺院を越へて道裡にと降りて行き、やがては松花江の水と共に流されて行く様に見えるのであつた。

ワニーヤさんは、此の近所に大變氣持の良い所があるから是非散歩しなさいと云つて、イルゼさんの案内を命ずるのだつ



た。私は餘り氣も進まないものであつたが、すゝめられるまゝに従つた。物の一町も歩むと、馬場の様な廣場に出た。此の邊りは排水設備が悪いらしく所々に沼の様な水溜が出来てゐた。其の水溜を圍んで、或ひは水に漬かつて、楡やアカシヤの大きな樹が伸び切つてゐた。道が大變に悪いので時々私は躓いたが、イルゼさんは慣れてゐるのか踵の高い靴で氣樂に歩いてゐる。樹の葉の生々しい匂ひが、あたり一面に漂つてゐた。

——哈爾濱も大變に變りました。丁度、奉天のように、キタイスカヤも太陽島も昔の姿はありません。

突然の言葉に私は驚いて立止まつた。すると、イルゼさんは私を振り向いて靜かに微笑みながら

——でも仕方のないことです。

と、咳くように云つた。私は何故か、自分が其の責を負はされるような氣拙さを感じた。廣場を越へて彼方の樹林の間から、名も知れぬ寺院の屋根が夕陽に映し出されて美しく輝いてゐた。其れを背景にして、放し飼ひにされてゐる數頭の馬が草を食んでゐた。

——貴方は宗教を持つてゐますか。イルゼさんが靜かに尋ねた。

——いえ、持つてゐません。

——それは大變に悪いことです。私達露西亞人の間では宗教心のない人を、魂を惡魔に賣つた人間と云ひます。あゝ、でも

此れは私達白系の人々の間だけのことです。

と、イルゼさんは終りの言葉を口籠りながら恥かし氣に云つた。

——私達科學者は、信する前に先づ疑ふ宿命を持つてゐるようです。——と、私は靜かに答へた。すると、彼女は

——そうですね。それを丁度、私達がカトリックを宿命的に信じてゐるようなものです。と、背きながら慌てゝ云つた。

私達はそれから暫くの間、黙り合つたまゝ歩いてゐた。すると、イルゼさんは指を唇に當てゝ、突然に口笛を吹いた。

——あそこに小さな馬がゐるでせう。あれは私の一番の友達です。

と云ふと、もう一度高く口笛を吹きながら、其の馬に向つて草を踏み分けて走つて行つた。イルゼさんのスカートが風をはらんで小さくくくられてゐた。私は其れを慮るな氣持で見送つた。

(了)

## 窓 口

### 日向伸夫

その狭い楕圓形の窓からはさまざまな世相が眺められた。全財産を背負つて、あてどなく移動して行く苦力、僅か銅子兒一枚の釣銭の間違ひにも、口汚なく怒號する小商人、高慢な態度で二等切符を買ふ、虚榮の塊のやうな日系小役人の妻等と、榎木浩一はいつも、それを冷静に凝視することに慣れやうと努めながら、時にはつい我にもなく、その雑多な人間が織りなす、多彩な交流の波に捲き込まれやうとした。それは安價な感傷や氣短かな忿懣の形で、自分の立場を忘れて、ぐんぐんと相手の感情の中に喰込んで行くのであつたが、窓口に依つてゐる冷たい鐵の支柱に觸れて、ふと自分を取戻ることがしばしばであつた。

近くに大きな縣城を控へてゐるので、この驛は垂降の客が毎日千人近くもあつた。尤もその殆んどは満入であるが。――

それらの客は朝早くから驛に詰めかけて来た。殊に冬になると、苦力が移動する關係から、この線の列車はよく満員で乗れ

ない事があつたから、午後の列車に乗るものまでが、朝早くから三等待合室に溢れてゐた。

國線では一列車遅れると、もう半日も待たなければ次の列車が来なかつた。そしてそれも賑々満員で、一人の客も乗せない場合がある。それなのに、朝から詰めかけてゐる満人達は、朝この驛を通過する急行に乗らうとほしない。速度の早い座席に餘裕のある急行には見向きもせず、寒い待合室にしよんぼりと、小半日も間のある午後の普通列車を待つてゐるのであつた。榎木は最初、それが齊喬な満人の性格の故だと思ひ、氣長なと思ふよりも、むしろ執拗なものを感ずるのであつたが、事實は、この夥しい人間の中で、僅か五十銭の急行料すら自由にならない人間が、その大半を占めてゐるのを知るのは、さう長くはかゝらなかつた。

みずぼらしい客から白銅のバラ銭を受取ると、體温で氣味悪く熱してゐることがよくあつた。榎木はその度に、ぞつとするうす寒い不潔感に襲はれながらも、それが善良さうな老人の客であつた場合など特に、この僅かな白銅を、堅く一心に握り締めて来た、貧しいひかむきな氣持が切なかつた。

又、時には、やはり細かいバラ銭を出す客の中で、規定の運賃より五銭か十銭の白銅が一枚不足してゐるのがあつた。「錢不夥」と突返すと、そのまま金を收めてすすごと立去つて行く。その金が所持金の全部なのだ。それ以上、一銭の餘分も持

合せてみないのであつた。世帯道具の一式入つた大きい荷物を背負つて、切符の買へないこの客は、どうして目的地へ行かうとするのであらうか。榎木はその淋しい後姿を見送るのが、切なく遺囑なかつた。思はず呼返して、金の不足も見て見ぬふりをして、賣つてやりたい氣持になるのであつた。

さうした客に對して、その不足が小額である場合には、榎木は黙つて切符を賣つてやつて、後程自分のポケットから補つて置いたことが、決して少ない回数ではなかつた。

それとは反對に、ちやんと手に握つて居り乍ら、態を十錢位少く金を出す滿人がよくあつた。それらはきまつて、劑に風采の整つた商人風の男に多かつた。

榎木はこんな些細な事にも、自分の歩んで來た過去にしばしば経験した氣持で負しい者の眞實な善良さと對比的に、富める豊かなものゝ冷酷な狡猾さを裏書されるやうで腹立たしかつた。殊にそれが、金が不足な客に同情的な態度をとつた直後であつたりすると、自分の幼稚な人道主義を嘲笑されたやうな氣がして、思はずかゝつとなつて、その金を激しく突返したりした。

偽造貨の多いのも滿洲らしかつた。偽造貨を受入れた場合は當務出札係が辨償しなければならなくて、會社はそれに對して何の保障もして呉れないから、いきほい細かい注意を拂はなければならなかつた。ひところは偶々受入れる金票の五十錢玉が

決つて偽造であつた。それは極めて精巧に出來てゐて、一見眞物と異らなかつた。だから、その眞偽を鑑別するには音を聞くか、裏物をあてるより外なかつた。

榎木は五十錢玉を受取ると、硝子の上にチーンと落して見てその音を聞きながら、その度に、自分が初めて滿洲に渡つて來た時、奉天の町で滿人の煙草屋が、自分の渡した五十錢玉を、コンクリートの上に落して音を聞いたのを見て、音に聞えた滿人の守銭奴ぶりをまのあたり見るやうで、嫌な不快な氣持になつたのを思ひ出すのであつた。そしてその滿人と同じ立場に立つてゐる自分を羨むるやうな氣持で、客の目に觸れない蔭に隠れて、ひそかに音響を試すのであつた。

日本人の客は一日の間にも數へる程しかなかつたが、これらの中には、構内整理の滿人路警の制止も聞かばこそ、亂暴に滿人を押分けてやつて來て、横柄な口調で金を突出するのが多かつた。榎木はこんな客に接すると、譯もなく腹立たしく反抗的な氣持がこみ上げて來て、態々嵩高な自衒ばかりを釣銭にしたりするのであつた。サービシが悪いと會社へ投書するのが、決つてこの種の日本人であるのを知りつゝも、せめてこの小さな復讐にでも氣持を慰めたい彼等の積累さであつた。滿洲も奥深くこの邊陲に住む倅かな日本人同志の、同胞的な親しむなぞ微塵も湧いて來ないのであつた。

或日、それは日市行の普通列車の切符を賣つてゐる時で、百人

餘りの客が長い列を作つて順番を待つてゐた。その中を押分けて、反對側から窓口に現はれたのは縣の日系官吏であつた。

「後ろへ廻つて順番をお待ち下さい」

と柁木が極めて事務的な語調で突放すと、

「——何、賣らないと云ふんかね」

と激しい傲岸な態度で突つかつて来た。

「賣らないとは申上げて居りません、こちらは誰方も一律にお客様ですから、特に貴方一人の御便宜を計る譯にはゆきませぬ」

「君が賣つて呉れなければ俺は驛長に話して賣つて貰ふが、それでいゝかね。どこへ行つたつて君、日本人は別扱ひだせ」

「驛長にでも誰にでも話して下さい。私は貴方が後ろへ廻つた限り絶対に賣りません。私も日本人です。けれども假にも滿洲國の祿を食む貴方が、そんな非常識な言辭を弄されるのはどうかと思ひますね」

「屁理窟を云ふな。君は若いよ。君のやうな青年に話したつて解らないよ」

彼は決して柁木の理窟に負けたのではないが、衆人環視の窓口での小競合に氣が退けたのであらう、さう捨察詞を残して立去つた。

この若いと言ふ指摘は、柁木にとつて痛い箇所であつた。彼に指摘されるまでもなく、柁木は充分自分の若さを感じてゐ

た。最も幼稚な人道主義と正義感の渣滓を、自分の日常の仕事の中へ、無難作に曝け出してゐるのを、常に痛切に感じてゐるのであつた。

だから、金の不足な客に、自分のポケットから補つて切符を賣つてやつた後では、一人や二人の客に、そんな慈善的な態度で臨んだとて、その客が全的に救はれる譯ではないと、慘酷に反撥するものを感じるのであつた。

又、つい怒りを發して、客と争つたり、はしたない行爲をした後で、決して自分の大人氣ない狭量さが寂しかつた。

よしそれが、自分の人間としての進歩であると、退歩であるとを問はず、柁木はこの所謂若さを揚棄しやうと努めてゐるのであつた。

この幼い人道主義と正義感、年少の頃から親しんで来た文學の影響であらうか、柁木は自分の歩んで来た過去の道程に於いて、この文學の影響が、處世の邪魔にこそなれ、決して利益にはなつてゐない自分を省みて、何事によらず、決して窓口に立つてゐる間だけでも、喜怒哀樂を感じることもなく、淡々と冷静に、それらを處福出来る域に達したかつた。あのロケットのやうに機械的になりたかつた。

だが、切符を賣ると言ふ仕事そのものには、何の興味も感じてゐない柁木であつた。

鐵道に勤めるからには、何の仕事でも一通りは覺えて置かな

ければならないと言ふ、驛長の親切な心遣りから、この出札へ  
綱されたのであつたが、初めて窓口に立つた時には、流石に氣  
がひけて情なかつた。――どうせ踏み迷つて来た道だ、どうなら  
うと成行まかせと常々思ひ、自分を憐れむために、落魄した  
なぞとは言ふまいと思ひ乍ら、友人達との冗談の間に、あゝ  
あゝ、俺も満洲まで来て、切符賣りをするとは思はなかつた！  
と、無意識に嘔吐したりするのであつた。それでも、最初の間  
は缺損しやしまいかと思ふ氣苦勞や、發音の悪い満語の行先を  
聞きとるのに懸命であつたが、やがて半月も経つて、日常の仕  
事に事缺かない規程も覚え、切符を繰出す要領、日附を入れる  
要領も存込み、常備切符の運賃も大體話んじて來ると、漸くこ  
の單調な仕事に倦きて來た。

大きい驛のやうに、歐亞連絡とか、廻遊切符とか、毛色の變  
つた客があれば、又自ら心構へも異なるのであらうが、毎日の  
収入も、行先も、すつかり固定してゐるこの中間驛の出札は、  
單調で變化に乏しいのであつた。

僅かに窓口に集ひ寄る、雑多な人間との接觸によつて、この  
單調な仕事の興味を噛いでゐるとも言へる程本であつた。

或日のこと、入場券を持つて列車に乗らうとした満人を、改  
札係が発見して引却して來た。この中間驛では、出札も改札も  
集札も、同じ室に屯らしてゐるのである。であるから、その無

札の満人もいきほひ、この室に唯一人の日本人である程本が取  
調べなければならなかつた。取調べた上で金を持つて居れば所  
定の切符を買はせ、もし金を持つてゐない場合は、そのまま路  
幣に引渡す迄が程本の仕事の範圍であつた。

程本が案じたやうに、その客は懐中無一文であつた。――無一  
文でどうして列車に乗らうとしたのかと語ると、それには事  
情があるのだから許して呉れと、床に頭をつけんばかりにして  
哀願するのであつた。

その事情と言ふのはかうであつた。彼は春耕資金と稱して、  
金融合作社が土地を擔保に貸出す低利資金を借りるために、  
つばかり離れた驛から汽車に乗つて、この縣城にやつて來たの  
であつた。だが手續きが不備だと突放されたり、同じ目的で來  
てゐるものが多いために、氣の弱い彼はつい後廻しにされたり  
して、毎日お役所に日參しつゝ、漸く金を借りる事が出來たの  
は一週間目であつた。この春耕資金と言ふのは、土地一坪につ  
き八圓を貸すのであるが、貧しい彼は、擔保にするべき土地を  
一坪より持つてゐないのであつた。それが漸く八圓の金は借り  
たものゝ、一週間の滞在費をそれから差引くと、残るものは皆  
無であつた。歸るに歸る旅費もなくなつた彼は、悪いと知りつ  
ゝ無錢乗車を企圖したのだと言ふ。

程本は暗然となつた。この満人の供述の眞偽は、もとより勘  
すべくもない。だが、日常窓口で觸れる貧しい満人の生活の内

面が、多少なりとも解つたやうな気がした。

この現實を、高遠な理想に燃えて駿馬のやうにきはひ立つてゐる、若十の日系官吏はどう見るのであらうかと危しかつた。

榎木は自分の幼稚な感傷を嘲り乍らも、切符を買つて與へずには居られなかつた。

或る雪を孕んだ空の昏い夕方であつた。みすばらしい身装の一人の日本人がこの窓口を叩いた。

この日本人は、日市に於て土木の請負師の下に働いてゐたがその請負師が資銀不揮のまま逃げてしまつたり、その上妻には死なれたりしたため、どうにもならなくなり、所持品も全部賣拂つてハンに代へたが、それも盡きてしまつたので、S市迄行けば昔の友人が居るから、何とかなるだらうと言ふ果敢ない唯一つの希望を持つて、S市まで歩いて行く決心をして、漸くこゝまで進つたのであつた。歩いて行く決心はしたものの、寒さと疲れのために、もう一歩も歩けないから、貨物列車の隅でもいゝ、S市迄無賃で乗せて呉れと哀願するのであつた。

みすばらしい身装はしてゐるが、以前は相當な暮しをしてゐたであらうと思はれる、柔和な、品のある三十男であつた。

榎木がこゝろしたルンペンに接するのはその日が始めてではなかつた。平均して月に一人位の割合で、ほと／＼と佗しく窓口を叩いて、これと類似の申出をして來るのであつた。榎木はそれらに接する度に、自分の流離の歷程を見るやうな遺蹟ない氣

持になつた。つい、身につまされる思ひで、飯を與へ、煙草を與へ、更に、それは規定外れの許されない事ではあつたが、貨物列車の車掌に頼み込んで、こつそりS市迄送り届けてやつた人間が、決して二人や三人ではなかつた。

だがこの榎木の厚意は、その都度裏切られたといつてもよかつた。彼等はその場だけは涙を流さんばかりに喜んで、S市に着いた上は必ず便りをするからと、嫌がる榎木から決つて名刺を奪つて行きながら、誰一人として、葉書一枚よこした者はなかつた。その度に榎木は苦しい寂しい氣持に陥れられた。

その日は才度、その苦しい氣味を味つた直後であつた。だが枕掘に泣言を並べられれば、つい又それにほだされたであらうがその日は折悪しく、驛の業務を指導監督する日付役である、鐵路監理所の監理員がその席に居合せた。その手前に對してでも、斷るより外なかつた。

榎木が素氣なく拒絶すると、彼の顔には激しい絶望の色が浮んだ。榎木はその顔を見るにたへなかつた。窓口を閉じて、じつとそつぽを向いてゐた。彼はしばらく、閉ざされた窓口に佇んでゐたが、やがて諦めたのか悄然と去つて行つた。何とも形容し難い寂しい後姿であつた。

夜になると激しい吹雪になつた。この吹雪の中を、あの男はどうしたであらうか。榎木は夕方の素氣ない態度が悔いられた。せめて疲れの癒える迄でも、自分の家に置いてやればよか

つたと思つたりするのであつた。

ズツク張りのベットで徹夜の假睡から榎木が、ふと目覺めると、遠方信號機あたりで、列車が激しく汽笛を鳴らしてゐた。リーバーが凍つて信號が降りないのだらう位に思つて、またうと／＼としかけてゐると、誰かどすく窓の外のホームを

「睡死だ！睡死だ！」

と叫んで擔架を擔いで走つて行つた。瞬間、榎木の目の前には、あのルンベンの絶望し切つて肩を落した佝僂しい後姿が泛んだ。「若しや、あの男が……窓の外を多勢の人間があはたどしく走つて行つた。

やがて擔架に乗せられて運ばれて來た死骸があつた。それは果して夕方の、あの男であつた。

榎木は自分が直接手を下して殺したやうな、激しい自責に苛まれた。

何度もその氣持から立直らうとしつゝ、その後しばらくは、あの、自分が拒絶した瞬間、ルンベンの顔に現はれた激しい絶望の色が目先にもらつてならなかつた。

———



## 齡

富 田 壽

女學校の秋季運動會が、今年も盛大に舉行された。坂ノ上君は、父兄競技の颯約り競争に出場して一等賞を貰つた。同じ競技で、彼は去年も一等賞を貰つた。そして、長女のじ子が、今年も二年生であつた。

秋は、一日陽に傾らされてゐるだけで、ほどよく疲れを覺えさせる。その上、競技に出場したりして、坂ノ上君は一層疲れを感した。彼は、風呂から上ると、珍らしくビールを所望した。

「あゝ……氣持よく疲れた」

最初のコップをグ、グーと一口にあけて、さう云ふと細君がクスツと笑つた。

「何がおかしいのだ」

「お父ちゃんの今日の走り振りを思ひ出しまして……」

「すばらしかつただらう、ランニングだけは得意なんだから」

「でも、あんまり一所懸命ですもの」

細君はおかしさが止まらぬらしく、笑ひながら云つた。

「一所懸命だとおかしいかね？」

一着になつた瞬間の、子供の様な満足感が思ひ出され、坂ノ上君も幾分笑ひたい氣持だつた。だが、突然、

「……みつともないわ」

黙つて食事をしてゐたじ子が、つゞの様な聲をなげつけた。

「ワ……」

「……あなたのお父さんで、大人のくせに必死に走つたりしておかしいつて——皆に笑はれたわ」

「ホウ……でも、當り前ぢやないか、必死に走るのが競技なんだから」

娘の不服らしい口吻が氣に入らず、坂ノ上君は思はずムキになつて云ひ返した。じ子はそれ切り黙つてしまつた。カサカサと箸の音だけさせてゐる。坂ノ上君は何となく氣になり出した。ビールの酔はさめてしまつてゐた。

父兄競技で、自分の父だけが必死になつて走つてゐると考へるじ子の考へ方は間違つてゐる。外の人達の走り方がまるでなつてゐないんで、そんな風に見えたんだ——と、坂ノ上君は説明しようとして、それは止した。

もともと彼は、競技に興味をもつてゐたわけではない。だが、「走ると云ふ様な野蠻な動作は、見榮も外聞も要らぬ若い連中のすることであつて、いい齡をして紳士のすることでない」と



考へてゐる人々に、坂ノ上君の考へ方は根本に於て違つてゐたつまり、彼の氣持の若さには「見ろ、走るのは、こんな風に走るんだ」と、勝負は別にして、何かなし元氣のいいところを見せてやらねば納まらぬものがあつたのだ。

だのに、今「みつともない」と、一言で娘にきめつけられ、坂ノ上君のその氣持は、少しぐらつて來たのだ。何だか「いい年をしていつまでも若いもの眞似など止した方がよからう」と、叱られてゐる様な淋しい氣持だつた。

しかし、考へて見ると、つひひ、二年前まで、じ子だつてこの父をまだ若いと思ひ、一緒に街を歩くことさへ厭つたではないか、去年の春、入學式の日にも、見渡したところ、坂ノ上君より若い父親は一人も附き添ひに來てゐなかつた。若い父を持つて「じ子よ、お前はほんたうに不幸だと思つてゐるのか」と、彼は眞面目に訊かうと考へたことさへ度々あつた。だのに、今は老いたる父だと考へてゐるのだからか、それならばそれもいい――

坂ノ上君は、そんな風にも思つたが、翌日になると、もうその日のことは忘れてゐた。

× × ×  
いく日かすぎた。

秋が深まり、夕ぐれ雨の音が、日本の秋を想ひ出させる様にきこえてゐた。

「到頭本ふりらしいナ」

「ほんとに、今日に限つてにくらしい雨ですわ」

坂ノ上君の旅たちを控へて、細君も「困つた雨」だと云ふ顔をした。

坂ノ上君は湯上りの頭にペーラムの帯をしたたらし、櫛をあててゐた。

細君はそばで手提鞆に、旅行用の歯磨、石鹸、塵紙など入れてゐた。

その時、隣室からじ子が質問した。

「還曆つて六十一のことね？」

「さうだよ」

「では、初老と云ふのは？」

「四十のことだよ」

すると、

「まあ、お父さんも間もなく初老なのね……」

じ子は、いかにも感懐深げに云つた。坂ノ上君はそれには答へなかつた、細君が代つて、

「さうですよ、いつまでも若くはないんですから、心配かけないやうにしなければなりませんよ。」

と、云ひ、彼女自身も、夫が間もなく四十になると云ふ事實に、今はじめて氣がついたらしい風情で、改めて夫の方に視線を向けた。

坂ノ上君は、それには氣つかず、櫛についたぬけ毛を丹念に拭きとつてゐる。

「ずゑぶんうすくなりましたのね……」

細君が、こんどはおどろきをひそめた聲で云つた。

「そんなにうすいかナ」

「まあ、ごじぶんでは分りませんが、まん中のところ、ずゑぶんうすくなつてゐますわ」

わざわざ合せ鏡をもつて来て、夫にのぞかせた。

「ホウ……」

坂ノ上君は、知らないわけはなかつた。が、こんなにもうすくなつてゐるとは思はなかつた。チーンと、身にこたへる心細さを覺えた。

——同年輩の誰彼で、既に頭髮の薄くなつてゐる者が澤山あつた。早いのは二十歳から頭の地の透いて見える者もゐた。薄くないのは白髪が眼立つ年頃だつた。日の悪い親友の一人は、三十歳でもうきれいに充けてゐた。彼は坂ノ上君の顔さへ見れば、君の様にいつまでも頭の黒い奴は一生貧乏するんだと云つた。坂ノ上君は、先年六十五で死んだ父が、晩年まで濃い頭髪のまゝ、生涯貧乏で終つたことを想ひ浮べた。貧乏には慣れてゐて、それほど恐ろしくもない。けれども、頭だけ死ぬまで黒いのはいかにもおぢむさく、慘めだと思つて来た。

それが、今、現實に薄くなつた鏡の中の自らの頭をのぞいて急に心細さを覺えるのは、どうしたことなのか。

「……ぼつぼつ金が出来るんだね」

誰にともなく云つて、うすくなつた脳天を靜かに撫でた。

細君は、笑つて、同じ薄くなるのなら、額の兩脇からの方が恰好がいいけれど、と云つた。

坂ノ上君は、ふと、運動會の日のことを思ひ合せ、次第に憂鬱に落ちこんでゐた。いつまでも若い氣であるよう……と心にきめてゐた自分が、周囲から笑ひものにされてゐる様に思はれた。そして、そう思ふと、今まで張りつめてゐた肉體のふしぶしまでが、脆くぼろぼろと崩れて行きさうなほかない氣持になつた。

——近いに結婚する筈の同年の友人があつた。複雑した家庭の事情で、今まで機度があつた結婚話を見合はせ、本當の初婚だつた。

「男子四十歳まで結婚しないでゐることも不幸なら、四十歳にして結婚するのも亦不幸ですね……」

二人でおでん屋で酒を飲み、その友人はしみじみと云つた。

「凡ては考へ方ですよ」

五人の子供の親である坂ノ上君には、この友の心理が分らう筈がなかつた。しかし、早く結婚したと云ふだけで、不遇つゞきの半生には青春らしい生活は一つもなく、自らの言葉に嘘は

ないと思ふのだつた。

「僕は、常に若い氣持であること——これが一番大事だと思ふのです」

「左様、年齢を考へないことですね」

酒が少し廻つて、友もいつか感傷を捨て、元氣を取り戻してゐた。

二人は、少しもつれる足どりで、寂れた酒場のドアを押した。そこでも、

「日本人持前の、あの老練根性は唾棄すべきですね」

「さうです、殊に滿洲にある日本人、就中給料生活者などの考へ方はなつちやるませぬね、三十になるかならぬに、ひどく年寄り臭くなつて、覇氣と云ふものをまるで失つてゐる。あれで滿蒙開拓者の一人だと思つてゐるのだつたらあきれた話ですよ。」

と、日頃誰にも話したことのない言葉が口をついて出るのだつた。

「我々日本人は、もはや外國人に何も學ぶ必要がない、だが彼等毛唐が年齢を忘れていつまでも活動する、あの元氣だけは學ばねばならぬと思ひますね。藝術家などでも外國の作家は、多く晩年に大作を成してゐる。日本では、軍人、政治家を除いたら、大抵隱居生活をたのしみにしてゐる」

「家族制度の美點かも知れないが、隠居と云ふのはよくない

ですね、お互ひ子供の世話になつて餘世を送ると云つた様な生き方はしたくないものですよ」

「結局、人生四十からと云ふのはいい教訓ですね」

「さうです、いい教訓です、四十からお互ほんとの仕事をしようぢやありませんか」

二人ともあまり飲める口ではなかつたが、いつの間にか五、六本のビールが空になつてゐた。搦手して、「乾杯——」と叫ぶと傍の女給があきれ顔で、

「まあ、あなた方モダン・デイズ見たいね」と云つた……。

坂ノ上君は、その時の情景を思ひ出し、あれは決してウツの芝居ではなかつたと思ひながら、今はどうしたものか氣持が引きたたなかつた。

雨は益々はげしくなり、風さへ少し加はつて、窓ガラスに當る雨の音が、室内まで寒々とした冷氣を感じさせた。

出発の時間が迫つたが、この雨ではバスの乗場まで行くのも大へんだつた。

細君は洋車を探しに出て行つた。けれど、夜更の雨で、洋車さへもゐなかつた。

坂ノ上君は仕方なく、雨の中をバス乗場まで濡れていつた。驛について、彼は、何故かホツと救はれた氣持になつた。

眼前の緊張した光景が、一瞬の中に、彼の感傷を捨てさせてしまつた。何處の戦地へ向つて行く部隊か、ホームは重々しく

武装した兵士の姿で一ぱいであつた。いましてどこかから行軍して来たのだ。どの兵もどの兵も雨に濡れて、鐵兜からは汗がたれてゐる。

坂ノ上君は、僅かでも濡れて来た自分に軽い申しわけを覺えながら、この頼もしく力強い光景に敬虔な眼差を送つた。そして、彼は今更の様に、戦地にある同年輩の出征者達を想ひやつた。否、それらの人達には、年齢も何もないのだ。

× × ×  
やがて、十日の旅が終りに近く、坂ノ上君は二日の後には再びあの覇氣に乏しい、ともすると年齢を考へさせる南滿のせゝこましい生活に歸らねばならない。

北滿は今丁度實のりの秋であつた。今年は少し陽氣が長くつき、例年ならば一夜の寒氣で散つてしまふ筈の樹々の葉が、野山一面に紅葉し、日本の秋を偲ばせてゐた。松花江の岸邊に立てば、そこにもまた一つの感傷が湧くのであつたが、それらは決して人間個人を考へ込ませるたぐひの感傷ではなかつた。

坂ノ上君は、旅先で圖らずも、移民地の状況を見せて貰ふ機会を興へられた。専門の知識に乏しい彼には、農業經營のことは何も分らなかつた。だが、開拓僅か数年にしてこんなう派な村が出来上るものかと、今更机上では想像もつかぬ成功に感嘆した。ある時は匪賊の襲撃に身を曝し、ある時は天候の脅威と戦ひ、文字通り惡戰苦闘の歴史が今漸く實を結びかけてゐる。

しかも、小さな不幸は、今も全然ないとは云へず、涙ぐましい努力が黙々として曠野の果てにつゞけられてゐる。そして、ここにもまた年齢などについて、觀念的な思索に耽ける餘裕が微塵も感じられなかつた――。

× × ×  
旅の宿の、最後の夜であつた。

寒氣にはまだ少し早い、夜が来ると何となく冷え冷えとし北滿の僻地にゐる寂寥がひしひしと感じられた。

うす暗いランプの下で、坂ノ上君は、視察地で貰つた資料や報告書などの整理をしてゐた。

と、何氣なく手にしたS移民團報告書の一頁が、ゆくりなくも、強く彼の注意をひきとめた。

「老盛會

一、設立ノ主旨

「四十五は是たれ小僧男盛りは六、七十一

「やらうと思へば何でもやれる心構へぢや奮闘ぢや」

「負けるものかね子供や孫に多年鍛へた腕ぢやもの」

「頭垂けたも白髪が出たもみんな絞りし智恵の跡」

ソレテ體力ノ額々限り大イニ奮闘モシ、特ニ多年ノ經驗

ト修得シテキル知識トヲ以テ若者ヲ指導シ鞭撻セネバナ

ラス、氣力衰へ體力弱リ老人臭クナツテハS移民團ノ發

展ニ害アツテ益ナシ、仍テ一老いて益々盛なり一ヲ標語

トシテ本會ヲ創立シ元氣ノ良イ老人ガ集ツテ若イ者達ニ  
模範ヲ示シツツアル

會員ノ資格ハ

正會員 男女共五十歳以上

准會員 同 四十五歳以上

二、事 業

偉イオ父サンオ母サン又ハオチイサンオバアサンニナル  
様自ラ努力スル事

各人ハ其ノ村ヲ善導スル事

郷及村ノ發展、團員ノ向上ニツキ隨時懇談會ヲ開催スル  
事

本會ノ決議事項中必要ノモノハ移民團長ニ建言スル事

會員相互ノ親睦ト慰安トヲ計ル事

以上(原文のまま)

讀み終つて坂ノ上君は思はず微笑した。何と云ふ頼母しい老  
人達であらう。眼に見えぬ親しみが暖く感じられた。何となく  
身肉つらづく思ひで、彼はその報告書の餘白に樂書をした。

——四十而不惑——

坂ノ上君自身どう云ふ意味でそんな樂書をしたのが分らな  
かつた。だが、それは——老人達に負けてはならぬと思ふ、彼の  
偽りない意志表示に違ひなかつた。——一三三・二、二一九

# 天使は欠伸する

奥

「掌櫃殿！」

長斗が蕪掌櫃の店の硝子の煙草の箱の上に銅子兒を一枚投げ出した。

北滿の秋の初めである。

蕪掌櫃は販筭子と商舖を兼ねるこの裏町で唯一の盜門から許可を受けた商賣人である。で許可證を看板と同じ位の大きさの板に書いて表に打ち付けたこゝら界限での顔役である。

だからこの裏町に何か事件があると例へばあばれ者を取り押へて衙門に突き出したり、又誰か運悪く引つかゝつて引っぱられ相になるとお手の物の一ぱい献上して寛大なる御處置を仰ぐのも皆蕪掌櫃の領分になつてゐる。で、町の者は皆彼を「蕪掌櫃」と尊敬しお客に出来るだけこの家で物を買はせる様に仕向ける事になつてゐる。

「掌櫃、高樂飯！」

夕方近くが忙しいのであろう。二回目に長斗が嘯鳴つた時や

うやく麴條子でもこしらへてゐたのか眞白い手をして出て来た。

硝子箱の横には葡萄、蘋果、梨子など南から来る秋の果物の中に今日は又、美味そうな仲秋月餅が顔を見せてゐた。

「美味いだらうなあ」

思はず長斗が指先でつゝいた時蕪掌櫃がにこ／＼しながら茶碗に山盛りの高樂飯を持って出て来た。

「長斗、月餅が来たぞ、うまいぞ、おつ母アの旦那が来たら買ってもらへよ」

悪い所を見つけられたと思つて急いで馳け出したが蕪掌櫃は相變らず微笑しながら奥へ引つ込んだ。

長斗のつゝいた月餅は心持ち窪みが出来て秋の香を町にばいに傳へてゐた。

× × ×  
長斗の家では媽の桂花がお化粧の最中であつた

温寒兒一間切りのこの部屋は眞中にメリケン袋を纏ぎ合はした仕切りがされて小さい方が長斗の野床で大きい方が媽とお客の寢床になつてゐた。

長斗は物心がついてから殆んど媽に拘かれて寝た事がなかつた。

雨が幾日も続いてお客が誰も來ない晩は抱いて寝てくれるのは嬉しいには違ひないが翌日はモソの吸へない母親は一日中物



兩眼淚盈々滿腹愁腸未得明。

父々の李先生の胡弓も一生懸命である。

「不行、再一回」

今日はもう何十回目かの「再一回」である。

李さんの額と鼻の頭には脂汗がにじんでゐる。

空自愁眉淚眼、雨夜中憊他眞薄情、

很他不盡情……

はつきりした意味は分らない。がこの父の好んで教へてくれる紅樓夢の歌が、こゝまで來ると何となしに胸に迫つて歌へなかつた。

李さんの家は誼掌櫃と違つて衙門の許可證をくれない商賣である。

最近衙門の眼が厳しくなつてめつきり商賣が出來なくなつた。いやそれでもこつそり買ひに來る客は相當あるが、元が止まつてしまつたので今あるだけの藥を賣り盡すともうお終ひである。で、ませ物をうんとして高く賣るのであるがそれももういつまでも續くものではなかつた。

やがて冬が來る。

今までさへ不如意勝の李さんの生活が冬が來ると尙更ら大變である。

商賈納人間の最後をあまりにも澤山見せられてゐる。李さんは自分もあゝなつて路傍で野たれ死にをすと思ふと堪らなく

なつて自分の娘の小茹を都の書館へ賣る事にしたのである。

半月ばかり前の事だつた。

都の女買ひがこの町に來て目星い野鷄を二人連れて行つた。勿論五十元位にはたいて賣り飛ばすのであろうが野鷄には家族はないから金は女買ひの入れ根の男が取つてしまふのである。

その女買ひが誼掌櫃の店で酒を飲みながら賣り飛ばす野鷄に飯を食はせて色々都の話聞かせてゐた。

「都はいゝぞ、いゝ着物が着られて、美味い物が食へて、男達は皆親切で金を澤山呉れて」李さんはその話を聞いてゐた。

そして氣味悪い枯ら顔の入れ根の男の顔色を覗ひながら恐るゝ聞いた。

「そんなしゝ所でしたら一つ家の娘も買ふてもらひ度いですが、如何ですか」

男は小茹を見て嘲笑つた。

「こんな小せえの間に合やせんじやないか、いくら都でも間に合ふまで只で飯を食はさんならん奴に高い金出せるかい、ま

ま體のお慈悲で買ふとして十元じやな、これでも歌かうまけりや藝奴の見習ひと云ふ事にして八九十元に出すが」

それからと云ふものは李さんは一生懸命である。

冬までに歌を覚えさして、賣らねばならない。あの意地悪そうな入れ根を思ひ出すとゾツとするが、それで



もうまく頼めば百元は出してくれるかも知れない。

小茹も一生懸命である。都へ行けばいい着物が着られておいしい物が食べられる。

やがてこの裏町に宵闇迫つて電燈が点く。この春から電燈が点く様になつたこの太陽のないじめじめした裏町はどこの家でも晝より夜の方が明るい。

桂花の家の前の電柱にも十燭光の電燈がついて、その下に西瓜の切賣りと、賣包米が店を開いた。

夜が来たのである。

あちこちの臭い細い露路裏から、姿ひなた天使達が顔を出した。苦力氏、馬車マンを主なるお得意とするこの裏町はもうそれらの人々が大分押しかけて来てゐる。

胡弓も一段落付いたと見えて小茹がバイエコーを買ひに出て来た。

新ジャングイの店はお客で一ぱいだつた。(腹が減つては職が出来ん)からである。

もううまく鴨をくわえた果報な女は笑ひながら男と向ひ合つて、水餃子なんかを食つてゐる。

〔掌櫃、白酒〕

と云ふ小茹の聲も店の中の喧騒に消され勝ちである。新ジャングイはとても忙しいであらう仲々出て来なかつた。

「小盗兒！小盗兒！」

けたまふしい叫び聲に小茹は驚いてふり返つた時はすぐ自分の横に立つてゐた花子が月餅を一つ掴んで、それがもう氣の早い連中に叩かれて仲ひてゐた。

月餅が踏み潰されて、クルミや西瓜の種を出したのを素早く拾つた男がゐる。泥の様な打嗝啡である。

これは誰も叩かなかつた。

もう道は人で一ぱいだつた。

新ジャングイの家の横の露路から秀芳が出て来た。

合物のオーバーなんか着込んで仲々シャア／＼してゐる。

彼女は旅館専門で一才高等の方になつて、お客があれば夥計が呼びに来て、うまく行くと一晩五元位になる。で夥計に半分とられても結婚他の女達の一週間分にはなるので半年十二元の家に住つたり、いゝ着物を着たり買ひ食ひをしたりも出来る身分である。

〔西瓜！〕

半角ニツケルを投げ出して西瓜にかぶり付いたのを他の女達は羨ましそうに見てゐた。

彼女は他の女達とは全然口を利かない。又他の女達は彼女に反感を持つてゐる。

同じ女でありながら、いや同じ野鷲でありながらあの高慢も

きな恰好が氣に入らんからである。

きな恰好が氣に入らんからである。

李さんは胡弓を壁にかけて、テーブルの前でパイチューを召し上つてゐる。

お客が五六人來てゐて小茹が藥を湯突兒のアンペラの間から出して賣つてゐた。

部屋の隅では二錢足りなくて賣つてもらへなかつた男がうづくまつてうん／＼うめきながら聲東ない言葉で呪つてゐた。

李さんは毎度の事で、そんな事はちつとも氣にとめずに黙つてチビリ／＼やつてゐる。

「まけてやると癖になるから駄目だ」  
こんな時、いつもそう云つてなか／＼聞き入れない事を知つてゐるので小茹は何も云はずに捨て／＼おいた。

それにしても早く都へ行き度いものである。都へ行けば皆親切で、いゝ肴物が着られて、おいしい物が食べられる。

小茹はこの氣味悪い生活から抜け出して一日も早く都へ行き度い氣持ちで一ばいだつた。

女達は胸を突き出して尻をふりながらよち／＼と歩いてゐる。

語ジャングイの家の前から、三本目の電柱の下まで、何回も何回も往復する。

桂花の家の前の電柱の下は物賣りもゐるし、一番人が澤山ゐるから特に念入りに氣取つてお尻をふる。

男達は顔をのぞき込んでからかつてゐる。女は目に物云は

せて男は指を一本出して――これは十錢でどうだい、と云ふサインである。

女は三本出してそのうちこのバッテリー、サイン慎重に決まればOKである。

官吏であろうか、この界限のお客としては一寸不似合ひな袂褌なんか着込んで、瓜子兒の皮を口から吐き出しながら周囲を見廻してゐる。女達はこゝを先途とモーションかけて袖を引つばる。

鴉片でも吸ふと云へば、お相伴出来るし、又金も澤山呉れるであらう。

こんな上玉は一寸ないのでそれ／＼仲々の御執心であつたが壁に屋守りの様へばり付いてゐた女にあつさり取られたので盛んに怒りつきながら唾を吐き散らしてゐる。

秀芳は今日はお客がないのであらうか、まだ夥計が呼びに來てくれない。いゝ氣味である。

でも彼女にすればプライドがある。取り遣した恰好で菓子なんか振り分けてゐる所を、二本一錢の煙草を買つてゐた男が顔を／＼いた。

「什麼だ、混蛋」  
ピンヤリと平手打ちを食はして行つてしまつた。

男が頬つべたをつゝいたり、聲をかけたたりするのは、その女に氣があると云ふしるしである。

他の女達はそれを望んで歩くのだが秀芳は客棧で鴉片でも吸はしてくれる上等の客以外は汚らわしいと思つてゐる。

どぶ板の向ふでは長斗がボカンと往來を眺めてゐた。その近くで一人の男がうづくまつて、肩ぬぎになつてにぶい電燈の光で風をつぶしてゐた。

劉さんが来た。縮袍を着て、何か手にぶら下げて――多分長斗へのお土産の月餅であろうか、長斗はす早く見つけて母の部屋へ引つぱつて行つた。

「もう冬が来るでな、明日山東へ歸ろうと思つて」劉さんは苦力頭である。だから他の苦力なんかより身入りが多かつた。

山東には妻も子もあつて、劉さんの歸りを待つてゐる。

國へ歸ればもう來年の解氷までは戻つては來ない。

桂花は悲しかつたが、長斗は月餅を澤山もらつて大喜びである。

大分夜が更けた。

酒ジャンダイの店も表戸を閉めて女達はそれなしくわき込んだのであらうか、町はめつきり人通りがなくなつて、どこかの家の死にそこなひの囁きが、悲しそうに最後の聲をしぼつてゐた。

表情の硬張つた紫色の女が、やうやく待望のモヒ代稼いだらしく、重い足を引つづつて李さんの家へ入つて來た。

一包一角の白い粉を、盃に水でといて注射器に吸はせて腕をまくつた。

左の二の腕は暗紫色に腐つて、どこにも皮膚の色をした生きた部分になかつた。注射針を持つ手がふるへる、早く注射をしたいのであらう。

右の腕は肘まで腐つてゐた。

女は襪子を下げた。臍の周囲も針の跡が無数にあつて、灰紫色の斑點になつてゐた。それでも腕よりはいくらか生きた部分があつた。

夢中で針を突き込んで、五分―六分―歯を喰ひしぼつて注射を終へて女はグツタリとした。恍惚境と云ふのであらうか、やがでその顔にホンノリと生氣が甦へつた。

女はいつまでも動かなかつた。此の世の中の最大の快樂に陶酔し切つてゐるのである。

オンドルの上では纏足を巻き代へてゐる女がゐる。裏側へ折り曲つた足の指は指で伸しても伸びなかつた。それを縋帯で、緊つかりと巻き代へて赤い小皮鞋を履いた。

小姑は眠つてゐる。長斗からもらつた月餅はまだよう食へずに枕元において、平和な寝顔は都の夢でも見てゐるのであらうか。

路傍ではモヒの切れた男が、苦しそうに着物の襟を拭んでゼイ／＼うめいてゐる。

電柱の下にはもう賣西瓜も包米もゐない。

露は電にふい光を投げて、秀芳の薄い影を地に引いてゐた。彼女はどう／＼今日は誰も呼びには来なかつた。

「菓子、饅餅菓子！」

物賣の聲がいやに冷々と身にしみる。

「呔！賣饅餅菓子來！」

どこかの家の窓が開いて呼びとめた女がゐる。

「畜生！いゝ鴨でも掴いてやがんだらう！」

そら／＼へばあの汚ないと食洋糞共は一人もゐない。雑花も今頃は劉さんとシツボリ別れを惜んでゐる筈だらう。秀芳はベイク／＼唾を吐きながらセイ／＼うめいてゐる死にかげのモヒ申を思ひ切り颯飛ばして大きな穴仲をした。

# 空しき部落

——長篇『混濁』の一部——

## 穴戸貫一郎

五日も六日も霖雨がふりつゞきかうした季節になると何處の村へ足をふみこんでも甘つたるい養蠶の匂ひがアンと鼻毛のよれほど強く刺戟するのであつた。勿論農家の土間はじめじめとして湯氣を呼び、かび臭い匂ひが胸にむかつき、はては顔を横にわち向けたくなるのである。

月並みな言葉で言へば羊腸に似たとでもいふだらう、うねうねとした街道を西へ、次の温泉町へ急ぐ渡送手尾助の饒頭笠が、これはまた霖雨の中を左右にゆれ、黒い合羽姿がすぐ眼の前に近づくと、何時もの元氣のいゝ足に合せてかけるかけ聲がホイ、ホイ、ホイと聴えて來、渡送兩を肩に、背骨のあたりまで草鞋の跳泥をとばして走りすぎると、村の人たちは、もうすぐ晝になるのう、と申合せたやうに申食の仕度を急ぐのであつた。

アルプスといつても裏日本寄りの姫川を北岸に沿ふて走る

街道の橋を渡つて突當り、菅谷の生へた道標には「右×村」「左△村」と楮書で彫込んであるのだが、其處から更にうね／＼した敷道を南へ入りこんだ細野田村「全村殆んど蠶に圍まれてゐる部落なので一名竹蠶村ともいふ。我國にはまつたく珍らしくやせほうけた土地ではあるが、勿論米穀物はおろか豆類までもすつかり間が抜けて了ひ、菜の類までがしぼんで了ふといふ。時にはこんな盆地にも珍らしく淫世の風が吹くものなので」。

隣村の貧家から丸本製絲工場へ通ふ女工の四五人づれば、村の突附である草刈場の敷治ひをつきぬけ、春枝の家の前まで來ると、その中の年嵩の一人が門口から、しわがれ聲をかけた。

「春枝さ、どうしてさうしたなも、またさうならんかいのう。」  
春枝はすぐにその聲を耳にしたが、身體がま／＼たくげだるい上に、加へて頭痛が激しいので、口をきくのが億／＼うだつた。春枝は先刻から薄暗いじめ／＼とした裏納戸で脚氣第三期性のやうに白くむくんだ兩足をだらとなく投げ出し寝そべつてゐたのだが戸口の方へは更に無關心らしく起きて行かうともしなかつた。

丸本工場の絲とりにも暫く行かずには休んでゐることだし、時偶開華としての親切さから斯うして立寄つてくれるに違ひなからうが、春枝にはそれが却つて有難迷惑で仕方がなかつた。それは本當の親切心や老愛心から聲をかけてくれるのではなく、何か秘してゐる自分の秘密を探り出し、工場へ行つてから九時

の休み、晝の休み、仕事の折々にうるさく口喋りたいからに違ひないと思ひ、つまり態のよい仕打のやうにすつかり歪んで考へてゐる春枝だつた。

事實村の女工たちは喧さかつた。何か話の種があつたとすればそれに輪をかけて話し出し、果ては工場の監督さまにまでも告口して何か得やうといふ狡猾な打算的な考へを持つてゐる者も居ないではなかつた。然し現在の春枝の場合には皆が皆さうではないことを知りつゝも、どうしても朋輩全部がそのやうに思はれて來、獨りチツとしてゐてブツ／＼當り散らしてゐたいやうな、時折何かしら耐へ難い衝動をうけた時のやうにすつかりヒステリックになりきつた氣持の方が強かつた。

そんな風なので、今しがた母親のおふくが、春枝をお前飯喰べるかえのう、と種物にでも障るやうな優しさで尋いたのだが、それには満足な返事もせずとむつつりしてゐ、果ては、いらざるお世話だと強くつてかゝり荒つほい立振舞ひをする位なのだから、今、朋輩たちが門口で話してゐるのさへ、どたい春枝の輪を引くはずぶるのであつた。

それでもおふくだけはつい今迄春枝との口論でまだ興奮してゐた顔色へ、急にとつてつけたやうな愛想笑を浮かべるのであつた。

「ようほんまに尋ねておくれさつたのうし、あれはどうも脚氣らしいぢやで、今も奥で寝とるんがでーお前さん達は

いことぢやのうし毎日よく根の出ることぢやなもー」  
「あれ、そいがんか、脚氣ぢやかえや、そりやいかんこつちやで。」

さもお氣の毒に耐へん、といふやうに朋輩たちは顔を見合せ眞面目な眼付で頷き合ふのであつた。

「困つたもんぢやなアーお天氣がこんなだて無理もなからうが工場へ通ふのにも大變ぢやなも……わし等でもどたい身體がけつたるいぢやで……」

と、言ひさも大儀ぢやなもといふ風に枯木のやうな拳を後へ廻はしては、腰のあたりを二三度コンコンとわざとらしく叩いて見せるのであつた。

「さうぢやなア斯う毎日降つてくれてはのう、靴用もえらう濁水が増したといふぢやけん……あ折角春枝さん大事にしておくれやのう」

朋輩たちがお世辭を殘して去りかけた後から、いらう濟まんかつたのう、ほんまに有難うさんといふおふくの莫迦丁寧なお辭儀には最早振向ふともせず女たちは何かほそぼそと囁き交しながら急にいき足になり夕暮の道へ消えて行つた。

春枝は朋輩たちが去つてからでもまだ焦らだちさを覺えてゐた。きつと工場では寄ると觸ると自分の批評で持ちきつてゐるに違ひないと思ひ——と思ふと自分の意志だけではどうにもなるものではないことを、はつきり感知してゐながらも今から飛び出

して行つて朋輩たちの後から誰彼の區別なく精一杯面罵を浴せかけてやりたい焦燥感を覚え、唾を吐きかけてやらうかのうと全く常でない腹立さに襲はれるのであつた。

すぐ其處の廟下へゲツと押し迫つてゐる裏の竹藪へしきりと降り注ぐ雨の音が身體全體に侵入るやうに伝ひしく耳へひびいて來、それに身體中がけたるいし、時折激しい嘔吐が胸底から押しつけてくるのでたまらない不愉快さであつた。何をしやうにもすぐいやになり、わけても兩足がそのつけ根から脱け落ちてゆくのではないかと思はれ、少しは胸氣の氣味もあるのに違ひないと無理に其處へ考へを落付かせやうとするのであつたが、しかし春枝には斯うした重だるい、押しつぶされるやうな身體になる理由は充分に覺えのあることであつた。

男に誘はるゝまゝに程遠からぬ温泉の町に出たその日は一月の月もあと二、三日で終りに近づき、早春の匂ひが山峽を壓してゐたが今にも清水のやうな雨の落ちて來そゝな灰色の空模様だつたし冷たい風が昨日の夜から強く吹きつき、乾ききつた街道には馬糞交りの砂ほこりが午後になつてからも舞上つてゐた。

町の本通りから少し横道へ外れて裏町の細のれんに「御中食」「三原屋」などいふ看板文字が見え、その前までくると男は急に立止り、そばでも喰べてゆかうかと誘ふのであつた。そして大膽にも押強く春枝の横顔を覗き込み、春枝にどうしてもいや

とは言はさないぞ、といふやうに、半威嚇的な眼ざしをちつと向けるのであつた。

男と二人で「そば」を食へる、それだけのことで春枝には何か恐ろしいことのやうに思はれ、幾分躊躇されたのであつたが、それでも黙つて應諾の顔色を示した。男は春枝のかすかな顔きを見て満足し、無遠慮に繩のれんをぐつとくくり、足早に靴を脱ぎ乗て縁端に上るのであつた。一階に通ずる階段の中途から、それでもまだ不安心と羞恥心な氣持でおどおどしてゐる春枝に急いで昇つて來いとも言ふやうに促すのであつた。

夕暮れになり、男は倅かの酒に酔ひ、何か心に蕪めくものを制御するやうに、赤茶けた頭髪を細い女の指のやうな手でつまみあげてゐるのであつたが、鋭い眼で春枝の動きを追ふと、やがてそれがみだらな色に變り、ぬつと身體を伸ばして立塞つて來た。

「何をするんたも、この人つたら——」

と、春枝は低く聲に刃を入れて男を詰つた。

男の凝視が執拗に迫つて來、やがては男の胸が特別大きく廣がつたやうな氣がした。撥ねのけきれそうもなく見え、ぐんと強く突きとばしてでもしまへさうに、氣輕く考へてゐた春枝の心に、何となく重く抑へつけてくるものを感じさせた。やがて男の異様な半暖い體臭が春枝の全身をしびれさせて來、いやいやと首を左右に振り動かすのであつたが、その抗らひも、屈從



のなかでの僅かな身動きにすぎないほど暖味なものであつた。

「ほら、着物をこんなにしてしまつたなも——」

二人で立ち上つたとき、春枝は獨り言を言ひ、しわのよつた人絹着物をもとどほりに直そうとして、もう一度かがむのであつた。春枝の背の上で男は満足そうに笑つてゐた。

三原屋を出るとき、春枝は恥しきで全身がほてり、座敷廻りの女中たちの眼が一勢に自分一人に注がれてゐるやうに感じ、なかば馳けるやうにして階段を下り、戸外へ走り出した。

外は大地を刺すやうな風が吹いてゐた。

あのとき身籠つたに違ひない。春枝はどう考へてもさうとよりしか思へなかつた。あんな渡り者の藪の検査員などに何んの分別もなく許した自分の淺薄さが今更くやまれてならなかつたし、そんなことをあれこれ考へた揚句には我身を憎む後悔やら、そうかと思ふと亦急に自分がしみんといとほしくもなつたりするのであつた。

「春枝や、われまた飯食はんかといふにのう。」

何度目かのおふくの催促に春枝はやつと重だるい身體をいややながら起してゆくのだつた。

「少しは氣分がよいかのう、あんまり悪るうようなら耳聾きとこの薬でも買ふて呑んで見るかいやのう。」

「いやなこつちやで、あんな店の薬、なんできくもんかえや。」

「でもさ薬は薬ぢやけん」

「……お母ア金太郎さ廻つて來んかいやのう、あれ何かよい薬持つとらしやると思ふがのう。」

春枝は恐ろしい程熱心に訊き、身體をゆり動かし、自分にはどうしても踏み應へようにもない、侵し浸される不安に、しきりと震はれ胸をせめた。膝をすらし横向きに坐つた春枝の鼻先へすぐ眼の前の箱腫から梅下の白ひが沁みてゐた。

「金太郎さがか——」

と、今度はおふくが何か深く考へてゐた。

「あれもこの雲霧雨が上つたら來るぢやらうがのう。」

そして漆のはげた箱腫を手許へ引寄せるのであつた。食鹽には芋汁の白ひが湯氣を立て、フチのかれた小皿には目射子が匹浮いてゐた。

・

藥賣りの金太郎がこの村へ來るやうになつてから恰度三年位になるだらう。それは三月の温泉町へ通する細い山道が赫土をむき出してゐる中腹に晴れては曇り、かげつては陽の光がバツと明るく射しかけたと思ふ間もなく、今度はうつすらと淡く消えかける、そんな肌寒い日であつた。再び冬に逆戻つて行きそつな氣候であつた、それでも少しばかりの陽溜りが出來ると、そこには春の氣配が充ち、草の芽は鮮かさを増すのである。が、陽は長つときはせず、すぐに光を失つてしまふので



あつた

その日は鎮守の森に祭禮の幟が、はたはたと風にゆれ、朝早くから夜おそくまで大人も子供たちも社の前でふるまふ接待の甘酒に酔つては興し合ふのである。惣高い聲が何時までも森の奥に木霊し、若い衆の叩く太鼓の音も同じ調子であつた。

「關口彌太郎ーの、おこーりおとしー」

と、妙なツシをつけて薬の名を聲高に呼上げると、あとはチンチリチンチリと鈴を鳴らす金太郎の背中には赤い小切れの幟が風にゆらぎ彼のチョン鬚頭をなぶつた。

この一種異様な風體を見つけた子供たちは我先にと一勢に鎮守の森から馳け出し、何處までも金太郎の後尻をついて歩いた。そして珍しがつて手を拍くのであつた。

それから後は一日間をおいては必ず金太郎の姿がこの村に這入つてくるやうになつた、金太郎が隣村へ来てゐてさへ、薬の名を呼上げた後の鈴の音が風にのつてこの村へ聞えてくるやうだつた。

色々な噂も勿論持つてはゐたが、夏場近くになると家傳藥だといふ彌太郎の墜落しが一層よくうれた。

讃岐の高松からくるといふ千金丹賣や、洋服姿で手風琴をかき鳴らして歩くオチニなども時々村へ入つて来たが、金太郎程の人氣は無かつた。四十の坂を三つか四つ位越してゐたらう、小男で高賣上の手段かも知れないが、とても割輕者で何時も水

水しいチョン鬚を結つてゐたし、どうした譯か女のやうに齒を黒々と鐵漿で染めてゐる姿は村の人々に異様な物珍らしい感じを興へるのであつた、村へ這入ると先づ女と子供たちに冗談口をきき、からかつて歩き急に眞面目くさつて「關口彌太郎のおこり落し」と呼んで又一しきり鈴をふるるのであつた。

唐に罹つた人々は勿論、金太郎の薬でなければどうしても癒らないものゝやうに思ひ込み、我先にと競ふやうにして買つては臍の上の箇所へその小判形の黒い膏藥紙を火で温め貼付けるのであつた。それがまた奇妙に效き不思議によく癒るのであつた。

子供たちが寄集つて来ると金太郎は愛嬌笑ひを唇邊に浮かべ、肩にかけた氣力罐の中から日の丸旗のついた竹串を取出し、膏藥を巻いて興へてやるのだつた。だから何時も三人や四人の子供たちが彼の後から離れやうとはしなかつたし、その藥臭い薬給がまた子供たちの童心には遙かに遠いお伽の國を想出させるのであつた。

親たちは子供に興へる小使錢の負擔が輕くなるのだし、何處の家でも、いらからうのう、お茶をあがつてゆかんけんのと軽い口調でお世辭たつぷりに金太郎を呼び入れるのであつた。そんな時の彼は徹底したネーモリストに終始するのである。家の人たちが腹を寄らせて笑ひこけるのを見て満足し澁茶をうまそうにするのであつた。田舎澤庵を囓る時の鐵漿の齒が又妙

に魅刀的なものに光つた。そんな時でも子供たちは彼の側から離れやうとはせずに笑つてゐる。金太郎のチョン樞を妙な氣持であかず眺めてゐるのであつた。

しかし茲四、五日の間、この霖雨の故かも知れない、鈴の音がまるつきり聞えてこなかつた。

親莫迦と言ふ諺があるがおふくは矢張親心で春枝の身體については随分氣苦勞をするのであつた。これを知つた當座は嚇となり、ふしだらだと言ひ、おらはどうしてこのやうに心配が絶えないだらうと愚痴り、果ては狂人ぢみた激昂さで春枝をせめるのであつた。餘り口汚く罵つたために存枝との間には親と子の見極もない。恐ろしいほどの日論も一度はしたのだがよくよく考へてみれば結局おふく自身にとつても胸に手をおかればならないやうな自責に強く張はれてゐることがあつた。

おふくはどうして斯うも——と思ふのであつた。姉の春枝と言ひ、弟の貞吾は貞吾で揃ひも揃つての早熟で、困つたことだと獨り氣をもむのであつたが、しかし、自分たち親子の間には共通した深遠的な血の流を否かにはあまりにも、自分の良心に恥かしかつたし、自分の過去の事實を想起して二人の子供にさへ顔向けにならないやうなふしだらな行爲が無かつたと、ほつきり言ひきれぬ自信は勿論なかつた。まして現在のその二人の子供でさへ、去年逝つた亭主との間に産れたものであると言ひ切ることの出来ない後暗い處さへあるのであつた。

飯を濟ましおふくが跡片付けをし語をかけた後でも春枝はべつたりと懺悔の端に横坐りになつたまま、で身體を崩し、細々と裏の竹藪に注いでゐる小雨に聽入つてゐるやうでもあるし、また何か考へてゐるやうでもあるし、煤の濃い大黒柱の一點に穴洞な隙を向けてゐた。容體を見ると胸の巡りは餘りに太くなつてゐて、もうどうにも隠しきれそうにないやうに思はれ——餘計にそう思つてみる故かおふくの視線には倍して眼に見えぬものが春枝の身體の中にひく／＼と胎動してゐるやうに感じるのであつた。

近所衆に對しても肩身が狭い、いやな思ひをしなければならぬかと思ふと、次第に感情が昂ぶつてくるのをどうすることも出来ず、無性に腹立しくなつてくるのであるが、村でも器量好しと言はれた我子の近頃のめつきりとしたやつれ方をみると今度はそれにも増して不感さが強くなるのであつた。

先刻あれから藥賣の金太郎のことを執拗に、熱心に訊いてゐた眼の前の春枝の様子を考へてみると、娘のその心も充分讀めるやうな氣がし、だがおふくはまたおふくで隣村の子ど、おらくのことを思つてもみたりした。

霖雨がすつかり上ると、頭から熱湯を注ぐやうで、居ても立つても居られない程の日が続くのであつた。

河岸の横刺の芽が散つてぐみの實が赤くふさ／＼と河原の中に點綴し、起伏の多い地平線の濃い緑の葉が痛いほど視線を刺

戦するのであつた。この季節になると、何處の農家でも養蠶をあげ、この分のお天氣が續けば今年は豊年ぢやのう、と村の人達は喜び合ふのだが、それも二三の者だけで、あとは皆金肥の代にも廻ほらない收穫のことを思ふと皆が皆黙りこくつてしまつて暗い顔になるのであつた。お互ひが次第に自分たちの生活だけが貧しいものゝやうに排他的な自信を強くし、ひがみきつて、他の人たちからとり殘されてゆくやうに感じてゐるのであつた。

夕陽のすつかり落ちた畦道に何時までも立ちつくしてゐる、伸びの悪い麥程に眺め入つてゐる村人の姿が、彼方にも此方にも見られるのであつた。

田の二番草を採れば、あとは農休みが來、ひま、ひまになるのだがそれまでが忙しかつた。田からあがつて來て泥足を洗きもせず野風呂を沸したり、桶高い聲をあげ、夕食の炊事に村中が一しきり騒々しくなり、春から陰干にした河原逢を蚊遣りに塩に焚くので、どの家からも扇を傳はつて蟬が靜かに、低く立上つてゐた。

丸本の製絲工場裏のゐり、のゐるといふ沼のあたりには、赤い積蛤蛤が無數に飛交ひ、煙突の支柱線にも澤山羽根を休めてゐた。

この工場の出來る頃地上げにする土を掘上げた跡が、今は相當に廣い沼になり、何時の間にか、鮎の子や、にがんべが住み、

村でもゐり、沼と呼んでゐた。かん／＼とお太陽のよく續いた日には、時にゐると沼岸の淺瀬に赤い腹を仰向にしたゐり、が死んでゐたりして——そんな時には村の人たちはゐり、が死んだで、またお天氣が變るのうと言ふのであつた。またそのとはりだつた。

工場の蟬臭い悪水が絶えず流れこみ、霞が茂り、夜に入ると蛙が喧しく鳴いた。

製糸の汽罐火夫の作次郎が石炭の取込みに工場裏の空地へ出た時には、夏の夜には珍らしく星が冴えてゐた。薄闇の底に空地が急に大きく擴がつたやうに見えた。眼の錯覺だつた。その視線の先に幾本かの櫻や椿の木が梢に葉をのばしてゐた。それらの梢は全部黒みを帯びて見え、間から黒い風が寄せて來、作次郎の汗ばんだ身體をゆすつて行つた。

「作次郎、作次郎——」

あたりを憚る低い騒ぐやうな呼び聲に作次郎はぎくりとしておどろき、背闇の中に鋭く神経を差向け、すかしみるのであつた。

「誰れや？」

と言ふ、作次郎の顔先には——其處の椿の木の蔭から、微笑み、近寄つて來た春枝の姿態を見つけると彼はさつと石炭焼のした黒い顔を赫らめるのであつた。春枝のほんのりと白粉をはいた顔や美しい襟許が夜目にもなまめかしかつたが、何か面や

つれがしてゐる、作次郎の眼にそれが獨りしよんぼりと映つて全身にぞつとしたものを感じ地獄から來た女を思はせた。

「今いそがしいかえや——」

と、言ふ春枝のそぶりには何かよくはないものがあつた。

「さうでもねえが、お前なんぢやい、えらうめかしこんで何處へゆくかえや。」

と、作次郎はニツコリ笑ふのであつた。

「何處へ行くものかえのう、おめかしとてなア作させ、お前に見せるだけさよ」

と言ひ、笑つてゐる作次郎に春枝は全身をもたせかけてゆき、草餅屋の女のやうな態度を見せるのであつた。媚を賣る女の眼つきで作次郎の顔を大膽にのぞき込み、節くれた彼の大きな手を弄んでゐる春枝の手はじつくりと汗ばんでゐた。

「うまいこと言ふて俺アを擲擲ふで——」

口ではさう言つても満足でもない顔付になり、男を欺すよりくたことにならぬぞうと、一寸眞剣な動作で春枝の肩を拍いた。作次郎は内心うれしきで一杯になり、心臓が興奮して來、激しい胸の動悸で窒息しさうになるのであつた。瞬間、どんなに酷い周囲の迫害があつてもきつと大妻になつてやううといふ根強い決心が作次郎の胸底には堤をきつた奔流のやうに揺られてゐた。

二人は一寸あたりに氣を配り、すつかり暗くなつた工場裏か

ら器械の壞れなどが亂雑に投出されてある物置場の間を抜け、織姫神社の側から、川の堤防へ上る小道へ出た。堤防下のおさえの店へ買食ひに行くのだらう、女工の二三人が高々と笑ひ合ひ、馳け抜ける堂音や、男の話聲が、幾度も通り過ぎた。それには作次郎も呼吸をひそめ、春枝もおつとして耳をすますのであつた。やがて人通りの途絶えた間をおいて、二人は堤防を下りて行つた。磯には野茨の花が暗い中に白くほのかに咲いてゐたし、甘い匂ひが二人の嗅覺を刺激した。

晝はこの邊りではギスが鋭い聲で鳴き、狩獵期に入ると鴨がよく下りた。五里も十里も離れた處から猿犬狗達が押しかけてきては銃を打つた。銃音が河面にひびき、丘や田を越え、向ふの山肌の小氣味よく木葉守るのであつた。

今は、蛇籠籠みか終日籠を造つてゐるのだらう。新しい蛇籠がいくつも長々と其處に轉がされてあつた。

「作させ、わしやう／＼、あれやつたで——」

春枝が其處の草の上へ蹲舞むと聲を落としてすぐ斯う言つた。春枝の聲は不思議な位冷たく澄んでゐる、潮く苦惱から脱れることが出来た喜びに溢れてゐるやうだつた。そして、とても苦るしかつたせゑと附加へた。

「ア、ア——」

聞返すやうに返事をして作次郎はハッと驚き、全神經が凍るやうに周章した。先夜もそんな話をしてゐたけれども、作次郎

には、春枝の何時もの冗談話位にしか考へてゐなかつたし、又春枝にそれほど思ひ切つて實行する程の強い自信が、よもやあるだらうかと、たかをくくつてゐた。けれど作次郎は顔色を變へ、恐怖的興奮へ血がざわめいた。彼はこつりと扉と一緒に息を呑んだ。

「金太郎さこのう良い藥を貰ふたでー」

春枝は暗い笑ひを見せた。綺麗に並んだ歯が夜目に美しかつた。それだけにまた返つてそれが薄氣味悪く見えるのであつた。唇の色もすつかりあせてゐ、急に面やつれがして眼尻に皷があるやうに見えるのも、その言はれてみればさうかも知れない。その故だつたかと作次郎は胸に頷いてみるのだつた。春枝が殊更に浮々とした素振りを見せてゐるのも或る不安に變はれるものを故意とらしいし、隠し覆はせやうとしてゐるやうに見える、直平然としてゐればゐるほど身體にあふれてゐる倦怠と言つたやうなものゝ見逃せない節があつた。

語合つてゐるうちは二人だけの世界であつた。朝の草の中にゐてしつとりと夜露に濡れ、外に投出された猫のやうに身體の全く冷たくなるまで坐つてゐた。珍らしく、秋空にあるやうな流星が一つ尾を曳いて山のかげに落ちて行つた。

作次郎と別れ、白い夜露をふみくたながら歸途に急ぐ春枝は更けた空にくつきり黒い工場の煙突を見上げた。自分の胎兒が今、嬪になつて遠近の藥屋根や雨隨へ降り沈んで行くと思ふ

と、胸の裏が何か森としてきた。胎兒を無理矢理に昇天させ無に歸へした今、漸くそれが重い被覆物だつたことが改めて判るのだつた。覆ひが除かれ、ほつと安堵し、以前の身體に自分が歸つた安心さを發見することが出来るのだつた。が、再び見上げた漆黒の嬪が今度は何時か町でみた火葬場のそのやうに春枝の眼に映じ頭腦の髓にしみこみ、淀んだ死臭が漂つて来たやうに感じた。鋭いりつせんとしたものを背に受けると、どうしやうもたかつたのだといふ觀念さで、蒼然と顔をひきしめた。

作次郎は汽罐前へ戻ると汽罐室の電燈のスイッチを手早くひねつた。もう一度暗い中で汚れた布團縞のボロきれに無造作に包まれたものを取上げてみた。汽罐の焚口から洩れてくるかすかな暗い光にすかして見、これがつい先刻まで人間の體内に動いてゐた生物だつた、と思ひつめてくると、若しも人が見てゐたら狂人と思ふに違ひない。それ位に作次郎の身體の顫ひが止まらず、すつかり落着を失ひ、恐怖に蒼ざめた顔を何時までも續けてゐた。

十時に鳴る工場の警鈴はにぶい音をたてるのである。これをきくと女たちは仕事のしりになるので一しきり喧しく、歸りの準備を急ぐのだつた。作次郎もこれをきくと落ちいた意識をとり戻したのだが、今度は別な意味の異様な、さし迫つた緊張感が聳々と全身を壓迫してきた。みんな消えて失くなれとも

言ふやうな動作で手早くスコップに石炭を拵ふと汽罐内に力一杯投込んだ。そしてちつと息をつめ、額へ深く垂れてきた頭髮をかき上げやうともしなかつた。又すぐに何物にか追はれるやうな焦躁に馳られ、再び焚口を開け假令どんな小さな遺物でも透視せずには置かない鋭い眼付でのぞいてみるのであつた。そしてデレツキをさし込み、入念に中を掻き廻すのであつた。其處にはもう何も無かつた。只火力の強い石炭だけが猛烈な炎を吹き上げ眞紅に燃え盛つてゐた。村の人たちが慄突を眺めたらきつと、今夜は大變な煙りが出てゐるのう、と話し合ひ仰いでみるに違ひないが、と何時もの作次郎なら氣持の上になんか多愛のないことを想像する餘裕さへあるのだつたが、今夜の彼の全身には狂暴的な血が渦き、没人間の動作がつゞいてゐた。

流石に作次郎はホツとした。氣がつくと額から幾條ともなく流れ落ちてくる水のやうな汗だつた。それをナツバ服の袖で横なぐりに押し拭ひ、何にくそ、一掴みにも足りない肉塊ぢやねえかよ、この見るからにぞつとする火勢にかゝつちや一たまりもあるもんぢやない、當り前だと思つた。

しかし作次郎の胸は衝動の餘波がゆすつてゐた。今の先、焚口から思ひきり奥の燃焼室近くまで放り込んだ生物のことが、すく心に描かれて來、以前の平靜に返らぬほど氣弱な作次郎だつた。幾分心の均衡を取戻してから、幾等鬼畜に等しい冷血漢でも、人間としての血を意識してゐるなら、こんなに慘酷、恐

しいことはしなかつたに違ひないといふ強い反省心と濃い後悔に似たものが彼をせめるのであつた。

が、只このものゝ始末さへつけてくれるなら二人は晴れて夫婦にならうのう、と押しつけてくる女の強さと、哀願の入り交つた春枝の眞剣な眼ざしを深く信じ、人の好い作次郎は一途であつた。まして今迄春枝の通つてきた道程についての、とやかくの風評などはどうでもよく、生處女ぢやないのうと言はれたなら、勿論念頭にないさとはつきり言ひきれぬほど作次郎は女に飢えてゐたと云つてもよかつた。春枝に限らず此の際女からの頼みごとなら多少ならず、どんな無理な事柄でも聞届けてやらなければ男前でも下るかのやうに考へてゐた彼であつた。

だから美しいあの春枝を自分のものに所有することの出来るうれしさに比すれば、これ位の仕事は亦當り前致し方のないことだとも思つた。

案外何等の眞跡さへ残さずやり遂げ終すことが出来たとするとホツとした氣安さと悦びが、重に湧いて來、作次郎を冷靜の淵へ引ずり、落つかせて行つた。それでもう一度火鎌で燃え残りの火窟の中を隅々まで搔廻してみたが、何一つそれらしい標もない見究めをつけると、一刻も早く汽罐火の跡始末をつけ、夜更ではあるが早速この首尾を春枝に傳へて喜ばしてやらなければ作次郎として氣が済まず、そう思ふとたまらなく心がせいた。辨天さんぢやのう、村の人たちが寄ると障はるときつと



一度は春枝の器量話に花が咲き、話題の中心になり、蔭では殊に若い衆たちの意味ない争ひの目標になつてゐる春枝の肉附のいゝムツチリとした姿態を想出すと、作次郎は妙に抑へきれない喜びに眼を輝かせ、獨り笑ひをにんまりとするのであつたが、時折不圖胸にわだかまる動搖を感じ、汽罐場の隅々まで、闇へ、窺つとくまなく注意深い眼を配るのであつた。やがては裏口のあたりまで出て行つて入念に見廻すのであつた。

可成夜が更け、村内は深々と澄一つない閑寂の底にあつた。作次郎が汽罐場から外に出ると空に青葉の匂ひが幽かに漂つてゐた。つい今しかたまで晴れてゐた空が曇つて來、淀んだ空氣が流れ、木の幹や、暖かい土の上では何か卵の孵化するやうな氣配が感じられる夜であつた。振向いた作次郎の眼には工場の煙突が迫つて來、突然冷水を浴びた氣持を脊にうけると、氣せわしく眼を足許に移し、亂れた聲音を春枝の家へ向けてゐた。

——三三六——改稿未完——

註 此の稿は自分の長篇「混濁」の一部にすぎぬものであるが、

この儘中止することにした。滿洲に於て生活し、滿洲に於てペンを取る限りあくまで滿洲文學の發展を目標とした。

その小説の内容的にまた外容的にも滿洲のもつ、特殊の息吹を吸収してゐるものでなければ意味をなさぬと考へてゐるからである。渡滿して數箇月にしかならぬ自分にとつてはこの問題は相當に困難なことを知つてゐる。不本意なが

ら本稿を發表したを諒として戴きたいと思ふ。

# 雪の日

島崎 恭爾

1

外村が妻の登美と別れたことを一箇月も経つた此の頃、社内の者達の噂に登るようになったのは、登美がダンスホールに働くことになつたからである。さうして日頃懇意であつた此處の若い社員と顔面もなく踊り、外村に就いてとやかくと非難がましいものを告げてゐる風である。外村は登美のかうした仕打ちに餘りよい氣持はしなかつた。然し登美のようなあばずれ女がどれだけ悪評を毎日外村の耳に傳へようと、外村は自分から自分の性格を庇ひだてする氣にもなれなかつた。外村が、登美と暮したのは僅に三年であつた。もともと、登美の奔放な性格を知りぬいてゐて結婚したのであつたが、自分の力で手なづけの出来ない奔馬とは思はなかつた。結婚してみると登美は思つたより無節操で、たえず強い刺戟がないと樂しめない困つた女であつた。勉學の徒である外村は、さうした妻が他にもたらす不

品行な事件のために、社會的な悪評を蒙り、屢々外村の信用を殺ぐようなことにもなつた。同郷の先輩であり、此の市街で牧師をしてゐる岡崎牧師は、一應登美をクリスチャンにして宗教の力で鍛上げようと努力したのであつたが、此處でも登美の先天的な性格は岡崎夫妻を手古摺らした。そんな女であつたから登美が自發的に自由な世界を求めて、外村から離れていつたので、外村としてもそれに就ては未練も残らなかつた。却つて登美との生活によつて汚濁なものになつた家の空氣は清澄さを取り戻し、外村はその中であつて孤獨を樂しむことが出来た。現在の外村には、さしあたつて生活の不自由さを凌ぐために、ボーイか家政婦を探すことその他取り急いで他の女と結婚をする様な氣持は起らなかつた。

晝食を済した外村が、秋の澄きつた空に脊を曲げて社の屋上を散策してゐる處に、黒づくめの洋服姿で岡崎牧師が昇つて來た。岡崎牧師は、登美のあくたんな言葉を借れば、鼻をハシカチで拭きながら孤獨を樂しんでゐる外村の姿を不憫に眺めてゐたが、體て活潑な歩調をもつて外村に近づいて來たのである。用件は、牧師の知人から躍香といふ少女を世話をして貰ふことになつたから、當分使つて見てはどうかといふ事であつた。

日本語が巧みで、日本に對して憧れをもつた新しい女性であることが、躍香の素性である。躍香の郷里はこの市街から十數



里離れたN屯で、幼い時から向學心に燃え日本人の家に能はれ日本語の勉強をしてゐるといふ事である。

罐香はその日の晩連れられて來た。岡崎牧師の厚い肩幅の影で逡巡してゐる罐香は外村が、想像してゐたよりずっと若く美しい女であつた。服装もさつぱりして、黒髪を肩の處で剪つてゐる。いつたいに冷たい皮膚の色と、聰明さうな眸に外村は好ましい感じをもつた。

外村は、一日の生活に必要なことを箇條書にして言合め、さうして支關脇の小部屋に罐香を案内してやつた。罐香は、眞紅色の量の大きい風呂敷を抱いて、怯えながら從いて來た。

一名は何んと言ふの

王罐香

「此れからはエイコウと呼ぶことにしよう、罐香、今夜はゆつくり寝なさい」

外村は、子供の時、雀の子を捕へたことがある。柔い胸毛の奥では、恐怖に満ちた鼓動が、どつくとどつくと感じられて、少し手をゆるめてやると、逃れようとあせつた。籠の中に入れて水や餌をあたへても籠の隅に羽根を震はして、なか／＼馴つて見れなかつた。

その時、いろ／＼雀のために氣遣つた感情が、不圖蘇つて來た。罐香は今雀の子である。岡崎牧師は、外村が部屋に歸つて來るのを待構へたように

「外村、これから集會があるから私は歸るよ。罐香は法禮も自發的に受けてゐる程の女だから、淫らなことは起るまいと思ふけれど、此處は悪魔の巢だからね！」

岡崎牧師は目鏡を外し、脂ぎつた顔を拭きつゝ歸りかけた。

「悪魔は相變らず先生の悪たれ口を叩いてゐるさうですよ」

「いや、まづたく登美さんには、儘も手に負へなかつた」

崖の下まで岡崎牧師を送つて外村が戻つて來ると、曙がりの

茂みの中から、罐香が不意に飛出して家の方に駆け出した。これが罐香の最初に外村に對して示した美しい行爲である。

2

朝は、珈琲とパンの簡単な食事にして、晝食は會社の食堂にした。會社から歸ると風呂を浴びた後夕食を罐香と一緒に攝り、その儘書齋に籠つてしまふので、外村は減多に樹香の事で氣を使ふことはなかつた。内氣で外出嫌ひな外村が、常に靜かに室に居て時間を過す様には、罐香も又あたへられた部屋で靜かな生活をしてゐる。罐香が、いつも靜かに自室に籠つてゐるのは、丹念に聖書を誦讀してゐることを外村は知つた。祈は女にとつてこの上もない美しい行爲であるかも知れない。食事の時、寝る前罐香は神に祈ることを忘れなかつた。さうして週に一度、日曜の夜、罐香は教會に出かけた。高家の家は秋冷の感觸が早く感じられて、もうおほかたの樹は葉を落し、白樺の幹

がひよろ長い影を落して、外村の家の周囲を圍んでみた。人家が乏しい上に、闇に乗じて女達が危害を加へられた風説のある路を、耀香は讚美歌を歌ひながら戻つて来るのである。

その夜、外村は崖の上に佇ずみながら、耀香の歸りの遅いのを待つてゐた。星の多い空を仰ぎながら、傭女の爲めに斯くも長い時間を費やしてゐる主人の氣持を反芻してみた。外村は耀香を單なる傭女とは思へない感情があつた。あこがれの國へ一歩一歩近づくことに努力してゐる耀香に、美しい夢と愛情を與へることがこの際必要ではなからうか、登美のように自分勝手な生き方をする女には外村も手のくだしようもなかつたが、従順な耀香には飼猫を愛撫するような氣持が湧いてゐた。突然地の底から湧いて來たように崖の下から、耀香の圓熟した笑聲と、若い男の聲が起つた。外村は驚いて枯草の中に身をひそめながら崖の下を覗いた。星明りに見える崖の下では、脊の高い青年が今耀香に求愛してゐるのだつた。耀香は笑ひながら青年の腕からすり脱けてゐるらしかつた。耀香は口早に青年を慰めてゐる。外村は一言も聽漏すまいと努力したが、餘りに彼等の間には距離があつた。只だ耀香が青年の求愛を非常に親切に慰めてゐるのは間違はないらしかつた。

家に歸つた外村は、耀香の祕密を覗いた氣持を恥ぢながらも青年と耀香との關係を想像してみた。あの場合のあの行爲に對して憎しみの態度に出なかつた耀香にはあの脊高い青年を愛し

てゐるのではないかとも思はれた。然したとへ耀香があゝの青年を愛してゐるとしても自分がそれに對してとやかく云ふ權利はない筈だが只一時的に耀香を預かつてゐるに過ぎないと反問しながら苦笑した。耀香は外村に覗かれたとも知らず、いつもの様に軽くスリッパを鳴して外村の室を開け、歸つたことを告げにやつて來た。

「耀香、先刻の男は同郷の人ですか」

「いゝえあの人は留事館のボーイです」

耀香は外村の不意打にかゝはらず、微かに顔を赤らめたに過ぎなかつた。

「あやまものない様に氣を附けないと」

「はい」

元氣のいゝ聲で答へると自分の部屋にかへつていつた。

3

外村は耀香に求愛してゐる青年の存在を知つたばかりで耀香に對する關心は強められて來た。最初は雀の子の様に、おどおどした耀香の身裡には女としての情慾的なものが仄に見えた。

外村はいやしい事であるとは思ひながら留守中耀香がどんな生活をしてゐるかを覗く氣持になつた。美貌な耀香を目かけて、多くの青年達が來ては淫らなる行爲をしかけてはゐないかといふ不快な想像も起つて來た。登美はいつでも白日の中を平氣で

青年と戯れてゐた。外村は蠶香の聖なものを信じながらも、やはりそれを突留めようとする氣持はどうしても捨てられなかつた。然し不意打に歸つて来た外村は一度として、蠶香のふしだらな姿に出逢ふことが出来なかつた。ある時は甲斐甲斐しく兩腕をまくつて湯殿の掃除をしてゐたり、ある時は干物をしてゐる姿を見る時は、外村の方が虚を突かれたような恥らひ方であつた。亦或る時などは一度玄關に男物の靴が脱棄てゝあつた。

外村は張つめた氣持になつて、聲のする蠶香の室に近づいて覗いた事がある、その時も外村は瓦斯管の修理に来てゐる好々な老爺を見て、まごころしたのである。登美の自由を默認した外村の精神は蠶香によつて破壊し初めた。それと反對に外村の度々の失敗は、蠶香の美しさを外村の心に盛り上げ、その美しさは次第に日本人らしくなつて来る蠶香の肉體の美しさにむすびつける様になつた。

岡崎牧師が、美貌な蠶香を外村に委したのは外村の人格を信じてゐたからである。異國人といふハンデキヤツツもあつたにしても、外村の信望があつた。今外村が蠶香に挑みかゝる機會は、同じ家に起伏してゐる點では易々たるものであつたが、それだけに外村は心の中で自割を續けてゐた。登美は蠶香が来て以來一度も顔を見せなかつた。曲りなりにも生活してゐると見える。一度は悔悟して歸つて來ると思つたが、そんな氣配もなささうである。だいたい登美のような女には悔悟など起るもの

でなからう。思情の趣く儘の行爲に悔悟があるのは間違ひだ、たとへ踏出した路が生涯を破壊に終らざしたとしても何の悔恨もなく酒をあふりながら笑つて死んでゆくことであらう。蠶香は時々登美のことを尋ねた。蠶香はまだ若いがつかりした貞操の道を自國の國情に結んでゐると説いた。

北風の強い夜であつた。颯然と登美が訪ねて來た、室に通された登美は稍々酒色さへ帶び、どつかり外村の前に腰を降すと、蠶香と外村をたたく笑ながら見廻してゐた。

「聖人屋さん、どうなの不自出しない」

「静かで心が澄んでいゝもんだ」

「矢張、あの娘も奴隷なの？」

「よし給へ」

「聖人屋女を僕として侍らすか、止めるわ他人の事など瓜の先も思はぬ登美は食つめちやつた、これからどうして生きてゆくかわかりやしない、然し多少は女の感情を聖人屋さんは認めてやることよ」

登美は腕を組んで頭を突出し、ふてぶてしい態度を外村に示したが、外村は冷静に繰返した頁の上から視線を離すようなこととはしなかつた。どこまでも山上の沼の様な静かさを保つて。

次第に荒んでゆく登美の精神を憫んでゐたのである。  
「ねえーほんたうにあの娘、綺麗ぢやない、妾、最初貴方の奥さんかと思つたわ、然し奥さんでもなささうだわね」

「止め給へ！」

外村は怒り聲で首をばつたり閉ぢた。

「僕達は静かで美しい生活をしてゐる。勿論あの女は奴隷でもない、謹しみ深い女だ、僕達の生活に對して、淫らな疑や、あらゆる言葉は謹んで貰ひたい、僕の一舉一動から日本人の精神や美徳を把握しようとしてゐる少女の爲めに、僕はどれだけ細心な注意を計つてゐるかわかりやしない。煎じつめれば日本の國體の眞の姿を認識しようとしてゐる他國人の爲めに。僕はどうすればよいかと反省し、苦心をしてゐる。それに君の其の態度、不躑な言葉は少女の目にどう映るか、まるで僕が行爲を片つ端からぶち壊さうとしてゐるのだ、恥を知れ！日本の夫婦間の美しさは現在君と僕のかうした對立でないはずだ、君のその行爲は歴史のない人間の姿、悪魔の姿だ」

「又悪魔、悪魔でも結構よ、聖人ぶつた貴方より、よほど生甲斐があるわ、貴方もだんく、あの牧師さんに似て来るわね、それより今晚来た問題よ、妾にお金を頂戴、ダンスホールは潰されるし態々これから北支行よ」

登美の箒をまだ片付けてゐなかつた外村は度々かうした登美の我儘な申出を拒絶することは出来なかつたばかりでなく、まだ登美の生活を負擔することを債務のように感じてゐた。そこに外村の氣の弱い處があつた。

登美が金を取つて歸つた後、外村は寝臺に身體を投げ出した

儘、登美が投げつけた聖人屋さんと云ふ言葉の内の聖者ぶつた自分の姿を見直してゐた。登美を奴隷のように思つた事は一度もなかつた。又耀香の場合もさうである。唯愛するといふ氣持がいつも不快な幻想に變つてしまふのである。外村は卑屈な自分の姿を白日に曝すことが怖ろしいのである。目を閉ぢて寢臺に俯伏してゐる外村は、不圖耀香の氣配を感じた。

4

堆積した雪の上に又雪が降り、市街はすっかり雪に埋れ盡した。冬に入つて耀香は家の事情で暇を貰ひたいと言ひ出した。外村はその爲めに岡崎牧師の家に耀香を伴つて訪れた。外村の家から丘一つ越えようと、岡崎牧師の苦年二十年を記念する、古びた教會堂の燈が雪に映えて見えた。

牧師夫妻は禮拜を終へて家に居た。外村も耀香が暇を取る事に對して深く其の事情を追求しなかつたが、岡崎牧師も外村の爲めに惜しむ事情を問うけれど、耀香は別に家の事情の他に返事をしなかつた。牧師達も無理に耀香を引留めようとはしなかつた。この場合、去つてゆく耀香に代はるべき者を牧師に依頼する他に外村にはなかつた。牧師の家を辭して耀香が先に外に出て外村が玄關で靴を穿いてゐる處に、牧師夫人が意外な事を耳うちした。

「耀香は妊娠してゐますよ、だから國に歸りたいのかも知れない

いのよ」

「ほんたうですか」

外村は驚いた表情で夫人の顔を覗き上げたが、夫人の顔には自分を疑がつてゐるようにも思へた。

「きつと證明しますわ、女同志のことですもの」

さうであるとするればこれは棄てておくわけにはゆかない。外村には覺えない事とはいへ身に振りかゝる疑惑をまぬかれる事は不可能である。誰の子であるか今更詮索しても及ばないのであるが、せめて自分の子でない事だけは明白りとしておきたかつた。

「どうぞ嬢香を幸福にしてやつて下さいませ」

外村は夫人から自分が罪を犯した子の様に見られてゐるのに不快な氣持にならぬではなかつたが、それよりも此の事を如何にして嬢香から聞き出すかに早や心が進んでゐた。

雪は大降になつてゐた。淡い門燈の下に外村を待つてゐる嬢香の姿は白くまみれてゐた。

嬢香は歩いて歸ると云つたが、この雪では到底難澁なことである。それに嬢香が普通の身體でない事を知れば尙更であつた。外村は馬車を探した。二人がやうやく馬車を探し、幌の中に身體を収めた時は、嬢香は雪の中を徨ひつゞけて來た孤兒のやうに白く雪にまみれた髪を亂し悲痛な表情をしてゐた。やはり身體に異狀があるのだ。馭者は馬を叱咤して、亂れ狂ふ雪の

中を走り初めた、馬の鈴はころんころんと闇の中に鳴り、幌の中は唯嬢香のはげしい呼吸が聴こえる程の静けさを續けてゐた。

馬車が丘に差かゝつた時、馭者は××な笑聲を含めて嬢香に聲をかけた。すると嬢香は肩をすくめて笑つた。

「嬢香、どうしたのだ」

「誰も見てはゐないからお前さん二人の世界だよ。幌の中は暗いし、儂は神様だと、あの男笑つてゐるのです」

外村は嬢香が不快な人間の言葉に對して反撥もしないばかりか、却つて身體を寄添うて來る氣配に驚いた。

「僕は降りるよ、君は先に歸つて煙房の火をよく焚して置くんだよ」

嬢香は外村がむきになつて降りる氣配に驚き、外村の肩を拍きすくめた。さうして顔を間近くして外村の顔をじつと見つめた。日頃のしとやかさにうづつて變つた嬢香のかうした態度に外村は眼に見えない嬢香の強い力に引づられた。嬢香の頬は硝子に觸れたやうに冷たかつた。たゞ唇だけは火の様に燃えてゐた。

5

夫人が嬢香の身體の異狀を發見した事は單に外村を暗い氣持にしたばかりでなく、岡崎牧師の耳にも入つたのである。外村

は岡崎牧師が悲痛な顔をして會社に現はれた時さう思つた。

「外村、懺香をやはり國に歸すのか」

「まだ考へてゐません」

外村は懺香に對して、その問題に觸れることを怖れてゐた。

「過ちは已むを得んとしても」

「先生、僕を信じて下さい、先生は懺香と關係してゐるものと誤認なさつてゐる」

然し外村の聖者の心には、もう纏ふことの出来ないものがあつた。ひた押しに愛して來た懺香の氣持の前に、自分は美しい償ひをしたとはいへ、仄に愛慾の影を宿してゐたのではなかつたか。

「兎角、先生は懺香に逢つて聽いて下さい、それとも懺香の爲めに黙つて歸すべきとも思ひますか」

「ぢや、君の歸るのを暫く此處で待たして貰ふよ」

岡崎牧師は室の隅で聖書を讀みながら、外村が仕事を終るのを待つた。

外村はM社の調査部から發行する「大陸經濟」と云ふ雑誌の編輯をやつてゐる位で收入はしれてゐたが、大學教授であつた父の恒産で氣樂な生活をしてゐられるのである。「では出かけまじよ」

外村は仕事を片附けると岡崎牧師を誘ふて社を出た。

黄昏の街は雪も降止んで、餘光に映した雲と、雪に蔽はれた

山の姿が街の上に滲うて見えた。外村は自動車を呼んだ、市街から離れた外村の家に近づくにつれ、郊外の路は雪も深く車輪は雪の中に半ば没するばかりになつて徐行した。

外村は先に立つて支關に入つたが、懺香はいつものやうに出迎へて來なかつた。

「懺香」

外村は自分の聲に應じない懺香の姿に一抹の不安を感じた。

もうすでに歸つてしまつたのではないかとも思つたが、無斷で歸つてしまふやうな懺香でない事を知つてゐる外村は懺香の室を覗いた、室の中はすつかり整頓してあつて、懺香が來た時の見覚えのある荷物はまだ残つてゐた。

その時「外村、外村」と岡崎牧師が連呼した。外村がとつて返すと岡崎牧師は化粧室の方を指さした。

懺香は扉の側に倒れてゐた。外村はすつかり狼狽した。

「これは君ぢやいかん、妻を呼ばふ」

岡崎牧師は外村が懺香の側に駈寄らうとするのを制した。

「そんな暇があるでせうか」

「さうだ病院に連れて行かう、君は自動車を呼んで來い」

外村は丘の道を駆け下りながら、びく／＼と動いてゐる懺香の姿が、さうしてその周圍を血にまみれた胎兒が這ひまはつてゐる様な幻想になやまされた。

「外村、綺麗な朝だよ。耀香は意識を取戻しよつたし、又君の疑も晴れたわけさ」

あれから耀香を病院に擔ぎ込んだ外村は、一夜の強い衝動に疲れた身體を病院の廊下の長椅子の上に假睡した。今、岡崎牧師に起された外村はのびのびと兩手をのばした。××××××××××ふとした無形の生命は、完全に耀香から離れ、雪に照り返された病室の窓下で、白い掛蒲團に顔をうめた耀香の微笑む姿が見えた。



# 村會

上野 凌 嶂

清次の若い隆々たる、然しあまり高い背丈ではないがその肉體から受ける情熱的な感覺は村の人達のやうに常に見てゐる者の眸にも時々驚いたやうに見直さずにはゐられないのであるが、街に住む邦人達は、たまにある會合の席で、屹度、こう話しかけるのだつた。

「村長、去年の暮のことを思へば、人の違つたやうに立派になりましたね」

「冗談でねえかな」と仕方なく清次のきりツとした淺黒い頬に苦笑が上つて來るのだつた。

さうした後で邦人達は小さい聲で囁き合ふのである。——移民の中でも一番みじめだつたあの頃——妻と嬰子を一度に亡くした去年の暮からの彼の虚無的な動作、憔悴も、やがて蘇つた存の影響と、さうして自ら志願し、縣の社會科の手を経て此の移民村の村長に單身嫁いで來た花嫁の効果とが清次をこんなに迄潑刺とせられたのだらうと……。

その噂も決して當らぬのではなかつた。

嫁御は三千軒の長距離にも恐れず、婿君が迎ひに來てくれたのでもなく、さうして彼がどんな男であるかも知らずして北滿訥河の驛に降りたつたとき、花嫁見たさに用事もない邦人達までが歡迎の村人の中にまじつて全く驚いて彼女の愛くるしさ……本當に誰も彼女に對する愛の雲圍氣に満たされて、そつと我が妻を見返した程、長い里程を押し來たに似ぬ美しさにそしてあのいちらしさに見とれたものだつた。

「君、——と後になつて、街の若者は云ふのだつた。

「あの時、あの娘さんの眸には、進へに出た男達全部が婚約者の一部に見えたに相違ないよ、だから彼女が示した眸の愛くるしさの中には、婚約者としての私が一人入つてゐたことになるね。——と、……いくら探し歩いてもあんなにも清い愛くるしさを持つ妻を娶り得ないことを百も承知してゐて、「あゝ、あゝ、私も移民になればよかつた」と嘆くのだつたが、さてそれだけの情熱も湧かない若者達なのだ。」

大陸の土を窺つ新らしい使命に立つ戦士を慕つて來た喜恵は、内地で幸福な女だつたらうか？ 東北地方の田舎町に生れてゐながら村長の家に育ち女學校を出てゐる所を見れば表面、屹度幸福な家庭に相違なからうと一顧思つて見るのだが、彼女の戸籍謄本に刻まれてゐる記録は庶子であり、彼女と姓の違つた母親があるのを思ふと、そこに何か満ち足りぬ彼女の世界が



あつたことに氣付くのだつた。村長の娘と云へば適齡期の此の美しきで、いくらでも良縁がありそうに常識者の誰もが思ふ裏をかいて、彼女は敢然と、大陸の土の戦士の懷に飛び込んだ。

……その底に動くものは何か。……壓えられて来た世間からの解放を彼女も近代女性の一入として新しい天地に行ひたかつたのだらう、と、語らない彼女から無理に語らせずして清次は、彼女の純良な意志がぐん／＼と彼を積極性に轉換せしめて呉れる力と云ふべきものから察するのだつた。

此の若さの律動に響く清次の更生的な動きは、統制者としての自からな行爲となり、村の革新的な一つの動きとなつて表れ、各々に割り當てられた新しい土地の開拓に、蔭付けに、そうして早いものは第一期中耕に、若い妻と常用苦力とを連れ、馬を追ふ若者達の姿に見られるのだつた。

その意氣は……集團の大きな家團氣となつて、去年の不振を突き破り、今年こそは、と力む村民達協同精神への炎となり、天を突くの勢ひとなつて行きつゝあつた。

或る夜……清次は村會に出席して、喜恵のみが土造建の我が屋の中で、疲れた晝の勞働のせいか、古里の友に送る手紙を書きかけたなり小さな飯臺に寄りかゝつて寝てゐたが、激しい戸を叩く音に驚いて起き、硝子窓越しに眺めると、月明りに、子供を背負つた女が至急に家に入れて來れるやうに哀願してゐるのが認められた。彼女が入口に走つて行き戸を押すや否や、轉け

込むやうにして小造りな女は入り、すぐ戸を自分で嚴重に閉めた。

喜恵は此の小女をやつと思ひ出して、「どうしたの佐藤さん」と此の狂人的な行爲を同情ある語調で尋ねた。「すまねえだ……すまねえだ」と、云ひ終るや否やすゝけた顔をくしやくしやにゆがめて胸につまつた苦痛を表し、此の時何かにおびえたやうに泣き始めた嬰子を、背から滑るやうに片手に卸し、入口を氣にしながら先にたつて座敷にあがつた。喜恵は何も理解出来ない儘ながら何かに此の女は追はれてゐるのだと悟り、後に従つて子供をあやし、窓硝子のカーテンを閉じた。そして外部に耳を澄しながらも、もう一度聞かすには居れなかつた。

君代と云ふ小柄な女は、語りたくない痛い箇所に觸られた不安……飛び込んだ今迄のどの家でもすぐ察してくれてゐたのに……此の奥さんは何も知つてゐないからだと思ひなほし最も簡単な言葉で、「おら、うちの人と別れやうと決心しただよ」と云つたが、も少し云はなければ何もわからないだらうと思ひながら「おらにや、もう／＼」と云つたなり洪水のやうな哀しみに押し流されて不覺にも聲まで出してしまつた。喜恵も妙に壓しつぷされた君代の聲に、充分理解出来ない儘泣き出したいやうな氣持に誘はれて來るのだつた。

がその時、「開けるッ」と出来るだけの聲を振絞つた怒聲を耳にすると心臓の鼓動が止まつた程、喜恵は驚いたし、君代は

しまつた、と云ふ顔で聲を瞬間やめた。

「誰なの？」と低い聲で喜恵は小女にわかつてゐることを尋ねた。

「うちの人大けど、だまつてゐる方がええだ……な。その方があぶなくねえだ」

然し沈黙してゐることも決してよくはなかつた。全く野牛の荒れ狂ふやうに板戸を何か重いもので叩き始めた。その響きで假住居の壁は揺れて、ど、ど、どつと、落ちる音が、喜恵の胸を締めつけて、君代の留めるのも振り切るやうに、入口に立つた。

「開けますからお待ちなさい」と、彼女も無意識に、家を守る新妻としての責任からと、相手が如何に恐ろしい男だつて、移民を志ざしたやうな男であるなら、真心を披瀝して諫めたら屹度聞いて呉れるだらうと思ふ直覺から如何なる行動も一時は停止させずにはおかないやうな眞剣な聲で云つて、靜かに開けると、あまりにも容易に開けられたことに對し、茫然と立つてゐる佐藤のはずむ強烈な白酒臭い息が彼女の顔に吐かれた。

「奥さんは居られます。決して偽りは云ひません……ですがどうしてそんなに奥さんをいぢめなさるの？」と、彼女は此の男に負けまいとする無意識的な努力が、此の男は酔つてゐるのだ、何をするかわからない、と云ふ防衛的な語氣になつてきりりと云つたが、それは身體の振へと共に言葉も多少振へてゐた。

「何をしやうとえ、だ」と佐藤政吉は、喜恵の態度を見すかしたやうに、やゝ勢を取り戻して呷鳴つた。「俺らが女房さ吐るのに、お前迄も出しやばるだな」

「佐藤さん、ま、お待ちなさい……今日は大切な村の會合で、全部男達は行つてゐます。あなたもどうか、今からでも顔をお出し下さい。お願いします」

問答の無益を悟つて喜恵は哀願した。

すると政吉は更に勢を増して、「何だ此の尼、來てから一月もなんねえで移民づらすねえ。第一村の奴等一人だつて氣に食はねえだ。一にも村會二にも村會とぬかして、滿洲迄來て、何がそれえに働く必要さあるだ……」と、堅土に叩き付けた蛙のやうに村全體を罵り、「女房さ出さねえと、突き倒すだぞ」と更に語氣を荒らげた。

彼女は政吉の怒氣に目暈のする程侮蔑と恐怖を感じたが、此の男につかまえられる君代のみじめさや嬰子のことをちらつと頭に浮べると必死的な力を持つて彼を押し出さうとして、「私のうちに絶對人つてはいけません」と云つた。政吉は侮つてゐた女の必死な力に押されてよろ／＼と後へ上るめき、一層激昂して叫んだ。

「野郎、俺らに實彈があることを知らねえだな」と云つて、杖のやうにしてゐた銃を上げ月の光りが照るところまで出て行き、懐から實彈を出してつめやうとした。

此の出来事には如何なる女房でも飛び出さずにはゐられなくて、「何をお前はするだ」と素足の儘、子供を置いて、政吉の手元へ飛び込んだ。

「出て来ただな。然し俺らあの尻さ生かしちや置けねえだ。お前引込んでろ」女房を見て一つ安堵した。彼の狂氣は喜恵に對するわけもない憎惡に燃えて、酔に振へる手をもどかしがりがらがつめやうとする手を無理に押さえて、偉大な力で引張つて行き自分の家の中で押し込めた。

喜恵は本能的に戸の中に入り堅く閉めて、ちつとその様子に耳を傾けてゐたが、俄かに泣き出した子供の聲にハツとして我にかへり、嬰子を抱き上げると恐怖の涙が……嗚咽が、止めやうとしても流れ、洩れて出た。

それから二時間として漸く清次が歸つて来たが、子供を抱いて室内を歩き続け、今しがた睡りかけた嬰児を抱いたまゝ、つとめて何事もなかつたやうに迎へた。

清次はすぐ不審な目を嬰児に向けてゐたが  
「政吉君の女の兒ぢやねえか、何かあつたな」と、新妻の動作を捜るやうに眺めた。

「屹度細君が逃げて来ただらう、なあ、さうにちげえねと思ふだが」と更に續けた。

政吉と雖も今夜だけの酔ひで、それも酔ひ過ぎた故のあの亂暴なれば、夫に云つて事を荒だてなくともと考へて黙つてゐた

喜恵ではあつたが、何もかも知つてゐるやうにやさしく云つて呉れるのを聞くと、胸がつまり、子供を抱いたなり答へる代りに泣けて来た。

然し俄かに外がやかましくなつて来たので振り返ると、今別れたばかりの津藤や總三が細君に尻を押されるやうにして入つて來、「政の野郎がまたあばれたといふでねえか」と云つた。  
「今歸るとさ、うちの野郎、政吉が鐵砲の弾さこめて、奥さんさ打たうとしたところを見て、おつたまげたよ。だから奥さんさ、怪我ねえかと思つて来ただがね」と云つて、立つて嬰兒の上に顔を埋めてゐる喜恵を凝視するのだつた。

喜恵は顔を埋めながらも、此の人達が佐藤に對する偏狹な觀察から感情的になつて佐藤を弾りはしないだらうかを恐れた。

しかし、清次を中心に津藤や總三の意見は以外にも佐藤に對する暖かい更生策の意見だつた。

喜恵は津藤や總三の細君達がうるさくまつはり付いて、「まあ、奥さんさ何處もなんともねえだか？ うら……はあ……でんぐり返る程びつくりしただ」と、云つて見せまいとする涙の出た顔を窺き込み、赤く脹れぼつたくなつてゐる眼の邊りを確めると、唇氣の毒がり、明日の話題を創造するかのやうに政吉に對するあることないことを並べたてるのだつた。「そりやな奥さんとなす、同じやうな目に、去年さ……な、そうだつたべ（と同係を振り返り）……市平さんの奥さんも違つてさ、そら

ア、おつたまげたことがあるだ……と、云ふ風に……。

彼女は男達の移民としての公正な態度にやゝ安心しながらも、女達の云ふ感情ばかりで佐藤をやつゝけやうとする話には耳をかさないで、男達の更生策に耳を澄ませた。

「俺は今君達の話のやうな佐藤君そつくりな虚無的……と云ふべえか、そんな氣持ちに成らされた過去を持つてゐるだ」とちらツと清次は喜恵を盗み見て、妻子を同時に失つた頃の氣持が生々しく蘇つて來たのを急に抑へ付ける苦痛な表情を顔の筋肉に表し、「とにかく一緒に分村計畫に燃えて内地を出て來た佐藤君だ、我々が温い氣持持つてさ、君の云ふやうにさ、あまり植付もせずに、而も上から貰ふた種運賣つちふにや相當氣分も強んで居るぢやろうから、村總出で、手傳つてやつてはどんなもんぢやろうかな」と、云つた。

「それで更生さ出來りや、これに越したこたあるめいなあ」と總三も津藤も賛成し、取敢ず村會を翌朝開き村員の賛同を求めることにし、その席上に佐藤政吉を連れ出して更生を誓はせることにしてはどうかと云ふ結果になり、翌早朝を待つべく、細君を連れて別れた。

薄い朝霧が、登り始めた太陽の光線を受けて美しく輝いてゐる中を、清次と總三は大國旗を掲げに出てゐた。十疊敷もある此の日の丸は雨期に入りかけた此の頃にとつて、祭日以外に見られなかつた村員達が、喇叭の音に駆足で集まつて來つゝ、胸

にどきつと應へた感激を皆が皆表してゐた。「今日は特に國旗の下で村會を開こうと思ふだ……諸君の誰もが既に氣附いて居ることと思ふだが、佐藤政吉君の身持や農耕について」と、そこまで云つて、紅潮して來た顔の筋肉をきりつとさせ、「俺達あ、一緒に村を出て來た、そうして將來も一生此の土に生きやうと思ふとるだが……それに就いて一人の落伍者も出したくねえだ。政吉君がどう云ふわけか、今年の春から一層やけ氣味になつてゐることは俺も早ようから知つて二三回忠告もして見たし、恐らく諸君もそうやつて見たと思ふだ。聞けば會社の馬を賣つて酒を飲み、會社から貸與してもらつた種麥まで賣つて女郎買に行つたぢやうことだ。此の一つさえも大陸移民として責任を取らなけりやならぬしくぢりぢやと考へるだ。その上、藤付も苦力にまかせきりで、倅かしかやつてゐねえだ……が然し、俺達あ、集團移民として此の儘にして置くこたあ出來ねえ。で諸君に相談したいのだが、どうか全村の能力を上げて助けてやるべきか、どうぢやらうなあ」と結んだ。

村員達の中には政吉から受けた色々の打撃を思ひ浮べるとき、普通ならば到底彼を援助してやらうと云ふ氣持が起きて來ないのであるが、でかい國旗の前に立つて、集團移民として要求されるとき、彼等はまた別な氣持が湧き、賛意を表した。外のものも尙更のこと一齊に賛同した。

「よし、それなら、政吉を連れて來て誓はせう」と云ひ終るや

三と津藤が走つて行つた。が、政吉を連れて来るまでに半時間費した。押問答の末、無理に引張つて来たのだらう、青腫めた顔に敵意を表した政吉は、然しアルコール中毒者のやうに、顔を伏せ目に進んで来た。全村員は、朝の集合に殆んど顔出しをしながら不逞者を珍らしさうに整列して迎へた。

「國旗に向つて最敬禮！」と若い村長は劍道三段の偉大な聲を上げて號令をかけた。卑屈者の政吉もびつくりして國旗を見上げ、寸く頭を下げた。「佐藤君」とおだやかに清次は云つた。

「皆、今日集つて、君の農耕を援助しやうと云ふことさ決議したが、受けて來れるかしらん」

政吉は今に昨夜の出來事を責めるだらうと待つてゐたのに對し、かう軟かに出られては「へえッ、私の畑のことですか？」酔醒の後の卑屈な彼は、全員の前では穩かに返答するに限ると思つて下に出た。

「そだが、君の所の農耕は我々の半分にも足りないであらう、今年も收穫の見込……いや、十二月から三月迄我々の給料を前借しとるだで、その間の食料にも不足する程の借かなものでは到底明年中の暮しは考へられねえだ。それで村の全能力を上げて援助したいのぢやが」

「はあ、そうして頂ければ……」馬鹿者め、と思ひながら、あつかましく政吉は云つた。

「ところで、佐藤君、我々が全力さ上げて君を援助する代り

に、どうか入村當時のやうな眞面目な氣持に戻つて貰えてえだ。そして村のものと一緒に同體になつて新らしい政吉君になつて貰えてえと思ふだかな」と、清次が、何處にも政吉を恥しめない態度で語ると、腹を突かれて流石に赤くなり、「はあ、それはもう誓ひます。迷惑ばかりかけて済みません」と、政吉は其の場を整へたのみで「何糞」と腹では思つた。確かにそれは集團の偉力に押されて日頃の反抗的態度は影をひそめてゐたかのやうに思はれたが、彼の何處にも改心しやうとする切實なものではなくて、寧ろ、うまくしてやつたと云ふ感じのみ村員の眼に寫つた。

しかし、その日から村會の約束は果されて行つた。全村員の共同耕作の速度は、見る間に帯地が廻り返されて、張り廻し始めた雑草の青が無慘に黒土の下になつて行き、その塊を打碎く洋犁が追ひかけるやうに走り、溝を造つて行く後から君代を援けるやうに喜恵が種子を蒔いて歩き、全くそこには勞働に對する共同の愉快な行進譜が響くのであつた。

政吉は馬を賣り盡して、一頭も持たない無事も悔ひず、忙しく立働く村員の前や後で、鋤を一本持ち出して、手持無沙汰に何の計畫もなかつた呑氣さを見せ、今更の如く村員を杲然とせしめるのだつた。彼は最初からやる氣がなかつたのだ、と思はれることは、忙しい彼等が政吉の畑を耕して見て判然とした。村員達は一生懸命に……それは手傳ふのではなく自分が此の勞

働の中心となつたやうに各自が馬を迫ひ鎌を取り大きな土塊を打ち壊して行くに付けても、全くその激しい奉仕勞働を馬鹿にしたやうな目で見る政吉の眸にぶつかると、打ちのめしたいやうな憤りに燃えて来るのだつた。しかし憤りながらも村會の決議を重視して少しも手をゆるめなかつた。

かうした情勢にあるときの午後、政吉はふいと姿を消した。村員達は政吉が病氣でもして出て來られないのであらう位に、氣に止めてゐなかつたが、今迄一寸鬱いでるやうに見えた君代が、種子を蒔く器を急に取り落してその上に伏さがり泣き出したので一齊に手を休めて群がり寄つた。彼女は只、濟まねえだ、を連發して泣き崩れ、最初は何が何やら理解しかねたが、喜惠の慰めにより、彼女は五日間もの間、自分の心を偽り堪え忍んでゐたが、午後から共同作業に眞剣な村員達を、その儘にして酒色を漁りに出て行つた政吉の敵意を思ふと堪え得られななのだと言ふのだ。政吉は最初から、村の共同精神に反感を持ち、村會の決議を表面だけはどうかやら聞くやうな風を示してゐたが、裏面は徹底的に破壊してやらうとして實行しなかつたし、今度の援助を受けるに當つては、「とうとう、餓鬼共が世話をやきに出た、まあ損のいかん事だから、やるだけやらせて置くさ」と、云つて益々集團を侮つて居り、「もう二日位で全部農耕が完了するから、俺は、もう仕事をせいでいい」と、云つて出て行つた、と君代は泣きじやくりながら告白した。

「おら、もうすっかり諦めただ。内地でもあの人は酒飲みで親兄弟を泣かしたとけに、満洲さばいやるちうてお母が云ふてゐたが、是れ以上皆さんさ、に迷惑かけたくねえだ。おら、もうあの入望みをすつかりなくしただ」

人々に呆然として小女を包圍し、もう續けて農耕をやる氣を喪失して、鎌や鋤を投げ出して黒土に腰を下した。突然方針を失つた人間は沈黙に押し閉ざられる。わけもわからず慰め顔になつてゐた女達も沈黙した。君代のすゝり泣きも此のぶきみな沈黙に押し潰された瞬間、人々の胸に稻妻のやうに閃いたものがあつた。

彼等は一様に腰を上げ、顔を紅潮させて近くに居る者同志お互に喧嘩を始めさうな調子で、「俺あ、佐藤たあ絶対一緒に居ることあ出来ねえ」と云ふと、聞いた者は以外な顔をして、「俺がそれを云はうと思つたじよ」と更に興奮するのだつた。

わあつ！と一齊に聲を張り上げた衝動にかられ、集團の中にどうしても入つて來ない反逆者としての政吉に對する怒りに押し流され、最早誰も止めない儘に、政吉を引張つて來て退村をさせてしまへ、と云ふ聲の元に勝氣な若者三、四人が街に走つて行つた。國策遂行の前に清次は、一人の落伍者を出すのも最早止むを得ないと決意した。



# 小さな石

近東 綺十郎

1、北滿の春は松花江の解氷で、はつきりと冬に訣別を告げる。

壯觀の流水が三日、立ち上る大動脈の烈しい眼撃めを流域の岸々に傳へた後は、村々の渡船場が開かれ、満々と雪どけに膨れ上つた廣瀾の水の上を航船が半歳の活動を始める。

2、四月の末頃――

スンガリ川下流、湯原に往く湯旺河の流域、浩遼河の渡し場を、家族や傭人たち七八人に送られて出發する妙齡の姑娘があつた。

村の豪家、陳家の次女陳青蛾が、開江の小船を便つて、ハルピンの女子國民高等學校へ歸るところであつた。

「おや青蛾、途中氣をつけてね、又一年歸れないんだから、向ふに着いても病氣などに罹らないように……」

3、船中での乗合客たちの話――

「何だか今日は、渡し場毎に警察の人たちが出張つて居らさつて、一人一人客を検査してだが、又奥の方に匪賊でも出たんぢやないだらうかのう？」

「何でも討伐に追はれて、居たゞまらねえ匪賊どもが、哈爾濱の方へ逃げる人が多いけに、それを探しておいでおやらしいよ、何しろ此の頃の船は物騒だぞいのう……」

若い姑娘のひとり旅にとつて、恐ろしい話題ばかりであつた。

4、間もなく次の渡し場で……固めてゐる警官たちの検査が終つて村の方へ引き揚げて行つた後、慌しく一人の若者が乗込んで來た。

こんな田舎にしては不似合な態度とインテリくさい容貌を持つた若者だつた、だが何となく落つかないその態度に乗合たちの視線が彼にあつまつた。

「どうも臭いぞ……この男」眼と眼が話し合つてゐた。

5、しかし男は馬鹿に愛嬌がよかつた、乗合客たちに巻煙草をすゝめたり、諷刺を飛ばしたりして忽ち退屈な乗合船の寵兒になつた。

人々は漸く安心して此の男に狎れ、青蛾も何時とはなしに、

その男と口をきくやうになつてゐた。

「だが、何となく不安なその男、人知れず太股のあたりを  
押へては顔をしかめる男。

青蛾はどこかその男に惹かれるものを感じながら、妙に不安  
だつた。

「湯原の手前まで来た時、果せる哉その男は警官たちの不  
審訊問にひつかゝつた。

「怪しいものではありません、私は此の青蛾の兄なんです、  
妹が一人で哈爾濱の學校に出るので送つて行くものです」

「それに間違ひないか？ 姑娘……」  
驚き周章てる青蛾……でも男の善良そうな嘆願の視線に出會  
ふと、何かに憑かれた様に「間違ひ御座いませぬ」と言ふより  
他はなかつた。乗合の田舎ひと達も、眼を氷の上に落して、口  
を黙んでゐるのであつた。

「その日の午後……湯原出帆の航業聯合局汽船の二等船室  
に、兄妹らしくおさまつてゐる青蛾とその男。

「青蛾さん、お蔭で生命拾ひを致しました、この御恩は死ん  
でも忘れませんよ」

「でも貴方、本當に匪團の方ぢやないのぢやうね？……」と

心配そうな青蛾。

「え、そのことは今、聞かないで下さい決して御迷惑をか  
けませんから……」

男はそう言つて眼をそらすのだつた。

「夜……船中で書物や雑誌を出して「王道樂士」を説く青  
蛾、熱心に聞き入つてゐる男。

「翌朝……晴れた船の欄干に竝んで男に滿洲國々歌を教へ  
てゐる青蛾。

「二人は哈爾濱の碼頭で別れた。  
青蛾は呉々も、男に二度と今迄の道を通らない様に頼んだ。  
男……今はモスクワ共産大學出の馮と名乗つたその男は、更生  
を誓ひ、今度會ふ時は立派な眞面目な生業について見せると言  
ひ切つた。

青蛾の純情が、馮の心に、愛と愛明を吹き込んだのである。

「日、哈爾濱道外傳家向……そこでも依然舊人間に對する捜査  
は厳しかつた、その眼を脱れ乍ら馮は、こゝで落ち會ふこ  
とになつてゐる仲間の一人一人を捉へては、王道を説くの  
だつた。

「飯店で……平康里で……裏街の隠れ家で……一笑に附され、



卑怯者、裏切り者と罵られ乍ら。涙を流して彼は説いた。

12、痛む太股を押へ、仲間のリンチに顔から血を流しながら  
踰越と歸つて行く馮……彼は青蛾の美しい顔を頭に描い  
た。青蛾、見て下さい、私は決して元の生活に戻りはしな  
い。私はどんなに仲間の虐待に會つても、一人でも改心さ  
せ、眞人間にして見せる。」

13、ある病院で、馮が治療の順番を待つてゐる時、仲間の一  
人李が肩を叩いた。彼は馮の言葉と樂士の現實に眼ざめて  
改心したのだ。

「馮兄貴、俺も兄貴と一緒に手傳ふよ。」

「ありがたうよ、李」二人は固く手を握つた。

「だが兄貴、要領してくれ、副頭目や一味の者らが五人ほど  
兄貴の生命を狙つて、病院の表に待ちうけてゐるんだ。」

二人は病院を抜けて裏から逃げのびた。

14、馮は頭目の紅龍を説いた。軍閥時代と違つて民衆は安居  
樂業を愉しんでゐること、民衆解放のため軍閥の苛斂誅求  
に抗して匪賊になつた我々は、もう轉向の時に直面してゐ  
ること、殊に共産匪はロシアの魔手に躍らされる赤魔の東  
洋擾亂のお先棒で、東洋平和、亞細亞の自主復興のため、

却つて極東に伸びる蘇聯の兇手を退けなければならぬこ  
と……

15、夜……馮の隠れ家に、今日も青蛾からの手紙と、躍進滿  
洲帝國を物語る數々の資料が送られて來てゐる。重ひ入る  
ように見入つてゐる馮と新しい同志の李。

「よし、これを仲間に見せて、も一度説かう！」二人はそれ  
等を抱へて出て行く。

その家の外まで忍んで來てゐた青蛾が、その後姿を見送り、  
嬉しげに笑ふ。

16、一方、紅龍の隠れ家では、一同が追つて來る官憲の追及  
に怖え抜いてゐた。

「馮達を今のまゝにして置いては、何時裏切られるか分から  
ないから、いつそ殺して仕舞はふ」と相談が纏つてゐた。  
そこへは入つて來る馮と李……一同きつとなる。

17、俄然、紅龍は馮に喰つてかゝつた。止めようとしても止  
まらなかつた。乾兒たち一同も立ち上つて二人に襲ひかゝ  
つた。

屋内は忽ち大亂闘の場面となつた。  
ダダアン……拳銃弾が馮の左腕を貫いた。

「畜生——ッ、よーし、こうなつたら御國のためだ。皆殺しにしてやるぞ！」

猛然と紅龍めがけて飛びかゝる馮、怒聲や呻き聲……電燈が壊れて眞闇の下で亂闘が大きく攪がった。

18、物首に驚いて近隣の住居人たちが飛出した。

「匪賊だア！」「匪賊だア！」

その聲は波及して大通りにも傳はつた。

街のざはめき……警官らの呼笛がなつた。

非常召集……

19、電車を待つてゐた青蛾は、ふとその騒ぎを聞きつけた。

（もしかしたら……）人々の間をくゞり抜けて青蛾は何時か

走り出してゐた。

20、出動した警官達の前には抵抗も無駄、紅龍一味は忽ちに

残らず捕えられてしまつた。

息絶えた李の上に折重なつてゐる瀕死の馮……青蛾が駆けつけて来た。

「あゝ馮、あなたは……しつかりして馮＝青蛾、私はまだ、

貴女に約束した職業につくことは出来なかつた。然し私は、決して又元の悪い仲間に戻りはしなかつた。私は今王道樂士の忠

實な國民となつて死んで行くのだ、それだけは認めて下さい。

青蛾……」

ぐつたりなつた馮に縋りついて泣く青蛾、その時、どこからともなく滿洲國の國歌が聞えて来た。

「滿洲帝國萬歳！」……細く、そう叫んで馮は息をひきとつた。

縛られた匪賊たち、脱帽する警官隊に圍まれて……笑つてゐるような、安らかなその死顔だつた……

## 風

「美しき挽歌」下の一

横田文子

たそがれるには、まだ充分間があつた。しかし、午後から出てゐる風がいくぶん強めになつてゐる、それはその草原のすでに枯れほろんだ、かたくいぢけたやうな雑草を、蓬々として吹きそよがせてゐた。

寛城子の街を、少し北にはづれた草原——その草原の右手後ろには日本の陸軍官舎がぼんぼんと竝んでゐるが、その間にロシア人の墓地があつて、何かしら悲しい又一種おごそかなものを感じさせてゐる。左手には一直線に北へつづく長い長い黒土の道があつた。その道を越えた先は、又ひろい野つばらであつたが、そこにはいくつかの測量臺が、まるで大陸の茫漠たる空を突刺すやうに林立してゐた。

又、北方は無限に展かれた草原で、それははるかた彼方で空と合致してゐたが、すでに今日秋の午後を迎へた草原は、かつての夏の、みどり一色の清涼さを奪はれ、寒さむとしてそのう

ら枯れた風貌を構えてゐるのみだつた。

その草原にも道にも、さつき、荷馬車に枯草をいつばい積みこんだ満人の馬力が通つたきり、その後には人影も見えず、又犬ころ一匹の姿もなかつた。

秋の落陽は早い。西方の空に連綿として翳びいてゐる雲の上にあつた太陽は、忽ち雲なかへ没して、やがて再び姿をあらはすと、さんさん地上に光りを落すのだつたが、その太陽ももはや夏の日の絢爛たる光茫を失はない、むしろ、輝ぶるやうに柔かな金粉を、あたり一面にふりそそぐのだつた。

夕暮れ近く、まるで死を思はせるやうな静かな瞬間であつたが、ちやうどその時、ロシア人の墓地の方から、小さな黒い影が三つあらはれたかと思ふと、忽ち草原の方へ、落日前の金粉をあびて駆け出してきた。と續いても一つの影があらはれた。かどうしたことか、前の三人が脱走の如く駆けるのにくらべ、これは又、遙ふやうにのろかつた、さうして忽ち前者と後者との間には、極端な距離が出来てしまつたのだがさて前者が近づいて来るのを見ると、それらは全部子供で三人のうち二人は日本人の子供、一人はロシア人の子供であつた。三人とも年齢は五つから七つまでの間で、ロシアの子供の方は日本人の子供にくらべると、ぐつと背は高かつたが、外貌の無邪氣さは、少くとも七つを出でないことを證明してゐた。

ところで日本人の子供の一人は、青い毛糸のセーターにズボ

ソをはき、他の一人は荒い格子縞のネルの着物の上に、毛糸で編んだ羽織を着てゐた。しかし二人とも赤い女の子のやうな鼻緒の下駄をはいてゐる。ロシア人の子供は、かなり古びた黒い、ピロッドの上着に、同じズボンをはいてゐたが、微笑ましいことに、この子供も赤緒の下駄をはいてゐるのだつた。

「おい、此處がいい、此處がいいよ」

眞先に走つて来たのは、毛糸の羽織を着てゐる子供で、彼は草原の眞中へんにやや深い窪地をみつけると、後から来る仲間らに高く呼びかけ、そしていきなり、その窪地へとびこんだのである。ちやうど子供の膝上あたりまで没する深さの窪地で、中は彼らが十人あまりもはいるほどの廣さだつた。

「うん、そこがいい、そこがいい」

「そこ？ いい？」

日本の「毛糸のズボン」と、ロシアの「ピロッドのズボン」は、争そひもつれ合つたまま、先の「羽織」につよくやうにして窪地へとびおりた。その、彼らのはしやぎやうは、まるでこの世に自分らの存在しか認めないやうな、おそろしい氣負ひ方であつた。

窪地へおると、三人はその眞中の枯草の上に座つて向ひあつた。と、まるで形勢は變つて、忽ち彼らは無言の行をとりはじめたのである。「羽織」はなせか右手をしっかりと懐ろに入れ、何かナポレオンのやうな格好をとるのだつたが、その格好にも

その顔にも、他に對する自分の優越をほこるものが感じられた。他の二人は、嫉妬と羨望と期待とに燃える、緊張した眼差しを「羽織」のふところへそそいでゐたが、やがて「羽織」がその中から、何かを掴んでゐる手を出すと、二人とも歡喜の眼をかゞやかし、殆んど悲鳴のやうな、奇妙な叫びをあげた。

「や、ステキだ！」

さて、「羽織」のふところから何か出たのか——何でもない。羽の小さな雀だつたのである。大方「羽織」がそれを捕へ他の仲間をうらやませようとしたのだから、彼は得々として勝ちほこつたやうに、雀を二人の前に差し出した。

「どうだ、啓ちやんも、スラヅアチカもほしいだらう」

同時に「毛糸」の啓ちやんも「ピロッド」のスラヅアチカも叫んだ。

「僕にくれよ、俊ちやん」

「トシチヤン、オーデにくれ」

スラヅアチカは、おぼつかない日本語と満語を混せて、精いつばい叫ぶのである。

「駄目だよ、ニーデブシン……」

「羽織」の俊ちやんもなかなかで、又意地がわるい。さうして三人は、一羽の雀を眞中において、限りある聲を出し、限りある力で争ひはじめたのだ、がその戦ひの間の彼らは、この世の一切に無關心で、唯、今日の自分らの遊びに夢中になつてゐる。

るのだつた。

無關心——全く、彼らはも一人の仲間の存在をも忘れてゐたのだ。その認められなかつた仲間——それは云ふまでもなく、この三人の後からあらはれた一つの影であつた。彼は、やはり落日前の金粉をあびて、のろ／＼と這ふやうにして、やつと今頃この窪地へやつて来たのである。

ところで、この後の仲間は、スラヴァチカと同じロシア人の子供であつたが、これは又、背のすなりと延びたスラヴァチカに引きかへ、せむしではないかと思へるほど背が低かつた。スラヴァチカどころか、俊ちやんや啓ちやんより低いのである。

しかし、背の低いといふことは何も重要ではないが、その子自身にとつても、又他人にとつても重要なことは、萎えたやうな、細く小さい足と、左の腕が完全に肩から失はれてゐることであつた。彼はまるで老人のやうな、足どりでやつて来たのだが、しかし彼の容貌はその身に不釣りあひな、殆ど端麗と云つていゝほど、美しく整つてゐた。彼は肌寒い秋であるのに、まだ木綿の上着を着、短かいズボンをはいて、その上、足の小指の見える破れた靴をはいてゐるのだつた。

さて彼は、急いでやつて来たため、幾分戦慄を早める胸を一つしかない右手で押さへながら、憂愁をふくんだ、どつちかと云へば重苦しい眼差しで、窪地に騒いでゐる三人の仲間らを見つめた。彼はこゝまでやつて来た、ことを明らかに後悔してゐ

た。その後悔めいた彼の表情のなかには、又一種の羨望の色が悲しく浮んでゐたが、そこに又「元氣な君らと同じになれない」と云ふ、ある諦め似た反撥の影もみえるのだつた。

ところで——窪地のなかでは相變らずの騒擾だつた。

「おい、こいつの肢をしばつて舞はせてみよう」

さう云ふと俊ちやんは、いきなり着てゐた羽織の破れ目から一本の毛糸をひつぱり出し、同時に、その思ひつきに同感拍手を送つた仲間二人と共に、雀の肢をしばりにかかつたのである。氣の毒な雀は、すでに俊ちやんの小さな懐ろのなかで、長いこと窒息状態におかれた上、さんざん虐げられて、殆ど死んだもののやうにぢつとして、身動きもしなかつた。

やがて、雀の肢は毛糸でかたく縛りつけられ、上々機嫌の子供らによつて地上に手放されたが、彼女はすでに舞ふことを知らなかつた。けれど本能的に逃げやうとし、そしてあらん限りの力を出して羽ばたいてみるのだつたが、その羽ばたきも地上五六寸のところにとどまり、結局彼女は、空しく地上にころけ落ちるのだつた。

「おや、ワツシリ、今来たのかい」

やつとのことで、窪地の縁に立つてゐる片腕の子を認めた俊ちやんは、さつきからの、上ブリ氣負ひこんだ聲をあげてその子に呼びかけた。すると、自分の存在が認められたといふ、唯それだけのことで、今まで憂愁にかけてゐたワツシリを表

情は、急に生々と活氣をおびて來、忽ち彼の双眸は歡喜の光りに充ちあふれて來たのである。

「うゝん、さつきに——」

案外、流調な日本語であつた。そして彼は小さな身體をくつとのり出すと、非常な努力を足にもたせて、その窪地へおりようとした。すると、今まで黙つてゐたストラヴァチカが、突然くつと肩をはり、まるで敵にでも對するやうに、ワツシリに向つて頸をつき出すと早口なロシア語で叫んだ。

「駄目だよ、ワツシリ、お前なんか向ふへ行つてろ——」

その言葉が吐きだされると同時に、一步ふみ出さうとしてゐたワツシリの足は、瞬間釘づけになつたやうにその場にとまり、そして、彼の表情はひとたび赤くなつたかと思ふとみるみるうちに蒼ざめていつたのである。

そのロシア語がわからないながらも、ストラヴァチカとワツシリの態度から、俊ちやんにも啓ちやんにも、大體の意味はのみこめた。ところが啓ちやんは、ストラヴァチカの意氣にあふられたかのやうに、何の原因もないのにワツシリに挑みかかろうとしたが、俊ちやんは慍ててそれを抑しとどめた。俊ちやんの心には、さつきからあらゆる物に對する優越の氣持が動いてゐ、そして彼は、今また弱者を救ふといふことで益々得意だつたのである。

「いいよ、いいよ、ワツシリ、降りて來いよ、一緒にあそ

んでやるからね」

ストラヴァチカも啓ちやんも、それ以上口出し出來なかつた。けれど、いつたん深手を負つたワツシリの心は容易に癒らなかつた。彼は蒼ざめた顔に不安と哀愁のこもる眼をみひらいて突つ立つてゐたが、そこで再び俊ちやんから同じ言葉を受けると、やつと安心したやうににつこり笑ひ、危ぶなつかしい足どりで窪地へおりかかつた。

わづかな高さであつたが、土にはひどく粘着力があり、そして滑べりやすかつた。ワツシリのこの足がすでに窪地の底へとどかうとした折、その小さな足がくつと二寸ほど滑つたかと思ふと、とたんに彼の身體はのけざまに倒れてしまつたのである。

「あつ」

同時に、入てゐた他の三人の口からも奇妙なおどろきの聲があがり、瞬間、皆に異様な緊張の姿勢がかまへられた。しかし次の瞬間、その緊張の姿勢は崩れて、今度は忽ち、大きな笑ひがそれに代つてしまつたのである。

「何だ、その恰好は——」

全く、ワツシリの倒れた恰好は、悲しいほど變なものであつた。萎えたやうな小さな足は、前方につき出されたまま宙に浮かんでゐ、又その全身を彼が持ちあげようとして、わづか右手だけを地にささへるのだつたが、さうしてのけぞつたまま身

もだへしてゐる恰好は、ちやうど龜を逆さにひつくり返へした時のそれと、非常によく似てゐた。

「何だい、龜の子みたいぢやないか」

滿洲へ来る前に、日比谷公園の池で龜をみたこのある啓ちやんが、をかしさうにして笑つた。流石の俊ちやんも、その言葉の適切なのに、やはり笑はざるを得なかつた。スラヴアチカと來たら、大仰に腹を叩いて、殆ど充分の満足を感じながら、殘酷にもワツシリイの頭から嘲笑をあげかけたのである。

哀れなワツシリイはもう駄目であつた。幾瞬間を待つ間もなく彼は起きあがることが出来たが、しかし彼はすっかり絶望してゐた。最初の驚愕、狼狽から、夢中な努力、それから起き上つた時の安堵——そこまではよかつた。けれどその次に來たものは、消えも入りたいやうな羞恥と絶望だつたのだ。

「ワツシリイ、痛かつたのかい」

やや氣がとがめた俊ちやんは、ワツシリイの顔をのぞきこむやうにしたが、ワツシリイはうゝと首を横にふつたきり、黙つて窪地の縁に腰をおろした。

おそらくここで、も一つ優しい言葉を誰かにかげられたらワツシリイはいきなり泣き出してしまふか、あるひは相手を撲りつけるかしてしまふに違ひあるまい。手の皮はすりむけてヒリヒリするのだ。腰だつて、まるで抜けるやうに痛いんぢやないか。それに第一、この恥しさつたら、こんな恥しいことはある

もんぢやない——。

ところが、彼が平氣さうにしてゐるのを見た他の子供らはもう彼に興味をもたなかつた。そして又、例の雀であそばうと思つたのであるが、肝心の雀はとづくに參つてゐて、彼らのお相手が出来なくなつてゐた。すつかりそれへの興味もなくなつた彼らは、雀の腹をしばり毛糸の先をもつと、ぐるぐると宙にふり、そしてそのまま窪地の片隅へ放り投げてしまつたのである。

その時、さつき子供らが驅け出して來た窪地の方から、白いエブロンをかけた女の人があるはれ、こちらに向つて、何か叫びながら手をふるのが見えた。

「あゝ啓ちやん、お母さんが呼んでらあ」

「ちやうどいいや、歸へらう——もう御飯なんだよきつと」  
そこで歸へることに決めた彼らは、今までの遊びの全部を忘れ、彼ら待つてゐる嬉しい食膳に思ひをめぐらしながらさつさと歸へり仕度にとりかかるといつた。俊ちやんはそれでも少しワツシリイのことが氣にかかると見え、ちらつと彼の方に眼をくれたが、微塵も動きさうにないその様子に、どうでもなれといふ氣持になつた。そして又、そのことは直ぐ忘れてしまつたのである。

「僕は、あしたは雀二羽とるよ」

「二羽なんて捕れるものかあ」



「うゝん、三羽だつて捕つてみせるよ」

いつの間にかお母さんの姿は見えなくなつてゐた。それでも彼らはあきずに喋りながら、ぶらぶら歩きはじめたが、途中で俊ちやんがいきなり駆け出すと、他の二人もそれに従ふやうにして走りだし、さうして、やがて彼らは草原の向ふに小さな点在となつて、忽ち墓場のあたりに消えてしまつたのだつた。

彼らは窪地を見捨てていつた。そして、氣の毒な片腕のワツシリーをも見捨てていつたのである。ワツシリーは依然として同じ場所に腰をおろし、黙つて仲間らの歸へつてゆく後姿を、羨望と嫉妬と、ある憤りとの混つた氣持で、ちつとみつめてゐたのだ、あゝ、俺にはなせ片腕がないのだらう、そして、どうしてこんなに足が小さいのだらう、強い身體になりたいなあ！ 皆のやうに、せめてこの草つばらを走つて歩けるほどに……

陽はとづくに没し、草原、帯に黄昏のうすやみが漂ひはじめてゐたが、空の一部にはいまだ餘光が仄めいてゐ、それは何か茫々としたはかなさを感じさせてゐた。あたりは静かだつた。さつきから、時をり、近くの兵營から勇ましいラッパの音がきこえて來てゐたが、それもいつとはなくに終つてこの草原は、何かしら渺茫とした海を思はせるやうな静けさに返つてゐたのである。

ワツシリーは、たそがれの薄明のなかにちつとちつとくまつてゐたが、やがて窪地の片隅にあるものをみつけると、例の足を

ひきづりながらそれに近より、右手をさしのべて拾ひとつた。それは、慮めぬかれたあけく殺されてしまつた、さつきの哀れな雀だつた。

ワツシリーは、それを右手に掴むと、再び元の場所にかへりもう冷めたくなつてゐるその雀を、しみじみと眺めはじめた。まるで久しぶりに舊友にでも會つたやうな、又、母を亡くした人がその母を憶懐するやうな、なつかしく、又悲しい、そして熟つばい眼差しであつた。

暫らく彼はさうしてゐたが、やがてその雀をト着のポケットに大切さうに藏ひこむと、そのまま窪地を出た。そして、何か忘れものでしたかのやうに、少し肩を張り、不安さうにあたりを眺めまはしてゐたが、やがて又そつとポケットに手をふれ、そこではじめて安心したやうに肩をぬくと風の中を例の足どりで歩みはじめたのだつた。

彼を迎へる人があるのか、ないのか知らない。しかし、どちらにしろ彼は今幸福なのだ。たつた一羽の、しかも死んだ雀で――。やがて彼の姿も次第に小さくなり、蒼茫とくれてゆく窪地のあたりに、消えるともたく去つて行つたのだつた。



# ギルマン・アパート點描

竹内正一

階下の、レストラン・ギルマンでは、ホール全體を今晚の結婚披露の會場に貸切つて、その準備に朝からこつたかへしてゐた。満人のボーイ達は、白い上着を脱いで天井の色テープの飾りつけや、植木鉢の持ち運びにせわしかつた。二階のアパートの掃除女も、今日ばかりは、臨時に、下の手傳ひをさせられ、濡雑巾を持つて床を這ひまわり、椅子や卓子の位置を直したり、その上を拭いたりしてゐた。背の高い方のジーナは窓框に上つて、せつと玻璃拭きをやつてゐた。

鐘で十二時に近く、裏の料理場の外では、満人の料理人達が二三人かゝつて馬鈴薯の形剝きにかゝり切つて、一つ刻いては手早く、傍の水の漲つた四斗樽の中に、ほうり込んでゐた。鶏を潰すらしくけたまほしい啼き聲が裏庭の水道端から聞えてゐた。

「マルーシャ、今日のお婿さんは誰だい。」  
仲むしつて玻璃を拭いてゐた。もう四十近い婆さんのジーナ

が、窓框の上から、その下の床の上を、汚れたスカートの裾を水に濡らし乍ら、元氣よく尻を高く立て、雑巾を押し來た、若いマルーシャに訊ねた。

「何でもキタエスカヤのレットマン商會の息子だつてよ。この不景氣な時に、レストラン借りきつて、結婚披露をしゃやうなんて、どうせジュウに決つてるよ。」

「まあ何でも好いよ。これで明日は妾達の給料も貰えるといふもんだ。この三四箇月満足に給金を貰つたことないんだからね。」

「そりあお互ひさまだよ。この店だつて、どうせさう長いことないよ。と云つたつて、何處に行つたつて、これより好いとこなんてどこも無いんだからね。」

「そりあ、さうだけど、もう直ぐ旅券の書替へに六圓要るんだからね、その金だつてありあしない。」

「お前、そんな心配するより、あの三號室の奥さんに借りたら好いぢあないか。」

「何時も、何時もそんな譯には行かないよ。」

「好いさ、向ふは金があるんだもの。」

二人は何時か向ひあつて話してゐた。それを見付けた頭のつる／＼に禿けた大きな文配人が、

「おい、お前達、何を饒舌つてるんだ、さつさとしないか、二時までにはみんな済して了はなければならぬだ。」

と、怒鳴つた。

若いマルーシヤは、支配人の方を振り向くと、

「ブレボフさん、給料何時呉れるのさ、まだ先月分貰つてやしないんだよ。」

「そんなこと俺が知るか、旦那が来たら聞いて見た。」  
支配人のブレボフはさう云ふと、奥へ入つて行つた。

「あの白豚野郎、旦那が人が好いもんだから、好い氣になつてやがる。彼奴あの女主人とも怪しいんだよ、妾、彼奴が女主人と腕を組んで、キタエスカヤ歩いてるのを見たんだよ。あのリヤリヤだつて誰の子か判るもんか。」

「マルーシヤ、あんまり無茶を言ふもんぢあない上聞えるぢやないか。」

「聞えなかつて構やしないよ。」

さう言ふと、又尻を立て、雑巾を押して行つた。白く乾いてゐた樂手達の上る低い臺の下が、一條一條水に黒く濡れて行つた。

灯りがつく頃になると、ホールはすつかり片づいて、中央に白い布を掛けた卓子が、長く續いて、その上に花が飾られた。客の來るのは八時だつた。

自動車が何臺も、玄關の前に止つた。その度に、白いイヴニングを着た女と、タキシードの男とが腕を組んで入て來た。みんな明るい顔をしてゐた。女は燈の下で取りわけ綺麗に見え

た。

アパートの住人達は、入れかわり立ちかわり、階段の下り口まで來て、玄關の扉を入つて來て、外套を脱ぐ人々を眺めて覗いてゐた。女の客は、外套を脱ぐと、更めて、大きな化粧鏡の前で顔を直して、ホールへ入つて行つた。

マルーシヤは、階段の上から三段目のところに、むんずと腰を掛けて、凝つと手欄の間から、お客達の入つて來るのを肘に臂をのせて覗き込んでゐた。

このレストランは元は、ギルマンと云ふ獨乙系の猶太人の經營してゐたものらしく、今だにその名前を纏いでゐたが、現在の主人は、希臘人で船の司厨長上りださうで、立派な體格をして腕に鎧の入墨をしてゐた。毎朝十時頃になると、七八丁離れた自分の住ひから妻君と五つになる女の子を連れて店へ來た。

そのリヤリヤと云ふ女の子には、何時も父親の昔を偲ぶ爲かのやうに水兵服を着せて、男の子のやうな嗜好をさせてゐた。そして、頭を五分刻にした二十位の露人の保母がついてゐた。リヤリヤは其のガランと空いたホールで、いつも保母に附添はれて遊んでゐた。そして、大きな着音機を鳴らして踊つてゐた。そして夜の八時頃になると、保母に抱かれて眠つたまゝ、兩親より先に自分の家に歸つて行つた。

その頃から、ホールには、バンドが鳴り出し、通ひのダンサー

が毎晩四、五人出て来た。そして三時頃までジャズの音が二階のアパートまで響いてゐた。

店としては相當な歴史を持ち、キタエスカヤの大商店の主人などが主な客で、そして、高級なレストランの一つに數へられてゐたにも拘らず、北鐵の接収で、露人が減るに従つて商人達でも店を閉めるものが、目立つて殖えるに従つて、この店も客足が段々と減るらしく、經營の困難なことが、ボーイ達や雇ひ女の口から、アパートの止宿人達の間にも傳へられてゐた。

階上は全部一室づゝの貸部屋になり、十二の室があり、それぞれ家具付になつてゐた。寢臺、洋蓆箱、卓子、長椅子、數脚の椅子、それに洗面臺が附屬してゐた。毎朝、洗面臺に新しい水を入れ、下の戸棚になつたところに置かれた石油罐の汚水受けの水を捨て、室を掃除し、冬になれば、各部屋のベチカを焚くのが、女中のジーナとマルシーシャの主な仕事だつた。そして夫れだけで一日の半分は潰れてしまふのだつた。その間に、宿泊人の朝の食事の麵麴を買ひに走つたり、郵便を出しに行つたり雑用に追はれた。

各室は一本の廊下を挟んで六つづゝ向ひあつてゐた。

そして左側の九號室と十號室の間が、便所と洗場になつて、その傍には何時も湯沸しの湯がたぎつてゐた。そこを抜けて裏のベランダへ出て、裏庭へ下りる裏階段がついてゐた。そして

裏庭にはこのレストランに附屬した粗末な建物や小さな借家が中央の空地の廻りに竝んでゐた。そして、レストランとアパートになつてゐる建物の壁に沿ふて表通りに出る通路があり、そこには頭丈な門があつて、夜の十一時になると錠がかゝつて呼鈴を押して門番を呼ばなければならなかつた。

従つてアパートの止宿人は、レストランの入口から出入しても横門から裏階段を上つて來ても、どちらでも好いやうになつてゐた。

一號室は空間で、このレストランのプライベート・ルームに使はれてゐた。夜など、華かな服裝をした女連れの客の黒い姿など怪かばかり空いた扉の隙間から覗かれることなどあつた。そんな時には、下から満人の白い上着を着たボーイが銀の大きな盆に、洋酒の瓶や料理の皿などを竝べて、何層も上つて來た。

隣りの二號室はこのアパートでも最も小さな室の一つで、中は壁側に寢臺を一つ置くとは一人一人やつと通れる程の室だつた。オーリヤとその亭子が住んでゐた。オーリヤの主人は、キヤバレーの太鼓叩きで、オーリヤとは二十一二も年が違つてゐた。オーリヤは二十を越して間がないやうに見えた。

毎晩八時過ぎると、彼は市で一番大きなキヤバレーに通つて行つた。そして、明け方の四時過ぎに歸つて來た。夏時分は彼の

歸る頃は太陽が高く昇つてゐた。そして二人はそれから晝過ぎまで扉を締め切つて寝てゐた。比較的表情のない、いつも澁い顔をしてゐるこの男は、娘程も年の違ふオーリヤを子供のよう  
に愛してゐたらしい。そして晚九時頃から夜明まで働いて一日一回五十錢の日給は、彼等夫婦にとつてやつと凌いで行けるだけの収入であつた。

亭主が働きに出て行つた後、オーリヤは若い女中のマルーシヤと良い遊び仲間で、二人は何時でも炊事場の入口で饅舌つてゐた。

「マルーシヤ、あの四號のイリンスキーの人達は近い中に、ソヴェトへ歸るんだつてさ。」

「さうさ、北滿鐵路を兩洲國で買つたんでね。ジーナだつて、ソヴェトに籍があるんで、歸らなけりあ、ならないんだつてさ。息子が莫斯科にゐるんだけど、歸る旅費がないつて昨日も半日泣いてたよ。」

そこへ、イリンスキーの妻君が、裏階段から、大きな軀を揺するやうにして、そこへ上つて來た。もう五十を越した見るからに頑固さうな婆さんだつたが、着てゐるものは、このアパートの女達の中で際立つてゐた。その室も此處で一番大きな室を五、六年此方借りて、拂ひもきちん／＼してゐたので、女中達も、他の白系露人達も、この夫婦には齒が立たないやうに見えた。何でも、主人は近くの鐵道工場の技師だとか云ふ話で、收

入も相當多いらしく、生活も豊かだつた。

「マルーシヤ、運送屋頼んどいて呉れたかい？」

婆さんは、紙包を二つ三つぶら下げて、そこへ入つて來ると自分の召使を使ふやうにマルーシヤに言つた。

「今日、晝から來る相ですよ。」

「あゝ、さう、そいぢあ少し荷造りするから手傳つてお呉れなね。」

さう言ふと、オーリヤの方に、あごで軽く會釋して、自分の室に入つて行つた。マルーシヤはオーリヤにちよつと顔をしかめて見せると、彼女の手にあつた南京豆を口にはふり込んで、ぼた／＼と四號室に入つて行つた。

五號室の男は、何を商賣にしてゐるか、誰も知らなかつた。いつも身装を整へた相當の年配の獨身者だつた。彼は何時出かけてゆくとも、何時歸つて來るとも決つてゐなかつた。人達はよく彼が、キタエスカヤの大通りを、これと云ふ用事も無さうにぶら／＼と歩いてゐるのを見かけた。

その日の五號室の男は朝から出かけてゐなかつた。北向の窓には白い氷が張りついて、外の寒さを思はせるやうな日だつた。その晝過ぎ、このアパートへ、毛皮の裏のついた冬外套に頭から頭巾を被つた、露禿人の巡査が、二、三人どか／＼と二階へ上つて來た。こんなことは、このアパートには珍らしいこ

とだつたので、どの室からも、露人達は顔を出して、何事かとみんな廊下へ集つて来た。

巡査はマルーシヤと、ジーナをつかまへて何か話したが、よく通じないでみると、誰が呼んだか、レストランに働いてゐる露人の使用人がやつて来た。

「おい、こゝにMと云ふ露人がゐるだらう。」  
一人が訊いた。

「え、居りますが。」

「その室へ案内して呉れ。」

「何かあつたんですか。」

「何でも好い、ちよつと調べることがあるんだ。」

そして、彼等は五號室へ入つて暫く出て来なかつた。マルーシヤとジーナを圍んで露人達は廊下で、いつまでもひそ／＼騒いでゐた。

その翌日も、……翌日も五號室の男は歸つて来なかつた。すると誰言ふともなく、種々な噂が立ち出した。マルーシヤが得意相に、眞相らしいものを傳へた。

「あの男、大へんなんだよ。拘摸だつてさ。」

「まあ、拘摸？ そんなに見えなかつたがね。」

十號室のマニキュアで暮してゐる女が言つた。

「拘摸つたつて、普通んぢやないのさ、親分なんだつてよ。」

「何しろね、何か拘られた時は、あの男に頼むと品物が、大

抵歸つて来る相よ。この前もハンドバッグ拘られた女の人が頼みに来たら、直ぐ戻つて来たつて話よ。」

オーリヤも本當らしく言つた。

併し一週間ばかりすると、その男は歸つて来た。幾日も留守をしてゐたやうにもなく、別に變つた様子も見えなかつた。女達は怪訝さうに、顔を見合せてゐた。

暫く空いてゐた七號室へ日本人のダンサーが入つた。寒い日の書過ぎ、友達と二人で、鞆を二つ三つ持つて引越して来た。が、その室に住むのは、その中の一人と見えた。今迄締め切つてあつた室の中は、ベチカを焚かない爲に、氷の様に空氣が冷え切つてゐる。

「おい、寒い。」

一人が言ふと、案内して来た支配人が、

「扉を開けて置く宜敷い。みんな外出するとき扉開けて置きませう。」

「だつて物騒ぢあないの。」

「そんなことありません、二十十年アパートやつて居ます。」

誰も何んにも盜られない。」

事實、このアパートでは、朝一回ベチカに薪を焚くだけで、扉を閉めて置くと、外出先から歸つたときなどは、室の中がひやつとしてゐた。それで露人は大抵外へ出るとき扉を細目に開けて置くのだつた。廊下は、中央どころに洗場があつて、その傍

で、いつも湯を沸してゐる爲、室の中より温かだった。

この習慣は、いつも日本人の新しい止宿人が来るたびに面喰らはせた。

ダンサーは夕方になると化粧をして出て行つた。そして三時頃歸つて来た。歸りにはいつも、どこかの保険屋の外交をしてゐる男と連れだつて歸つて来た。そして、朝早く男は、女の寝てゐる中にそつと裏階段から歸つて行つた。晝、男の來るときがあつた。そんな時は、下からロシア料理をとつて、室で、喰べてゐた。

その中にいつか、この女の室に違つた男が出入りするやうになつた。その男はいつも、自分で小型自動車を運転してやつて来た。その男の來てゐるときは、黄色く塗つたダットサンが、横門の前に止つてゐたので直ぐ判つた。そして、前の保険屋の外交をしてゐる若い男は、すつかり姿を見せなくなつた。

イリンスキー夫妻がソヴェトに歸ると、間もなく女中のジーナも、何とか金の上面をして、國に歸つた。三號室の日本人の細君だけ何がしかの饗別をやつた。ジーナは涙を流して喜んだ。

「泣かなくても好いよ、ジーナ、莫斯科にはお前の息子がゐるんぢやないの、早く息子のところへ歸つて達者でお暮しなね。」

「有難うござります、奥さん、でもソヴェトに歸つても、息

子のところへ行けるかどうかも判らないですよ。」

そして、大きな風呂敷包みを抱え、頭から布を破つて、ジーナは出て行つた。宿泊人の女達は、裏階段のところまで、聲をかけ、手を振つて別れを惜んだ。

ジーナの行つて了つた後は、若い満人の黄といふボーイが雇はれることになつた。黄は支那語と同様に露語を話したので宿泊人には別に何も不自由はなかつた。黄は、直ぐ夫れらの女達と親しくなつた。とり分け三號室の日本人の細君と親しくなつて、よくその室で話し込んだ。

イリンスキーの出て行つた四號室には、吳といふ満人の若い夫婦者が入つた。吳は、傳家句に満人映畫の劇場を經營してゐた。細君は相當な家柄らしく、いつも洋装をしてゐた。二人とも生れは廣東とかで、お互ひの間の會話は何時も、南方語を使つてゐた。そして左前腕の少し曲つたロロといふ白い犬を飼つてゐた。ロロは誰の室へでも遠慮なしに入つて行つた。そして廊下にところ構はず小便をした。黄はその度にぶつゝ、文句を言ひ乍ら掃除をした。それでも黄は、流石に満人同志だけに吳夫妻とも、直ぐ親しくなり、そこで見聞きしたことを三號の細君のところへ來て話した。吳は新京にも活動の小屋を持つてゐるので時々、新京へも出かけると云ふことだつた。何かの時に、吳夫妻は三號室へ遊びに來て三號の主人と話して行つた。瀟洒な青年紳士の吳は、時々、話にちよつとアクセントの變つ



た英語を交へて話をした。

「映画の経営は仲々難かしいでせう。」

と、三號の主人が云ふと、

「え、大變。私、去年資本關係のことで大きな失敗をしました。それでこんなアパートに焼つてゐるのです。けれど、私、映画には十年の経験があります、きつとまたやり返します。」

吳の細君は夫に凭りかゝるやうにしながら、夫と三號の主人の話を聞いてゐたが、言葉がよく分らないらしく、時々、南の言葉で説明をさせて、二人で何とか云ひながら笑つた。

吳の細君はそれから、ちよいちよい三號室へ入つて来たばかりでなく、どの室へでもこのこ入つて行つて、誰をつかまへても、片言まじりで話しかけて、時には露人達にうるさかられても平氣だつた。

十一號の小さな室に土地周旋か何かで食つてゐる、露人の相當年配の夫婦者がゐた。然し生活はあまり樂でないらしく見えた。ある日の事だつた。その細君が、廊下へ飛び出して来て満人のボーイの黄をつかまへて、何か聞いてゐた。

「一體お前達、何をしてゐるんだい。誰か裏の冷蔵庫へ入れた野菜を盗んだ奴があるんだよ、氣をつけなきあ困るじやないか。」

「そんなこと言つたつて、仕方がないよ。私達だつて一日中

見張りをしてる譯には行かないんだから、みんな自分自分で氣をつけて呉れなけりあ。何しろ共同の冷蔵庫なんだから。」

「そりあさうだけど少し氣をつけてお呉れ、此頃はちよいちよい物が失くなるんだよ。」

その細君の隣が餘り大きいので、露人の女達は皆集つて来てわい／＼騒ぎ出した。マルーシヤが、

「本當だよ、此頃はよく室の物まで、失くなることがあるからね、みんな氣をつけてなくちや駄目さ。ねえ、オーリヤ、あんなのどこでも、室の中に置いといた砂糖が大分減つてたつて言つてたね。」

「さうよ。」

事實、三號や六號の日本人のところでも、共同の冷蔵庫に入れて置いた、食料品や、室の小さな品物などが失くなるのだつた。食器類などは、普通使用したあとでは、洗場へ持つて行つとくと、マルーシヤか黄がそれを洗つて夫々の室に返して置くのであつたが、嘗てその品物が失くなつたり、間違つたりすることは減多になつたのが、最近では、時々是が一本足りなくなつてゐたり、皿が一枚見えなくなつたりした。古くからあるマルーシヤは勿論、新しく来た黄だつて、特にそんなものを必要としないのだから、誰も彼等がそれを誤問化したとは思はなかつた。然し、どうして失くなるのか遂に誰にも判らなかつた。

それからは、室の出入りに人々はみな夫々鍵をかけるやうになり、冷蔵庫や洗場へ大事なものを今迄のやうに、置かないやうになつた。それで今迄のやうに頻繁な、この小さな盗難は少なくなつたやうに思はれたが、それでも、ちよつと室を空けて置いた間に、物が失くなるやうなことがあつた。

隅のダンスの室と向ひ合つた六號に、やはり此頃引越して来た日本人の女があつた。

「あの今度六號に來た女の何でせう。」

三號の細君が、引越して來て二三日経つた頃、ふと主人に話した。

「さあ、俺あまだ見た事ないが、奥さんぢやないのか。」

「ええ、どうも然うらしくないわ、だつて男の人つたら、何か土木屋みたいな人が、たまに來るきりよ、それも大抵二人連れよ、そして、階下からぢやんぢやん料理をとつて食べてるのよ。」

纏てボーイの黄が、

「六號の奥さん、あれ、あのよく肥つた掌櫃の第、太太ですよ。」

と、教へた。

ある日、三號の扉を叩くものがあつた。室には細君だけで、主人は出勤で留守だつた。

「あの、失禮ですが。」

細君が扉を開けると、まだ口もきいたことのない、その六號の女が立つてゐた。そして

「あの、私のところのお皿が間違つて、こちらへ參つて居りませんこと。」

言葉は丁寧に聞えたが態度は何處となくガサツな、その女の前身を思はせるやうな口振りだつた。

「さあ、來て居りませんと思ひますが、今、ボーイの持つて來たのこれだけですから、御覽下さいました。」

細君はちよつと不愉快な顔をして、傍の食器棚の皿小鉢の類を指し示した。女はぢろぢろ眺めまはした舉句、

「いえ、有りませんわ、せいぢや他へ紛れて行つたかも知れませんわ、ボーイに訊いて見せよう。どうも御暗しう。」

細君は女の出で行つたあとの扉をボタンとした。廊下からマルシーヤをつかまへて何か言つてる女の聲が甲高く聞えてゐた。

お互に言葉のよく通じない女達二人は、いつまでも手眞似と片言の支那語で何か言ひ合つた。ふと、傍を通りかゝつた黄が

「どんな皿ですか。」

と、六號の女に訊ねると、女は、更に黄に向つて、皿の大きさや、模様などを話した。すると彼は、何思つたか、四號の奥の室へ入つて行つた。そして一枚の皿を持つて出て來た。

「これでせう。」



「さうよ、どうしてあんなとこに行つてたの。」

「さあ。」

女は別に黄の返事も待たず、それを持って自分の室に歸つて行つた。マルーシャは黄に、

「どうして、あの皿、四號の室に行つてたの、お前間違へたのと違ふのかい。」

「知らないよ。」

黄はさう言つて、さつさと裏階段の方へ出て行つた。

このアパートでは、月に一度、例の禿頭の支配人が室料を取るために、受取を片手に揚つて、各室を廻つて歩いた。露人の中には、相富生活にも困つて、室代を三つも四つも滞らせてゐるものもあつた。同じ室でも、日本人に貸すのと露人に貸すのでは露人の方が大體昔から、古くゐる關係から植段が違つてゐた。四五圓がた安くなつてゐるのが普通だつた。それにも拘らず、十一號室の土地周旋の露人は、もう大分室代を溜めてゐるらしかつた。その室に入つた支配人は何時までも催促をしてゐるらしく仲々出て來なかつた。

雖て顔を眞赤にして、荒々しく扉を開けて出て來ると、彼は、

「おい、黄つ。」

と、怒鳴つた。

黄と、マルーシャが一緒に、洗場から顔をつき出した。

「おい、この室の扉に鍵をかけて了へ。」

「どうしたの、番頭さん。」

マルーシャが吃驚したやうに訊ねた。

「室代もちつとも拂はないで、俺を侮辱するなんて、怪しからんことだ。」

「何が侮辱だい。室代溜めてゐるの、うちばかりぢやないんだからね、こつちばかり喧しく言つて、どうしてオーリヤんとこ催促しないんだい。へん、私や何もかも知つてゐるんだからね。どうだい、態見ろ。」

支配人の出て來たあとを追ふやうに飛び出して來た十一號の細君は、これも顔を赤くして黄色い聲で俄鳴り立てた。

「何を言ふんだ。莫迦な、黄、何でも好いから早く、この扉を釘づけにしてしまふんだ。」

さういふと、彼は、その他の室へ廻るのも忘れて、階下へ下りて行つた。

翌日になると、黄は、朝から三寸幅の木片れを、どこからか持つて來て、にやにや笑ひながら十一號の扉を外から、釘付けにしてゐた。中からは夫婦が替るがはる何か大聲で怒鳴つてゐた。

併し、それで別に二人のものが室の出入りが出來なくなつた譯ではなく、丁度この室にだけ裏のペランダに出られる扉があり、彼等は毎日そこから出入りをしてゐた。支配人もそこ迄は

釘づけしろとは言はなかつた。何か然うまで強いへない弱身が、この支配人の方にあるのか、または、性來のロシア人の呑氣さによるのか、それは判らなかつた。

三月になつても、北滿の冬の寒さは空氣にも、大地にも、家の壁にも深く浸み込んで、仲々容易なことでは和らぎさうにもなかつた。始めての冬の馴れない寒さの爲に、そして夜遅くまで不健康な職業のために、すつかり體をこわしてしまつた七號の日本人のダンサーは、とう／＼肺を悪くして毎日蒼い顔をして、室に臥てゐた。たつた一人同じ仲間のダンサーが、時々見舞ひに来るだけで、去年頃、毎晩のやうにやつて來た男達の誰一人顔を見せるものもなかつた。ホールを休んでゐれば、夫れだけ全收入として生活してゐる今の彼女にとつて、最早經濟的に何の希望も持てないのは判り切つたことだつた。その友達の時々、女のドレスや身廻りのものを金に換へるために出かけて行つたが、それだつて何時まで續くか知れ切つたものだつた。

そして四月の始めになつて、陽氣が少し戻つて來た日、女は僅かばかりの残つた荷物を自動車に積んで、友達に附添はれてこのアパートを出て行つた。

それと、前後して、六號の請負師の妾をしてゐた女も、二月か三月の部屋代を溜めて、アパートを出なければならなくなつた。荷物を抵當に取るの取らないのと、永い間禿の支配人と女

の間で喧しくさはいだ擧句、荷物だけを殘して女は出て行つた。

一時はみんなふさがつてゐたこのアパートも、そんな風に、ぼつ／＼と空間が出來ると、仲々後はつまりなかつた。段々日本人がこの街にふえるに従つて、借家を持つてゐるものは、みんな日本人むきに聲を入れ、日本風の風呂桶を置いたりして借家人の吸引に努めるやうになつたので、その方へ段々と人をとられる爲であつた。

そして、三號の日本人夫婦も、新しく出來た日本人むきのアパートへ引越して行つてしまふと、後は、昔のやうに、大部分露人ばかりのアパートになつて了つた。この残つた露人達の大部分は今更引越すにも、金もなく、室代もみんな五十圓百圓と溜まつて身動きの出來ない連中だつた。漸く其の日其の日の食費を稼ぐだけがせい一ばいだつた彼等は、追ひ出される迄は、動かうともしなかつた。

レストランの方もアパートの方も態々經營が困難になつて來ると、主人は毎日のやうに、使用人を怒鳴り散らし、細君はきいきい聲を張り上げて、主人と口喧嘩をした。雇人の給料がみんな一箇月一箇月と遅れて、それも何度にも分けて拂はれるやうになると、コックやボーイ達も、思ひ思ひに暇をとつて出て行つた。

そして、この店の悲運に一層拍車をかけたものは、この街に、

露人を主として經營されてゐたS——銀行の破綻であつた。その預金者の大部分が露人の中途階級以下であつただけに、その影響するところが大きかつた。その爲にギルマンの主人も少からぬ傷手を受けた。店の方の經營は思はしくなく、S銀行はつぶれるし、彼はその大きな體をレストランの事務室の椅子に埋めたまゝ凝つと考へこんでゐた。

春近くなると何と思つたかマルーシヤが、急にこのアパートを辭めるといひ出し、

「私、キャバレーのダンサーになるの。」

それだけいつて、彼女はふつり姿を消した。

アパートの掃除や走り使ひをするものは、黄一人になつた。レストランの方の經營が益々面白くゆかないと見えて、相當經濟的に行きつまつた、ギルマンの主人は、代りのボーイを雇はふとしなかつた。そして、今迄は一日沸かしてゐた湯沸しの湯も、日に何度と回数を決めて火を焚くやうになつた。

マルーシヤは時々、夜になると、お粗末なイヴニングを着て遊びにやつて來た。永い女中働きで荒れた皮膚に、むりに白粉を塗つて、顔はしみが出たやうに、ところどころ剥けてゐるのも平氣で、得意さうに廊下でオーリヤなどをつかまへて話してゐた。併し、こんな女を働かすキャバレーがあることが寧ろ不思議だつた。

「お前、何處のキャバレーにゐるんだい。」

と、一人残つた十二號の獨身の會社員らしい、日本人の宿泊人などが聞いても、ニヤつと笑つてゐた。そして、オーリヤと連れ立つて、何處かへ出かけて行つた。オーリヤは、そんな時、何時でも夜更けて獨りで歸つて來た。

そんなことが、ちよいちよいあつてから間もなく、或る晩、吳の細君は、主人と一緒に外出して歸つてくると、閉つぷしに入つて來た黄に、

「黄、今晚ね、——通で私、あの二號室のオーリヤつて女ね、あれが階下の支配人と一緒に腕を組んで歩いてるの見たんだよ。あれ、可怪しいんぢやないかしら。」

と、言つた。黄は、にやにや笑ひながら、

「そんなこと、私がこゝへ來る前から知つてたよ。私の、友達で、——街のN——で働いてるのが言つてたが、オーリヤは元は、あすこの妓だつたんだよ。」

「まあ、さう。」

「そいで、今でも、あすこに友達がゐて、それが時々天津の店の方へ働きに行くんで、その留守には、その妓の代りにちよいちよいN——で働いてるんですぜ、だから階下の白豚野郎と出來てたつて可怪しくなんかありませんよ。」

マルーシヤも、キャバレーのダンサーになつたなどと云ふのは嘘で、オーリヤの紹介で、その店で働いてゐるらしいといふことだつた。

そして、そんなことは忽ちのうちに、アパートの止宿人達みんなに擴つてしまつた。併し、既に初老の域に達してゐるその亭主だけが、思ひもかけないやうに、毎晩八時頃になると、窓の扉の間で、オーリヤの頬に接吻をしてから、外套の襟を立てキヤパレーに通つて行つた。恐らくこの何者にも更へ難く愛してゐる、若い細君の事情に就て誰か彼に告げするものがあつても彼は、やはり眉一つ動かさずことなく、そんな莫測な噂を彼に聞かせる態かものゝ顔をちつと見つめながら、又、黙々として自分の稼ぎに出かけて行くだらうと思はれた。

街に埃つぽい春風が立ち、間もなく松花江の水が解けて流れやうと云ふ便りを聞く頃、四號の吳夫妻は、新京の映画館の用事が出来たのを口實に、白犬のロロだけを置いて出かけてしまつた。犬はボーイの黄が預かることになつた。そして一月経つても、二月経つても仲々吳夫妻は歸つて來なかつた。

「おい黄、四號の大將はもう歸つて來ないぜ。」

誰かゞ、ロロを日に一度か二度づゝ散歩に引つづけて行かなければならないので、綱をつけて窓から連れ出して來る黄を見て、椰流ぶやうに云ふと、彼はむきになつて、

「そんなことないよ、荷物もみんな置いてあるんだから、今に歸つて來るよ。」

と、言つて、闇があると、この犬の世話をしてゐた。そしてこの犬は、普通の飼料を食はないので、仕方なく自腹を切つて

近所の露人の食料品屋で賣つてゐる一個六錢の肉まんちうを買つて來て食べさせるのだつた。

「お前、そんなことして、後で吳さん金くれるかい。」

と、聞くと、

「さあ、判らないよ、多分呉れるでせう。」

と、言つた。

犬は犬で、一日中寮の中に閉じ込められてゐるのではたまらないので、思ふ存分寮の中を暴れまはるらしく、寢室にかけてある毛布も、ソファのクッションも、何もかも手當り次第に噛み破つてしまふのだつた。

その擧句二箇月程経つて、吳の夫婦が慌てゝ歸つて來た。そして彼等は今度は、その日の中に寮を片付け、犬を引つづけてこのアパートを出て行つた。

「黄、お前、犬の食料買つたの。」

と、吳夫婦の出で行つたあとで、十號のマニヤアで暮してゐる細君が用事で入つて來た黄に訊くと、

「一錢も呉れないよ、これ一つ呉れたよ。」

黄は、手にぶらさけてゐた、石版刷の風景畫の入つた額を目の前につき出して見せた。流石の黄も少し腹が立つらしく、

「吳さん掌櫃好いんだけど、太々好くないね、私、同じ満洲人だから黙つてゐたけれど、あの太々大へん悪い、あちらこちらで品物の失くなつたの、みんなあの人盜つたのです。」

そして、又、その絹ぶちをぶらぶらと揺りながら、  
「没法子ね。」

と、いひながら出て行つた。

五月になると、俄かに永い冬眠から覺めた木々の若葉は綠色に萌え出し、太陽の光は急に明るく輝き、街は、夏の用意に活氣づいて來た。

十號室の、細君がマニキュアをしながら、年老つた中風の亭主を養つてゐる一家は、この一夏を松花江の對岸の、ザトンに小さな別荘風の小屋を借りて移つて行つた。

「今日引越すの。」

荷物を片付けてゐるのを見た、十一號の土地周旋人の細君は訊ねた。

「ええ、だつてこの十五日から、十月の十五日までの間、何時引越しても一シーズンの家賃同じなんだもの、早く行つた方が得なものね。こつちは、一日幾らつて日割で取られるからね。」

「そりあさうだわね。そいでシーズン幾らなの。」

「二間で、五十圓よ。」

「そいぢや此處より餘つほど安いね。また去年みたいに洪水でも出りあ途中で歸つて來なきあならないけど。」

「去年みたいなこと滅多に無いんだつてさ。」

「さうでもないよ、三年前のときはこつちの埠頭區まですつかり水浸しぢやないかい。」

「あれあ特別さ、そんなこと心配してりあ切りがないからね。それに家のがこんなに軀が悪いんで、それにあやつぱり、ザトンの方が好いからね。」

さうして、この一家は、裏庭に引込んだ荷馬車に、荷物と病人の亭主を乗せて引越して行つた。レストランの前では、露人の花賣が、もう白い花のついた木の枝を籠に溢れるやうにいばい入れて、舗道の端に蹲んで道行くものに呼びかけてゐた。

かうしてアパートの一室一室が齒の抜けるやうに空いてゆくと、同じやうに階下のレストランの濡れ方も、一日一日ひどくなつて行つた。晩もまだ十二時前といふのに表を閉めることが多かつた。冬の頃まで入つてゐたバンドを断り、三人ゐた通ひダンサーも來なくなつた。

そして繼で、この店が居抜きのまま、で賣りに出たと、ふ噂がアパートの露人達の間に傳はつた。買手は何でも日本人だといふことだつた、契約もとんとん拍子に決まり、今日その受け渡しをするといふ日だつた。レストランの使用人とアパートのボリーの黄とは裏の空地に集つて、新しい主人の話をしてゐた。満人のコックは、その傍の水道の蛇目の下で、鶴の毛をむしりながら、

「何でもこんど日本人の掌櫃が来ると、みんな給料を下げる  
つて話だぜ、俺はもうこんなところは御免だ。」

と、云つても別に好い口でもあるのかい。」

「うむ、——道街の獨逸人の病院のコックが近い中に國に歸  
るんで、その後へ入る積りだよ、月七十圓呉れるからな。」

そこへ、主人の案内で、新しい買手がやつて来た。彼等は、  
レストランの中から、二階のアパートを見廻り、ついで裏庭の  
中にある附屬の建物や、借家などを見に来たものと見えた。新  
しい日本人の主人は、派手な洋装をした細君を連れてゐた。

「おや、あの日本人、前に二階にゐた日本人のダンサーのと  
こへ通つて来てた奴ぢやないか。」

「さう、さう、何時も黄色い小型自動車に乗つて来たんだ  
よ。」

物置小屋の方へ入つて行く人々を見送りながら、彼等は小階  
で駐いた。二階のペランダから、オーリヤや土地厨旋人の細君  
が、まぶしい初夏の日を手で避けながら眺めてゐた。

轉て、彼等はがやがや言ひながらレストランの裏口の方へ歸  
つて来た。新しい主人は流暢なロシア語を話してゐた。

「僕は自分の仕事があるからね、この方は家内の小遣ひとり  
にやらせようと思ふんだ。」

彼はそんなことを言ひながら、主人の方を振り返つた。

新しい主人が一通り引繼ぎを済ませて、例の黄色いダットサ  
ンに細君を乗せて歸つて了ふと、轉て、主人と細君は事務所の  
中の後片附を始めた。

「給料の清算書を持つて来な。」

彼は番頭の支配人に言つた。そして、それに依つて使用人を  
呼び込んで給料の残額を渡した。その後で彼は室を出てゆく使  
用人達一人一人に授手をした。肥つた細君は小供の玩具や編物  
の束などを新聞紙に包んでゐた。

そして、

「リヤリヤ、さあ行くんだよ。」

と、ホールの入口から主人は聲をかけた。

電気音響機の喧しい音楽に伴れて、五歳になるリヤリヤは、  
何時ものやうに、片手のもげた西洋人形をぶら下げながら足を  
上げてくるくる踊り廻つてゐた。坊主刈に頭を刈つた若い保婦  
が氣がついて注意するのにも聞えないかのように

## 秋の頃

青木 實

晝近く大石橋を出る、沿線の小さな驛々にも、ガタリコトリと、音を立てて停る普通列車に乗務して、日の暮れ方大連に着いた。西の空に、鱗雲が一ぼいにひろがってゐた日が沈んでしまふと、空気が急に冷る。住宅街の屋根からけわりを吐いてゐる燗突、それが何か身に沁みる。秋めいたことを感じさせる日であつた。

常吉は、ふと自分も、もう直き結婚すると思つた。それが夕闇の中に、とほく燈つた街燈の灯のやうに、ぼつと明るいものに感じられる。

「お先きに失敬」

洗面して、タバコを吸つけると、さう挨拶して、機關庫の語所を出た。直ぐ後から菊川が袍をかゝへて出てきた。

「おい、杉山お茶を飲んでいかう」

「うん」

驛の前に出ると、連鎖街のネオンの燈が、生きもののやうに、

瑞々しく見えた。

「アア、さびしいな」

「さびしいな、一體なんだい」

常吉は、菊川の焦けつくやうな感情が、平穩な彼の心を掻きたてる、けれど一方反撥的に氣持が靜まつて行く、さういつた感じで、笑ひ乍ら反問した。

「だつてさ、勤務から疲れて歸つても、誰も待つてゐるわけぢやなし、四角四面の部屋の中に、壁をにらんでゐたところから始まらないぢやないか」

それは今に初まつたことではない。常吉は、口の中でさう言つてみたが返事の代りには、たゞ笑つてしまふばかりであつた。そして彼は、自分の少しばかりの喜び、その對象である、先夜鏡池の畔りで逢つた女の人、彼の妻となるかも知れない人の闇の中に浮いた白い顔をふと思ひ浮べるのであつた。

喫茶店の中はガランとしてゐた。恰度晝と夜の入れ換りどきで、給仕の少女たちも交臂に食罪してゐるのであらう二人の少女がテーブルの上にならげた夕判をひらいて、何か喋つてゐた。

菊川は、クツシヨンの上に、どかりと腰を下ろすと、疲れきつたやうな欠伸をした。常吉は、おつとその顔を見つめた。眼尻りに涙がにじみ、菊川はその顔を上に向けた。そして

「コーヒー」



うなした。

「うん君は？」

「同じでいい」

常吉は、今日邊り、家にかへつたら、また仲介に立つた林のところから、何か言つてきてゐるのではないかと思つた。それが楽しいやうでもあり、なんだか觸れたくないことのやうにも感じられた。

「なんだい、黙り込んで」

「うん、……僕も今度結婚するかもしれない」

「さうか、それで解つた。どうも近頃なんとなく浮き／＼と明るい顔をしてゐるもんね。をかしいと思つてゐた。それでいつ？」

「いつツて、まだそこまで行つてないけど」

「いいな、いつまで解つても一人なのは僕だけか」

「だつて、君はまだ僕よりザツと若いぢやないか」

常吉は、つひ今度の縁談を話してしまつたことを、直ぐ後悔してゐた。いつのころからか知れない、彼は、會社での昇給も昇格問題も、それらが彼に周つてくると噂されても、少しも信頼しない氣持になつていつた。結婚問題にしろ、それが實現するまでは、常に一方でそれを否定する精神があつた。そしてまた、昇給や昇格、その他世の中のほんの一寸した喜びにしろ、それを受けても、受けたときには、身にすぎたもののやう

に思ひながら、一方ではそれらが少しも彼の物質や精神的な意味での生活に豊かさを與へないので、自然それらに對する感受性が鈍つてしまつてもゐた。

彼は、結婚のことを話してしまつたので、なにか忘れものをしたやうな、物足りない氣持で、菊川に別れた。

菊川は、常吉の結婚で、妙に生き生きとしてしまひ、成功を祈るよなどと言つて、彼の肩を叩いたりし歸つていつた。

常吉が家にかへると、飯台の上に布巾が載せてあつた。お爺さんもお婆さんも彼の歸りを待つて、食事をしないでゐるのであつた。お爺さんなり、お婆さんなりしてみれば、一家の働き手である常吉が、勤務から歸つてくるのが解つてゐるのに、先きに御飯を喰べてしまふといふことはどうしても出来ない。けれど常吉にしてみれば、彼の歸つてくるのを、飯も喰はずに、ヂツと待つてゐられたのでは自分を大切にしてくれる待遇としてよりは、反つて自分を身動きの出来ないところに次第に追ひ込んでしまふきづなのやうに思はれて、何か重い負擔に感じられた。

「さう、今日林のお婆あさんが来たのよ」

お婆さんは、彼の和服をとり出し乍ら言つた。

夕刊を膝の上にひろげたまゝ、掛けてゐた眼鏡を曇みながら、お爺さんが言つた。

「バカにしてやがる、お前の出た學校の卒業證書をみせろと



いふんだ」

常吉は、縁談についての、その折々の交渉をきかされるとき、ある樂しさを味つた。その側ら、さういふ話をきくとき、ムンと押し黙り、顔にも冷やかなものが流れてゐることを自分で意識した。虚勢だといふことが自分でもわかつた。わざとさうするわけではないが、一種の條件反射みたいなものに近かつた。けれど今お爺さんが、バカにしてやがると言つたが、そのお爺さんの口調は、言葉の意味ほどは少しも強くなかつた。寧ろ、バカにしてやがるは、輕快さうな語氣をがしてゐた、だが常吉には、それがずしりと重く墮へた。彼は正則な課程をふんだ學校らしい學校を出てゐなかつた。

滿洲では一體に、相當貧しい生活をしてゐると見える家庭でも、子供を中等學校に出してゐる。しかし彼は、小學校を出ると、まさか、新聞の集金人をやつてゐる父親に、上の學校へ行かしてくれとも言へず、大阪にゐる姉のおキヨを頼つて行き、その頃金物問屋の女中をしてゐたおキヨの世話で、ある小さな同業者新聞の給仕をしながら、夜學の中等學校へ通つたのであつた。

だから、自分でも貧しいと思つてゐる學歴、その學歴さへが、この度の縁談では、娘の家にとっては大切のものであり、またその貧しい學歴さへが、向ふの家から疑はれ、卒業證書までを見せろといふのであつてみては、彼には、たまらない哀しいも

のに感じられてくるのであつた。

「それでどうしたの？」

「うん、おばさんにもたしてやつた」

常吉は、怒りにちかひものが心のうちに湧いてくるのを感じた。

「斷はつてやればよかつたのに」

彼の語調は、峻しかつた。

後の部屋の中の空氣が、寒々と感じられたやうに……すると老人二人と若い男一人の家の中の、荒涼とした色彩のない、冷めたさが一層常吉の心を焦らだたしい方面に反撥してくるのであつた。

「だつてお前、折角、さう言つて來てくれるのに、斷はれもしないし、それだけ重んじてゐるのは、向ふも乗り氣なんだから」

御膳に向ひながら、お爺さんはとりなすやうに、低い聲で喋つた。

そのころもう、常吉の氣持は平靜にかへつてゐた。今こそ彼の夜學の卒業證書を中心にあそこの女の人の家では、どんな會話が交されてゐることであらうか、などといふことを思つたりした。

「あゝ、寫眞も欲しいといふんでね、二、三枚もたしてやつたよ」

常吉は、自分の寫眞もがいま見られてゐるのかと思つたが少しも動じなかつた。彼の寫眞を眺め、人々はどう印象するのだらうか、といった傍觀的な考へにおちこんでいつた。そして引つづき思ふことは、人間三十を過ぎると、こんなにも縁談に就いても、傍觀的な態度に入つてゆけるものなのかといふことであつた。

そんな風に思ひながらも、常吉の神經は、縁談のことから一歩も離れてはゐないのだ。食事が済むと、ソツと三疊の部屋へゆき本棚の上のアルバムを手にとつた。

バラバラとめくると、臺紙に白く剝かした跡が残つて三枚の寫眞が剝ぎとられてあつた、——それにしても、三枚とは、實に澤山持たしてやつたものだ、思ふのであつた。

それはお爺さん、お婆さんがなんとかしてこの縁談を纏めたかと思つてゐる誠意の表現が、一枚もたしてやれば済むのに、三枚も持たしてやつたのであらう。

スヒヤを一本口に銜へて、机の上に、マツチを探すと、めつたにぐるぐるとのまない彼宛の手紙がなにか大切な秘密を秘めたやうに、ひつそりと机の上に彼の發見するのを待つてゐた。

手紙は、東京にゐるおキヨからであつた。

おキヨは、金物問屋の女中から、主人の世話でその番頭と結婚をしたが、三年ほどで死に別れると、生れた女の子を、亡夫の両親に預けると、自分はすゝんで働きに出た。

堂島の銀行、會社などの多い大雑築物の間にある、一流の料理店に勤め始め、十年ほどのうちには、女中頭になつた。その頃、その店によく来る、某財閥の未亡人におキヨはすつかり氣に入られ、お蔭でその店でも羽振りのきく身分になつたが、その後未亡人の世話である舞踊の家元のところに後妻に入つたのであつた。

おキヨからの手紙は、未亡人の亡夫が遺愛してゐた別荘が、房州の勝浦にあり、今では誰も住まつてはゐないが、故人が大へん好んでゐたところなので、手離すことも出来ないし、また荒廢させてしまひたくない、ついでには、食費はこちらで心配するから、もし希望があつたら、両親をその別荘番に寄こさぬか、お前も一人になると不自由だらうが、近く結婚するのとことだし両親をこちらによこした方が、萬事都合なのではないか、と書いてあつた。

常吉は、お爺さんに讀んできかせた。讀んでゐるうちに自分の讀み方が、明るくなりすぎはせぬか、何か喜色を浮べてしまひはせぬかそれが氣になり出した。細君を迎へるとはいへ、六疊、三疊の、二間のうちに、両親、自分たちと、住むのは、何かたまらない氣がしてゐたのである。そこへこのおキヨからの救ひのやうな手紙が来たのであるからもし常吉が、両親を涙り出すことに、ほんの少しばかり喜色を浮べたとしたところで、不孝にはならなかつたであらう。

お爺さんは、黙つてきいてみた。読み終つても黙つてみた。

「どうする……」

常吉が、手紙を封筒に入れながらきいた。

「行くさ、まだまだ遊んでゐるには、年が若いんだし、恰度いい、行くとよ」

お爺さんは氣輕に言つた。

常吉は、先刻驛の橋内で思つた、とほい小さな灯りが、急にくつと前面に明るく燈つたやうに感じられた。

お爺さんが、東京のおキヨに手紙を出し、常吉の結婚からんで、お爺さんたち二人の身の振り方について相談したことは、常吉は氣づかないのであつた。

階段を、氣せはしく上つてくる草履の音がした。草履は常吉の家の前とまり、ドアを叩いた。

常吉は、林の細君だなど直感的に思つた。お婆さんが出ていつたが、やはりさうであつた。

「おそくなりまして……」

細君は、ニコニコしてゐた。常吉の家を正午過ぎ訪ねてから、今まで世話をする娘の家である光井家に話しこんでしまつたのだ、と言つた。弾んだ元氣のいい話しぶり、それがひそやかな常吉の家を明るくした。

「……それにしても、結婚問題となると仲介をする人は、自分の小さい子供たちがあつた、家の中の用事も多いのに、なぜこん

なに時間を割いてくれ、にこやかに元氣であり、熱心であるのだからか、常吉はそんなことを考へこんでゐた。

「まあまあ、お世話さまな、それではまだ御飯も……」

「いいえ、光井さんで今いたゞいてきたところなんですすよそれ、早速ですが、常吉さん、明後日の晩、空いてますか」

「えッ、え、勤務の方はありません」

「さう、それはよかつた、明後日ね、お父さん、お母さんと一緒に、光井さんところに行つてもらはうと思ふの、それはね、結婚といふことは、縁のことですから、必ずまとまるとは限りませんが、かういふ話があつたといふのは、この杉山家と、光井家に、なんか縁のあることなんですから、これからも交際してもらへたら好いと、お婆さんは考へるの」

「さう、それはせひさうお願ひしたいことで……」

お爺さんは常吉が黙つてゐるので、言つた。

「それでは、明後日の晩打揃つてお伺ひませう、……なにか手土産を二丁用意しないと」

お婆さんに言つた。

「まあ、それは、今日でなくても、氣のはやい」

林の細君は、笑ひ刷れた。

それから、お爺さんは、今日大阪からきたおキヨの手紙のことを、一通り話し出した。

「まあ、そんなわけで、あたし達は、内地に當分引揚げること

になりましたが、まだ發つ日かきまつたわけではないがなるべくなら、發つまでに、この眼で二人が一緒になるところを見こゆきたいと思ふのです、またいづれは、あたし達も、常吉の嫁さんにも世話にならなければならぬので、常吉の嫁さんとして落着いた、ところを見てゆきたいとかう思ふんですが、どうも餘り勝手なお願ひですが、なるべく早く早く式を擧げることの出来るやうにしたいと思ひまして……」

「それは、一つまあ先方に話させよう。さうですが、千葉の方に、いいですね、別荘だなんて、でも常さんにも好都合ぢやないの、當分奥さんと二人きりで暮せるわけだし。」

「お婆さんは、お茶に菓子を出した。お菓子は晝間出したのと同じもので、生菓子であつた。お婆さんは甘いものを食べると、汗がタタ／＼流れてくる。晝間も菓子を食べては汗を流し、大笑ひしたのであつた。」

「なんですかね、戸籍が少しうるさいらしいんですよ。あの娘の伯母さんの家といふのが子供がなく、そこへあの娘を名前だけ娘としてやつてゐるので、その伯母さんに、一應は話さないよ、とけふ言つてました。なに、本當の親が許さへずれば、伯母さんほど、あの娘の兄さんも言つてましたし、伯母さんといふのは、内地の田舎で自分の食べるだけのものは、持つてゐるんださうですから。」

常吉は、初めてきいたそれらのことが案外この話を進めてゆ

く上に、障礙になつてくるのではなからうかといふ豫感がふと湧いた。

「あの娘は、あたしは、子供のときから、知つてゐるんですが、氣のやさしい子でね。けふも、あたしに、こつそり言ふんです、お婆さん、あたしは、お父さん、お母さんや、兄妹一緒にかうしてゐるのが、一番倅のやうに思ふのですが、女はやッばりお嫁にゆかなければならぬんでせうねナンテいふですからね。」

常吉は、タバコを吹かしてゐて、そのとき思はず灰を膝の上

に落した。

「ほんとにねえ。」

身に沁みるやうに、お婆さんは相槌を打つた。

「まあ勝手なお願ひで、せかせてすみませんが、安心して大逆を働けることが出来ませうやうに、一つお骨折りをどうぞ。」

お爺さんの神態には、若い娘の嘆きなどひびかぬらしく自分本位の希望をス／＼と繰返した。

海の上は霧がふかいか、港の空で鳴る汽笛が窓にひびいた。空に太々とひびいて、それが消えてゆくのが眼にみえるやうな音色であつた。

それから三日日のことだつた。常吉は、組合に修繕に頼んであつた眼瞼時計をとりにつた序に、理髪室で散髪をした。散髪が済んでしまつてから彼は、今夜向ふの家へ行くことを思

つた。するときれいな頭をしてゆくことに何かしれぬこたはりを感じた。自分の妻になるかもしれぬ女の家の初めて訪問するのだから、頭をきれいにしてくぐらる當り前じやないか、と思ひながら、ハ、ア散髪をしてきてゐるな、さう見られるのが嫌であつた、それをもう一つ割つてみれば、散髪をしてゆくのがいやだといふ虚榮心にも通じさうであつた。自分を少しでもきれいに見せかけ向ふの人たちに良くみせようとすることは、ある物欲しさうな心情に見られるであらうこと、實は、わざ／＼散髪をしてまで、貴女を貰ひたいために努力して行くと思はれるのは、面白くない。

けれどこんなことを考へるのは、結局自分の年がゆきすぎたためならだらう、常吉は、最後には、さう考へるよりは仕方がなかつた。頭に手を當てた。油がちつとりと手の平に着き、ギ／＼と光つた。

屋上に昇ると、秋の陽射しが眼に沁みた、風がなく空は晴れて、ものゝ音が澄んできこえた。

箱の鉢に、紅白紫のコスモスが、みんな一方になひくやうにして花を開いてゐた。風もないのに揺れてゐる。

忠誠塔の背後の山の、ヒダになつたところに、一刷毛刷いだやうにして紅葉してゐた。青い草で覆はれてゐた山ふところも、こんがりす枯れた色を見せてゐた。屋上のぶらんこをギ／＼鳴らして乗つてゐる子供たち、それを圍んで、カメラを首

から垂れた父親、満ち足りた顔で、眺めてゐる細君、凡らく秋の氣配が、常吉の心を素直にさせるのであらう、生命の悦びの貴重な瞬間でも過すやうに、彼はほんやりと、だが豊かな氣持で、ベンチに掛けてゐた。

いつか、機關區の詰所で、そこに居合せた人たちの間から、杉山君もいゝ加減に結婚してはといふ話が、先輩格の四十六になる佐竹から出た。

そのとき佐竹は

「僕なんぞ見合の前の晩、遊びに行つて、朝歸りで仲人の家に押かけたんだからなア、何うしてかつてその位の方がいいんだ。こつちに少し元氣が餘つたりしてゐると、つまらんでも、無暗に欲しくなつてしまつてね、少し冷静に相手を見るためにはその程度の下準備が要るよ。アガつてしまつて、詰らんもんでも引當てたら一生苦勞が絶えんからね。その點杉山君など、年が年だし、相當經驗があるだらうし……」

さう言つて笑つた。

常吉には、返事のしようもなかつた。彼はまだ遊んだ經驗はなかつた。機會のないわけでもなかつたが、さういふ機會に恵まれるやうになつたときには、もう一步も、二歩もさうしたところには足を踏み入れることに億劫なものがつきまとい始めてゐた。

「そいぢや、佐竹さんは、勿論命的を射當てたんですね」

外のものが言つた。

「いや、仲々どうして、ところが大した金的でね」  
それで到頭笑ひ話に終つてしまつた。

常吉は、ふとそんなことを想ひ出したりした。

X X X

家にかへると、大阪の姉から電報が来てみた。

例の別荘の方、今まで管理を頼んでおいた人が、東京に出ることになつたので、都合よくばなるべく父母に来て欲しいといふ内容であつた。

「かういつて來てるんだから、こつちを何とか、早く決めてもらつて行かないと」

お爺さんは、活氣づいていつた。

「……早く決まらないにしても、行つたらいいよ」

「そんな譯にや、行かないよ。婆さんにしろ、自分にしろ出来ることなら、落着いたところを一目みて、安心して寝たいんだよ。」

お爺さんは懇願するやうな眼差しをした。

「二人だつてやつてゆけるんだし結婚はさう急がなくなつてさう言つてしまつてからどうして自分は、こんなに結婚に對しては、人から引つばられるやうにして避々それに近づくやうな消極的になるのだらうとをかくし思ふのであつた。」

林の綱君が來たのは、日暮れに近かつた。

「おそくなりまして」

「どうしまして、度々御苦勞さまです、さアどうぞ」

お婆さんが迎へた。

お爺さんは、電報を膝において、自分らが案外早く發たなければならなくなつたことを話すのだった。

「いま一寸光井さんと、覗いてきたんですよ。それでまア、こちらで大へん急がれてゐることを話したんですが、まだ伯母さんから手紙が來ないさうで、どうしたもんだらうと言つてたところですね。」

お爺さんは、出来るなら、假言でもいゝ、二人揃つたところを見て、安心して寝たいとクド／＼と繰返した。

常吉は、お爺さんが、急げは、急ぐほど、そんなに急がなくても、といふ氣持になつていつた。それは自分が急いでゐるやうに向ふの家には思はれるのが嫌でもあつたからだ。

「常さん、どうしたもんでせう」

綱君は訊いた。

「でも、こつちでいくら急いでも、さう簡単にゆかない向ふの事情もあるんだし、第一僕が、そんなに急いでるやうに思はれたらイヤだな」

常吉は、言つてしまつてから笑つた。

「そんなこと向ふで思やしないよ。あたし達が若ければ、こんな無理なことお願ひするんぢや、ないですが、離れてしまふ

ことだし、もしこのまゝ逢へずに終つてしまふやうなことがないとも限らんですから、それで——

お爺さんは躍起となつた。

一重ね、常吉の着物が出された。

一反つて平常のまゝの方がいゝんですよ——

細君の言葉にも拘らず、お爺さんも、お婆さんも、支度を改めた。

常吉は、彼の知らぬ間に買はれた新しい下駄を履き三人の後に従つて家を出た。

光井の家の、大きな卓子を据へた都屋の中は、明るすぎるやうな燈が燈つてゐた。常吉は、一通りの挨拶が済んでしまふと、とりとめない老人たちや、林の細君、妻になるかもしれない人の兄たちの會話を、ロボットのやうにきちんとしてゐて、聞いてゐた。耳に入れたり、入れなかつたり。

いつか池の夜、池の畔りで逢つた女の人がお茶を運んだ。お茶を運ぶと直ぐ下つた。

その夜は、これといつたまとまつた話もなく杉山、荒井兩家の引合せは終つた。

林の細君が、二、三回兩家を往來した。けれどまだ伯母なる人から返書の來ない中にお爺さん、お婆さんの出發の日が來てしまつた。

見送りには、林夫婦、光井の老夫婦、近所の人たちが出た。

お婆さん、お爺さんの姿は甲板の上に置くと、一層枯れ木のやうに見えた。

前後しておキヨから、常吉のもとに手紙がきたその一節には、「お父うさんも、最後は、故郷の土の上で靜かに眠りたいとのこと——」

と在つた。常吉は、いまは自分の手元にはないお爺んにせめて別れるときに一言心ゆくばかりの言葉をかけたかつたことを後悔した。しかし一體どんな言葉を。するとそれは言葉にはなかつた。結婚した自分の姿を見せること、やはりこれ以外にはなかつた。



## 滿洲の胎動

工 清 定

天

芽ぶかうにも芽ぶくひまのない楡や楊柳の小丘あたりに、もの凄く蒙古風が、孕んだ黃龍のやうに暴れくるめて、また心細い夕暮が、灰色の城壁から發散しはじめた。

去年の秋の凶作が必然的に齎らした飢饉、かて、加へて寸刻の猶豫もない苛酷な遼館の微發——逃れられない重壓に、長い冬をたへ忍んで、ひたすら待ち侘びた春だといふのに、それはこゝ十幾日間、毎日風ごと知らぬ蒙古風を伴つて來た一面に、無氣味な底冷えを一向はなさうとしないのだ。精も根も盡き果て、すつかり自暴自棄に陥つた北京城阜城門外の百姓たちは、たとひ押入られたとしても、もはや掠奪される何物も残さない昨今でありながら、盜賊に對する長年の習慣から、いち早く大戸の鍵を入念に却しにかゝつた。

「——戦樓の士卒は、さうしたかれらを、いとほしいものと思ひながら、ぢ、いつと眺めて立ちつくしてゐた。

すると、その風を颯々と刻む馬蹄の響きた。(遼東總兵平西伯の凱旋だ!) わく／＼する胸の中で、啞然にさう感じた士卒は、先刻沈んだばかりの夕日が瞬く間に東へ廻つてまた上つて來たのかと思はれる程、血のやうに赤い十七夜の月を背景に、堂々と進んで來るその騎馬部隊を、風塵と濃い霧の中に、たのもしげにすかし見た。(さすがは平西伯! 吳三種殿だ! 山海關を守り抜いての凱旋だとも思へぬ、何といふつゝまじさだ! そしてまた何といふ、隊伍のいかめしさだ! お、そして……) その時、右肩を小突かれてふりむいた士卒の眼の前に、四六時中、吳三種のあて、どない歸京を迎へるべく、愛妾陳圓々から遣はされてゐた老僕宋不樂の慌てふためいた姿があつた。

「お、到頭、陳夫人の念願が叶つたぢやないか。見ろ、平西伯の凱、凱旋だ、凱旋だ!」

白蘭夫人の嬌名城内にかくれない陣圓々を、ふと、ねたましいものに思つた士卒の、狂氣じみた叫び聲の腰を、宋不樂がいきなり叩き折つて怒鳴りかへした。

「ば、馬鹿野郎! と、鳥眼にでもなつたのか、お前は、あ、あれがどうして殿の軍隊なもんか……」

言ひきるのももどかさうに宋不樂は戦樓から東のやうに轉がり落ちていつた。

折しも楡の小丘の邊から天に沖する烽火だ。聞き馴れない圓々だ。城外の家々から蜂のやうに飛出して、城門に雪崩れ込む百



姓たちの聲だ！……士卒はその場に崩折れてしまった。

烽火を聞いてものゝ五分と走り續けない中に、宗丕樂は城外の紅夷砲が一齊に火蓋を切つたのに安心した。しかしそれも東の間で、すぐそら、耳ぢやないかと思はず立ち止まらざるを得ない。城壁の崩れる音を聞いた。しかも唐通に率ゐられて城門に向ふ警衛兵の、あたり憚らぬ不思議な放言と哄笑にすれ違つた。

「懸々來たぞ。閩將閣下の明るい世が！」

「このとんちき奴。閣下なもんか奉天……え、と何だつたけな……」

「何だ、お前だつて知らないぢやないか。奉天倡義大元帥降

下萬歲だ！」

「さうだ萬歲だ！」

「萬歲だ！」

「いや、新興大順國萬歲だ！はつ、はつ、は……」

（おお閩賊！奉天倡義！大順國！……あの李白成奴の來襲だ！紅夷砲を有する城外諸營の内應だ！唐通賊の謀叛だ！）宗丕樂は冷えきつた街路に、いきなり靴をぬぎ捨て、絶望的に走り續けた。

「奥さま、さ、は、早く……」

白關夫人の名にそわかぬ匂はんばかり艶やかな頬、つづらな黒い瞳に湧き出た陳圖々の驚愕を、暫くも正視するに忍びなかつた宗丕樂は、それでもさすがにその陳圖々を、皇居の北苑萬

歳山に避難させる方策を儘しく畫いた。——しかし老僕宗丕樂の健氣な決心も、あまりみぢめだつた。火車紅夷砲を有する城外諸營を廓かし、唐通に屬する城内警衛隊の内應に歡迎された李白成の軍は、山西をまつしぐらに北上して、居庸關から北京平地へ殺到したのと何ら異らぬ速度で、いやそれ以上に素早く、その時すでに城内へ雪崩れ込んでゐた。夜と共に吹きつゝの風のまに／＼聞える叫喚。それを覆ひかぶせる賊聲。夜空に長く光の尾をひく紅夷砲の彈道！炸裂！崩壊！……城内には、たうてい收拾出來ぬ大混亂が降つて湧いた。

閩賊來寇、警衛隊謀叛の驚くべき奏上を聞いた崇禎帝は、掃措度を失つてしまつた。

鉅萬の軍費を抛つてさへ清軍の脅威を防衛しきれないのみか、警の物に應ずる如く陝西を中心として國內動亂の朝に、心を勞し續けて來た崇禎帝は、さうした悲痛などよめきに耳を覆はずにはゐられなかつた。

（凶作と飢饉に喘ぎながらも、過重な遠征の徴收に、黙々と服して來た赤子ではないか。その赤子を稿らうことも遂に出來なかつた！）崇禎帝は眞向から壊滅にぶつゝかつた。

憑かれたやうに劍を見かへつた崇禎帝の眼は血走つてゐた。

「姫！可愛い奴！どんな因縁で、朕が姫に生れて來たのか！……死、死んでくれ！朕の手で一思ひに、一そ死んで……」

數へるほどしか伺候してゐない侍臣や侍女たちは、次の瞬間、十五の春を迎へた姫の死體を見下して、聲も立てずに泣いてゐる崇禎帝の姿を、恐る恐る仰いだ。——喊聲は高潮よりも高く激しく、周圍に追つて來た。

「誰か、平西伯にこの急を知らせるのだ！一刻を急ぐぞ！」  
うは言のやうに言ひ捨てると共に、崇禎帝は、明らかに動揺しはじめたその場をふり向きもせず、廊下へふらふらと出てしまつた。

李自成はあまりにも呆氣ない北京占領に、むしろ拍子抜けを感じた。

——その昔、明軍に追はれて安往の地を見出されなかつた頃、ゆくりなくも聞いた寶卜者の「北上南面之相」の言葉。その言葉にヒントを得てから、一切の掠奪を控へ、酒色を遠ざけ常に部下と困苦を分かち、ひたすら騎射を練り、軍規の肅正に努めて來た自分の過去十幾年に亘る前軍周到な工作が、今にしてみればむしろ馬鹿らしく思はれる位、容易な北京占領である。

（夢を見てゐるのではなからうか。）と思ひかへしてみても、自分の現に立つてゐる所が、紫禁城を南に望む萬歲山の壽皇亭であり、また立ちこめた朝議の中に、朽木同然に縊死してゐるのが正しく崇禎帝に相違ないと、俘虜が言つたではないか。（これが大明國の崇禎帝なのか。立つてゐる俺はたしかに大明

國の奉天倡義大元帥だ。そして崇禎十七年を以て懸々永昌と改元するんだ。——見ろ、久しぶりに風も凩いだ朝が來るではないか。）李自成の笑聲が、そつくりそのまゝ溶け込みさうな朝焼の空だ。

「これは何でせうか、大元帥……」

一人の部下が崇禎帝の縊死した槐樹の枝にくくりつけてあつた封書をさし出した。

「うむ、世間でいふ遺書といふ奴だらう。よこせ！」

無造作に封を剪つた李自成は、むづかしい文字にはたと面喰らひながら、それでも部下の手前、威嚴をつくるひながら讀み始めた。

「ふうむ……朕が屍ハ賊ノ分斷スルニ任ヌ、百姓一人ヲモ傷ツクルコト勿レ……か、今になつてひどく、聖人ぶつたもんだな。は、は、は！」

だが、李自成の顔色は見る見る緊張した。

「遼東總兵ノ向後ニ期待スルヤ切ナリ……」

（遼東總兵——吳三桂——）山海關の守將、明朝の大柱石たる吳三桂の名は、李自成も夙に知るところだつた。それが毛を吹いて自ら求めた傷のやうに、途端にもくつと李自成の心を刺したのである。

やり場のない眼をついと外らした李自成は、壽皇帝の外檻にもたれかゝつたまゝ、失神してゐる青磁色の表装の女を見つけ

た。

「お、おい、何をぼんやりしてゐるのか！早くその女を手當するんだ！」

せき込んだ口調で怒鳴られた部下は、ちよつと戸迷ひした。

——今まで大元師の前で、女についてほんの噂でもしようものなら、即座に威丈高に叱り飛ばされ、悪くすると左遷の憂目さへ見なければならなかつた部下たちは、崇禎帝の死體を發見する前から、その女に氣づいてゐた。しかしこの重大な繪舞臺の大詰に、大元師の機嫌を損ねたら、それこそ一生浮ぶ瀬がないと、言ひ合せてやうに、素知らぬ風を装つてゐた矢先である。

「何時までぐづんとしてゐるんだ！こののろま野郎！」

奉天僧義大元師の肩書におよそふさはしくないぞんざいな言葉が、李自成の口から唾液と共に飛び出した。それが雑言土語、面も向けられないほど連發する前觸れであることをよく心得た部下たちは、急いでその蠟人形のやうな女の傍へ近づいた。

（崇禎帝の妃にちがひない。大明國妃から大順國の皇后へ！  
わるくはなからう、果報な女よ。）李自成は三月十七日、昨日が抑制を重ねて来た熱帯生活の、最後の目であつたことに氣がついた。そして、その朝顔のやうな衣裳と、白粉花さながらの粉塗をちらつと見て、十幾年前のときめきを忽ち呼びかへしてしまつた。

皇居尊定、登極大禮、改元宣宗——さうした暗れがましい幾多の行事に、次々と待たれてゐる自分よりも、皇后册立の盛儀の中にあるであらう自分の姿に、恍惚とせざるを得ない李自成だ。

萬歲山の麓に繋いである馬が、朝空に嘶いた。大きく弧を描いて、その空にゆたかなそりをうつ紫禁城の壁も、碧瑠璃の水をたへた北海も、久しぶりに和らいだ日光の底で、昨夜の大混亂もさりげなく、おし靜まつてゐる。

何度もためらつてゐた李自成は思ひ切つて土間でねんころに介拘されてゐる女のところへ、出来るだけ自然に歩み寄つた。まるで初戀の青年のやうな初々しさを、ずるい苦笑によつて揉み消さうとしてみたが、だめだつた。

亂れた青磁雨糊の密袖の袂、肉附のよい白絹靴下の足——くら／＼と酔つばらひさうになつた李自成は同時に、いままですの女に注がれてゐた部下たちの、みだらなまなざしをも敏感にさとつた。

そして半ば、自分の初生な心を吐りつけるやうに、不必要なほど大きい聲で怒鳴つた。

「退け、退け！どれ、俺にまかせろ！」

李自成は言葉遣に對する自戒など守つてはゐられなかつた。

白絹靴下にも劣らぬ肌、豊かな髪、牡丹の花髻、肩から腕、腰から脚へ、不思議なまでに美しく妖しく波打つ曲線——李自

成の聲に、一寸、氣づいたらしい女が、黒水晶のやうな眸をわづかに見開いた。多くぼがちらつと右頬に浮かんだ。

「平！平、西、伯、さ、ま……」

たわ言を言ったのだ。びくんと動く兩の唇が、その語尾を呑んでしまった。——むきになつて覗き込んだ李白成は、平西伯が遼東總兵吳三桂であることを知らなかつた。まして、この女が、その吳三桂の愛妾陳圓々であらうなどは夢にも思はなかつた。

### 地

蜿蜒と北へ深山を囁み幽谷を封じた萬里長城——その長城を左翼に率ゐる天下關山海關が、夕焼に焦げながら聳えてゐる。

よりかゝつてゐる樹に、杏の蕾がちらほらふくらみかけたのを見るともなしに見上げた吳三桂は（おお、杏が咲く！陳圓々の好きな花が！）またしても、遠征の勞苦をしみじみ感ぜずにはゐられなかつた。

「范文程内應を不吉な先例として、山東の孔有徳、耿仲明は既に謀叛し、濟南の徳王は捕へられ、兗州の愼王は殺され、つひに薊遼總督たる洪承疇までが就縛の憂目を見た現在、秋風落日の老明國をとまかくも支へてゐるものは、自分一人の外にないといふ自覺と、一方ならぬ崇禎帝の信任に對する感激とが、吳三桂の心を辛うじてひきたてて來たのである。

まこと、清軍は前後二度に亘つて來襲し、國內の三府十八州六十七縣を陥れたが、それは徒に流寇の所爲に異らなかつた。——何となれば、清軍の後方連絡最捷徑の要衝を、毅然と遮るこの天險山海關が文字通り難攻不落であるために、その占領地を確有するまでには至らぬからである。

瞭によると貞太極が病死したあとの清軍では、多爾袞といふ若い親王が、甥の幼主を擁してゐるらしいのであるが、その隙に積極的に乗ずることは、國內疲弊の極に達した今日出來ないとしても、祖國興亡の鍵たるこの山海關だけは、敵手に渡すまいと思ひつづけて來た吳三桂である。

——その吳三桂が、北京に残してきた愛妾陳圓々の姓でも、何かのはづみに思ひ出すと、もうさうした自覺も感激も何處かへふつ、飛ばしてしまふのだ。

陳と同音の字を姓名に持つてゐる部將に、改姓改名を強制したのも、一途に忠勤をぬきんでたい吳三桂の、悲しい眞意に外ならなかつた。

（おお、杏が咲く！陳圓々の好きな花が！）吳三桂の心は僻廠の地に流寇の身をかこつ刑人同様になつてしまつた。

さうした心境の激變を目敏く悟つた慕僚は、一人去り二人去りして、夕闇せまる杏林には、吳三桂だけがただずんでゐた。

「總、總兵殿！平西伯殿……」  
狂氣じみた喚き聲が、道路の方から呼びかけて來た。——右

前脚を傷めて、玉汗を流した鹿毛の馬上に、壊れたやうにしがみついて来た男が、力なく地上に落ちかかると、慌てて駆けつけた幕僚たちに扶けられた。

（北京から長途の急使だ！）瞬間、（凶事だ！）と思つた吳三桂の背骨を、悪寒がさつと通りすぎた。

「何だ？しつかりしろ！」

吳三桂はつとめて平氣を装ひながら怒鳴つたつもりだつた。

「は、はい、總兵殿、北京が、……あの北京が到頭……」

急使は大聲あげて泣き出した。

「え、つと陥落したといふのか！清、清軍のために？お、天子は如何なされた……！」

吳三桂は猛り立つた。自分の耳を疑つた。遼東總兵としての自覚が、もろもろの氣持をおし静めて、わくわくと頭を擡げて来たのだ。

「いえ、闖賊奴に唐通殿が内應されました……それから城外諸營も悉く……」

急使は泣きじやくりながら、大きい鬨體をくねらした。

「何だと？闖賊に……あの李自成とかいふ……。そいつに唐通が内應したと……して、天子は、天子は……」

背を裂いた吳三桂が、ぢりぢり急使に迫つた。

「は、はい、お姫さまをお殺しなされたから、御狂亂の體に拜しましたか……」

「何？姫君を……？」

名狀し難い感慨が、吳三桂の唇をやたらに痙攣させた。

「途中で馬を傷めて、意外に遅くなりましたが……、間もなく第二の使も……」

急使は答へきらない中に、弱りに弱つていつた。

「さあ、出動準備だ！そして明早朝までに是が非でも出發だ！」

幕僚をふりかへる頃になると、吳三桂はさすがに落着きを取り戻してゐた。

吳三桂は山海關の守備を手薄にすることの危険を、もちろん知らないではなかつた。しかし焦眉の急務は、何といつても首都北京の奪還であらねばならないと思つた。

比較的無聊な守備隊生活をかこつてゐた守備兵は、にはかに色めき渡つた。夜をこめての出動準備がはじまつた。

「總兵殿！第二の急使宋不樂がまゐりました。御老僕の幕僚の一人が扉の外から注進した。

「お、不樂か……早くここへつれて来い！」

（陣圖を伴つて来たのぢやないか？）吳三桂は思はず乗出した。——そこへ扉を押してはいつて来たのは、しかし、意外に饜饉とした宋不樂の姿だけだつた。

「目那さま……」

吳三桂を見て一時に安心した宋不樂は、膝蓋骨が外れたやう

に、土間へ坐り込んだ。

「お、爺、御苦勞だつた……」

ここまで言つて吳三桂は聲をひそめた。

「陳をどうしたのだ！ 陳を……」

「そ、それが旦那さま、一番安心出来る場所だと思つて、あの萬歲山へ……」

宋不樂は兩肩で息をきつて、おろおろ答へた。

「さうか、よく氣がついたな！ 屈強の場所だ！ あの萬歲山は……」

思はずにんまりしかけた吳三桂は、しばらく上げるやうな宋不樂の聲に、無錢にもふり落された。

「と、ところが旦那さま！ 勿體なくも天子様が御自害遊ばされた場所も、やはりその萬歲山との事で、關賊に御死體を渡してしまつたと、逃げまじふ味方が口々に嘆き合つて居るのを聞きました。そ、それから旦那さま……」

氣丈夫な宋不樂は、端座して双腕を拱き、涙の溢れ出るにまかせてゐる吳三桂に、もう一つの噂——「李自成の白蘭夫人掠奪」を、恐る恐るつけくわへなければならなかつた。清軍すらなし遂げえなかつた北京古鎮の難事業を、一夜の中に易々として實現した關賊の果敢な進撃と周到な作戦を、敵ながら一應はめたたへてやりたい氣になつてゐた吳三桂の心は、天子の畏れ多い崩御、陳圓々掠奪の噂を聞くに至つて、忽ち百八十度の轉

回をしてしまつた。

吳三桂の五體の關節といふ關節が、がつかつと音をたててふるへた。（何が故の僻陲守備だつたのだ！ いや永年の苦忠に酬いられたものは何だ！ 圖に乗つた唐通を關賊と連絡させる隙を興へた外に、果して何が残るか。天子の崩御！ 祖國は急速度傾きかけた！ と同時に俺の生活の柱もぐらつき出した。何故、陳圓々を伴つて、ここへ來てゐなかつたのだ！——北京陥落！ 天子の崩御！ 陳圓々掠奪の噂！——この世の中に、これにまさる屈辱はあるであらうか？）

土間に地團太踏む吳三桂の懊惱狂亂のさまは、ひたすらに責任を感じる宋不樂の總身に、管以上の痛さで迫つた。

山海關の上空に最後まできらめいてゐた星も、次第に光を失つて、しのめの氣配が漂ひはじめた。杏林から道路にかけたあたり一面を埋めるやうに整列した山海關守備隊は「出發」の命令を待ちあぐんだ。——すると、いまままで固く閉されてゐた本營の脇門が、さつと開いて、一人の老武者がやにはに馬をあふりながら飛び出した。

蒼白の顔に、悲痛な表情を皺と共に深く刻み込んだ馬上の老武者が、昨夜深更に到着した第一の急使宋不樂であることを知つてゐるものは、二三の幕僚の外にゐなかつた、無言のまま、道路に出ると宋不樂は、萬人の視線をあつめたまつ只中で、激しく鞭をあげて馬首を東にめぐらせた。



（方向がまるつきり、反対だ、單騎、山海關を潜つたぞ、）（氣が狂つたのだ）（いや、寢呆けてゐるんだ！）北京陥落の凶報は傳へ聞いてゐるものの、天子の悲痛な崩御までを知らない部隊の上を、無言のとよめきが、朝風に乗つて流れた。

——蘇儼の一人が機上に現はれて、柝を鳴した。片唾を呑んだ守備兵は、思ひ設けない命令に顔を見合はせた。

「都合によつて出發を延刻する。しかし各自そのまま別命を待て！」

終夜懊惱は腹背に敵を受けた吳三桂に、次のやうな血路を發見させた。

——崇禎二年の秋、北京近くまで押寄せながら、素直に引揚げていつた清軍のあの嚴肅な軍規には、今度の闖賊があへてした憎むべき暴挙にくらべて格段のゆかしさが認められる。さうした軍を統率するにふさはしく、多爾袞もまた寛仁大度な將器であることも、前に送還されて來た部下が語つてゐた。この際、いつそのこと清軍に窮狀を男らしく打ち明けたならば、進んでの救援は思ひもよらぬまでも、あるひは休戦だけを承諾してくれるかも知れない。さうなれば守備隊の殆ど全部を擧げて北京遊襲に出勤させ得る……。——しかしそれは吳三桂にとつて、まったく窮餘の一策に相違なかつた。

吳三桂の心を蝕む懊惱狂亂の責の大半を、ひたすらに感じてゐる宋丕樂は、いく分の償ひにもと、その交渉使を自ら買つて出て、難局に處すべく、夜明をも待たずに、單騎山海關を越えたのである。

かくて、敵將多爾袞にまで打明けることにした天子崩御の事實を、吳三桂は部下だけに秘しておくわけにはゆかなかつた。

二度目の柝が鳴つた。瞬間、靜まりかへつた守備兵は、左右に開く本營正門の重苦しい軌りを聞くのと殆ど同時に、素冠白衣悄然と白馬に跨つて門を出て來る吳三桂の姿を見た。

（おう、總兵は喪服だ！どうしたんだ？）（そしてあの顔のやつれは、どうだ！）守備兵たちが大きく睨つた目の睫毛に、ひやりとうすら寒い春の朝風が觸れて行く。

部隊長は各部隊右翼の位置を離れて、吳三桂の白馬の前に呼ばれた。

——並んでゐる隣の兵の呼吸も聞える、水底のやうな靜寂だ。

……言はさず聞かされて忽ち眞者になつた部分隊長を背後に隨へて、やを、西へ向きをかへた吳三桂は、敬虔そのものゝ態度で三拜九拜の祈りを捧げた。——すべてが、面妖な情景である。

息づまるやうな緊張が、ぐらつと崩れかけた瞬間

「天子の崩御だ！」

「しかも悲痛な御最期だ！」

などといった嘆きが、守備隊の列伍を電波のやうにつたはつた。(北京陥落！天子崩御！大明國はどうなるのだ！いや、我我は一體どうすればいいんだ？) 荒海の狂瀾が、立ちならぶ一人一人の胸に波うつた。

乗馬のまま、祈り終へた吳三桂の右手は、至極自然に杏の枝を掴んで、全部隊の正面に向き直つた。口がぶるぶるとふるへた。何か語り出さうとして語り得ないのだ。いつもは爛々たる眼光を放つ兩眼も、思ひなしかうるんで見える。

——一夜の中に、非常時局の大明國を双肩に背負はされた總兵の胸中を思ひやる列伍の此處彼處から、歎歎が聞え出した。思ひ出したやうにいななき交はす馬も、今朝は深くうなだれた首をあげようともしない。

女

交渉が萬一不調に終つたならば、生きて再び山海關を渡らぬ決心の宋丕樂は、俯目勝ちにその必死の熟辯をふるひ終ると、宮綬箱の蓋を明けるやうな氣持で、顔を上げた。

宋丕樂の話の始めから、要所要所に同感共鳴の句讀點を打ちながら、眞剣に聞きほれてゐた清親王多爾袞の第一聲は、宋丕樂を狂喜せしめた。

「いや、全くお察し申す。非常時局に君主を喪つたあとの、

頼りなき加減は、我々も實はほんの半年前に沁々と味はつてゐることとて、一入、身につまされる……。」

宋丕樂はだまつて、まじまじと細おもてな多爾袞の、口許を見つめた。といふよりも何をいはうにもいへないのだ。

「御使者も老年のことであるから、定めし覺えてゐるであらう……我々清國軍が十五年前、貴國の都近くまで迫つたことを……。」

割憚な新興國の青年貴族とも思へぬほど、多爾袞はやさしい微笑を口許に漂はせて、もの靜かな口調で話し出した。

「は、は……。」

多爾袞に壓倒された宋丕樂は、返答する言葉を見失つた。

「あの遠征が當時十八歳の私の初陣でもあつたが、何と思はれるかな、清國軍のあの關外撤退ぶりを……。」

多爾袞は自分の語調を樂しむやうに、ゆつたりと言葉を切つた。

「どうも、はや暗に落ちかねると、手前の主人も申してをりましたが……。」

「ふむ、罪咎のないものを討たぬことは、わが國建國以來の軍律だ……と、こゝろ言へば、おわかりかな御使者……。」

多爾袞の眞意を測りかねた宋丕樂は、どきまきする外はなかつた。——こゝろと、とどめを刺すやうに多爾袞は言ひきつた。

「清國の兵馬は、もともと証明のためにはなくて、



救明のためにあるのぢや。ところがすでにことここに至つて不幸にも貴國は絶體絶命の運命に陥られた。この際、能ふ限りお力になることが、文帝並びに兄弟の遺訓に副ふ所以でもあるのぢや」

（何といふ恐ろしい男がゐたものだらう……俺の言ひたい鬨星を、ぐんぐん指して来るなんて……） 宋不樂はやたらに叩頭した。

「お得心の上は、早々、總兵殿に復命いたされるがよからう。我々もいまず、正義の復讐の師に参加の用意をはじめらるであらうと……」

——清國軍の本營たる杏山城から山海關まで幾十里、天馬に乗つた氣持で宋不樂はあぶみを踏んだ。

宋不樂が鞠躬如として退くのを、隣の室でしびれを切らして待つてゐた孔有徳と耽仲明の二人が、飛帳をかき分けて躍り出した。

「殿下、お芽出度うございましたな。敵々お待ち兼ねの天の時が参りましたぞ……」

「明軍吳三桂もよくよく困つたと見えまするな、明軍の勢力も合はせて、明都北京攻撃、先帝もさだめし……」

「黙れ、兩人」  
有頂天の兩人は、苦り切つた多爾袞の顔を見て、はつとたち

ろいだ。

「それがお前たちの本心か。心にもないへつらひを聞くと、わしの心にむしずが走るんだ！」

「殿下……お情ないことを仰せられます……」

「今更、私共はどうして……」

「待て！」

再び饒舌にかへらうとする出鼻を、厳しく抑さへた多爾袞の語調には、異常の威厳がこもつてゐた。

「うむ！それでは本心だと申すのだな。では兩人、改めて言はう。明の崇禎帝は假にもお前たちにとつて、舊主ぢやないか！その舊主がこのわしらでさへ涙なしには到底聞きえぬ悲惨な最期を遂げられた事實の前に、一應の感慨があつてこそ然るべきだ……わしは、明日二度目の遠征による光榮ある清國軍に、お前たち紙屑のやうに輕薄な部將の参加することを、手頭、許さないぞ！」

凛然と肺腑を貫く多爾袞の聲は、千鈞の重みを、更に兩人の頭上加へた。

生母大福金が太祖に殉じた際に、異母兄たちの醜い策略が潛んでゐたことは、當時十五歳の多爾袞もよく知るところだつた。しかし、新興大清國建設の途上に於て、さうした私怨を云々すべきではないと、健氣にも思つた多爾袞は、母の犠牲を生彩あらしめるためにも、恩讐を越えて異母兄皇太極の征戰に従

つた。そしてその度毎に、掛値なしの偉功を擲つて、父兄の鴻  
謨大に全力を盡すことを惜まなかつた。

一昨年の冬發病した皇太極の病勢が、險惡化の一路を辿るや  
うになつてから、それとなく自立を勧める部將も多かつたが、  
多爾袞はさうした言葉に耳を藉して、臨終間近な異母兄の信愛  
を裏切りたくなかつた。

去年八月九日の夜半、遂に皇太極が瀋陽城清寧宮で崩すと  
逸早く、幼冲漸く六歳の甥たる福臨を擁立して、城内の異心を  
封じ策動を排するにつとめた位である。

そしてこの春、崇徳六年の松山城遠征の際、降した前劄遼總  
督の洪承疇を先鋒に、第三次遠征軍を編成し、杏山城に待機し  
てゐる所へ、皇太極時代、再度の猛攻を以てしてすら拔き得な  
かつた山海關から、妥協の急使である。

（願つてもない好機だ！）喜ひに高鳴る胸をなだめながら  
も、清國軍はあくまで正義の師であらうことを欲する多爾袞で  
ある。——かくて孔有徳、耿仲明百分の諍解もつひに徒勞に終  
つたことは言ふまでもない。

### 「救恤大明國」——

#### 「正義大清國軍」——

墨頂鮮かな長旒が林立して、杏山城の朝風にはたはたと騒つ  
た。

肅々と出發する正黃旗、正白旗、つづく正紅旗、そして正藍  
旗……。

皇太極遺愛の乘馬大白に跨つて、その隊伍をふりかへり見る  
多爾袞は、腹の底からこみ上げて来る微笑の始末に困じ果て  
た。（父がはじめた悠遠な大行進も、六十何年後の今日、愈々  
中原にその輝かしい第一歩を印するのだ！）明るい春の光に似  
たその微笑の片隅を、浮雲が時折徂徠する……。

（今度、凱旋する頃は、兄の一周年もすぎてもやう。また、  
どんな、てと皇太后から婚儀を迫られることだらう）反射的に  
右手で繰つてゐた黄白の手綱を見ながら、多爾袞はふと思ひ出  
した。——手綱は出征に際して皇太后からひそかに贈られたも  
のである。

（蒙古では父の妻をすら繼承する子がゐるといふではない  
か。未亡人となつた兄嫁を弟が娶る位は、強ち怪しむに足らぬ  
慣例だ……。あれだけになつてゐる福臨の、叔父から父にわ  
しがなつたら、却つて喜ぶかも知れないぞ）孝莊文皇太后のあ  
でやかな姿が、流眄が三十二歳の多爾袞の眼前に、浮んだり消  
えたりする。

しかし一面、へいや、みんなから極力勧められた時でさへ、  
兄の正統に譲るべきことを主張して、皇位を私しなかつたわし  
だ。それにたとひ慣例があるとしても、それは百姓たちの間の  
ことである。この好ましくない慣例を矯正するのに、うつてつ

けのわしぢやないか！馬鹿な！わしもどうかしてゐるぞ！」攝政府親王としての多爾袞が、それを苦もなくすぐもみ消してしまふのである。

——大海原の波のやうに起伏する薄緑の平原に、白く乾せ上つた廣い道が地平線の彼方まで、果しなくうねり續いてゐる。父兄が夢にのみ見てゐた山海關を潜つて、三屯營から一路西へ、晩春初夏の水目を、さながら交易商人の氣持で、足どりも軽く大明國の北京へ迫るのが清國軍である。

霧かと思まがふ砲煙と砂塵である。

人馬も森も河も、その中に姿を没して、時折、稻妻に似た光が劈くのは、明軍が誇る紅夷砲の火焰であらう。

突叫び、喊聲、砲聲——崇禎帝の復仇をといさむ山海關守備隊、それを北京城外邊へ撃つ關賊軍——兩軍の形勢は、正に快い五分と五分である。

（おお、吳三桂の軍は、みな進髮してゐるといふのか！）斥候の報告に突爾と肯いた多爾袞は、ふりむきさま、おしだまつて、父祖傳寶の黃鍔を大きく右に振つた。——四旗三萬の部下が、生を受けた機械のやうに、敏速正確に行動を開始した。

物凄い新銳武器紅夷砲に壓迫されて、次第に浮足立つた部下を叱咤しつつ督戰してゐた李自成は、右翼部隊から戦慄すべき

情報を受けた。敵の救援部隊の來襲だ！

全軍、異様な服裝をしてゐるといふのだ。全軍、騎馬してゐるといふのだ！

（それこそ野戦に馴れた清軍にちがひない！唐通の意見通り籠城すればよかつたのに！）

ひどく狼狽した李自成は、汗がにぢみこんだ兩眼を、鐵甲の中でつむらざるを得なかつた。

しばらくすると唐通の傷ついた中央部隊が、總崩れに崩れはじめた。

汗を、入いきれを、硝煙を、血の香を、いつばいに含んだ熱風が、容赦なくふきまくる。その怪しい圍軍の最中に、李自成は思つてならないことを思ひ出してしまつた。

（陳圓々のなよやかな頸筋、白い柔肌——たとひ北京は一時奪ひかへされても、陳圓々だけは金輪際離さないぞ！）

咄嗟に身を騰した李自成は、うしろをふりむきもしないで、朝陽門目かけて馬鞭を激しく振つた。

さらぬだに、初夏のさんさんたる白光に喘いでゐた北京城内は、またたくうちに、數萬の敗走關賊軍を呑んで震憾した。

かくして明清聯合軍が、廣茫とした郊外の對陣から、狭い城内の追撃戦に移つて間もない頃、吳三桂は側の宋丕樂にそれと教へられて、馬上姿颯爽と四邊を拂ふ多爾袞を初めて見た。

「總兵！よい日和で結構だ！」

挨拶しかかつた吳三桂は、却つて先方から聲をかけられて、たぢたぢとなつた。

（一分を争ふ兵馬倥傯の間に、あんな言葉が凡人の口から出るものではない！）吳三桂は初對面の一言によつて、すつかり多爾袞に先んぜられてしまつた。

多爾袞の悠長迫らぬ舉措、人なつこい微笑——關外饑饉の荒野が、どうしてこんなに恩威兼ね備はつた青年を育こんだであらう！北京の貴公子たちと並べても、寸毫のひけ目もないではないか！——吳三桂は汗と流れ出る額の汗を右袖でぶき、まに拭ひながら、辛うじて答へた。

「は、は……萬々の御挨拶は何れ後刻……い、いましばらくは失禮、御免、御免下さるやう……」

無意識に一揖した吳三桂は、はるかに進んだ先鋒のあとを追つて、馬をはしらせた。そして五分程してから、吳三桂はじめて賣木を免れたやうに、漸くほつとした。

（おお、俺は陳圓々掠奪の噂の真相を紐さねばならないのだ！）多爾袞が率ゐる清軍の威武に信頼しきつた吳三桂の心の、ほんの一寸したすき間から、さうした慾望が噴水のやうに迸り出た。

おちつきのないその後姿を見送つてみた多爾袞は、誰にとも

なくつぶやいた。

「あの男が明朝無二の武將だといふのでは、たとひ隨賊の來襲がなくつても、いや崇禎帝の崩御がなくつても、可哀さうだが明朝の崩壊は、單に時日の問題にすぎなかつたのだ！」

黃

門口におほひかぶさつた杏の花は、すでにさかりをすぎて、庭先に蹴り咲く牡丹が、まさに妍を競つてゐる。——けれどもそんなことは吳三桂の感懐を深める何物にも値しなかつた。

巷に辻に試みられる關賊軍の力弱い抵抗、それをひた押しに押し明清聯合軍。勝敗の岐路は刻々に著しく隔つて行く。——だが、吳三桂は、杏の樹蔭、牡丹を踏みにぢりながら、山海關の一夜以來の惘惘狂亂を、またほしいままにせずにはゐられなかつた。

（陳圓々が居ないのだ！噂はつひに眞實だつたのか！自戒の奴、遠くは行くまい！）吳三桂は傍の宋丕樂に向つて、破鐘のやうな聲で怒鳴りつけた。

「おい！柝だ！柝だ！總追擊の柝だ！！」

柝の音！

總追擊だ！急追擊だ！  
「一人も城外へ討ち漏すな、磔殺した！磔殺した！磔殺した！」

吳三桂は狂氣になつて叫びつづけた。

しかし、この時すでに李自成は陳圓々を左脇に抱へたまま、馬上にまだ草いきれがする夏の曠野を、西へ駆けてゐた。

かくて、久しぶりに北京にかへりながら、吳三桂は更に大追撃の令を下したのだ。

飲まず食はずの人と馬が、永平へ、保定へ、西安へと、關賊軍を、いや李自成を追つて、遙か何百里の夏草の上に狂奔した。

關賊軍と吳三桂とが組みつほぐれつ西へ去つたあとの北京を、二月ぶりの靜謐がはじめて領した。

多爾袞はあへて黄鉞を振らうとはしなかつた。

一殿下！この際この私が申し上げるのも、どうかと思はれまするが、願はくは殿下格別の御仁愛を以て、形だけなりと明の先帝に弔禮をお行ひ下さつては……」

一言一句、噛みしめるやうに考へながら、恐る恐る申し出たのが、舊明臣の一人范文程である。

「うむ、文程！よく氣がついた。いや、よくぞ申した！さすがにお前は、有徳や仲明の比ではない、わしさへ汗澗に忘れぬ所だつたぞ！」

「いや、お褒めに預りまして、文程、何と申してよろしいやら、余く……」

おもはゆい苦笑を洩さざるを得ない范文程である。ふと、そ

の心中を察した多爾袞は、慌て氣味にこともなげな哄笑をつけ加へた。

「は、は、は。とにかく弔禮の儀式は、一切をあげてお前に一任する。その外氣づいたことは、遠慮なくびしびし言つてくれるやう。關外の狼どもには何も手がつけられないことばかりだらうが」

ぐんと碎けた口調で話しかけられた范文程の兩眼には、涙が滂沱と溢れ出た。

（赤心を推して人の腹中に置くといふのは、まさしく殿下のことだ！この殿下のためならば、俺は明の叛臣の汚名に甘んじよう）

心にくいまでに縮き晴れた五月空の下、北京東直門から正式入城する清國軍。

隊列の先頭「救恤大明國」「正義大清國軍」長跪に續く多爾袞の乗馬大白の艶やかな毛並、誇らかな嘶き。——今日の弔祭場たる萬歲山への遺筋を賑して歩武堂々の大行進だ。

道の兩側に堵列する城内の老若男女が、心から叫ぶ歡呼の聲だ。

應ずるやうに憂々と高鳴る馬蹄の響だ。

黙々と馬を打たせながら、「謹迎大清國皇帝」の貼紙を街角に見出して、感情の複雑した涙にひたる多爾袞だ。

方々のかくれ家で、この弔祭を傳へ聞いて馳せ参じた明朝の遺臣たちは、多爾袞が崇禎帝に『大明國毅宗莊烈皇帝』の諡號を、副馬小白と共に贈ると述べるや、相擁して聲も惜しまず嬉し泣きに泣いた。

——白日の夢を思はせてこぼれ匂ふ胡藤の花、空も狭しとばかり亂れ飛ぶ鶴。式が終るのを待ち兼ねたやうに、多爾袞が范文程を招き寄せた。

一文程、至急佈告だ、筆記してみてくれ。よいか……常ニ正義ノ太陽ト共ニアル清國軍今回ノ北京入城ノ目的ハ、國賊ヲ追ヒ以テ明ノ窮苦ヲ救ハンガタメノミ。而シテ之ヲ國賊ニ得タリ整モ明朝ヨリ取ルニアラズ。本日茲ニ明先帝ヲ祀リ、恭シク諡號ヲ上リシ所以モ亦他ナシ。

尙、清國軍當城ニ駐マルノ間、乃チ左記數箇條ノ實行ヲ誓ハントス……」

ここまで一氣に口授した多爾袞は、白紙をしとど涙にぬらしながら、筆記してゐる范文程の姿を見かへつた。

一第一、清國軍ハ明朝各皇族諸官吏ヲシテ各々其ノ地位ト財産ヲ保有セム……第二、清國軍ハ多年ノ重賦ニ喘ギ來タリシ人民ノ選前ヲ廢シ、租稅ヲ三分ノ一ニ減ズ……第三、一つづけようとした多爾袞の言葉を、范文程が激しく遮つた。「殿、殿下、もう澤山でございませう。こ、これ以上は割があたりませう……割が……」

「なに、もう一つ付け加へたいんだ、文程第三だ……第三清國軍ハ明ノアラユル舊俗ノ存續ヲ敢テ妨ゲズ……」

「……？」  
怪訝な顔を上げた范文程に、多爾袞がやさしく微笑みかけながら、右手で自分の辮髪を掴んで見せた。

「これだよ、これ。明國人の好まぬ髪にちがひないぢやないか。正直のところ、どうだ？ は、は……さ、それを至急辻々に貼らせるんだ」

思へば變轉はてしない半年であつた。

凶作、飢饉、重税、寇賊來襲、天子崩御——復讐戰——崇禎帝の晩年は、歳晩の感じに墜せられた。李自成の滯京は、颯風前の無氣味な静かさで、とても日々の生業に安んじさせなかつた。——そして、いま清國軍の入城は、たしかに新春黎明に似た歡喜を、ばらまいてくれた。賑々として躍る希望が、朗らかな明日をしっかりと豫約してくれる。

清國皇帝北京遷都歎願書が、洪承疇、范文程を介して、明朝皇族から提出されたのは、佈告が發せられて以來、まだ一箇月とは想たない頃であつた。

多爾袞は意を決して幼帝福臨の入關を迎へるべき部隊編成を發表した。

儀仗總將、洪承疇

典禮總辨、范文程

——四旗長の中、この榮職に就いたものが一人としてゐないのだ。多爾袞は晴れの遷幸に關する凡てを、舊明臣の二人にまかせて、すこしも疑はないのだ。

嘔然とした洪承疇を顧みる范文程の頬にも、すでに涙が光つてゐた。二人はどちらからともなく両手を握り合つた。

「粉骨碎身、この重責を果たすんだな、范！」

その昔、薊遼の雄虎と恐れられた洪承疇の、松の枝のやうな指が、びく／＼と顫した。

「そ、そうだとも死んでも俺、俺……」

感情の激しやすい范文程は、どうしても言葉が續けられないのだ。

四旗長は夫々自分たちが任に洩れたことの不満よりも、多爾袞自身がこの際情然として北京に留まる態度を、いぶかしく思つた。といふよりもいらだ、しくなつた。

勿論、多爾袞は太祖の胸にも皇太極の胸にも、この訓明的な成果を報告しなかつた。しかし瀋陽には皇太后がある。皇太后との交渉がのつひきならぬ破目に陥るであらうことが、あまりにもはつきりしすぎてゐる。(福臨北京遷都を一轉機として、わしは兵馬にも女色にも斷つた靜かな生活に遵れよう。そして薄倅な一生を終へた母の靈に侍したい。——わしは少年時代から、人や國の榮枯盛衰を、あまりに數多く見せつけられて來

た)かうした心の窓を覗き得るものは一人もゐなかつた。

朝夕、北海から濃い霧が立ちのぼつて、吹く風は素肌を重さを覺えしめ、小丘の森のしげみを透す日光も琥珀色を帯びて來た。

裂けやすくなつた蓮の葉にすがる赤とんぼも、飛ぶ氣力を失ひかけた。

不必要だと思はれるほど、毎日一回几帳面に、遷幸供幸の范文程からもたらされる途上報告によつて、福臨入城の豫定日を計算するのが、その頃の多爾袞の新しい日課だつた。

その日の范文程からの傳騎をひき下らせた多爾袞は、思ひがけない取次を持つた部下に待たれてゐた。

吳三桂の歸京である。さうむ……萬々の御挨拶は何れ後刻……か。ひどく性急なくせに、のんびりした男がゐたもんだ。多爾袞はおのづと苦笑が浮んで來るのを禁じえなかつた。

大迫撃戦、こゝに數閏月。顔の皺、霜の鬢髪、尖り出た顴骨汗と塵に染れた戎衣、——それは征戰の慘苦を物語るに十分であつた。——多爾袞はやつれ果てた吳三桂をいたはしいものと思つて、しみん、眺めた。

吳三桂のさうした容貌風姿は、同時にまた性格の激變をも映し出してゐた。

關賊軍を西安にまで追及したけれども、同地方の地理に明る



い季自成の變幻きはまらない出沒は、無暗に吳三桂を苛立たせるばかりだつた。

半狂亂になつて秋風と共に、うら淋しく都門に歸還した吳三桂の眼は、時の速かな流轉を見、耳は舞臺の著しい轉換を聞かなければならなかつた。(よし、この上は、やぶれかぶれだ！多爾袞を散々面罵してやらう)と意氣込んで来たにもかゝらず、今度もまた鮮かに先手を打たれてしまつた。

「總兵、長途の征陣、御苦勞だつた」

眼に見えない威厳だ！電撃だ！

「……」

口をつぐむ外どうすることも出来ない吳三桂である。

「平西伯を降して平西王に封ずる」と言つた多爾袞の莊重な言葉だけが、吳三桂の耳に残つた。(お、伯から俺は到頭、王となつたんだ、皇族なんだ、俺が！……陳圓々に聞かせた！あ、陳圓々！陳圓々！)錯亂した吳三桂の頭は、自分を王に降してくれたのが清國の攝政であることも忘れて、聞かさうとする陳圓々の行方が、李自成と共にいま尙不明であることだけを思ひ出した。

「い、ま少し、そ、そのお、おひまが頂きたい、全大陸の草の根を分けても、李自成をつかまへずには、この氣が晴れませぬ……」

呶々と話し終るが早いか賤任の拜舞もしないで起ち上つた。

「ほう、それはまた御苦勞な……」

(この男は、自分から求めて一生を兵馬の間に終りたい男らしい。可哀いさうに……)多爾袞は眼を細めて笑つたきり、あへて止めようともせず、風が合歡木の莢豆に吹きしきるのを、窓越しに眺めつゞけた。

瘦せこけた馬に躍起となつて鞭を加へながら、西直門をくぐりぬける平西王吳三桂、氣づかはずにそのあとを追ふ忠實な老僕宋不樂——秋風にせきたてられて、千草に盡もすたく地蟲の聲々は、雨よりもかしましい。

吳三桂は峻峻と寒氣を飜いて、翌年早春、李自成を湖廣辰州に追ひ詰めた。しかし吳三桂が見たのは、饑饉に堪へられなくなつて、村へ食を求めに出た所を、百姓たちに苦もなく殺されてから二日もたつた李自成の死體だけであつた。

吳三桂の命によつて附近の山林を探してゐた宋不樂は、とある洞窟の中に、あまりに衰へてた白蘭夫人陳圓々の自殺死體を發見して、鳩尾のあたりがひやりとつめたくなるのを感じた。だが、同時にその意外にも満足さうな死顔をも見てしまつた宋不樂は、どうしても吳三桂に、陳圓々死體發見の報告をするだけの勇氣が持てなかつた。



# アリヨーンシヤ

田 兵 作  
大内隆雄 譯

風と雪とが説い音をたててゐる。荒涼とした驛の電線、ずつと前に枯れてしまつた槐樹、それから夏の間に偉い人達が海岸に建てた海水浴のための西洋式建物、それらがみな少し離れた海から来る鋭い響きの中に吼え立て、この暗い夜の中で一緒に狂ひ出してゐる。

此處の、一番遅い列車も馳り去つた。残つてゐるのは鐵路の傍の幾つかのしよんぼりした電燈だけで、雪のある地面に立つて居り、はつきりと雪が砂埃のやうに地面を滑つて行くのが見える。

私はその列車から降りて來たのだつた。降りたのは私だけであつた。私が一番恐れてゐるのはこれから行かうとする目的地が、此處から一里近くもあり、それに入煙も無い深い谷、松の密生林を通らねばならぬことであつた。こんな天氣の下で私は全く困つてしまつた。

幸ひこの驛の驛夫、赤帽に、いつも一緒になる關係でよく知つてゐる者がゐた。一番いゝ事はこんな晩には此處で休んで、明日早朝時間を誤らぬやうに歸ることである。さうしよう、この寒さだ、下頸をしつかり胸に埋め急いで驛の傍の一番の店にはいつて行つた。この店はこの寂しい驛にあるが、彼等の眠る時間は都會より遅い。その原因はこの附近に石灰を焼く大窟があつて、一年中頑丈な格好をした連中が働いてゐる、赤黒い顔とぼろ服にいつばい石灰をつけて、しよつ中この店にやつて來る。特に晩になると群をなして集つて來、幾つかの塊になつて、がや／＼と騒ぎ賭博をし、煙草を吸ふ。勘定台の外側の長い椅子に三々五々腰掛けて、語り、笑ひ、小さな酒壺を勘定台に並べ、落花生の皮を床中に落す。燒酒の臭ひがこの部屋いつばいにたちこめてゐるのである。時には飲んだのが暗唾を始める、先祖や女房を罵る、酒杯などが飛ぶ。女の話をし出すと、彼等は興奮してしまふ。それから隊伍を組んで東の山麓の部落に出掛ける。その部落で一番有名で彼等と最も接してゐたのは、一人のロンヤ女で、名はナリーと言つた。だが今日はいつとも違つてゐて、中にはいつて見ると、いつも見慣れてゐる連中は一人も居らず、たゞ番頭だけが算盤をはおいて居り、ひつそりしてゐた。堂櫃の孫はあのでつべんに赤い玉のある帽子を被つた大きな頭を卓の横から伸して、顔中に不自然な笑ひを閃かした。

「おや、金さん、いまお歸りですか？」

「さうだ、けふはひまだね！」

私は片方の長い椅子に掛け、あたりを簡單に見廻し、疑ひを含んだ調子で言った。掌櫃は嘆息するやうにして言った。

「あなた御存知ないんですか、石炭工場の工夫頭が拐帶逃走をやつたんですよ。何でも捕まつたつてことでみんな行つたんですよ……」

小僧が鶏の毛で作つた扇手で私の身體から雪を拂ひ落してくれた。そこで私は掌櫃に向つて手をあげた。掌櫃は話を止めてしまひ、酒をつけるやう命令した。それから彼は落花生を五錢分計つて勘定臺に置いた。私は酒飲みではないが、今夜のやうな氣持の時、またこの寒い時、少しばかりやることは、格別に嬉しいことだつた。全身の血液が血管を開かれて流れるやうである。

外の雪はひどくなつて來た。屋根までが頭へてゐる。櫛でつけて又離れた紙の隙間から泣き叫ぶやうな、人を不快にする悲鳴が聞えて來、滋味といふものはまるで爆撃されて海螺の殻の中に縮こまつてしまつたかのやうである。掌櫃は黒い竿の煙管を口から離し、勘定機に倚りかかつてまだ火の残つてゐるストーヴに當つてゐる。頭腦は自然に柔かになり、首には織を寄せ、眼の皮は眼玉をつつみ込まうとしてゐる。小僧が私の唇附けで又焼酒二兩をつけてゐる時だつた。カタンと硝子戸が開き

一陣の雪を混へた冷い風が吹込んで來た。眼りこけてゐた掌櫃もびつくりして頭をもち上げた。

「おう、アリオシヤ、又何しに來たんだ、お前は……」

さう言つたのは掌櫃でその前に立つてゐるのは身體中に雪を被つたアリオシヤといふ少年だつた。年齢は十二……であらう。蒼白で長い顔の高い鼻の兩側に二つの黄色い小さな眼が深く窪んで居る。野草を乾したやうな頭髪である。一見して外國人と判る。その短い幾つも穴のある學生の制服のやうな服、大きなぼろ靴、雪は室内の空氣でだいぶん溶けてゐる。彼は勘定臺の傍に立ち、左の手には麥酒瓶を一つ持つて腰の後にやつて居り、右手を高くあげたがそれには長い縹紗靴を持つてゐる。みんなの視線を集めながら、綺麗な支那語で隣れみをどふ眼付をして言つた。

「掌櫃、この靴と換へつこに酒を下さい……」

「ふうん、お前のお袋はまた……」

言ひも終らず、掌櫃はいかめしい顔付になり、冷然とその靴を奪ひ、虱でも探すやうに検査した。

「ふん、こんなもの持つて來て酒をくれなんぞ。もつと好いものを持つて來い、さあ！」

さういつて、ボトンと靴は下に落された。

「掌櫃……」

少年は何度か頭を下げ、左手の瓶を勘定臺に置いた。

「うるさいな。早く持つて行け。でないとなたき割つてしまふぞ。それとも姉さんと呼んで来るか、さうしたら酒をやらう。」

「貸して下さいよ！」

「貸せ？、早く姉さんと呼んで来い。それからの事だ。」

掌櫃の機嫌は變つたらしく、暗い顔が明るくなつた。眼のところには細い皺が寄つた。小僧も一緒になつて笑つてゐる。少年のしよけてゐた顔は急に紅くなり、唇の筋肉は顔へ、何か言ひたい様子だつたが、だまつてうつむき床に落された靴を見てゐる。

「馬鹿奴、何を考へてるんだ、此奴。早く家に歸つて姉さんにやつて来いと言へ。」

さういひながら、掌櫃は私の方に向ひ手を振つていつたのだつた。

「お聞きになつた事ありませんか。これの姉さんは一度二十錢なんですよ。これ見たいに不様ぢやありませんよ。」

少年はそれを聴き、恨めしげな眼付をした。それから靴を拾ひ上げると、急いで戸を開き、風雪の中に走つて行つた。

掌櫃はその後姿を眺めながら、少年の身邊の事を低級談話の材料とした。

「ふうん、あいつはいつもつまらぬものを持つて来て物を買ひに来るんですよ、親爺が飲み助でしてね。この前はほろほろ

の皮帽子を持つて来ました。ひどい事をやつてゐるんです。何でも又……」

掌櫃は袖の手を下顎の下にやり、左右に數歩歩み、それから又元の位置に坐り、續いて軽く笑つた。

「見てて御覽なさい。酒を持つて歸らなかつたら、あれを家に入らせはしませんよ。それであれはいつも海岸の家に行つて眠るんです。まるで野良犬みたいですよ。」

それを齒牙にも掛けないかのやうに言ひ、べつと痰を床に吐き、脚で擦つた。手でてか／＼してゐる唇を撫で、又手を袖の中に入れ、それから脚で床をたたき出した。

「親爺てのは驛の北の方の山で葡萄酒をやつてゐる男ぢやないかね。」

「え、さうですよ。」

「ふん、あれか！」

私はそれでその瘦せて背の高い男を思ひ出した。顔中が髭だらけの、頑丈な腕つ節を持つた男である。夏はいつもその髭の實の成つた土地の周りを歩いてゐる。そしては葉についた蟲を取つてゐる。冬の朝にも一度彼が乳牛を引つ張り肩には牛糞を擦いでゐるのを見たことがある。一番印象が深かつたのはその凍りついた髭の中から白い息を吐いてゐたことである。も一度の時も冬であつた。黄昏で、雪が蔽ふた河邊で、ぼろズボンを着て首の肥えた奴がうづくまつてゐた。それを毛皮の外套を着

た彼が両手を振り上げて打ち續けてゐた。そいつは反抗もせず、ひどい聲をあげて泣き叫んでゐた。あとで人に聞くと、彼はロシヤの貴族で、今は没落して身體をその主人に賣つたのである、その主人とともにこの驛附近にやつて來、葡萄酒で働いてゐるといふことだつた。彼はいつも主人の物を盗み出して賣り、そしては鞭打たれてゐた。その娘がナリーで、十六歳、主人の妾たつたのが棄てられたのだつた。彼の妻は食ふ物を石灰工場の支那人から貰つたりした。彼は酒に酔つて家に歸るとその女房を擲り、女房が男をこしらへてゐるといつて罵つた。それから石灰焼きをやつつけてやるといひ、女房が彼の衣服を持つて食物をこさへに行くまでやめなかつた。そしては石灰焼きの労働者に鼻つ先を齧られ顔を腫らして、數箇月家に歸らなかつたりした。それから又いつものやうに酔つて歸つて來るのだつた。そして彼の息子だけが彼に跟いてゐた。これは石灰焼き労働者の收入が餘り少かつたからでもあるが、それを本當に喜ばなかつたからである。彼は毎日驛に石灰殻を拾ひに來る外は、谷の村の北にある小學校へ走つて行き、垣の外からみんなが球蹴りするのを眺めてゐた、時にはみんなから取り卷かれて唾を浴せられ、罵倒されたりした。やがてはみんなは歌を作つて「支那の何とか、ロシヤの何とか、アリヨシヤの姉さんは二十歳」などと歌ひはやした。アリヨシヤはそれを聞くと「馬鹿野郎！」と叫び、引き返した。みんなに足を拂はれたり

したが、アリヨシヤは石塊を拾ひ上げる、するとみんなは逃げてしまふのだつた。

「旦那、も一つ！」

小僧は眠さうな聲でさういつた。それで私はもう酒がなくなつたのを知つた。外の風聲、雪の音はまだやまない。遠くでは更に強く潮の響がしてゐる。掌櫃は突然その大頭を持ち上げ、時計を見

「おや、もう一時だ。」

といつた。此處でこの晩を過したが、頭にはアリヨシヤの姿が残り、いつまでも眠れなかつた。いらいらしながら、凍つた窓にやがて曙光が射して來るのを見てゐた。

# 人造絹糸

小 松作

大内隆雄 譯

人造絹糸——税率百分の四十

——輸入税規則——

【一】

十一月の冷い風が、東部國境地帯を吹いてゐた。夜は深々として明日ありとも思はれないくらいであつた。それはほとに渺茫とし、深遠としてゐた。夜の風は山いづばいに吹き、谷いづばいに吹いた。そして山谷の水流の上をはび上り、厚い氷を結んだ。その氷の上にはまた午後降つた雪が積んでゐた。この荒涼たる國境地帯に、山は斷ゆることなく連接して居り、風雪は毎日この山と山との間に盤踞してゐた。この人類の居住に適しない地帯で人々は夜の生活を送つてゐた。

夜——  
税關の門の前に、風と雪とが絶えず揺れ動いてゐた。ぼんやり

りした光が、凍つた雪の花の上に撩亂と寶石のやうな光を映し出してゐた。劉長林は今夜宿直で、卓に伏つて「彭公案」(譯註一)を讀んでゐた。ストーヴの火は、窓外の風と同じやうに音を立てゝゐたが、彼は少しも興味を感じなかつた。しよつ中棉花の包のやうな外套を引きしめてゐた。脚には犬の毛のついた長い靴を穿いてゐた。これは寒さを感じしめなかつた。兩脚を偶然セメントの床の上で擦り合はすと、大へん寂しい音がするのだつた。時々彼の身體が寒さのために、びくりと縮こまつた。そして白い壁にそれに伴つて彼のがつしりした影が映つた。

劉長林は筋立つた顔をして、二つの濃い眉の下には大きな眼まが、厚い唇の上から紫褐色の顔色がひろがつてゐた。彼はまじめで、勇氣があつた、緞私科の王も史も、ボイイの張もみな彼が好きだつた。彼は流暢に朝鮮語が話せたばかりでなく、朝鮮の風俗や朝鮮人の特性をもよく知つてゐた。荒涼たる地帯の夜、風雪は窓と門とを揺つてゐた。

劉長林は眼を「彭公案」から離し、壁の時計がちやうど十時を打つたのを見た。

半ば厚い硝子窓に遮られて、部屋の中を覗いてゐる白衣の影が滑つて行つた。この意外な感覺が疲れてゐた彼をはつきりと醒めさせた。彼は急いで本を投げ出して立ち上つた。彼には判つた。彼は、その影が門の前まで来てどんな事が起るかそれに

對して用意した。

彼は「十手」を手に取り上げた。だがこいつは彼の恐怖を追ひ捕ふには不足だった。彼はそこで拳銃を手に取り、硝子窓の下に伏して外を見やつた。

まづくらだつた。星の光もなく、月もなかつた。彼は安心した。何も恐しい事は起り得ないといふことが判つた。彼は拳銃に弾をつめ、門を開けて出て行つた。

「何者だ？」

彼は風雪にぶつつかり、暗の中で、その白い影に向つて叫んだ。

「ドヤ／＼と音かした。劉長林もドヤ／＼と音を立てながら、彼を室内に引つて来た。蛙のやうな眼をした十八、九歳の男だつた、頬も同じやうに外に突き出てゐた、顔は健康さうな色をしてゐる。皮膚は彼が山嶺に生長した一土民であることをはっきり示してゐる。白い服の上に、雪がいつぱい積んでゐる。ただ劉長林の身體についた雪のやうにはつきり見えないだけである。靴の型をしたゴム鞋には銀白色が拵つてゐる。

彼は金といふ姓だと言つた。金が色んな事を答へてから、劉長林は彼に掛けてストオヴにあたるやうに言つた。それからボリーの張に遊びに行つてゐる史君を探して来るやうに、またついでに自動車の運轉手に知らせ、それからあらここらへ電話を掛けて王を探すやうに言つた。

緊張した税關卒、更に緊張してゐるのは劉長林である。彼は數人が一緒になれば、これは金になる、しかし危險もないわけではないと考へた。彼は事件を始末してからも、坐つて落ち着きもせず、立つても居られぬやうにして考へてゐた。もつと人が要るのではなからうか、張君は引つ張り込まなくてはならぬ。あれは仲々力がある。好都合だ。一臺の自動車には運轉手も入れて六人は乗れる。若しもつと多いんだと馬に乗らなくてはならぬ。氷天雪地、人が叫び馬が嘶くといふのでは具合が悪い。彼は自分でも少し落ち着かなくてはいかんと思つた、だが落ち着くことは出来なかつた。部屋の中に往つたり來つたりして時々こつそり金の表情を観察した。

雪は依然として降つてゐる、數人の疲れた顔と、些か緊張した氣持とが、このあまり明るくない灯の下でうごめいてゐる。王は、日も安眠することが出来ず、史と同じやうにこの雪の夜の時間を賭博場で過してゐるのである。今はみんな故意に自分を興奮させ、けふ十里近くを馳けようといふのに備へてゐる。

「銃はみな持たなくてはならぬ、十手はどうでもいい、さあ出掛けよう。」

劉長林の眼は數人の顔を掃くやうに見た。そして振り向いて金に言つた。

「さあ、行こう。」

生の鐵のやうな青年、彼の服もこの厚い綿入れを着た連中の

間に混つた。

六人が一黨の自動車に乗り込んだ。

空には月もない、人々の所にも燈はない。何處までも暗黒である。山や嶺は、すべて際限もない黒い峭壁である。路の兩側に風ははげしく吼えてゐる。車は凍つた河の薄い雪の上を飛鳥のやうに前進し、十里近くの距離を狭めて行く、みんな息詰まる思ひである。誰も口を開けない、氣持が口から跳び出してはいけないと怖れてゐるのだ。

「趙！早くやれ！」

劉長林は運轉手に催促した。趙は速度を早めた。車體は地平線から離れたやうにますます速く飛んで行く。趙はこれまでこんな夜こんな速く車を走らせたことがなかつた。車の前方あまり遠くない所に二條の燈光が輝いてゐる。キラ／＼として前方の路がはつきり見えない。何かがひよつこり見えてもはつきり見えぬ間にもう後の方に失はれてしまふ。

ひとつ大きな音響がして車はもう停つてしまつた。前輪は空中に懸り、後輪は氷雪の中に落ち込んだ。この恐怖の震動はみんなの神経に一種の猛烈な刺戟を與へた。

六個の風雪中の影が車體から這ひ出した。

又一つの新しい恐怖が始まつた。山も野もすべてまつ暗である、自動車の燈も消えてしまつた。幾つかの懐中電燈が數衆の微弱な黄色い光を閃かせてゐる。

「史君、君あの小僧を番してくれ、若し變な事があつたら、そいつから片附けてしまひ給へ。」

史の耳許で低くさうさうやく聲があつた。

「張君にさう言つてくれよ、僕には力がない、あの小僧は強さうだ。」

劉長林は密令を又張に傳へた。張は

「ようし、こつちへ寄越せ。」

さう言つて金の白衣の胸許を掴んだ。

「俺と一緒に來い、あそこで風を避けよう。」

ガヤ／＼と叫び聲が起り山頂に幾つかの火が見えた。その火で人影も映し出された。人影は一緒になりやがて又分れた。

これは早や歸りの賭徒、それから今から賭博場に出掛けようとする連中だつた。誰も山の下で起つてゐる事に氣が付かなかつた。すつかり慣れてしまつた。ゆつくりと往つたり來つたりする連中だつた。夜はますます更けて行つた。

十二時までには三家子に着きたいのだ、あせらざるを得ぬ。車を起さうとしてけんめいだつた。

時間は十二時までに一時間と五分あつた。

(譯註二) 彭公といふ名裁判官の名裁判物語を集めた大衆的讀物。

(二)

雪の夜の一日前の夜の出來事だつた。



訝え訝えとした夜で、満天星だった、微風が樹の無い山と谷を吹いてゐた。

二十幾人かが彼等の生命を背負つて、谷を爬ひ、嶺を爬つて休むことなく進んでゐた。もう五晩になるのだつた。毎晩十二時過ぎてから出立した。夜が明けると前に潜伏した。數百疋の人綱がこの彼等の身體から離れ、他人は知らぬ場所に隠されてゐた。

二十幾人の氣持は一條の繩によつて堅く結び付けられてゐるかの如くであつた。二十幾人の魂が一つの魂の如くに溶け合つてゐた。その夜の道を行き着くために、彼等は又こそそそと一つの嶺に爬ひ上つた。

夜の二時。

李福榮は嶺の草の上に腰を伸した。もう一里ばかりで三家子だつた、みんなは此處で休んだら、後はもう直ぐだといふことを知つてゐた。李福榮の周りには二、三十歳の若者の一群が腰を叩してゐた。

「明日は三家子に泊る」李福榮はしやがれた老人聲で言つた。「さうすりや明後日は目的が達せられる。」

その時、微風が起り、低い歡呼の聲に調子を合せた。

「あと二、三べんやつたら俺ももうやめる。ちつと金を廻して春になつたら水田を借りる、そして穩かに暮すんだ。」

その聲は、一人の白衣の男だつた。

「明日、明後日、品物を渡して、金を受取つたら分けよう、俺ももうやめよう、俺も年を取つた、もう元氣が無い、走れもせん、まあ家も此處にあるし——」

李福榮はさう言つて一寸沈黙したが、やがて又そのしやがれ聲で續けた。

「何か小さな商賣でもやらうて。」

やはり沈黙してゐた。或る者は金を分けて取ることを望んでゐた。或る者は家を持たず金を得てからもこの商賣を續けようと思へてゐた。

みんなの頭の中に一つの小さな世界が幻として描き出されてゐた。この小さな世界には太陽があり、月もあつた。この小さな世界を輝かしく又豪華に照してゐた、また明朗にしてゐた。一つの錢を持たぬ民族が若し僅か數人だけに金が出来たら、二十餘人の青年と一人の半ば老ひた李福榮とに金が出来たら、どのやうな世界になるのであらう。

「僕は五十圓出してゐるんだが、どんだけ分けて貰へるだらう？」

十五歳の一番若いのが答へた。

「勘定して見よう！」李福榮は一寸だまつてから「百圓くらゐかな。」

みんなは沈黙し、一人一人がそれぞれ小さな世界で、投じた資本を考へ、得られるであらう利益を勘定してゐた。



この利益はどのやうにして使ふべきであらうか？ 彼等の小さな世界で企圖してゐるのは普通の財富と同じである！ 或る者はそれを商賣の資本にしようと思つてゐる、或る者はそれを田地を借る金と税金にしようと思つてゐる、或る者はそれで米を買つて父母に食べさせようと思つてゐる、或る者はそれを子供や弟妹の教育費に充てようと思つてゐる。

これまでに彼等が斯うした利益を使つた経験から言つてもさうだつた。しかしまた澤山のもが此の幸福の圏外にあつた！ 李福榮の次の弟は生命をなくしてしまひ、それに終身の債務を残した。その債務は錢の無い民族では返しきれないものだつた。

二十幾人の若い者は毎度経験する創痛をすべて直ちに忘却することが出来た。ただ李福榮の氣持は創痕を收拾出来ないまでに掻き亂されるのだつた。今度も運命と賭博をするのと同じに借金をし、娘を賣り、今度はうまく行くかも知れぬと思つたのだつた。

李福榮は三父子に住んでゐた。家には妻と十九歳の娘とがゐた。十七歳になる二番目の娘は先月彼のために都會の或る女に賣られたのだつた。それは妻が家にゐない間に賣つてしまつたのだつた。どうして上の娘を賣らなかつたか？ 第一の理由は上の娘はもう嫁く先が定つてゐたからだつた。第二の原因は買手が二番目の娘が若くて綺麗なのが氣に入つたからだつた。

李福榮が家を出てからも直ぐ半月にならうとしてゐる。家を思ひ妻の泣き顔を思ふと彼は苦痛を忍び、そのしやがれ聲をあげていつた。

「さあみんな、三父子に行つたら、俺の家で酒を買つて慰勞するとしよう、ひとつ賑やかにやらうぜ。」

風の中に歡喜、贊成の聲があつた。

「出掛けよう！」

低い聲の中に稍高い叫びが起つた。續いて枯草の音がし、服の音がし、風の音と混つた。

星の光の下を一群の白い影は、黄昏の野をゆく鵝群のやうに、重い荷物を負つて、また山を爬ひ上つて行つた。

### (三)

税關の鐵軌車は吹きつける風のやうに、冷い氷原の上を滑つて行つた。運轉手の體は、齒をくひしぼり、ハンドルを握んでゐた。時々眼をつぶつた。そして黒い影や大きな家を後にした。彼自身が車がどれだけ速く走つてゐるかを知らなかつた。或ひは春風の中を飛ぶ燕に比べることが出来たかも知れぬ、それとも燕よりも速かつたかも知れぬ。彼はこのやうにしてその路程を急いでゐた。面と向つてふきつける風が彼の顔を刺した。それは針のやうに痛かつた。彼等には雪がやがてやむであらうこと、天氣は更に寒くなるであらうことが判つてゐた。

東部國境の雪原にはこのやうにして冷い風がふいてゐた、昨

日は、彼等は昨日が清朗な冬の日であつたことを知つてゐた。数人、車の中によりかたまつて、身體は寒くはなかつたが、脚は冷たさで知覺を失つてゐるかのやうであつた。みんなの氣持が、じつとしては居れなかつた。

「趙、速くやれよ！」

劉長林は又さう命令した。

趙は車に齒をくひしぼつた。物はいはなかつた。

「生命は大事だぜ、君にぶつつけるな。」

王はさういつて史の方をじろりと見た。

前方は全くの暗黒だつた。車は地平線を離れたかの如く、矢のやうにその廣大な黒い壁に向つて衝き進んで行つた。

金が前進すべきコースを教へてゐた。疑感が劉長林の心中にだ／＼と深まつて來た。

「おい、若しお前が俺達を裏切つたら早速お前をやつつけてしまふぞ。」

劉長林は金を抑へつけ、自分の威勢を示さうとした。

金が向ふに一つの灯が見えた。金は劉長林に自動車を停めるやうにいつて、自分で降りて行かうとした。

「あの山腹に明るい灯が見えるのがさうなんです。」

金が言つた。

劉長林は彼には構はなかつた。たゞ趙に車をすこしゆつくりするやうにと言つただけだつた。車はその灯から二百メートル

ぐらゐの所まで進んだ。劉長林は車を停めさせた。先づ史と王と張とをそれ／＼の角に配置した。

五分ほどしてやつと金を放した。

十分して、劉長林は銃を持ち、その灯の方にこつそりと進んで行つた。

はげしい音がした。一つの木の戸が劉長林の脚もとで倒れた。數發の銃聲がした。みんなびつくりして伏せた。數條の赤い火光が屋根の上を掠めて、深い遠い黒い空に消えた。それは小さい虹のやうであつた。

「動いちやいかん！」

劉長林は眼前の變な様子に向ひさう命令した。みんな顔色を變へてゐた。二十幾人が一と塊りになり、ふるへ、まさに呼吸もとまるばかりであつた。

劉長林の背後を數人の影が過ぎて行つた。やはり手には同じやうに銃を持つてゐた。奥ひ掛つて來たのだ。この白い水鴨どもは戰慄と恐懼の一群であつた。

劉長林の手に持たれた左手は、蛇の尾のやうにみんなの背と頭の上を下した。叫び聲がこの夜この静かな國境線の寒風の中をたゞよつた。

「品物を其處に置くんだ、さあ！」

一つの左手が一人から最後の一人にまで振られて行つた。苦難の群衆どもは叫び出すほかには一言も言はなかつた。

劉長林は腕が疲れたのを覺えたが十手には更に力を入れた。

そして荒々しく李福榮の顔にぶつつけた。その皺のよつた顔には更に皮膚に藪が喰ひ入るのが見えた。そしてそれは蒼黒い色になつた。そしてつひには十手の下で裂け、血はほとぼり、白い服の上には點々と血の痕がついた。それは艶麗で、雪原上の紅楓かとも見えた。李福榮の眼には濃い血が浸み込んでみた彼は頭がぐら／＼とし、ゆつくりとも一人の男の上に倒れた。

「王、少し水を持つて来い！」

劉長林がいつた。そして十手を停めた。それから又續いて言つた。

「眼、戸主を呼んで来い。誰が戸主なのかはつきりさすんだ。」  
劉長林はあちらこちらを探した。だが少しも痕跡は無かつた。彼はあまつて来た。一種の凄慘な叫びが彼の齒を食ひしぼらせた。

炊事場みたいな小さい部屋だつた。灯は無かつた。床みたいな暗かつた。懐中電燈で二人の女が照し出された。彼は片手でふるへてゐる女を引き起し、片手はその皺いつばいな顔の上に置いてゐた。

「さあ早く言へ、品物は何處に置いたんだ？」

婆さんは頭へて一言も言へなかつた。そして手で顔を掩つた。やはり同じやうに、泣くだけで何にも言はなかつた。

劉長林は黙り付けた。だまつてゐるのにはやり切れなかつた。

殿る音と叫び聲とが續いてこの部屋から聞えて来た。

この食ひしぼつた齒からは誰のことも語り出されなかつた。戸主もなければ品物も無いのか。彼は婆さんを人形みたいに、戸外の雪の中に突き出し自分は又部屋の中に引返して来た。

「うおう！」

劉長林は故意に怒りを柔げるやうにして、懐中電燈で床に伏してゐる一人の少女を照した。

「さあ、立つて俺の言ふことを聞けよ。」

彼女は脅えて、強ひて腰を卸した。

「お前今年十幾つだ？」

劉長林はしかつめらしい振りをした。娘の眼は彼が持つてゐる拳銃を見た。

「十九！」

「もう御亭主が定つてゐるのか？」

「ええ！」

「それぢや殿り付けるわけにも行かん、見る、あの男どもは殿られて頭から血を流してゐる、顔中傷だらけだ。さあ言ふんだ！品物は何處に置いてあるんだ？俺に言つたつて、俺はお前が言つたとは決して言はん、でないとお前もひどい目に遭ふかも知れんからな、顔でもやられたら、一生いゝお婆さんは見付かるまで、よし見付かつたにしても可愛がつて貰へまいて、女の顔つてものはずる分大事なものなんだからな！」

一つの大きな衝動と脅威が、一人の少女の胸に食ひ入った。彼女は黙々として、もう天地の末日が来たかといふやうな氣持だつた。彼女は思つた。

「あゝあの品物は、妹が身體を賣つた代償なのだ。だが斯うなつてはそれをあのまゝ隠して置けるだらうか？」

「若し自分が見るに堪へぬほど醜くなつたら、もう一生の幸福を犠牲にしてしまふことになるのではないか。」

彼女はつひに泣き出した。それは恐ろしさのためではなかつた。

「さあ早く言ふんだ！」

劉長林は催促した。

「でないと、俺は手を動かすぞ。」

何とも言ひやうのない矛盾が彼女の心中に動き、それから彼女は言つた。

「世側の庭の向ふの空家にあります。」

劉長林はこの言葉を聞いて部屋を飛び出した。脚で三つ四つ木の門を蹴飛ばし、藥を積んだ部屋の中に、澤山の人造絹絲を發見した。この大きな喜びと一種の勝利の喜悅は、彼をまたあの泣き聲の満ちてゐる部屋に跳び込ませた。

張の右手が、力強く金の頭上に振り降された。張は眼をつぶつてゐた。金の哀願など聞き入れはしなかつた。彼は冗談のやうにして金に殴りかかつてゐた。

金の突き出した兩頬は今は一層突き出してゐた。それは南瓜の皮のやうに不平均だつた、血は彼の服を染めてゐた。その凄惨な叫び聲は戸外の疾風とリズムのない音楽となつてゐた。

他の者はみんな金が殺されると思つてゐた。

この時、劉長林がやつて来た。

〔四〕

税關は多量の人造絹絲を物にした。國幣四千圓の値打があつた。金は或る豪奢な病院にゐて、税關から千二百圓を貰つた。

彼は、治療費もこんなには要らぬと自分で考へてゐた。



雜

錄

# 文化團體一覽

## 文 藝

△滿洲文話會——文化文藝に關心ある

者の綜合團體で、會員相互の連絡親睦を圖り、滿洲に於る凡ゆる文化活動の助成促進を目的とす。新京に本部を置き、新京、奉天、大連、哈爾濱の四都市に支部があり、旅順、撫順、北京、天津、上海、東京その他にも三、四名乃至十名位づゝの會員が散在してゐる。現在會員總數三百五十人を擁し、各支部より所屬會員數に應じて本部委員が選出されてゐる。毎月各地にて座談懇談會をもち、臨時文藝講演會、文化映畫の夕、文藝の夕、ラヂオ放送等も行ひ、滿洲文藝年鑑その他文藝作品の編輯刊行もし、又在滿作家、美術家等を奥地へ臨時派遣をも企圖してゐる。

る。

△滿洲歌友協會（大連市芝生町一〇一）

——現在歌人百四十餘名の會員を有し各短歌結社より四名乃至五名の委員が選出されてゐる。毎年一回總會を開き會員の懇親座談、研究作品の發表の機會とす。

△滿洲浪曼（新京大興ビル滿日文化協會内）同人——飯田秀世、今井一郎、

松本兼庸、長谷川澄、北村謙次郎、木崎龍、織川貞、逸見純吉、横田文子、矢原禮三郎、荒牧芳郎、岡田壽之、坪井與、大内隆雄、

△作文 發行所（大連市泰月堂九七ノ

一ノ四）作文を毎月發行する外、同人作品單行本をも臨時刊行する。同人、青木實、秋原勝二、池淵鈴江、井上郷、上野凌香、大谷健夫、落合郁郎、日下淵、小杉茂樹、坂井龍司、佐々木勝造、高木泰造、竹内正一、富田壽、日向伸夫、古川賢一郎、古原重芳、町原幸三、宮井一郎、三宅豐子、吉野治夫、

△韻（大連市須磨町五二）同人——松畑

優人、小池亮夫、宮下秀雄、三好弘光、西原茂、龍口武士、井上麟二、八木橋雄次郎、

△撫順文學研究會（撫順市西公園町市

立圖書館内）文藝雜誌「斷層」を不定期刊行す、會員相原繁、今井修二、東郷里枝、鶴田和平、竹内節夫、母里山正夫、西澤千之、松本亞士、不二亭、市來一郎、梶原寅次郎、安藤一明

△二〇三高地（大連市近江町一五三ノ

二ノ一）同人——島崎曉海、川島彌嶺、舟木由岐——詩誌「二〇三高地」毎月發行

△藝文志事務會（新京大興ビル滿日文

化協會内）——純文藝雜誌「藝文志」（滿文）を不定期發行す。

△文學地帶（新京大同大橋東光町苑内）

同人——今村榮治、大脇二雄、太田正、高木喜久藏、酒井悦子、実戸貫二郎、篠原捷三、下島甚三、庄野ふみ、廣中一雄、桃北好澄、

△滿洲文學（新京大同大街東光書苑内）

同人——董川千重、志賀修、ささき、つや、畑善照、遠藤美津男、鹿城次、佐和山一郎、

△アカシヤ短歌會（大連市鳴鶴臺二〇

三）主宰者 甲斐雅人、毎月一回歌誌「アカシヤ」を定期刊行す。

△滿洲郷土藝術協會（大連市大和町二

六ノ一四）代表者、香川末光、毎月一回歌誌「滿洲短歌」を定期発行す。

△滿洲短歌會（大連市柳町三）主宰者、

西田猪之輔、毎月一回歌誌「合朔」を定期発行す。

△滿洲歌話會（哈爾濱河溝街二八）主宰

者、三井實雄、毎月一回歌誌「滿洲歌人」を定期発行す。

△北滿歌人社（哈爾濱透陽街九）主宰者

相川謙、毎月一回歌誌「北滿歌人」を定期発行す。

△平原俳句會（大連市光風臺一七六）機

關誌「平原」

△大連俳句會（大連市青雲臺五〇）機關

誌「滿洲通信俳句」

△滿洲俳句會（大連市神明町一〇〇）機

關誌「滿洲」

△營口俳句會 主宰者、古川而作氏、機

關誌「白豚」

△滿洲石楠聯盟（奉天市平安通三七）機

關誌「山積子」

△哈爾濱學院黑水會 主宰者、佐藤青水

草、機關誌「雙翔」

△滿洲新短歌協會（大連市桃源臺一一

六川崎方）機關誌「短歌開拓」

△新俳句聯盟（大連）

△滿洲香社川柳研究會（奉天市加茂町

六）

△川柳大陸社（奉天市春町）

△滿鐵鐵道の道吟社（奉天市紅梅町）

△滿洲吟詩同好會（奉天市滿洲日日新

開社）

△奉天童話研究會

△奉天トモダチ會

△國都吟社（新京八島通）

△大連川柳社

## 美術・工藝

△滿洲國美術展覽會——滿洲國皇帝陛下訪日宣詔記念展から始まり、第二年から國展と改稱、毎年一回國都新京に於て展覽會を開く。本年八月一日より十日間第二回展覽會を持つた。出品資格は滿洲及關東州に六箇月以上居住する者、出品種類は（第一部）東洋畫（第二部）油畫、水彩畫、パステル畫、素描、創作版畫等、第三部）雕刻、美術工藝品、（第四部）書道。右出品に對して鑑査を行ひ入選を決定、密査の上優秀作品には褒狀賞品を授與す。入賞區別は特選と佳作。會長として民生部大臣孫其昌、密査員長として羅振玉、以下密査員數名、内地相談役として事務所新京大同大街大興ビル滿日文化協會内尙滿洲各都市より數名宛の美術委員が選出せられてゐる。



△新東京美術協會 主宰者、淺枝青甸、毎年一回作品展覽會。

△新興滿洲美術協會 (大連) 主宰者、一板等觀、本年六月第一回展覽會を開催す。

△滿蒙人洋畫研究所 (新京) 主宰者、淺枝青甸、毎年一回展覽會。

△奉天省美術展覽會 主宰、奉天省民政廳、毎年一回展覽會。

△五果會 (大連) 代表、濱野長正、毎年一回展覽會。

△滿洲漫畫家協會 —— 新京、奉天、大連に各分派を有し、不定期展を開く。

△土星會 (新京) 代表、白崎海紀、毎年一回作品展を開く。

△滿洲工藝協會 (大連) 年一回作品展。

△パンプタオ集團 (大連) 代表者、甲斐己八郎、年一回展覽會。

△奉天洋畫會 青い塔社 —— 代表、野田武太郎、年一回作品展。

△五彩會 (奉天) 代表、松岡しげる。

△奉天洋畫研究所 代表、野田武太郎、黃丘社 (大連) 日本畫家の集團で、毎年不定期展を持つ。

△大連日本畫家聯盟 年一回不定期展。

△滿洲アヴァン・ガルド藝術家俱樂部 (大連) 代表、河野想、三井正登、三好弘光。

△新土社 (新京) 日本畫家の集りにして代表は馬場射池。

△彩光會 (齊々哈爾濱) 年一回定期展。

△哈爾濱美術協會 代表、村上屯二、年一回作品展。

△六型會 (奉天) 洋畫、代表、飯河四郎。

△安東美術協會 代表、大内章正。

△哈爾濱洋畫研究所 代表、村上屯二。

△吉林工藝指導所 主宰、省公署。

△大同劇團 (新京大同大術協和會中央

本部内) 主宰者、藤川研一、事務長、森武。

△奉天第一劇團 (奉天市義光街一段四號東方印書館) 代表、飯河四郎。

△新星劇團 (哈爾濱斜紋街平安館) 代表、坪井滋。

△大連藝術社 (大連市不老街二二三) 代表、絲山貞家。

△奉天協和劇團

△國戲劇研究會 (新京大同大術滿日文化協會内)

△文藝話劇團 (新京放送局内)

△劇團ハルピン 代表東紀江

### 音 樂

△新京音樂院、△宮内府樂部管絃樂團 (新京)、△哈爾濱交響管絃樂協會、

△哈爾濱交響管絃樂團、△滿鐵音樂會 (奉天・大連)、△大連音樂學校、

△滿洲吹奏樂團聯盟、△滿洲醫科大學管絃樂團 (奉天)、△旅順工科大学

管絃樂團、△トラフテンベルグ音楽學校(哈爾濱)、△哈爾濱バラライカ合奏團、△南滿洲工業專門學校マンドリン合奏團(大連)。△全滿各放送局專屬合唱團、△奉天ヴォカルフオア、△總局マンドリン愛好會(奉天)、△赤陽マンドリン俱樂部(大連)、△大連マンドリン、ギター交響樂團、△商業吹奏樂團(新京)△新京混聲合唱團、△大連ハーモニカ合唱團、△大連、速デスク。ソサエテイ、△國樂社(新京)、△新京放送局合唱隊。

## 映 畫

△滿洲映畫協會 (新京大町大街ニツケビル)——特殊會社として、映畫製給映畫製作、外國映畫輸入等を行ふ。  
△滿鐵映畫製作所 (大連市滿鐵弘報課内)

## 其 他

△滿洲映畫同好會 (奉天市奉天町四五)  
△滿日文化協會 (新京)——日滿學界の協力に依り東方の文化を保存並に振興するを目的とし、國家の補助を受く名譽會長張景惠、會長 羅振玉、副會長 岡部長景子(附外一名、顧問 阮振鐸、常任理事 梁厚外二名、理事 謝介石、以下數名、評議員 袁金鏡、戚式毅、熙洽、沈福麟外十數名、常務主事 杉村勇造。  
△東方國民文庫刊行會 (新京大興ビル 滿日文化協會内)  
△蒙古會館 (前蒙政部 後才——(新京東五馬路)  
△滿洲帝國教育會 (新京)  
△滿洲學術聯合會 (大連市東公園町滿洲技術協會内)  
△滿洲事情案内所 (新京中央通)  
△滿洲文化協會 (大連市紀伊町九一)

現在滿洲法政學院及大同女子技藝學校等の教育事業を經營する社團法人

△大陸文化學園 (新京大同大街滿日文化協會内) 主宰者、望月百合子。康德六年六月に結成された女性の常識涵養を目的とする社會教育機關にして、毎週一回家庭婦人と働く婦人の二クラスを持ち、讀書會、講演會等を行ふ。又隨時公開講演及び映畫會をも催す。現在會員數、百五十餘名。

△志學會 (奉天) 主宰者、劉澤俊亮。

△滿洲學會 (新京・奉天・大連) 歷史、考古、土俗、社會、言語、文學、宗教、美術、等の研究に携はつてゐる者の相互研究連絡を圖る機關で學報發行、講演會開催、見學旅行等を行つてゐる。會員約百五十名

△滿鐵社 (大連) 學藝の振揚を中心として大陸文化を宣布することを目的として綜合雜誌「滿鐵」を毎月發行す、同人、伊藤修、稻葉好延、井田透三、

早川正雄、大岩峯吉、大野斯文、小野敏夫、柿沼介、上村哲彌、米野豊實、田中芳、長永義正、松本豊三、佐藤四郎、宮本通治、宮崎小市、水口正一、紫藤貞一郎、島田好、柴田一郎、鈴木伸二、菅沼正風、

顧問 三浦直彦、松岡洋右、具瀬謹吾  
高田友吉、張本政

△奉天省古蹟保存會 奉天省民政廳

△婦人新聞グループ (大連市東公園町  
滿洲婦人新聞社内) 臨時講演會、映畫  
觀賞會、讀書會を催す。

## 新聞雜誌一覽

### 新聞——(日文)——

滿洲新聞(新京) △新京日日新聞(新京) △滿洲日日新聞(奉天) △奉天日日新聞(奉天) △奉天每日新聞(奉天) △哈爾濱日日新聞(哈爾濱) △哈爾濱新聞(哈爾濱) △國境每日新聞(安東) △安東新報(安東) △北滿洲日報(齊々哈爾濱) △聞島新報(撫順) △山海關日報(山海關) △錦州新報(錦州) △鞍山日日新聞(鞍山) △遼報每日新聞(遼陽) △鐵嶺時報(鐵嶺) △四洮新報(四平街) △北安日報(北安鎮) △滿洲婦人新聞(大連) △國際タイムス(大連) △滿洲タイムス(大連) △滿洲讀書新報(滿文)—— △大同報(新京) △泰東日報(大連) △盛京時報(奉天) △醒時報(奉天) △大北新報(哈爾濱) △午報(哈

爾濱) △濱江日報(哈爾濱) △安東時報(安東) △黑龍江民報(齊々哈爾濱) △延邊晨報(龍井) △營商日報(營口) △撫順民報(撫順) △熱河新報(承德) △山海關公報(山海關) △遼海公報(遼陽) △鐵嶺公報(鐵嶺) △三江報(佳木斯) △黑河民報(大黑河)

(日滿兩文)—— △吉林新聞(吉林)

(露文)—— △ハルビンスコウレミヤ

(哈爾濱) △ナ・クラニツワエ(綏芬河)

(英文)—— マンチユリア・デリー

ニュース(大連)

(鮮文)—— 滿鮮日報(新京)

### 雜誌

——(日文)—— △滿洲行政(新京) △新大地(大連) △滿洲(大連) △月刊滿洲(新京) △滿洲評論(大連) △滿洲公論(大連) △モダン滿洲(新京) △觀光(大連) △電々(新京) △協和(大連)

△醫學(奉天) △健康滿洲(新京) △醫友

(新京) △日滿公論(奉天) △滿洲映畫

(新京) △滿洲教育育兒雜誌(大連) △大

陸移民(新京) △北窓(哈爾濱) △收書月

報(奉天) △鐵魂(鞍山) △宣撫月報(新

京) △電架(新京) △滿鮮(大連) △新東

亞(大連) △物資と配給(新京) △滿洲

評論(大連) △滿鐵調查月報(大連)

(滿文)—— △新青年(奉天) △新滿洲

(新京) △新民(新京) △興滿文化月報

(奉天) △婦女雜誌(奉天) △新文化月報

(奉天)

### 同人雜誌——(日文)——

連) △月刊詩誌、△(三高地(大連) △月刊詩誌、△作文(大連) △月刊、△滿洲浪曼(新京) △季刊、△滿洲文學(新京) △不定期、△文學地帶(新京) △月刊、△斷臂(撫順) △合朋(大連) △月刊歌誌、△アカシヤ(大連) △月刊歌誌、△滿洲短歌(大連) △月刊歌誌、△滿洲歌人(哈爾濱) △月刊歌誌、△北滿歌人(哈爾濱) △月刊歌誌、△滿洲通信俳句(大連) △句誌、△滿洲(大連) △月刊句誌、△平原(大連) △月刊句誌、△短歌開拓(大連) △月刊歌誌

(滿文)——△藝文志(新京)不定期△  
文選(奉天)不定期、△文藝叢刊(新京)  
不定期、△詩歌叢刊(奉天)不定期、  
文藝欄を有する雜誌——△滿洲行政、

△新天地、△滿蒙、△滿蒙評論、△  
觀光東亞、△滿洲公論、△モダン滿  
洲、△月刊滿洲、△健康滿洲、△協  
和、△滿鮮、△電々、△物資と配給、  
△北窓、△啓友、△新青年、△新滿  
洲、△斯民、△興滿文化月報、△婦  
女雜誌、△新文化月報、——外語同  
人雜誌。

文藝欄を有する新聞——△滿洲日々

新聞、△滿洲新聞、△新京日々新聞、  
△哈爾濱新聞、△哈爾濱日々新聞、  
△滿洲婦人新聞、△滿洲醫科大學時  
報、△滿鮮日報、△大同報、△泰東  
日報、△大北新報、△撫順民報。

# 行事

一月 △G氏賞授賞、吉野治夫氏作「手記」に決定。

△詩人甘地満氏死亡。

△「滿洲歌人」創刊。

△奥一氏ユーモア小説集「與太もんのマンシュー」刊行。

二月 △故甘地満氏追悼詩集刊行。

△同人誌「水師營」第一回刊行。

三月 △文話會哈爾濱支部成立。

△文話會大連支部にて第一回詩朗讀放送行はる。

△新京文藝集團より同人作品集「楮土」發行。

四月 △民生部より、建國記念第二回文藝募集。

△冬木羊二氏小説集「青き夜の醫師」發行。

五月 △滿洲歌友協會創立。

七月 △第二回詩の放送開催。

△同人誌「文藝集團」廢刊。

八月 △林房雄博士來滿座談會。

△「滿洲浪受」發行。

十月 △文話會奉天支部設立さる。

△竹内正一氏、小説集「氷花」發行。

十一月 △小林秀雄、林房雄兩氏來滿文藝講演會。

△林房雄、和田傳兩氏座談會開催。

△打木村治氏座談會。

十二月 △「滿洲文藝年鑑」昭和十三年版發行。

△横光利一氏來滿。

# 滿洲文藝人名錄

- △相川 溍 (倉吉) 哈爾濱道裡透龍街九  
「北滿歌人」同人 文話會員 歌友協  
會員
- △青木 啓 大連市山縣通市營住宅 滿  
洲國通信社 文話會員
- △赤川幸一 新京大同大街 ニツケビル  
滿洲映畫協會配給部巡迴映畫班 文話  
會員
- △秋原勝三 (渡邊 淳) 吉林朝陽街一〇〇  
滿鐵江北寮 吉林鐵道局經理課作文  
同人 文話會員
- △芥川光藏 大連市伏見町一四 滿鐵映  
畫製作所
- △安達義信 大連市文化寮一〇二 滿鐵  
調查部第一調査係 詩集「二月の河」  
文話會員
- △青木 實 (金杉一郎) 大連市秀月寮九  
七 大連圖書館 著書「花話」作文
- 同人 文話會委員、兼支部幹事
- △天野光太郎 (眞殿星麿) 新京崇智胡同  
月刊滿洲社 文話會員
- △新井練三 新京滿洲行政學會
- △新井重美 哈爾濱斜紋街 新井醫院  
「北滿歌人」同人 文話會員 歌友協  
會員
- △東 震太郎 (春田武) 新京吉野町一 山  
崎アパート 滿洲國通信社 文話會員
- △朝原信一郎 (仲田朝信) 大連市大江町  
六ノ六「創作」社及「滿洲歌人」同人  
文話會員 歌友協會員
- △荒川石楠花 (遠之) 大連市大和町二六  
「豆棚」同人 歌友協會員
- 文話會員
- △安倍 喬 大連市薩摩町五ノ三 歌  
友協會員 文話會員
- △鮎川三彌 (森岡幸之助) 新京 文話會  
員
- △荒牧芳郎 新京八島通榮ビル 滿洲映  
畫協會 文話會員「滿洲浪曼」同人
- △安達義子 新京興安大路三二二 文話
- 會員
- △阿南 隆 (次護) 新京通化路三〇二ノ  
九 文話會員「青い塔」同人
- △池田 孝 大連市聖德街一ノ六八 滿  
鐵第一調査室 著書「現代支那ノ教  
育」「寒外行」文話會委員、兼支部幹  
事
- △池邊 青李 新京興安胡同三〇三 協  
和會弘報科 文話會員
- △石村近雄 大連市若松町二三 滿鐵社  
員會 編輯部 文話會員
- △伊地知典夫 (千早淑夫) 大連市華町六  
一ノ三ノ十二 高田方「新天地」編輯  
部 文話會員
- △石田貞藏 大連市月見ヶ丘三六 商工  
會議所 文話會員
- △石原巖徹 (秋朗) 北京華北交通社旅客課  
著書「支那國物語」文話會員
- △石森純男 東京小石川區林町九二 童  
話集「まんぢりあ」其他 文話會員
- △磯部秀見 (鷲崎哲三) 新京南湖第五代  
用官舎二〇一號 國務院弘報處 文話

會委員兼支部幹事

- △井田澄三 (西卷透三) 大連市西通六四 放送局囑託「滿蒙」同人 文話會員
- △市村 力 大連聖德街四ノ一〇六一 大連詩書俱樂部同人 獨立美術展作家
- △泉 徹雄 新京大經路一〇三北洋ビル 文話會員
- △伊東千鶴子 旅順吾妻町三三三「水鏡」「アカシヤ」同人 歌友協會員文話會員
- △伊東法俊 旅順吾妻町三三三 旅順工大豫科教授 文話會員
- △伊藤正次 新京崇智胡同月滿洲社 文話會員
- △絲山貞家 大連市不老街三三三 高山ビル「大連藝術座」主宰 文話會委員兼支部幹事
- △井上一郎 大連市下霞町二四「短歌至上主義」準同人「合朋」同人 歌友協會員 文話會員
- △井上 郷 (三郎) 大連市吉野町 滿鐵地盤編纂係「作文」同人
- △井上麟二 大連市久方町一〇「鶴」同人

人 文話會委員、兼支部幹事

- △今井一郎 新京滿洲新聞社々會部次長 文話會委員「滿洲浪漫」同人
- △今村榮治 新京滿日文化協會囑託 滿洲文話會事務「文學地帶」同人
- △今村義夫 大連市橋津町八七「裸跣詩社」同人
- △今元 久 哈爾濱滿洲新聞哈爾濱支社 文話會支部幹事
- △稻川朝二路 (淺三郎) 新京清和街一二一 著書「滿洲民謡曲譜」
- △稻葉亨二 大連市文化堂七〇ノ四 詩集「夜航船」文話會員
- △今西忠一 奉天市公署文書科 編纂 文話會支部幹事
- △五十嵐賢隆 鞍山市長官房 文話會員
- △飯田秀世 新京崇智路一〇六號 滿洲映畫協會 文話會員「滿洲浪漫」同人
- △伊藤 豊 吉林省立額穆農業學校 文話會員
- △伊藤勝啓 大連市山城町四榎木莊「滿洲短歌」同人 歌友協會員 文話會員

△榎本捨三 新京長春大街三〇二中野方

- 大同劇文藝部 文話會員
- △飯淵 弘 奉天市公署文書科編纂 文話會員
- △飯河四郎 (知記) 奉天義光街一段四號 東方印書館 文話會支部幹事「奉天第一劇團」六型會」主宰
- △上田淳一 大連市西公園町九榎本方 滿日編輯局 文話會員
- △上野凌嶒 (甚二) 洮南城外鐵路局宅中 第三號 文話會員
- △内山若枝 (川上ハツエ) 東京淀橋區百人町三七三 文話會員
- △瓜生茂秋 旅順師範學校 文話會員
- △牛島春子 龍江省
- △衛藤利夫 奉天大和區新高町三 奉天圖書館長 著書「滿洲生活三十年」
- △江口榛一 哈爾濱日日新聞社 文話會員
- △遠藤武之輔 奉天滿洲日日新聞編輯局 文話會員



△江川三麻 奉天市朝日町四一ノ三 鐵道總局資料課

△江草 茂 新京昌平胡同六一二一 健康滿洲」編輯 文話會員

△大岩峯吉 大連大和町一 市役所殖産課長 隨筆集「三百六十五日」「滿蒙」同人 文話會員

△大阪 巖 錦州市平安街 滿洲羊毛同業會出張所 文話會員

△大森志朗 新京建國大學助教授 著書「日本文化論纂」

△大下三雄 大連市津町二ノ一三 文話會員「水鏡」同人

△大島清明 大連市新京八島通ミクニホテル 滞在 文話會員

△太田 正 新京北安路市營住宅第一三七二 文學地帯」同人 文話會員

△大谷健夫 (武男) 大連回春街八三 大連圖書館「作文」同人 文話會員

△岡 二郎 東京市牛込區喜久井町二九 星野方 歌集 隨筆 同人 文話會員

文話會員

△奥 一 新京寛城子 モダン滿洲社 ユーモア小説集「與太もんのマンシユウ」

△奥 行雄 新京滿洲新聞社會部 文話會員

△奥藤多藏 大連市三室町二七 南滿工專教授 文話會員

△落合郁郎 (利貞) 張家口沙河路街二二三 支開發會社支社 詩集「三人集」同人

△大野斯文 大連市山城町二ノ二三 滿蒙」同人 文話會員

△大野審司 撫順炭礦庶務課 文話會員

△大野澤繼郎 哈爾濱南崗 工大圖書館 文話會員

△大塚武軍 奉天市南壇地字車碼頭滿鐵社宅七ノ二 鐵路總局營業課 文話會員

委員兼支部幹事

△大脇武夫 大連市彌生町彌生寮 文話會員

△大脇一雄 牡丹江營林署「文學地帯」同人 文話會員

△大井二郎 奉天市實業町五四 文話會員

△岡 第三 奉天市住吉町五 ジャパンツリースト ビューロー 文話會員

△大谷勇夫 新京滿洲新聞社 文話會員

△大内隆雄 (山口慎一) 新京曙町二ノ一六 新京日日新聞社 文話會常任委員、兼支部幹事、藝文志」參與「滿洲浪漫」同人 著書「支那研究論稿政治經濟篇」「支那問題研究資料」一二輯、翻譯小説集「原野」

△奥村 義信 新京滿洲事情案内所長 文話會員

△王 則 新京滿洲映畫協會總務部宣傳課「藝文志」同人 文話會員

△岡田壽之 新京滿洲映畫協會宣傳課 文話會員「滿洲浪漫」同人

△岡林盛光 大連市伏見町中央試驗所 文話會員

△丘益太郎 (岡田益吉) 新京興亞街三七 文話會員

△小川皓司 (博三) 奉天市朝日街一段五

ノ七「滿洲短歌」同人 歌友協會員  
文話會員

△大崎勝年 奉天市住吉町大和ビル四一  
八「アカシヤ」同人 歌友協會員 文  
話會員

△小倉圓平 奉天市浪速通三 文話會員  
△小山田忠男 天津市特別二區平安路一  
號 長蘆鹽務管理局產銷科 文話會員

△大内直之 奉天市蘇町 滿鐵奉天圖書  
館 文話會支部幹事

△甲斐彌人 大連市鳴鶴臺二〇三「アカ  
シヤ」同人 文話會員 歌友協會員

△甲斐昌八郎 大連市東公園町 滿鐵社  
員會編輯部 滿洲郷土研究會員「パン  
ブタオ集團」同人 文話會員

△香川末光 大連市大和町二六ノ一一四  
「滿洲短歌」同人 文話會員 歌友協  
會員

△柿沼 實 奉天市富士町シンガミシ  
ン會社 詩集「吉き旅行地圖」

△寛 太郎 大連市光風臺一七六 滿鐵  
弘報課 文話會員

△上村哲彌 大連市柳町七六 滿鐵參與

日本兩親再教育協會主幹「滿蒙」同人  
著書「親たるの道」「續親たるの道」

愛兒の眞方讀本「兩親の再教育と  
子供研究」文話會員

△鹿島鳴秋（佐太郎）大連市若松町二一  
童話集「キャベツのお家」なまけも  
のと神様 鹿島鳴秋童話小曲集  
他數點 文話會員

△加藤郁哉（今枝折夫）錦州鐵道局總務  
課長詩集「逃水」「杏」「隨筆集」

△滿洲異聞 滿洲こよみ 文話會員  
△川島照敏 大連市數島町六七YMCA  
内「二〇三高地」同人 文話會員

△神尾式春 新京金燈台作社聯合會副理  
事長

△神山哲三 奉天市千代田通三 歌友會  
員 文話會員

△加藤 郎 安東市大和橋通大官半井  
文話會員

△加藤諦明 奉天市滿日編輯局「短歌開  
拓」同人 文話會委員支部幹事 歌友

協會員

△金子麒麟草（麟）大連市山吹町一一四  
日本赤十字病院院長「山楂子」主宰  
文話會員

△加納三郎（平井孝雄）大連市清水町一  
文話會委員兼支部幹事

△川上旗男（草子）東州市大森區上池上  
町六七 滿鐵文社鐵道課 文話會員  
△川口彦太郎 大連市聖德街一ノ六八  
文話會員

△川崎陸奥男 大連市桃源臺一一六  
「短歌開拓」同人 文話會員 歌友協  
會員

△金澤覺太郎 新京惠民路五〇三「電々  
社」七三ノ一 文話會委員兼支部幹事

△神戸 錦 新京滿洲電信電話株式會社  
「電々」編輯部 文話會員

△銀川 隆 奉天城東小學校 文話會員  
△加藤猛太郎 大連市滿鐵社員會編輯部  
文話會員

△神津 幸 哈爾濱南崗阿汗河街三五ノ  
一 文話會員

- △木崎 龍 (仲賢禮) 新京龍門街第四代  
用官舎五七〇號 國務院弘報處 文話  
會常任委員兼支部幹事「滿洲浪漫」同人
- △北村謙次郎 新京寛城子一丁目二七  
滿洲映畫協會 文話會委員兼支部幹事  
「滿洲浪漫」同人
- △木原鐵之助 大連市西通小島ビル 辯  
護士 文話會支部顧問
- △桐原東一 (若島叶) 大連市吉野町三一  
大連醫院内科 文話會員
- △北尾陽三 新京興業路門牌三階石  
本方 滿映寛城子スタヂオ 文話會員
- △近東給十郎 (櫻朝男) 北京長安街 華  
北電信電話株式會社「北電」編輯 文  
話會員
- △菊地弘義 新京市立圖書館 文話會員
- △北小路功光 新京滿洲中央銀行調査課  
文話會員
- △北林祐道 旅順明治町陸軍官舎七八號  
「アカシヤ」同人 文化會員 歌友協  
會員
- △木田晴天 (香川美人) 大連市大和町二  
六ノ一一四「滿洲短歌」同人 歌友協  
會員 文話會員
- △日下 照 大連市三河町二 文話會員  
「作文」同人
- △櫻田正東 大連市清見町六一「滿洲短  
歌」同人 文話會員 歌友協會員
- △小池龍雄 新京永昌路四一〇號 經濟  
部 文話會員
- △小池亮夫 北京市西城大柵寺二三號  
同人 文話會員
- △河野 想 (久) 大連市千草町三〇 滿  
日學藝部 文話會員
- △小杉茂樹 奉天市浪速通四五 齋藤洋  
行詩集「麥の花」「作文」同人 文話  
會委員兼支部幹事
- △古城 壽 (宮漆正通) 大連市橫津町八  
七 電々會社「裸體詩社」主宰
- △小日山直登 鞍山昭和製鋼所社長 歌  
集「獄に行く」 黃塵 大嶺を踰ゆ  
同人 文話會員
- △小山嶽雄 奉天市朝日町一段四七ノ四  
同人 文話會員
- △古丁 (徐) 新京國務院統計處「藝文  
志」同人 文話會員
- △小日向和夫 奉天市立傳染病院 文話  
會員
- △近藤義長 奉天市白菊町一六ノ二六ノ  
四 文話會員
- △幸 康一 奉天市平安通三五 平安座  
文話會員
- △酒井悦子 新京興安大路三七二文學地  
帯「同人
- △齋藤欣志郎 大連市若狹町二四 文話  
會員
- △坂井健司 新京市立圖書館「作文」同  
人 文話會員支部幹事 詩集「崖ふち  
の歌」
- △澤田清義 奉天市住吉町五 ジャパン  
ツーリスト・ビュロー編輯部 文話  
會員
- △境野重明 (伊達英明) 新京滿洲調查課  
文話會員
- △坂口穹太郎 千馬太 登口平和街一六

ノ四 文話會員

△佐々木勝造 新京滿洲映畫協會「作文」同人 文話會員

△酒井美津子 奉天市彌生町三八 文話會員

△佐藤鐵之助 奉天市鐵道局總務課福福社 係 文話會員

△佐藤 功 哈爾濱工大 文話會員

△佐藤孜郎 (四郎) 新京 文話會員

△三溝沙美 (文三) 東京市四谷區内藤町 一「ホト、ギク」平原「同人」文話會員

△澤井 寛 大連市西公園町一七五「青い塔」同人

△三枝朝四郎 新京滿日文化協會 文話會員

△佐藤優剛 奉天市藤浪町一三 河野醫院 文話會員

△西郷普夫 奉天市 滿洲日々新聞社 文話會員「滿洲吟詩同好會」立宰

△佐藤眞美 奉天市白菊町一〇 鐵道總局

△佐々木種雄 大連市日本赤十字病院 文話會員

△佐伯盛美 (盛吉) 大連市大和町三三ノ三 大島方「短歌開拓」同人 文話會員

△坂倉輝雄 大連市山縣通「東拓ビル」内 シュミット商店「短歌開拓」同人 文話會員

△志賀清一 (椿一平) 奉天省海龍縣府河 口工務局 文話會員

△庄野ふみ 新京大經路大場洋行三階十 號室寺岡方「文學地帯」同人

△紫藤貞一郎 大連市若菜町九一ノ一 關東州總衛生課長 醫學博士 著書「實驗雜餘白」(父と子)「滿蒙」同人 文話會員兼支部幹事

△島崎晴海 大連市近江町一五三ノ二ノ二 支那部幹事

△柴田大馬 (二郎) 大連市麟町五三 著書「聊齋志異」「滿蒙」同人

△篠原捷三 (林武) 新京近埠胡同四〇二

加藤方「文學地帯」同人 文話會員

△島崎恭爾 大連市霞町三ノ五ノ四「大連詩書俱樂部」同人 詩集「國際都市」文話會員

△島田 清 熱河省承德電氣管理局放送 係 文話會員

△島田のはぎ (古代) 旅順市常盤町一八 「合朋」同人 文話會員「創作」社友 歌友協會會員

△島屋進治 上海乍浦路ピアスアパート 内 滿日支局長 文話會員

△下島甚三 (北村三郎) 新京南湖第五代 用官舎五七二「文學地帯」同人 文話會員

△下田淳造 (孝雄) 營口入船街五二ノ七 文話會員

△城 小確 (本家男) 大連市伊勢町鈴鹿 ビル「大連詩書俱樂部」同人 詩集「黑麥酒の歌」假設の春 文話會員

△城島舟禮 (德壽) 新京崇智胡同六〇一 「月刊滿洲」主幹 文話會員

△白崎海紀 新京南湖政府第五代用官舎

五六四 民政部編審官室 文話會員

△白井尚子 奉天市住吉町奉天ビル四五

七片野方 滿日學藝部記者 文話會員

「短歌開拓」同人

△進藤智恵子 大連市盤城町一三三宅

ビル 文話會員

△瀧谷哲夫 奉天市 滿鐵奉天圖書館

文話會員

△穴戸貫一郎 瀋江省海倫 滿鐵工務區

「文學地帶」同人 文話會員

△菅野雄木男 (啓介) 鞍山昭和製鋼所

「鐵魂」編輯

△末野 潤 (松谷茂司) 普蘭店蓬萊町三

上木課官舎「合朋」同人 歌友協會員

文話會員

△杉村勇造 新京滿日文化協會主事 文

會委員兼支部幹事

△鈴木 濟 大連市葛町百ノ十二 滿洲歌

人」同人 歌友協會員 文話會員

△鈴木啓佐吉 (三好々朝堂) 青島市四方

區 青島鐵路工廠

△鈴木寧二 大連市山縣通二二二 大連

圖書館 文話會員

△鈴木小兵衛 (大住孝二) 新京花園町四

ノ六一ノ二 著書 滿洲農業機構

文話會員

△砂見 爽 撫順東三番町藤飯方 詩集

「街の印象」文話會員

△關川幸一郎 大連市美濃町八一寺井方

「短歌開拓」同人 文話會員

△芹川彌生 旅順市月見町二八

△十龜輝逸 新京新發路帝羅アハート協

會會中央本部弘報科 文話會支部幹事

△高尾憲太郎 奉天市 滿日編輯局 文

話會

△外山英樹 大連市西公園町一七五「青

い塔」同人

△高木喜久藏 新京興安大路二二一 石

霞莊一七號 滿拓幹係「文學地帶」

同人 文話會員

△高木共壽造 本溪湖滿鐵醫院「作文」同

人 詩集「まるめろ」我が鐵魂歌

△高崎草郎 哈爾濱工業大學 文話會員

△高山峻峯 (謙二) 大連市臥龍峯六八

大連汽船會社「滿洲」曲水」同人 文

話會員

△田川良一 大連市西公園町九五 滿化

編輯部員

△田村詢一 大連市西公園町二二一 辯護

士 文話會支部顧問

△高橋匡四郎 新京建國大學助教授

△工 清定 撫順高等女學校「士」同人

文話會員

△竹内正一 哈爾濱圖書主事「作文」同

人 文話會委員兼支部幹事 小說集

氷花

△竹内 晋 大連滿鐵總裁室弘報課映畫

製作所 文話會員

△竹内節夫 撫順東三番町一一 撫順新

報社 隨筆集「石班魚」文話會員

△高橋房男 大連市千歲町三〇「アカシ

ヤ」同人 歌友協會員 文話會員

△武田一路 大連市桃源家桃林莊 滿日

學藝部「新興滿洲美術協會」同人 文

話會員

- △武田勝利 大連市芝生町一一一 日本赤十字病院藥局「アカシャ」同人 歌友協會員 文話會委員兼支部幹事
- △竹田 讓 新京百濠街六〇六 文話會員
- △武本正義 新京神泉胡同五〇一 電々社宅二四ノ一 文話會員
- △田中總一郎 大連市滿日編輯戲曲集「午前八時」文話會員
- △鷹巢清治 (高須清二、嘔三味) 大連市伏見町七七 滿鐵社員會編輯部 文話會員
- △田中武夫 奉天市口菊町二二新興ビル鐵道局總務課資料係 文話會員
- △高橋源一 新京國務院弘報處 文話會員
- △高原富士郎 新京滿洲映畫協會 文話會員
- △棚本一良 新京滿拓會社
- △玉置昇平 新京中央電報局通信課 文話會員
- △田村光子 奉天市慶浪町四二 文化普及會 文話會委員兼支部幹事
- △田山一雄 奉天市朝日町三八ノ二「合朋」同人 歌友協會員 文話會員
- △千曲次郎 (早山正雄) 大連市敷島町八二「滿蒙」同人
- △千田萬三 奉天市雪見町五九ノ五五ノ四 文話會員
- △陳內春夫 奉天市平安通二八 平安座文話會員
- △陳松齡 新京滿日文化協會 文話會員
- △秩父忠敬 大連市薩摩町二九 滿日編輯局 文話會員
- △陳邦直 新京滿日文化協會 文話會員
- △筒井俊一 大連市晴明臺大タクビル二二號 滿日學藝部 文話會員
- △津田維福 大連市伊勢町二七 文話會員
- △津田八重子 新京南湖第五代用官舎三二二號「滿洲歌人」同人 文話會員
- △椿 紗智 新京明倫街五〇二 文話會員
- △坪井 與 新京中央通六八ノ一〇 通榮ビル 滿映文化映畫課 文話會員
- 「滿洲浪曼」同人
- △坪井 滋 哈爾濱斜紋街平安座「新成劇團」主宰 文話會員
- △寺本初音 大連市聖德街二ノ四四「合朋」同人 文話會員 歌友協會員
- △富田 壽 (高橋敏夫) 奉天市稻葉町六六ノ一ノ二三 鐵道總局貨物課「作文」同人 文話會委員兼支部幹事
- △富田 充 大連市聖德街新二丁目四六七 滿化社員「滿洲短歌」同人 文話會員 歌友協會員 詩集「春廟」
- △富永辰美 大連市對島町二三 對島莊文話會員
- △富山まもる 奉天滿日編輯局
- △富田武夫 大連市伏見町七七 滿鐵社員會編輯部 文話會員
- △富永幸子 哈爾濱南崗馬家街四二ノ一二「北滿歌人」同人 文話會員
- △黨澤周 新京協和會轉道科長 文話會員
- △戶澤辰雄 奉天市住吉町 ジャパン・

ツリースト・ビュロー 文話會員

△中川 潤 大連市西公園町四三 金子  
ビル 文話會員

△中島光夫 (野地研作) 奉天市中央電報  
局内 詩集 春の基督

△中島 新 大連市天神町八ノ一三一合  
朋 同人 歌友協會員 文話會員

△中島辰海 奉天市蕨町奉天圖書館 文  
話會員

△中溝新一 (那迦三藏) 大連市聖徳街四  
ノ三四 市社會課 文話會員 兒童隨  
筆集 豚ちやんの記録 其他童話集

△中村秀男 開島省延吉康平街 滿洲弘  
報協會支局長

△長濱哲三郎 大連市輝町五五 辯護士  
文話會員

△永原いね子 (三沼柳子) 大連市晴明臺  
七三ノ六 (合朋) 同人 文話會員

△中山美之 (操春夫) 奉天市稻葉町八  
前田眼科醫院内 醫科 同人 文話會  
員

△夏本草郎 (哈爾濱南崗 哈爾濱放  
送局 文話會員

放送局 文話會員

△橋原健三 大連市大和町三ノ五  
神明高等女學校 新興滿洲美術協會  
同人 文話會員

△永野善七 新京大同廣場 電々會社  
「電々」編輯 文話會員

△中川強二 奉天市住吉町五 ジャパン  
・ツリースト・ビュロー 文話會員

△西川清六 大連市滿洲公論社内 文話  
會員

△西田篤之輔 新京城後路一八八 電々  
經理部長 (合朋) 同人 協友協會員  
文話會員 歌集 御空ゆく

△西田孝雄 大連市日出町一四ノ二ノ五  
大連圖書館 文話會員

△西村眞一郎 大連市白菊町一三四 滿  
洲婦人新聞社 文化會委員兼支那部幹事

△二瓶 等 觀 大連市伏見町六二 新  
興滿洲美術協會 主宰

△西原 茂 大連市長春臺一〇〇 彌生  
高等女學校 (合朋) 同人 文話會員

△西田龜萬夫 奉天市稻葉町六九 文話  
會員

會員

△根本武雄 奉天市霞町五五 文話會員

△野田 勝 大連市伏見町六一「アカン  
ヤ」同人 歌友協會員 文話會員

△信清悠久 新京寬城子匡街四九 文話  
會員

△橋本末喜 上海バンド滿鐵事務所 文  
話會員

△橋本八五郎 齊々哈爾濱學校組合 主事  
著書 滿洲より母國へ 文話會員

△長谷川四郎 北京 滿鐵北支事務局責  
料班 (世代) 同人 文話會員

△長谷川 澄 新京新發路交通ビル二二  
一 講映製作部 文話會員 滿洲浪漫  
同人

△長谷川 甫 大連市蒲町一〇一ノ八  
文話會員

△瀧田篤二郎 大連市桃源臺一三三 文  
話會員

△萩澤 稔 大連市回春街八三 大連圖  
書館 文話會員

△林 一郎 (小此木壯介) 大連市初音町



三四三 大連圖書館 文話會員

△橋本壯介 奉天市大和區八幡町七 滿洲新聞奉天支社 文話會員

△橋本淺夫 新京滿洲軍工業開發會社連絡課「創作」社友 文話會員 歌友協會員

△林 重生 奉天市住吉町五 ツーリス

ト・ビュロー「觀光東亞」編輯 文話會支部幹事

△原 三千代 大連市桃源寮二一六「短歌開拓」同人 文話會員

△森 正治 奉天市鐵道總局資料課 文話會員「奉天トモダチ會」主宰

△平田 滋 哈爾濱日日新聞社 文話會員

△兵頭青史 齊々哈爾濱鐵路旅客係文話會員

△夢田正紀 (正基) 旅順市高崎町一三三 文話會員

△平山 斌 大連市桃源寮二一ノ二 國通大連支社 歌友協會員 文話會員

「創作社」同人「滿洲歌人」同人

△日向伸夫 (高橋貞雄) 哈爾濱斜紋街信託第一アパート一二二號 文話會支部幹事「作文」同人 詩集 白い繪本

△平野博三 奉天市彌生町三三 文話會員 著書 滿鮮の軍窓から

△廣中一雄 新京政府第一代用官舎三九號「文學地帯」同人

△福宮善生 (八郎) 北京王府井大街敦厚里一號樓一號房 滿鐵會社員編輯部

「滿洲郷土色研究會」會員 文話會員 詩集 海の馬鹿

△福家富士夫 大連市光風寮一八 大連醫院皮膚科「醫科」同人 文話會員

小説集 眠癡

△藤井千鶴子 (千種千鶴子) 奉天市平安通三八一短歌開拓「同人 文話會員

△藤井圖夢 (柳川純) 新京興安大路四一 一 文話會員

△藤山一雄 (堂南翁) 新京北安胡同九 (二) 文話會員 著書 群像ラオロン 藤山記 歸去來抄 新滿洲風土記 等

△藤原 定 大連市清見町七六 滿鐵調査役附社會文化係「世代」同人 評論集 文學に於ける人間の生成

△藤田勘一 新京吉野三丁目新華旅社八六號

△冬木羊二 (白石義夫) 新京保健所「醫科」同人 文話會員 小説集 青き夜の醫師

△古川賢一郎 (何氷江) 北京西交民巷 北京鐵道局工務處土木科「作文」同人

「滿洲郷土色研究會」會員、文話會員 詩集 老下降蓮 氷の道 貧しき化粧 蒙古十月 穿脚

△古川哲次郎 (野村一郎) 大連市初音町二八八本田方 大連汽船調査係 文話會委員兼支部幹事

△古屋重芳 齊齊哈爾正陽街一七三 滿洲國通信社「作文」同人 文話會員

△藤川研一 (上津原美夫) 新京梅ヶ枝町二中通りアパート 協和會中央本部弘報科「大同劇團」總務 文話會員

△藤澤忠雄 新京滿洲國通信社編輯部



文話會員

△逸見翁吉(大野四郎) 新京生活必需品  
配給會社 文話會員 「滿洲浪漫」同  
人

△星 直利 (山川禾堂)大連市若狹町  
醫學博士「滿洲教育育兒協會」主幹  
文話會員

△細谷耳耳郎 奉天毎日新聞社學藝部  
文話會員

△前田 昇 奉天市鐵道總局旅客課 文  
話會支部幹事

△町原幸二(島田幸二)新京白菊町三ノ  
一ノ四 滿鐵支社庶務課「作文」同  
人 文話會員

△松本 博(純美)大連市滿鐵總裁室福  
社係 文話會員

△松本光庸 北京市王府井金城銀行樓上  
滿映出張所 文話會員「滿洲浪漫」同  
人

△松川幹郎 哈爾濱石頭街市立圖書館  
文話會員

△松畑優人 大連市下霞町一六「鷗」同

人「五果會」會員 文話會員

△松原一枝 東京市中西區桃樹町四六

「九州文學」同人 文話會員

△松岡しげる 奉天市住吉町住吉ビル三

〇二 文話會員「五彩會」主幹

△松島鐵 大連市大江町一の二三の四滿

鐵大連埠頭經理係 文話會員

△丸山邦夫 奉天市浪速通四五 文話會

員

△三井正登 大連市聖德街四ノ一八四

大連中學校教諭 文話會員

△三井實雄 哈爾濱放送局長 滿洲歌人

同人 文話會委員兼支部幹事「創作社」

社友

△綠川 貢 新京露月町一ノ一六船津方

「滿洲浪漫」同人 文話會員

△御崎 明 大連市青雲堂五〇 文話會

員

△水城京一(江藤政數)大連市三葉町一

常盤ビル「裸跣詩社」同人

△峰尾滿久 奉天市紅熊町紅葉寮一一一

文話會員

△宮下秀雄 新京桔梗町二ノ二「鷗」同  
人 文話會員

△水口燕陽 大連市桃源寮一五〇

△美濃谷善三郎 新京興安大路興安ビル

國務院弘報處 文話會員

△宮井一郎 奉天市浪速通四伊豫ビル三

〇九「作文」同人 文話會員

△宮川 靖(靖五郎)東京市丸ノ内丸ビ

ル四階東洋放送聯盟滿洲代表「短歌閑

拓」同人 文話會員

△三宅豐子(とよ)奉天市住吉町五ツ

ーリスト・ビエーコー編輯部「作文」

同人「あしかび」同人 文話會員 歌

集「七草

△三浦 浩 錦州瀋陽街三ノ六 錦鐵總

務課 文話會員 著書「史的熱河」

△宮本のぶ 奉天市藤浪町四四一大連詩

書俱樂部同人 文話會員

△宮島正美 大連市大和町三八ノ一一

「アカシャ」同人 文話會員 歌友協

會員

△宮原 欣(中村芳法)大連市楠町三

- 「新天地」主宰「滿洲讀本」編纂 長  
 篇小說「未來」 國境を越ゆれば  
 △三好弘光 大連市巴町一〇一 電業沙  
 河口發電所「鶴」同人「五果會」會員  
 文話會員  
 △三池亥佐夫 新京北安路五〇八 大毎  
 支局長「創作」社友 文話會員 歌友  
 協會員  
 △武藤富男 新京國務院弘報處長 戲曲  
 集「發明と自由戀愛」  
 △村松周三 吉林朝日街二ノ六〇ノ二  
 文話會員  
 △毛利元輔 (御上幸吉) 大連市羽衣高等  
 女學校 文話會員  
 △森 武 (紙) 新京協和會中央本部 大同  
 劇團 文話會員  
 △門司 勝 大連市神明高等女學校 文  
 話會員  
 △桃北好澄 佳木斯商工公會調查科「滿  
 洲歌人」同人「文學地帯」同人 文話  
 會員 支部幹事  
 △森田 茂 新京電文會社放談課  
 △望月百合子 新京滿洲新聞社 文話會  
 員  
 △森田富義 大連市伊勢町 著書 滿洲  
 秘談奇話長話 滿洲傳說牛鬼邪神  
 △母里山正夫 撫順四國町二八光風寮  
 「日本詩壇」編輯同人  
 △森脇襄治 大連市松山町二 醫學博士  
 大連療病院長 文話會員 句集 漫旅  
 諷詠  
 △森 信 新京滿洲映畫協會  
 △諸谷司馬夫 大連市東公園町 滿洲國  
 通信社 文話會員  
 △山中千代子 新京西順治路三〇一「合  
 萌」同人 歌友協會員 文話會員  
 △山下龍一 奉天市朝日町四ノ二ノ一  
 文話會員  
 △山之内利之 奉天市鐵道總局弘報課  
 文話會委員兼支部幹事  
 △山下義行 奉天市滿鐵圖書館 文話會  
 員  
 △山口もと子 (モト) 哈爾濱馬家溝文明  
 街三九 文話會員  
 △柳生昌勝 大連市聖德街五ノ一四 彌  
 生高等女學校「滿洲短歌」同人 文話  
 會員 歌友協會員  
 △八木沼淳雄 (丈夫) 奉天市鐵道總局  
 「滿洲短歌」同人 歌集「長城を踰ゆ」  
 △八木橋雄次郎 (矢留八郎) 大連市須摩  
 町五三二「鶴」新領土」同人 文話會委  
 員兼支部幹事  
 △矢原禮三郎 旅順市巖島町 文話會員  
 「滿洲浪曼」同人  
 △山崎末治郎 新京市立圖書館長 文話  
 會委員兼支部幹事  
 △山田健三 奉天市鐵道總局旅客課 文  
 話會員 童話集 慰安軍 少年義勇  
 軍  
 △橫澤 安 (終極三、寺安鶴十) 奉天滿  
 日 俱樂部 文話會員  
 △横田市治 (一路) 大連市對馬町對馬莊  
 滿日俱樂部  
 △吉井一男 大連市山縣通 福昌公司會  
 計部「九州文學」同人 文話會員  
 △吉賀俊甫 (龍軒) 撫順大官屯 滿洲輕

大連市 文話會員

- △吉尾正道 哈爾濱新聞社 文話會員
- △吉野治夫 大連市桃源臺一五八「作  
文」同人 文話會委員兼支部幹事
- ▲吉村四郎 新京梅ヶ枝町三ノ三ノ二七  
上田ビル「裸跣詩社」同人
- △渡部 榮 大連市白菊町一二二 大連  
一中 文話會員
- △渡邊伸吉 (良男) 哈爾濱南崗瓦街一五  
文話會員
- △和田詩夫 大連市東公園町技術會館内  
能率聯合會 文話會員「大陸の女性」  
主幹
- △和田久史 (秀雄) 奉天市琴平町一〇奉  
信ビル三二一 文話會員

(備考) 人名ハ筆名本名ニ限ラズ  
文筆上最モ通常用ヒラレタル名ヲ主  
トシ括弧内ハ他ノ筆名又ハ本名ヲ示  
ス、以下目次、勤務先文藝關係團體、  
著書ノ順)

## 後記

昭和十三年度に於ける滿洲文藝界の記録を茲に編纂し、滿洲文藝年史の一節に資する。元よりわれわれは本年鑑を以つてして、昭和十三年度の滿洲文藝作品の代表的なものを盡く網羅し得たとは信じてゐない。

理由としたいことは種々述べられるであらうが、特に諒承を得たいことは、本年鑑出版の事情に變化のあつたことである。本年鑑は第一輯G氏文學賞委員會によつて、第二輯は滿洲文話會之れを編纂し、滿蒙評論社出版發賣して、第三輯なる十四年版は滿洲文話會自ら編纂刊行發賣するに決し、主として經濟的事情の故に、長篇小説の如きは之を割愛し、且つ數編の原稿未輯録の止むなきに至り年鑑の意義を全的に表現し得なかつたのである。又、われら編纂委員の決定を見たのは、本年初頭であつたにもかかはらず、かくも刊行遅延し待望の聲に酬ゆるところ少なきを慚愧に念ふ情、切なるものを痛感するのである。

しかしながら、われらは乏しき力のなかから尙ほ、十三年の滿洲文藝界の大綱的動靜を傳へ得たことに自ら一抹の慰を覺ゆるのである。

昭和十四年九月

## 滿洲文話會

文藝年鑑編纂事務委員一同

康德六年十一月五日印刷  
康德六年十一月十日發行

定價一圓八十錢（送料共）

新京特別市興安大路二二一

著者人代表 今 村 榮 治

新京特別市興安大路二二一

發行人 今 村 榮 治

大連市若狹町三三

印刷人 太 田 信 三

大連市若狹町三三

印刷所 太田信三商店印刷部

京特別市大同大街二〇二號滿日文化協會內

發行所 滿 洲 文 話 會

換替口座新京三三三番